# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

**YASUSHI NAWA**

DIRECTOR OF

"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] JANUARY. 15TH, 1905. [No.1.

# 昆蟲世界

第九巻第壹冊　明治三十八年一月十五日發行　第八拾九號

目次（禁轉載）





（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

## 本所移轉擴張寄附金品領收廣告 第八回

一金貳圓也　岐阜市靱屋町　江崎元九郎君
一金拾圓也　岐阜縣內務部第四課員　脇田重太郎君
一金五圓也　第七回岐阜縣短期害蟲驅除講習會員十三名
郡上郡八幡警察署巡査部長林　完君
羽島郡中屋村　小島松次郎君
郡上郡牛道村　猪俣重保君
山縣郡巖美村　山田政一君
惠那郡武並村　佐々木倉一君
山縣郡巖美村　和田重義君
揖斐郡西郡村　山村亮君
本巣郡西郷村　松野耕一君
稻葉郡島村　藤井豊君
同郡則武村　高橋種吉君
不破郡關ヶ原村　日比眞次郎君
羽島郡下中島村　小川哲齋君
土岐郡稻城村　勝股悦次君
一金拾壹圓也　岐阜縣安八郡大垣町　小寺成藏君
一金壹圓也　三重縣師範學校教諭　秋山蓮三君
一金拾五錢也　鳥取縣東伯郡瑞穗村　竹信虎造君
一金壹圓也　長野縣上伊那郡農會內　大竹義道君
小計金參拾圓拾五錢
累計金八百貳拾五圓八拾四錢
右御寄附相成候に付茲に芳名を掲て其厚意を謝す

明治三十八年一月十一日
岐阜市公園內
名和昆蟲研究所





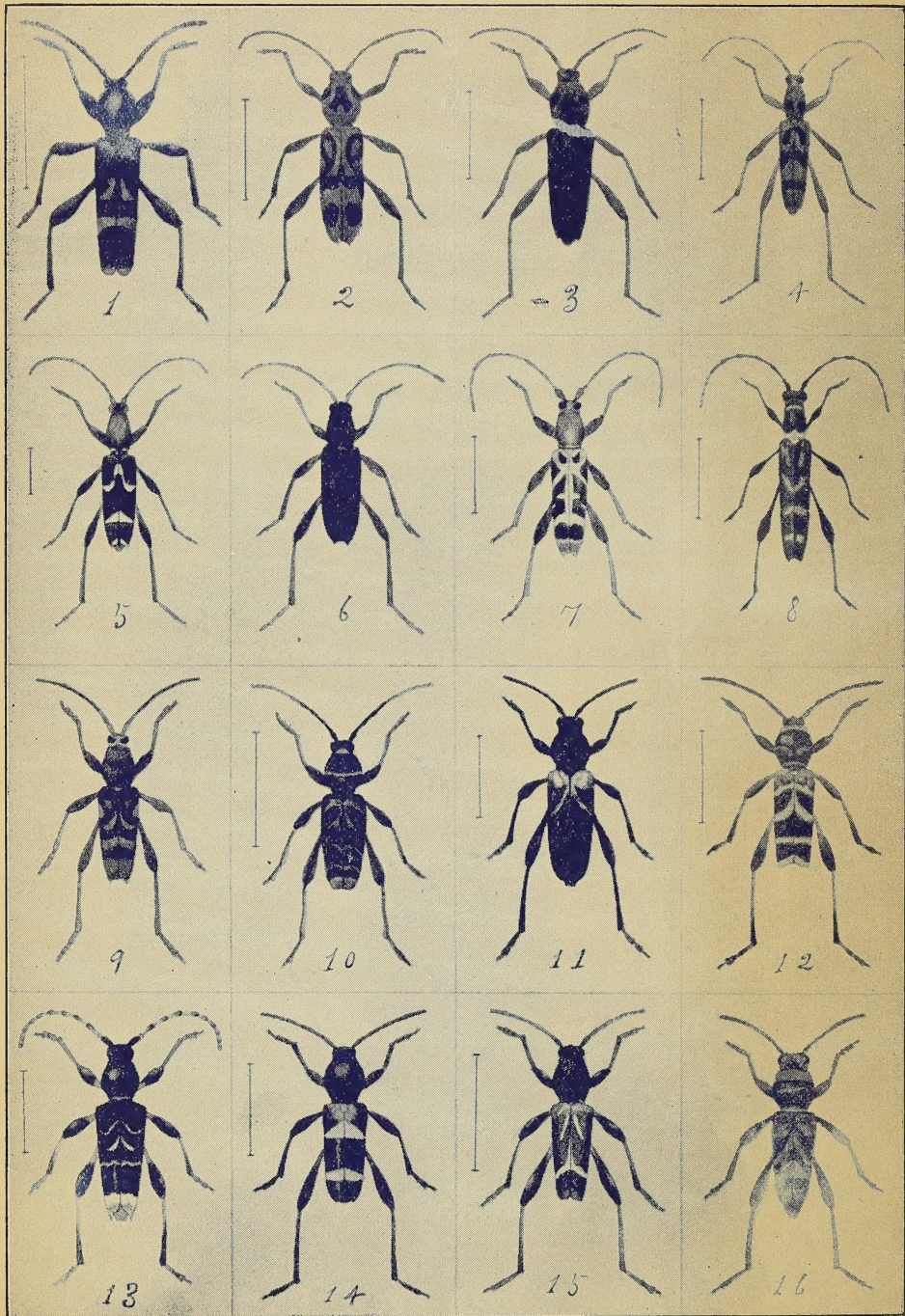
●昆蟲世界購讀者紹介人芳名

一名　靜岡縣　神村直三郎君
二名　青森縣　新渡戶稻雄君
十七名　岐阜縣　廣瀨壽太郎君
十二名　同　林　完君

名和昆蟲研究所

虎斑天牛の各種

昆蟲世界第八拾九號（明治三十八年第一月）

# 論説

## ◎新年の辭

坤軸一轉して、茲に戰捷の光榮ある明治三十八年の新春を迎へ、謹て本誌愛讀者諸君の萬福を祝し、併て　聖壽の萬歳を祈り奉る。顧れば、日露砲火を交へてより、未だ一歳に充さるに、旅順艦隊は殆んど殲滅に歸し、浦塩の敗艦再び立つ能はず、波艦隊の運命亦知るべきのみ。而して大陸の草木亦我威風に靡き、北は遼陽に敵の鵬翼を破り、沙河に壓迫し、南は得利寺に大打擊を加へ、敵の據て以て難攻不落と稱し、各國亦唯一の要塞と認めし旅順の防備も、我軍の猛烈なる攻擊に堪へず、遂に我軍門に降るの止むを得ざるに至らしめたり。

今や此の戰局の發展に伴ひ、振古未曾有の大和魂を、遺憾なく發揮し、世界列强をして其肝膽を寒からしめ、國威八紘に輝きて日月と光を爭ふ。嗚呼この光榮ある新春を迎ふるを喜ぶと共に、聊か既往に遡り、農民軍が害蟲軍に對する戰況如何を通觀するに、萬感交々至り、杞憂に堪へざるものあり、當所は已に事の今日あるを憂ひ、明治三十三年の年始狀に於て、千變萬化螟蟲の羽化せざるに先ち、極力二化生螟蟲を撲滅し、國費の充實を圖るべきを警告したりしも、砲擊効少なく攻圍意の如くならず、殆んど連戰連敗の醜体を演せしは、吾人の最も遺憾とせしところなりき。されば昨年開戰早々、再び千變萬化

螟蟲云々を繰り返し、非常の決心を以て害蟲軍に當り、一擧之を掃蕩すべきを警告したりしが、幸に各縣等しく驅除を強行し、一歩も征露軍に讓らざるの覺悟を以て、着々事に當り、遂に能く害蟲軍を壓迫し、未曾有の大豊年たるの歡聲を聞くに至りたるは、大なる成功にして、軍國農民の面目といふべし。然れども、作戰悉く當を得たりといふべきか、士卒能く悉く奮鬪せしか、天敵援助の効多大なりしに依るなきか、其間大に考慮を要すべきものあり。加ふるに螟蟲軍の堪能なる、浮塵子軍の暴戾なる、其他幾多害蟲軍の横暴なる、到底これしきの敗衂を以て鉾を收むるものに非らず、必ず大擧逆襲を企つるや明なり。されば農民軍は、此戰捷に慉らず、益愼重の態度を取り、あらゆる準備を整へ、常に機先を制し、害蟲軍をして、再び立つ能はざらしむるの用意なかるべからず。本研究所は、初より科學的智識の啓發と、實業的の利益を增進せんことを企圖し、紙筆を役し、口舌を爛らし、以て今日成功の勞に當りし一たるを失はざるを信ずると同時に、益其責務の重大なるを知る、豈奮起せざらんや。今や移轉工事も落成を告げ、擴張の端緒を開きたれば、此新春を迎ふると共に、大に業務を擴張し、本誌の改善を圖り、以て斯學の隆昌と、兼て應用の實を擧ぐるに全力を竭さんとす。讀者諸君、幸に當所の微衷を諒し、陰に陽に幇助する所あれ。茲に謹て蕪辭を陳べ、歲首の辭となす。

# 學說

## ◎昆蟲學の範圍

理學博士　松村松年

夫れ昆蟲學(Entomologia(羅)Entomologie(獨佛)Entomology(英))は昆蟲の分類、構造、及び生理を論ずるの學にして、動物學の一部を構成す。

今昆蟲學を大別して二となす、一を普通昆蟲學(General Entomology=Entomobiology)といひ、他を昆蟲分類學(Systematic Entomology)といふ。

普通昆蟲學とは、昆蟲の構造、及び生理を論ずるの學にして、更に之れを三學に區別し得べし。第一は單に昆蟲外部の構造を論ずるものにして、昆蟲分類學と密接の關係を有せり。蓋し昆蟲の分類は、一に其外部の構造によりて、分別せらるゝものなればなり。之れを昆蟲外貌學(Orismology)といふ。第二は單に昆蟲内部の構造を論ずるの學にして、昆蟲分類學に關すること頗る少なしと雖も、昆蟲生理學とは密接の關係を有せり、之れを昆蟲解剖學(Entomonomy)といふ。第三は、昆蟲の生理に關する、萬般の現象を論究するものにして、其範圍頗る大なり。今之れを再別して二となす、即ち、一は蟲体生理學(S-omatic Physiology)にして、他は稟性生理學(Psychical Phisiology)なり。前者にありては、昆蟲の發生變態、生殖、吸呼作用、血液の循環、神經、知覺、運動、及び食物等に渉りて論究するものを云ひ、後者にありては、食物の稟性、産卵の稟性、幼蟲の稟性、結繭の稟性、成蟲の稟性、幷に昆蟲の生態、分布、及害益に跨りて論究するものを云ふ。其食物を得るに、沙挼子の如く、砂中に漏斗状の陷穽を設け他蟲の陷るを待ち伏せ、之れを捕食するものあり。敵害を免れんが爲めに、枯枝に摸倣するものあり。自衛の目的を以て、有毒の蜂類を眞似るものあり。産卵せんが爲め、十分間も水中に潜入するアグリヲチプス(Agriotypus)の如き寄生蜂あり。或は脚を伸ばして死狀を眞似る蜣蜋(Geotsapest)あり。脚を收縮して、死狀を裝ふ青蜂(Chrisis)あり。或は螻蛄の如く、其幼時母蟲に養育せらるゝものあり。以上是等

は、皆禀性生理學の範圍に屬するものにして、人類の心理學に相當するものなり。其人類に於ける心理學の復雜なる如く、禀性生理學なるものは、昆蟲界にありても、亦甚だ繁雜なるを覺ゆ。尚昆蟲の害益に關して論究するものを、特に應用昆蟲學(Economic Entomology)と云ふ。

昆蟲分類學なるものは、昆蟲外部の特性を捕へて、之れを目、科、屬、及び種に分類するものにして、昆蟲學の大部を包擁せり。現今昆蟲學者と稱すべきものは、普通此の分類學を研究せるものを意味し、其發生、生理、解剖に渉りて研究するものを、普通動物學の內に編籍せり。彼の伯林大學にて有名なるハイモンス(Heymons)氏の如きは、殊に昆蟲の發生學を究研すれども、決して昆蟲學者と稱すべきにあらす。彼の有名なる、英のポールトン(Poulton)氏は、昆蟲を捕へ來りて、其彩色を研究すれども、是れ亦動物學者にして、昆蟲學者にあらず。現今地球上に學名を有する昆蟲は、四十萬以上に達し、年々歳々、猶幾多の多きを增加しつゝあるの今日、昆蟲學なるものは、到底一個人の、全目に渉りて研究し能はざるを知るに至りてより以來、此分類學なるものは、更に昆蟲目と同數に小別せられ、鞘翅目を研究するものを鞘翅學(Coleopterology)と云ひ、鱗翅目を論するものを鱗翅學(Lepidopterology)と稱するに至れり。又鱗翅目を研究するものを鱗翅學者(Lepidopterologist)と云ひ、鞘翅目を研究するものには、鞘翅學者(Coleopterogist)の名稱を冠するに至れり。尚此他、昆蟲の化石を論究する學を、古生昆蟲學(Entomopalaeontolog)と稱せり、同じく昆蟲分類學に屬すれども、未だ其發見せられたる化石の小數なる、多くは古生物學者の手に研究せられ、普通昆蟲學者の之れに觸るゝもの稀なり、

## ◎珍奇なる鍋蓋蟲に就て

名和昆蟲研究所長　名和靖

明治三十年、神戸に於て開設の、第二回水產博覽會へ、水捿昆蟲標本を出品せんとて、前年、即ち廿九年は、專ら水捿昆蟲を採集したるに、其内十二月三日と、十五日との兩日、岐阜市近傍に於て、十數頭のナベブタムシを得たり。然るに、該蟲に就ての智識は殆んど皆無なるにも係らず、三十六年七月發行の、本誌第七十一號學說欄に、水捿有吻目十一種に就てと題して、石版圖を以て略說したる事ありたり。其後、松村博士の該蟲に就て深く研究せらるゝの結果學名も明瞭となり、從ひて余の誤りたる點も自から明瞭となりたるは、余の大に喜ぶ處なり。即ち七十一號に於て、ナベブタムシを說明して、第一圖のものを雄となし、第二圖のものを雌と全く誤解し居たるを發見したり。口繪に現したる、第七版石版圖中の十一は、慥かにトゲナベブタムシなる事を知ると同時に、本誌第五十五號雜錄欄内に、長野縣小山海太郎氏の記事中にある圖版は、慥にナベブタムシなる事を想像し得るに足れり。今松村博士の報知に依れば、

第一圖　ナベブタムシ

第一　Aphelochira Shirakii n. sp. mats.　ナベブタムシ

第二　A. Nawae, n. sp. mats.　トゲナベブタムシ

第三　A. Aestiialis F.?　ハネナガナベブタムシ

第一の種、即ちナベブタムシは、札幌農學校昆蟲科學生素木得一氏が、箱根に於て採集せられしを以て、紀念として同氏の姓を種名に採用されたり。其分布は、箱根の外、長野縣にて小山氏、尾張國中島郡萩原町に於て、昨三十七年八月四日余の採集、岐阜市近傍の各地清水中に於て、明治廿九年以來多少採集す。其体長三分弱、体幅二分乃至二分二厘、稍

第二圖　トゲナベブタムシ

長みを帯ぶ、体黒褐色にして、胸側は尖らず、各腹節の縁端著しく針狀をなせり。翅は退化して、飛翔の用をなさず。

第二の種、即ちトゲナベブタムシは、明治廿九年十二月三日、並に十五日に於て、始めて岐阜市近傍の清水中にて、研究所員の採集したるを以て、博士には、紀念として名和の姓を種名に採用されたり。体長三分三厘、体幅二分五厘内外の、殆んど圓形の種なり。体黄褐色にして、背面中央の大部分は黒褐色を帯び、其兩側に黒褐色紋あり。胸部大にして其兩側端尖り、稍鉤狀をなすを以て此の稱あり。各腹節の縁端は、下方に向ひて尖れり。翅は、前種と等しく退化せり。

第三圖　ハネナガナベブタムシ

第三の種、即ちハネナガナベブタムシは、明治三十四年十一月九日、美濃國山縣郡下伊自良村に於て、某氏の採集せしもの、只一頭を所藏するのみなれば、博士には圖を以て鑑定を請ひたるに、『一、二の種とは別種に有之候、此は東歐に產する Aphelochira aertialis F.? に酷似すれども、小生は實物を有せざれば判然申上兼候』と以上の答へありたり。これは第一の種と殆んど同大にして、体幅稍廣く、黒褐色にして黄褐色の紋あり。各腹節の縁端は、著しく針狀をなし、胸側は圓く、前翅長く殆んど腹端に達するを以て此の稱あり。

以上三種は、休軀薄扁にして圓く、鍋蓋狀をなせり。頭部黄褐色にして小さく、腹眼は長橢圓形にして黒褐色を呈し、頭部の兩側下方にありて、半ば前胸内に陷落し、觸角は頭下に隱れて見えず。口吻は長くして鋭し。後肢長く前肢腿節は甚だ太く、二跗節を有す。

右の次第にて、鍋蓋蟲科(Aphelochiridae)に屬するものは、現今、本邦に三種あるを知れり。此の珍奇な

る種の、今回明瞭となりたるは、全く松村博士の賜なれば、茲に大に感謝すると同時に、特に本年發行の本誌表紙に、第二の種を現はして、以て永く紀念とせん事を欲す。

## ◎邦産虎斑天牛類に就て（第壹版圖參看）

名和昆蟲研究所内　小森省作

天牛科に屬するものは、體軀肥大にして多少延長し、觸角は鞭狀若くは絲狀にして長く、複眼は觸角の起點に遮ぎられて多少彎曲し、甚しきは全く二分せらるゝものあり、上顎はよく發達し、肢は長くして、脛節端に刺を有し、跗節は四節、腹部は五節よりなり、容姿壯嚴、恰も武裝せるが如き觀あるを以て、予は此蟲類の大害蟲なるにも關らず、常に之を愛好しつゝあるなり、就中、虎斑天牛屬（Clytus）に屬するものは、其形大ならずと雖ども、可憐なる狀貌なるが故に最も之に注意を拂へり。凡そ此類に屬するものは、邦産二十有餘種ありと雖ども、目下名和昆蟲研究所に藏する標本は實に十六種なり、予は常に是等に就て攻究せんと欲するも、風塵に忙殺せられて未だ之を果さゞるが、徒に之を標本函底に秘して發表せざるは、斯學に忠實ならざるものと信じ、今は只、杜撰をも顧みず、其形躰の一班を記して諸士の叱正を乞ひ、更に他日を期して訂正補足する所あらんとす、而して之れが學名につきて、或人はClytanthus 亞屬名の下に配し、或はXylotrechus 亞屬の下に隷し、又は Clytus なる屬名を附するものあるも、其當否何れにありやは、少焉攻究の後にあらざれば得て知るに由なきを以て、凡てClytus なる屬名を冠したり、隨ひて種名に於ても、果して各種に適合せりや否やを明言すること能はず、たゞそれ和名に至りては、從來殆んど全く之れなく、唯岩川先生が曩に動物學雜誌上に於て、日本産天牛科四十種中斯屬五種を記載されたるも、トラムシ、ハチダマシ等なる名稱は、天牛の名稱として如何あるべきか

との懸念もあり、且、他日名稱一定の際に於て或は面白からざらんかと信じたれば、更に名和先生に謀り、之を改稱して、凡てトラフカミキリてふ語尾を附し、また、從來名稱のなきものには、新に之に命名して略ぼ統一を期したり、讀者之を諒せよ。

此虎斑天牛屬に入るものは、體軀圓筒形にして、略ぼ基定の斑紋を有し、觸角は絲狀にして短かく、前胸部は球形をなし、肢は頗る長し、形狀、紋理共に蜂の或種に模倣せり。

（一）オホキスヂトラフカミキリ一名アカハチダマシ（Clytus caproides, Bates）　體長四分五厘乃至六分五厘、全體黑褐色にして、頭部は額面に二個の黃色縱斑を有し、頭部の胸部に接する部にも細く同色線を有す。觸角は褐色にして短かく、長さ二乃至三分なり。前胸部は球形にして前後兩緣には黃色線を有し、中胸の楯板及後側板にも同色斑を有す。靜止の狀態にある時は翅鞘細長く肩部少しく張りて中央部稍狹く肩部は褐色にして、中に微かなる黑點を有し、其後方翅の殆んど中央に人字形黃斑ありて其兩側にも同色斑點あり、尙其後方に廣き一字斑ありて兩端稍廣し。肢は褐色にして、腿節の先半は著しく急に膨大す。腹部は前三節の後緣黃色を呈す。全體細毛を粗生し、形狀頗るキスヂバチに模倣せり。（第一圖）

（二）ヒメキスヂトラフカミキリ（Clytus sp.?）　體長二分五厘乃至三分五厘、頭部黑色にして、觸角の長さは體の二分の一、基半は褐色、先半は濃褐色にして稍太し。前胸部は球形黑色にして、前後兩緣には細き褐色線帶を有し、後胸上腹板にも黃點を有す。翅鞘は黑褐色にして、紋理頗る前種に似たりと雖も、肩斑及人字形斑は帶淡淚褐色にして、其後部の黃色帶は兩端細くして後方に向ひ三角形をなし、肢は褐色にして腿節の先半頗る膨大す。腹部前二節の後緣は黃色を呈す。（第十一圖）

（三）コキスヂトラフカミキリ（Clytus emaciatus, Bates）　體長四分內外、頭部黑色にして顏面縱に帶綠

黄色の二條を有し、觸角は濃褐色にして長さ雄は一分五厘、雌は二分五厘、前胸部は球形にして大きく黒色にして前後兩緣及中央部に帶綠黄色の細き線帶あり、後胸腹板及側板にも同色斑あり、翅鞘は黒褐色にして、肩部の褐色斑の後緣は黄色を以て緣どり、其後方の人字形黄色斑と翅端の黄色斑との間に一直線の同色横帶を有す。肢は細長くして、腿節の先半は膨大せるも前種の如く著しからず。腹部は各節の後緣黄色を呈す。（第十二圖）

（四）キスヂトラフカミキリ(Clytus auripilis, Bates)　體長五分五厘内外、斑紋前種に似たるも、體軀大にして顏面小さく、後頭部に黄色の横斑あり、觸角はよく發達して稍鞭狀をなし、褐色を呈し、長さ雄は殆んど體と同長、雌は稍短かし、前胸部は球形にして、前後兩緣及中央に細き黄線あり、翅鞘は肩部稍張りて後方に至るに從ひ狹く、肩部の褐色斑の後緣は細く黄線を有し、其後方の人字形黄色斑と翅端の黄斑との間に二條の細き屈曲せる黄色線帶あり、肢は發達して長く、腿節の後半は膨大せるも急ならず、腹部の各節の後半は黄色を呈す。（第十圖）

（五）ムナアカトラフカミキリ(Clytus pyrrhoderus Bates?)　體長四分、頭部は黒色、觸角は黒褐色にして長さ體の二分の一、前胸部は球形にして非常に大きく、全く帶褐赤色を呈す。翅鞘は黒色にして二條の黄帶を有し、前胸部に接する部は淡褐色を呈す、肢は細長にして黒色なり。幼蟲は野生の葡萄に托生す。（第十四圖）

（六）トラフカミキリ一名オホトラムシ(Clytus chinensis, Chevr.)　體長五分乃至八分五厘、頭部は黄色にして中央縱に太き褐色の縫合線を有し、觸角は殆んど躰の二分の一にして太く、基部及先端は褐色にして中央は濃褐色を呈し。前胸部は大きく球形にして、前部は黄色、後部は黒色にして中央に赤褐色帶

あり、翅鞘は肩部稍張りて廣く、黑色と帶褐黃色と交互に人字形斜條斑をなし、末半部は帶褐黃色を呈し一條の黑斑あり、肢は長くして飴色を呈し、胸部の腹面は黑色に、腹部各節の後半は黃色を呈す、桑樹の大害蟲にして、形狀頗る蜂に模倣せり。（第十六圖）

（七）コトラフカミキリ（Clytus sp.?）　體長五乃至六分、頭部は黃色にして縱に細き縫合線を有し、觸角は帶褐黃色にして長さ體の二分の一に達す、前胸部は球形にして稍長く、黃色にして背面の中央に黑色の橫斑を有す、翅鞘の色彩紋理は前種に頗る似たるも、黃色の人字形斑は翅緣に達せず、或は點紋となり、且其左右に各二個及前胸部と接する處にも黃斑を有す、肢は頗る細長くして帶黃褐色を呈し、腹面は殆んど黃色なり。（第九圖）

（八）クロトラフカミキリ一名トラカミキリ（Clytus latifasciatus Fisch.）　體長三分五厘乃至五分、觸角灰黑色にして長さ雌は體の二分の一、雄は稍長し、全體帶綠灰黃色に、前胸部の背面中央に黑斑ありて其左右に一黑點を有し、翅鞘には黑色人字形斑を有し、其上部の左右にい字形黑斑あり、下部には同色橫斑を有す、肢は體と同色にして頗る細長し。（第三圖）

（九）コクロトラフカミキリ（Clytus japonicus, Chevr.）　體長二分五厘乃至三分五厘、前種に頗る酷似したる種にして體細く、觸角は體より稍短かく、前胸部は稍長く、背面に二黑點を有し、翅鞘の黑色人字形斑上のい字形黑斑は前種の如く判然せず、且其後部の黑帶は左右よく相通ぜり、肢は灰黑色にして頗る細長し。（第四圖）

（一〇）ヒメクロトラフカミキリ（Clytus diminutus, Bates）　體長一分七厘乃至二分五厘、觸角は體よりも稍短かく、全體黑褐色、圓筒形の微小種にして、翅鞘の帶青白色人字形斑は切れて三斑點となり、其

下部に三角形の同色横斑と翅端に同色斑を有し、中、後胸側及び腹部の第一二節の側部にも同色斑を有す。(第五圖)

(一一)キイロトラフカミキリ一名トラムシ(Clytus notabilis, Pascoe.)　體長五乃至六分、觸角は殆んど鞭狀にして體よりは稍短かく、灰黑色を呈し、全體帶綠黃色にして天鵞絨樣の光澤を帶び、前胸部は稍長く、背面に二黑點を有し、翅鞘に不正形の黑斑を有す、中後胸の側板は黃白色を呈し、肢は極めて長し。(第六圖)

(一二)コキイロトラフカミキリ一名タケノトラフカミキリ又コトラムシ(Clytus annularis, Fabr.)　體長三分五厘乃至四分五厘、全體帶褐黃色、觸角は體の三分の二の長さを有し、絲狀にして褐色を呈す、前胸背の中央に人字形黑斑と其左右に黑點を有して火字形をなし、翅鞘の左右には黑色の不正なる2字形斑と其下部に一黑斑を有す。肢は褐色にして細長し。(第二圖)

(一三)シロスヂトラフカミキリ(Clytus oppositus, chevr.)　體長三分五厘乃至四分七厘の長形にして、頭部は黑色の地色に灰白色の微毛を以て灰色を呈す。觸角は細くして淡褐灰色を呈し、體より稍短かし前胸部は灰黑色にして前胸背板の邊緣及び中央縱に灰白線を有し、翅鞘は黑色にして肩部に三個の灰白色縱斜斑ありて人字形斑に接し、左右兩翅に跨りて一線縱に通じ、翅端の斑紋と人字形斑との間に長短二橫條あり、腹面は全體灰白色を呈し、肢の腿節は灰色、脛節以下は淡褐色を呈す。(第七圖)

(一四)ヨスヂトラフカミキリ(Clytus sp.?)　體長三分五厘、細長形にして頭部は黑色、觸角は細くして體と同長、前胸背板の邊緣は灰白色をなす、翅鞘黑色にして肉色の四條斑を有し、其最前部のものは縱に左右にあり、腹面は灰黑色を呈し、肢は頗る細くして腿節の先端急に著しく膨起す。(第八圖)

（一五）チャバチトラフカミキリ（Clytus sp.?）　體長四分五厘乃至五分、頭部は黒色、胸部は黒色にして微かに黄微毛を有し、觸角黒褐色にして短かく、翅鞘は暗褐色にして外緣部は濃色を呈し、微かに灰白色の人字形斑を有す。肢は黒色にして長く、腿節の末半膨大せり。（第十五圖）

（一六）ツマシロトラフカミキリ（Clytus sp.?）　體長三乃至三分五厘、頭部は黒色、觸角は體と同長にして帶紫褐色を呈し、各節の基部稍淡し、前胸部は黒色球形にして大ならず、翅鞘の肩は張りて後方漸次狹まり、基半は帶紫褐色にして、肩部に一個の稍隆起ありて黒褐色を呈し、其下部には人字形黒斑と微かなる白斑及幅廣き黒帶を有し、翅尖は白色と褐色を呈す、肢は細くして長からず帶紫褐色を呈し、腿節の末半は急に膨大して黒色を呈す。（第十三圖）

編者云、本篇圖版即ち本號口繪は着色圖となさん考なりしが、印刷間に合はざりし爲め、止むを得ず寫眞版となしたり。されば他日更に精巧なる着色圖版を挿入する所あるべし。讀者之を諒せよ。

## ◎冬季採集中の夜中糖密採集

名和昆蟲研究所助手　石田和三郎

冬季昆蟲絶滅の語の起る所以は、四期に於ての氣候の變遷が、引て生物界に異動を與へしむるに基くものにして、吾人が、百花爛熳たる春季に心浮び、爐中に座するが如き酷暑に惱み、田園穗液を打たしむる秋季心神爽快を覺ゆるも、霜雪一度來るに及んで、一家爐を圍んで蟄居するに至ると等しく、昆蟲の如きも、吾人の心浮び立つ時は、飜々花に戯れ、蠢々として草木と語るも、冷風一度落葉を拂ふに至れば、蒼惶吾人と共に蟄伏時代に遷るものなり、而かして吾人は内に蟄し、昆蟲は各々場所を撰んで潛むを以て、吾人の眼が昆蟲と遠ざかり、自然昆蟲は冬期に滅するものと想像するに至る。然りと雖も、世人の想像の如く、昆蟲は冬期如何なる寒氣に偶ふも、死滅するものにあらず。試に、寒威凛烈錐を刺すが如きの時、勇を皷して庭園を探ぐれば、枯死したる雜草中には、浮塵子、椿象、瓢蟲の類隱れ、石を

起せば、歩行蟲、葉蟲類の潜伏するあり、常に緑樹の枝を叩けば、寄生蜂、寄生蠅、肉食椿象の落ち來るあり、樹木の穹穴、樹皮の空隙を改むれば、朽木蟲を始めとして、數多の甲蟲、蟻、蛾類の幼蟲、及び蝶、蛾類の成蟲を見るを得べし、其の他、水中に死を擬するもの、塵芥に隠るゝもの、其の數幾千なるや知るべからず。一度之れ等の事實を目撃せば、何人も、冬季害蟲驅除の必要を感せざるものあらんや。故に當所は冬季昆蟲採集が、斯學研究者に取りて至大の價値あるを信じ、之を奨勵する所以なり。

然りと雖も、以上は皆之れ漸くにして冬季を凌ぎ、來春を待つものなるも、特に寒中にのみ限り、成蟲時期として出沒し、如何なる嚴寒にても、食物を慕ひ來る蛾類のあるに至りては、何人も以外の感なき能はざるべし、其の採集の方法、及び此等昆蟲の擧動に就ては、本誌第七十七號學説欄に於て、名和所長の掲載せられし所なるを以て、茲に贅せずと雖も、研究所は、一昨年來、是等害蟲の調査を繼續し、今ま尚ほ試驗中に屬するも、昨年一月の如き、稀有の寒氣に於てすら、非常なる好結果を修めたるを以て、聊か茲に冬季昆蟲採集の必要を知らしむると同時に、是等の實驗には、目下最も良好の時期なれば此の期を失せず、諸君にも充分なる助力を乞ひ共與に斯學の研究を成さば、國家を利する事多大なるを信じ、左に採集中尤も寒氣の甚しかりし、昨年一月に於ける岐阜測候所の報ずる氣候と、夜中糖密採集の成績表とも掲げて、諸君の參考に供せんとす。

三十七年一月の寒氣　例年は年中の最寒氣候に屬し、北西の風卓越して吹き、氣候は全く之れに支配せられ、寒氣の强弱は、一に其消長に依りて多少の異動あるを免がれざるものなれども、平均氣溫は凡そ三度（華氏三十七度四）を示し、最低氣溫は毎朝氷點下數度にあり。最高氣溫は平均八度（華氏四十六度四）内外にあれども、晝夜氣溫の平均、氷點下に降る事又少なからず。年内の低極は、大抵一月下旬に現はるゝを常とし、降雪日數は平均九日を算し、甚しきは十六日に及べるの年あり。而して、本年は、客臘以來著しく低溫を示し、前月來、氣溫の平年度に達する事、殆んど皆無にして、殊に本月に入りて更に甚しく、上旬の如きは二度（華氏三度

六）内外の過低を示し、中旬に入りては稍や寒氣を緩めたりしが、二十一日來、廣大なる寒波が、亞細亞大陸より本州に擴張するに及びて、氣壓は著しく增嵩し、氣溫の低下は、近年稀有の嚴寒を示し、二十二日より二十七日に至る六日間は、平均氣溫、日々氷點下に降り、廿六日の最低氣溫、實に氷點下七度三に降り、平年より低きこと五度（華氏九度）以上に及べり。斯の如き寒氣は、既往二十一ヶ年間中僅かに七回（明治十七年氷點下十一度七、十八年氷點下九度九、十九年氷點下十度六、二十六年氷點下七度七、二十九年氷點下十度六、三十三年氷點下十度一、三十四年氷點下九度五）にして、其の平均氣溫の氷點下に降りし事、引續き六日に及びしは、單に既往二十一ヶ年中只一回（明治十七年）ありしのみなるを以て、如何に寒氣の劇烈なるを知るに足らん。

**前記の如き寒氣甚しきにも係らず其夜中糖蜜採集の結果は左表の如し。**

## 冬季夜中糖蜜採集成績表（表中採集頭數は悉く蛾類なり）

| 月日 | 採集場所 | 採集頭數 | 採集時間 | 採集當時天氣 | 採集當時溫度 | 採集當時平均溫度 | 採集當時濕度 | 採集當時平均濕度 | 採集日天氣 | 一日平均溫度 | 一日平均濕度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十六年十二月廿五日 | 岐阜公園 | 一一 | 午後六時 / 同十時 | 快晴 / 快晴 | 三、一 / 一、七 | 二、四 | 六〇 / 六二 | 六一 | 快晴 | 三、九 | 六六 | フクラスヾメ及糖蛾の一種飛居れり糖蜜に來る者は不活潑 |
| 同十二月廿九日 | 同 | 三一 | 六時 / 同十時 | 晴 / 曇 | 五、〇 / 三、二 | 四、一 | 七五 / 七〇 | 七二 | 午前雪午後曇 | 二、七 | 八九 | 尺蠖蛾の一種飛び居れり |
| 同十二月卅一日 | 同 | 一二 | 六時 / 同十時 | 晴 / 曇 | 四、六 / 三、一 | 一、三 | 七六 / 八五 | 八〇 | 晴 | 三、二 | 七九 | 尺蠖蛾の一種飛び居れり |
| 明治三十七年一月四日 | 同 | 九 | 六時 / 同十時 | 晴 / 雪 | （一）〇、七 / （一）〇、三 | （一）〇、五 | 九七 / 九八 | 九七 | 雪 | （一）三、四 | 九五 | 雪甚だ深し |
| 同一月五日 | 同 | 九 | 六時 / 同十時 | 曇 / 曇 | 一、〇 / 〇、二 | 〇、六 | 九四 / 九八 | 九六 | 同 | 〇、五 | 九四 | |
| 同一月七日 | 同 | 二四 | 六時 / 同十時 | 晴 / 快晴 | 二、〇 / 二、六 | 二、五 | 八五 / 七七 | 八一 | 晴 | 〇、九 | 八二 | |
| 同一月八日 | 稻葉山岩戸 | 二四 | 六時 / 同十時 | 同 / 同 | 二、八 / 一、六 | 二、二 | 六一 / 七六 | 六八 | 同 | 三、三 | 七二 | カレエダミツボシ飛揚し居る者を捕ひ取れり |
| 同一月九日 | 稻葉山公園 | 一四五 | 六時 / 同十時 | 雨 / 曇 | 五、八 / 四、六 | 五、一 | 八二 / 八九 | 八五 | 曇 | 三、八 | 七四 | 雨中に傘をさして採集す此夜蛾類は非常に活潑なり |
| 同一月十日 | 岩戸 | 四 | 六時 / 同十時 | 快晴 / 同 | 二、四 / 二、二 | 二、三 | 八九 / 七一 | 八〇 | 晴 | 三、七 | 八二 | 糖蛾飛び居る者を捕蟲器にて捕ひ取れり |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同一月十四日 | 岐阜公園 | 四 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | 五、八 / 三、九 | 四、八 | 六二 / 六六 | 六四 | 曇 | 四、九 | 八一 | |
| 同一月十五日 | 同 | 八 | 同六時 / 同十時 | 晴 / 快晴 | 五、〇 / 一、九 | 三、四 | 六三 / 八一 | 七二 | 快晴 | 四、二 | 六七 | |
| 同一月十六日 | 同 | 三四 | 同六時 / 同十時 | 晴 / 快晴 | 四、六 / 二、三 | 三、四 | 七九 / 八七 | 八三 | 晴 | 三、八 | 七二 | 糖蛾飛び居るを見たり |
| 同一月十七日 | 同 | 〇 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | 二、〇 / (一)〇、六 | 〇、七 | 四七 / 六七 | 五七 | 快晴 | 二、二 | 六二 | 燈火不充分なるを以て採集するを能はず |
| 同一月十八日 | 同 | 六 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | 〇、四 / (一)〇、一 | 〇、一 | 七七 / 七九 | 七八 | 同 | 〇、〇 | 七一 | 前夜塗抹の糖蜜を見廻りたり |
| 同一月廿二日 | 同 | 二四 | 同六時 / 同十時 | 雪 / 雪 | 〇、二 / (一)一、四 | (一)〇、六 | 九六 / 九七 | 九六 | 雪 | (一)〇、九 | 九一 | 降雪非常にして採集中積雪一寸以上に及べり |
| 同一月廿三日 | 同 | 〇 | 同六時 / 同十時 | 快晴 / 晴 | (一)一、四 / (一)三、六 | (一)三、〇 | 七八 / 八九 | 八二 | 晴 | (一)三、一 | 八二 | 寒氣甚だし |
| 同一月廿四日 | 同 | 一 | 同六時 / 同十時 | 快晴 / 同 | (一)〇、九 / (一)〇、七 | (一)〇、八 | 九三 / 七八 | 九五 | 雪 | (一)三、〇 | 八二 | 寒氣甚だしきも糖蜜に來り居れり舉動は不活潑なり |
| 同一月廿五日 | 同 | 一 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | (一)一、〇 / (一)四、〇 | (一)三、五 | 六九 / 六二 | 六五 | 晴 | (一)一、六 | 八〇 | 前夜に同じ |
| 同一月廿八日 | 稻葉山 / 岐阜公園 | 六二 / 四 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | 三、二 / 一、九 | 二、五 | 八七 / 九〇 | 八八 | 同 | 二、六 | 七五 | 糖蛾飛揚し居る者あり |
| 同一月廿九日 | 稻葉山 / 岐阜公園 | 六七 / 三二 | 同六時 / 同十時 | 曇 / 曇 | 六、二 / 四、四 | 五、三 | 六六 / 七九 | 八二 | 同 | 四、〇 | 七二 | 前夜と同じ |
| 同一月卅一日 | 岩戸 / 葉稻山 / 則武 | 二一二 / 二九〇 | 同六時 / 同十時 | 雨 / 快晴 | 五、五 / 二、九 | 四、二 | 七五 / 八二 | 七八 | 同 | 四、一 | 八三 | 前夜と同じ |
| 同二月一日 | 岩戸 / 岐阜公園 | 一〇 / 一七 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | 二、四 / 〇、四 | 一、四 | 六〇 / 六八 | 六四 | 同 | 三、三 | 五五 | 前夜と同じ |
| 同二月二日 | 岩戸 / 岐阜公園 | 一三〇 / 一二八 | 同六時 / 同十時 | 曇 / 曇 | 七、〇 / 四、八 | 五、九 | 四六 / 七六 | 六一 | 同 | 三、七 | 六二 | 糖蛾は活潑に飛揚せり |
| 同二月四日 | 岐阜公園 / 則武村 | 六 / 三 | 同六時 / 同十時 | 快晴 / 同 | 四、六 / 二、四 | 三、五 | 五九 / 五七 | 五八 | 同 | 三、九 | 五五 | 西北の風强し |
| 同二月五日 | 大寶寺林 / 岐阜公園 | 〇 / 一四 | 同六時 / 同十時 | 同 / 同 | 三、四 / (一)一、二 | 一、一 | 五九 / 八〇 | 六九 | 同 | 一、九 | 五九 | |

右の結果に依れば、非常なる寒氣の時は、糖蜜に集り來る蛾類、幾分不活潑なりと雖も、零度以上の寒氣には平氣にして、其より寒氣の減ずるに隨ひ、活潑に飛揚し居るを見る事表の如し。而して、冬季糖蜜に集まる蛾類は、其種類廿種内外にして、其内最も多く集まるものは、十一月下旬より來りて、三月下旬に終り、恰も冬季中にのみ成蟲を見るものなるが、其同種類にして變化の多き、恐くは昆蟲類中之より甚しきものはなからん、其の紋理習性等に於ては、他日記載するの時期あるべきを以て、茲に述ぶる所は、只冬季昆蟲採集なるものが、想像意外に面白き成蹟の生ずるを以て、冬季昆蟲の絶滅なる語は假りにも口にせられざらんことを、希望して止まざる次第なり

## ◎鳴く蟲に就て（一）

名和昆蟲研究所内　谷　貞子

私は斯學研究に從事せし以來、何か女子に適せるものを研究せばやと、種々考へ居たりしも、別段の考案も出でざりしかど、幸ひにも、この鳴く蟲てふものは、いと優美に且やさしく、女子の研究にはいと適當しをる事を思ひ、昨年九月以來、殆んど己が寢食をうち忘れてこれが研究に從事し、いつも午前中は室内にて研究し、午後に至れば、雨天の外は野に、山に採集し、まれには珍種をも得て、よろこび顔に歸所したるもあり、又己が目的物の採集し得られざるの時にをいては、いたく失望のあまり、うらみを含んで歸りし事もありしが、其度毎に、人々にはげまされ、且助けられて、この岐阜市近傍にて採集せしもの、今にては蟬科、螽斯科、蟋蟀科等合せ四十餘種の鳴く蟲を採集せり、されど思ひたちし時期の少しをそかりしと、又採集地を變へざりしとは、大に遺憾とする所なりしも、幸ひにも當研究所にはいと珍らしき標本の數々、捕り集められてありしかば、そをこふて研究する事となし、又名高き諸先生

の著し給ひし書籍をも參考になしぬ。されど、何分にも未熟の私の、僅か三ヶ月程の短時日に於て調べしものなれば、不完全此上なし、さりながら、己が研究せしものを、やたら書齋になげすつるも如何と覺ゆれば、一先づ此誌上をかり、半翅類の蟬科より、直翅類の螽斯科、又は蟋蟀科等と漸次登載する事となしぬ。さはいへたらぬ私の、而も研究中のものなれば到底誤謬を免れざるべしとは思へども、此後一層研究し、この缺點を、いづれ後日に補ふ考へなれば、何卒其心して一覽をこふものなり。

右の順序によりて、先づ蟬の發音器より記さんとす。

### 蟬の發音器

蟬は口なくして鳴き、蛇は足なくして歩み、魚は耳なくして能く人の足音を聞くと、古へより天下の三大不思議とす、そは本邦のみならず、淮南子に「蟬無口鳴」とあり、格物論には「蟬兩翼、喙長在腋下、或以爲無口以脇鳴者」とあれば、口にて鳴かざるを知れる事明らかなり、されば一体何處にて發音するかと云ふに、先づ野外にて、鳴きつゝある蟬の一つ二つを捕て、委細に之を驗するに、腹面の上部に、彈力ある二枚の、丸きもあり、長きもありて、其形一樣ならざれど

蟬の各種鱗狀辨の比較圖
(一)ニイニイゼミ(二)アブラゼミ(三)ツクツクボウシゼミ(四)ミンミンゼミ(五)ヒグラシゼミ(六)ハルゼミ(七)エゾハルゼミ(八)ヒメハルゼミ(九)クマゼミ(一〇)エゾゼミ(一一)コエゾゼミ(一二)チッチゼミ(一三)タイワンアブラゼミ(一四)タカサゴゼミ(一五)ハグロゼミ(一六)ハゴロモゼミ(一七)ヒメクサゼミ

も褐色がゝりし圖の如き辨の、上部より垂下するを見るならん、之れを鱗狀辨と云ふ、又第一關節の背面の兩側に、著しく凸出せる板あるべし、之を蓋壁と云ふ。前後者共に、全く發音器を保護するためのものにして、今其鱗狀辨と、蓋壁とを切りとり、腹部の方より之を見るに、第一關節に眼鏡狀をなせる白き薄膜（イ）あるを見る事を得、又た其の下に、一つの小窩（ロ）を有す。されども、種類によりて、各々其廣狹を異にす。又側面に、灰色がゝりし襞狀をなせる所あらん、これを皷膜（ハ）となづく。その上部の筋肉（ホ）内には、第三の氣孔（ニ）あるを見るべし。次に、後胸と腹部とをとり、腹部の内側を見るに、中央に於て、後胸の凸起と、腹關の凸起と相接續するの裡面に、眞直に細き肉筋あるを見る。この肉筋は、腹部の屈伸を自在ならしむる用をなす。又第一節の腹關の中面より、兩側に向つて、太きV字形の肉筋（ヘ）あり。此肉筋の先端は、キチン質の丸き薄板（ト）に附着し、其中央より細腱（チ）が出で、皷膜（ハ）の中心、又はやゝ下部に結接す。

アブラゼミの發音器

（イ）薄膜
（ロ）小窩
（ハ）皷膜
（ニ）氣孔
（ホ）筋肉
（ヘ）肉筋
（ト）薄板
（チ）細腱

さて其發音は、肉筋（ヘ）の伸縮により、薄板（ト）が振動し、細腱（チ）も從て振動す。細腱振動すれば、皷膜（ハ）も振動すると云ふ理屈にて、其四機官相待つて、初めて各々特意に美聲を發するものなり。右は動物學雜誌第二卷、第廿四號、第廿五號に掲げられし、波江元吉先生の論文によりしものなり。（未完）

講話

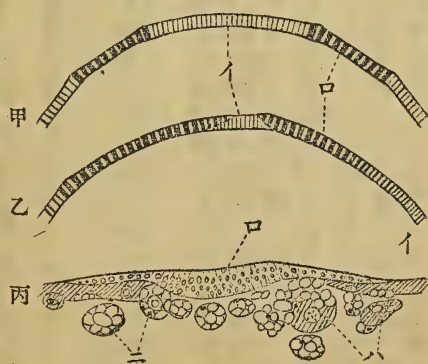
# ◎昆蟲の變態に就て

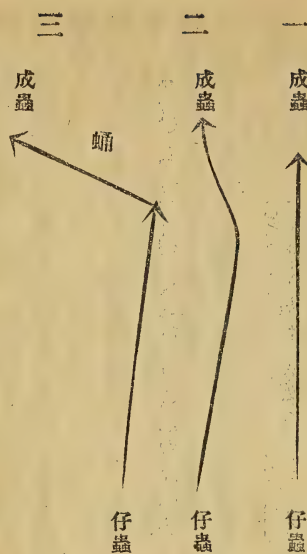
理學博士　石川千代松

編者云。本篇は、昨夏、石川先生が鯢魚調査の途次來所せられたる際、當所の特別研究生及講習生等に對し一場の講話を乞ひ、そを筆記したるものなり。

私は何も話はありませんが、皆さんは昆蟲の事を御研究になつて居りますから一般の事は御承知の事故昆蟲の變態に就て少しく御話し致しませう。

動物の中には、變態するものと、變態せざるものとありまして、變態するものは、卵又は胎内より出でしものが親の形と違つて居て、夫れが段々と親の形になるのであります。蛙の卵より蝌斗が出て來て、之れが親の形になる事は能く知れて居る事でありますが、昆蟲も亦變態をするもので、仔、蛹、成の三期を經て生長するものを完全變態と云ひ、此の三期が判きりしないものを不完全變態と云ひ、生れ出たものと親と同じものを不變態と云ひますが、一体昆蟲の變態の事に付きましては、昔時から種々の說がありますが、'Lord Avebury が昆蟲の變態に就てかゝれた小さな書物がありますが、其の書には昆蟲の變態は蛙と同じものにして、其仔蟲のイモムシは蛙の小供蝌斗と比較してあります。然し之れは或は誤りではないか、獨乙の學者で Fritz Müller と云ふ人がありましたが、此の人はダーウヰンの種源論が出てから、直ぐに此の新說が正しいものであるか否やを自分で實驗して見やうと思つて、研究に取り掛りまして、其結果一千八百六十二年か三年頃に小さな書物を書かれましたが、其の表題はダーウヰン氏の爲めと云ふので、其内には主としてエビやカニの事を書いてありまして、彼のヘッケル氏が後で引き伸した個体發生と系統發生の有名の說が出してあります。其の中に又昆蟲の變態の事が一寸載せてあつて、夫れは極く短く書いてありますが、昆蟲の變態と云ふものは、昆蟲が始めから持つて居たものではなくて後から得たものである。夫れであるから、變態をせないものが最も先祖に近いもので、其次ぎが不完全

變態で、完全變態は一番終りに出來た者であります。蝶の卵から出て來るイモムシは、夫れ故、昆蟲の最も古い形態ではないので、バッタの幼い子供の樣に頭、胸、腹が判然として居るものが矢張り昆蟲の先祖の形ちである。夫れを蛙の蝌斗や、エビのノヲプリウス(Nauplius)抔と比較して見るは當らないのである。エビのノヲプリウスは何れのエビもカニも皆經て來る所の形ちであつて、之れ等の動物類は皆一度此の樣な形を經て來つたものであるし、蝌斗も之れと同じで、兩生類の先祖に近い形をして居るものである。夫れだから蝶や蜂抔の仔蟲とは全く違つたものである。さらば如何して此の仔蟲が出來たのであるか先づ蝶の仔蟲と成蟲を見たまへ、成蟲は空中を飛翔して、花を吸收して生活して居るのに、仔蟲は草木の葉に止つて、之れを嚙んで生活して居る。此の二者の生活は此の如く違つて居るのである。夫れ故に其形態も全く違つて居るのである。然し昆蟲は何れも皆始めから此んなものでは無かつたらう。其の始は今日のバッタの樣であつたでせう。卵から出て來た子供が、親と同じ樣な生活をして居て、同じ樣な形態であつたでせう所が外界の有樣其他の爲めに、子供が親と違つた生活をする樣になつた……、其の原因は何んであつたか、固より急には明りませんが……すると其形態は次第々々に新しい有樣に應化する樣になつて、親と全く違つた形態となつた。然し之れは發生する間に這入つた橫路であつて、充分に成長するには本路に戻らなくてはなりません、蛹蟲期はつまり橫路から本路へ戻る間である。然し全變態をする昆蟲の仔蟲は、其の生活する所の特別な有樣に應化したものであると云ふ事は、同じ鱗翅類の仔蟲でも、木の葉に止まつて居るものと、木幹內に居るものとは其の形態が違つて居る計りでなく、丸で違つて居る。蜂でも其の仔蟲が蝶と同じ樣な生活をして居るものでは(鋸蜂)、蝶の仔蟲と同じ樣な形をして居ることである。此の點は最も面白い事で、蜂では一方には今の鋸蜂仔蟲の樣に口器も、目も、足も能く發達して居るものがあれば又蜜蜂や何かの樣に食物が充分にあるものでは、肢もなく、感覺器もなく、僅に口と肛門とをつけた樣なものがある。又蠅の類でも同じ樣で、肉の內で生長する蛆蠅は、目もなくて活潑な運動をせないのに

第一圖　蠅の皮下膜の一部にして(イ)は成蟲盤、甲乙は模型圖、丙は顯微鏡にて見しもの(ニ)はファゴサイトにして(ハ)は仔蟲の皮下細胞を食するを示す

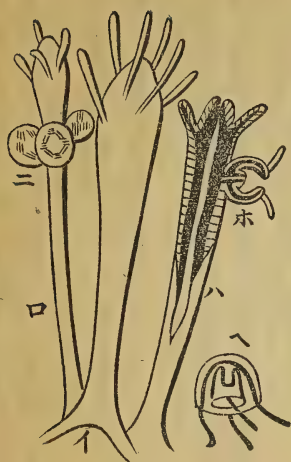
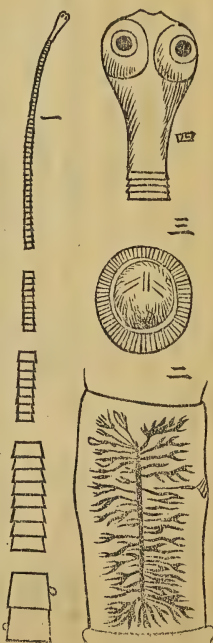
水中で生活する蚊の仔蟲には立派な目があつて、大層活潑に游泳するものがある。之れに關して面白い事實がある。完全變態をする昆蟲の發達を詳らかに調べると、其体内の色々の組織中に特別の細胞があつて、仔蟲が成長して蛹化の時節に近くなると此の細胞が殖へて、遂には成蟲の形を造るのである。さうして此の細胞が殖へて來るのと同時にファゴサイト(Phagocytes)と云ふて、脊椎動物の白血球の樣な細胞が体内に澤山出來て來て、今迄仔蟲の組織を造つて居た細胞を食つて仕舞ふのであります。夫れで是れ等のファゴサイトの細胞が古い組織を食つて行くのと同時に、今の特別な細胞が段々殖へて來て、成蟲の組織器官が出來るのであります。此の特別な細胞は、一千八百六十二三年頃にワイズマン先生が蠅の發生期中に發見されたので、圓盤形をして居るのであるから成蟲盤(Imaginal Disk)と云ふ名を與へられましたが、其の後何の昆蟲でも完全變態をするものには皆あるものだと云ふ事が分つて來ましたので、非常に面白い事になりました。

處が御承知の通り、我々の身体の組織細胞は始終變化して行くもので、古いものはヅン／＼消失して、新いものがドシ／＼出來て來るのである。完全變態の昆蟲では、新に出來て來る細胞の或るものが幾つもの塊りになつて体内に潜伏して居て、發生の或る時期が濟むと急に增加して發生をするのである。之は前にも云ふた樣に、昆蟲が發生中に横路に這入つたからであつて、夫れが爲めに成蟲の組織器官を造る爲めのものが別になつた譯である。さうすると云ふと、成蟲盤は全く完全變態をさする爲めに出來たもので、夫れがなければ變態は出來ないのである。夫れで又、これ等昆蟲の變態が蛙の變態と大層違つて居るのである。固より蝌斗と蛙とは大層違つて居ますが、其の發生を續けて見ると漸々と變化して行くので、完全變態の樣な急な變化はないのである。完全變態に蛹蟲期の這入つたのは、全く之れが爲で、不變態か又は不完全變態をするものでは、仔蟲と成蟲とが同じ樣な生活をして居るか、又は同じ樣な生活をして居ないでも其の生活の變化も漸次に違つて來るのであるから、始めから眞直くに行くか、又は横へ回つても余り遠く逸れないのである。夫れ故本

一　成蟲　仔蟲
二　成蟲　仔蟲
三　成蟲　蛹　仔蟲

第二圖　仔蟲より成蟲に進む方向
(一)は不變態類　(二)は不完全變態類
(三)は完全變態類

道に移るにも、別に道を變へないのでも宜ろしい譯である。圖を書いて見ると、不變態のものは此んなもので（第二圖一）、不變態は此の樣で（同圖二）、完全變變態をするものは此の樣に（同圖三）、違つた方向へ進んで行つたのである。夫れであるから直ぐに成蟲の方の路に移ることが出來ない、後に戻つて出直さなければならない、之れが成蟲盤の細胞から發生するので、夫れをする間が蛹蟲期である。

斯ふなつて見ると、完全變態蟲では、成蟲は仔蟲から續ひて來る樣なものではあるが、其の個體は全く別のものであると云ふても良い樣なものである。仔蟲の發生中に或る細胞が別になつて殘つて居て、之れが發生して成蟲となるのであるから、仔蟲の體で仕事をして居た細胞とは違つたものである。さうすると之れは又生物界にある他の現象と似た所がある。此の他の現象と云ふのは別の事でもないが、世代の交順である。御承知の通りサナダムシだのクラゲだのは、卵子から直ぐに出來るのでない、サナダムシでは卵子から頭と頸とが出來て、眞田紐の樣な長い節々は、此の頸の處から出芽するのである。ヒドラクラゲが卵子を生むと、夫れからヒドラの樣なものが出來て來て、其の體面に枝が出來る樣に、クラゲが出來、其のクラゲの體內に又卵子が出來るのである。夫れであるからサナダムシでは、節々は雌雄で姓があるので、其の生んだ卵子から頭と頸とが出來る、頸からは無姓で節が出來るのである。完全變態蟲も之れと同じ樣で、其の產んだ卵子から仔蟲が出來て、成蟲は無姓に其の体から出來るものである。即ち之れ等昆蟲は世代の交順をして居るので、仔蟲期は有姓生殖で出來た無姓期で、成蟲期は無姓生殖で

第四圖　ヒドラクラゲ
（イ、ロ、ハ）は卵より出來た。ポリプ躰、（ニ、ホ）は無姓にて出芽したる水母躰、（ヘ）は其浮き出せしもの

第三圖　サナダムシ
（一）は全形の一部、（二）は片節一個にて其内に見ゆるは卵を以て充たされしもの、（三）は熟したる卵、（四）は頭、（一）の上部と（四）とは有姓で出來た無姓世代、（一）の下部の節と（二）とは無姓で出來た有姓世代

出來た有姓期であると考へても、何にも不都合はないのである。斯ふ考へると、もつと面白い事は、完全變態蟲の仔蟲と成蟲とは能く別々に變化することがある、コナラの尺蠖抔で、綠色と褐色の仔蟲があるものがあるが、其の成蟲は同じ事である、之れ等は仔蟲と成蟲とが異つた個體であると考へると、甚だ面白いので、又能く說明する事が出來る。餘り急に御話をしたので少しも纏つて居りませんが、こゝらで御免を蒙りませう。

## ◎枯穗剪取の要は時期を誤らざるにあり

岐阜縣惠那郡　三宅幸三

編者云、本篇は昨年十二月岐阜縣昆蟲學會席上に於て、三宅氏が三十七年害蟲驅除監督の傍、螟蟲蝕入莖に就て調査したる事項を演述せられたるものなり。

螟蟲驅除に、採卵法の効果は謂はずもがなでござりますが、彼の枯穗剪取法も頗る簡單明瞭な方法で、現今の狀況から一般當業者の實施を見るには、優に採卵法に匹儔すべき價値があると自分は信じて居ましたが、昨年、縣廳並に縣農會の囑托で、各方面へ出張して、驅除監督の傍ら、親しく實地に就て、督勵の難易、實施の効果、或は該蟲の經過、被害の狀況等、種々の方面から觀察して、益々其所信を確める事を得ました。猶何れの塲合もですが、特に此の枯穗拔は時期を失せざる樣心掛くるが最も緊要である事を、深く感じた次第であります。固より調査專務でないから匆卒の際麁誤は免れませんが、少しく實見したことを述べて御參考に供します。

(一)八月二十五日、東濃地方惠那郡中津町附近各所に於て、百本の蝕入莖を取り、之を調査しましたに其內蟲の存在せざるもの七本、一莖中最も多く存在するもの百十三頭、平均一莖二十九頭となりました。(二)九月一日西濃地方へ參り、養老郡高田町附近南方に於て同樣調べました、內存在せざるもの五本、一莖中多きは實に驚く可き二百七十九頭を算し、合計五千九百三頭、平均一莖五十九頭となりました。是れは餘り多數で、寄生蜂の關係もあろうと。(三)翌二日、同高田町北方半里計りの地に於て、同樣取調をなすに、九本の不在で、多きは一莖中百三十一頭、平均二十三頭の所在を見ました。其後(四)九月十日、安八郡大垣町附近並に中川、三城、南杭瀨等各所に於て十本宛、計百本を集め、之を調査しましたに、內存在せざるもの十九本、多きは百十三頭、平均一莖十三頭の割合、其後十日を經過し(五)九月

二十日同地に於て、同様調査をなすに、不在のもの二十九本、最も多きが三十三頭、平均四頭二、五でありました。

以上第一回より五回迄、漸次時日を經るに從て蔓延し、最初二三回は、殆んど一莖の切取りは一の卵塊を採るに等しき効果あるを考へられました。最も是れは、枯莖なれば用捨なく片端から集めたでなくて蝕入後間もなく、未だ全部枯凋せざる位のものに就て調べましたのであります。

最初惠那郡の分は、同地方抽穗をなし、俗に鈴花盛りで枯穗最も見易く、蟲の經過も驅除の好時機と察せられました。次に二回、三回、高田町附近は其當時穗を含み、一二の抽穗點々見る位で、未だ、枯穗拔取と謂ふよりは、蝕入莖(枯莖)切取と謂ふが穩當なる位の時で、恰も二化の幼蟲孵化して間も無く、多く一卵塊のもの一莖に集まり居るらしく見受けられ、最も驅除の好時機に差掛つて居ると考へました次に第四回大垣町は、抽穗、開花の最中にて、枯穗見易き時でありましたが、大變最初より蔓延したる觀がありました。第五回は傾穗の頃で、十日以前に比して非常に蔓延し、最初の一本が一坪以上蔓がりたる位でございました。其后半月程同地方を巡回して居ましたが、多忙の爲め、遺憾ながら調査しませんでしたが、歸る頃は既に一莖に一頭を得るが覺束なくで、全然枯穗にならずも稃が多くて、根元は蟲糞を充し、田面一帶イヤナ色に變りて、最早到底不可能の個所を澤山見受ました。

諸君、今試みに一つの枯穗を取て之を啓き、其中の無數の蟲を示し、其恐るべきを説き、驅除の要を諭さば、成る程と、其説の甘きに感ずる人は澤山ありませうが、進で之が驅除を努むる人は幾人ありませう。斯くも蟲は迅速に蔓延します、斯くも見易き方法に於てすら未だ十分に行はれません、諸君の責任は誠に重大でございます。

突然、名和先生が何か御話をせよとの御言葉により、下らぬことを申上まして失禮いたしました。

## ◎昆蟲採集奇談(幻燈使用)　其一

昆蟲翁說明
鳴蟲女史筆記

(一)夜中採集の燈火を天狗の火とあやまる

今を去る二十餘年前、私が岐阜縣中學校に奉職して居りました頃の事ですが、私は每夜々々、此の金華山へ夜中採集に參りました。其頃は只今とちがつて、蛾は誠に多く來ますから、已れ忘れて、時のうつ

ろをも知らず、採集をいたして居りました。所がこの岐阜市中で、毎夜々々天狗が火を燈すと申して、しきりに大さはぎになりましたそうです。私は其樣なことは少しもしりませぬから、相變らず毒瓶と採集箱をもつて採集に出掛けました。すると或る時警察から、學校(中學)へ私をよびに來ました。それ故校長さん等も、非常に心配されましたが、私も別段惡い事はした覺えはないに、警察から用とは、一体どうゆう事かしらんと、しきりに心配をいたしました然し使がきましたから、私はこは〳〵警察迄參りました所が、警察で「御前は毎夜金華山で、昆蟲採集に行くそうなが、それは至極結構であるけれども、市中で、御前が金華山へ火をともして採集に行くのを、天狗が火を燈すとしきりに云ひ觸らして、今ではそれがため大騷ぎであるから、學術の研究なればそれを止めよとは云ふのではないけれども、此後採集に行くときには、必ず一寸こちらへ、屆けて貰ひたい」との事で御座いました。そこで私は初めて、市民が天狗の火だと云ふて騷ぐ事を知りましたし、又一々警察へ屆けて採集に行く樣なことは、甚面倒でしたから、其後は少しも參りませんでした。何分今とはちがつて、世の中の人が少しも蟲と云ふ感念がないのと、又蟲の事を學んだ人が少ないとで、つひこの樣な事を云ひ出しましたものでありませう。實に馬鹿らしい事でありませんか。(未完)

夜中採集の燈火を天狗の火と誤認するの圖

（十三）

## ◎昆蟲文學

弔蟬　　華南　小隱

憐汝與秋老。瘦軀不耐風。淸吟一朝罷。委身堆葉中。賦詩聊憑弔。幽砌斜日紅。

南山曰。情思惻惻溢紙面。微蟲可以瞑矣。

蝨

甘貧半風子。狀貌太如愚。寵辱功名外。英雄是友乎。

蟋蟀　　渡邊小一郎

月白殘宵傍小亭。四邊蟋蟀靜中聽。紛紛白露無聲濕。一草一花秋滿庭。

雜詠

※　　神村直三郎

日の光いかがよふごと櫧の葉に風にきらめくうらぎんしゞみ

葉の盡きて梢さびしき森の中の朝日に飛べるむらさきしゞみ

世の中はかくこそありけれ置く霜に衰へ果てし醜いなごまろ

※　　うしほ

いや燃えに燃ゆるほどこのあたゝかきこの間の蠅や冬を越ゆらし

窓の日の射さすくりやの梁のから鮭めぐり飛べる蠅かも

七葉八葉のこれる冬のもみぢばの庭の日和に蝶のひら／＼

※　　安田志紀臣

藥草干したる椽に冬の日のうらゝにさして蠅の飛び居り

朝日てる岡の南べあたゝかに歸り花咲き蜂飛び交へり

雪久に降らざる庭の白菊のすがれし花に虻なく淋し

※　　ふもとのや

茅の屋のたるひの雫かげさして蠅飛ぶ椽の朝日うれしも

朝日さす疊の上に置く鉢の臘梅に來し蜂なつかしむ

※　深井　青海

冬待つと粗朶に樵りにし古松の苔にひそめる松毛蟲かな

南居る秋の日かげを暖かみくぬぎかめむしのぼり下りせり

※　祖山伐木韵

松蔭におとなう庵篭を古み冬蜂飛びぬ人は居ずして

柴垣に雑りて立てる椋の樹の冬され梢におきくむし見つ

※　坪内　華外

二畝ある菜大根の畑こほろぎに打ち荒らされて又蒔きにけり

うなゐ二人芋の畑路右に折れて左に折れて蜻蛉追ふ見ゆ

※　所　嘉吉

病む母に藥すゝむる夕ぐれの風のをりをり蟲の音きこゆ

おくつきの徑を覆ふ萩が根にこほろぎ鳴けり淸き月夜に

みどり

朝日浴み亭をうむ人の背に顔になほ群れ飛べる冬の蠅かも

野の茶屋のあかり障子に冬日さし動くともなく蠅ひとつ居り

龍蝨

げんごらうやがて小蝦を襲ひけり　歸麓園
龍蝨瓶に入れけり水濁る　同
水亭の火や飛び來る龍蝨　同
龍蝨身をさかしまに沈みけり　四澤
さでの目を洩れずもがくや龍蝨　同
げんごらう菱取る舟に上りけり　晃東
川狩の獲物の中やげんごらう　城東
仰向に龍蝨あがきもがきけり　四山
電燈にたま〳〵來るやげんごらう　青海子
くひ荒らす田飼の鯉やげんごらう　三川
龍蝨の甲を嘲る田螺かな　同
龍蝨にくはるゝお玉杓子かな　同

## ◎害蟲驅除豫防實見錄（其一）

名和昆蟲研究所助手　小竹　浩

予は本誌前號を以て、皇太子殿下奉献中等教育昆蟲標本の說明を終りたれば、玆に筆を改め、害蟲驅除豫防實見錄てふ題下に、高等小學校兒童の解し得らるゝ程度に於て、重要作物害蟲を始め、一般害蟲の驅除豫防法を照會せんとす。然れども、害蟲の驅除豫防たる、其蟲の習性經過を知るに非らざれば、適

當の方法を案出する能はざるや明かにして、是等幾多の蟲類に對し、一々其適法を求むるは、到底予輩の能ふべからざることなれども、軍國多事の今日、軍資の充實を謀らざるべからざるの秋に於て、適法なしとて袖手傍觀するが如きは、斯道に忠實なるものといふべからず。近來害蟲驅除の聲、益々大なるにも係はらず、尙未だ自動的の驅除に出でず、多くは再三督勵の後、止むを得ず手を下す如きは、是れ經過方法等の、未だ一般農家に知れ渡らざるの致す處にして、不完全の方法も知らざるに勝れるを信じ茲に奮て各種の方法を記述せんとす。讀者諸君、幸に各地方特殊の害蟲は勿論、一般の驅除方法使用器具等を照會あらんには、唯に予の幸福のみならず、廣く農家を益する至大なるを信ずると同時に、深く諸士に向て之れが報導の勞を吝まざらんことを、熱望して止まざるなり。

## 稻作害蟲

（一）イチノズヰムシ　幼蟲は（卵より出でたる蟲をいふ）稻の髓部を食害するを以て、イチノズヰムシといひ、又一年に二回發生するを以て、二化生螟蟲ともいふ。成蟲は（翅が生へて飛ぶ時代を成蟲といふ）翅の色藁色をなし、細きを以てワライロホソバと稱す。六月頃、第一回の成蟲發生して、稻葉の表面上方に產卵す。孵化（卵より蟲の出づるを孵化といふ）すれば、其の幼蟲は、直ちに髓部に喰ひ入り、八月中頃、莖中にて蛹（幼蟲が十分大きくなれば食を止めムツゴとなる之れを蛹といふ）となり、次で第二回の成蟲發生し、又稻葉に產卵す、（第一回の時とは違ひて多く葉の裏の下方に產む）孵化すれば、直ちに多數集りて莖に喰ひ入り、漸次他の莖に移る、故に、其害の甚しきものは白穗となり、或は白穗とならざるも、此の害の爲めに程よく實を結ぶ能はざるを以て、大に收穫を減ずるものなり。其幼蟲は、寒くなるに從ひ下方に喰ひ入り、冬は刈り取りたる藁、又は稻株の莖中にて越冬し、翌年五、六月頃蛹となり、次て羽化（蛹より成蟲となるを羽化といふ）するものなり、中には冬の間、氷の爲め、或は雪等の爲めに、稻株等に居るものは皆死する樣に考ふるものあれども、ズイムシは寒氣には甚だ強きものにて、永く氷の

ズヰムシの卵塊

ズヰムシノ稻莖に蟄伏の圖

中に閉ぢこめらるゝも、中々死するものにあらざれば、苅り取りたる藁の中に居る蟲の如きは、決して寒さの爲めに死するものにあらず、年々發生して、稻を害するものと心得ふべし。

驅除法　卵を採るべし、先づ苗代に於て、能く注意して、其稻葉の表面に産む卵を採り、本田に於ては、田植後四五日を經て、本田を見廻り、卵を採り後又五六日を隔て三四回採るを要す。然れども苗代田に於て卵を採るも、本田に於て之れを採らざる人多きは、大なる誤にして、必ず本田の採卵を怠るべからず。而して、其採りたる卵は、吾々の味方をなす、ズヰムシタマゴヤドリバチが、寄生して居るもの多ければ、其卵を無闇に潰したり、燒く樣なことをなさず、益蟲護器の中に入れ置くべし。

(イ)ズヰムシの成蟲　(ロ)幼蟲　(ハ)蛹

益蟲保護器とは、害蟲丈は死する樣に仕かけたる器械にして、之れ無きときは、深き桶に少しく水を入れ、其の中に石油を少し入れ、別に其桶より小さき、且つ低き籠樣のものを桶の中に入れ、籠の底が水面一二寸隔つ位に釣り、其籠に採集せし卵を入れ置くべし。さすれば孵化したるズヰムシは、這ひ廻る內に、石油の中に陷りて死し、ヤドリバチは飛ひ去りて、又他の螟蟲卵に寄生するものなり。然れども、ズヰムシも風の爲めに吹き飛ばされて、桶の外に出づることあれば目のあらき寒冷紗、又は蚊張の切れ等にて、口を覆ひ置くを良しとす。且雨天にも、雨の入らざる樣注意すべし。

心枯を切り取るべし　如何程丁寧に卵を採りたりとて、鬼の目にも見殘しとやら。隨分見落しのあるものなり。此見落したるものは、孵化して莖を枯らすゆへ、莖切鎌を以て、心枯れ、又は蟲の爲め赤くなりたるものは、悉く切り出すべし。

莖切鎌の圖

白穗を切り取るべし　第二回の幼蟲は、初め一本の莖に、多數喰ひ入りて白穗となすものなれば、白穗を見れば、直ちに莖切鎌を以て、可成下の方より切り出すべし。若し其時機後るれば、漸次他の莖に移るものなれば、白穗を切り出すは、早き程利益多く、且大部分を驅除し得れども、後るゝ程利益少なく、害蟲の種を、翌年に殘すこと多きものと知るべし。右の如く卵を採ること心枯れを切り取ること、

及び白穗を切り出すこと、此の三つの方法を、能く注意して行ふときは二三年の後には、殆んど螟蟲を全滅し得べし。

## ◉昆蟲實驗錄（五）

靜岡縣　神村直三郎

一〇、中遠の天蛾　中遠の天蛾と申しても、天蛾を網羅したのではない、種類で云へば、此の外にもまだある。これは重に、夕方、月見草の花蜜を、吸んがために、集るものを採集したに過ぎない、中には、室内へ白晝迷ひ入りたるものも、二三ないではないが、これ等は例外で百中の九十九までは、月見草採集の獲物である。余は芋蟲の驅除法として、本年害蟲驅除新報へ、此法を記して送つた、それには八月上旬までに、三百五十余頭を捕たと記したが、十月まで即天蛾の生存期(概畧)中の捕獲數、一人一個所にして、實に五百五十二頭の多きに上つた次第である。今其現出期節と、發生の多少とを、表示すれば左の如しである。

附記、友人某八月下旬に於てクルマスヾメ一頭を捕へ、予は又飼育に於て、多數のウチスヾメを羽化せしめたるも、月見草採集に、緣遠ければ之を加へず。

| 月日 | ウチスズメ | コスズメ | シモフリスズメ | ビロウドスズメ | ベニスズメ | キイロスズメ | セスヂスズメ | エビガラスズメ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五月二日 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 六月十四日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十五日 | 〇 | 一 | 一 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十六日 | 〇 | 一 | 〇 | 一 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 |
| 同十七日 | 〇 | 二 | 〇 | 二 | 二 | 三 | 一 | 〇 |
| 同十八日 | 〇 | 二 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十九日 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 一 | 〇 |
| 同二十日 | 〇 | 二 | 〇 | 三 | 〇 | 一 | 一 | 〇 |
| 同廿一日 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 三 | 一 |
| 同廿二日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 二 | 〇 |
| 同廿三日 | 〇 | 一 | 〇 | 一 | 一 | 二 | 一 | 〇 |
| 同廿五日 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 同廿六日 | 〇 | 四 | 一 | 六 | 二 | 二 | 二 | 一 |
| 同廿七日 | 〇 | 四 | 〇 | 六 | 二 | 二 | 〇 | 〇 |
| 同廿八日 | 〇 | 三 | 一 | 二 | 一 | 〇 | 二 | 〇 |
| 同廿九日 | 〇 | 二 | 一 | 三 | 〇 | 二 | 三 | 〇 |
| 同三十日 | 〇 | 二 | 〇 | 四 | 一 | 〇 | 四 | 〇 |
| 七月一日 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 八 | 〇 |
| 同二日 | 〇 | 〇 | 〇 | 八 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 |
| 同三日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 一 |
| 同四日 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 二 | 一 | 〇 | 一 |
| 同五日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同六日 | 〇 | 一 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 三 | 一 |
| 同七日 | 〇 | 四 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 一 | 〇 |
| 同八日 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十一日 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十二日 | 〇 | 二 | 〇 | 二 | 一 | 〇 | 一 | 一 |
| 同十三日 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十六日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 二 |
| 同十七日 | 〇 | 六 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 八 | 一 |
| 同十八日 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 一 |
| 同十九日 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 三 | 〇 |
| 同二十日 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 |
| 同廿一日 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 五 | 〇 |
| 同廿二日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 |
| 同廿三日 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿四日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿五日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 二 | 二 |
| 同廿六日 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 六 | 一 |
| 同廿九日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 |
| 同三十日 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 二 |

| 種類 | メンガタスズメ | モモスズメ | クロクモスズメ | ヒメホウジヤク | クロスズメ | クチバスズメ | クロホウジヤク | オホスカシバ | ホウジヤク | ヒメクロホウジヤク | ウチスズメ | コスズメ | シモフリスズメ | ビロウドスズメ | ペニスズメ | キイロスズメ | セスヂスズメ | エビガラスズメ | メンガタスズメ | モモスズメ | クロクモスズメ | ヒメホウジヤク |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 七月卅一日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 九 | 〇 | 〇 | 一 | 四 | 五 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 八月一日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同二日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 一 | 一 | 〇 | 四 | 九 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同三日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 一 | 〇 | 一 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同四日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 六 | 〇 | 〇 | 一 | 六 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同五日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 四 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同六日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 五 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同七日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同八日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同九日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 一 | 〇 | 四 | 三 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十日 | 一 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 六 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十一日 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 五 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十二日 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十三日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 二 | 五 | 二 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十四日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十五日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十六日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十七日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十八日 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十九日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同二十日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿二日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 五 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿三日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿四日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿五日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿六日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿九日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 九月二日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同七日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十二日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十八日 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿三日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿四日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 十月八日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同九日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 |
| 同十一日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十二日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同十九日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 同廿七日 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
|  | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 計 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 一七三 | 七 | 五三 | 三一 | 八六 | 一四六 | 三九 | 一 | 二 | 二 | 三 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| クロスズメ | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 |
| クチバスズメ | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 |
| クロホウジャク | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 |
| オホスカシバ | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 |
| ホウジャク | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 二 |
| ヒメクロホウジャク | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 一 |

## ◎京都府加佐郡新舞鶴產の昆蟲（三）（小山彰氏送附）

名和昆蟲研究所分布調查部

(八二)シロホシカノコ(Syntomis fortunei Boisd.)六頭、八月十三日乃至二十九日、一名カノコモンガ又はカノコテフと稱し、翅は紫黑色に白色透明紋を有し、腹部に二條の黃色帶あり●(三〇)ゴマフウスバ(Zeuzera pyrina L.)一頭、八月四日、一名ゴマフノシンクヒガと云ひ、翅は帶黃白色にして藍光黑色の小斑散布す●(三一)コガネマルバ(Monema flavescens But.)一頭、八月五日、翅は黃褐色にして翅尖より斜に二個の褐色線を有す、幼蟲をイラムシと稱し之に觸るゝ時は激しき焮衝を發す●(一九)キイロゴマダラ(Setina flava B. G.)一頭、八月七日、一名ゴマダラキイロガと稱し、前翅は濃黃色にして黑點を散布し、後翅は少しく淡色にして無紋なり●(八七)フタホシカレハ(Philudoria albomaculata Brem.)一名シロヨツボシガと稱し、帶灰暗褐色にして前翅に大小二個の白紋と、翅尖に向ひて走れる灰白色の斜線あり●(一一六)クロウハバ(Amphipyra cervina Motsch.)一頭、八月七日、一名ハネクロガと稱す、前翅黑色にして紫光を放ち紋理を有せず、後翅は褐色にして緣部暗色を帶ぶ●(一一七)シロスヂウハバ(Amphipyra tripartita But.)一頭、八月二日、一名シロスヂガと稱す、前翅は黑色に紫色を帶び二條の白色帶あり、後翅は暗黑色なり●(一一八)モクメウハバ(Amphipyra erebina But.)一頭、八月九日、前翅は帶紅灰

色に暗褐色を混し、前後横線は多少木理狀をなす、後翅は暗灰色にして縁毛は灰黃色なり●(八四)クロクモウハバ(Dinumnia bipunctata But.)三頭、七月三十日乃至八月二十九日、一名クロクモガと稱す、前翅紫褐色にして中央に紫黑色の波形廣横帶あり、後翅は暗灰色を呈す●(八八)シラフウハバ(Sypna achatina But.)一頭、八月二十七日、一名シラフガと稱し、非常に變化多く、通常前翅の中央に白色廣帶を有すれども、或は之を缺くことあり●(二三)オホトモヱ(Nictipao crepuscularis L.)一頭、八月五日、一名オホトモエモンガ又はシラニシキと稱し、大形の蛾にして白條斑と巴形紋を有す●(二四)ヤマトトモヱ(Spirama japonica Men.)三頭、七月二十日乃至八月三日、一名トモヱテフ又はトモヱモンガと稱し巴紋蛾類中最も普通なる種なり●(二五)シロスヂトモヱ(Spirama interlineata But.)一頭、八月六日、大さ前種より稍小さく、前后兩翅に通じ幅廣き白條帶と前翅の中央に巴形紋あり●(八六)ウンモンキマダラ(Remigia annetta But.)一頭、七月十五日、一名ウンモンクチバと稱し、前翅は暗褐又は赤褐色にして濃色の不規則なる條紋あり、後翅は黃褐色に暗色の帶紋又は全く暗色なり●(三二)オホマダラキシタバ(Icterodes jaguaria)二頭、七月二十五日、前翅は灰色にして黑紋を散布す、後翅は灰白色にして外半は黃色を呈し黑斑を並列す●(八四)ユウマダラ(Abraxas miranda But.)二頭、八月十七日、九月六日、翅は白色にして前翅の基部及內角幷に後翅の臀角に近く黃褐斑を有し、暗灰色の斑點及斑條を有す●(三二)ササナミシロバ(Cabera pudecaria Motsch.)二頭、斜條尺蠖蛾亞科に屬し、白色にして暗色點を散布し二個の淡黃條を有す●(八三)ヒメキスヂウスギヌ(Chionomera argentea But.)一頭、九月一日、藍螟蟲蛾亞科に屬し、雪白色にして前翅に黑色を以て微かに縁とれる紅橙色條斑あり●(九〇)ヒメカノコ(Desmia stellaris But.)一頭、九月二日、黑色にして大小白點二三個を分布し、縁毛黑色にして縁角部白色なり●ベニホソバ(Eurhodope semirubella But.)一頭、八月十九日、前翅は灰色、紅色、黃色の三縱帶にて成り、後翅は灰色なり

## ◎福嶋縣河沼郡若宮產の昆蟲(一)(新國豐七氏送附)

名和昆蟲研究所分布調査部

●キアゲハテフ(Papilio machaon, L.)八月十日●ヒメシロテフ(Pieris sinapis Linn.)八月十八日●スヂグ

ロテフ(P. napi Linn.)八月十四日●キタテハ(Grapta C-aureum Leech.)一名オホハヤバといふ、八月五日●ルリタテハ(Vanessa canacede Niceville.)八月廿日●オホミスヂテフ(Neptis alnerna Brem.)●コムラサキテフ(Apatura ilia Hübn.)●ゴマダラテフ(Hestina japonica Feld.)八月十六日●ヒカゲテフ(Lethe sicelis Hew.)八月十二日●ジャノメテフ(Satyrus dryas Scop.)八月一日●コジャノメテフ(Mycalesis perdiceas Hew.)八月十六日●ヒメウラナミジャノメ(Ypthima philomela johausen.)一名ヒメジャノメといふ、八月十五日●ベニシヾミテフ(Chry sophanus phlaeas L.)八月十五日●オホルリシヾミ(Lycaena barine Leech.)五月廿九日●チッチセミ(Melampsalta radiator Uhler)●エゾゼミ(Cicada flammata Distant.)八月●コエゾゼミ(Cicada bihammata Mots.)●テフトンボ(Rhyothemis fuliginosa Selys.)八月十日●ナツアカネトンバウ(Thecadiplax erotica)八月十日●タカネトンバウ(Somatochlora viridiaenea Uhler.)九月廿九日●アカイトトンバウ(Agrion sp.)九月二十九日

◎昆蟲に關する年賀狀　本年各地より當所へ贈られたる年賀狀は、時局の爲めか、其總數に於て前年より少なかりしも、昆蟲に關する年賀狀は、大に其數を增したるを見れば、斯學普及の一端を知るに足らんか。今其中の主なるものを左に披露せん。

●千葉縣印旛郡木下町山崎市平氏の巳の年に因みて、ミノムシが露西亞國旗を蠶食するの畵は着眼面白し●東京駒込羽生道也氏の、瓢蟲が桑の葉に來りて蚜蟲を征伐するの寫生圖は、さすが專門家丈ありて筆勢巧みなり、蓋し瓢蟲女史に宛てられたるを以て特に此の圖案ありしか、又皇軍が露助を征服するの意も含むならんか●靜岡磐田郡岩田村神村直三郎氏は、「滿洲の蚊を喰ひつくす蜻蛉かな。ごみむの初日拜むや塵の山」と詠まれたるは、御題と時局とに因みて面白し●千葉縣印旛郡安食村後藤新左久氏の「謹みなさいよ害蟲驅除と共に益蟲其保護を。賀はしいのは害蟲驅除を、するより豫防の心掛。新米澤山穫るにはいつも、害蟲驅除をばせにやならぬ。年々蒙むる此の蟲害を、共同一致で除かんせ」と、謹賀新年讀込都々逸は農家を導くに妙か●東京本鄉金助町田中五一全健太郎兩氏

の、上に滿洲鳳蝶、中に滿洲の或る城門に日本國旗を揭げ、下に岐阜蝶の寫生圖ば頁好にして其意味亦面白し◉岩手縣氣仙郡小友村鳥羽源藏氏は、蟲界のさま〲と題してミノムシの身をかくして進みゆくさま斥候兵にも似たり、蟻の整々として行くこと歩兵にもまがへ、時に輸卒の行爲さへみとめらる、ケラは旅順攻圍の工兵の面影を存し、ミヰデラハンメウは砲兵の働き十分なり。オンブバツタを騎兵に見立つるはおかしみあれどセミやキリギリス類の樂隊まである昆蟲界こそゆかしけれ」とは、時節柄其の比喩妙なり◉愛知縣西加茂郡擧母町牧野敏太郎氏は、地雷破烈して害蟲軍顚覆するの圖に「愛國之士滅國蠹亦能滅穀蠹」と題し◉神奈川縣農事試驗場內西川豐次郎氏の害蟲數へ歌◉岐阜縣郡上郡上保村鹽田健造氏の蟲歌二十八首◉全縣可兒郡中村西川砂氏の蠶兒が恭賀新年とことほぎたる◉愛知縣寶飯郡赤阪町田中周平氏の蠶の四期を以て姓名を書きたる等は茲に揭げたるを以て別に云ふの要なし◉埼玉縣熊谷農學校內櫻井倚畊氏は、表貴所擴張移轉成功の祝意と題し、「二十年も熟きまことをさゝげてし君がいさほになりし高樓」。觀滿洲及韓國產昆蟲圖影於昆蟲世界と題し「堀內や森の君等がいたづきに高麗唐土のむしゐをも見る。もろこしや韓の蟲繪を見らるゝもみなこのふみぬしの君がたまもの」。偶成と題し、「皇國の同胞をなべて昆蟲といひしおろしやの弱手蟲斧にまくかまきりの及はぬ斧をかざしてぞ秋津蟲には討とられける」の四首を◉所員小森省作氏（步行蟲生）は葉書に步行蟲三種を摺入みて「塵塚のもとに潛めるごみむしも、めでたき御代を祝ふけふかな」の一首を◉石田和三郎氏は、益蟲數種の圖を摺り込みて、益蟲數へ歌を◉谷貞子氏（鳴蟲女史）は、當研究所の建物の一部を下に、上に蟬の圖を摺り込みて「しらべやの松にたのめる鳴く蟲も年の初を祝ふなりけり」の一首をものせらる其他東京岸田松若氏、千葉縣齊藤忠氏、福井縣松原朔郎氏、德島縣鎌田愛藏氏、靜岡縣增田秀雄氏、長野縣淸水藏氏、岐阜縣林完氏、東京府小山彰氏、等尚三十余通の多きに上れるも、餘白なき爲め之れを畧す。

# 謹賀新年

（年賀狀の一）　田中周平

## ◉稻界驅蟲軍指勵官の報告（一月一日名和大本營着便）

此の報告は、岐阜縣惠那郡稻界驅蟲軍指勵官三宅幸三氏より、三十七年に於ける害蟲軍征討の顚末を急報したるものなるが、非常の激戰にて一同の困苦察するに餘りあれば、茲に其全文を發表して、國民否讀者に報ぜんとす。

我驅蟲軍は、東洋の天に翅展して、滿韓の野に蝕入す。世界の害蟲たる露軍掃蕩の準備戰として、農會を蹂躙せる害蟲軍撲滅を企圖萬蟲蟄伏片影を絕ち、害蟲驅除勵行の聲、次第に遠かり、外觀頗る無聊の斯の佳辰に際し、突飛の筆を弄し、以て徒然の士を警醒せんかな呵々。

し、先づ敵の主力たる、難驅不滅の稱ある螟蟲軍に對して攻撃を開始し、農民隊を督して苗代山に短冊形砲台を築き、苗葉山の卵塊砲台に向て、兒童、婦人の二隊を先鋒とし、農民隊是に次ぎ、精鋭なる岡田式採卵砲を以て、各方面より一齊射撃を行ひ、同時に、敵軍に肉薄し、多大の損害を與へたり。之れと同時に我益蟲保護騎兵は益蟲隊の驍將、寄生砲兵の掩護を勗め、採卵砲の効果を一層確實ならしめ、一面捕蛾隊をして撲殺砲を以て、敵壘を縱横無盡に突撃せしめ多數の敵兵を擒にすと雖も、猶頑迷山に連なる舊慣山、平蒔砲台等より、續々敵の援兵來つて我軍を苦しましむ。督勵隊の一部は、頑迷山に向つて攻撃を試みるに、同砲台は、迷信、頑固の二部より成り、幣束隊、祈禱隊、蟲送り隊等固守し。周圍に紙符、木牌等の障碍物を建て、ヨーキデワク（陽氣で湧く）氏の偶發銃無頓着の誤解砲、命令聞かん砲等を亂發し頗る頑强なる抵抗なれば、容易に近寄る能はず、熱誠なる警官隊は有力なる威嚇砲撃を爲し、當局指勵官は、最後の手段たる飭令を振つて側面攻撃をなせしも、漸く其外面丈の占領に止まり、全部陷落に至らず。其吶喊の聲大なるに比し、其効果擧らず、數多の益蟲隊を失ひ益々利あらず。茲に於て、研究隊の一部を以て、實物教示、指導講話の二砲を以て、迷信山に向ひ、昆蟲志想彈を發射して迷信の打破を勗め、有ゆる攻防の方法を講ず。農民隊は、引續き採卵砲を以て、本田城、稻葉砲台に向つて追撃し、拔刀隊は莖切鎌を以て稻莖山頂白騎兵の（白枯穗）現はると同時に、第二化總攻撃を開始し、一刀直に一卵隊に當るの敵を倒すを得、頗る好果ありしを認むそれより敵は次第に消散し、茲に漸く一段落を告ぐ。猶、昨今頑迷山全部占領に至らざるに、研究隊の偵察に依れば、稻葉、莖株、方面蟄伏の敵は、前回に劣らざる優勢を以て、逆襲せんとするの形勢ありとの報告に接す。之れに對する我農民隊は、滿洲の野に健闘の師に比して、毫も遜色なきを期し、勝を全局に制せんと、目下作戰計畫中。

**（年賀狀の二）**

可兒郡中村　西川砂

明治三十八年一月一日

## ●第七回岐阜縣短期害蟲驅除講習會景況

同會は昨三十七年十二月五日より二週間、當研究所內に於て、開會せしが、國家多事の際とて、一切の講習費用は研究所に於て負擔せり。其講習の如きも平時とは大に趣を異にし、普通講話の外に野外實習を爲すは勿論、夜間復習時間の如きは、所員

（年賀狀の三）

# 謹賀新年

一月一日

神奈川縣農事試驗場内
西川豊次郎

四拍子　歌（害蟲數へ歌）　ト調

{ 1131 | 3--43 | 6644 | 3313 | 4431 | 7--・0 | 4431 }
ひとつとや ── ひとびと くじよせよ よぼうせよ　よぼうせ

{ 7--・0 | 6711 | 7643 | 6676 | 7—17 | 6676 | 7—・0 }
よ さくもつ そこなふ こんちうを ── こんちうを

一ツとや人々驅除せよ豫防せよ　作物害ふ昆蟲を

二ツとや殖へ方早く害多き　貝殼蟲は果樹につく

三ツとや外貌(みなり)美しき蝶々は　總て害ある蟲の成蟲(おや)

四ツとや横に這ひ行く浮塵子は　液を注ぎて掃き落せ

五ツとや稻を害する螟蟲は　苗代採卵第一ぞ

六ツとや無數につきたる蚜蟲(あぶらむし)　石油乳劑功利(きゝめ)あり

七ツとや茄子の葉を食ふ瓢蟲(てんとう)は　だましと名くる害蟲ぞ

八ツとや野菜の主なる害蟲は　螟蛉(あをむし)さるむし夜盜蟲

九ツとや金龜子(こがね)の驅除は朝早く　露のある間に拂ひ取れ

十ナとや隣り近邊いひ合はせ　共同防除が大切ぞ

一同必ず列席し、活用問題を提出して之れを討議せしめ、知らず識らずの間に、講習學科を復習應用せしめて其知識を確實にし、科外講話としては、種々なる驅除用藥劑の製法を授けて製造試驗せしむる等、凡て實地問題を主とし、其他昆蟲學上必要なる、實物寫生、青色寫眞の方法、幻燈種板製法等に至る迄、晝夜を分たず、孰れも熱心に豫定の講習を了り、十二月十八日午後一時修業證書の授與式を擧行し、本縣知事に代り鈴木書記官より証書授與ありて、後一場の告辭を述べられ、次で名和講師の訓諭、來賓岐阜縣巡査教習所教官廣瀨警部の祝詞に代ふる演說あり。後講習生總代林完氏は答辭を朗讀し、茲に終了を告げたり。今左に演說の大要、及講習員の氏名を掲ぐ。

## 鈴木書記官の演說

第七回短期害蟲驅除講習會の修了にあたつて、本日この名和昆蟲研究所に於て修業證書をうけられたのは、本縣のため欣喜にたへざる所である。日露開戰以來、皇軍の將士、天候と戰ひ困苦を凌ぎ、攻むれば必ず拔き戰へは必ず勝つ、將士の困苦陣中の悲慘を思ひ、諸士と共に感激なくあたはざる所である。我々は將士の忠勇義烈に對して感激措くあたはざると共に、聖旨を奉戴して軍資をつぐのはなければならん。これ迄實業上においては實に遺憾とする所であつた現に年々害蟲のために、單に米ばかり例をあげても、少なからざる損害を受けてをるが、害蟲驅除豫防規則はあれども、これは驅除せざるものに對しての事であつて、農家は規則をまたずして驅除せねばならぬものであるにも係らず、天候で生ずるとか、人力を以て到

（年賀狀の四）

## 昆蟲唱歌

（塩田健藏作歌）

蟲　形も羽色もさまゞなれど喜び憂ひをわかつは蟲よ
蟲の美　姿もやさしく聲さへたのし蟲こそ我等が命の友よ
益蟲　作物たすけて實りをふやす罪なき小蟲を故なくさるな
蟬　青葉の茂れる木蔭をもれて一しほ涼しく聞ゆは蟬よ
蛬　宿かる人の枕が下にあはれを添へてぞ鳴くきりぎりす
促織　誰にかきせんとはたおり虫のひれもす野原にはたおりつくす
蟻　くろがねとかす夏さへをぢずひれもすいそしみ働むは蟻よ
蝶　七草千草の色香をめでゝ短かき眠りに迷ふは蝶よ
蜂　のきばの小枝に巢をつりかけて我子をはぐくみ育つは蜂よ
螢　影さへ見わかぬ五月のやみに眞玉と亂れてとびかふ螢
松虫　更け行く小庭に人まつ虫の聲々しきるは誰をか招く
鈴虫　草葉にやどれる露ふりをとし涼しく鳴きぬる鈴虫何處
蠶　御國の寶のもとをやいはん玉繭つくりてこもるはかひこ
牛虻　草苅るわらべの引行く駒につどひてうなるは牛虻なれや
蜻蜓　田つくる人を助けて稻に仇なす虫をばとらふはトンボ
蚊　蚊遣の煙のうすらぐ方にあつまり鳴らん蚊の聲しきる
蟷螂　青葉にかくれてかまきり蟲のとびくる蟲をばなぎては倒す
水蟷螂　落散る枝かと立より見れば忽ち逃るは水かまきりよ
蜉蝣　なかよくむれつゝ遊べるひまもはかなく消えゆく蜉蝣あはれ
たがめ　木の葉の浮べる野川の岸にしづかに小魚をねらふはたがめ
浮塵子　仇なす蟲の數々あれど國をば崩すは橫這蟲よ
尺蠖　小枝と見れば忽ち動くかたきを欺く尺とり蟲よ
福俵蜂　稻葉にかゝれる福俵蜂のこもれる小繭をつぶすな小供
螟蟲　雪霜恐れて稻藁中に冬をば過すは螟蟲なれや
瓢蟲　けだかくやさしき姿をなして仇蟲つくすは瓢蟲よ
轡蟲　駒引く人のわすれしものか草苅る野原に鳴く轡蟲
優曇華　三千年毎に咲くてふ花と世の人うたふはうどんげの花よ
蚜蟲　草木の若芽に集りむれて汁をば吸ひ取る此蟲つくせ

本元子作曲

二拍子（ハ）調

爽快に

| 1 | 3 | 2 | 1 | \| | 5. | 5 | 5 | 5 | \| | 6 | 5 | 6 | i | \| | 5 | 5 | 5 | \| |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| カ | タ | チ | モ | | ハ | イ | ロ | モ | | サ | マ | ザ | マ | | ナ | レ | ド | |
| ス | ガ | タ | モ | | ヤ | サ | シ | ク | | イ | ロ | サ | ヘ | | タ | ノ | シ | |
| サ | ク | モ | ツ | | タ | ス | ケ | テ | | ミ | ノ | リ | チ | | フ | ヤ | ス | |

| 6 | i | \| | 2. | i | \| | 6 | i | \| | 6 | 4 | \| | 5 | 6 | 5 | 4 | \| | 5 | 5 | \| | 1 | — | \| | 1 | 0 | ‖ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ヨ | ロ | | コ | ピ | | ウ | レ | | ヒ | チ | | ワ | カ | ツ | ハ | | ム | シ | | ヨ | | | — | | |
| ム | シ | | コ | ソ | | ワ | レ | | ラ | ガ | | イ | ノ | チ | ノ | | ト | モ | | ヨ | | | — | | |
| ツ | ミ | | ナ | ギ | | コ | ム | | シ | チ | | ユ | エ | ナ | ク | | ト | ル | | ナ | | | — | | |

底驅除は出來んなど、思つてをるから、やむなく法律によつて勵行せねばならんのであります。今この未曾有の時局に際し決して法律によつて驅除をする時ではないから、農家が振つて一粒たりとも人間が食ふものを、蟲のために食はれぬ樣にせねばならぬ。本縣下に於て米の收穫を八十五萬石とし、年々其一割以上を害せらるゝとせば、一石拾圓としても八拾五萬圓の損害高である。さるを益々軍資を供給せねばならん此の時期に於て、かゝる莫大の收穫を蟲の爲めに蹂躙さるゝは、實に軍人に對して面目なき次第である。此の時に於て諸君が修了せられたのは國家の爲め欣喜に堪へざる所である。そは諸士が

各郡に歸へられて、今日學び得られたる知識を實地に應用して、害蟲軍征討上、多大なる効果を擧げらるゝことを深く信ずるからである。これを以て、本日の告辭にかへます。終りに臨んで、名和所長を初め、所員の方々が、晝夜を別たず熱心に示導せられたる勞を謝し、尙諸君の健康を祈る。

## ◎廣瀨警部の演說

本日第七回岐阜縣短期害蟲驅除講習終了を告げ、修了證書を授與せらるゝに當り、余も此の席に列するを得たるは實に喜ばしき次第である。私はこれ迄に感じた事を述べて、本日の祝辭に代へ樣と思ふ。

偖私は、明治二十九年と三十年との兩年に亘つて、滿一ヶ年間三河の渥美郡田原町に居りましたが、丁度此時は全國に浮塵子が發生した時で、郡長始め、町村長等はこれ等の驅除に全力を擧げられて、私等も一所に監督に行つた所が、私等は如何して驅除してよいやら一向知らなかつた、幸にも渥美郡には、現今米國へ留學して居らるゝ岡田虎次郎君、其他中村義上君などの斯道熱心家が居られまして、郡役所員や、役場吏員、巡査等に其驅除の方法を敎へられたから、私等も漸く知ることを得て、一生懸命に驅除を奬勵し、又同郡の野田村には、林又助君といふ熱心家もあつて、非常に盡力せられ、其結果三十年の浮塵子大發生の時でも、渥美郡は害を受けた處は少なかつたのである。如斯渥美郡の害蟲驅除の餘程都合よく行はれて居るのは、岡田君や中村君が、官民の中間に立ちて、双方へ都合能く油を注がれるからである。私は其田原町に居つた頃は名和先生に御目に掛つた事はないが、豫て御高名を承り、且渥美郡へ折々講話に御出下された事も承知して居りまして、岐阜縣地方は害蟲驅除が一等地を拔きて程能く行はれて居るであらう、岐阜縣民は實に幸福であると、心潜に羨んで居つたのである。其後私は寶飯郡御油町へ來ましたが、其年の七八月頃に出水があつて、後同郡の鹿管村に、稻の葉を鎌で切つた樣に害をする蟲が付きましたが、それを巡査が瓶に入れて、役場及び郡役所へ持つて來ても不明らんから、遂に縣廳へ持つて行つて、始めて夜盜蟲であるといふことがわかつた。夫れから有志者が、昆蟲學思想の普及を圖らればならぬと云ひかけた所で、同郡のホンノが原と云ふ所の、松の樹に害蟲が發生したから、桑富村等は、町村長等協議の上、一升捕つたら幾らと云ふ工合で、小學校生徒や、夜學會員などの力を借りて驅除したから、大抵害蟲は驅除したが、一時は非常な騷ぎであつた。其後私は三十二年に本縣へ來まして、惠那可兒に三年居つて大に感じました。三河の渥美郡は半島であるが、よく害蟲驅除は行はれてをる、例へば、老人が蜜柑に蟲がつくとて、蜜柑の樹に雜巾をかける位であるから、害蟲も自然少ない、されども、東濃では一向害蟲驅除は行はれてをらんのに驚きました。又本年の八九月頃であつたが、稻葉郡の或地方へ行つた時、農民が、害蟲を驅除して米を多くとると、小作は、地主へ多く年貢を出さればならんから、少し位蟲に食はれても、掟米を減じて貰へばよいと云ふてをつた事を聞きました。又武儀郡では、カツムシは風が吹くと出來るものであるから、驅除したとて効はないと云ふてをるから、當局者は、色々說明されても一向承知せんのみならず、イチモジセヽりとやらの卵などがあれば、一粒拾錢で買ひましようとの事で、遂に當

局者と賭が始まつたが、無論當局者は勝を得て、頑固なる某も、大に是れ迄の迷信を覺り、途に賭金の代りに、標本箱を寄附したと云ふ話をきゝましたが、實になげかはしい次第である。渥美郡などは農民が質朴であるから、少しでも道理のあると思ふことは、直ちにそれを實行してみる、實行すれば、利益があるから益々實行すると云ふ次第である。それに反して、此邊は近くに先生があつていつでも御話が聞けると思ふから、つひ粗末に思つて意外に發達せんので。燈臺下暗しの比喩の通りであろうと思ふ。幸ひにも講習生諸君は本縣の御方許りであるから、渥美郡の岡田君や中村君の如く。農民と役員との間にたゝれて、講習中に得られた知識を實地に應用し。又能く他人にも奬勵されたならば、必ずよい結果を奏するであろうと云ふ事を喜んでをります。蕪辭を述べて、祝辭に代へます。

## 第七回岐阜縣短期害蟲驅除講習會々員名簿

〔○印アルハ欠席者〕

| 組名 | 役名 | 郡名 | 町村名 | 族籍 | 氏名 | 生年月 | 履歴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第壹組 | 級長 | 加茂郡 | 太田町 | 平民 | 林完 | 慶應三年三月 | 八幡警察署詰巡査部長 |
| | | 羽島郡 | 中屋村 | 平民 | 小島松次郎 | 明治十五年七月 | 高等小學校卒業 農事講習會修業 |
| | 組長 | 郡上郡 | 牛道村 | 平民 | 猪俣重保 | 明治十九年三月 | 高等小學校卒業 牛道村役場書記 |
| | | 稻葉郡 | 岩村 | 平民 | ○大野利吉 | 明治二十年三月 | 村役場雇書記 |
| 第貳組 | 組長 | 山縣郡 | 嚴美村 | 平民 | 山田政一 | 明治八年十二月 | 高等小學校全科卒業 農事ニ從事ス |
| | | 惠那郡 | 武並村 | 平民 | 佐々木倉一 | 明治十八年十二月 | 小學校准教員 |
| | | 郡上郡 | 川合村 | 平民 | ○宗廣齋次郎 | 明治二十一年七月 | 川合村役場雇書記 |
| | | 山縣郡 | 嚴美村 | 平民 | 和田重義 | 明治二十二年六月 | 高等小學校卒業 |
| 第參組 | | 武儀郡 | 小金田村 | 平民 | ○後藤貞吉 | 明治五年六月 | 農事講習會修業 小金田村會議員 |
| | | 揖斐郡 | 西郡村 | 平民 | 山村亮 | 明治廿年一月 | 高等小學校卒業 岐阜縣立農學校修業 |
| | 組長 | 本巣郡 | 西鄉村 | 平民 | 松野耕一 | 明治十九年三月 | 高等小學校卒業 農蠶講習會修業 |
| | | 稻葉郡 | 島村 | 平民 | 藤井豐 | 明治二十三年二月 | 養蠶講習會修業 |
| 第四組 | | 稻葉郡 | 則武村 | 平民 | 高橋種吉 | 明治九年二月 | 農事講習會修業 農業ニ從事ス |
| | 組長 | 不破郡 | 關ヶ原村 | 平民 | 日比眞次郎 | 明治十八年二月 | 高等小學校卒業 農商業ニ從事 |
| | | 羽島郡 | 下中島村 | 平民 | 小川哲齋 | 明治十九年二月 | 岐阜縣岐阜中學校卒業 |
| | | 土岐郡 | 稻城村 | 平氏 | 勝股悅次 | 明治十九年七月 | 元農業補習學校代用教員 |

### ◎青柳浩次郎氏の來所

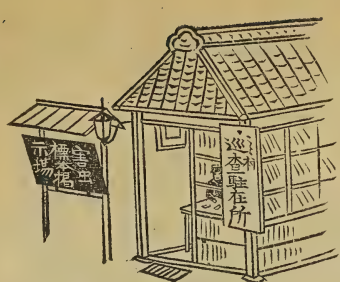
箱根養蜂場長青柳浩次郎氏は、昨年十二月十四日、三重縣農會の主

催にて、津市に開設の養蜂講習會へ出張の途次、當所に立寄られしが、時宛も第七回岐阜縣短期害蟲驅除講習開會中なりしかば、特に一塲の談話を乞ひしに、快く承諾せられ數時間に亘り頗る有益なる講話ありたり。今其講話筆記を得たれば、次號より本誌に掲げ、廣く其利益を頒たんとす讀者幸に諒せよ。因に記す、同氏より左の通報ありたるが同講習會景況の一端を知るに足れば、其全文を照會す。

謹呈、昨日は參上過分の御厚遇を蒙り奉萬謝候、養蜂講習會は意外の盛況にて、申込者百名以上に及び候も、會場狹き爲め其中七十名を許せし由に候。尚詳況は閉會後御通報申樣、農會へ申置くべく候。頂戴致し候昆蟲世界拜見甚た愉快を感じ候、他の欄は申す迄もなく、昆蟲文學中浮塵子、蟷螂の俳句無邪氣のもの多く見受けられ、昆蟲熱心家の吟多きは益々面白く拜見致し候まゝ、小生も一句、然し十七文字の法則に合ふや否やは素より知らず、御笑草までに「わらべらの棒もてはろふ浮塵子かな」「蟷螂の斧よけて行く野路かな」（浮塵子たる勿れ蟷螂たれ、無心の童子に棒もて掃はるゝと、有心の人に路を讓らるゝと、蓋し其差幾何ぞや）尚次回の課題に、冬蜂とありたれば、蜜蜂に付一句「蜜蜂の心やすきや冬籠り」御一笑下され度候。

（年賀狀の五）此の年賀狀は當研究所が　御題に因みて製したる裝飾用昆蟲標本を印刷したるものにて山と霞とは各種のコガネムシを研究所はミチヲシヘを以てミカボテンタウムシを窓に擬し巳の年に因みてヘビトンボを配し之れに次の俳句を入れたり「元日や御題にかなふ金華山」

◉鳥取縣東伯郡の害蟲驅除講習會　同會は東伯郡農會の主催にして、本月五日より一週間開會の筈の處教育者の入會多きを以て、其便を圖り、三月廿日頃より開會することに決したりと。而して、全國害蟲驅除講習生竹信虎藏、岡野庫八郎の兩氏之が講師を囑托せられたるよし。

●特別研究生の入退　特別研究生として入所せられし三重縣山内甚太郎氏は、豫定の通り四ヶ月間の研究を終りしを以て、客月廿九日、當所長より証明書を授與せられ、谷貞子氏は二ヶ年の豫定なりしも、都合上一ヶ年に短縮せられしを以て、山内氏と同時に証明書を授與せられたり。而して岐阜縣馬淵治郎氏は、一ヶ年の豫定にて、既に期滿ちたるが、尚一ヶ年繼續研究を希望して、其豫定期日の變更を申出でられ、其他高知縣長岡郡新改村穗岐山巖氏は、六ヶ月間の豫定にて十二月十日より、愛媛縣周桑郡石根村清水森三郎氏は、三ヶ月間の豫定にて十二月十七日より、三重縣安濃郡櫛形村野田彌一郎氏は、一ヶ月間の豫定にて本月一日より、兵庫縣佐用郡久崎村井口宗平氏は、一ヶ月間の豫定にて一月五日より、孰れも應用昆蟲學研究の目的を以て入所せられ、目下研究中にして、尚申込中のもの數名あるが、最早移轉工事も落成して、諸事略ぼ整頓したれば、今後研究者にとりては、餘程好都合なり。

●警察官と昆蟲學　目下の現情に於て、害蟲驅除の好果を得んとせば、遺憾ながらも警察官の力を借るにあらざれば到底望みなきもの丶如し。已に必要とせば、是非共警察官の昆蟲思想を養成することは、實に急務と云はざるを得ず。本誌已に是等のことに就て多少述べたることあれは讀者の能く知らる丶所なり●坂口岐阜縣警部長の熱心に依りて、巡査教習所に昆蟲學の一科を加へてより、已に其第一回の卒業生を出し、現今は第二回の授業中なりと云ふ。尚岐阜警察署部内の巡査を毎月二回宛招集して、漸次昆蟲學思想を養成するの計畫ある由、實に美擧と云ふべし●是迄巡査の害蟲驅除監督出張に對する費用は皆無の處、岐阜縣會は明年度より特に一千圓の經費を支出するに、滿場一致を以て可決したり、是等は酒本第四課員の盡力とは云ふもの丶、全く必要を感じたるを以てなり。深く警察官の記憶されんことを望む●前號の蟄蟲寢物語の内に、富山縣巡査駐在所の揭示場に害蟲標本云々のことを記し置きたるに、今茲に新農報中にありし圖を揭げて讀者の參考に供す

●長期講習生鈴木彥治氏の入營　第二回岐阜縣長期害蟲驅除講習生鈴木彥治氏は、入學中非常なる熱心を以て斯學研究に餘念なかりしが、去月廿四日、突然嚴父急病の來電に接し、早速歸鄕の途に就きしに、看護の暇もなく醫藥其効を奏せずして、遂に永眠せられ、泣々野邊の送りを濟まして家に歸り見れば、又もや自身は動員の令下り、廿四時間以内に入營せざるべからざる場合に立至り、家事

上の事は年若き弟、及親戚に依賴して入營の途に上られたり。其途次當所へも立寄られしを以て、所員一同及研究生等は、滿腔の同情を以て送別の式を擧げて之を送りたるが、同氏の熱心は斯の如き場合に至りても少しも亂れず、父の永眠は悲むべきも是れ天命なり、今より國家の爲に大に盡すべき時期來れり殊に出征後は、滿洲の昆蟲を調査する事を得るは余の本望なりとて、潔ぎよく入營の途に就かれたり。

◉**岐阜縣昆蟲學會第七十三回月次會記事**　同會は例により、本月七日午後一時より、當研究所樓上に於て開會し、名和副會頭の開會の辭に次で、第一席石田和三郎氏は、最近發刊の各府縣農會雜誌、及博物學雜誌中の昆蟲記事に就て一々短評を試みらる。第二席名和副會頭は、三十八年度昆蟲界の豫想と題し、昨年の害蟲驅除費は、一般に削除せられたるも、意外に驅除の好結果を收めたるは、是れ非常の場合に非常の手段を以て事を處したる結果にして、此の非常の手段としては、警察官の力を待つの効多大なるものなれば、岐阜縣巡查教習所に、昆蟲學の一科を加へられたるは大に喜ぶべきことなり、加ふるに縣會は滿場一致を以て、警察官の出張旅費として新に一千圓の支出を決議したる如き、惜に三十八年度に於ける我應用昆蟲界は、大に面目を改むべきこと、及び當所の採るべき方法の一端を述べられ、一先づ休憩して、一同茶菓を喫しながら雜話をなせり。後第三席岐阜縣巡查教習所教官廣瀨警部は、明治三十八年と題し、第一日に旅順の敵軍開城降伏の報に接し、第三日には　皇孫御降誕の吉事あり、實に國民の一同忘るべからざる年なると共に、此の光榮ある三十八年を汚さゞるの覺悟をなすべきことより、必要は一種の道理をなすの語を引き、三十年に浮塵子大發生以來、害蟲驅除の呼び聲高くなり、彼處に害蟲驅除講話會、此處に昆蟲學講習會を開き、其數幾十回なるを知らず、殆んど名和先生をして奔走に疲れしめ、且其門戸に遊ぶもの續出したる、我巡查教習所に昆蟲學の一科を加へたる、皆是れ必要より一種の道理を爲したるものにして、害蟲の驅除は、學者と、行政機關と、當業者との三者相待て行へば、決して撲滅し得べからざるものに非らず、我々行政機關の一部たる以上は、出來得る限り責任を盡す考へなれば、諸君に於ても十分盡力せられたき旨を述べられたり。當日は本年初會の事とて、本縣巡查教習生一同を初め、名古屋明倫中學校生徒等の出席あり。非常の盛會にて、午後四時半閉會を告げたり。

◉**水曜昆蟲談話會記事**　當所に於て毎週水曜日夜間開會の同會は、相變らず盛會なるが、今前號報告後に於ける談話の要項を一括すれば左の如し。

小竹浩氏は蚜蟲に就き、アブラムシ族、タマアブラムシ族、コフキアブラムシ族、シロコアブラムシ族、カシノアブラムシ族及び子アブラムシ族の各特徴習性等を說明せられ◎小森省作氏は三十七年度中の昆蟲界と題し、科學上及び應用上に於ける進歩の狀況を述べらる◎名和愛吉氏は柳のミノムシに就て、氏が岐阜市京町の或る柳に、非常に多くミノムシ發生し、爲めに甚しく樹勢の衰へたるを見、該蟲に就て調査せられたるに。平年は外敵若くは氣候等の關係より、三月頃迄には八九分通り斃死するを常とすれども、未だ時季の早き爲めか、目下二百四十頭調査中、斃れたるもの僅に三十頭にして、生存せるもの二百十頭なることを、實物及び繪畫を示して說明せらる◎名和正氏は花と昆蟲との關係を每會繼續して、種々なる昆蟲及び花を示し、花の構造及花蜜の所在、一花中の雌、雄蕋の同時に熟せざる理由等より、花の種類によりて集ひ來る昆蟲、或は昆蟲の一向尋ねざる花の種類及其所以、其他花と昆蟲との種々なる關係を述べられ◎石田和三郎氏は、冬季害蟲驅除の必要と題し、一般の害蟲は、冬季に至れば各適當なる場所を撰びて潜伏す、例へば桑樹害蟲ヒメザウムシの枯枝中に越冬するが如き、種々なる昆蟲が草間或は樹木の凹所に潜伏する如く、總て冬季各所に潜伏するの特質を有するものなれば、此の際之れに對する方法を以て驅除せば、意外の好結果を得べしと論じ、又驅除の藥劑に就て各種の雜誌に掲げたるものを見るに、中には甚だ其說の信ぜられざる、寧ろ廣告的に出でたるものに非ざるなきかを疑はしむるもの少しとせず、是等は大に注意じて、有効なるものを撰ふべきを說かる◎鈴木彥次氏はイナゴの外部研究に就て說明し◎馬淵治郎氏はシマサシガメの外部研究、及び其他のサシガメ數種に付き研究せし特徴を報告し◎山内甚太郎氏はクロウリハムシとウリハムシとの比較研究を◎谷貞子氏はキリギリス科に屬する各種に就て、胸部を比較し其特徴を述べられ◎穗波山巖氏は高知縣下に於ける二化生螟蟲驅除法、及其模樣を報導し◎淸水森三郎氏は愛媛縣下に行はるる、蚜蟲の驅除法等を語られたり◎在米國の名和梅吉氏より昆蟲に關する通信は每回之を朗讀せり。

## ◎新刊雜誌中の昆蟲記事短評

害蟲驅除の聲高くなると共に、近來各種の雜誌中に昆蟲記事の多く見はるゝに至りたるは喜ぶべきことにして、其說の大に參考となるべきものあれども、亦中には甚だ信じ難き節尠なからざれば、次號より本誌に其大要掲げて、之が短評を試みんとす、讀者之を諒せよ。

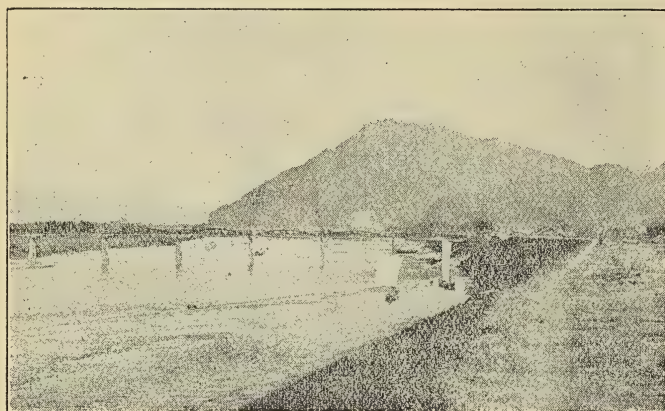
## ◎昆蟲標本陳列舘の觀覽人

昨年十二月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計六千百三十四人にして、其內最も多かりしは四日に於ける千四百二十三人、最も少なかりしは二十三日於ける十七人にして、一日平均二百十九人强に當る。又昨年中觀覽の總人員は四萬三千六百二十六人にして、其內最も多きは一月に於ける七千六百廿三人、最も少なかりしは三月に於ける一千六百五十二人にして、平均一ヶ月三千六百三十五人なりき。

# 恭賀新年

明治卅八年一月一日

岐阜縣岐阜市公園内

## 名和昆蟲研究所

所長 名和靖
調査主任（在米國） 名和梅吉
同補助 小竹浩
養蟲掛 名和正
同（出征中） 森宗太郎
標本掛 棚橋昇
同補助 名和愛吉
編輯主任 小森省作
同補助 谷貞子
圖畫主任 伊藤七郎
同補助 名和貴子
庶務主任 石田和三郎
同補助 高橋治平
會計主任 名和正也
同補助 名和政子

勅題にちなめる
山の富茂登に
はつ春をむかへて

はふむしの禍なくて　祝ふ哉

こ金華さく　山の富茂登に

梢には。ミのむし計り　はつ日の出

（當所の位置は中央の×印に在り）

## ◉昆蟲文學募集廣告

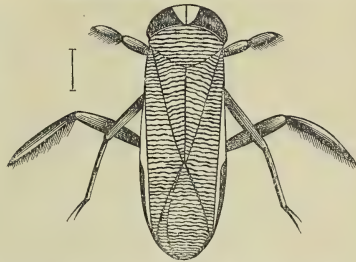
▲漢詩　○○○昆蟲亂題（但季は春の事）○○○牧野南山君選

▲短歌　○○○昆蟲亂題（但季は春の事）○○○栢惟潮音君選

▲俳句　○○○風船蟲十句（二月五日占切）上原三川君選

占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先は岐阜市公園内名和昆蟲研究所

（注意）雜報欄内俳句新題として昆蟲一讀の事

コミヅムシ（一名風船蟲）の圖

風船蟲は和名をコミヅムシと稱し常に水中に棲み其体輕きを以て枝等に附着して水底に靜止すれども多數附着すれば遂に枝と共に水面に浮き上る此時蟲は驚きて枝を放ち水底に潜り込み又多數枝に附着すれば水面に浮び上ること前の如し其狀宛も風船の昇るに似たるを以て此の稱あり形ウンカに似て燈火に集るの性あり

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

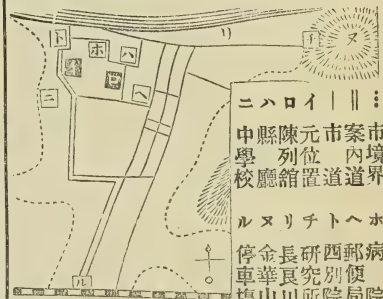
第七十四回月次會（二月四日）
第七十五回月次會（三月四日）
第七十六回月次會（四月一日）
第七十七回月次會（五月六日）
第七十八回月次會（六月三日）
第七十九回月次會（七月一日）
第八十回月次會（八月五日）
第八十一回月次會（九月二日）
第八十二回月次會（十月七日）
第八十三回月次會（十一月四日）
第八十四回月次會（十二月二日）

## ◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所は從來上圖の如く（イ）の位置にありしが今回當市公園内即ち（チ）の位置に移轉せり・又常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）は從前の通り岐阜縣物産館構内にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共　金拾錢

壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢　（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉為替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす


明治三十八年一月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎





（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

# THE INSECT WORLD.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

**YASUSHI NAWA**

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.


Aphelochira Nawae Mats.


VOL.IX.] FEBRUARY. 15TH, 1905. [No.2.

# 昆蟲世界

第九卷第貳冊　明治三十八年二月十五日發行　第九拾號

（每月一回十五日發行）


## 目次 （禁轉載）




名和昆蟲研究所發行

## 本所擴張寄附金品領收廣告　第九回

一金壹圓也　出征後備步兵第三十六聯隊第二大隊本部 元第十三回全國害蟲驅除講習修業生石垣友市君事改名　石垣與平治君
一金參圓也　愛知縣渥美郡役所第二課長　本多種次郎君
一金貳圓也　愛知縣渥美郡役所第二課員　舟橋錠助君
　　　　　　愛知縣渥美郡役所第二課員　伊藤佐度平君
　　　　　　愛知縣渥美郡農會書記　中村幸四郎君
一金拾貳錢也（第二回）愛知縣葉栗郡滝井町　後藤吉三郎君
一金貳圓也　靜岡縣沼津皇孫殿下御用邸　平野藤吉君

小計金八圓拾貳錢
累計金八百參拾參圓九拾六錢

右御寄附相成候ニ付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

## ◉昆蟲世界講讀者紹介人芳名

四名　鳥取縣　高橋直義君

明治三十八年二月十一日

岐阜市公園内
名和昆蟲研究所

## ◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市公園内
名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

---

時局の發展と共に害蟲軍大攻擊の必要を感ず從ひて本誌の大改良には全力を盡さんとす請ふ愛讀あれ

---

## 出版廣告

名和
## 日本昆蟲圖說　第一卷

◎鱗翅目　天蛾科（着色石版十八度摺）
定價金五圓、小包料金拾五錢

岐阜市公園内
名和昆蟲研究所

---

## ◉昆蟲學特別研究生募集

今回數十名の特別研究生を募集し特に此際何時にても隨意入所を許す、規則書入用の向は往復葉書にて至急照會あれ直に送致すべし

明治三十八年一月十日

名和昆蟲研究所

梅花と昆蟲 (一月二十三日實況寫生)

## ◎莢豆類加害象鼻蟲輸入に關し注意を促す

在米國　名和梅吉

農業の改善さるゝに伴ふて害蟲加害の度を增加することは、既に幾多の實證のあるありて今更余が喋々を要せず、讀者諸君の熟知せらるゝ所なり。然るに亦農業改良の結果、獨り從來土着の害蟲增殖して加害の度を多からしむるのみならず、往々曾て發生を認知せざりし特種の昆蟲現出し、漸次其數を增すに至り、終には土着種と同樣の働作を爲すのみならず、一層大なる慘害を逞ふする事珍らしとせず。そも斯の如き塲合に遭遇するには、幾多の誘因こそ其間に存すとは謂へ、彼の種苗の交換、或は海外より輸入する所の種苗の爲めに惹起せしむるは、亦一つの基因なりと信ず。現に目下本邦内地に於て、盛んに發生加害を逞ふし居る所の苹果の綿蟲の如きは、一の最好適例なりとす。去れば今後益々、農業改良上種苗の交換、或は海外より輸入を希圖する塲合には、宜しく害蟲の存在如何に着目し、若其寄生を認知する際には、假令僅少なるものも忽にせず、相當の處分を經て寄生害蟲驅殺を終へたる後、適宜の塲所に播種、或は植付等を爲す事を忘る可からず。如何となれば、良種苗の交換輸入は大に望むべきも、一朝其寄生害蟲に留意せず（若し害蟲の寄生するものとすれば）播種、或は植付を爲すとせば、そが結

果將來に於て容易に救濟すべからざるの不幸に相遇するを恐るればなり。右に付特に目下余の大ひに杞憂すべき害敵は、菽豆類に發生加害する所の象鼻蟲類なりとす。本邦に於て、此類にして加害を爲すもの二種あり。一はヒゲザウムシと稱し常に小豆を害し、他の一種はエンドノザウムシと謂ひ、特に豌豆に發生して非常なる損害を與へつゝあるは、諸者の熟知せらるゝ所なり。今此等二種の原産地を尋ぬる時は、何れも本邦土着のものにあらずして、全く海外より輸入せられたるものゝ如し。即ち先輩學者の説に依れば、前者の原産地は支那にして、後者は米國産のものなると謂へり。夫れ然り、當時本邦に於て加害の狀態を認知されしものは、前述の二種なりと雖も、一昨年當昆蟲世界に報告ありし如く、米國より輸入せし菽豆類種子より發生せし實證ある事なれば、或は此等二種の外、他に海外より輸入せられて、加害の初期にあるものなきにしもあらず。去れば是等輸入の恐れある害蟲に付き、將來の爲め警戒を加へ置くは、農業改良上大に有要なりと確信す。特に余昨年米國聖路易萬國博覽會視察の際、農業及び敎育舘内に出品せられたる菽豆類の箱内及び瓶中に於て、此等害蟲の發生し居るを目擊し、益々該蟲類の輸入に關し注意を促す必要を感じたり。

抑も菽豆類に發生加害する所の象鼻蟲類は、豆象鼻蟲科に屬し、其種類少なからず。本邦にては、前記二種の栽培豆を加害するものゝ外、自然生の荳科植物、及び「アカシヤ」樹の種實に發生するものあるは曾て余の實驗せし所なり。然るに歐米諸國にありては、栽培菽豆類に發生するもの數種以上ありて、其加害の度一層甚しきものありと聞く。而して種類に依りては加害豆を限定するものあれども、亦各種の豆類に損害を加ふるものもありとす。兎に角一般に此類は菽豆類の未だ田圃にある際、飛揚し來りて莢上に産卵するものにて、孵化する時は内部の粒實に蝕入して加害し、蛹化後羽化して外出するものと

す。今左に米國に於て加害甚だしきもの二、三種に就き概略を記し、以て當業者の注意を促さんとす。

(一)豌豆象鼻蟲　豆象鼻蟲類中大形に屬し、軀長一分五厘弱横徑七厘内外を算す。全体黑色を呈すれども、褐色或は白色の細短毛を被覆し、以て黑白の斑紋を現はせり。前胸部の側縁には、刻痕を存するを以て他種と區別し得べし。腹部は翅鞘外に出で稍白色を帶び、二個の黑褐色點を印出し、後脚の股節には二個の突起を有せり。常に豌豆の開花時期より現出し、開花後莢を結ぶに當り其外皮上に卵子を產附するを常とす。卵子は四厘内外にて一方細まり、黃色を呈す。幼蟲は孵化の際、稍圓筒狀を呈し、全体白色なれども口部は淡褐色を現はし、短かき三對の脚を有せり。孵化するや、直ちに莢を蝕入して豆粒内に達し内部を食害す。蛹化の際は、羽化後外出し得べき樣、粒内より外皮を殘して圓形に食し置きて蛹化す。蛹は白色にして、前胸部側緣には既に刻痕を現はせり。而して羽化して外出せば、圓形の穴を穿つを以て之れを知るべし。該蟲一生代の間に費やす所の時日は、一定せずと雖も、二三週日を要するものゝ如し。冬季は成蟲の狀態にて經過し、中には粒内に殘存するものあれども、多くは外出して適當の塲所に潛伏し、以て冬季を經過するものとす。余昨年九月、米國加洲サンホーゼー市に於て加害の豌豆に就き調査せし事ありしに、其當時豆粒内に殘存するもの十中二、三に過ぎざりき。同時に其近傍に於ける桃樹園にて、樹皮の裂間等に潛伏し居るものを實見せし事あり。米大州にては、此種のため莫大なる損害を蒙むる所ありて、中には一として加害を免るものなきに到ると謂ふ。我國にては特に關西地方に發生し、兵庫縣の某所に於ては、其加害甚しき故を以て、豌豆の栽培を中止せんと迄に到りし事は、嘗て余が聞知せし所なり。之を以ても、如何に該蟲加害の猛烈なるやを知るに足るべし。

(二)大豆象鼻蟲　前種の加害は、單に收穫前に於て爲すものゝ如きも、此種は、大豆收穫後貯藏中の

ものにも發生加害を逞ふするものなり。故に大豆栽培家は、常に强敵として驅除豫防に努め居れりと云ふ。大小種々あれども、軀長九厘内外を算し、前種同樣細短毛を密生して淡褐色を帶び、翅鞘には斑紋を印出す。特に前種と異なる點は、前胸部の側緣に有する刻痕を缺くと、後脚の股節には二個の突起の外、尙ほ小形突起二個を有するにあり。最初大豆畑に現出して莢上に產卵し、加害する狀態は前種と大同小異なり。卵子は一厘五毛内外、卵形をなす。幼蟲は著しき長脚を有すと雖も、脫皮を重ぬるに從ひ殆んど無脚の觀をなすに到る。該蟲は、收穫後貯藏豆をも甚だしく加害するものにて、一年五六回の發生を爲すと謂ふ。而して一生代に費やす時日は、土地、溫度及び豆質の硬軟により一定せずと雖も、三週日乃至八、九週日以上を要する事あり。當時米國にては、ロッキー山の東部諸州に蔓延し居れりと而してチッテンデン氏の記述に依れば、米國の外、南米、中央亞米利加、歐洲南方、ペルシャ、印度、支那、アルジェリヤ、及びマディラ、アゾレス、カナリヤ島等にも其發生ありと云ふ。昨年米國より、種子と共に、岐阜縣に輸入せられたるは、其種類を見ざれば確言し能はざるも、或は此の種にはあらざるか、兎に角加害甚だしきものなれば、大ひに注意すべき事なり。

(三)小豆象鼻蟲　此の種は本邦に於て、常に小豆に發生加害するものなり。最初其學名を世に照介せられしは千七百五十八年にして、リンチアス氏に依て Chinensis の種名を附せられたるの故を以て、そが原產地は支那ならんと謂ふにあり。前二種よりも小形にして、其差異の重なる點は、前胸部の後緣中央部に白色帶紋を有すると、雄蟲の觸角櫛齒狀を呈するとにあり。之れヒゲゾウムシの名稱ある所以なり。卵子は一厘八毛許、凸圓狀を爲し、附着點は平面を爲せり。最初白色なれども、孵化期に近くに從ひ灰白色に變ずるを常とす。幼蟲は白色にして、短かき三對の脚を有せり。小豆の内部を食害し、老熟

する時は、圓孔を作り其内にて蛹化す。其一生代に費す所の時日は、土地及び小豆の乾濕如何に依り一定せずと雖も、二三週日を要するもの丶如し。該蟲に就ては、大日本農會岐阜支會報告に、名和昆蟲研究所長名和氏の詳細なる實驗の摸樣記述あれば參照せられたし。今チッテンデン氏の記述に依り、發生國を擧ぐれば、支那、日本、東印度、エヂプト、シエルラレヲ子、バルバリー、アルジエリア、ケーブ、プエルトリコ、パナマ、及びブラズイル等にて、米國にも發生あるは記するまでもなし。

(四)四点豆象鼻蟲　此種は原産地不明なるも、米國にては常に大豆類に發生加害し居れり。其形貌、大豆象鼻蟲に類似せり。全体黑色を呈し、灰白色或は暗褐色等の斑紋を存在す。觸角は前種の如く櫛齒狀をなさゞるも、鋸齒狀を爲せり。而して前胸後緣の中央に存在する帶白紋は、僅かに認知せらる丶のみ。翅鞘は比較的長く、灰白色の斑紋と四個の黑褐色点とを有す。之れ四点象鼻蟲の名稱ある所以なり千八百九十三年、シカゴ市に於ける萬國博覽會出品の大豆中に、該蟲の發生し居りし事は、チッテンデン氏の實見されし所なり。卵子は白色にして稍や卵形をなし、一方細まりたり。其幼蟲は前種に類似すれども、胸部の著しく膨大し居るを常とす。而して一生代に費す所の時日及び大体の習性等は、前掲種類と大同小異なり。當時知られたる發生國は、米國、ウエ子ズエラ、ブラジル、メキシコ、エチオピア、英領ホンズラス、シエルラレヲネ、東、西印度、佛國の西方及び伊太利等とす。

右の外歐洲豆象鼻蟲、扁豆象鼻蟲及びメキシコ豆象鼻蟲等種々あれども、其が加害の狀態に到りては大同小異なるを以て、只其名稱のみを記し、莢豆類加害象鼻蟲の種類、海外に多くありて加害し居るを示すに留めんとす。

莢豆類加害象鼻蟲類の大要は、前掲する所に依り推知し得べけん、然り而して、此等害蟲が前掲の各國

國に分布せし誘因に溯りて調査せば、意外にも將來注意すべき點を發見し得べしと雖も、其之を爲すは容易の業にはあらざるなり。去れど此等害敵の分布上、或は飛揚力に依り、地續きの國々にては或は傳播する事あらんも、其大部分は商業上の力に依りて傳播し、又一方には、農業改良の目的として良種豆を海外より輸入せしと共に、該蟲類の密航したるものならんと信ず。果して然らば、將來に於て若し栽豆類の種子を海外より輸入せし際は、宜しく此等將來に到り、加害を逞ふせんとする所の害蟲の存在如何に着目し、後日の不幸を未發に防除するは最も緊要なる事とす。聊か豆象鼻蟲類の輸入を恐れ、所思を陳述して當業者諸氏の注意を促す事とはなしぬ。

## ◎鳴く蟲に就て（二）

名和昆蟲研究所内　谷　貞子

私は本誌前號に於て、蟬の發音器の構造につき記せしかば、本號より、本邦産蟬の各種を記述せんとす。然れども其色澤の如き、自身の採集にかゝるものは成る可く新らしきものにつき記載せしも、其は僅々七、八種に過ぎずして、他は多少年月を經たるを以て、幾分の變色を免れず、且中には僅か一、二頭の標本につき記したるものもあるが、それ等を多數集めたらんには、大小、色澤等に於て異りたる點なきを保し難し、讀む人幸に其心してよ。

さて此半翅類中蟬科に屬するものは、頭部三角形、複眼は頭部の兩端にありて著しく凸出し、單眼三個にして頭頂に存在す。額面は多少隆起し、觸角七節にして短かく針狀をなし、口吻は二節よりなる。前胸背板は幅廣く、判明せる二溝を有し、側面は多少板狀をなす。中胸部に大にして後胸を覆ひ、且隆起して、縱溝を有するを常とすれども、前胸のそれの如く明ならず。後胸は中胸部の下に匿れ、たゞ

僅かに其兩側を顯はすに過ぎずして、腹板には鋭き刺を有す。翅はアブラゼミ、ニーニーゼミ等を除くの外、膜質透明にして、雄は腹面の上部に二個の鱗狀瓣を有し、雌は腹端少しく細くして、鎗狀の太き產卵器を末關節に包圍せらるゝを常とす。此の雌を俗に啞蟬と云ふは、發音器を欠き鳴々せざるを以てなり。肢は、雌雄共に前肢の腿節膨大して、二三の刺を有す。かゝるものを稱して蟬とは云ふなり。今此世界における蟬の種類は、殆んど三百三十餘種の多きに達せる由なるも、本邦に棲息せるものは、漸く十七八種に過ぎず。されども、臺灣の如きを今少しく調査したらんには、尙多少の珍種あるを發見せらるべしと信ずるなり。而して其中に漢名のふせられしものは、漸く五六種に過ぎず、かの叙事格物論に、蟪蛄、寒螿、蛁蟟、蟳母、蜩范、蟬、の六種にして其他諸々の書を見るに、蜋蜩、蚻、蜻蜻、茅蜩蝒、馬蜩、蜺寒蜩、蟪蟧、蜓蚞、蟂蟧などあるも、こは支那の楚、或は秦、宋、衛など其國々によりて各々其名を異にせるものなりとの事なれば、淺學なる私の、到底悉く本邦種の何れに當るや、又全く別種なるや等を判する能はず、識者宜しく明敎を垂れ給へ。此類は幼蟲期に於て、土中に入り樹根の汁液を吸收するものなるも、本邦產に就ては、未だ其幼蟲期の長短如何を調査せられたるものあるを聞かず。然れども、亞米利加產の彼の有名なる十七年蟬の、一羽化期までに十七年を要するより推せば、年內に二三回の羽化期を有するものに比し、著しく幼蟲期の長きを知るべし。其羽化せんとするや、地上に匍ひ出で、樹幹に昇りて脫皮して成蟲となり、又かの長き口吻を樹枝に挿入して、其養液を吸收す、雌は其產卵管を以て枯枝に穿孔し、一孔に一粒づゝ卵を產附するを常とす。

(一)ニイニイゼミ(Dlatypleura kaempferi, Fabr.)　蟪蛄、又の名をナツゼミ、コゼミ、ムギカリゼミ、ゴシキゼミ等とも云ひ、躰長七分內外、兩翅を擴張する時は二寸二分乃至二寸四分を算す。頭胸部は

淡綠色、若しくは淡褐色を帶びて黑斑を有し、頭頂及び額面は著しく凸出せず。複眼卵形にして黑色單眼は赤褐色をなす。觸角は長さ八厘、基部の二關節は太くして大なり。口吻淡綠にして、先端黑色をなす。前胸は其幅廣く、側面は板狀をなして著しく兩側に凸出す。中央に黑縱線ありて、其左右に溝及び黑斑を有す。中胸背も綠色にして隆起し、前方には太き黑色の縱條四個ありて、兩側の二個は長し前翅は膜質透明にして黑褐色の斑紋を有し。其斑紋の上には灰白色の細短毛あり。翅脈は基部褐色又は淡綠色なれども、漸次先端に至るに從ひて其色淡し。後翅は小にして光輝ある黑褐色を呈し、外緣白色にして透明なり。雄の鱗狀瓣は廣くして短かく、腹背は黑色各關節の後緣は褐綠色を呈し、体の裏面は白粉を散布す。肢は灰褐色にして黑斑あり。雌の產卵管は長さ一分五厘赤褐色を帶ぶ。成蟲は七、八、九月頃最も多く現出し、朝早くより日の西山に沒する頃まで、絕へずニ――、ニ――、又時とすればシ――、シ――と高く鳴々するものにして、全國到る所に分布す。かの千蟲譜に「莊子不知春秋之蟪蛄」とあるは即ち是なり。

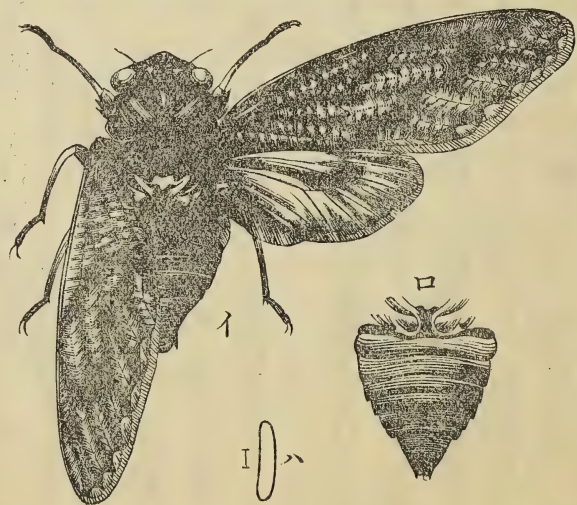
ニイニイゼミの圖

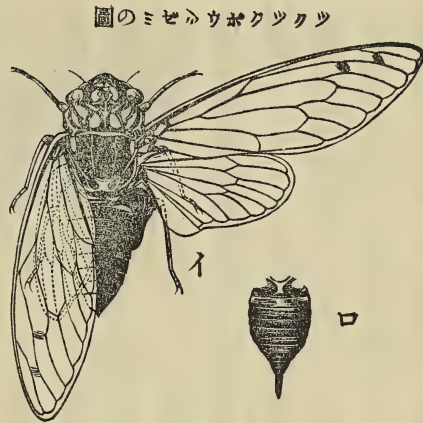
(二)アブラゼミ(Graptopsaltria colorata, Stal.)　蚱蟬、又の名をアカゼミ、サトゼミ、アキゼミ、ユウゼミ、ヤマゼミ、ジイラゼミ等と云ひ、躰長一寸一分乃至一寸三分、兩翅を擴張する時は、三寸三分乃至三寸七分を算す。頭部の上面三角形をなし、複眼黑色にして圓く、著しく兩側に凸出し、單眼は樺色を呈して光輝あり。觸角の長さ二分、基部の二節は膨大す。頭胸部は黑色の地色にして、單眼上方の左右に濃褐色の斑紋あり。前胸は廣くして中央に濃褐色の細縱線ありて、其左右に大なる褐色紋を有し、兩側緣も亦褐色

を呈す。中胸背は著しく隆起して二條の縱溝を有し、後方は白粉を散布す。口吻は長さ四分赤褐色を呈し、翅は上下共に赤褐色にして、前翅の內方は色淡く、外方は少しく黑みを帶び。後翅は色稍や濃く、中央の一部特に濃く暗色を帶ぶ。翅脉は基部綠色を呈し、翅端に至るに從ひて漸次淡樺色となる す。腹部は、背面の兩側幷に腹面全躰に白粉を有し、肢は褐色にして黑色の斑紋を有す。雄の鱗狀瓣は圓くして灰褐色をなし、雌は黑褐の長さ二分五厘よりなれる產卵器を有す。本邦何れの地にも普通の種にして、成蟲は七、八、九月頃に最も多く人家近くに現出し、朝早くより日沒までジ――――、と其音高く鳴々す。千蟲譜に「蚱蟬欲脫也其狀如此圖抱木葉脊裂而出甚遲緩以漸而自蛻出」とあり以て羽化の情態を知るべし下圖のイは雄蟲にして、ロは雌蟲、ハは卽ち卵子なり。

アブラセミの圖

イ　ロ　ハ

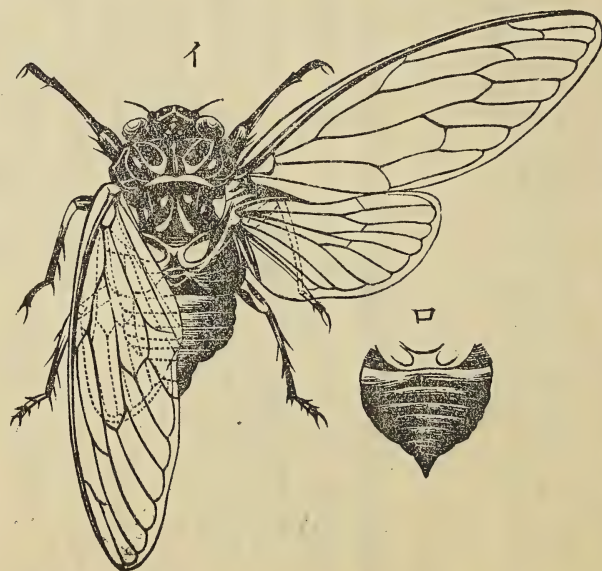
(三)ツクツクボウシゼミ(Cosmopsaltria opalipera, Walker.) 寒螿　又の名をクツクツボウシ、ツクシシヤウ、又冬蟬とも云ひ、躰長一寸、翅の開張二寸五分乃至二寸七八分、綠色にして黑色の斑紋を有す。頭部は三角形にして複眼黑色を呈し、單眼赤色にして頭頂に存在す。觸角は長さ一分二厘黑色を呈し、額面幷に基脣板は著しく隆起し、其側面に綠色の並行せる線を有し、又顏面の兩側の複眼下にかけて、綠色の太き條を有す。口吻は体の裏面と同色、前胸背は廣からずして數個の綠色不定紋を有し、其後緣

綠色を呈す。中胸は隆起せずして圓く、中央に長き綠色の二縱條を有し、且側面の翅に接する部も共に綠色をなし、後方には細毛を密生す。頭胸部の裏面は、淡綠色にして白粉を覆ふ。翅は前後共に膜質

ツクツクボウシゼミの圖

透明にして、翅脈淡樺色を呈し、翅端に至るに從ひ焦茶色となり前翅の先端に近き横脈上には焦茶色の二斑を有す。腹部の背面は黑色各節の後緣は黃綠色にして、細微なる灰白色の短毛を有し、裏面は焦茶色をなす。雄蟲はイ圖の如くなるも雌蟲の腹部はロ圖の如く小さく、末端の一節は著しく延長し、太き黑褐色の産卵器を有す。雄の鱗狀瓣は二等邊三角形にして、長く下方に垂れ腹部の中央に達す。肢は躰の裏面と同色にしてまゝ黑斑を有し、各脛節には細毛を密生す。此の種は本邦普通の種にして、全國到る處に産す。成蟲は夏の末に山間に現はれ、早秋に最も人家近くに往々出づる事ありて常にツクツクボ――シ――と鳴々す。

（四）ミンミンゼミ（Pompoia maculaticollis, Motsch.） 蛁蟟 この蟬はハゴロモゼミ、ミヤマゼミ、カタビラ、メンメン等の名ありて、躰長一寸二分、翅の開張三寸七分内外、頭部は殆んど三角形をなし、複眼淡茶色に黑色部のあるありて一定せず、單眼淡黃褐色を帶ぶ。觸角は基部の二節膨大して黑色を呈し口吻綠色にして先端黑く、額面は著しく隆起し、其側面には綠色の並行せる横線あり。頭部黑色にして綠斑を有し、胸部亦黑色にして、前胸の中央に一縱線を劃し、其兩側に綠色の不定紋數個を印す、後緣の中央には、綠色橫帶あり。中胸背は隆起して且大きく、中央に普通六個の緣紋と、兩側の翅に接

したる處に、各一個の稍大なる綠色紋を有し、後方は白粉を覆ひ、X形の隆起部の中央に太き黑條あり。翅は前後共に膜質透明にして、翅脈は淡褐色を帶び、前翅の翅端に近き翅脈上には淡茶色の斑紋あり。腹部は先端に至るに從ひ急に細まり、背面と側面とは黑色を呈し、各關節の後緣部は綠色にして、第一第三の關節の上面には白粉を覆ふ。肢は三對共に綠色に、各脛節の下部は黑くして細毛を有し、頭胸腹の裏面は綠色を呈す。雄の鱗狀瓣は圓くして中央に於て少しく重なり雌は黑褐色の產卵器を有す。本邦到る處に產し、成蟲は七、八、九月に常に山間又は山邊の野に於て、常にミンミン――ミイ――、と鳴くをきく。イ圖は雄蟲にして(脉上にある斑紋脫落)ロ圖は即ち雌蟲の腹部なり。

ミンミンセミの圖

(五)ヒグラシゼミ (Leptopsaltria japonica, Horv.) 茅蜩 此蟬一名カナカナゼミとも稱し、雄の躰長一寸二分、雌は九分乃至一寸、翅の開張三寸、雌は雄より腹部短きを常とす、頭部の上面はほゞ三角形をなし、兩側にある黑綠色の複眼は著しく凸出し、單眼赤色なり。觸角は長さ一分五厘黑色を呈し、頭部綠色にして單眼の附着部は黑色を帶び、額面及び基唇板は、中央に於て著しく隆起す。口吻は長さ三分、淡綠にして先端少しく黑し。前胸背は茶色にして其後緣綠色を帶び、中央に綠色縱線一個あり

板狀部は著しく凸出せずして綠色を呈す。中胸背は黑色にして、其兩側翅に接する所に各一個の綠色紋あり、中央は一黑線を劃して其左右に殆んど凹字形に似たる黃綠紋を有す。頭胸部の裏面は綠色を呈し、少しく白粉を散布せり。翅は前後共に膜質透明、翅脈は綠褐色を呈し翅端に至るに從ひて其色淡く

ヒグラシゼミの圖

イ　ロ

前翅の翅端に近き翅脈上には淡茶色の斑點を有し、雄の腹部は鳶色、雌は淡綠色を呈し、共に裏面には銀白色の短毛を生す。裏面は淡黃綠色にして白粉を覆ひ、肢は三對共に綠色にして脛節少しく褐色を帶ぶ。雄の鱗狀瓣は綠色にして小さく、三角形をなし、雌の產卵器は黑色にして長さ二分なり。イ圖は雄蟲にして、ロ圖は即ち雌蟲の腹部なり。成蟲は七、八、九月頃に多く現出し、光線のあまり透さゞる山間に棲息し、朝又は夕暮にカナカナ――カナア――、と一音宛鳴くを常とす、故に昔より之を鳥の鳴くと誤解して飯鳥とも云ふ、本邦にては、北海道を除くの外いづれの地にも產す。かの千蟲譜に「麥蚻小而色青者曰螿曰茅蜩」とあるは、このヒグラシゼミを云ふなり。

## ◎螟蟲卵寄生蜂の利用に關する試驗及調查

中川久知

益蟲の利用は、害蟲を直接に驅除すること、相俟て其方法を講するの必要あるや論を俟たず。茲に於て當塲亦た本年の處務規程改正と共に、益蟲の調查及利用の試驗に着手せり。然るに益蟲と稱するものは

肉食蟲あり、寄生蟲あり、其種類亦た頗る多きを以て、先づ螟蟲卵寄生蜂に就て、六月下旬已來調査及試驗の梗概を述べ、目下利用の考案を報ぜん。

(一)螟蟲卵寄生蜂の種類　本年、當場に於て調査及試驗の用に供したるは、農事試驗場特別報告第六號に記するズイムシアカタマゴバチ即ち是れなり。

(二)熊本縣下に於る該寄生蜂の分布　本年調査に着手せしは六月下旬にして、已に挿秧を畢りたる地方少なからず。苗代の螟蟲卵を得たるは、玉名郡のみなり。今同郡十七ヶ村に就て、該寄生蜂の分布を取調ふるに、其結果左を如し。

| 村字名 | 卵塊總數 | 寄生蜂ニ犯サレザル卵塊數 | 寄生蜂ニ犯サレタル卵塊數 |
|---|---|---|---|
| 玉名郡荒尾村大字荒尾 | 九 | 二 | 七 |
| 同　小田村字山部田 | 九 | 〇 | 九 |
| 同　八嘉村字大倉 | 六 | 〇 | 六 |
| 同　横島村字十町 | 一二 | 〇 | 一二 |
| 同　有明村字增永 | 三 | 二 | 二 |
| 同　小天村小字立石 | 一三 | 〇 | 一三 |
| 同　梅林村字下 | 一二 | 〇 | 一二 |
| 同　木葉村字稻佐 | 七 | 〇 | 七 |
| 同　玉水村字部田見 | 一三 | 〇 | 一三 |
| 玉名郡腹赤村字腹赤 | 九 | 〇 | 九 |
| 同　六榮村字宮野 | 八 | 〇 | 八 |
| 同　山北村字二俣 | 一三 | 〇 | 一三 |
| 同　米富村字三川 | 七 | 一 | 六 |
| 同　淸里村字高濱 | 八 | 〇 | 八 |
| 同　八幡村字菰屋 | 四 | 〇 | 四 |
| 同　坂下村字下坂下 | 四 | 〇 | 四 |
| 同　綠村字坂楠 | 四 | 〇 | 四 |
| 計　十七ヶ村 | 百四十一塊 | 五塊 | 百三十六塊 |

右の調査によれば、各村多少の螟蟲卵寄生蜂を產せざるはなし。

(三)寄生蜂の螟蟲卵を斃死せしむる步合

(甲)苗代に於ける步合

自六月二十八日至七月七日
玉名郡十七ヶ村採集

| 寄生歩合 | 卵塊數 | 寄生歩合 | 卵塊數 | 寄生歩合 | 卵塊數 | 寄生歩合 | 卵塊數 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 割分<br>〇〇 | 五 | 割分<br>六〇 | 〇 | 割分<br>一〇 | 二 | 割分<br>七〇 | 一四 |
| 二〇 | 八 | 八〇 | 九 | 三〇 | 八 | 九〇 | 六 |
| 四〇 | 二 | 一〇〇 | 六二 | 五〇 | 二五 | | |

平均七割二分二七　　卵塊數合計百四十一

自七月六日至七月十一日
九州支場試驗田

## （乙）本田に於ける歩合

| 第一回（七月六日採卵）寄生歩合 | 卵塊數 | 第二回（七月七日採卵）寄生歩合 | 卵塊數 | 第三回（七月八日採卵）寄生歩合 | 卵塊數 | 第四回（七月十一日採卵）寄生歩合 | 卵塊數 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 割分<br>〇〇 | 一八 | 割分<br>〇〇 | 一六 | 割分<br>〇〇 | 九 | 割分<br>〇〇 | 七 |
| 一〇 | 一三六 | 一〇 | 三六 | 一〇 | 六一 | 一〇 | 二九 |
| 二〇 | 一一五 | 二〇 | 一〇二 | 二〇 | 七五 | 二〇 | 二七 |
| 三〇 | 一〇九 | 三〇 | 九〇 | 三〇 | 九一 | 三〇 | 四六 |
| 四〇 | 九四 | 四〇 | 九一 | 四〇 | 九七 | 四〇 | 四七 |
| 五〇 | 一二七 | 五〇 | 三七 | 五〇 | 三三 | 五〇 | 五五 |
| 六〇 | 九〇 | 六〇 | 五四 | 六〇 | 三四 | 六〇 | 五二 |
| 七〇 | 九〇 | 七〇 | 五六 | 七〇 | 四一 | 七〇 | 五一 |
| 八〇 | 八八 | 八〇 | 五六 | 八〇 | 二九 | 八〇 | 五二 |
| 九〇 | 八八 | 九〇 | 八三 | 九〇 | 四一 | 九〇 | 七二 |
| 一〇〇 | 一五三 | 一〇〇 | 七三 | 一〇〇 | 五九 | 一〇〇 | 一〇二 |
| 平均五三、二四九 | 計一一〇八 | 平均五三、三一四 | 計六九四 | 平均四七、一三 | 計五七〇 | 平均六一、八〇 | 計五四〇 |

爾後七月十一日に至り、本田の一部を二區に劃し、一區には數百頭の寄生蜂を放ち、他の一區には之を放たず、後四日を經て十四日に至り其効果を調査せんか爲めに兩區の螟蟲卵を採集せしに、螟蛾已に其の影を沒し、卵塊亦隨て其數を減じ、兩區共僅々七塊宛を得たり。之れを檢するに、全部黑色に變じ、悉皆寄生蜂の爲めに斃死したる徵、顯著なりしを以て、遂に兩區の優劣は之を判知するに由なかりし。

右調査の結果によれば、苗代の末期に於ては、本田挿秧後二週間以内のものに比し、螟蟲卵の寄生蜂の爲に斃死するもの二割餘の多數に達するが如し。

(四)寄生蜂に犯されたる螟蟲卵塊の保存　從來螟蟲保護器と稱して、採集したる螟蟲卵を、摘み取りたる稻葉と共に其内に容れ、孵化したる螟蟲は遠く器外に遁逃することを得ざらしめ、羽化したる寄生蜂のみ隨意に飛散し得べき裝置を用ゆるものあり。然るに、螟蟲卵塊の摘採は殆んど皆苗代に於てのみ之をなすを以て、九州地方就中熊本縣の如きは、時恰も梅雨の候に方り、多數の卵塊を器中に投ずるときは器内に濕氣充滿して黴菌の發生を促がし、蜂は發育の中途にして斃死するもの多し。若し又、天候之に反して、雨少く旱天繼續するときは、卵塊乾燥して在中の蜂も亦發育を遂ること能はざるもの多く偶々適度の濕氣に遭遇するものゝみ始めて完全に羽化することを得るものとす。故に、螟蟲保護器の現狀は、太だ以て不完全なる事を免れず、螟蟲は保護の恩澤に浴すること能はざるもの多きは遺憾の至りと云ふべし。

當場に於ては、本田採集の卵塊を三十個宛(稻葉と共に)日本紙を折りたる間に挾み、之をランプのホヤに容れ得る丈詰め込み、ホヤの兩端に日本紙を貼りて蜂の遁逃を防ぎ、此ホヤを棚上に安置したるに、日ならずして寄生蜂は續々羽化を始め、皆ホヤの上端に集まれり。爾后日々出て來りたる蜂を他のホヤに移し、元のホヤ中最早蜂の發生せざるに至り、其の中の卵塊を調査せしに一も、黴菌の爲めに犯さるゝものなく、又乾燥して死亡したるものも僅少なりき。今當時の氣中に於ける濕度を記して參考の資に供す。

| 月日 | 氣溫 | 濕度（飽和チ一〇〇トス） | 月日 | 氣溫 | 濕度（飽和チ一〇〇トス） | 月日 | 氣溫 | 濕度（飽和チ一〇〇トス） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 七月一日 | 二八、八 | 六七 | 同八日 | 三〇、四 | 六七 | 同十五日 | 欠 | 欠 |
| 二日 | 二八、〇 | 七一 | 同九日 | 三〇、三 | 六三 | 同十六日 | 二九、七 | 六二 |
| 三日 | 二七、三 | 八四 | 同十日 | 二七、七 | 七四 | 同十七日 | 二九、三 | 六三 |
| 四日 | 二九、三 | 六一 | 同十一日 | 二七、七 | 七四 | 同十八日 | 三〇、二 | 五三 |
| 五日 | 欠 | 欠 | 同十二日 | 二九、八 | 七三 | 同十九日 | 三一、〇 | 六〇 |
| 六日 | 二九、九 | 七七 | 同十三日 | 二七、七 | 七四 | 同二十日 | 三〇、一 | 六六 |
| 七日 | 二九、〇 | 七九 | 同十四日 | 二七、〇 | 八二 | | | |

備考　螟蟲の卵塊をホヤに納れたるは七月七日を始めとし、爾後得るに隨て同樣に處理せり。而して寄生蜂の羽化は同十九日を以て擧る。

右試驗の結果によれば、氣溫二七度より三一度、濕氣百分率五三より八二の間に在りては、三十個宛卵塊を紙片に挾みてホヤ中に貯へ、善く卵中の寄生蜂をして發育を全ふせしむることを得たり。

（五）該寄生蜂の性質　ズキムシアカタマゴバチは寄生蜂中最少なるものゝ一にして、他の寄生蜂の如く常に明るき方に向て遁逃せんとして止まざる性を有す。もしホヤ中に容れ置き、ホヤの直立するときは皆其上端に集まり、紙に極めて僅微の間隙あるも忽ち其所を潜り逸出するものとす。若し螟蟲卵の附着したる稻苗を上述のホヤの下端より挿入し、卵塊漸くホヤの上端に近くときは、蜂は先づ稻葉に移り其面に沿ふて或は上り或は下り、頻りに適當の宿主を捜索するものゝ如し。而して卵塊に達するときは其上に止まり、軈て產卵を始む。若し、右のホヤ中に百余頭の蜂存在するときは、一卵塊上に十余頭來集することあり。凡そ他種の寄生蜂に於ては、一個の母蜂產卵しつゝあるに方り、他の母蜂其傍に來りて產卵せんとするときは、曩きに占居したる蜂は新來のものを驅逐せんとするもの多きも、本種に於ては非常に多數來會するにあらざれば斯くの如き性質を發現すること殆んど罕れにして、十余頭相集る

ときと雖も、母蜂は互に相犯すことなく各々自己の天職を盡して毫も他を顧みざるは往々之を見ることなりとす又一旦産卵を始めたる母蜂は、其身体に觸るゝものあるにあらざれば容易に其所を離れず、終日同一卵塊上に在りて居を轉せざるは屢々目撃する所なりとす。本種寄生蜂はホヤ中にて飼養するに大抵七八日にして悉く斃死す(飼養試驗の部參照)。蓋し、此の蟲の性たる、羽化するや否や直に交尾して宿主に産卵を始め、一日産卵を始むれば、長時間産卵を繼續するものなるを以て、自然の狀態に在ても速に貯へたる卵を放下し畢り早く死に就くものゝ如し。凡そ寄生蜂は皆乾燥を忌むものにして其形体小なるものは大なるものに比して乾燥に耐る力頗る薄弱なり(飼養の部參照)。故に、適當の餌料を給するときと雖も、特に濕氣を維持するの裝置を設くるにあらざれば、羽化后一二日にして悉く斃死するに至る。之須く注意すべき事なりとす。(未完)

## ◎桑樹の心止め蟲に就て

岐阜縣中津蠶種檢査所ニテ　西川砂

余昨年六月下旬、加茂郡より惠那郡を經て土岐郡に至れり。此路傍點々桑樹の頂芽屈曲し、發育を防止せられたるものありしを以て、是が調査をなしつゝ土岐郡半原村に遊びしに、望まれて桑樹害蟲の講話を試む、時に二三の當業者より該現象を呈せる桑芽の質問に接せしも、未だ詳かにせざりしを以て是を說明する事を得ざりき。然れども此地四五年前より桑樹當加害を受け、收葉をして甚だしく減少せしめ、殊に或る一部の桑園に甚だしと聞き、心潜かに此地に於て研究せむ事を期す。恰も好し、七月の一ケ月間土岐郡に止まる事となりしが故に、暇を以て茲に調査し、二三種の疑ふ可き害蟲を得たれども、未だ何れが當加害蟲なるや詳かにするを得ざりき。然るに八月一日惠那郡に轉し、出張の路上調査

せし所に依れば、本郡各町村、至る所多少該被害桑樹を見ざるの所なく、殊に中津町並に落合村に甚だしく、余の研究に對しては幸福を得、休日或は寸暇を機して研究に力め、漸く該加害蟲の一端を認めしを以て、聊か調査の顚末を左に述べんとす。

因に記す恰も八月下旬、大日本蠶絲會報到著せしを以て是を繙けば「桑樹の心止蟲に就て」と題し、熊本縣福島眞一氏の研究記事あり。之れ余の偏へに研究せし所のものと能く該當するもの丶如し。然れ共余は甚だ繁忙の職に在りしを以て、遺憾ながら該蟲の成蟲調査に關し意の如く調査する能はず。依て若干數の該幼蟲を採集し、出張の際は、是を小器に入れ飼育せしと雖、該期の炎天を數日間携帶せしを以て、或は飼料をして乾燥に失せしめ、或は是に蒸熱を釀さしめたるが爲め、一頭だに完全に發育するを得ず。中途に於て皆斃死し、當飼育は遂に失敗に歸したり。其后猶ほ調査せる所なきにしも非らざれ共未だ正確なるを得ざれば福島氏の調査せられしものと茲に比較し得ざるは誠に遺憾に堪へざる所なり。

當被害の年代を調査するに、土岐郡日比野某の談に依れば、凡そ十年以前同地方に夥しき被害ありしと雖、天候の然らしむるものと思意し、其原因を認むる事を得ざりきと。其他各地の當業者に問ふ所ありしも四五年或は六七年前よりなる可しとて何れも判明なる能はず、甚だしきは、自己の桑園に多數の被害あるも未だ是を知らざるもの多かりき。亦落合村上田某の談によれば、本年是が被害著しかりしを以て、該被害桑芽を以て所々に質問せしも、確たる回答を得ざりしと。之れ未だ其分布區域狹隘なると、從前被害の程度著しからざりしが爲め、世人の注意を喚起せしむるに至らず、從て未だ研究の遂げられざりし故ならんか。

當被害の最も多き場所は、山蔭、樹蔭、家屋の近傍等總て大氣の流通、及び日光の透通宜しからざる桑

園、或は濕地、雜草の繁茂せる桑園、若しくは桑樹の植付繁密にして、殊に豐軟に發育せる桑園、或は間作せる桑園等に殊に多く、是に反する所には少し。

而して桑樹の當加害を受くるは、春蠶用刈採後、新梢の五六寸乃至一二尺發育せる頃より被害あるものにして、即ち余の地方に於ては六月下旬より九月中旬に渉り、桑樹の成長點たる頂芽の中心にありて、多くは其一側を喰害するが故に、其局部は黑色に變じて凹陷し、遂は生活力を失ひ發育を止むると雖加害を受けざる側面は猶ほ稍々發育を繼續するが故に、發育に權衡を失し、被害せし局部の方向に屈曲し、遂に全く發育を停止す。然れ共被害の度少きものは、辛じて曲りながら猶幾分發育せるものありと雖、そは極めて稀なりとす。

斯く桑樹は頂芽を害せられ、爾後發育を防止せらるゝを以て、茲に復芽は所々より發育を始むると雖、甚だしきは未だ尺位に達せずして再び發育を防止せられ、其梢條よりは又復芽生長し、恰も其桑條は箒狀を呈するに至る、爲めに夏秋蠶期及び翌春に至りて收葉を減じ、加ふるに桑樹の生理に障害あるや推して知る可きなり。桑樹は斯の如き異狀を呈するを以て、落葉後と雖能く是を判別する事を得。該被害桑芽を採りて是を檢する時は、已に著しく屈曲せる桑芽中には、該加害蟲(幼蟲)を敢て認る事を得ずと雖、之が初期に於ける、即ち極めて僅少に桑芽の異狀を呈するものを取りて是を檢する時は、桑芽中より一頭乃至數頭の幼蟲匍匐して出ずるを見る。蓋し已に著しく屈曲せる桑芽に該幼蟲の存せざるは、桑芽の加害せられてより屈曲するに至る迄は、一定の時日を經過せし後なるを以て、該幼蟲は發育を遂げ已に桑芽中を辭せるが爲めなる可し。余の研究に着手せる頃(多くは土岐郡地方)速かに該加害蟲を確認するに至らざりしは、蓋し其一因にして、加ふるに其當時は成蟲期或は卵期なりしならんか。

斯く一桑芽を侵せる幼蟲は、多くは一二頭に過ぎざれ共、數頭の該蟲に寄生せられたる桑芽は、未だ屈曲するに至らずして遂に枯死せるもの多きを見る。

桑の心止蟲の幼蟲及被害桑樹の圖

(一)幼蟲の放大圖(二)同頭方部(三)桑樹被害の狀
(イ)食道 (ロ)胃嚢 (ハ)脂肪組織 (ニ)神經球 (ホ)氣管 (ヘ)幼蟲体の透明に見ゆる部分
(ト)被害部

今該幼蟲を桑芽より取り出して是を檢する時は、体長五六厘の昆蟲にして十二環節よりなり、前方は細くして中央部太く、後方に至るに從ひて亦稍々細し。体は乳白色にして、是を背面より見るときは中央部青綠色を呈し全く脚を欠き、体の伸縮により活潑に匍匐し、亦能く四五寸の高さ、或は七八寸の距離に飛行するを見る。之れ偶然認めたる所にして、余は豫て摘採せる桑芽より多數の該幼蟲を採集し、是れを淺き器に入れ以て調査に從事せり。然るに何時か該幼蟲の數著しく減少し、爲めに大に失敗せることありき、依て能く該蟲の擧動を熟視するに、其初め臀部を腹部に屈曲せしめ、第三四環節の腹面に、第十二環節の末端を以て吸着の後彈飛して以て斯る距離に達す、斯く微細の體軀を以

て、斯る技能を有するは實に驚く可し。亦余の斯く失敗せるも、敢て奇とするに足らざるなり。

是を顯微鏡下に照す時は、頭部は小にして、其前方兩角よりは恰も角狀に突起を生じ(觸肢ならんか)口部は咀嚼及び吸收に適するが如く、亦第十二環節は稍々變形して末端に肛門を開き、猶ほ此部に吸盤を具ふるが如し、亦皮膚は透明にして背面の青綠色を呈せるは、之れ体內中央に縱走せる胃囊にして、該蟲の桑芽を喰害し、葉綠素等を以て是に充せるが爲めなる可く、亦其他の部分乳白色を呈するは、体內に脂肪組織の充滿せるに依るならん、其他猶ほ氣管等をも認むる事を得。

當幼蟲の十分發育する時は、体軀漸々縮小して、其長さを減ずると共に、遂に橙色を帶び、一定の後脫皮し以て蛹化し、續て成蟲となるものにして、福島氏の研究に依れば、有吻目半翅類陸棲類に屬する盲椿象の一種なりと。

亦總ての桑芽を檢する時は、其內に二三種のムクゲムシ、或は一二種の甲蟲等の存するあり、之れ該心止に幾分の關係あるや計るべからずと雖、敢て其主害蟲には非ざるなり。

亦葉捲蟲幼蟲の侵せる桑芽は、該心止に於ける初期の徵候に酷似し、能く誤視する事ありと雖、當蟲は絲を以て綴れるが故に、容易に之を判別する事を得。

當蟲の化性に就ては未だ明瞭ならずと雖、本年調査せる所に依れば(東濃地方)六月下旬より九月中旬迄位にして、其期間、該幼蟲の多少及び大小あるを見れば、一年二回、或は二回以上發生するものならんか。

驅除豫防法に關しては、未だ該蟲の經過判明ならざるの今日已に之れを論ずるは甚だ輕忽の誹りを免れずと雖、若し幼蟲時代に於て是を行はんと欲せば、畢竟其初期なる、極めて僅少に異狀を呈せる桑芽を採集して所置するの外あらざる可し。之れ甚だ惜む可き樣なれども、實驗に依れば、該蟲の殆ど十分に

發育するに及んで、初めて桑芽に僅少の異狀を呈するものなれば、已に其桑芽は喰害せられあるを以て爾後其内に存ずる害蟲のみを去ると雖、發育停止は免る可からざる所なれば、是を摘採し所置するは其一法なる可し。亦余の目下調査しつゝあるものにして果して然りとせば、已に屈曲せる桑芽も共に摘採するの要ある可しと雖、是が確定は該蟲の經過習性の明かとなりし曉に譲らん。

余の該加害蟲に就き調査せるは、重に可兒、土岐、惠那の三郡に於てせるものなれども、加茂郡にも亦斯る被害の尠なからざるを聞く、福島氏の調査によれば、本邦關西地方に於て當被害二三縣に亘ると、是れより察するに、該被害は本邦僅かに三四縣のみに非ざるやも知る可からず。果して然りとせば、益々識者諸賢の研究を仰ぎ、以て桑樹の一大害蟲をして撲滅せしむるは、此れ目下の急務にあらずして何ぞや。

編者曰く、右の幼蟲の記事と該圖とを對照するに、有吻目に屬するものとは思はれず、然るに、福島氏の研究によれば有吻目盲椿象科の一種云々の項に至り、大に疑を生じ、早速西川氏に照會し、福島氏の記事の送附を乞ひたれば、同氏は直ちに全文を寫し、且つ心止蟲加害の近傍に於て、福島氏所載の形態に殆んど該當するものを得たりとて、成蟲、蛹各二頭宛を添送せられたり。今福島氏の記事を見るに、幼蟲は全然西川氏の右記事と一致して、別種と認むるの餘地なきも、蛹及成蟲の記載は全く椿象の一種なり。是れ編者の大に疑ふ所にして、西川氏の送られたる蛹及成蟲を見るに、食肉椿象の一種にして、其れと之れとは幾分疑はしき点あるも、或は福島氏は、其近邊に棲止せし椿象を採りて、心止蟲の成蟲なりと誤認せられしには非らざるか、如何にも該心止蟲の化成せしものとは請取難し、暫く疑を存じて他日の研究を俟たんとす。乞ふ西川氏斯學の爲め細心調査せられんことを。

# 講話

## ◎蜜蜂の話

青柳浩次郎

本篇は、本誌前號に於て報ぜし如く、昨年十二月、同氏が當所に立寄られし際、講習生に對し講話を請ひ、それを所員の筆記したるものなり。

私は只今名和先生から御紹介になりました、箱根養蜂場の青柳浩次郎と申すものであります。私は丁度今日まで二十一年間、この養蜂事業に從事して居りまして、度々失敗もし又困難もしまして、中途で專門に養蜂にのみ從事して居る譯に行かぬ事になりましたが、今日では專ら養蜂にのみ從事する事になつて、自分の理想を遂した次第であります。

さて、先日私が御當所へ參りました時に、名和さんから、今晩は幸ひ水曜昆蟲談話會であるから、養蜂に就て何か話しをせよとの事でありましたが、汽車時間の都合で、御話しをして居る暇がありませぬから、來月又參るので、其時にして下さいと申して御別れしました。此度幸ひ三重縣農會の主催で、津市に於て開會の養蜂講習會へ出張する途次、申譯の爲め一寸御寄り申しました樣な次第で、色々多忙でありますので、少しも御話しの材料を調べる暇がありませんから、諸君の御ためになる樣な御話しは到底出來ません。尤も養蜂の技術に就て御談しをしましても、それは一席の談話で其全躰を盡すことが出來ませんから、たゞ其蜜蜂の性質に就て御話し致しませう。されども、養蜂の技術上に就て、若し疑ふ所でもある方がありましたら、幸ひ今晩は當地に宿りますから、後で御質問なさるゝ樣に願ひます。

さて私の從事して居る所の養蜂の事は、昆蟲學と密接の關係を有して居ります。否な蜜蜂は昆蟲學の一部であります。

そこで、世の中の事は、凡て學理は實地の先導者となつて行くのであるから、昆蟲學の進步は、即ち養蜂家の利益を得らるゝ所以である。而して、養蜂の事は、學理も實地も共に、他の事業に較べて進步して居る。今日本で、最も盛んであると云ふ養蠶よりも、一層進步して居る。例へば、人類でも、どうすれば男が生れたり、女が生れたりするかと云ふ事はまだわかりませんが、蜜蜂ではこれが己にわかつておつて、場合に依れば、人爲で之を左右する事も出來るのです。此の如く進步したる學理は、凡て之を實地に應用せられて居る。寧ろ此等の學理は、實地から促がされて生じたる傾きがある位だから、皆さんが昆蟲學を御研究なるのにも、蜜蜂の事は、他の昆蟲より一層精密なる研究をなさることを、切に願ふて置きます。

さて、蜜蜂位世の中によく出來て居るものはありません。蟻は自ら農業をするとか、他の動物を飼養して己れの用に供するとか、又先々月の昆蟲世界にも、蟻が菌を培用することが書いてあつて、中々蟻は理學を知りて居る。然し蜜蜂も、決して蟻に劣らぬ。例へは、彼の巣房は、實に正しき六角形をして居

りまして、如何なる理學者でも、これ以上のよき構造は考へられません。又花の蜜を吸ふて、之れに化學的の變化をさせて、葡萄糖にして、巣房の中へ吐き出して之を貯藏して置きます。又其の蜜から、蠟を化成して、巣を造るのです。蟻を理學者とすべきならば、蜜蜂は理化學者としても差支へないのであります。鳩に三枝の禮ありとか、烏に反哺の孝ありとか申しますが、此の蜜蜂から思ひますと、實になんでもない事であるのです。昔しから蜂に王ありとか、蜂に君臣の義ありとか云ふが、段々調べて見ると、更に感心すべき愉快なる性質を有して居るのであります。

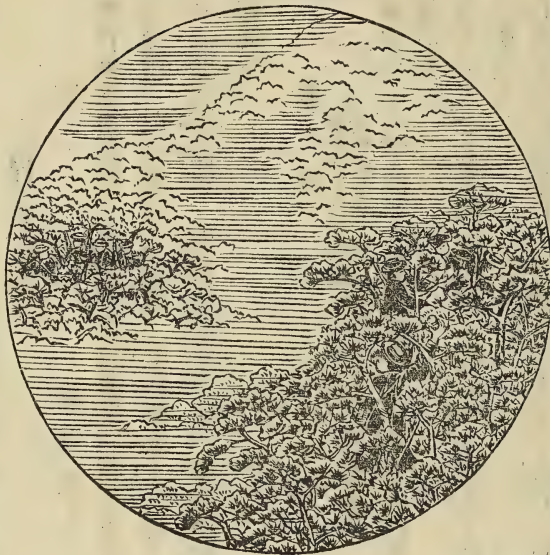
先づこの密蜂は、誠に能く勉强するのでありまして、つまり之は、天からそなはつてゐる性質で、决して他から勵まされてするのではないのです。氣候のまだ寒い時でも、梅の花が咲きかけますと、すぐ働き始めるので、それから桃、櫻と色々な花が咲きますと、益々激しく働くのであつて、朝まだ暗い中から、花粉又は蜜を取つて來て、日暮れ遲くまで一生懸命に働いてゐるのです。私が、自分の書齋の中で飼つておいた事がありました時に、蜂より先に起きて、窓をあけてやらうと思つても、いつも蜂が私よりさきに起きて、はや窓の所へゆきまして、ブン／＼と云ふてゐるので、よほど朝起きの競爭をいたしましたけれども、いつもまけずめでした。それから、一度花粉又は蜜をとつて、自分の巣へ歸つてきたとて、それで自分の役目はすんだとして遊んで居る樣の事はなく、それを巣房へ入れるか、又は巣にある他の蜂に渡して、直ちに又採取に飛んで行くのであります。實にその勤勉な事には、驚く外はありません。其の蜜等は冬の食物のない時、又は夏の花の少い時とか、雨が降つて外出のできん時等の用意に澤山貯藏して置くのであるが、若し夫れを、人が悉く取つてしまへば、春の花のいくらでもある時ですと、十日か十五日もたちますと、又一杯にしてしまうのですから、養蜂で利益を得るのには、其の蜜の採取時期を誤らない樣にせねばなりません。そうすると、一年に何度も取る事が出來ます。これまで日本で飼ふてゐるのは、みな一年一回、即ち秋に蜜を取るのみであるから、澤山の蜜がとれない、殊に秋の蜜は、春の蜜の二番蜜位のもので、上等ではありません。それなら、十分蜂に勞働させたら、日本蜂でどの位とれるかと申しますと、平均一箱から五貫目位とれます。私が今日迄に一番多く採取したのは八貫四百目まで取りました。夫れで從來の飼方ではどの位かと申すと、先づ一貫目から一貫五百目位です養蜂の利益を得んには、必ず其飼養法を改良せねばなりません。米國で、此の蜜を多量に採る事を懸賞でやりましたら、イタリヤ蜂は一巣から五百斤、サイプリアンは千斤を採取しましたと申す事でありま

すが、なにしろ蜂の勤勉なのを利用すれば澤山蜜がとれるものです。
夫れから、此蜜蜂は、働く上に於て、一つの法則があつて、決して無意味に働くのではありません。彼等は、各々分業的に其仕事をして居るので、先づ老若によつて其仕事を異にして居ります。若いものは巣の中に居りて巣脾を作つたり、又兒を育てたりして居りますが、年をとるに從て外の仕事に從ひ、蜜、花粉をとつてきたり、又敵をふせぐ等の役をします。又老若に依りて、其氣質を異にして居ります。即ち老ひたるのは其氣が段々あらくなりますが、若いものは極めて温順であつて、人が巣の中へ手入しましても、めつたに螫す樣な事がありません。其螫すのは、多くは老ひてたるものです。夫れから其の分業の法は、尙細密のところまで行はれて居る。例へば、外から花粉を脚に付けて歸りくる蜂は、巣房の中へ脚を入れて、花粉の粒を落して、自分で之を詰めずに、其まゝ跡をも見ずして外へ勞働に出掛けるすると巣の中に居る他の蜂は、直ちに其巣房の中へ頭を入れて、其花粉を程能く塡め込むと云ふ都合で又蜜を採りて來て巣に歸ると、時によれば途中で他の蜂にそれを渡して、直に又採りに行く事もあります。其外凡て巣を造るにも蠟を出すにしても、皆な分業法によりてよく働くものであります。
蜜蜂は、此く勤勉なるものですから、從て遊びものゝ多くあるを許しません。遊びものとは即ち雄蜂の事です。蜜蜂の一族には三つの異れる蜂がありまして、蜂王、雄蜂、働蜂です。蜂王は全群の母で、專ら産卵をし、働蜂は能く働くが、雄蜂は蜂王に交尾するため生ずるもので、交尾の外には何にも役目がない。春の四月下旬か五月に於て、蜂が分封をします、即ち分家するのです。其分家毎に、一の蜂王が入用であるから、新王が生ずる、此新王が交尾する爲に、雄蜂が入用なので、澤山の雄蜂が生するのです。然し蜂王に交尾する雄蜂は三つか四つで、即ち新王の數だけです。其交尾した雄蜂は直ぐ死んでしまいます。其他の雄蜂は眞の遊びもので、体が大きくて大食をして、遊んで居て何もせぬ。而して時期が進んで夏になり、野に花が少くなると、かゝる澤山の遊びものがありては困るから、働蜂は之を追ひ出してしまうのです。若し強て入口を入ろうとすると、咬ひ殺してしまいます。其時の雄蜂の有樣は實に哀れで、働蜂のやりかたは甚だ慘酷の樣であるが、彼等が勤勉貯蓄の精神から割り出したら、又止むを得ぬ所でありませう。(未完)

## ◎昆蟲採集奇談（幻燈使用）　其二

昆蟲翁説明
鳴蟲女史筆記

(二)夜中採集に投石せられしを狐狸の仕業と信ず

これも今より二十餘年前、私の岐阜縣中學校に奉職してをりました頃、二年生か三年生でしたかそれはしつかり覺えもありませんが、なにしろ二十人程の一組でございました。其生徒等は私が毎夜金華山へ夜中採集に參りますのを、餘程面白いことの樣に思ひ羨しそうに、何度も私に向つて、夜中採集に連れて行つて下さいとしきりにたのみますけれども、私はそれを許しませんから、つひ校長にたのみましたそうです。すると校長は私に向つて、生徒等が切りに夜中採集に行きたがるから、一度同行してやつてくれよと云はれました。故に私もいやとは思ひましたけれども、校長の命令でしかたなくつれて行きました。所が二十人もですからそれを二組に分けまして、甲の組は千疊敷より、乙の組は丸山よりと二ケ所から採集する樣にいたしましたが、監督者は只私一人ですから、先づ甲の方より砂糖の塗り方を敎へ次に乙の方に砂糖を塗り、一時間程經て初めの甲組の方より蛾をとり初めました。所が御承知の通り、砂糖を酒に溶かして塗るのですから、蛾は酒に醉ふて面白く採れ、且只今とは違つて蛾は誠に多く居りましたので、生徒等は如何にも喜ばしそうに採集致しました。それから又乙組の方へ行つて見ますると、こちらでも大變面白く澤山採れますから大喜でありました。そこで折角皆が一生懸命に採集するから煎餅でも買つてきてやろうと思ひまして、其組々へ一時間程經つたら又先きの通りに廻る樣にと命じてをいて、私は只今で申しますと板屋町か今町邊であつたと思ふてゐますが、なにしろ煎餅を三十錢許り買ひ、あまり暗くありましたから提灯も買つて燈して參りました、所が其二組の者が皆一所に集まつてブルブルふるつて居りました。私は不思議に思つて、何をして居るかと尋ねましたら、生徒等は只今何物か分りませぬが石を投ちましたから、皆が驚愕して一所に集つて居りますと答へました。故に私は、それは必ず誰かわるさに石を投げたのであろうさもなくば、こゝには狸や狐が澤山居るが御前方の騷がしく云ふのに驚いて、逃ぐる際に石が轉つたものであろう、兎に角そう驚く事はない、さあ煎餅を買つて來たから、これを食べてもう一度廻ろうと申しましたら、餘計ブルブルとふるひかけました。初め私が誰かわるさに石をぶつたのであらうと申しました時はさ程でもありませんでしたが、狐や狸と申しましたからさあそこで一層こわくなつたものと見ゐて、顏の色も蒼ざめて、もう煎餅どころか　早く家へ歸

私もしかたなく家へ歸りませうと云ひかけまして、私がなんとすかしても少しも聞き入れませんから、

りました。されど其時は餘程おそろしくあつたものと見へて、一度で懲々して、其後はあれほど今迄連れて行て下さいと矢釜敷云ふたものが、一人として夜中採集の夜とも申さん樣になりまして、全く狐狸の仕業と信じて居つたのです。

其後十五六年も經つて、今から申せば五年程前の事でありましたが、彼の夜中採集に加はりました一人の生徒某、唯今は農學士になつて居りますものが私の家へ尋ねて參りまして申しますには、私は先生に對して誠に濟まぬ事を致しまして、只管御詫びをせねばならぬ事が御座います。嘗て先生の中學校に御奉職中、彼の金華山へ夜中採集に連れて行つて頂いた時に、石をぶちましたのは實は私でございました。誠にいたづらをいたしまして直ちにそこで自白をしようかと思ひましたけれども、餘り皆が恐れて居る所へ、先生が眞面目に、それは狸か狐であろうと仰せになりましたから、石を投げた自分までこはくなつて、遂に自白の勇氣が挫けてしまひましたですから、いつか折があつたら申上げ樣、又は手紙でゞも御わびを致そうかと實は今迄心配してをりましたが、今日と云ふ今日はこゝで其罪を御詫いたしますと申しました。私もそれを聞いた時は開いた口が塞がらず、暫し其顏を見つめて、アハヽヽ、あれは全く君でしたか、と自然に言葉の調子も長くなつた樣な次第で、それから暫く舊事を談じて大笑ひを致しましたが、其席に居合はしたものも思はず吹き出しました。其人は現今埼玉縣下に奉職中の某農學士であります。

夜中採集に投石の圖

（十四）

## ◎昆蟲文學

蠶　　非無散人

孵育如毛蚩蚩榮。千朝千夕益繁榮。陋居曾守彝倫信。蓐食忽聞人馬聲。事畢被烹元俊傑。功成避穀特高明。仙遊封爵非吾願。草莽潛蹤送此生。

### 雜詠

*臘月廿五日三川庵に昆蟲標本を見て作れる歌　　胡桃澤勘内

城山の木の下闇の古池に捕りて來しちふ松藻蟲かも

大平のこごしき山の峠越す馬につきけんこれの虻かも

白骨の山の温泉にして捕りきちふてんたうむしをけふ見つるかも

*　　坪内華外

うたたねの枕にひびくきりぎりす病めるわが子を知るや知らずや

*　　ふもとのや

酒造る倉の簷端の古巣にし冬ごもりせる蜂の音かも

*　　深井青海

螟蟲はなに儚むらん刈株に厚氷閉ぢ春いまだ來ず

*　　しらつゆ

なれもまた花のあまきにゑひし子か枯葉がうらにぬる冬の蝶

*　　潮音生

み雪積む冬をかしこみ大方の蟲けらだにも穴にこもれり

久方の雲さへ凍る冬の日は野にも山にも蟲を見ずけり

### 冬蜂

掛菜めぐるたどろへやうや冬の蜂　　松間生

枯木透く朝の光や冬の蜂　　同

藥草に灑いで行けば冬の蜂　　同

冬の蜂雛のたぞろを飛び出でし　松間生
枇杷の花の日向めぐるや冬の蜂　同
温室の外の木草や冬の蜂　同
日は煦煦と水仙畑や冬の蜂　同
花散つて蘂に蜂見る冬牡丹　琅々
南園の日南や雛や冬の蜂　同
藥干す山家の椽や冬の蜂　同
冬の蜂古巣を尋ね心かな　同
がらと鳴る鍔口冬の蜂出づる　同
冬の蜂の空飛ぶ一つ狂咲　同
巣を出でて飛びも去らずよ冬の蜂　四澤
わが窓の日向樂しめ冬の蜂　同
山茶花の散りたる蕋に冬の蜂　同
冬の蜂箱を出て日に並びけり　同
春を待つ熱海の宿や冬の蜂　歸麓園
冬の蜂萩枯れ立てる庵かな　同
冬の蜂爐を開くなる山家かな　同

冬の蜂水涸川の汀飛ぶ　歸麓園
冬の蜂柊垣に日の當る　城東
枯草の中に飛ばざる小蜂かな　同
柊の花に蜂見る日晴れたり　冷石
乾鮭の目をさして見よ冬の蜂　同
冬の蜂柊の花に來て去れり　去水
冬の蜂飛ぶ岡添の茶の木かな　同
垣高に山茶花咲けり冬の蜂　水村
蜂飛ぶや厠の窓の枇杷の花　同
冬日和足長蜂の巣を出づる　青海子
冬の蜂飛ぶ夕陽の堤かな　明笛子
冬の蜂藥園の霜の草に飛ぶ　寒愁
冬の蜂薔薇咲き絶えて來ずなりぬ　華園
冬の蜂昨日も見しが今日も飛ぶ　同
冬の蜂故人の窓となりにけり　同
冬の蜂庭草燒けば飛びにけり　同
冬の蜂把栗と語る窓に飛ぶ　同

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄（其二）

名和昆蟲研究所助手　小竹浩

（二）ツマグロヨコバヒ　稲作害蟲類中イチノズキムシに次ぎて恐るべき蟲にして、其大いさ一分五厘より二分位あり、全体綠色をなし、雄に限り翅のつま黒きを以てツマグロヨコバヒといふ。この蟲は、吸收口とて針の如き尖りたる口を以て稲莖にさしこみ、養液（稲の養ひとなる汁を養液といふ）を吸ふを以て往々收穫を皆無（一粒も米のとれざるを收穫皆無といふ）ならしむることあり。明治三十年に諸國に一向米がとれず、殆んど饑饉同樣の有樣なりしは、是等の蟲の害を受けたるためにして、誠に恐るべき害蟲なり。卵は圖の如き形にして、稲のハカマに產み、外より見ること能はず、孵化すれ

ば幼蟲は稻の養液を吸ひ、漸次成長して蛹となり、遂に羽化して產卵すること前の如し。かくの如く、苗代時期より秋の末に至る迄に四回、時としては五回も發生するものなれば、苗代時期に於て、此蟲の少なしとて油斷すれば、秋季に入りて甚だ多く繁殖（蟲の澤山にふゆるを繁殖といふ）することあり。且つ此の蟲は、斯樣にふえ方の早きと、幼蟲も、蛹も、成蟲も皆稻の養液を吸ふを以て、其害一層甚しく之れが爲めに、半作、又は一粒も米の穫れざることは屢々あることなり。天保時代に饑饉ありて、多くの人の饑え死せしは、これ等の蟲害を受けたる爲めなればかへすがへすも注意すべきことなり。

ツマグロヨコバヒの圖（雄）

驅除法　苗代田に於て、捕蟲器を以て掬ひ採るべし。この蟲は、苗代田に來りて第一回の產卵をなすを以て、此の時に驅除を怠れば、恰も害蟲の種を蒔くと等しく後日に至り大に困難を招くことあり、故に苗代田に於て悉く掬ひ採るを必要とす。これをなすには必ず短冊形苗代とて、幅四尺位、長さ適宜の長方形に苗を仕立て、其間に七八寸の道をつけ、自由に苗代に入りて驅除し得らるゝ樣になすべし。さすれば、此の蟲を驅除するに都合よきのみならず、色々の害蟲を驅除するにも最も便利なれば、是非短冊形苗代に改むると、時々捕蟲器を以て苗代田の害蟲を掬ひ採るとは、田植後に於て田の草を採ると等しく、農家の尤も必要なる仕事と心得ふべきなり。

ツマグロヨコバヒの卵塊の圖

ツマグロヨコバヒの圖（雌）

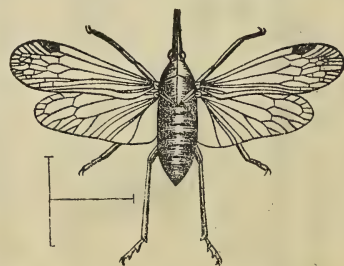
又本田に於て發生せしときは、一反歩一升乃至一升五合の石油を、稻葉にかゝらざる樣むらなく散布し、其中に拂ひ落して驅除すべし。此の時は、發生すれば成るべく早く行ふを宜しとす。若し遲くなるときは、蟲は大きくなり石油の分量を增さゞれば死せざるを以て、甚だ不利益のみならず、石油は稻を害するゆへ、これを澤山に用ふは宜しからず。故に、常に注意して、此の蟲の發生したる時は、直ちに驅除すべし。若し時機後れ、翅の生へたるもののあるに至れば、石油を散布して後、圓形捕蟲器を以て掬へば、一は石油に陷り、一は捕蟲器に入るべし。然れども、此の時には、甚だ困難なりと心得ふべし。

ヨコバヒの類は甚だ多く、稻を害するもののみにても、五十種程ありて、ツマグロヨコバヒを始め、ヨコバヒムシ（一名オホヨコバヒとも云ふ）フタテンヨコバヒ、ミツテンヨコバヒ　ヨツテンヨコバヒ、

ヒシモンヨコバヒ、イナズマヨコバヒ、ミドリヨコバヒ、コミドリヨコバヒ、トビイロウンカ、セジロウンカ、ヒシヨコバヒ、シマヨコバヒ、テングヨコバヒ等は普通なるものなり。今之れ等を昆蟲學上より云へば有吻目ヨコバヒ科、及びウスバヨコバヒ科に屬し、ツマグロヨコバヒ以下コミドリヨコバヒ等は前者（ヨコバヒ科を指す）にトビイロウンカ以下は後者（ウスバヨコバヒ科を云ふ）に屬す。俗にウンカといふは是等の總稱なり。多くは一年四回程發生し、普通幼蟲の有樣にて、日當りよき堤防の草の間、或は麥、紫雲英等の中に入りて越冬し、翌年出でて稻を害するものなり故に捕蟲器を以て掬ふときは、幾種も其內に入ることあり。かく種類多く、從て其害甚しければ、常に其心して、多く繁殖せざる內に驅除し、一粒たりとも害せられざる樣注意するは、軍國に處する良民といふべし。

テングヨコバヒの圖

トビイロウンカの圖

（イ）成蟲（ロ）前翅（ハ）後翅

## ◎昆蟲實驗錄（六）

静岡縣　神村直三郎

一一、ツマグロムシヒキアブ交尾法　明治三十七年七月廿日これを見る、雌蟲は木の枝に靜止し、雄は五六寸を隔てたる所にて、空中に止まりて美音を發し、或は前に回り或は後に回り、右より左より、雌蟲に向つて其音を弄す、これ意を通ずるのためか。此時に雌は翅を整へて、塵埃を掃ふ如き擧動をなす。これは重に後肢を以てす、斯の如きこと數分間にして、雄が雌の後方二寸許の所に進むと見るがうちに、一躍して雌の背上に密着す、其時雄は、雌の翅上より胸部を中後の四肢にて緊抱し、前肢二本を以て雌の頭を拍つこと數十次、やがて雄は腹端を以て雌の腹端を探り、其端に達するや雌雄腹端を密着し、雄は其体を反對の方向に轉じ、雌の止り居る枝を緊抱す、此時兩腹端は依然密着してあり、かくて兩蟲靜止の間一分間斗り、其時兩蟲の腹端杠起すると見るがうちに、雄蟲は己が腹端を以て強く雌蟲の

腹端を衝くことを初む、其衝くや一秒半位のうちに一回づゝ衝き、遂に百二十回に至りて忽ち止めて飛去る、これは該蟲交尾法の正則か變則か知らねど、見たるまゝを報ずるのみ。

一二、アリヂゴクの一種　本年一月四日冬期採集を試む、或る堤塘にて捕獲したるものは、スナムグリ、クロスナムグリ、サビキコリの一種、マルガメムシ、スナムグリガメムシ、ゴミムシの一種、チヤバチゴキブリの幼蟲、等なりし、これ等と同じく小石の下に潜伏せるアリヂゴクの一種を捕へたり。其体は砂中に居るものより大形にして、茶褐色に黒味を帶びたり。普通種も今予が家族の一として愛養中なるが、其体格遙かに小なり。試にこれを比較するに、二倍大なり。このもの果して何種に羽化するや今疑問なり、知る人あらば垂教を惜しむなからんことを希ふ。

## ◎蟻に寄生する冬蟲夏草

岐阜縣惠那郡坂下村　原　攝祐

本邦古來冬蟲夏草、或は夏草冬蟲とも稱し、冬は蟲にして、夏に至れば化して草となるなりと言傳へたれども、是腐草化して螢となると云へる謬説と同一なるなり。然して蟬に寄生したるものを蟬花等と稱し、藥劑に供したりと云ふ。余は昨年四月廿九日、蟻に寄生したる一種の冬蟲夏草を發見せるを以て、理學士白井光太郎氏に菌種の鑑定を依頼せしに、Cordyceps aubunilateralis, P. Henningと稱する種類に相當する樣と報ぜらる、茲に氏の厚意を謝すると同時に、左に蟻蕈(新稱)に付き其大畧を記せんとす。而して彼の菌類中には動物に、或は植物に寄生し、大害をなすもの多し。是も亦菌類の昆蟲体に寄生して、其子實體が地上に顯れたるものにして、即ち本體は菌類と昆蟲との合體物なり。

蟻蕈は蟻體に簇生して、高さ三分五厘乃至七分五厘(余の採集品に就て)帽部と柄部を具へ、且つ帽部と柄部を明に區劃さる。帽部は橙黃色にして通常圓形なれども、少しく頂上に於て尖れり。脛大なるものは一分內外を有す。然れども柄部は上に帽部を戴き、色橙黃色を呈す、基部に達するに從ひ少しく濃色を減し、砂等の爲めか屈曲し、菌體は强靭にして折れ難し。胞子は紡錘形を呈し、無色にして二細胞より成れり。

イ　ロ

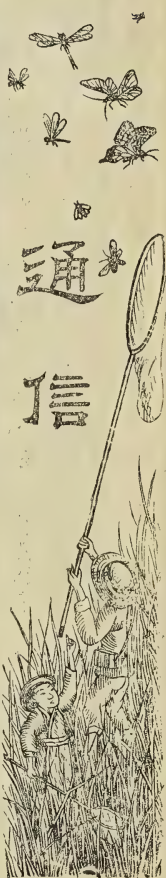
蟻蕈の圖
(イ)は自然大
(ロ)は其胞子の放大

# ◎燕と昆蟲に就て

廣島縣芦品郡岩谷村　橋高勉三

燕と昆蟲とは密接の關係を有するものにして、彼を保護鳥として最も價値あるは、東西學者の齊しく許す所にして、古來より學者の研究せし者少からず。ツライオン氏の如きは、一日に五百四十三頭の蟲類を食すると云ひ、又或學者の如きは、一番の燕は一日に六千四百の蟲類を捕食すと云ひ、米國の學者クランレンス、ウヰード氏の如きは、非常に綿密なる觀察を遂げられたり。我國も既に茲に見る所ありて、先年法令を以て、殺禁鳥の一として、年中彼の捕殺を禁ずる所なり。且つ余が地方は、稲苗移植後、種々の方法にて彼の便益を與ふもの多し。然るに、余は仔鳥の捕育に蜻蛉の餘り多きと、且つ悉く成蟲のみなるとに疑を起し、遂に昨年八月廿日午前六時より午后七時迄、凡そ十時間程觀察せしに、意外にも面白き事實を發見せしかば、之を本誌に寄せて諸士の叱正を乞ふ所以なり。

即ち、此間蟲類を啄み來りし回數百三十五回にして、內譯蜻蛉五十二回、粉蝶科十八回、虻、蠅の如きもの八回、蟬二回、物名不明五十八回、但し燕の仔は五頭にして、親鳥一番なりき。然るに學者ウヰード氏は六月廿二日午前三時四十分より午後七時五十分迄觀察せられしに、此間蟲類を啄み來りし回數百八十三回にして、物質の大畧には夜盜蟲、青蟲類、鱗翅類等の幼蟲、カガンボ、螽蟖、其他數多の蟬にして、仔鳥の食飼なるを以て、是等軟体を有する仔蟲なりしと。

斯の如く、余が面白き事實と稱するは、學者ウヰード氏の觀察と其趣きを異にすること是れなり。何故に氏の觀察の如く雛の食物として幼蟲を與へざりしか、又何故に益蟲の總大將たる蜻蛉の多かりしやと云ふに唯一回の觀察なるを以て明言する能はざれども、燕は他の雀、雲雀等とは異り、常に空中を飛翔して食を求むるものにして、決して地上又は植物葉上に靜止せる蟲類を食するものに在らず、且孵化後の日數の多少に依りて食物の性質を異にするものならんか。即ち、余の驗せしは、巣を出る十二三日前なりしを以て、從て軟体を有する食物を與ふる必要なきものゝ如し。若し然らざるものとすれば、一回たりとも幼蟲あるべき筈なるべし。然るに、一度も斯る事なかりしを以て見れば、右の事實に依り、斯く成蟲のみを與へたるなるべし。且つ又トンボの如きは食飼として最も不適當なるものゝ如くなれども五十二回の多きに登りしを以て見れば、全く巣立前は、軟体を有する食物を與ふる必要少なきと、其當時はトンボの發生最も多き時季なりしを以て、斯くトンボの多かりしに依るならんか。

## ◎渥美郡農會螟蟲驅除の結果

愛知縣渥美郡農會

本郡農會は、明治三十七年度に於て、本郡各町村農會をして螟蟲驅除を勵行せしめ、螟蟲卵塊五百個、若くは螟蟲喰入莖五百本を採集したるものには、懸賞抽籤券一枚を交付せしに、其採集高四百拾七萬二千六百四十三個に上り、抽籤券七千六百九拾五枚に達し、之れが抽籤を、去る一月十七日午后一時、郡衙樓上に於て、郡農會長及職員、各町村長其他四名の委員を立會はしめ、盲啞學校生徒の盲者をして抽籤をなさしめたり。而して最多數の抽籤券を得たるもの三名に對し特に賞を與へたるに、其一等者得券五拾一枚、二等三等各五十枚つゝなりき。

本豫算總額は百五拾圓にして、一等より六等に區分し、一等金貳圓、以下六等金拾錢に等差を付したるに、一人にして最高當籤者は金四圓八拾錢を得たり。該採集者は重に小學校生徒にして、皆貯金に充つるの方法とせり。以上の結果にして大に驅除の効果を奏したれば、本年も同樣勵行する豫定なり。

## ◎三重縣農會養蜂講習會の概況

三重縣農會

三重縣農會養蜂講習會は、明治三十七年十二月十六日より六日間、本會事務所樓上に於て開設せり、該開設の目的たるや、戰時紀念として、一郡農會へ種蜂二群づゝ、市農會へ同一群づゝ、及之れに對する改良巢箱を配付し、漸次繁殖せしめ、斯業を一般に普及奬勵せんとするにあり。依て郡市農會に於て飼育者を選拔せしめ、一人一個を擔當せしむることゝせり。然れども、單に種蜂を配付するも、其飼育法を知得せざるに於ては、折角企圖せし事業も充分の成蹟を見る能はず、寧ろ失敗に皈すべきを慮り、此等飼育擔當者三十一名を召集し、前以て飼育法を講習せしむるの必要を認めしに依り、特に講習會を開設するに至りたるなり。然るに定員外の講習志願者非常に多く、總員八十二名に達せり、然れども、會場に限りあるを以て、悉く其希望を充すこと能はず、故に不得已定員外の志願者は、抽籤を以て採用することゝし、總て六十二名を入會せしめたり。講師は箱根養蜂場主、青柳浩次郎氏を招聘し、毎日午前九時

より同十二時まで、午後一時より同四時まで、六時間つゝ蜜蜂の生態、性質、改良巣箱取扱管理、採蜜其他器具の使用法等に就き、懇篤に教授せられたり。亦夜間は午後六時より同八時まで、研究會を設けて講習生の質問を許し、或は從來飼育者の失敗談、經驗談等をなさしめたり。故に講習期間は甚だ短少なりしと雖も、講師其人を得たると、生徒の熱心なりしとに依り、佳良の成蹟を擧げ、殊に從來飼育者の如きは一層の感動を與へたり。十二月廿一日、六十二名の講習生に對し習得證書授與式を擧行せり、習得者の住所氏名別紙の如し(別紙略す)。因に種蜂及改良巣箱は好時期を待ち之れが配付をなすべし。

## ◎昆蟲に關する葉書通信（四十七報）

(一二六四)ギフテフの分布とオホルリシヾミの食草(岩代國河沼郡若安村新國豊七報)
本年四月下旬、河沼郡正中村大久保山に採集を試みしに、山上に於て岐阜蝶を獲、及び其近傍にて該食草ウスバサイシンをも採集致し候。次に同五月下旬、オホルリシヾミの翩々田畔を縫ひて來往し、荳科植物の苦參に産卵するを認め、早速飼育を試みしに、不結果に了り候は甚だ殘念に存じ候。又其後ルリシヾミも苦參に産卵するを多く見受け申候。名和先生の御說によれば、ルリシヾミは樫の嫩葉を食するやに承り居候も、當會津地方には、樫は更に無之候ゆへ、何か他の殼斗科植物を食するやと疑ひ居候處不圖該蝶のクララに産卵するを實見仕候、右三件御通報申上候。(三十七年十二月廿五日付)

(一二六五)韓國産昆蟲の二三(靜岡縣志太郡靜濱村增田秀雄)　予が親戚中、先き頃韓國に渡航、木浦に在住せる一少年ありしを以て、昆蟲採集を依頼したりしに、左の品々に韓名を付して送り越したれば、左に御報申上候。

| 和名 | 韓名 | 採集月日 | 和名 | 韓名 | 採集月日 |
|---|---|---|---|---|---|
| カノコモンガ | チエルキン、ナプ | 六月 上旬 | 蜂 | プリ | |
| モンシロテフ | ナプ(蝶) | 六月 中旬 | モヽスヾメ | パッポリ | 八月 中旬 |
| ハヘ | ポリ | | シヤウジヤウトンボの雌に似たるもの | ホンチヨルギー(虎トンボ) | 八月 下旬 |
| ツノトンボ | セーミチヨルギー | 七月廿六日 | イトトンボ | コチケンチヤリ(唐ガラシトンボ) | 八月 下旬 |
| イラムシノガの一種 | ノランナプ(黄蝶) | 八月 下旬 | セスヂスヽメ | パップリ(火消蝶) | 七月下旬(燈火に來る) |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| アブ | ウルボリ(蜜蠅) | 九月上旬 | メンガタスヾメ | ツクンバツボリ | 七月廿六日 |
| ビロウドトモヱ | ボンナブ(虎蝶) | 九月上旬 | エビガラスヾメ | パツポョ(火蝶) | 八月上旬 |
| クマアリ | ケーミ | | ハムシノ一種 | タクテポルケヂー | 八月下旬 |

●●●(一五八五八)デシンフエクトールの蚜蟲に對する驅除の効果（靜岡縣濱名郡蠶業學校內大橋慧逸）　余は明治三十七年十一月廿七日、蕪菁に發生せる蚜蟲を驅除せんと欲し、デシンフエクトール(Desinfectol)一グラムを百グラムの水に溶解し、噴霧器を以て該蚜蟲に撒布し、翌日之れを見しに、小なるものは死したるも大なるものは死せざりき。依て十二月四日、再び一グラムのデシンフエクトールを、百倍の水に溶きたるものを甲區に、七十五倍のものを乙區に、五十倍のものを丙區に、廿五倍に溶きたるものを丁區に、前の如く噴霧器を以て撒布したり。其結果丁、丙の兩區は二、三時間にして斃れ、乙區は數時間の後斃れ、甲區は半日を經るも僅に一部分斃れたるのみなりし。之れを以て見るに、七十五倍內外の稀薄液として、蚜蟲驅除に用ふれば、其効果大なりとす。茲に予が實驗の顛末を報じて、讀者の參考に供せんとす、因に記すデシンフエクトールは樟腦を製する時に出來るものにして、藥學博士下山順一郎先生の發明に係り、臺灣總督府專賣局にて製劑し、處々の藥店にて販賣す、一瓶の價三十二錢、罐入は廿八錢なり。

# 雜報

●本號口繪の説明　同口繪は本年一月廿三日、當所の溫室にて培養せし梅樹の盆栽に、昆蟲數種が音訪れし實況を、圖畫係補助名和愛吉氏の寫生せられしものにて、之れが説明を本號に掲ぐる手筈なりしも、紙面の都合により次號に讓ること丶なれり、讀者諒せよ。

●近刊雜誌中の昆蟲記事短評（其一）（石田鼓蟲生）　本號より、近刊雜誌中の昆蟲記事短評を掲載すべきを、前號に於て報告ありしが、予は該記事を擔當すべき事となりぬ。然れども適當なる批評を下さんとせば、其物に精通したる能力思想を有するものに非らざれば能はず、殊に昆蟲界の緲望とし

て廣き、全般に渉り之を云々するが如き、到底予輩の成し能ふ所にあらずして、無暴に非らざれば盲蛇的の誹りを免れざるべし。加ふるに鼓蟲生二對の複眼を以て、きり〳〵まい〳〵の忙中、暇を竊みて、慾深くも各地農界及理學界より流れ來れる、近刊雜誌中の昆蟲記事を探し出して、隨感隨記盲評を加ふるもの、如何でか滿足の批評の出來得べき、故に只其記事の照會に過ぎざるもの多し、讀者之を諒せよ。

●果物雜誌第九十五號論說欄に於て、秋季に於る苹果綿蟲驅除試驗と題し、西ヶ原農事試驗場昆蟲部主任小貫信太郎氏が、農商務省農事試驗場報告第三十號に發表せられたる記事と同一の者を記載せられ、且同誌雜錄中には、靜岡縣農事試驗場技手岡田忠男氏の實驗に依りて、本誌に連載したる柑橘害蟲篇と同じき記事あり。

●新農報第七十號雜錄欄には、本年の氣候と浮塵子に就てと題し、香川縣多度津測候所員前田直吉氏は三十七年夏秋の頃に於ける氣候中、温度の寡少なるは氣温較着の著大なる事近年稀なる所にして、此現象こそ、浮塵子の發生を減滅せしめ、其蔓延を防止したる主力ならんと信ず云々と、既往の暑候に於ける氣温比較等を引て其理由を解說せらる。氣候と昆蟲の關係は、相須て離るべからざる者、測候所員として之の說をなすは、鼓蟲生の歡迎する所なり。

●大農園第四十二號稼穡欄に於ける、螟蟲驅除に就てと題する記事は、靜岡縣農界に其名ある山本勘三郎氏が、螟蟲驅除の必要より其習性經過を說かれたるものにして、其成蟲の驅除法としては誘蛾燈の有効なる所以を述べ、其他の驅除も忽にすべからざるを論じたるが、氏の所說中、螟蟲が水分缺乏の爲め藁の中にて羽化せられざる事、及脫皮の當時水分を要するが故に、脫皮早々其翅を乾燥せしめん爲め火に寄るを以て產卵后の者は燈火を慕ふことなき云々の臆說を立て、僅々十三日間の簡單なる試驗に依り證據立せらるゝは、一縣の老農たる山本氏としては遺憾なき能はず。

●農事雜報第七十九號に、小學校生徒の害蟲驅除と題し、堀正太郎氏は、小學生徒の害蟲驅除は、往々各地に見受くる所なるが、之に就て絕對的反對を唱ふる者あり、そは害蟲驅除の方針が、實際に於て實物敎育及實地示導の目的が貫徹せずして、只管害蟲驅除に利用して農家の手助を主とし、敎育の本旨を遠ざかるの傾あるを以てなり。若し之を敎育の精神に基き、必要なる敎育事業の一として、實地示導に適應の驅除をせしめたらんには農村地方の驅除を全たからしめ、利する處多からんとて其方法を說明せらる。

又同誌に西ヶ原農事試驗塲員町田貞一氏は、果樹の害蟲褐色蟻の驅除法と題し、果樹害蟲褐色蟻の習性經過及被害の狀況より、引て之が驅除法に及び、バーレット氏の試驗せし藥劑、ギーデルベント及アントキラの製法を示されたり。

又同誌に、サンホゼー貝殼蟲に關する調査と題し、該蟲の天然驅除と本邦の關係を說いて、本邦にヒメアカボシテントウムシ及猩紅菌なる天敵の多きは、是れ貝殼蟲の原產地とすべき證なりとの說を辨駁し次に米國加州に普通使用する驅除劑に就き、農商務省農事試驗塲の報告を記載せられ、尙又靜岡縣山瀨英德氏の「蜜蜂蜂王の隔王板を出づるに就て世說を辨明す」等の記事あり

●今昔の感……農科大學の新設を望む　此一節は岐阜病院長醫學士佐々木曠氏の寄稿にして、當研究所の建物の一部が、甞て醫學校の有たりし際、同氏は數年間此建物の中に教鞭を執られ、當所とは宿緣淺からざる人なりしが、今回の移轉に際し、今昔の感に堪へずとて、當所に寄せられたるものなるも、昆蟲の記事に非らざるを以て其儘函底に收められしが、編者之を見て亦今昔の感に堪へず、依て今回特に所長に乞ひ、茲に揭ぐること丶なしぬ。

名和昆蟲研究所が是れ迄當市京町にありしもの、今回此公園地に移されたり。名和君が蟲類研究の爲めには、生ける倉庫即ち無盡の寶藏とも謂つべき金華山あり、名も芽出度富の本とて、此富茂登の勝地を占領せられたるを慶ぶと共に、余が感慨止めんとして禁ずる克はざるものあり。乃ち上圖の如く當研究所の本舘ともいふべき一樓閣の棟上、羅馬字「イマ」を記したるものにして、余曾て數年間此建物の內に教鞭を執りしことありて、實に今昔の感に堪へざるなり。回顧すれば今を距る二十三年前、即ち明治十六年、余が始めて當地に來りし頃、岐阜縣の學事は早已に頗る進步し、中學、師範は勿論、醫學校あり農學校あり、又女學校も盛にして殆んど四隣を壓倒せん勢なりし。然るに當時未だ人智開けず、農學の價値を認むること能はざるが爲め、折角設置したる農學校は縣會の否決するところとなり、反之醫學校の必要利益を唱ふること盛んにして、農學校々舍を醫學校構內に移築し、乙種を改めて甲種の學校に進めんとの設備中なりしが、不幸にして其頃縣下に非常の洪水あり、被害多大なりし爲め醫學校擴張の計畫は中止せられ、而して農學校の廢止は決行せられたり。爲めに醫學校の建築も見合となり、不取敢南隣に在りし今泉小學校を買入れ、醫學教場となしたるは即ち此建物なり。

明治二十年勅令第四十八號を以て乙種醫學校を廢止し、加ふるに地方稅を以て醫學校費を支辨することを禁ぜられ、(地方醫學校撲滅策) 大坂、京都、名古屋の如き基本金ある醫學校のみ存續するを得ること丶なれり。京童「森が通れば道理引込み」「有禮が出れば舞臺が暗くなり」と云ひしは此時なりし。其後此建物は病院の一部に使用せられ、明治廿八九年の頃、此名和昆蟲研究所創設に當て、

特に紀念とすべき名和昆蟲研究所建物一部の圖

京町縣農會構内に移築せられ、今又再び此地に轉建せらるゝことなれり此間殆んど三十年、此建物は種々なる事情に遭遇し、吾人に樣々の感動を與へたり。第一、農學校の身代として醫學校に買ひ入れられ。第二、農學校の後繼者として名和昆蟲研究所の創立を助け、實に名和君の當岐阜縣の退去を抑留したるは此の建物なり。第三、名和君に隨陪して今回の移築に加はり、其幹部の建物となる。第四、農學校再興の計畫は、縣農會の建議として多く此建物内に協定せられたり。第五として尙ほ一の大なる希望を此建物に屬せんとするは、戰後經營の一要件として、政府が岐阜縣下に、京都大學の一分科なる、農科大學を新設するの議を、同感諸君と研究せんこと是なり。縣下農業に好適の地方たるは勿論。山林に牧畜に少しく斯の道に志ある人は、殆んど他に競爭の地方なきを信ぜらるべし。余は醫學校の再興を斷念すると同時に、少くも縣下に農科大學を新設して、以て本研究所の活動を愈旺盛ならしめんことを切望するなり。冀くば此金花咲山の富本は、永く昆蟲王の居城となり、寄せ來る俗論を擊破し、常に富國の策を回らし、又征露の紀念となりて、戰後經營の一として、農科大學新設の根基とならんことを。

◎迷信を覺醒して標本箱を得　第七回岐阜縣短期害蟲驅除講習修了證書授與式に際し、廣瀨警部の演説中に、迷信を覺醒して標本箱を得たる云々の事を話されたるが（本誌前號雜報欄内にあり）そは當所に元特別研究生として入所せられたる、笹島鐐治君の寄稿せられしものと同事實なれば、そをこゝに紹介することゝなしぬ

本年（明治三十七年）稻作害蟲驅除督勵に付ては、四方八方に馳け廻り、泣くが如く訴ふるが如く、或は利害を說き或は威嚇し、自分ながら感心

する迄に盡したるも、結果思ふ萬分の一にも屆かざりしが、根氣負けせぬ勢にて、幾分は害蟲社會に恐慌を惹起さしめたることゝ信ぜり。其の間にも、講習を受けし賜の、著るしく光りを放ちたる一珍事あり。頃は本年七月二十五日、稻作害蟲驅除督勵の爲め、武儀郡下有知村に出張し、區長、組長、其の他重立ちたる輩三十余名を同村役塲に召集し、驅除方法、及び督勵の順序を懇話せしに、カジ蟲發生の事に及び、同村內有力者某は、カジ蟲の發生に付實地研究する事既に三年余の久しきに渉るも、未だ其親を認めず、子供も見ず、確かに朝露の化するものにて、北風吹かば一夜に稻葉を卷き綴るものなれば、之等に對して驅除の効はなきなり。昔より言ひ傳ふるに「カジ蟲曰くカジ捕るより俵あめ」と堂々辨じたるより、予は其發生經過に付說き聞せたるも、鼻息に吐き中々承知せず、尙曰く、若しカジ蟲がイチモジセヽリとか云ふ蝶にて、又其の卵などがあれば、一粒拾錢づゝにて買求むべしと述ぶるより、大に面白く思ひ、會合の者保証にて、カジ蟲の卵賣買契約を締結せり。同日歸途、恰もイチモジセヽリ雌雄を得て持ち歸り、硝子壜に放ち置きたるに、半圓球狀蠶卵位の卵數個を、点々壜中に產附せり。而して數日の後孵化したるより、撿蟲鏡にて閱するに、頭部の黑色にて、其の幼蟲の判然たるより、之れを携へ同人宅を訪ひ、役塲に赴きたり。之れより先、カジ蟲の產卵しある稻を集めて紅鉢に植へ、役塲內及び同人宅に於て試驗せしめ置きたるに、予の出張の前夜、共に孵化し、僅かに葉の一隅を卷き、棲息するに至りたるを實見し居る折柄なりしより、同人に對し、迷信忘想は覺醒したるかと問ふに、頭をかき〳〵、出るは出ましたと赤面し居るより豫ての契約は必ず履行せらるべし、去りながら、今多額の金を受けん事を欲せず、將來如斯迷信者を諭くの一大幸運に遭遇したるものなれば、幸に昆蟲標本箱一ヶの寄贈を受くべし、其の箱に事の始末を特筆大書し、永久保存する事とすべしと談じ、遂に之れを受くる事とせり。爾來、同氏は能く害蟲驅除に盡力するに至り、且同村附近、相傳へて大に迷信を破る事を得たり。

◉**福岡地方の昆蟲方名**　筑前國福岡地方の昆蟲方名を聞き得たれば、左に之を掲ぐ。但し、同地方にて普通に稱ふる名にして、和名と一致せるものをも記せり。而して平假名は和名にして、弧線內の片假名は方名と知るべし。

しみ（キンキリムシ）　さびむし（トビムシ）　はさみむし（ハサミムシ）　ごきぶり（ゴキカブリ）
ちやばねあぶらむし（イゴ）　かまきり（カマキリ、カマキッチヤウ）　はたをり（ハタハタ）　いなご（イナゴ）
きりぎりす（キリギリス）　うまれひむし（ジッタ）　くつわむし（クダマキ）　こほろぎ（ツヾレサシ）
まつむし（チンチロリン）　すずむし（スズムシ）　けら（ケラ）　はむし（ハジラミ）
しろあり（ウンヅウ）　とんぼ類（ヤンマ又はエンバ）　ありぢごく（オジヨオジヨ）　はぐろとんぼ（オハグロトンボ）
いさごむし（セムシ）　しらみ（シラミ）　あぶらむし（蚜蟲）（ヨダレ）　うんか（コヌカムシ、サ子モリムシ）

あをばゝごろも(チャウジャドン)　つくつくぼうしぜみ(ツクツクイツシヤウ)　くませみ(カタビラセミ、ワシワシセミ)
あぶらぜみ(ユウセミ)　はるぜみ(マツセミ)　にいにいぜみ(チイチイゼミ)　ひぐらしぜみ(ヒグラシ)
たがめ(タガメ)　あめんぼ(アメタカサウ)　かめむし類(ホウ又はフウ)　のみ(ノミ)
いへばい(ハイ)　くろばい(ケソバイ)　あぶ(アブ)　ぶゆ(ブト)
かがんぼ(カノンバ)　か(カ)　やぶか(ヤブカ)　よさうむし(ヨアラシ)
くわご(ノガイコ)　かひこ(カヒコ)　やままゆ(ヤママイ)　くりむしの蛾(クスマイ)
天蛾類(ウチスヾメ)　もんしろてふ(シロザヤウチヤウ)　きてふ(ウコンザヤウチヤウ)　あげはのてふ(ヤマザヤウチヤウ)
くろあげは(オハグロザヤウチヤウ)　うりはむし(ウリバイ)　天牛類(カミキリムシ)　ほたる(ホタル)
こめつきむし(コメツキムシ)　きくすゐ(キクス井)　たまむし(タマムシ)　うばたまむし(クロタマムシ)
ぶがれむし類(ブドウ)　かぶとむし(カブトムシ)　がつをぶしむし(カツヲムシ)　みづすまし(カイモチカキ)
三井寺はんめう(ヘヘリムシ)　がむし幼虫(タビヲクチ)　まいまいがぶり(ビハムシ)　みちをしへ(ハンメウ)
アシナガバチ(アシナガバチ)　やまばち(クマバチ)　みつばち(ミツバチ)　ぢばち(アナバチ)
はあふきむし(クチナハノツバ)

●姫象鼻蟲共同驅除　普通農家の狀態として、冬期農業の閑散なる時期は座食安逸を貪り、貴重の時日を空費するもの尠なしとせず、是れ甚だ惜むべきことにして、一般農家に於ては、此の農閑の冬期を利用し施設すべき事業多く、特に桑樹の一大害蟲たる姫象鼻蟲の如きは、此の冬期を利用せざれば遂に之れを行ふの時期なきを以て、當局者は之れが奬勵を怠らざりし甲斐ありて、去る一月及本月中に稻葉、揖斐、不破、本巣、山縣、郡上、土岐、惠那、大野等の各郡は、夫々日割を定め、郡役所より監督員を派遣して共同驅除を施行し、大略之れを終りしが、今尙一部勵行中なり。何れも此の冬季農閑の好期を利用せられたきものにこそ。

●赤坂進德會の一月一日　愛知縣渥美郡赤坂高等小學校に於て、一月一日の儀式を例の如く行ひ、負傷歸鄉軍人永井、磯野兩氏に義勇奉公の實見談を乞ひて、忠君愛國の心を發揮せしめ、式後昨年採集せし螟蟲卵の數に應じ賞與を行ひたり、其法は賞品を五等五百四十二點に分ち、五百四十二本の籤を作り、卵塊百に對し、くじ一本つゝを抽かしむることゝなし、四年生は採卵の監督をなしたる功により其功勞のくじ一人に一本つゝひかしめたり。而して昨三十七年螟蟲卵採集の總數四萬七千百七十一塊

の内、一人の採集最多數三千五百二十五個なりと、本年一月廿一日發行の良友新誌に見えたり。

●俳句新題としての昆蟲　雜誌ははき木の近刊誌上に掲載せられし上原三川氏の俳句新題に關する所説の一節を左に紹介す。

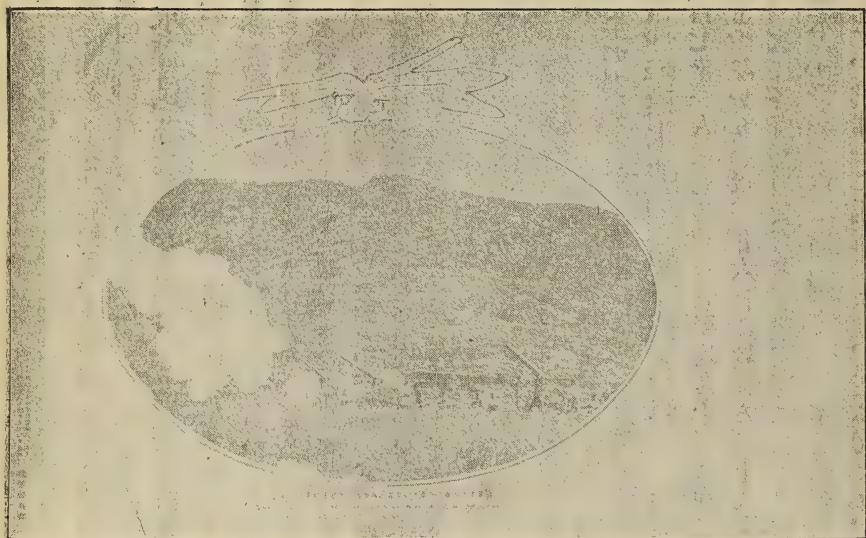
……過般岐阜の名和昆蟲研究所にて、雜誌昆蟲世界の文學欄で、松藻蟲の俳句を募集した事がある。松藻蟲といふ名は知らないにせよ、其實物は人がよく知つて居るものである。斯く普通目睹する所のものでも、今までの歳事記に洩れて居るものがいくらもあるから、斯る題はどし／＼新題として詠むがよからうと思ふ。尤も此等は新事物といふ方でなく、古人の見落しておいたのを拾ひ上げるのであるが、古人に作例がないので之を詠むのは頗る趣味の多い事である。（中畧）。新題については、諸君が試みに、春夏秋冬何れの季に入るべきかを觀らるるも一興であらう。それが直に決定せらるる樣なのは、即ち適當なる新好題目であらうと思ふ。尤も其中既に季のものとして詠まれたものがあるかも知れぬが、それは兎も角、玆に新題を詠むについての一つの希望は、成る可く他の季のものを配合せずに詠む事である。然なければ、却つて他の季のものが主となつて、折角新題として詠んだ積りでも、單に配合の景物視せられて仕舞ふのである、併しこれは最初の内の事で、既に季のものとして汎く認定された以上は、斯る希望は無用に歸するのは勿論である云云。

尚吾人は俳句の新題とすべき昆蟲の季に關して、他日論ずる所あるべし。

●名和梅吉氏の消息　豫て米國へ留學中なりし當所調査主任名和梅吉氏は、今や研究を終へ各地の昆蟲學大家を訪問中、ヒラデルヒヤ市にて應用昆蟲學者の大會合あるに際し、マーラット氏に伴ひ客冬廿八日同市に足を留め、ハワード氏等の紹介により、同會に列席して其得る處尠なからず、研究上の愉快は一層の愉快となり、未だ曾て感ぜざりし新春を向へられし由、尚來る三月末には歸朝の旨ワシトン府より通報ありしが、定めて歸朝の際は昆蟲學上多大の土産を持ち歸らるゝは勿論、隨て本誌上に一大光彩を添らるゝこと、期して待つべきなり。

●森宗太郎氏の消息　當所助手森宗太郎氏は、豫て第一軍後備として召集せられ出征中なりしが幸に未だ一彈をも蒙らず、無事軍務に從事中、突然旅順開城の報に接し愉快禁ずる能はず、依て紀念として、寒威肌を裂く滿州の某地に於て、一月三日早朝より冬季昆蟲採集を試み、紀念の昆蟲十數頭を獲たれば不日郵送すべしとて、此程通報ありたり。嗚呼敵前に於て、尚昆蟲の念頭を去らざる、同氏の熱心想ふべし。

●出征軍人石垣氏の熱誠　寒威猛烈錐を刺すが如き遼東の野に、暴露懲膺の大任を負ひ、非常

石垣氏送付の昆蟲模樣付繪葉書の圖

の辛慘を嘗めつゝある間と雖も、昆蟲學なる三字は寸時も念頭を去らしめず、暇あらば之が調査に餘念なきの士は、當所開設の第十三回全國害蟲驅除講習會を修業したる石垣友市氏其人なりとす。氏今や其名を與平次と改め出征後備第〇〇〇聯隊の配下にあり、嘗て當所移轉擴張の事を翼賛せられ、今回上圖の昆蟲繪葉書、及全員に左の書面を添へ送付せられたるを以て、聊か茲に氏の熱誠を紹介することとなしぬ。

謹啓、時下沍寒の候、先生益々御健全にて斯業擴張の爲御移轉の段、實に國家の爲め奉慶賀候。次に小生無事軍務に從事致居り候間乍憚御休心被下度候。就ては、今回御郵送に相成候昆蟲世界、本月五日着、慥に落手仕候間御安心被下度候。又森宗太郎君も、御病氣平癒致し時々面會して昆蟲上の話をなし相互に樂み居り候。扨小生も何か御送り致度存じ居り候得共、別に余財も無之、僅かの日給の事故、實に恥ヶ敷くて差出すも恐れ入る次第には候得共、御移轉費中へ金子壹圓寄附仕度候間、御受納被下候はゞ幸甚の至りに御座候。又今回恤兵部より給與せられたる繪葉書一枚、昆蟲模樣の付きたるもの御送り申上候故合せて御受取の程偏に奉願候。先づは先生の御厚意の御禮迄、斯の如くに御座候、早々以上。

一月九日　　石垣與平次

◉岐阜縣昆蟲學會記事　同會第七十四回月次會は、本月四日午後一時より、例に依り當昆蟲研究所內に開會し、第一席清水森三郎氏は、愛媛縣周桑郡地方に於

ける害蟲驅除の狀況を語られ、第二席穗岐山巖氏は、高知縣に於ける大螟蟲の習性經過より、其驅除の方法に說き及ぼして實驗の結果を報告せらる。第三席石田和三郎氏は、二化生螟蟲が冬季越年の狀態より驅除豫防の方法に就き、各方面より試驗したる結果を報じ、後一同茶を喫しながら昆蟲雜談に移り、午後四時閉會したり。

◉**水曜昆蟲談話會記事**　當研究所員幷に特別研究生の催に係る水曜昆蟲談話會は、前號報告後に於ける談話の要項を一括すれば左の如し。

●小竹浩氏は、ガムシとゲンゴロウムシとを比較し、ガムシは觸角六節乃至九節、棍棒狀にして短く、体の背面高く胸部の裏面に一本の銳き刺ありて、後肢の爪は分裂し、ゲンゴロウムシは觸角糸狀、若しくは鞭狀にして長く、十節乃至十一節よりなり、肢の爪は一本。背は高からずして、雄の前肢の跗節は掌狀をなすと、實物に依て說明せられ●名和正氏は、實用的驅除劑の一二と題し、石油乳劑松脂合劑、コールタール合劑及びボルドー合劑の四種に就き、簡單に其効用をとかれ●石田和三郎氏は蜚蠊の驅除法と題し、或る雜誌中に登載せられたる記事を紹介され、尙ほ其他に昆蟲に關し種々なる見聞談を述べられ●棚橋昇氏はホシヒラタアブ、ヒラタアブの二種が日々梅花を尋ねて花蜜を求むる實況を述べられ●谷貞子氏はエゾゼミとコエゾゼミ及びハルゼミとエゾハルゼミとに就て最も簡單なる區別法を實物に依り說明せられ●馬淵治郎氏は、實物に依りサシガメの一種の特徵を述べ●穗岐山巖氏は、高知縣に於ける浮塵子驅除の狀況に就て●淸水森三郎氏はケラに就て●野田彌一郎氏は、三重縣下に於ける姬象鼻蟲被害の狀況を●井口宗平氏は、桑毛蟲に就て、兵庫縣地方に於ての該蟲被害の有樣、且同縣に於ける荳科植物の中、インゲン豆にはウラナミシジミテフ、或はフヂマメトリバカ等、其他サゝゲにはズイムシの一種及びサゝゲガメムシ等最も被害多き有樣より、氏が昨年ウラナミシジミテフ及びサゝゲガメムシを飼育せられし結果を述べられたり。

◉**昆蟲標本陳列館參觀人員**　去る一月中、當所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし總人員は二千百七十一人にして、一日平均九十三人强に當り、其內尤も多かりしは、十五日に於ける二百六十八人、最も少なかりしは、廿六日に於ける二十八人なりき。而して其參觀人の重なるものは、學生第一位をしめ、次に各府縣の敎育者實業家等にして、官吏は比較的少數なりき。

◉**本誌愛讀者に謹謝す**　本誌前號には誤植の點少なからず、是れ校正の粗漏より出でたるものにして、其罪一に編者にあり、乞ふ恕せよ、謹んで玆に其粗漏を謝す。

## ◎近刊豫告

### 一鱗翅類汎論　全壹册

本書は本邦産鱗翅類につき各方面より極めて詳細に論述したるものにして、之に和名學名を有する邦産蝶蛾類七百餘種の記載を加へ、尚鮮明なる寫眞圖版十二葉を挿入して實物大蛾類二百餘種を示し、百餘個の木版圖を以て其不備を補へり、故に鱗翅類研究者には極めて必要なる良書にして愈々出版の曉には暗黑なる邦産鱗翅類をして始めて一大光明を放たしむるものと云ふべし

岐阜市公園内　名和昆蟲研究所

### ◎會員募集

本會々員は互に養蜂術を研究し斯業の利益は收むるを得○本會々員は收蜜製蠟の販賣を本會に委托するの便あり○其他養蜂術上質問等便益甚た多し○會費一ヶ年六十錢○毎月一回養蜂雜誌を發行配付す

### ◎養蜂雜誌

○毎月一回發行○定價五錢郵税五厘

○本誌は記事着實嶄新我邦唯一の養蜂專門の雜誌にして當業者は勿論農家必讀の雜誌なり○郵券二錢を送れは雜誌見本一部に規則書を添へて呈す

東京神田淡路町一丁目一番地　養蜂協會

---

名和昆蟲研究所長名和靖著

第七版　薔薇の一株　**昆蟲世界**　全
定價貳拾錢　郵税貳錢（郵券代用一割增）

臨時刊行第一編　**日本昆蟲分科表**　增補再版　全一册
定價（郵税共）金貳拾八錢（同上）

臨時刊行第二編　**通俗益蟲集覽**　第一輯再版（説明書附）
定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編　**貝殼蟲圖説**　全一册（再版）
定價（郵税共）金參拾七錢（同上）

昆蟲叢書　第壹回全國昆蟲展覽會**出品目錄**　第一編　全壹册
定價金八拾五錢郵税金六錢（同上）

昆蟲叢書　**昆蟲標本製作全書**　第貳編　全壹册
定價金八拾五錢郵税六錢（同上）

岐阜市公園内　名和昆蟲研究所

## ◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同樣乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

## ◎害蟲圖解發刊の分廣告

(貳拾五枚)

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(桑枝尺蠖)(三版)
●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
●第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ(二化性螟蟲)
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ(煙草螟蛉)
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ([illegible]葉捲蟲)
●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ(姫象鼻蟲)
●第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
●第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ(稻螟蟲)
●第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
●第十。豌豆害蟲ヱンドノキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(褄黒横蚊又浮塵子)
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ([illegible]葉捲蟲)
●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ(茶蛄蟖)
●第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲)
●第十六。稻麥害蟲キリウジガガンボ(切蛆蚊姥)
●第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金[illegible]毛蟲)
●第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
●第十九。桑樹害蟲クハウムシ(桑[illegible])
●第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ(三化生螟蟲)
●第二十一。稻の害蟲イナゴ(稻蝗)
●第二十二。蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
●第二十三。粟及陸稻の害蟲アハノヨトウムシ(粟夜盜蟲)
●第二十四。桑樹害蟲ヲグロクハハマキムシ(尾黒桑葉捲蟲)
●第二十五。大豆害蟲ヒメコガネムシ([illegible]金龜子)

定價壹枚金拾五錢(十枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢)

岐阜市公園内
名和昆蟲研究所

登録商標
硫曹
●聖路易萬國大博覽會ニ於テ
最高名譽大賞牌ヲ受領ス
日本無類
硫曹肥料
安價卓效
●明三十八年度ニ於テ金四万八千圓ヲ支出シテ全國
各府縣ニ農產品評會ヲ開キ硫曹肥料使用優
等者ニ賞金品ヲ贈呈ス
大阪硫曹株式會社

雑誌 昆蟲世界 合本出來廣告

西洋綴 金文字入美裝

●昆蟲世界第二卷 五部 (自第拾貳號 至第拾六號)
右は明治三十一年發行の分(但合本にあらず)

●昆蟲世界第三卷合本壹册 (自第拾七號 至第貳拾八號)
右は明治三十二年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第四卷合本壹册 (自第貳拾九號 至第四拾號)
右は明治三十三年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第五卷合本壹册 (自第四拾壹號 至第五拾貳號)
右は明治三十四年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第六卷合本壹册 (自第五拾三號 至第六拾四號)
右は明治三十五年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第七卷合本壹册 (自第六拾五號 至第七拾六號)
右は明治三十六年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第八卷合本壹册 (自第七拾七號 至第八拾八號)
右は明治三十七年發行の分(總目錄付)

(合本は毎册金壹圓貳拾錢、郵税金拾錢、其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本となするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市公園内 **名和昆蟲研究所**

---

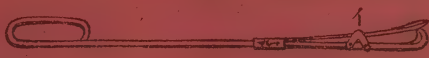
專賣特許 **莖切鎌大改良廣告**

各縣農事試驗場實驗濟 全國病蟲害展覽會賞狀受領 各縣郡村農會 名和昆蟲研究所御用品

**螟蟲驅除用莖切器**(一名白穗拔鎌)

定價 甲種 金八錢(バ子止メアルモノ) 乙種 金五錢(バ子止メナキモノ)

農會御用品多數割引 見本郵税二錢ヲ要ス

一 害蟲ノ驅防法ハ總テ共同的ニ行ハザル可ラズ殊ニ螟蟲ノ驅除ニ至ツテハ最モ其ノ必要ヲ感ズルモノニシテ終リニ白穗ノ刈取リヲ勵行セザレバ始メニ採卵捕蛾ヲ行フト雖モ空シク徒勞ニ屬セリ而シテ白穗刈取ニ本器ヲ用フルト用ヒザルトハ非常ニ差異アル者ニシテ名和昆蟲研究所ノ實驗ニ於テモ一時間ニ四百本ヲ刈出スハ容易ナリトノ賞讃ヲ賜ハレリ之レ則チ本器ガ白穗刈取リノ爲メニ發明シタル處ノ主タル効用ナレバナリ

一 農會ノ賞與品ハ低廉ニシテ數量ノ多キ物ヲ撰バザル可ラズ家具家什ノ如キハ賞シテ効少ナク受ケテ又利用ノ途ニ乏シ之レ本器ハ總テノ点ニ於テ賞品トシテ最モ適當ナル改良農具ナレバナリ

一 商工業ハ發達シ生活費ハ増加スルニ從ツテ一般農民ハ今ヤ業ヲ他方面ニ求メツヽアリ地主タル者ハ須ラク小作人ヲ獎勵シテ増收ノ途ヲ講シ恩惠ヲ施サルベシ若シ夫レ本器ヲ以テ之レヲ獎勵恩與セバ外ニハ驅除ノ効果ヲ全フシ内ニハ家庭ヲ安ゼシメテ一擧兩全ノ策ヲ得タルモノト爲スヲ得ベシ

本器ハ螟蟲驅除用白穗拔莖切鎌ト稱シテ汎ク農業界ノ必需ニ投シ已ニ全國ニ普及シテ到ル處ニ非常ノ信用ヲ博セリ各位幸ニ低廉ニシテ簡便ナル本器ヲ愛用シ以テ農業界ノ大敵タル螟蟲驅除方法ヲ講セラレンコヲ謹言

靜岡縣燒津町 螟蟲驅除用農具莖切鎌製造元
豐産園主 **吉野寅之助** 敬白

# ◎新案教育用昆蟲標本　壹組拾貳箱

一、分類標本　壹箱

一、自然淘汰標本　五箱

○保護色　○擬態　○警戒色及誘惑色

○自己防禦　○生存競爭

一、雌雄淘汰標本　貳箱

一、害蟲標本　壹箱

一、益蟲標本　壹箱

一、解体標本　壹箱

一、俗說と迷信に就ての昆蟲標本　壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、師範學校、中學校等の理科博物科教授の材料に充てん爲めに、調製したるものなり。從て害益蟲標本の如きも、普通農作物害益蟲標本とは、大に其趣きを異にせり。而して其內容に至りては、簡單に說明を附しあれば、初學者と雖も、一目して、昆蟲界に於ける自然の妙理を、會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱丈御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

# ◎箱裝式昆蟲標本

甲號　價一組に付き金四圓

乙號　同　金參圓　｝一組二十枚

丙號　同　金貳圓

但遞送費は別

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、製法堅牢なるを以て、初學教育、中學教育何れにも適用すべき好標本なり。又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり

## 出版廣告

昆蟲叢書第壹編（明治卅五年七月出版）

### ◎全國昆蟲展覽會出品目錄　全壹冊

題字及び寫眞銅版四葉挿入●本版寫眞銅版畫七十餘圖●紙數二百餘頁●定價金八拾五錢（郵稅金六錢）

記載目次

第一章　昆蟲展覽會出品目錄の必要●第二章　分類標本に於ける蟲種別●第三章　害蟲標本に於ける蟲種別●第四章　益蟲標本に於ける蟲種別●第五章　教育用標本其他の出品●第六章　出品物と其出品者（附錄）開設の計劃●役員の選定●開會設備●開會式●審查方法●褒賞授與式●閉會式●雜件整理●蟲類の調查●殘務所理●昆蟲名稱の意見●展覽會の効果　以上

昆蟲叢書第貳編（明治卅六年八月出版）

### ◎昆蟲標本製作全書　全壹冊

題字及寫眞銅版、木版圖數十種挿入●定價壹部金八拾五錢（郵稅六錢）

記載目次

第一章　昆蟲標本の價値●第二章　昆蟲標本製作法の沿革●第三章　昆蟲標本製作書の出版●第四章　昆蟲採集用の器具●第五章　昆蟲採集の方法●第六章　幼蟲及蛹の採集と飼育方法●第七章　昆蟲採集地の撰擇●第八章　標本製作用の器具●第九章　昆蟲標本の製作方法●第十章　昆蟲の排列と保存方法

右出版仕候に付御愛讀あらんことを請ふ

岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

恭賀新年　東京　田中芳男

謹賀新年　札幌農學校　松村松年

賀正　農科大學　佐々木忠次郎

謹賀新年　東京　小貫信太郎　桑名伊之助

恭賀新年　熊本　中川久知

謹賀新年　在米國　長野菊次郎

謹賀新年　三河國　田中周平

謹賀新年　新潟縣　佐藤榮

謹賀新年　岐阜縣農會内　桑原貫之助

謹賀新年　岐阜縣　林茂

謹賀新年　岐阜縣　坪井伊助

賀正　福岡縣　嶺要一郎



賀正　岩手　小山幸右衛門

恭賀新禧　羽後神宮寺町　富樫朋治郎

恭賀新年　千葉縣印旛郡安食町　後藤新左久

謹賀新年　鳥取縣東伯郡日下村　岡野庫八郎

謹賀新年　岐阜縣　村井正元

謹賀新年　岐阜縣　篠田五郎

謹賀新年　三河國　中村義上

謹賀新年　岐阜縣　河田貞次郎

恭賀新年　青森縣　新渡戸稲雄

恭賀新年　靜岡縣　岡田忠男

恭賀新年　靜岡縣　神村直三郎

謹賀新年　岐阜縣　壚田健藏

謹賀新年　島根縣　平田駒太郎

謹賀新年　名和昆蟲研究所寄宿舍　田邊友三郎

名和昆蟲研究所内特別研究生　馬淵治郎　穗岐山巖　清水森三郎　野田彌一郎　井口宗平

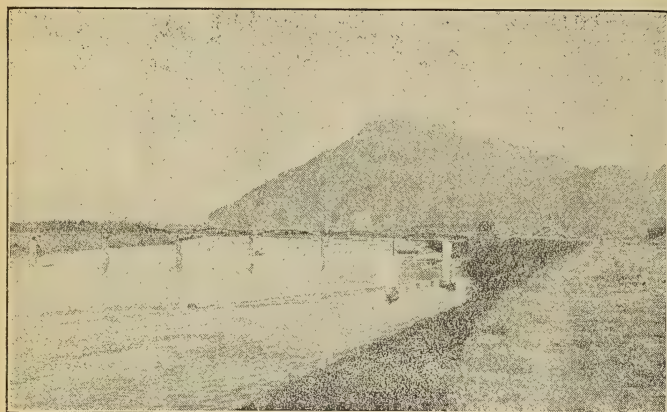
謹賀新年

# 恭賀新年

明治卅八年一月一日

（當所ノ位置ハ中央ノ×印ニ在リ）

岐阜縣岐阜市公園內

## 名和昆蟲研究所

勅題にちなめる
山の富茂登に
はつ春をむかへて

はふむしの禍なくて
祝ふ哉

こ金華さく
山の富茂登に

梢にはミのむし計り
はつ日の出

所長 名和靖
調査主任（在米國） 名和梅吉
同補助 小竹浩
養蟲掛 名和正
同（出征中） 森宗太郎
標本掛 棚橋昇
同補助 名和愛吉
編輯主任 小森省作
同補助 谷貞子
圖畫主任 伊藤七郎
同補助 名和貴子
庶務主任 石田和三郎
同補助 高橋治平
會計主任 名和正也
同補助 名和政子

# 昆蟲世界

（明治三十八年二月十五日發行）　第九卷第九拾號　（毎月一回十五日發行）




## ◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす


明治三十八年二月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戸
編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎





（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

# THE INSECT WORLD.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

**YASUSHI NAWA**

DIRECTOR OF

"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.


Aphelochira Nawae Mats.


VOL.IX.] MARCH. 15TH, 1905. [No.3.


# 昆蟲世界


第九卷第參册 明治三十八年三月十五日發行 第九拾壹號


## 目次 （禁轉載）




（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

# 本所移轉擴張寄附金品領收廣告　第十回

一金壹圓也　愛媛縣周桑郡石根村　清水森三郎君
一金九拾九錢也　愛知縣渥美郡田原町　壹番組有志諸君
一金五拾參錢也　愛知縣渥美郡田原町　甲貳番組有志諸君
一金參拾六錢五厘也　愛知縣渥美郡田原町　乙貳番組有志諸君
一金壹圓五拾四錢也　愛知縣渥美郡田原町　參番組有志諸君
一金五拾九錢也　愛知縣渥美郡田原町　四番組有志諸君
一金壹圓五拾九錢也　愛知縣渥美郡田原町　五番組有志諸君
一金壹圓貳拾九錢也　愛知縣渥美郡田原町　六番組有志諸君
一金壹圓六拾六錢也　愛知縣渥美郡田原町　七番組有志諸君
一金貳圓六錢五厘也　愛知縣渥美郡田原町　八番組有志諸君
一金四拾五錢壹厘也　愛知縣渥美郡田原町　九番組有志諸君
一金四拾九錢也　愛知縣渥美郡田原町　拾番組有志諸君
一金六拾壹錢五厘也　愛知縣渥美郡田原町　拾壹番組有志諸君
一金九拾七錢五厘也　愛知縣渥美郡田原町　拾貳番組有志諸君
右十三口紹介人｛愛知縣中村義上君
一金八拾四錢九厘也　愛知縣渥美郡田原町　中村義上君
一金拾五圓也　愛知縣渥美郡野田村　野田村農會御中
一金壹圓也　愛知縣渥美郡野田村　河合爲治郎君
一金壹圓也　愛知縣渥美郡野田村　高橋譽四郎君
一金壹圓也　愛知縣渥美郡野田村　林彦左衛門君
一金壹圓也　愛知縣渥美郡野田村　林喜志君
一金壹圓也　愛知縣渥美郡野田村　河邊每保君
右五口紹介人　愛知縣林又助君
一金壹圓也　愛知縣渥美郡野田村　林又助君
一金壹圓也　靜岡縣濱名郡中郡村　渡瀬友三郎君
一金壹圓也　靜岡縣磐田郡富岡村　鈴木浦八君
一金壹圓也　靜岡縣韮山中學校教諭　星谷菊太郎君
一金壹圓七拾錢也
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　小谷吉郎君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　筧德三郎君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　石田捨次郎君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　川瀬恒吉君
岐阜縣北方警察署詰巡査　吉田熊吉君
岐阜縣北方警察署詰巡査　太田盡吾君
岐阜縣八幡警察署詰巡査　栃洞直右衛門君
岐阜縣池田分署詰巡査　清水申吉君
岐阜縣高須警察署詰巡査　伊藤秀賢君
岐阜縣大井分署詰巡査　土岐猛三郎君
岐阜縣高山警察署詰巡査　安江友夫君
岐阜縣多治見警察署詰巡査　山本松樹君
岐阜縣御嵩警察署詰巡査　今井龜太郎君
岐阜縣御嵩警察署詰巡査　安田惠二君
岐阜縣垂井警察署詰巡査　早崎重吉君
岐阜縣大垣警察署詰巡査　三上金次君
岐阜縣大垣警察署詰巡査　山田重太郎君
右紹介人　岐阜縣警部廣瀬壽太郎君
一金壹圓也　愛媛縣新居郡泉川村　加藤政一君
一金五拾錢也　三重縣多藝郡上御絲村　北山辰三君

小計金四拾參圓貳拾錢
累計金八百七拾七圓拾六錢

右御寄附相成候ｲ茲に芳名を揭げて其厚意を謝す

明治三十八年三月九日

名和昆蟲研究所

蟬七種

1 タイワンアブラゼミ　2 エゾハルゼミ
3 ハグロゼミ　4 タカサゴゼミ
5 ヒメクサゼミ　6 ハゴロモゼミ
7 ヒメハルゼミ

昆蟲世界第九拾壹號　（明治三十八年第三月）

# 論説

## ◎害蟲驅除と警察官

方今農事を談ずるもの、必ず害蟲驅除法を說かざるはなく、害蟲の驅除豫防は、必ず農家の一要素として重用視せらるゝに至りたるは大に喜ぶべき現象なり。是れ明治三十年の浮塵子大發生により、大に農民の頭腦を刺戟し、頓に害蟲驅防の必要を悟らしめしより、朝に昆蟲談話會、夕に幻燈會、彼處に昆蟲講話會、此處に害蟲驅除講習會等頻々として起りたる結果にして、實に長足の進歩といふべし。然れども、退て仔細に其裏面を觀察すれば、多くは皮想の進歩にして、未だ頑迷者流を一掃するに至らず、身ら進んで蟲害を未發に防がんと企つる者は實に曉天の星の如く、漸く發生の後に於て狼狽驅除に着手するは、尙ほ之れ賞すべきの徒のみ、多くは再三再四督勵を受け、初めて手を下すは實に慨嘆の至ならずや、甚だしきは命令を肯せず犯罪者を出すを見る、余輩何んぞ愕然たらざるを得んや。宜なるかな、年々驅防の聲は高まり、歲々督令の囂々たるにも係はらず、更に被害の減少せざるのみならず、尙三十年の覆轍を踏むが如き地方あるは、斯道進歩の階段とは云へ、軍國多事の今日甚だ遺憾と謂べし。幸にして昨年は大に見るべきものありたりしも、是れ驅除者其人の功と云はんよりは、寧ろ當局者の熱誠の賜とするも不可なかるべし。今や驅除の方法尙不完全を免れずと雖も、其最も急務なるは、之れが實行の

方法を攻究するにあるは識者の夙に唱導する處にして、既に所有方法を盡して奬勵しつゝあるも、徒に勞多くして其効の少なきを遺憾とす。只督勵の易々たる地方に於て、返て好果の擧るを見る。換言せば斯學の普及せる道義的團体ある部分に於て、其効果を見るべし。然らば、第一着に之れが道義的團体を組織して、以て徐ろに斯學の普及を圖らんか、之れ啻に害蟲驅除の上に於てのみならず、行政上最も必要の事なれば、何人も異議を挿むものなかるべし。然れども是れ根本的の事業にして、到底一朝一夕に行はるゝものに非ざれば、國家多端の今日、かゝる道を講ずるは勿論なるも、其半面に於て、余は從來の實驗により、警察權を藉るの近道たるを認むるものなり。論者或は謂はん、害蟲驅除に警察權を用ふるは、甚だ穩當を欠くの嫌ひありと。夫れ然り、余輩亦之れを知る。然れども文明の制度美は美なりと雖も、未開の民に其儘用ふべからざるが如く、昆蟲思想の普及せざる、頑迷者流の跡を絶たざるの今日又止むを得ざるべければ、暫く之を忍ばんとするものなり。聞く岐阜縣巡査敎習所に、繼續事業として應用昆蟲學の一科を加へ、已に之が第二回卒業生を出し、且岐阜警察署部内の巡査召集日には、同日午後専ら害蟲驅除の講話ありと。之れ現時の情況に照し、甚だ其當を得たる計畫にして、又大に余輩の意を得たるものなり。從來警官諸士が、各町村巡回の途次、害蟲の發生如何を報せらるゝのみにても、斯界を利する既に大なり、況や一臂を添へらるゝに於ておや。又況や其人にして、普通應用昆蟲學を修められたるに於ては、更に其効果の多大なるを疑はず。嗚呼驅除實行の難き地方に於て其成績を擧げんとせば、須く警察權を藉るの止むを得ざる次第にして、余輩此擧を賛するに躊躇せざるものなり。

# 學説

## ◎松のザイロコックス

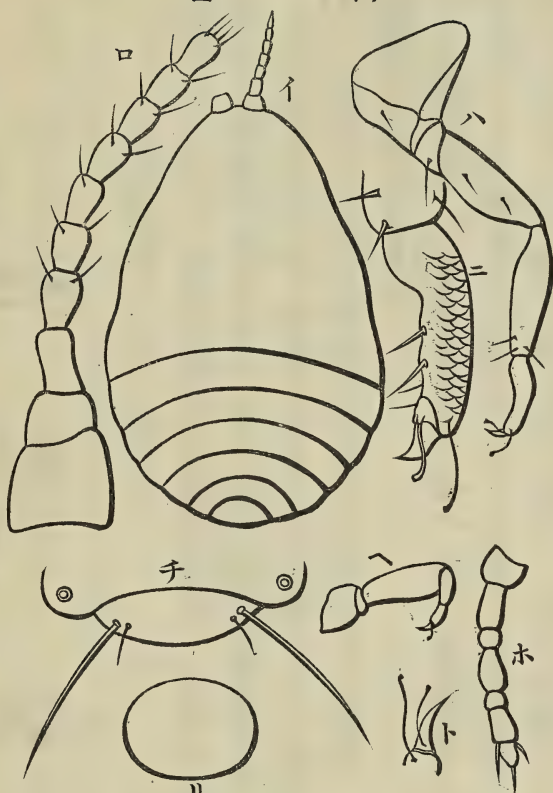
米國理學士　桑名伊之吉

松のザイロコックス（Xylococcus matumurae Kuwana）は明治三十六年五月十二日、余が寓居の庭園にある松樹に於て採集したるものにして、該樹は甚しく浸害せられし爲め遂に枯死せり。斯る恐るべき害蟲なると、從來本邦に於て發見せられざりし一新種なれば、本誌の餘白を借りて廣く世に照會せんとす。

卵、長さ一三三「ミユ」幅一五二「ミユ」、楕圓形にして光澤ある橙黄色を呈し、其一端に近く二個の黒色圓形の斑紋を有す。

孵化當時の幼蟲　体長一九四「ミユ」幅一一七「ミユ」(腹部の最も廣き處)長楕圓形にして頭端に向ひて少しく狹れり。腹部の幅は其長さに比し稍々廣く、尾端分裂せず、環節は判然せり。体色は淡黄にして眼は黒紫色を呈す、觸角と脚とは能く發達して自由に行動することを得。觸角、比較的大にして七環節よりなり、長さ約九一「ミユ」に達す、第一環節最も大にして幅亦廣く、第二環節最も長し、第四及第六環節之れに亞ぎ、(但し第四及第六環節の長さは往々第二環節と同一なることあり) 第三、第五及第七環節は稍々同長なるも第五環節最短なり、第六及第七環節には數個の刺毛を存す。脚、三對共に稍々同大にして、基節の幅は其長さより稍々廣く、轉節は小にして三角形をなし、腿節は脚の環節中最も大なるものにして、脛節に比し幅甚だ廣く、跗節は短小にして殆んど脛節の長さの二分の一に過ぎず。爪は大

にして少しく灣曲し、膽球毛は微毛狀をなす。口部、甚だ大にして「キチン」質に富み、四個の絲狀口具は甚だ長く、胸、腹部内に於て螺旋狀に卷れたり。腹部、末端に二個の長毛と二個の短毛とを存す、又第八環節の兩側には各一個の圓形窩を存す。

○○成蟲（雌）　体長約四、五「ミリ」、幅約二「ミリ」、肥滿にして長楕圓形なり、頭端に向ひて少しく幅狹し体色は赤褐にして觸角は淡褐なり、腹部の環節は判然せり、觸角、長さ約一「ミリ」にして十環節より成り、左右兩環節の距離稍々接近せり。第一環節最とも幅廣く且つ長し、第三環節之れに亞ぎ第二環節亦之れに亞ぐ、第八、第九及第十環節は稍々同長にして何れも甚だ短し、又各環節には幾多の短き刺毛を存す。脚、大にして三對相似たり、轉節は小にして三角形をなし一個の刺毛を有す。腿節は脛節より僅に長く、脛節は跗節より甚だ長し、跗節には魚鱗狀の斑紋を有す。爪は大にして短く且つ少し

ザイロコツクスの圖

（イ）成蟲（雌）(Z.a3×4)
（ロ）同　觸角 (A.A.×4)
（ハ）同　脚 (Z.A.A.×4)
（ニ）同　跗節 (Z.D×4)
（ホ）幼蟲の觸角 (Z.D×4)
（ヘ）幼蟲の脚 (Z.D×4)
（ト）幼蟲の爪
（チ）幼蟲の尾端 (Z.D×4)
（リ）卵 (Z.A.A.×4)

く灣曲し、膽球毛は四個にして其爪にあるものは跗節にあるものに比し稍々短し。腹部、末端分裂せず且つ長毛を存せず、皮膚には無數の微毛と圓形窩とを存せり。自由に運動するも産卵期に至れば樹皮の裂目等に潜伏し、白色の蠟質物を分泌して其上に産卵す、且つ之れと同時に、体軀全部白色粉狀の分泌物を以て蔽ふ。

○○成蟲(雄)　体長約二「ミリ」、翅長一、五「ミリ」、幅一「ミリ」(胸部の最も廣き處)あり、腹部は橙褐、胸部は暗黑、頭部の前端は黑色にして複眼は暗紫色を呈す。觸角、九環節より成り、長さ約二「ミリ」細長にして多毛なり。第一環節短くして幅廣く、他の環節は稍々細長にして各環節の相接する處絞れたり。第十環節の末端に四個の膽球毛を有す。脚、三對相似て細長く、無數の微毛を有す。脛節の長さは跗節の三倍以上あり。跗節の皮膚には雌蟲と同じく魚鱗狀の斑紋を有し、膽球毛は普通なり。翅、前翅は大にして暗灰色を呈し、前縁に沿ふて稍々暗黑を呈す、二個の透明線の翅脈の間を走れるあり。又翅には幾多の稍々不規則なる網狀脈を有し、後翅は變じて棍棒狀をなし、末端に五個の刺毛を有す。其末端膨大して灣曲なり。腹部、圓錐形にして末端の交接器は腹部より短く、少しく灣曲せり。第八環節の背面に十個の短き蠟腺を供ふる大なる隆起あり、此蠟腺より銀色長毛狀の蠟質を分泌す。

○○習性　松樹外皮の裂目に寄生す。

本邦にて Xylococcus 屬を發見せしは、此新種を以て嚆矢となす。而して、本邦に於て昆蟲學を以て博士號を得られたるは松村氏を嚆矢となす、故に之れが紀念としてマツムライの種名を附せり。尚ほ從來此屬にして既に發見せられたるもの、世界を通じて僅に三種にして、其名稱被害植物及産地を擧ぐれば左の如し。

一、Xylococcus betutae Perg.　被害樹　樺　産地　米國スペリヲル湖附近

二、Xylococcus filiferug Leow　被害樹　田麻科　産地　濠洲

三、Xylococcus guereus Ehrh.　被害樹　カシ　産地　米國加洲

## ◎螟蟲卵寄生蜂の利用に關する試驗及調査（續）

中川久知

（六）該寄生蜂の飼養　寄生蜂の壽命の長短は、之を利用するに方りて大に考慮を要する事項なるを以て、最も精密なる調査及試驗を要す。然るに、本種は其形態極めて少く、且つ容易に乾燥斃死するを以て、自然に生育するものに就て調査するは頗る難事に屬す。仍て、此蜂の寄生に罹りたる螟蟲卵塊より蜂を羽化せしめ、蜂蜜の五倍乃至十倍水溶液を與へて左の試驗を施行せり。

（甲）對大氣中濕氣試驗

十個のホヤの兩端に日本紙を貼り、内に百餘頭の寄生蜂を納め、ホヤの中央を把持して兩端より自由に空氣を流通せしめ、毎日二回ホヤの上端に貼りたる紙上に食餌を塗布せり。此試驗は七月十六日に始め同十八日に畢れり。同時日間の濕度は、前文第四項にあり。右試驗によれば、翌朝に至り寄生蜂は概ね死し、ホヤ毎に僅々二三頭の生存者を遺すのみ。而して十八日に至りては、殘餘の生存者も亦悉く斃死するを見る。故に、六二乃至六三の濕度に於ては、該寄生蜂は僅に二日間生存するのみ。

（乙）絶食試驗

本試驗に於ては、濕ひたる空氣中と大氣中との兩所に蜂を容れたるホヤを置き、水の外食料を給せず、生存日數を調査せり。而して空氣を濕潤ならしむるには玻璃鐘を用ひ、内に一株の稻を栽へ置きたり。

此裝置に於ては、午前と午後の兩度觀測するに、常に九〇%内外の濕氣を保存せり。

此試驗は七月七日に始め、同九日に畢る。此間の濕度は、前文第四項に載せたり。

| 試驗ノ區別 | 初日中死シタル蟲數 | 第二日目ニ死シタル蟲數 | 第三日目ニ死シタル蟲數 | 總蟲數 |
|---|---|---|---|---|
| 鐘內ニ在リシモノ | 一 | 一〇 | 四八 | 五九 |
| 大氣ニ曝露シタルモノ | 〇 | 悉皆 | 〇 | 不詳 |

右の試驗は、濕氣多量なるも食餌を給せざれば三日にて死するものたるを示す。

(丙)生存期試驗

本試驗は、前述の二試驗にて本種の乾燥に耐へざること明らかなれば、充分の濕氣を保持し、適宜の食料を與へて何日間生存するかを調査するにあり。而して稻草を藏する玻璃鐘を用て濕氣を維持することは、前述の裝置に同じ。

此試驗は二回に施行し、最初は七月四日より同十日に至り、次回は五日より十三日に至り完結す。

第一回　試驗

| 試驗番號 | 四日間生存ノモノ | 五日間生存ノモノ | 六日間生存ノモノ | 七日間生存ノモノ | 總蟲數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 〇 | 五 | 一 | 〇 | 六 |
| 二 | 〇 | 一九 | 一七 | 〇 | 三六 |
| 三 | 二 | 九 | 四 | 〇 | 一五 |
| 四 | 一 | 七 | 九 | 〇 | 一七 |

第二回　試驗

| 試驗番號 | 四日間生存ノモノ | 五日間生存ノモノ | 六日間生存ノモノ | 七日間生存ノモノ | 總蟲數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 一〇 | 〇 | 二三 | 三 | 三六 |
| 二 | 七九 | 〇 | 二五 | 〇 | 一〇四 |

備考　四日間生存のものとは、五日目の朝檢査せしに死し居たるものを斥す、以下之に傚ふ。

右の試驗によれば、濕氣充分なるときは四日以上六日間生存するもの最も多し。

爾後蟲數を算せずして同一の裝置ある鐘内にて該寄生蜂を飼養せしに、罕れに八日乃至九日に至るも尚ほ生存するものあるを見たり。故に充分の濕氣と食餌を給するときは、該寄生蜂は約一週間生存するを得るものとす。

（七）接種試驗　寄生蜂に宿主を與へ、之に產卵せしめて次代の蜂を養成せんとする試驗を接種試驗と稱す。本試驗を別て同種接種試驗、對宿主發育接種試驗、異種接種試驗の三とす。

（甲）同種接種試驗

本試驗に於ては、二化生螟蟲卵より生たる寄生蜂をして、特に產卵せしめたる二化性螟蟲卵に產卵せしめ、其發育を調査するを目的とす。

此試驗は六月二十四日以來日々施行し、七月十九日に至り結了せり。此間の氣温は前文第四項に詳らかなり。（注意）此試驗を施行するに方り、最も注意せしは、宿主とすべき螟蟲卵が、已に寄生蜂の爲めに犯されたるものならざることを証し得べき方法を執ることなり。當場に於ては飼蟲函に稻草を植へたる鉢を安置し、毎日母蛾を採り、函に放ちて產卵せしめ、此卵を宿主として試驗の用に供し、尚ほ試驗用の卵塊と同時に函内に於て得たる卵塊數個は比較の爲め別に保存し、寄生に罹らざりしことを証せり。

本試驗は七月四日に始まり、同十九日に畢れり。寄生蜂の羽化は、母蜂の產卵を始めたる日より第七日に始まり、第八日、第九日に至り悉皆出て畢れり。然れども卵塊の一部は黑變したるのみにて蜂を出さず、卵中に於て化蛹したるのみにて斃死したるもの多少これあり。

| 試驗番號 | 卵塊ノ數 | 卵塊ノ大サ | 母蜂數 | 寄生步合 | 孵化シタル螟蟲數 | 羽化シタル蜂數 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 一 | 巾二ミメ。長一〇ミメ | 二 | 六〇 | 七四 | 六五、內雄二四、雌四一 |
| 二 | 一 | 巾二ミメ。長七ミメ | 二 | 四〇 | 三 | 三三、內雄二五、雌八 |

| 三 | 一 | 巾二ミメ。長八ミメ | 二 | 七〇 | 九 | 四三、内雄二三、雌二〇 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 二 | 巾一、五ミメ。長六ミメ<br>巾一、五ミメ。長四ミメ | 七 | 八〇 | 三 | 七三、内雄四三、雌三〇 |
| 五 | 一 | 巾一、一ミメ。長三、〇ミメ | 十餘頭 | 九九 | 三 | 二七五、内雄一二六、雌一四三<br>雌雄不詳六 |

右の試驗は、同種の宿主にありては人爲を以て寄生蜂に產卵せしむること自在なるを示し、又卵塊に來着する母蜂彌多ければ、其寄生に罹る步合彌々大なるを知るべし。

(乙)對宿主發育接種試驗

凡そ卵寄生蜂は、宿主たる卵中の胚漸く長大し、皮膚肥厚するに至れば、假令該卵に產卵するも子蟲は其卵中に在りて生育を遂ること能はざるを常とす。今二化性螟蟲に於て卵中の胚の發育を撿するに、產下後一週日にして孵化し、五日に至れば黑色なる頭部は卵殼を通じて透視することを得るを以て、其時期を計り寄生蜂を放ちて寄生の効果如何を調査せしに、其結果左の如し。

| 螟蛾產卵ノ日 | 寄生蜂ヲ放チタル日 | 寄生蜂ノ羽化ヲ初メタル日 | 螟蟲卵塊ノ大サ | 寄生蜂ノ出タル孔數 | 寄生蜂數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 七月四日 | 七月七日 | 七月十五日 | 一ハ巾一、一ミメ長一、二ミメ<br>一ハ巾一ミメ長五、五ミメ | 一ハ　五二<br>一ハ　一五 | 一一八（雄四五 雌七三） |

| 螟蛾產卵ノ日 | 寄生蜂ヲ放チタル日 | 羽化ヲ始メタル日 | 螟蟲卵ノ大サ | 寄生蜂ノ出タル孔數 | 寄生蜂數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 七月四日 | 七月八日 | 七月十六日 | 巾一、一ミメ。長六ミメ | 二九 | 九六、雄二六、雌七〇 |

右試驗の結果によれば、產卵後四、五日即ち卵の孵化前二日に迫るも尙ほ寄生蜂の爲めに斃され、發育することを能はざるや明なり。

(丙)異種接種試驗

本試驗の目的は、二化性螟蟲以外の卵に於て、本種寄生蜂を接種することを得るや否やを知らんとするに至りて、三化性螟蟲の卵は素より同一寄生蜂の爲めに犯さるゝ事明らかなれば之を舍き、先づ蠶卵に

就き接種を施行せり、其方法たる、蠶繭を貯へ、蠶蛾を發生せしめ、前夜產下したる卵を紙と共に蠶卵紙より切り抜きホヤ底に貼付する日本紙に貼り着けて母蜂を放ち、紙に食餌を塗抹し、ホヤを倒置せり之れ、此寄生蜂は常に上方に登り集る性あるを以てなり。然るに蜂は蠶卵上に來るもの多きも、一も茲に止まりて產卵するの狀を呈したるものなく、爾後二週間を經るも此蠶卵より該寄生蜂を發生せざるにより、試に蠶卵數顆を破りて、其內に寄生蜂の子蟲若くは蛹あるや否やを撿せしも、未だ之を發見せず依て、蠶卵には本種寄生蜂は寄生せざるものとす。仍て、藍螟蟲の蛾を飼蟲函に放ち、函內に藍を植へて其葉に放卵せしめ、卵塊を着けたる藍葉を適宜の大さに切り縮め、更に此小葉片を蠶卵の如くホヤ底の紙に貼付して本種寄生蜂を放ち、ホヤを倒置し、ホヤの狹き口より馬齒莧を挿入して其端を水中に浸し以てホヤ內に濕氣を保たしめ、藍葉の乾燥を防ぎたり。母蜂は蠶卵に對するときと異り屢々卵上に靜止し、恰も卵を產下するが如き狀態を呈せり。此試驗は七月十九日に始め翌日より日々卵塊の狀態を撿せしに、卵は先づ黑色に變じ、七月二十六日に至り寄生蜂は羽化して卵殼を破りて出たり。

右の試驗に依れば、該寄生蜂は藍螟蟲の卵塊に於ても、人工を以て自在に接種せしむるを得るものにして、粟の螟蟲は又た藍の螟蟲と同一の種類に屬するを以て、該寄生蜂は藍より粟に移り、二化性螟蟲の卵なき時期に於て尙ほ繁殖することを得るものとす。

(八)該寄生蜂の利用　右の調査と試驗の結果によれば、該寄生蜂の二化性螟蟲第一回の卵塊を斃死せしむる步合は、苗代の末期に於ては七割に達するも、本田に於て揷秧後二週以內の時にありては五六割の間に止るが如し。是れ、一は本田の面積は苗代の三十倍に達して頗る廣きと、該寄生蜂は其性脆弱なるにも拘はらず遠く苗代より本田に移り、三十倍の面積に擴散するにあらざれば、本田產付の螟卵に產

卵すること能はざるの困難あるに由るならん。故に、苗代にて採集したる螟蟲卵の保存上、改良の法を講じ、尚ほ挿秧の際豫じめ母蜂を貯へ置きて、挿秧を畢るや否や直に本田に蜂を散布せば、庶幾くは寄生蜂の天職を完ふせしめ、隨て又た螟蟲卵を斃すの効果を一層增大することを得ん。（完結）

## ◎鳴く蟲に就て（三）（第三版圖參看）

名和昆蟲研究所内　谷　貞子

（六）ハルセミ（Terpnoria pryeri Distant.）　蟬母　又の名をマツムシ、クダマキとも云ひ、躰長八分乃至一寸、翅の開張二寸、頭部は三角形にして黑色を帶び、褐色の斑紋を有す。複眼圓くして黑褐色を呈し單眼赤褐にして頭頂に三個存在し、觸角黑色にして基部の二節は膨大せり。額面は著しく隆起し、口吻は濃褐色にして長さ二分、先端少しく其色濃く、顏面には短毛を密生す。前胸背の中央及び溝は黑色にして、他は淡褐色を呈し、板狀部は廣からずして細毛を密生す。中胸部は黑色を帶び淡褐色の縱條を有し、若しくば淡褐色の素地に黑色の縱條五個有するものありて、中央及び兩側のものは長し、其前方と後方には短毛を有す。翅は膜質透明にしてヒグラシゼミの如く翅端に近き横脈上には四個の焦茶色の斑紋を有せり。雄は腹部の背面及び側面黑色にして、各關節に褐色の斑紋を有し細毛を密生す。躰の裏面は淡黑色に淡茶色を混じたるが如き色合にして白粉を有し先端の一節は急に細くして小形をなす事イ圖の如し、雌は腹端に至るに從ひて細く、ツクツクボウシゼミの如く先端の一節は著しく延びて太き黑褐の產卵器を包圍す。ロ圖は即ち雌蟲の腹部なり。肢は茶色にして黑色點を有し、各脛節跗節には細毛を

ハルセミの圖

イ

ロ

生ず。成蟲は四、五月頃常に山間の松樹に靜止して盛にジーワジーワ、と鳴々す、本邦普通の種にはあらざるも、九州中國邊にて往々見る所なりと云ふ。

（七）エゾハルゼミ（Terpnosia nigrocosta, Mots.）　躰長雄は一寸一分乃至一寸二分、雌は九分内外、翅の開張二寸六分乃至三寸、体色形狀ヒグラシゼミに酷似すれども頭胸部は比較的小形なり。頭部の上面はほゞ三角形にして、綠色の中に黑紋ある複眼を有し、單眼赤色にして頭頂に三個存在す。觸角は黑色にして長さ一分三厘許、顔面の中央は著しく隆起して其兩側に綠色の並行せる横紋を有し、口吻綠色にして長さ二分、前胸背は大ならずして綠色を呈し、中央部の二縱條と各溝は黑色を呈し、板狀部は著しく突出せず。中胸部も綠色にして稍や隆起し、中央の大部分は黑色にして、其内にW字形紋を有すれども該紋の不明なるものあり。頭胸部の裏面は綠色を呈す。翅は前後共に膜質透明にして、前翅脉は綠色、翅端に至るに從ひ其色少しく濃くして、先端に近き翅脉上には焦茶色の斑點を二列し、後翅脉は黑褐色をなす。腹部は淡褐綠を呈し、各關節に銀白色の短毛を有す。雄は腹部の末節著しく縮小し、雌に至つては腹部の中央より末端に至るに從ひて漸次細まり、黑褐を呈せる產卵器を有す。肢は三對共に綠色にして黑斑を有し、細微なる軟毛を生す。雄の鱗狀瓣は小形にして三角形をなす。此種は多く寒き地に棲息し、岩手、新潟、青森の諸縣其他北海道に於て得らるゝは松村博士、富樫、佐藤、諸氏の送付せられし標本によりて明なり。（第三版第二圖）

（八）ヒメハルセミ（Gal? Sp!）　躰長九分内外の小形種にして、翅の開張二寸三分内外、其形狀ハルセミに酷似し、頭胸腹は綠色を帶び、頭部は三角形にして黑斑を有し、複眼綠褐にして楕圓形をなし、著しく頭部の兩側に凸出す。單眼は淡紅色にして頭頂に三個存在し、觸角黑色にして長さ一分、顔面綠色

を帶び、中央部は赤黄色を呈して著しく隆起し、其兩側に黄色の並行せる横線を有す。口吻は長さ二分綠色を帶ぶ、前胸背は大ならず、綠色にして中央に二條の黑縱線有り、且各溝は黑色を呈し、板狀部は凸出せず。中胸部は綠色にして稍や隆起し、長短五條の黑縱線を有し、中央にあるものは直にして長く、其下方兩側に小黑點を有す、外側にあるものは稍や曲り、時として短かきことあり。頭胸部の裏面は綠色を呈し、翅は前後共に膜質透明にして、前後兩翅の前緣脉の基半のみ綠色を呈し、他の肢脉は綠褐を帶ぶ。腹部は淡褐綠色にして銀白色の細毛を有し、雄は腹部の先端の一節急に細まりて小形をなし、雌は腹部小さくして先端に至るに從ひて細く、末端の一節は長くして針狀をなす、且産卵器は紅綠にして其長さ三分五厘、肢は各々綠色なり。雄の鱗狀瓣は小形にして耳狀をなす。此種は佐藤榮、林壽祐、長野菊次郎、諸士の送られたるものにして、新潟、福岡、千葉の諸縣に發生するを知る。（第三版第七圖）

（九）クマゼミ(Cryptotympana pustulata, Fab.)　馬蜩、又の名をシャアシャアゼミ、ムマゼミ、オホゼミ、ワシワシゼミ、ヤマゼミ、等とも云ひ、軀長一寸三分乃至一寸六分、翅の開張三寸七分乃至四寸三分、軀光輝ある黑色にして、全軀金色の細毛を密生す。頭部は平たき三角形をなし、複眼は橢圓形にして茶褐色を、三個の單眼は褐色を呈す。觸角は黑色にして長さ一分七八厘、額部は著しく隆起せずして面の兩側並に中央部は茶褐色を呈し、口吻黑色にして長さ三分、前胸背は其幅廣く板狀部は小形なり。中胸部は大にして著しく隆起し、前方に縱溝を有す。中後胸の腹面は白粉を覆ひ、腹部の背面第一第二關節の接合部、及第三節の上部とには白粉を裝ひ、腹面の中央部は黑褐色を呈し、其兩側には白粉を覆ふ。翅は前後共に膜質透明、翅脉は綠色よして翅端に至るに從ひ黑みを帶び、前後翅の基部は黑色を呈す。肢は茶褐に黑斑を有し、後肢の脛節には短刺を有す。雄の鱗狀瓣は非常に大にして長く褐色を帶ぶ。雌

クマセミの圖

イ　ロ

の産卵器は長さ三分、黒褐色なり。成蟲は七、八、九月頃山間原野を撰ばず、到る處の樹木に靜止して、午前中に最も多くシヤアシヤアと其音高く鳴々す。イ圖は雄蟲にして、ロ圖は即ち雌蟲の腹部なり。此の種は東京以北に於ては未だ見ざる所なれども、其他に於ては最も普通に產するものなりと。

（一〇）エゾゼミ(Cicada flammata Distant.)　蝦夷蟬、体長一寸二分乃至一寸四分、翅の開張二寸二分より二寸七分、躰黒色にして茶色の斑紋を有し、頭部は平たき三角形をなし、黒色にして四隅に長方形の褐色紋あり複眼楕圓形にして黒褐色を呈し、單眼赤褐にして三個頭頂に存在す。觸角は黒色にして長さ一分五厘、基部膨大なり。額面は著しく隆起して上部は茶色を呈し、口吻褐色にして二分、前胸部は其幅廣く、鈍褐にして中央に橙黄色の縦線を有し、其兩側黒色を帶ぶ。而して其周緣は橙黄色を帶び、更に黒緣を有す。中胸部は黒色にして大ならず、且降起も甚しからずして、中央にW字形の橙黄色斑紋を有し、側面に白粉縱帶を裝ふ。後方のX形突起部亦橙黄色にして、中央に黒線あり。翅は前後共に膜質透明、翅脉は稍黄綠色を呈し、翅端に至るに從ひ黒褐色を帶ぶ。翅端に近き横脉上にはミンミンゼミの如く斑紋を有し、前

後翅の基部の內緣の一室は橙黃色を呈す。腹部は黑色にして先端に至り急に細まり、第一關節の兩側面は橙色を呈し背面に二個の白粉斑あり。中央は橙黃色にして其兩側には白粉を覆ふ。肢は黃褐にして稀に黑色斑を有す雄の鱗狀瓣は大にして先端丸く、淡褐色を呈す。雌は腹端の一節著しく延び、鎗狀の產卵管は濃褐色にして長さ三分五厘、

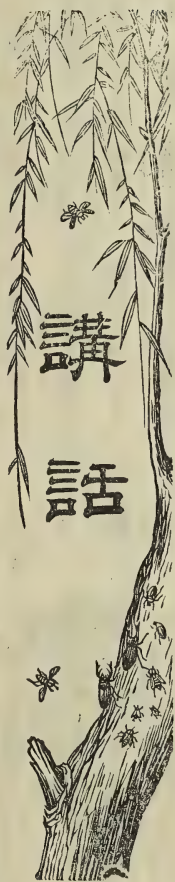
コエゾセミの圖

成蟲は七、八月頃常に山間に鳴々し、北海道の如きは九月頃現出し、多く人家近くにてギーギーと鳴々すと云ふ。一般東北地方にかけて棲息せる觀あるも、長野、新潟、鳥取、岐阜の諸縣に於ても獲られたり。

（一二）コエゾゼミ(Cicada bihamata Motsch.) 小蝦夷蟬、躰長一寸二分內外、翅の開張三寸三分許、躰黑色にして其形狀斑紋等すべて前種に酷似す、頭部は平たき三角形にして黑色を帶び、四隅には黃褐色の斑紋あり。黑褐を呈せる楕圓形の複眼は著しく兩側に突出し、單眼赤色にして頭頂に三個存在す。觸角は黑色にして長さ一分二厘許、額面は著しく隆起し

エゾセミの圖

上方茶褐を呈し、中央並に其の兩側には黑色の並行せる横線を有す。口吻二分にして茶褐を呈し、先端少しく黑みを帶ぶ。前胸背は大にして鈍褐色を呈し、中央に黄色縦線ありて其の兩側黑色を帶び、周縁黄色にして、後縁及び兩側には更らに黑縁と二個の黑斑とを有す。中胸部は黑色にして、中央に黄褐色のW字形の斑紋と側面に同色の縦帶あり。後方のX形の隆起部は前種に異ならず。頭胸部の裏面には稍々白粉を装ひ、翅は前後翅共に膜質透明にして、翅脉稍々黄緑色を帶び、翅端に至るに從がひ黑褐色を呈し、翅端に近き横脉上には黑褐色の斑紋あり。前後兩翅の基部の一室は橙黄色を呈し、前翅には更に黑色の一室を有す。腹部は黑色にして、先端に至り直ちに細まり、第五關節以下の各節の後縁に、橙黄色の斑紋二個つゝを有し、裏面も黑色にして白粉を装ひ、各節兩側の後縁は橙黄色を帶ぶ、雌は腹部小形にして、先端の二關節の裏面には黄色の斑紋を有し、産卵器を包む。肢は黄褐色にして、各關節の接合部は黑色を呈す。雄の鱗狀瓣は大にして且長く、重り合はずして先端丸く、灰褐色を呈す、此の種は前種と同じく、普通北海道に産するとの事なれども、陸中、岩代等の東北地方にも産することは、新國豊七氏の送られたる標本によりて明かなり。

# 講話

## ◎蜜蜂の話（續）

青柳浩次郎

それから巣脾の事を申しますが、之れは實に正確なものでありまして、上より縦に幾枚も垂れて居つて其房はみな正六角形であります。其六角の小房が並んで居るから、一つの房が六つの房に接して、其房

の壁の三方より合ふ所が一つの柱となりますから、一房が六本づゝの柱を有する事になるのです。又其巣脾は兩面に巣房があるから、前面の房底は後ろの面の三房の底について居りまして、前房の中心は後面の三房の柱となつて居て中々丈夫に出來て居るのです。其材料は蠟でありまして、それは蜜蜂が蜜から化成するもので、蜂の下腹の關節から、左右四個づゝ即ち八個づゝの蠟の小片を分泌するのです。蜂は巧みに脚でそれをとつて、口に含んで唾液をまぜ、之を軟かくして巣を造るのであります。其蜜から蠟を化成する割合は、温度が高いと蜜が少なくて多くの蠟が出來ますし、之れに反して温度が低いと、蜜を多く用ひまして蠟が少なくしか出來ませんから一定には言へないが、先づ蠟一斤を造ろうとするには、蜜十六斤より二十斤いるのです。此樣に蠟は貴いから、蜂は如何に經濟的に之を用ふるかと云ふと其巣房の壁の厚さは實に一インチの百八十分の一であつて、蜜一貫目を貯はへるのに蠟は僅か二十匁しかいりません。その樣に少量の料を以て多量のものを容るゝを得て、しかも甚だ堅固なるは此搆造に及ぶものはありませんでしよう。

前にも申す通り蜂群には王がありますが、それは一群に一匹しか居りません。卵は凡て此蜂王の產むもので、働蜂は雌雄なれども普通は決して卵を生みません。蜂王の卵を產むのは時期に關係するもので、春の花の澤山ありて蜜の澤山とれるときには、蜂群の盛んなる蜂王の產卵力の强きものは、一日に三千以上も卵を產むと云ひます。夫れで其蜂王の壽命は、日本蜂の王は凡そ四年位生きて居り、イタリア蜂やサイプリアン等の蜂王は五年位生きて居りますが、働蜂の壽命は甚だ短いのです。春の働く盛りには四十日か五十日しか生きて居りません。働きの少いときには三四ヶ月は生きて居りますが、決して半年以上生きて居るものはありません。尤もイタリア蜂やサイプリアンの働蜂は、日本蜂より少しは壽命が長い樣です。それで蜂王は始終卵を產み、絕へず兒を育てゝ行くのですが、働蜂の死するのは巣箱の中では死にません、必ず外へ出て死にますから、働蜂も長生きする樣に見へるが其實は絕へず新陳代謝するのです。

蜂王は前申した如く多くの卵を生むがそれは大抵働蜂になりて產れるから、春は忽ち蜂群が多くなる。そこで氣候は暖くなる、巣內の溫度は高くなるから分封熱が起る、それは群蜂が不快を感ずるから起るのである。それから働蜂は雄蜂の巣房を造りて蜂王が雄卵を產み込む、蜂の王は中々重寶の能力を有して居る、雌卵を生みたければ雌卵を產み、雄蜂が入用なれば雄卵を產むのです、そこで雄蜂が產れるの

で、雄蜂が見へると不日分封すると云ふ事がわかるのです。働蜂は又續いて王臺を作る、それは巣脾の下部に下向きに造るのです、尤もサイプリアン等は巣脾の側に造るを常とします。又イタリア蜂等は間々不正の王臺即ち横向等に造る事もありますが、日本蜂は割合正確です。其王臺が出來きますと蜂王は夫れへ雌卵を生む、それが三日立ちますと孵化します、そうすると働蜂は之に一種特別の滋養食物を與へます、元來蜂王になるべき卵と働蜂になるべき卵とは同一のもので少しも異りませんが、其食物に依りて蜂王ともなり働蜂ともなるのは實に奇妙です。此等の事を證明する事實は何程もあります、若し人爲で王臺の中の兒を出して、之に働蜂房の中の兒の孵化した許りの兒を入れて置けば、矢張り蜂王が産れて來ます。其食物は甚だ窒素分に富んであるもので、働蜂の唾腺から分泌する滋養物即産乳の樣のものです。其唾腺は何れの蜂も有して居りますが、蜂王や雄蜂は頭部と胸部に左右一個づゝ四個ありますが働蜂は頭部に左右二個づゝ、胸部に左右一個づゝ都合六個あります。働蜂の唾腺を多く有して居るのは即ち兒を育つる液を分泌するもので、蜂王を育つるに用ふる食物は主に此唾腺から分泌したものです。蜂王の兒は此樣によい食物を澤山與へられて成長して、王臺から出房するのは卵を産まれてから都合十六日目です。そこで一巣に王が二つあつては困るから、分封すると云ふ順序になるのです。蜂群が王臺を造るは、一期に七個も十個も造る、尤もサイプリアン等は、三四十個も王臺を造るを普通とします。分封は一期に三個も四個もする、最初の分封即ち第一分封は、新王が殘つて古い王が外へ分封して出ます。第二分封からも、後から出房した王が元巣へ殘りて、前に出戻した王が分封して出るのです。此樣に三回も四回も分封すると、段々働蜂の數が少くなるから、分封する事が出來ぬのに蜂王は數個も産れるから、蜂王と蜂王と爭鬪して遂に一方死ぬので、此時にまだ王臺から出ぬ稚蜂王があれば、蜂王は其王臺の横側より穴を開けて其中の稚蜂王を螫し殺します。尤も新蜂王は、何時でも他の蜂王に遇へば之を咬み殺さんとし、王臺のまだ出房せぬものを見れば之を咬み破らんとするものであるが、働蜂の爲めに制せられて其意を達することが出來きなくて分封する樣の事になるのです。それであるから蜂王は王臺から出房するときは、十分の注意をして出るので、外に他の王があるときは中々容易に出房せぬのです。其王の近づかぬ時を見計ひて出房すると、大急ぎで群中に匿れ入ります。イタリア蜂王の如きは、外に王が居りますと、その新王は王臺から出ずに、一日ももつとも待て居ることがあります。

蜂王は王臺から生れ出てから、早いものは五日位たちますと雄蜂と交尾をしますが、遲いものは二十五

日も立ちてから交尾するものもあります。其の交尾するのは外へ出て空中でするもので、新蜂王は晴天の日、正午より午後一時頃に交尾の爲め外へ出掛けます。一度外へ出て交尾が濟まなければ、濟むまでは毎日出掛けます。最初の日は外へ出て五分間位で歸つてきますが、或は一時間以上も外に居ることがあります。普通交尾を濟ますのは、二十五分か三十分以上外に居つた時でなければ交尾を濟して歸りません、交尾して歸りたものは、其王の尾端に白色の綿の樣なものをつけて歸つてきます。それは雄蜂の生殖器の一部です。それを巣へ歸りて自分で咬み取りますか、又は働蜂に咬み取らせます。交尾後二十四時間で卵を産み始めますが、一度交尾しますと再び交尾することはありませんし、又外出もしませず常に巣內で産卵して居ります。若し交尾をすることが出來ずして、三十日も經つと其王は卵を産み始めますが、其の産んだ卵は悉く雄蜂になります。蜂王の雄卵雌卵を産むの理由は、蜂王が雄蜂と交尾しまして、雄蜂の精氣を受精囊に受け入れて貯へ置いて、其の産むべき卵が其精氣に觸れたものは雌卵となり、觸れぬものは雄卵となるのですから、交尾せぬ蜂王は雄卵のみを産みますし、又老ひて雄性の精氣の盡きたるものは雄卵のみを産みますから、人爲を以ても雌卵を産むべき蜂王を、自由に雄卵のみしか産むことの出來ない蜂王とすることも出來ます。

若し蜂王がなくなりますと、多くの蜂は大騷ぎをして、或は一日も二日も騷ぐことがあります。冬の寒いときなどは、自分は凍死する迄も外へ出て王を探すことがあります。若し其時王を見出すことがあれば、其喜びますこと實に非常で、皆な羽を振ふて萬歳を唱へるのです。いよ／＼王のないことをあきらめて騷ぎを止めると、其巣に働蜂になるべき卵があれば、其所に王臺を造りて、之に王に與へる上等の食物を澤山與へて蜂王にせんとするものであります。働蜂になる卵と蜂王になる卵とは、同一のものであることは働蜂自身も能く知りて居ると見へます。凡て蜂の兒の食物は、蜂王でも働蜂でも、卵から孵化して三日目までは同じ質の食物を與へますが、四日目からは蜂王は同じ食物を與へるが、働蜂のは食物が變りて來ますから、孵化して三日目までの働蜂になるべき兒は、蜂王に變化させることが出來ますのであるから、王のなくなつた場合には、働蜂は一日も早く王を生せしめたいと云ふ考から、二日目三日目位の兒を蜂王に變化させるのが多いので、普通は卵から十六日で蜂王となりて出房するものが、斯る場合には十一日か十二日で蜂王が出房するが常です。こうして生じたる蜂王は、少し弱い蜂王が生れます。夫れは卵より孵化して三日間は、蜂王も働蜂も食物の質は同じでも、少しく濃いと淡いとありま

すから、蜂王になる兒と働蜂になる兒とは、多少發育が違ひて居るからです。其食物の濃い淡いは、肉眼でも見分くる事が出來ます。或る人はそう弱い蜂王が出ると云ふ事は決してないと說きますが、實際少し弱い王が出來るのです。又人爲を以て、其弱くなる王を強くすることも出來ます。其方法は少しく技術を要するが、簡單に說明すれば、働蜂が王臺を造りしときに、其中の兒を拔き出して、他の働蜂となるべき兒の卵より孵化した許りのものを入れてやるのです。又若い働蜂は、老ひたものに比すれば、唾腺より分泌する液が盛んであつて其の上濃いから、王を育てるに、若い働蜂の多い群は、老ひたもの丶多い群よりも良い王を育てあげることが出來ますのです。そうして其の生れた王が、時期が宜しければ交尾を濟して產卵をして無事に其巢が永續しますが、時期がわるければ交尾することが出來ずして又なくなります。先づ、七月以後だと交尾することが出來ないものが多いのです。これは、其時分は雄蜂の精氣が衰へて弱つてくるからです。

それから王のなくなつたとき、働蜂になるべき卵もなくて、蜂王を產する見込のないときとか、又は働蜂が蜂王の生れて來るのを待ちきれなくなつたときはどうするかと云ふに、働蜂は自身で巢房へ卵を產みますけれども、働蜂は交尾したものでないから、前にも申した通り雄蜂の精氣がないから、雄卵のみしか產むことが出來ません。こうなるといよ〳〵子孫絕滅と云ふ譯で、人が之を救濟してやるかどうかせないと、全く巢がつぶれてしまうのです。其働蜂の產んだ卵は、一つの巢房へ七つも八つも產んであるから能く分ります。蜂王の產んだものは、一つの巢房へ一つ〳〵の卵しか產みませんのです。

それから蜜蜂の氣質を云ひますと、實に愛國心に富んで居つて、其家を愛することが甚だ深い、又友情が厚くて、同族を愛することの甚だしいのは實に感心の外はありません。蜜蜂の針は、他のものを螫すと針は拔けて自分は死にます。されども、他から敵が來て其家に害を加ふれば、身を捨て丶之を螫します。又その友が飢へておるときは、自分の腹へ貯へてある蜜を、口から口へ移して之を與へるのです。

然し同じ蜜蜂でも、若し他の巢の蜂が入り來るときは、之を捕へて嚙み殺しますか、又は追ひ退くるのです。蜜蜂は蜜を採取する念が深いから、野に花が欠乏して來るときになると、隨分他の巢の蜜を盜みに行くのです。そうすると爭鬪を始めて、巢の入口で組み打ちをして激しき戰爭をするから、弱き蜂群は全群戰死する樣の事もあります。一萬も二萬もある所の蜂群が、一群一体で、一つも私利をはかるものはなく、各々其職分を怠らず働きます。若し蜜の欠乏したる場合にも、一つも蜜の多くを持ちて逃げ

去るものはなく、一群そろうて巢を守りて餓死するのです。又逃げ去る場合にも、全群そろうて逃げ去ります。此く友情が厚く、協力勞働して愛國心に富んで居ることは、同じ國に住みながら、私利を逞ふし公共心に乏しき人などは、實に蜜蜂に對して恥かしき至りです。

尙ほ又蜂の種類に依りては、多少其性質を異にして居ります。一例を擧げて御談しすれば、前御談した樣の盜蜂が起りて戰爭するのに、日本蜂は互に咬み合ふて死するものが多いが、外國種即ちイタリア○やサイプリアンの蜂巢へ、日本蜂が盜蜂になりて行くと、外國種の蜂は盜蜂を巢の外へ引き出して棄て大抵殺す樣の事はない。日本の蜂は武士道を行ひ、外國の蜂は文明的の戰爭をするのは余程面白いではありませんか。又日本蜂は王を愛する念が甚だしいので、從て王の側へ集合する力が强い、蜂群二個を合同する場合に、日本蜂は働蜂が爭鬪をせずに合同せしときに、蜂王を他群の働蜂が咬む樣の事は甚だ少いが、外國種は、働蜂は工合よく合同しても、蜂王をいじめることが多い。又日本蜂は集合するの力が强いから、繼箱を巢箱に載せて、巢脾を造らせようとしても容易く造らないが、外國蜂は繼箱に能く巢脾を造るのです。日本の蜂は王の居る所を少しでも離るゝのを嫌がるが、外國の蜂は、已が利益の範圍を擴ることとなれば何處までも行くとは、日本の蜂は何處までも日本風で、外國の蜂は又外國風で甚だ奇妙ではありませんが。此樣に多少性質を異にして居るから、養蜂をするに、外國の養蜂書を讀んで、直ちにそれを日本蜂に應用しようとすると誤りを生ずることがあるのです。

（完）

## ◎昆蟲採集奇談（幻燈使用）（其三）

昆蟲翁　説明
鳴蟲女史　筆記

### （三）夜中採集を狐に魅されしと誤認す

今を去る二十余年前の夏の事でありました、當市の西北隅に當て忠節林といふが御座いまして、只今は木も殆んど切り拂つて林らしくもないが、其頃には非常に廣い間木が茂つて晝猶暗しと云ふ樣な林で、おまけに笹は蓬々として膝を沒し、何となく晝間も氣味の惡い樣な所であるから、人跡絕てなく、まして道などの有らう筈はありませぬ。斯る處であるから、實に昆蟲の巢窟で採集には屈强の地でありましたから、私は毎夜〳〵夜中採集に參ります内に、いつとなく一定の道がつきました。御承知の通り、夜中採集の最も都合のよいのは、先づ曇天で、闇夜で、南風が吹く蒸し暑い樣な晩です。斯樣な晩には家の中にすくんで居ても蒸し暑いから、大抵の人は團扇など持つて屋外へ涼みに出る、殊に堤防などへ涼

みに來る人が中々多いのです。或る蒸し暑い晩に、私は例の如く此の林へ採集に參りまして、初めに砂

夜中採集を狐に魅されしと誤認するの圖

糖を塗り廻つて、暫くして蛾を捕りに廻る、其道が常に一定して居るのです。すると堤の上から一人の男が「オーイ……オーイ」と呼び出しました。私は其呼ぶ聲は聞いて居たけれども、自分を呼ぶなどとは夢にも思はず、誰か他の人を呼ぶものと思つて、只餘念なく採集を致して居ますと、その内に「オーイ……りこの森の中の人……狐に魅されて居らせんか……二度同じ道を廻つたぞー……オーイ…狐に魅されて居らせんか」と大音に呼ばはりましたから、漸く自分を呼ぶことをさとりました。私から申せば、同じ道を廻るのはあたり前の事ですから、もう一度廻るぞーと云ひたい所でありましたけれども、それは申しませんでした。兎に角其人は、私等が狐に魅されて居ると信じ、氣の毒に思ひまして呼で呉れたものでせう。乍然私等は一向平氣で止めもせず、又出ても行きませんから、愈々怪しいと思つたと見へて、堤から私等の火をめがけて石を投げかけましたが、これには一番閉口したです。それゆへ火をかくす樣にして居ましたけれども、そー始終火をかくしづめにもして居れませぬから、火が見へると又石を投げる、實に危險でしたから、やむなく家に歸りました樣な始末でした。成程同じ道を二度も三度も廻るから、狐に魅されたと思ふのも無理はありません。今皆樣に御話するも、なんだか其呼ぶ聲が聞へる樣な氣が致します。

## ◎豌豆の象鼻蟲に就て

特別研究生　井口宗平

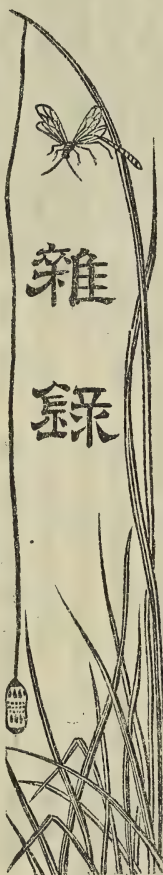
本篇は本年二月一日、水曜昆蟲談話會席上に於て、同氏の談話せられたるものなるが、前號學說欄に、當所助手在米名和梅吉氏の寄せられたる豌豆の象鼻蟲と同種にして、如何に其加害の甚しきかを知るに足れば、玆に揭ぐることゝなしぬ。

豌豆の象鼻蟲の幼蟲は、我地方にて方言をダニと稱し、實に恐るべき害蟲の一であります。此蟲の害は餘り古くより被りしものにあらざる由なるも、今や非常の繁殖をなし、其害の劇烈なる、苟も豌豆の粒として此蟲の害を受けざるなく、今日に於ては、豌豆を栽培するもの寥々として曉の星の如く、殆んど其跡を絶たんとするの有樣で御座います。余は之れを想ふ毎に悚然として其大害を恐れ、一般農業者に一日も早く昆蟲思想を注入し、以て此の惡むべき害蟲を撲滅するの機運に到達せん事を希望して止まざる次第で御座います。仍りて今夕の水曜昆蟲談話會に際し、該蟲に就て余が聊か見聞したる事實と、驅除法の一斑とを陳述して、明教を仰がんと欲するので御座います。

此蟲は豆象鼻蟲科に屬する一種にして、成蟲は体長一分五厘內外、形扁平にして灰褐色を呈し、翅鞘には灰白色の斑紋があります。五月頃豌豆の花の漸く凋落して僅に莢の形をなしたる時、續々として集り來り、莢の表面より、豆粒の上部に當る所に一粒宛黃色の卵を產附いたしますが、其頃の溫暖なる日、豌豆圃に入りて莖葉を搖る時は、成蟲は頗る多く飛散するもので、曾て捕蟲網をうけて打落したるに、暫くにして數十頭を獲たことが御座いました。此の孵化した幼蟲は、無脚にして白色の蛆狀をなし、莢に孔をあけ豆粒の內部に喰入致します。而して莢は漸次發育致しますから、前に幼蟲の喰入したる小孔は、自然に其痕跡を失ふものであるから、普通農家は、自然內部に湧くものと誤信するに至りたるものであります。而して豌豆を收穫し、乾燥して器中に容れらるゝに及んでも、幼蟲は常に發育し粒の內容を喰害して內孔をつくり、七月頃に至りて、蛹化する樣に見受けました。蛹は乳白色にして、已に成蟲の具有せる觸角、脚等を有し、腹面に卷縮して居ます。而して羽化する時は、一方に圓形の孔を穿ちて出でますが、此の出でし口は、恰かも柿のイラムシの繭の如く、蓋は開きしまゝ粒に附着して居ます。而して、羽化期は地方によりて非常の逕庭あるものゝ如く思はれます。農家は收穫後、此中のダニ即幼蟲を殺さんが爲めに、直ちに煎るを常と致しますが、被害の豆は、之れを嚙むに一種忌はしき臭氣と味とを有し、到底其儘にて食するに耐えませぬ、又害せられたる豌豆は、其重量半ばに過ぎず、殊に大部分は表皮の硬き部分なれば、其品價は實にいふに足らざるものであります。況や被害のものは、之れを種子とするも發芽極めて少なく、又發芽せしものも、胚乳に乏しき爲め完全なる發育を遂ぐることが出來ませぬから、水撰をして播種せんとすれば、無害のもの殆んど之れなきの有樣であるから、自然栽培者の減ずる樣になつたのであります。斯の如き慘狀を呈するに至りたれども、素より無智の農民なれば

何人も其原因を知るものなく、唯自然に湧くものとのみ信じ、甚しきに至りては、豌豆は消化悪しきものなれば、之れが栽培を止めさせんと、神佛が其種子を絶滅せしめらるゝなりなど、とりとめもなき附會說さへ流行するに至れるは、實に滑稽の至りで御座います。然れども、元來多量に栽培せるものにあらざれば、之れが驅除法の如きも、比較的小細工的に行ふも尙効ある可きことゝ信じます。今其驅除法の一として、春季成蟲の豌豆に集來するものを、早朝若くは日暮の成蟲の不活潑なる時に於て、咽喉付の圓形若くは半圓形捕蟲器を受けて打落し、之を熱湯中に入れて殺すのであります。今一法は、豌豆收穫後、食用に供すべきものは、從來余が地方に行はるゝ如く悉く之れを煎りて幼蟲を殺し、又種子用のものは、羽化期に當りて箱中に密閉して、羽化するも外部に出づることの出來ぬ樣に致し、之れを二硫化炭素を以て殺すので御座います。若し此二法を共同して實行したなれば、其殲滅に至る敢て遠きにあらざることゝ信じます。乍然、こは余が想像に外ならざれば、實際上の如何は未だ之を知らず幸に垂敎あらんことを願ひます。

## ◎昆蟲文學

### 蠶

南山樵夫

纔以絲桑爲好餌。吐絲豈計一身利。若明功過撿昆蟲。蠶子應占頭等位。

物外散人曰。僅僅二十八字爲蠶子吐氣焰無復餘蘊。筆力千鈞。健羨健羨。

### 蜜蜂

愛汝辛勞奉女君。探花日日到斜曛。非唯以蜜分天下。別向人間敎儉勤。

物外散人曰。蜂本凡題。落想如斯則覺斬新。非唯以蜜分天下。別向人間敎儉勤。何等好藻何等筆力。後進者倣此詠物何題不易易。請勉旃。

### 蝶

相追兩兩戲春塘。遮莫群蜂覓蜜忙。天以風流賦胡蝶。休忘賦性笑遊狂。

物外散人曰。物各從天賦。蜂蟻之勤苦。蝶蛾之遊逸。其性自然。撓性強最曷得全天。作者寓意於隱微之間。比諸前二首一誦如相戾。而熟讀翫味却覺融然渾和。

## 雜詠

*

池の面に八千房垂るゝ藤かづら早花に咲け虻來鳴くべく　安田志紀臣

*

外國のやまとの花を集めたる園の春べに胡蝶群れ飛ぶ　蓼圃

*

隣家ゆ請ひ來し下蠶十ばかり櫛笥の蓋に養ふいもうと　ふもとのや

*

眞木茂る木曾の家家春深く蠶飼ひせる見ゆ旅過ぎ行けば　伐木韵

*

濃紫藤浪匂ひ薄紫いとゆふ燃えて虻春に醉ふ　坪内華外

*

藤浪の房より長き紫の袖を翳して蝶趁ふ少女

*

誰がはじめあやいろ〳〵に染め別けて春に放ちし胡蝶なるらむ　潮音生

羽蟲飛ぶ花菜月夜の鄙の家に睡らぬ人や挽臼の歌

### 風船蟲

小水蟲おもしろさうに見ゆるかな　四澤

小水蟲數多入れけり小き瓶　同

灯影さす瓶に動くや小水蟲　同

小水蟲硯の海に落ちにけり　四山

掃き出すや洋燈に集ふ小水蟲　同

蛭泳ぐ小雨の溝や小水蟲　城東

玻璃瓶や風船蟲の浮沈み　歸麓園

小水蟲ぼうふり蟲を笑ひけり　望月

掬うては瓶に入れけり小水蟲　三川

すくひ捕る風船蟲や掌　同

年年の風船蟲や裏の池　同

## ◎前號口繪の梅花と昆蟲

名和昆蟲研究所員　名和正

頃は一月の末つ方、寒風膚を擘くの候、梅花は獨り滿開の期に達し、古へ菅公は言はずもがな、東西知らぬ童子すら、いかでか之を賞せざるべき、はた之を慕はざるべき、之れ何れの點を賞するや、又如何なる點を慕ふにや、そは偏に花瓣の美なると、其香の馨しきとによらでやは、之れ獨り我等人類たるもののみに止まらず、哀れはかなき蟲類に於ても又然り。

元來花は古よりかゝる美麗なるものにてありしか、又は見るもものうき羊齒等の如きものなりしかは、今更余の喋々を要せざる處なれども、その羊齒の如き、蘚苔類の如き、何れも今日の顯花植物の初にし

て皆昆蟲類等の媒助に依り、無意味に變化に變化を加へ、進化に進化を重ねたるものなり。換言せば即ち自然淘汰の結果、斯くの如く美を呈するに至りたるものにして、こは偏に蟲類の賜と云はざるを得ず されば、何故に蟲類の之に集るか、花の美を愛せんが爲なるや、或はまた他に目ざす處ありて集ひ來るものにや。こはそれ世人の熟知せらるゝ如く、何れの花にも各々蜜と花粉とを藏すれば、蟲類は之れを得んが爲めに集ひ來り、蜜を採りつゝある間に、われしらず花粉媒助をなし、益々花をして完全に、且は美とならしめしものに外ならず、そを我等人類の之を利用して以て、己が樂となすなり。

余は昆蟲類と花とに就き、其關係を調査せんとて、昨年梅樹の盆栽十數株を造り、早咲させんものをと自ら造りし溫室に入れ、朝夕之れを愛し居たりしに、去る一月二日、例の如く余は之を尋ぬれば、はや一輪の梅花は開き初めたり、其後三日四日と漸次開花の數を增し、五日頃には一樹の梅は滿開の有樣となり、芳香馥郁として鼻を突けり。されば之を室外に出し置くや、忽ちヒラタアブの一頭飛翔し來り、開花せるものに止まり頻りに蜜を吸ひ居たり。其後ノラアブ、ハナアブ、ホシヒラタアブ、オホハナアブ、ノラアブモドキ、其他双翅類に屬する小形種の集るを見る。就中一月廿三日の如きは、他の一株の盆栽に、以上の蟲類の外、更にキテフの花を訪問せるを見受けたり。かゝる寒氣凜烈たる此の一月に於て、蝶類の花を尋ね來りたるは實に奇なりとせんか。即ち前號口繪に畫かれしは其當時の有樣を實寫せしものにして、中央より少しく上に花蜜を吸ふはキテフ、其上方將に開かんとする蕾に依れるはホシヒラタアブ、其他ノラアブは枝の下方に靜止し、甲のハナアブは花蜜を吸ひ、乙の花虻は飛揚し居れり。

嗚呼昆蟲は冬季に滅亡し、夏季に偶生するものと誤認せるものをして、此の自然の實况を目擊せしめなば、果して如何の感かある。

## ◎昆蟲見聞錄（其一

三重縣阿山郡 西岡嘉十郎

予は伊賀の片田舍に生活し、朝に星を戴ひて出で、夕に月を蹈んで歸り、終日營々勞働に從事せる一小作農に過ぎざれば、敢て昆蟲を專問的に研究するの余地も無ければ、學識も無く從て昆蟲の何物たるやも未だ解せずと雖も、常に野外に在りて勞働するに當り、目に觸れ耳に聞きし事柄を錄して、貴重なる本誌の余白を汚し、賢明なる讀者諸氏の敎を乞はんとす、諸氏幸に之れを諒せよ。

一、不思議なる胡蜂　去月二十三日或る櫟林を逍遙せしに、不圖樹根の所に胡蜂の斃死せるものある

を見しかば、直ちに拾ひ取りて撿せしに、此蜂の頭部の腹面より二本と、腹部の末端より一本と、都合三本の糸狀菌發生せり。此菌は淡黄色にして、太さ蜂の觸角位なれ共、長さ各々二寸余あり、想ふに之れ胡蜂に寄生せし菌ならんか。余り不思議の儘持歸り、今尚大切に之れを保存し居れり。

**二、二化螟蟲と大螟蟲との差異**　昨年予が調査せし二化螟蟲と、大螟蟲との異なる點を報せしに、二化螟蟲にありては、其幼蟲の背線判然せりと雖も、大螟蟲は判然せず、尚稻莖に食入せし穴の開き法は二化螟蟲にありては圓形なりと雖も、大螟蟲は橢圓形なるを以て、被害莖の外部より、一見直ちに其二化螟蟲なるや大螟蟲なるやを識別し得べきなり。

**三、桑天牛卵の寄生**　去月五日、壹反余歩の桑園に於て、桑天牛卵の採取を行ひしに、總計三十七個を獲たり。試みに一々之れを開き撿せしに、內寄生にかゝりしもの二十三個、腐敗せしもの二個、計廿五個は生活力を失へるものにして、只僅かに殘り十二個は完全に發育加害するものなるを知れり。尚又其殘り十二個の內、既に孵化したるもの八個、卵の儘なるもの四個なりき。

**四、昆蟲採取奇談**　本誌前號の講話欄に於て、昆蟲翁説明の昆蟲採取奇談中「夜中採集の燈火を天狗の火と誤りし」馬鹿話ありしが、予も之れと畧々似たる奇談あり。即ち昨年四月十二日の夜、農友二名と共に、燈火と糖蜜とを携へ、夜中採集の爲め人家遠からざる某山林へ到り、熱心に採取し居たり。然るに此山林の傍らに、或る農家が栽培せる江南竹の藪ありて、其頃は盛んに筍の發生せる時期なれば、番人を置き、毎夜藪の附近を巡廻して盜難を防ぎ居たりしが、今予等が持てる燈火の、時々藪の間より此番人の目に觸れたりけん、遂に予等を筍盜人と誤認し、大喝一聲「此畜生筍盜人奴逃さぬぞ」と叫び、棍棒を振り巡して採取中の予等を捕へんとせり。予等大に其意外なるに愕きたれ共、元より盜人にも非らざれば徐ろに番人に向ひて昆蟲採取の爲めなるを辯せしも、番人中々聽かず、遂に予等を捕へて警官に引渡さんとせしが、折好く予等及び番人を知れる人來りて、種々辯護したれば、番人も遂に予等の盜人に非ざるを知り還放したり。迷惑なりしは予等にして、少許の獲物を携へ悄然歸宅せり。此事或日某友人に話せしに、友人笑て曰く、夜分(藪)の事なれば致方も無しと、呵々。

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄　(其三)

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

(三)クロムクゲムシ　稻作害蟲の一にして、翅の縁にフサの如き長き毛を有するを以て總翅類(總は

（イ）ムクゲムシ又はクロムクゲムシの被害葉　（ロ）同稲を害する状
（ハ）クロムクゲムシ（成蟲）　（ニ）ムクゲムシ成蟲

フサの意）とし、或は跗節の先端ふくれたるを以て胞脚類となす人もあり。七分類に入るれば半翅類に屬す。半翅類は有吻類と稱して、蚜蟲、ウンカ、ガメムシの如く凡て吸收口を有すれども、このクロムクゲムシは、吸收にも咀嚼にも適したる口を有し、直翅類と半翅類との間に入るべきものなれば、日本昆蟲學及日本昆蟲分科表等には、總翅目として獨立せしめたり。

此の蟲は体長五厘位の小さきものにして、全体黑褐色を帯び、觸角八節にして、第一節は小さく、第二節は大きく、第三節細長く、第八節は甚だ小なり、而して觸角には多くの毛を有す。頭は方形にして三個の單眼を有し、複眼大なり。翅は透明にして長き縁毛（翅のフチにある毛を縁毛といふ）あり、ムクゲとは此の毛より起りたる名にして、体黑きを以てクロムクゲムシとは云ふなり。腹部は十節なれども、第一節は甚だ小なるを以て九節の如くに見ゆ。而して下節に至るに從ひ幅狹くなり、末端は管狀をなし、之に普通六本の毛を有す幼蟲は赤色、又は赤黄色にして形成蟲に似たり。年二回の發生をなすものゝ如く五、六月頃苗代田に發生し、苗葉を咬みて其養液を吸收するを以て葉先はヨレ遂に枯るゝに至る、俗に苗のウラヤケと云ふは此の蟲の害なり。初め或る一部に發生すれども、其儘捨置けば一面にひろがり、大に苗の

イネノアヲムシの經過圖

(イ)卵 (ロ)三眠起の幼蟲 (ハ)四眠起の幼蟲 (ニ)稲葉を三角に綴りたる繭 (ホ)蛹 (ヘ)成蟲(雄)飛揚の有樣 (ト)同(雌)飛揚の有樣 (チ)成蟲(雄)靜止の狀 (リ)同(雌)靜止の狀 (ヌ)アヲムシヤドリバチの繭 (ル)アヲムシヤドリバチ (ヲ)福俵蜂の繭 (ワ)福俵蜂 (カ)麥俵蜂の繭 (ヨ)麥俵蜂

生育を害す。八月頃穗の出づる際、葉又は稲の花に集りて加害し、爲めに實入り十分ならず甚しきは粃(シヒナ)となることあり。

驅除法　前號に於て述べたるが如く、苗代田に於て折々捕蟲器を以て害蟲を掬ひ採ることを農家の一の仕事となす場合には、多く捕蟲器に入るを以て甚しき害をなさず、然れども若し一部に發生して葉先のよれる等のことあれば、直に葉先を刈り取りて之れを殺すべし。なほざりになし置けば一面にひろがるを以て、全体の葉先を刈取らざる可らざるに至るべし。此の蟲の驅除法としては、藥品を用ふることなど諸書に見ゆるも、余は被害部を切り取るより他に良法を知らず、宜しく注意して最初一部に發生せしときに驅除すべし。

(四)イチノアヲムシ　稲作害蟲の一にして、幼蟲は淡綠色なるを以てイチノアヲムシといひ、又其步み方シヤクトリムシの如きを以て、俗にイチシヤクトリといふ。成蟲は、雄の翅色褐色にして、前翅に二條の帶樣の模樣あるが故にオスフタオビの名あり、雌は黃色にして、帶樣

の模樣は一は上より、一は下より出で丶短かく、中央に二小黑点あり。翅を開けば五分乃至七分の小形の蛾にして、年三回の發生をなす。五月頃第一回の成蟲出て、稻葉に小さき卵を一所に多く產み付け、五月下旬より六月上旬頃孵化して幼蟲となり葉を食害し、六月下旬頃に至りて稻葉を三角形に捲き、其内に入りて蛹となる。苗代田に於て、三角形に捲きたる葉の水面に浮び居るは此蟲の繭なり。七月初に第二回の成蟲出で、次で八月上旬に第三回の成蟲現はれ、九月頃蛹となりて其儘越年し、翌年五月頃羽化するものなり。此蟲は苗代に於て其害最も甚しく、時としては本田に於ても亦加害の甚しきことあり

驅除法　苗代田に於ては、捕蟲器を以て掬ひ採るを最も宜しとす。又葉を切りて散布し、漸次水を深くして苗の沈むときは、蟲はこの葉に移るを以て之れを集めて殺すべし。然れども此法は苗長くのび、畦の低きときは行ふことを得ず。本田に於ては捕蟲器にて掬ひ採るか、若くは少量の石油を葉にかゝらざる樣に注ぎ、且米糠を撒きて其中に拂ひ落すを良しとす。

驅除の際、米粒大の白きもの丶多く集りて葉に付きたるものを見ることあるべし、そはイチノアヲムシを斃す寄生蜂の繭なれば、決して採るべからず。又フクダワラ、ムギダワラとて、稻葉より糸を引き其先に俵狀のものが付き居ることあり、これも亦イチノアヲムシに寄生する益蟲の繭なるを以て、大切に殘し置くべし。

## ◎蟲界瑣談　第一

千葉縣　齋藤啓二

（一）負子に就て　負子に就ては先きに聊卑見を述べたることありしが、當時余は該蟲の飼養試驗中にて未だ十分の成蹟を得るに至らざりしも、偶々長野氏の論說ありしに因み、取り敢へず觀察の大要を述べたる次第なりき。其後研究所の研究結果も示され、最早此蟲の雌雄に付ては彼是論ずるの要なし。依りて、此には只余が飼養試驗の結果のみを摘記するに止めんとす。

余は初めより、彼の負卵せるものは雄蟲にして、背上の卵塊は疑もなく他の雌蟲の產付せしものならんと信じ、依りて雌雄一對を一器に入れて飼養し、以て產卵せしめんことを圖れり。即ち一昨年四月廿五日先づ已に少許の卵を負へたる雄蟲を求め、其背上の卵を除去し、更に之を數多藏卵せる雌蟲と同居せしめ、爾後每日小水蟲類を與へて飼養し置きたるに次の結果を得たり。

五月卅一日に至り雄蟲は五個の卵を負ふ。　六月一日、更に廿三個を加ふ。　同三日、三個。　合計三十一個。

此の卵子は六月十六日に至りて孵化せり。然るに六月廿三日に至りて又四十三個產卵し、該卵子は七月九、十兩日間に孵化し、卵殼は翌十一日に至りて脫落せり。然るに雌蟲を撿するに尙多くの卵を藏せるを以て、第三回の產卵を期せしに、七月卅一日に至り雄は斃死したるを以て、是に一先づ此の飼養を中止せり。

右は僅に一回の試驗に過ぎざるも、尙之に依りて雌蟲は幾回にも產卵し得ることを知るべく、又雄蟲は二回以上負卵することゝ、自然の狀態に於ても又之れあるべきを知るべく、而して卵期は略二週間なるが如し。

（二）茶の尺蠖に就て　　昨年五月、茶葉を食害すること甚しき尺蠖蟲の大なるもの（形狀色彩桑の枝尺蠖に似たりと記臆す）三頭を捕獲し來りて飼育し置けるに、十七日より廿二日迄の間に蛹化せり。而して其蛹化するや、飼育箱の上方及食樹の枝葉等より糸を張り、自身は其中間に懸垂し、身邊に二三の枯枝枯葉等を纏ふに過ぎざる甚だ粗造極まる繭にして、外部より分明に蟲躰を見るを得べし。而して此に最も滑稽なる一事は、彼が飼育箱の側方に張りし布を圓形に切取りて身に纏へしことなり。甞て鳥羽源藏君が。簑蟲を飼育せしに飼育箱に張りし寒冷紗を嚙切られたる記事を載せられたることありしが、余も殆んど其れと同樣の事實に遭遇せり。而して三頭ながら同一轍に出でしも又一奇なりし。斯くて六月五日に至りて羽化して見れば、何ぞ圖らん佐々木氏のキラテフならんとは。キラテフ（松村氏の白ツバメ）の幼蟲は綠色にして、榧の害蟲なることは佐々木氏の日本樹木害蟲篇にも見へ、余も又しば〳〵實見したる所なれども、茶を害することは從來全く知らざる所にて、其の榧にあると茶にあると、幼蟲の彩色が甚だ異なるよりして、余は全く別物と信じたりしなり。是れ所謂保護同化にして、榧にありては自から綠色を必要とするも、茶樹に生息して枝間に躰軀を托するに當りては、其枝に紛はしき彩色を有すること、彼の生存に取りて最も必要なるべければなり。

## ◎養鷄と昆蟲

千葉縣　高橋徽一

養鷄は我邦今日の狀態に於て有利有益なる事業にして、農家は必ず副業として之を飼養すべきは勿論、漸次其種類の改善を謀り收益の增加を期すべきなり。然るに從來斯業經營上に於て疾病、惡疫等の障害尠からざる中に就きて、最も普通にして且つ困難なるは、彼の鷄躰に寄生する諸害蟲の患害なりとす。殊に彼の羽虱及羽蝨の如きは誠に微細なる蟲類にして、然かも其繁殖力頗る急劇迅速なるものにして、或は羽毛の裡に隱匿し、或は塒架の蔭に蟄伏して、晝夜の別なく鷄躰を咬刺し其血液を吸收するを以て

一度び此患に罹る時は、産卵を減少し次第に疲勞し、苦惱の結果は衰弱に陷り、延ひて以て他の惡疫を併發し、甚しきは斃死するに至る、之れが爲め飼鷄者の多くは中途に其意氣を挫き、往々廢業する者あるに至る。予亦數年以前より、宅地の一隅に鷄舍の一棟を築造し、之を五區に劃し、肉用、卵用、愛玩用等の數種を飼養せるが、同じく害蟲の侵す處と爲り、頗る困難を極め、驅蟲と消毒とに殆んど忙殺せらるゝを常とせり。然るに該鷄舍中獨り第五號室に於ては、是等害蟲の發生比較的少數なるものゝ如く此室に收めたる鷄は少しも懊惱の狀なく、最も健全に發育するを以て、爾後注意を加へ、專ら其原因を探究せしに、豈圖らんや蟻群の一隊あり、鷄舍の四柱を攀ぢ、土壁の空隙を縫ひ、此室に侵入し絕へず害蟲を啄み去るを發見せり。之れ所謂自然の淘汰にして、他室に比し害蟲の少なきも亦故なきにあらざりき。斯くて予は之を全舍の驅除法に利用せん事を企て、先づ壁間に一つの穴を穿ち、甘味を投じて誘ひしに、彼蟻群等は日を逐ふて其數を增し、今は全舍に充滿し、陰然飼養者を援助するものゝ如し、元來鷄の性として、飼函に蟻の附着するを嫌惡するものなれば、此點に一層工夫を凝し、人爲的驅除法と併行せんには、家禽飼育上多少の便益なるを信ず、加之昆蟲の多くは、家禽の營養に欠くべからざる必需飼料として、密切なる關係あるに於てをや。

## ◎京都府加佐郡新舞鶴産の昆蟲 (四)

(小山彰氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

(一〇一)ミチヲシヘ (Cicindela chinensis Degeer.) 九月七日●(一一八)アカアシゴモクムシ (Harpalus rugicollis M.) 八月廿九日乃至九月一日、体長三分六厘乃至四分、頭及胸部黑色にして翅鞘黑褐色を呈し、觸角及び肢は褐色なり●(一一九)ゴミムシの一種 (Patrobus flavipes M.) 七月二十九日、体長四分五厘乃至五分二厘体黑色にして稍平たく、觸角暗褐色、肢は赤褐色を呈す●(一二〇)キベリアヲゴミムシ (Chlaenius inops

Chaud.) 七月八日、体長三分五厘内外、青色にして翅に黄色の縁を有す●(一二一)フチトリゴミムシ(Gn? Sp?) 七月十七日乃至八月二日、体長二分八厘、黒色にして、翅縁及胸縁は褐色に細く縁どらる●(一一七)ゴミムシの一種(Gn? Sp?)八月廿六日乃至九月六日、体長四分五厘乃至五分、黒色にして複眼灰黄色を呈し、觸角及肢は褐色を帯ぶ●(一一四)ゲンゴラウの一種(Laccophilus dufficilis S.)七月二十一日乃至三十日、一分二厘内外の暗褐色種にして、横皺なく体平たし●(一一五)ゲンゴロウの一種(Haliplus japonicus S.)七月十三日乃至八月八日、体長一分二厘、翅鞘に横皺多き褐色楕圓形の種なり●(一一六)ヒナガムシ(Gn? Sp?) 七月十五日、体長一分七厘乃至二分、漆黒色にして形ちコガタノガムシに似たる種なり●(一一〇)ヒメナガハネカクシ(Cryptobium pectorale S.)八月十七日乃至九月七日、二分五厘位の細長なる種にして、肢及翅鞘は褐色を帯ぶ●(一〇六)コメツキムシの一種(Gn? Sp?)八月廿四日、体長四分五厘内外の黒褐色種にして、觸角及肢は褐色を呈す●(一〇四)クワガタムシ(Macrodorcus rectus Motsch.)七月廿一日●(一〇二)カブトムシ(Xylotrupes dichotomus L.)八月十七日●(一〇七)ヒメダイコクムシの一種(Gn? Sp?) 九月一日、体長二分六七厘の黒色種にして、胸背に二個の突起物あり●(一〇八)ハナモグリモドキ(Glycyphana argyrosticta Motsch.) 九月一日、体長四分五厘乃至五分、暗緑色の種にして翅に灰黄色の小點あり●(一一一)ウリハムシ(Aulacophora femoralis) 八月三日乃至十三日、一名ウリバヘと稱す●(一一二)イブキハムシ(Gn? Sp?)体長二分二三厘の暗褐色種にして、前胸の兩側黒褐色を帯び、翅鞘の肩部稍隆起して黒褐色を呈す●(一一三)ネクヒハムシ(Donacia constricticollis Jac.) 八月十日、体長二分、胸背緑褐色翅鞘は紫褐色を帯び、腹面は銀白色の短毛を密生す●(一〇三)クロカミキリ(Spondylis buprestoides L.)九月五日●(一〇五)コゴミムシダマシ(Lyprops sinensis Marseul.) 八月一日乃至二十日●(一〇九)アキノザウムシ(Lixur impressiventris Roel.)九月二日●(一二二)(一二三)キノコムシの一種(Gn? Sp?)八月六日、体長六厘乃至八厘の黒褐色若は褐色の種にして圓筒形を呈す(九二)ウスバカゲロフ(Myrmeleon formicarius L.)八月二十日●(九六)ホシウスバカゲロフ(M. micans M. L.) 八月二十八日●(九三)アカシリアゲムシ(Panorpa Sp?)月日不詳●(九七)チッチゼミ(Melampsalta radiator Uhler.)九月二日乃至五日●(一〇〇)ツマグロヨコバヒ(Selenocephlusa cincticeps Uhler.)九月三日●(一二四)ヨコバヒムシ(Tettigonia viridis Linn)八月廿二日乃至九月三日、一名オホヨコバヒと云ふ●(九八)テングヨコバヒ(Dictyophora inscripta Walker)八月十九日、一名テングスケバといふ●(九九)マダラアシヨコバヒ(Gn? Sp?)八月廿九日、前種に似たる種に

して、肢に褐色の斑紋あり●コミヅムシ(Corisus substriata Uhler) 九月一日、俗に風船蟲といふ●(九五)ウスバキトンボ(Pantala flavescens Fabr.) 八月二日●(九四)オホシホカラトンボ(Orthetrum melania Selys.)九月四日、シホカラトンバウに似たれども、該種に比すれば餘程大形にして、翅底の褐色若くは黒褐色部著し。

## ◎靜岡縣磐田郡産の昆蟲（四）（神村直三郎氏送附）

名和昆蟲研究所分布調査部

（一〇九）サビハンメウ(Cicindela japonica G. M.) 四月十日乃至五月十七日●(一一八)マイマイカブリ(Damaster pandurus Bates.)四月十日●(一八七)アヲゴミムシ(Chlaenius abstersus Bates.)六月十二日、体長四分五厘乃至五分、全体青色を帶び、觸角及肢は褐色を呈す●(一〇七)ヒラタゴミムシ(Anchomenus magnus Bates.)四月廿六日、体長五分乃至五分五厘、黒色扁平なる種にして、觸角及肢の脛節と跗節とは褐色なり●(八〇)マルガタゴミムシ(Amara chalcites Zim.) 四月八日、体長三分内外、黒色楕圓形の種にして觸角及肢の脛、跗節は褐色を帶ぶ●(一八九)ミキデラハンメウ(Pheropsophus jessoensis Mor.) 六月廿七日●(一一五)ゲンゴラウムシ(Cybister japonicus Sharp.)四月三日、(二二一)コシマゲンゴラウムシ(Hydaticus-grammicus Germ.)六月二十五日、体長三分五厘内外の暗褐色にして、背面に褐色の縱線數條あり●(一一六)ミヅスマシムシ(Dineutes marginatus Sharp.)四月三日、体長三分内外、黒色の種にして、胸及翅鞘の邊縁は板狀をなして褐色を呈す●(八八)ガムシ(Hydrophilus coguatus Sharp.)四月三日●(二二二)マルガタガ(Ga? Sp?)六月廿五日体長一分二厘、黒褐色にして背面著しく隆起し、殆んど圓形をなす●(二二三)ガムシの一種(Ga? Sp?)六月廿五日、体長一分二三厘、褐色の種にして形マグソコガ子に似たり●(八二)アカボシシデムシの一種(Necrophorus Sp?) 五月十五日、体長四分五厘乃至五分、頭胸部黒色を帶び、翅鞘は赤褐色にして其中央に廣き黒横帶を有し、赤褐色部に小黒点あり●(九六)オホム子ボソハ子ガクシ(Eucibdelus japonicus Sharp.)四月八日、三分七厘乃至五分五厘、前胸細長く、殆ど長方形をなす●(八四)ヒメアカボシテンタウムシ(Chilocorus similis Rossi.)四月二日●(二二五)ナナホシテンタムムシ(Coccinella 7-punctata L.)三月三十一日●(二二四)テンタウムシダマシ(Epilachna 28-maculata Motsch.) 八月二十日●(二三五)ヒラタコメムシ(Tenebrioides mauritanicus. L.) 五月廿九日、体長二分五厘、黒褐色にして甚だ扁平なる種なり、一名オホコクヌストいふ●(二二九)カツヲブシムシ(Dermester cadavarinus F.) 五月一日

乃至六月廿九日●(二三〇)ヒメマルカツヲムシ(Anthrenus verbasi L.)六月廿八日、体長七厘乃至一分、黒色卵形の種にして、翅鞘には三條の黄白色毛を有す●(二三四)キクヒムシ(Librodor japonicus Motsch.)七月四日、三分乃至四分の黒色種にして、翅鞘に四個の赤紋あり●(二三一)クロタマムシ(Buprestis japonensis Saund.) 七月二日、五分五厘乃至六分五厘、黒色にして稍紫色の光澤あり●(八九)ウバタマムシ(Chalcophora japonica Gory.)五月十一日●(二〇四)マルガタムシ(Histera japonicus Mars.)六月廿五日、体長三分五厘、巾二分六七厘、黒色圓形の種にして一名エンマムシといふ●(一〇五)コメツキムシ(Melanotus legatus Cand.)三月三十一日乃至五月十九日●(二二八)マダラコメツキムシ(Gn? Sp?)四月二十四日、体長四分乃至五分の黒褐色種にして、翅鞘に不明なる灰色の斑あり●(二二七)ウバタマムシモドキ (Alaus berus Cand.)五月七日、叩頭蟲科中、最大の種にして灰色を帯び、多くの黒褐斑を有す、一名ホシコメツキと云ふ●(九〇)(二二六)サビキコリムシ(Lacon fuliginosus Cand.)四月八日乃至五月廿九日、四分乃至六分銹色を呈す●(二三二)ヒメホタル(Lusiola parvula Kiesenw)六月八日●(一一〇)ホタル(Lusiola vitticollis Kiesenw)五月十七日●(七九)ホタルの一種(Gn? Sp?)五月十九日、ヒメホタルに似て体薄扁に、觸角長く鋸齒狀をなす●(八一)キクスヒモドキ(Telephorus luteipennis Kiesenw.) 四月廿七日、体長五分五六厘、褐色の種にして胸部に黒紋あり、腿節黒く脛跗節は褐色を呈す●(一一四)クロキクスヒモドキ(T. cedemeroides Kiesenw.)三月三十一日、体長二分五厘乃至三分二厘、黒色にして胸部赤く、殆ど螢の如し●(一一九)キクスヒモドキの一種(Gn? Sp?)四月廿三日、体長三分乃至三分五厘、褐色にして翅端に至るに從ひ黒みを帯ぶ、肢は黄褐色にして腿節端黒く、跗節暗色なり●(一一一)ホタルモドキ(Eusteis bimaculata Guerin.)五月七日、体長三分、頭胸部黒色にして翅鞘は褐色を帯び、肢は翅より色稍淡く、觸角黒くして長く櫛齒狀をなす●(二〇三)クハガタムシ(Macrodorcus rectus Motsch.)六月二十二日●(二〇八)コガ子ムシ(Mimela lucidura Hope.)六月七日●(一八八)ブダウコガ子ムシ(Gn? Sp?) 七月十日、体長六分五厘乃至八分、形コガ子ムシに似たる種にして、全体深緑色を呈する美麗種なり●(二一一)コフキコガ子ムシ(Melolontha japonica Burm.)七月二十一日●(二一二)マメノコガ子ムシ(Popilia japonica Nerdm.)六月十七日●(二一〇)ドウガ子ブイブイ(Enchlora cuprea Hope.) 七月十九日 ●(八六)ビロウドコガ子ムシ (Serica orientalis Motsch.)三月三十一日、体長二分六七厘、黒色楕圓形の種にして、剪絨様の光澤あり ●(九八)チヤイロコガ子ムシ(Adoretus tenuimaculatus C. W.) 五月十九日、体長三分五厘内外、全体茶色を帯び、複眼黒褐

色なり、翅端に灰色の小点二個つゝを印す●(八三)バラコガネムシ(Phyllopertha irregularis C. W.)四月十七日、体長三分乃至三分五厘、頭胸部暗緑色、翅鞘は普通セントク様の光澤ありて黑斑を有すれども中には黑斑を有せざる等變化多し●(二〇五)カナブイブイ(Rhomborrhina japonica Hope.)八月十日●(二〇六)コガネムシの一種(Gn? Sp?)八月十日、体長九分内外、漆黑色にして形前種に似たり●(二〇七)オホバナモグリ(Cetonia submarmorea Burm.)六月廿七日●(九二)ハナモグリモドキ(Glycyphana argyrosticta Motsch.)四月廿九日、体長四分五厘乃至五分、暗緑色にして灰黄色の小斑を有す●(二一四)コハナモグリ(Ectinohoplia valiorosa Waterh.)六月七日、体長二分二三厘の小形種にして、黄色なるあり、黄緑色なるあり、又黑斑を有するとを有せざるとありて變化多し●(一〇二)ヒメハナモグリ(Valgus angusticollis C. W.)四月廿九日、二分内外の黑色種にして、翅端に灰色点を有し全体微小なる灰色不明の斑点あり●(一二四)マグソコガネムシ(Aphodius solshyi Har.)三月十三日、二分乃至二分三厘、圓筒形の種にして、全体黑色なると、黄色に黑紋を有するとあり●(一二〇)カミキリムシ(Batocera lineolata Chev.)四月二十二日●(二〇〇)ミドリカミキリムシ(Callichroma tanuatum Bates.)五月十五日、五分乃至六分五厘、細長くして緑色の美麗種なり●(二〇二)ヤハズカミキリムシ(Uraecha bimaculata Thunb.)六月二十九日、体長五分五厘乃至八分、褐色にして翅の中央に矢筈形の黑斑あり、翅端は刺状に尖る●(二〇一)ハイイロカミキリ(Gn? Sp?) 五月十七日、体長五分五厘乃至七分、全体灰色にして、胸部に數條の縦隆起線あり、翅の基部には一個つゝの板狀隆起あり、其兩側即ち肩部も稍突起し、翅端は尖れり●(一九九)ノコギリカミキリムシ(Prionus insularis Motsch.)六月十七日●(二〇一)オホキクスヒ(Oberea japonica Thunb.)五月七日、一名リンゴカミキリといふ●(一一二)ハナカミキリ(Leptura dimorpha Bates.)五月十九日、体長四分五六厘、全体黑色なれども雌は胸部梅干色をなす●(一九八)ハナカミキリムシの一種(Leptura Sp?)四月廿九日、前種に酷似したる種にして肢細し。

ハイイロカミキリの圖

（未完）

# 雜報

◉冬の蟲採り　此の一節は、本年一月十四日、當研究所長は岐阜縣巡査敎習所生徒一同を引率して、昆蟲の冬季潜伏の狀態を實地に視察せしめんがため、所員三名其他特別研究生をも一行に加はらしめ、當市梅林及其他に採集を試みられたる際、谷所員が其實況を筆に採りたるものにして、參考とすべき節もあれば茲に錄す。

世の中の人は、大底蟲てふものは、春の暖い日に出でて花に戯るゝ胡蝶や、夏のむし暑いとき木の枝、草叢に樂曲を弄する蟬、キリギリスを初め、梅や櫻にとまつて葉を害する種々なる毛蟲等最も旺盛を極め、秋に入りて頻りに憐れを告ぐる松蟲、鈴蟲等も、霜雪一たび至りて冬に入れば、悉く死滅するものゝ様に思ふて居りますから、春になつて毛蟲か出ますと、鳴呼蟲がわいたと宛も偶然に天からでも降つたかの如くに思ひますけれども、決してそう天然自然に生ずるものではありません。これはみな夏でも同じ事で、卵等は目にあたらぬのと、幼蟲でも成蟲でも雜草中に匿れたり、又は木の枝や石の下木の皮の間抔とか、皆夫々自分のすきな所に潜んで、食物を採らずに冬を越すのでありますから、人の目に觸れないのであります。それゆへ此の理を辨へて採集しましたなれば、意外に愉快で且面白く採れ、然も他の時期に於ては獲れなくて、此の冬に限つて獲れる蟲があるのですから、皆さんもつとめて此採集をなさる様におすゝめいたします。右の様な次第で冬の昆蟲採集は甚だ愉快なるのみならず、蟲の潜伏場所も知れますから、害蟲驅除の上から見ても甚だ必要であります。故に、現今昆蟲學の一科を加へて敎授中の岐阜縣巡査敎習所の生徒にも是非とも一度は實地に行はしめたらよかろうと云ふ所から、一月十四日に、當研究所からは所長名和先生の指導の下に、所員特別研究生などが敎習生と一所になつて、この岐阜から東南にあたる篠ヶ谷の梅林や、停車場近傍の清水へ、水陸の昆蟲を採集に行かうと云ふ事になりましたやがて約束の十四日になりました所が、此日朝來微雨を催して非常にみなが殘念がつて居りました。然るに天も此有益なる採集を扶け、漸々天氣もよくなつて參りましたから、皆々大よろこびで直ちに仕度をいたしまして、十二時迄に當所に集まる様にと申し合せて、其時刻に出掛けようといたしました所が、なか〳〵其道具が多くて、捕蟲器は勿論、川採集に用ふる草箕抔を持つて居る人があるやら、其扮裝中々面白うございまして、笑ひ笑ひやつと敎習所にゆきましたが、まだ生徒等の準備が出來て居りませんでしたから

暫くまつて居りまして、十二時三十五分頃一同列を作つて梅林の方へと行きました。此時教習所の生徒十七人と、教官二人、研究所からは所長名和先生を初め所員三名、特別研究生六名とでありましたが、梅林へ着くや直ちに一同列をときまして、各々自由に採集をいたしました。多くの人は木の皮採集でありましたが、まれには石起採集をする人もありましたし、稻株をとつてくる人がありますやら、あちらの木の下に三人、こちらの草の上に二人と幾團かになつて、或は木の根に腰をかけて頻りと木の皮をはいで居る人があるやら、ピンセツトを以て何かはさんで顯蟲鏡で見て居る人があるやら、又何か書いて居る人があるやら、又は梅の木の下を三度も四度もまわつて、仰向ひたりうつむいたりして一生懸命にさがして居る人もありますやら、そのうちに一本の大きな松の樹でありましたが、其皮の間にヤニサシガメが數十頭も冬眠をして居るを見出し、又池田部長は、自然淘汰の標本として最もよい所の木の皮蛾をとられました、其他にも松毛蟲だの瓜葉蟲だの色々採集したものを持つて來て、名和先生を眞中に圍んで前后左右から質問矢の如く、一時は非常の大騷ぎでありましたけれども、先生は少しもそを厭はるゝの氣味もなく、誠に親切に一々説明を與へられ、一同は大に滿足の体に見受けましたが、其採集いたしましたもののうち珍らしきものは、其大さ二分程にて、肢や觸角には誠に長い毛が總の如くに生へて居ります處のフサヒゲサシガメと申すものでありました。其他普通なるものではヒラタアブ、ウリハムシ、ガメムシの一種、キンケムシ、アリの一種、木の皮蛾、ゴマガメムシ、マツケムシ、寄生蜂の一種、等で中にも一番多數採集せられましたのはヤニサシガメとフサヒゲサシガメとでありました。叩網採集では別段にこれと云ふものもありませんでしたが、小錦蛾は最も珍らしいものでありました、それから研究生等は稻株や藁等に就て、螟蟲潜伏の如何を調べましたから、名和先生は一々それにつき其の潜伏の狀態やら其の驅除法やらを委しく説明せられ、後ち一同紀念の寫眞を取るはずでありましたから一所に集まりましたが、折り惡しく風がひどく吹いて參りまして、撮影が少しくむつかしい位でありましたが、つひに決行されました。此の時の技術者は當所員名和正氏でありまして、それから二時ごろにもなりましたから、淸水の方へ行くことにいたしました。此の度は全体を教習生と研究生等との二組に分けまして、

フサヒゲサシガメの圖

研究生は水棲昆蟲採集に、教習生の組には浮塵子潜伏の狀態を調らべることにいたし、各々道を別ちて行きました。名和先生には雜草をはらひつゝ其の潜伏せる有樣を實地に付いて説明せられ、一方の水棲昆蟲採集の一組は、此の寒さも厭はず、みな水中に入りて熱心に採集せられましたから、其の採れましたものも實つに多くありまして、先づゲンゴロウムシを初めミヅスマシ、ヨツボシゲンゴロウ、エリノハナスヒ、コガタノゲンゴロウ、ミヅカマキリ、等でありましたが昆蟲以外の動物では此川には八つ目鰻、はりうをなどが多く居るとの事で、大學校あたりから博士の方々が度々研究に參られましたとの事ですが、今日もはりうをなどは大分獲れました。かく採集に餘念なきうちに、早や四時近くなりましたから、各々名殘りを留めて家に歸りました。實に團隊で而かも總篤なる

先生の指道の下に採集しましたのでありますから、各々その得ました智識と云ふものはどの位でありましよう、此様な寒中に、極めて短時間で、この様に多くの採集が出來ましたと云ふ事は驚くの外はありません。されば今後みなさんも、此冬季の採集を一度なりともおやりになりましたら、實に其得られます所の利益は多いでありましようから、必ず御實行になります様偏に御願ひいたします

◎工業應用昆蟲畫報　茲に照會する五個の昆蟲畫報は、皆帽子の徽章に應用したるものにして第一圖は、四枚の桑葉を菱形に組み、其の間に四個の繭を入れ、中央に糸を配したり、是れ京都蠶業講習所の徽章にして、其意味面白し。第二圖は第二高等學校の徽章にて、該圖は元と第二高等中學校と稱せし頃のものなるが、現今は二中の文字を省けりと。第三圖は宮城縣小學校教員の徽章。第四圖は愛知縣寶飯郡赤坂高等小學校の徽章第五圖は岐阜縣農學校の帽章にて。稲束に學の字は農學校を、ギフテフは岐阜縣を意味して面白し。

工業應用昆蟲畫報（第一圖）

◎害蟲驅除講習會　本年四月五日より第三回岐阜縣長期害蟲驅除講習會を、同十一日より第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習會開設の筈なるが、受講志望者は、所轄郡市長を經て履歴書を添へ願書を提出すべしと、該講習規程左の如し

◎第三回長期害蟲驅除講習規程

一開期、明治三十八年四月五日より明治三十九年三月二十五日迄まで　二、場所、岐阜市公園名和昆蟲研究所内　三、講習科目、一昆蟲學、二昆蟲分類法、三害蟲驅除法、四益蟲保護法、五實習　四、出願期日、明治三十八年三月二十日まで　五、講習生資格左の如し、一年齢十八年以上、二中學校農學校を卒業したる者又は短期害蟲驅除講習を了りたる者、三縣下の住民たること　六、講習心得左の如し

一、講習生入學の許可を得たるときは此の心得に服從するの誓約書を出すへし　二、講習生は講師の指導する所に從ひ干犯の處爲あるべからず　三、講習生は風紀を重んじて品行を愼み講習の科業を勉勵すべし　四、科業を休み又は他行せんとする時は講師の許可を受くべし　五、講習生科業を怠り講師の指導を遵奉せず又は風儀品行を亂したるとき者は成業の見込なしと認むるときは退學を命ずるをあるべし　六、講習終了後二ヶ年以内は本縣より害蟲驅除に關する事務を命令又は囑託したるときは之に從事すべし

◎第八回短期害蟲驅除講習規程

一、開期、明治三十八年四月十一日より同二十四日まで　二、場所、岐阜市公園名和昆蟲研究所内

三、講習科目　一昆蟲學大意、二害蟲驅除法、三益蟲保護法、四野外演習　四、講習生資格、一縣下の住民たること、二高等小學校卒業又は之と同等以上の學力を有する者　五、出願期日、明治三十八年三月二十日まで

## ◉岐阜縣下に於ける稻作害蟲被害高

稻の害蟲、螟蟲、浮塵子、苞蟲等は年々縣下に發生し非常の損害を與へつゝあるも、之れが被害調査は極めて困難にして明かに統計を示し難しと雖も、近時應用昆蟲學の進歩と、當局者の熱心驅除の奬勵と同時に、種々の方法を以て調査したる結果略ぼ概數を知るを得るに至りたが、今本縣廳に於て調査したる昨年及び一昨年の害蟲被害高を聞くに、昨年は螟蟲被害高千三百十一石、苞蟲の被害高一萬千三十九石、浮塵子八百七十七石合計萬五千百二十六石にして、之れを前年に比すれば螟蟲被害高に於て一萬二千四石、苞蟲被害六千八百五石、浮塵子被害三萬千六十一石合計四万九千八百七十石の減少を示したり。之れ昨年は特に時局に鑑み、其筋に於ても一層驅除の奬勵を爲したると一般農民に於ても亦た爰に鑑みたる處あり熱心驅除に從事したる結果、斯の如き好成績を擧げ得たるものと云ふべし、左に昨年中各郡別被害見積り高を示す。因みに可兒郡は今尙ほ被害高調査中に屬するを以て之れを知るに由なく、惠那郡は全然無害なりとの報告なるも、實際に於ては幾分の被害ありと認めらるゝも、其數量を推測し難きに依り共に之れを省けり。

| 郡市名 | 螟蟲 | 苞蟲 | 浮塵子 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 稻葉郡 | 一二四石 | 四二七石 | —石 | 五五一石 |
| 養老郡 | 四五六 | 一五〇 | — | 六〇六 |
| 安八郡 | 二、三四四 | 四〇九 | — | 二、七五三 |
| 本巣郡 | 七四二 | — | — | 七四二 |
| 武儀郡 | 二、三五一 | — | — | 二、三五一 |
| 加茂郡 | 一、一六一 | — | 五八五 | 一、八四六 |
| 大野郡 | 二、三六八 | — | — | 二、三六八 |
| 吉城郡 | 一三四 | — | — | 一三四 |

| 郡市名 | 螟虫 | 苞虫 | 浮塵子 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 岐阜市 | 八五石 | 一〇石 | —石 | 九五石 |
| 海津郡 | 二一一 | — | — | 二一一 |
| 不破郡 | 三一一 | — | — | 三一一 |
| 揖斐郡 | 一、七八七 | — | 二〇五 | 一、九九三 |
| 山縣郡 | 一八八 | — | 六 | 一九四 |
| 郡上郡 | 四〇八 | — | — | 四〇八 |
| 土岐郡 | 五七 | 四 | — | 六一 |
| 益田郡 | 二九 | — | — | 二九 |

## ◉害蟲驅除豫防規則の改定

岐阜縣知事は、今回害蟲驅除豫防規則を改定し、本月三日岐阜

縣令第六號及、岐阜縣告示第四十四號を以て、害蟲驅除豫防規則、并に害蟲驅除豫防方法を發布せられたれは、茲に該規則を掲げて參考とはなしぬ。

害蟲驅除豫防規則

(第一條)明治二十九年三月法律第十七號害蟲驅除豫防法第二條に依り本縣下に於て驅除豫防すへき害蟲の種類を定むること左の如し

一 螟蟲(イネノズイムシ)稻、二 浮塵子(ウンカ)稻、三 苞蟲(イチモツセヽリ)稻。四 螟蛉(イ子ノアヲムシ)稻、五 切蛆(キリウジ)稻、六 稻蝗(イナゴ、ハネナガイナゴ)稻。七 彫蟲(ムクゲムシ。クロムクゲムシ)稻。八 椿象(イネガメムシ、ハリガメムシ、クモガメムシ)稻、九 葉蟲(ドロハムシ、クワハムシ、ヒメハムシ)稻桑、十 象鼻蟲(イ子ゾウムシ、ヒメゾウムシ、ナシゾウムシ)稻桑梨、十一 天牛(クワカミキリ、トラフカミキリ、ホシカミキリ)桑柑橘、十二 小蠹蟲(クワノシンクヒムシ)桑、十三 尺蠖(エダシヤクトリ、トゲシヤクトリ)桑。十四 葉捲蟲(クワノシンムシ、イトヒキハマキムシ、クワハマキムシ、チグロハマキムシ)桑。十五 蛅蟖(キンケムシ、クワケムシ、チヤケムシ。ホシハマキケムシ)桑茶果樹、十六 避債蟲(ミノムシ)茶果樹、十七 夜盜蟲(エンドノキリムシ、アワノヨトウムシ)穀菽蔬菜、十八 僞瓢蟲(テントウムシダマシ、オホテントウムシダマシ)馬鈴薯

工業應用昆蟲畫報(第二圖)

(第二條)害蟲驅除豫防の方法は本則に定むるものゝ外別に之を告示す。(第三條)害蟲田畑に發生し又は發生の虞ありと認めたる作人は直に驅除豫防に着手し口頭又は書面を以て市町村長又は警察官吏に屆出べし　警察官吏前項の屆出を受けたる時は直に之を關係市町村長に通知すべし。(第四條)市町村長前條の屆出若は通知を受けたる時又は害蟲田畑に發生し若は發生の虞ありと認めたる時は直に作人をして驅除豫防に着手せしめ左記事項を具し町村長は郡長に市長は知事に報告し同時に警察官吏に通知すべし

一 害蟲の名稱、二 發生又は發見の月日、三 發生の區域及驅除豫防方法、四 被害作物の名稱、被害見積反別及被害狀況、

郡長前項の報告を受けたるときは之を知事に報告すべし。(第五條)郡長に於て作人の驅除豫防を不完全と認めたるとき又は驅除豫防の必要ありと認めたるときは害蟲驅除豫防法第三條第一項に依り期限を定め該田畑の作人に驅除豫防の施行を命し同時に前條第一項に列記したる事項並期限を知事に報告し且警察官吏に通知すべし　郡長に於て作人驅除豫防を行はす又は之を行ふも不完全にして害蟲驅除豫防法第三條第二項に依り町村費を以て驅除豫防を行はしむる必要ありと認めたる時は狀を具し知事に申請すべし。(第六條)郡長に於て害蟲驅除豫防法第六條に依り溝渠を設け又は農作物、藁稈、刈株又は雜草を拔き採るの必要ありと認めたるときは狀を具し知事に申請すべし。(第七條)郡市町村長害蟲蔓延の虞ありと認めたるときは直に隣接郡市町村長に通知すべし前項の通知を受けたる

郡市町村長は之れを關係警察官吏に通知すべし。(第八條)稻苗代の床地は幅四尺以內長さ適宜とし各床の間隔八寸以上と爲すべし。(第九條)害蟲驅除豫防監督上必要と認むるときは郡に在りては郡長市に在りては知事に於て作人に對し田畑に標示の建設を命ずることあるべし。(第十條)第三條第一項に違背したる者第五條第一項の郡長の命に從はざる者又は第八條に違背したる者は拘留又は科料に處す。(第十一條)市町村費を以て驅除豫防を施行したるときは第一號樣式に依り町村長は翌年度四月十日までに郡長に郡市長は四月二十日までに知事に報告すべし。

附 則

(第十二條)明治三十八年に限り作人に於て第八條に定むる苗代を作り難きときは播種前事由を具し郡に在りては町村長を經て郡長に市に在りては市長を經て知事に願出其の許可を受け稻苗代に第二號雛形の標示を爲すべし。(第十三條)本令は明治三十八年三月十五日より施行す。(第十四條)明治二十九年九月岐阜縣令第二十九號害蟲驅除豫防規則は本令施行の日より之を廢止す

(第一號樣式) 害蟲驅除豫防報告(害蟲每に區分すべし)

| 町村名 | 被害農作物ノ種類 | 同上見積反別 | 平年收穫高 | 被害見積減收高 | 驅除豫防ニ關スル市町村費 | 同上夫役數 | 同上郡費補助額 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

(第二號雛形)

何年何月何日許可

平 蒔 苗 代

住所 氏 名

長三尺以上

◉昆蟲供養會 秋田縣富樫明次郎氏は農事熱心家にして、嘗て第十四回全國害蟲驅除講習會に入りて應用昆蟲學を學び、爾來銳意害蟲驅除を獎勵し、斯道に盡さるゝの餘り、有意無意の間に昆蟲の生命を奪ふこと多大なるを念ひ、昨年十一月廿日、仙北郡神宮寺町尋常高等小學校內にて、昆蟲供養會を執行したりとて、同氏より該顚末を記したる昆蟲供養會てふ小冊子を贈られたり。嗚呼此の擧即ち差別に所して平等の見を失はざるもの、蟲魂亦以て瞑目すべし。

◉桑名伊之吉氏の來所 西ヶ原農事試驗場員米國理學博士桑名伊之吉氏は、去月廿五日、岡山

地方へ貝殼蟲調査に赴かれ、歸途當研究所に立寄り、特別研究生に對し有益なる昆蟲談を試み、直ちに歸塲せられたり。因に該談話の要領は、何れ本誌に照會すべし。

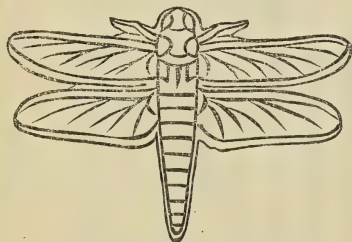
工業應用昆蟲畫報（第三圖）

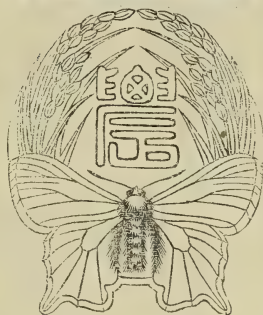
◉岡田虎次郎氏の來所　螟蟲採卵法發明家愛知縣岡田虎次郎氏は、豫て米國留學中の處、今回歸朝し、去月廿八日關西地方へ漫遊の途次當地に立寄り、巡査敎習所に於て一塲の講話を爲し、次て當研究所を訪ひ、名和梅吉氏の歸朝を待受け十一日名和梅吉氏の歡迎會に臨み、十三日目的地へ出發せられたり。

◉名和梅吉氏の歸朝　昆蟲學研究の爲め豫て米國留學中なりし、當研究所調査主任名和梅吉氏の消息は、本誌前號に記せしが、今回愈歸朝の途に就き、去る七日無事歸所せられたり。因に當日の歡迎者は、岡田虎次郎氏を始め今村保安課長窪田岐阜警察署長、廣瀬巡査敎習所敎官、岐阜縣第三、四課員、縣農會代表者、其他岐阜市大垣町等の有志者にして意外の盛況なりし。

◉名和梅吉氏の歡迎會　今回當所助手名和梅吉氏の歸朝せられしに付、本月十一日今村兎毛、原眞澄、堀口有一、堀内政一、渡邊治右衛門、村井正元、桑原貫之助、岸秀次、仙石保吉諸氏の發起にて、歡迎會を當市濃陽舘に於て開會せしが、來會者意外に多く席上同氏の米國昆蟲視察談等ありて、非常の盛會なりき。

◉岐阜縣昆蟲學會第七十四回月次會記事　同會は本月四日午後一時より當昆蟲研究所内に開會し、第一席加藤政一氏は、夜盗蟲驅除法に於て實驗談を語られ、第二席北山辰三氏は、害蟲の繁殖力は數の上より云ふ時は非常に恐るべき勢あるも、外界の作用に依りて其繁殖を抑壓し居るは吾人に採りては幸福なる旨を述べられ、第三席小竹浩氏は、害蟲驅除實行の一方法と題し、目下の有樣にては警察權を籍るの止を得ざる次第を說き、第四席石田和三郎氏は、螟蟲驅除法の種類を擧げて一々簡單の說明を加へ、第五席永澤小兵衛氏は、昆蟲物語なる古き書籍の種類十三種を擧げて、其內容の有樣、著者及來歷を說明せられ、午後五時無事閉會したり。

工業應用昆蟲畫報（第四圖）

◉**水曜昆蟲談話會記事**　當所内に於て、毎週水曜日夜間開會の同會は、相變らず盛會なるが、前號報告後に於ける談話の要領を擧ぐれば左の如し。

小竹浩氏は、實物によりカミキリムシの種類十數種に就て説明せられ◉小森省作氏は、昆蟲の外部構造に就てと題し、甲蟲類の頭胸部に於ける各部分と、其特徴とを説明せらる◉棚橋昇氏は、モチツキカガンボの雌雄の比較調査の結果を、即一月廿九日一六一頭の採集中雄一五六頭雌五頭、三十一日一六四頭採集中雄一五一頭雌一三、二月一日三三八頭採集中、雄三二二頭雌一六頭の割合なりしが、之れを昨年の調査に比すれば雌の割合稍多かりしこと、及該蟲の雌雄鑑別法を實物を以て説明せられ◉名和正氏は、菫花の構造及び昆蟲との關係に就て、菫花の蜜を貯ふる所非常に遠きを以て、口具の長き昆蟲に非らざれば之れを求むる能はざる等の實驗談あり◉名和愛吉氏は、二月廿日本巣郡重里村堤防に於て冬季採集を試みて獲たる多數の昆蟲類を示し、中ツチハンメウ(十二頭)は、冬季は多く青草就中センニン草の根邊に潜伏し居ること、及び該蟲の雌雄異同の点を説明せらる◉石田和三郎氏は、毎會繼續して、螟蟲驅除法に就て最も簡單有効なる驅除法を、尙昆蟲雜話と題し、新刊雜誌の昆蟲記事を報告せらる◉谷貞子はヒナササキリは、單眼の有無、翅の大小、構造産卵管の形狀、腹端の附屬物、及冬眠の狀態等より觀察して、コホロギ科に屬するものなることを證明せられ◉馬淵次郎氏は、フサヒゲサシガメ及び其の他のサシガメの種類に就て、毎會外部の構造を述べ◉穗岐山巖氏は、桑のハマキムシの冬越の狀態、竝に其性質等を觀察したる点を述べ、之れが驅除法として桑葉の落つる前に當りて、該蟲の潛伏に都合よき樣に、藁を以て桑樹の枝間に狹み、其中に來るを待ちて驅殺するの有効なること、竝に土佐の昆蟲方言を述べらる◉淸水森三郎氏は、金龜子蟲の驅除法竝に愛媛縣周桑郡の昆蟲方言を◉北山辰三氏は、誘蛾燈の利害得失談及夜盜蟲驅除實驗談◉井口宗平氏は、豌豆の象鼻蟲に就ての被害狀況、竝に之れが驅除法等を談じ◉加藤政一氏は、青酸加里の中毒、竝に木皮採集にて得たる十數頭の昆蟲を示して説明せられたり。

工業應用昆蟲畫報（第五圖）

◉**昆蟲標本陳列館の觀覽人**　本年二月中に於ける、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を觀覽せし人員は、總計千九百五十七人にして、其内最も多かりしは、十二日に於ける百八十七人、最も少なかりしは、九日に於ける十五人なりき。

時局の發展と共に害蟲軍大攻撃の必要を感ず從ひて本誌の大改良には全力を盡さんとす請ふ愛讀あれ

## ●購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市公園内
名和昆蟲研究所 昆蟲世界會計部

---

生儀米國留學中の處今回無事歸朝仕候に付ては從前の通り專心斯道に從事致度茲に渡米中の欠禮を謝し尙倍舊の御交誼に預り度此段辱知諸君に謹告仕候也

明治三十八年三月十三日
名和昆蟲研究所助手 名和梅吉

辱知諸君

---

生儀米國留學中の處今回歸朝致候に付ては有志諸君より歡迎の盛宴を開かれ特に各地の有志諸君よりは祝辭祝電を賜はり恐縮の至りに奉存候一々御答禮可申上之處取込中自然御挨拶漏も可有之候に付乍畧儀以本誌上御禮申上候也

明治三十八年三月十三日
名和昆蟲研究所助手 名和梅吉

有志諸君

昆蟲世界

（明治三十八年三月十五日發行）　第九卷第九拾壹號　（每月一回十五日發行）

## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題（但季は春の事）　南山君選

▲短歌　昆蟲亂題（但季は春の事）　潮音君選

▲俳句　瓢蟲十句（四月五日占切）　三川君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△届先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

瓢蟲は形丸く背面穹狀に隆起したる小形の蟲にして翅鞘の斑紋は種々あるも凡て光澤ある美麗種なり幼蟲成蟲共に蚜蟲若くは貝殼蟲を捕食せんが爲め常に蚜蟲等の多き處に來る大益蟲なるにも係はらず蚜蟲の親なりと誤認せられて往々驅殺せらるゝことあるは最も遺憾とする所なり

テンタウムシの圖

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第七十六回月次會（四月一日）
第七十七回月次會（五月六日）
第七十八回月次會（六月三日）
第七十九回月次會（七月一日）
第八十回月次會（八月五日）
第八十一回月次會（九月二日）
第八十二回月次會（十月七日）
第八十三回月次會（十一月四日）
第八十四回月次會（十二月二日）

## ◉名和昆蟲研究所案内

：市境界　‖案内道　｜市道　イ元位置　ロ陳列館　ハ縣廳　ニ中學校　ホ病院　ヘ郵便局　ト西別院　チ研究所　リ長良川　ヌ金華山　ル停車場

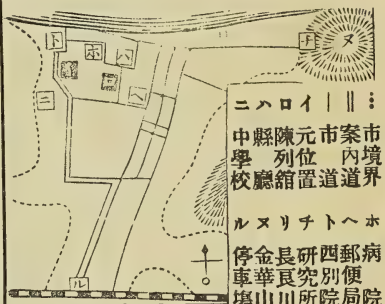
當昆蟲研究所は從來上圖の如く（イ）の位置にありしが今回當市公園内即ち（チ）の位置に移轉せり又常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）は從前の通り岐阜縣物産館構内にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共　金拾錢

壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十八年三月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉

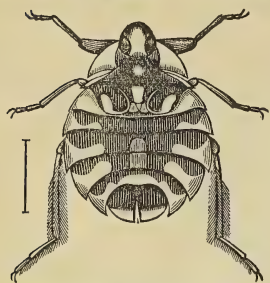
同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戸　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] APRIL. 15TH, 1905. [No.4.

# 昆蟲世界

第九巻第四册　明治三十八年四月十五日發行　第九拾貳號

目次（禁轉載）



名和昆蟲研究所發行

(Numenes interiorata Walk. クロスヂサラサ) 發音する小蛾の解剖

## ◎螟蟲卵寄生蜂の利用に關する試驗の設計

中川久知

ズヰムシアカタマゴバチが、二化性螟蟲の卵を斃す効力の大なるは、已に世人の知る處なれども、之を利用することに關しては未だ完全なる試驗をなせしものあるを聞かず。仍て余は本年熊本縣八代郡太田郷村に於て此試驗をなさんとし、三月下旬に早苗代を設くる事とせり。思ふに該寄生蜂は地方によりては發生少なき所もあり、或は未だ之を見たる事なき地もなきにあらず、斯くの如き地は蜂の多き地より蜂の寄生にかゝりたる螟蟲卵をとり寄せ、苗代又は本田に放つ時は容易に繁殖せしむる事を得べきものとす。然れども一般に此蜂を利用する前に於て、汎く諸方にて利用の試驗をなし種々利用の効あることを確しかめ置く事肝要なれば、左に余の試驗設計を記し同好諸士の參考に供すべし。

(一)寄生蜂の繁殖地を設くる事

二化性螟蟲は通常の苗代期よりも早く發生する地方多きにより、尋常の苗代よりも半月又は一ヶ月早く捨苗代を設け、籾は早稻を四合播位の薄蒔とし、誘蛾燈の類を設置して螟蟲蛾を誘ひ茲に產卵せしめ、螟蟲卵は摘採することなく六月の末頃まで其儘放置し寄生蜂を繁殖せしむべし。

(二)尋常苗代に該寄生蜂を移す事

苗代の初期に於ては卵の寄生蜂に犯さるゝもの少なく、苗代の末

期に近くに從ひ寄生蜂繁殖して卵を侵すもの多く、九州にては七割以上に達す。故に苗代に螟蟲の卵を産付し初めたる時より、（一）の繁殖地に於ける寄生蜂に犯されたる卵、若しくは此卵をランプのホヤに入れ、ホヤは其上下兩端を白紙にて張り其中にて蜂を羽化せしためるものを放ちて蜂の繁殖を計り、尋常の苗代に於る寄生分合と此苗代に於ける寄生分合を比較すべし。

（三）尋常苗代に於る寄生蜂を保護する事　苗代にて採卵法を施行する時、卵塊三十個宛を紙の間に挾み、此紙をランプのホヤに入り得る丈差入れ、ホヤの上下兩端を紙にて張り、ホヤを板の上に立て置く時は蜂は續々羽化すべし。茲に於て他のホヤの上端に紙を張り、前のホヤの上端を塞ぎたる紙に小孔を穿ち、第二のホヤを第一のホヤの上に載する時は、蜂はみな第二のホヤに移轉す。此時螟蟲の卵より孵化したるものも第二のホヤに移らんとするを以て、其未だ移らざる前に於て第一のホヤを取り除け、再び紙を以て、其上端を張り塞ぎ置くときは、前には未だ羽化せざる蜂も亦漸次羽化すべし。而して第二のホヤは之を苗代に携へ行きて、上下を轉倒する時は蜂は苗代の稻草に移るべし。以上は寄生蜂を保護する方法にして、益蟲保護器よりも蜂の羽化すること多きが如し。

（四）本田に蜂を移す事　挿秧當時は田地に入りて採卵することを忌むもの多し。故に挿秧の日より早く羽化したるものを別のホヤに移し、ホヤの上端に張り付けたる紙に毎日一、二回つゝ十倍乃至五十倍の湯にて稀釋したる蜂蜜を塗付し、ホヤを濕ひたる空氣中に置き、挿秧を行ひたる當日本田に携へ行き直ちに放つべし。而して移殖後十日乃至十四、五日に至り本田に入り採卵して、其寄生分合を他の放蜂をなさゞる田地のものと比較すべし。

以上は第一回發生の螟蟲蛾の卵に對する蜂の利用法にして、第二回發生時に於ては當分寄生蜂の利用を試むるを見合せ置たり。

## ◎發音する小蛾（第四版圖參看）

山形縣立莊内農學校　齋藤朝之助

昆蟲學上甚だ珍奇なる此小蛾に就て、本誌第六十五號（明治三十六年一月發行）及第七十六號（明治三十六年十二月發行）に記載せられしも、其詳細を知るを得ざるを遺憾とする事久し。予先に此標本を採集し、聊か是が研究せしものあるを以て茲に報導し識者の敎を請はんとす。

名稱　此蛾の名稱に就ては即ち先の第六十五號には花布紋蛾の新名を附されたり。然るに佐々木理學博士著日本樹木害蟲篇中巻（明治三十五年五月發行）第二一頁に、櫟巣蟲蛾として記載せられたるは恰も本種に相符號せり。最も右書には雄蛾の發音記事なしと雖も、予の研究せる翅脈の配置により鱗翅目蛾屬中、燈蛾科（Arctiidae）又（Lithosiidae）に屬する事、及び其他の特徴により同品種なる事明なり。故に博士著書により其學名は（Humenes intriorate）なり、又該書には其性狀經過をも詳說せられたるを以て閲讀せられん事を望むものなり。

雄蛾　全躰地色橙黃色を裝ひ、甚だ美にして光澤ある小蛾なり。躰長三分五厘、翅の開張一寸一分內外を算す。頭部は小にして黑く、觸角は黑褐色を呈し鞭狀にして四十七節よりなる、其基節は大に第二節は稍球形他は略ぼ同形なり。口吻は內方に彎曲し左右にある下唇鬚は前方に突出せり。胸部背面には三條の黑色線を有し腹部は橙黃色にして八節よりなり、尾端に至るに從ひ細く其末端節は赤橙色を呈す且腹部には所謂發音器の裝置あり。前翅は橙黃色にして前緣より臀角に向ひて走れる六條の黑線あり、外緣に接し半以下に三個の方形黑点正列す。其內部に赤斑ありて元より四條に分岐して翅底に向へるあり。后翅は濃橙黃色にして后緣に長毛簇生するあり。脚は褐色にして黃色の鱗毛にて被はる、而して中肢の脛節末端には內方に向つて長短の二刺あり。後肢の脛節には半以下及末端に前同樣の各二刺を有す

各肢の末端には二爪及び其間に膜瓣あり。

發音器　は腹部第一節に裝置せられ、其腔室は第三節に至るものにして第四腹節以下の腹腔との隔壁及第一節より第三節の內臟經過部腹腔との隔壁は黃色の膜にてなれり。而して其腹面を撿する時は、胸部と腹部との連接部は恰も開裂せるが如き感あり。然れども胸部に接するには兩氣鼓中隔前部、即ち三角形幾丁質板上部にて胸部彈力性硬質部に堅着せり。氣皷とは即ち發音器にして、幾丁質よりなれる左右卵圓形の兩框よりなり、之に無色透明の稍强靭なる膜、中隔の后方に窪みて張られたるものにして、其中隔は中部以下にて共通となる。換言すれば、即卵圓形の相連接せる兩氣鼓を作る。而して之を第二節の后方より見る時は、背部腹腔より連接せる數多の筋肉末端は兩氣皷中隔に連る膜部に附着せり。右構造より推察する時は、發音するには恐らく該筋肉の收縮により膜を振動するによるものならんと信ず。是に由りて見れば、蟬類發音器の搆造とは稍其趣を異にせり。鳴音は即はち鳥羽氏の說の如く、セッチ チレッチ……と聞へ、恰もチッチゼミのそれの如くにして甚だ低く、且涼しき音なり。其鳴くや夕刻より夜間にして、活潑に飛翔しつゝ演するものなり。

雌蛾　体長五分、翅の開張一寸二分余あり。雄蛾と異る点を列擧すれば、腹部膨大にして圓筒形なる事、腹部に氣皷の裝置なき事、從つて胸腹接合部に異狀なき事、腹部第一節腹面は少しく隆起せる事、擧動不活潑なる事等なり。

幼蟲　幼蟲は佐々木博士著日本樹木害蟲篇に由れば櫟樹に加害するものなり。然るに予の此蛾を採集せし地は、木校植物園の東隣地なる八幡社にして、社內の樹種中には櫟樹の無きより察すれば、植物學上櫟樹と同科に屬する殼斗科植物に加害するならんか。社內に生せる同科に屬する植物は栗樹及大楢樹

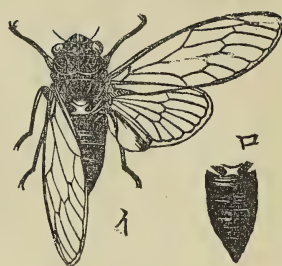
のみにして、其他の樹種は二十二種十六科に及べり、予は本種の經過に就ても夏期發生期を待たんのみ

編者曰く該種は燈蛾科(Arctiidae)に屬するものにして、學名をNumenes interiorata Walk和名をクロスヂサラサといひ、岐阜地方にては八月頃孵化して樫、楪等の葉を食害し、冬期は樹枝の叉、或は樹幹の下方に糸を吐きて其內に群棲し、四月頃より出て、葉を害す、故に目下幼蟲時期なれば茲に附記す。

第四版圖說明(1)成蟲雄自然大、(2)同雌自然大、(3)頭部の放大圖、(4)口部の放大圖、(5)觸角の放大圖、(6)前翅脈放大圖、(7)后翅脈放大圖、(8)前肢の放大圖、(9)中肢の放大圖、(10)后肢の放大圖、(11)雄蛾の腹面放大圖(鱗毛除去)、(12)同背面の放大(翅の除去)、(13)同背面(同上)、(14)第一腹節前面の放大圖(イ)左皷膜(ロ)中隔(ハ)皷框(ニ)胸腹連接部、(15)第一腹節を中斷し稍側面より見たる放大圖(イ)右皷膜(ロ)中隔、(16)第二腹節后面より見たる放大圖(イ)鼓膜(ロ)筋肉(ハ)キチン質線(ニ)框の一部膨大せるもの(ホ)体壁、(17)氣皷部のみ表出せるもの裏面の放大圖

## ◎鳴く蟲に就て（四）（第三版圖參看）

名和昆蟲研究所內　谷貞子

(十二)チッチゼミ(Tibicen radiator, Uhler.)小蜩又の名をナンキンゼミ、とも云ひ体長六分、翅の開張一寸六七分、躰黑色を呈し銀白色の細毛を有す、頭部は三角形にして其兩側に暗褐色の丸き複眼を具へ單眼赤色をなす、觸角は長さ一分二厘、黑色にして基部少しく膨大し、額面は黑色、上端には褐色の斑紋を有す。口吻黑色にして、長さ一分、前胸背は黑色にして、中央には淡褐色の斑紋を有し後緣褐色を呈す、中胸部も亦黑色にして中央に二個の淡褐の斑点を有し、翅は前後共膜質透明にして、翅脉は黃綠色翅端に至るに從ひて黑褐色を呈し、前翅の基部の內緣には朱色を呈せる一室を有し、後翅の体に近き翅脉上には焦茶色の斑あり、腹部は黑色にして各關節の後緣は稍や赤褐色を呈し、細短毛を有す、頭胸

の裏面は黑色と淡褐色と相混じて黄褐を呈し、第二關節乃至第六關節の中央には黑色紋あり。肢は茶褐色にして黑色斑を有し、後肢の脛節の內外には小刺を有す。雄は蓋壁を缺き、鱗狀辨は小形にして丸く褐色を呈す。雌の產卵器は黑褐色にして、長さ一分五厘あり。イ圖は雄蟲ロ圖は即ち雌蟲の腹部なり。成蟲は八、九月頃常に山間の松林中にてチッチッ――、と鳴々す。この種は四國、本州の山間に捿息せる事明らかなり。

チッチゼミの圖

(十三)タイワンアブラゼミ(Tosene montivaga,? Distant.)躰長雄は一寸八、九分雌は一寸五、六分、翅の開張五寸、全体黑色にして黄綠色の斑紋を有し、頭部三角形にして、黑色を帶び、前頭の兩側並に額面の兩側は黄綠色をなす腹眼暗褐、單眼赤色をなし、口吻黑褐にして長さ六分、前胸背は黑色にして、前緣の中央並に其後緣は黄綠色を呈す。中胸背亦黑色にして黄綠斑を有し中央に二個の黑点を有す、胸部の裏面は黑褐なれども前胸の兩側は黄綠色を呈す。翅は前後共に天鵞絨色を呈し、前翅は後翅に比すれば少しく赤みを帶び、翅脉褐色にして前緣は翅の基部より中央に至る迄黄綠色を呈し、前緣の中央より內緣角に向つて同色の斑紋あり。後翅は黑色にして翅脉も從て黑く、腹部は表裏共に黑色なり、雌の腹部は雄のそれより少しく赤みを帶び、黑褐を呈せる產卵器は長さ三分、肢は三對共に黑色にして細毛を密生す。雄の鱗狀辨は比較的小さく三角形をなし、重なり合はず。こは臺灣に產する種にして東京、岸田松若氏より惠送せられたり(第三版第一圖)

(十四)タカサゴゼミ(Gn? Sp?)　躰長一寸七分翅の開張四寸二分、大形の一種にして体茶褐色を呈し、頭部は三角形にして、茶褐を呈せる楕圓形の複眼は著しく頭部の兩側に突出し、黄色の單眼三個を有す

觸角茶褐にして長さ二分三厘、基部の二節は膨大す。額面は著しく隆起して、其兩側には黄褐の横線を有す。口吻長さ五分にして茶褐色をなし、前胸茶褐色にして同緣黄褐を帶び、其兩側緣には一個づゝの小さき凸起物を有し、中央に二條の黒線ありて殆んど繭形をなす。中胸部は焦茶色にして中央に三個の黒縱帶と、後緣に近き所に四個の黒点あり。頭胸の裏面は茶褐色を帶ぶ。翅は前後共膜質透明をなし、翅脉褐色にして翅端に近き脉上には四個の焦茶色の斑を有す。雄の腹部は大きく、濃褐色にして細毛あり。鱗狀辨は茶褐にして大きく、腹部の下方に垂る。肢は各々茶褐にして各節には細毛を有し、特に後肢の脛節の内外には小刺を有す。

該種も岸田松若氏より當所に寄贈せられたるものにして臺灣に產す(第三版第四圖)

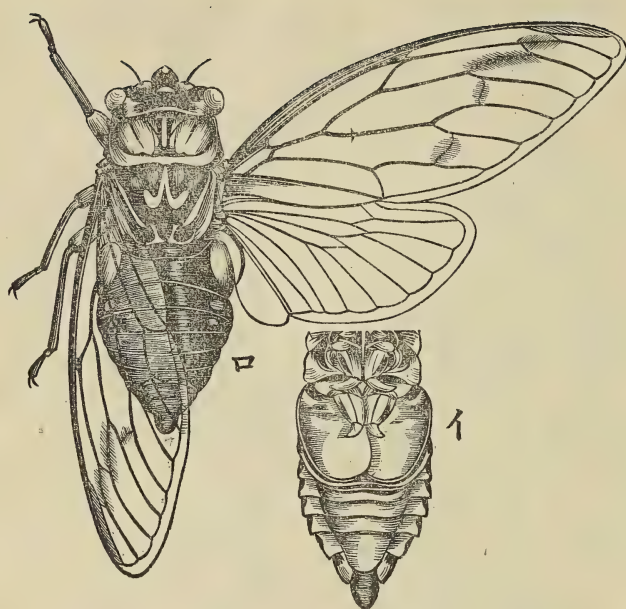
(十五)ハグロゼミ(Gn? Sp?)　躰長六分乃至七分五厘、翅の開張一寸六分乃至一寸八分、小形の種にして頭胸部は光輝ある黒色を呈し、頭部には細毛を密生す。額面は赤色にして甚だ大きく、腹眼は黒色楕圓形にして頭部の兩側に突出し、單眼赤色をなす。觸角黒色にして短かく基部の二節は膨大せり。口吻黒色にして長さ一分五厘前胸は黒色を帶びて細毛を有し、中胸部は赤色にして中央に黒色縱帶あり。頭胸部の裏面は黒褐色を呈し。前翅は暗褐後翅は稍暗色を帶び、翅脉は前後共に黒褐を呈す。腹部は朱色にして短毛を有し、裏面の中央は赤色をなす。雌は腹端の一節大形にして黒褐色の長さ二分よりなれる產卵器を包圍す。肢は三對共に黒色を呈し、細毛を密生す。雄の鱗狀辨は極めて小形にして黒褐色をなす。本邦にては臺灣に產する種にして、(安部由熊氏より送らる)支那及び暹羅等に於て普通得らるゝ所なりと。(第三版第三圖)

(十六)ハゴロモゼミ(Gn? Sp?)　躰長八分五厘翅の開張二寸四分内外、体は淡き橙黄色を帶び、頭部

は平たき三角形にして黄色を呈し、楕圓形の腹眼は前方黒褐色をなし著しく兩側に突出す、單眼赤色をなし前頭には黑色の横條あり。額面餘り隆起せず、觸角黄色甚だ細くして長さ九厘、基部の二節は膨大す。口吻長さ一分二厘黄色を帶び先端少しく黑し。前胸背も黄色にして後縁並に之に近き中央は少しく綠色を帶び、兩側縁には濃褐色の斑點を有す。中胸部は黄色にして、四個の太き濃黄色の縱條斑を有す。頭胸部の裏面は淡黄色を呈し、白粉を裝ふ。翅は前後共に膜質透明、翅脉は黄綠にして翅端に至るに從ひて黑色を帶ぶ。雄の腹部は大にして、第三關節以下の各接合部の赤黄色を呈し、裏面は黄色にして白粉を有す。雌は腹部小さく、末端に至るに從ひて漸次細まり、其色彩雄と異なる所なく産卵器は黑褐色なり。肢は各々黄色にして細毛を生し、後肢の脛節には小刺を有す。雄の鱗狀辨は大にして長く黄色を呈し、先端丸く重なり合ひて腹部を覆ふ。該種は臺灣に産し安田由熊氏より贈れたり。(第三版第六圖)

(十七)ヒメクサゼミ(Gn? Sp?)　極めて小形の種にして躰長雄は五分、翅の開張一寸三分、体瑠璃色を呈し全体に細毛を有す。頭部は殆んど正三角形にして、腹眼圓く黑褐色を帶び餘り突出せず、單眼赤色にして三個あり。觸角黑く長さ六厘。腹眼の前方並に額面は茶褐色を呈し、口吻は長さ一分、茶褐色にして先端少しく黑色を呈す。前胸背は黑くして後縁の兩側は茶褐をなす。中胸背は光輝ある瑠璃色を呈し、頭胸の裏面は茶褐にして細毛を有す。翅は前後共に膜質透明、前翅の基部は少しく黄綠色を帶び翅脉綠色にして翅端に至るに從ひ黑色をなす。雄の腹部は大にして圓く、第一第二の關節は表裏共に黑色を呈し、以下は茶褐色にして表面の中央には黑縱斑を有し細毛を密生す、肢は各々茶褐色をなし、後肢の脛節の内外には小刺を有す。雄の鱗狀辨は淡黄色にして楕圓形をなし、重なり合はず。該種は沖繩縣に産す。(第三版第五圖)

(十八)アカエゾゼミ Cicada pyropa, n. sp.(orig grosse)

軀長一寸三分内外翅の開張四寸、体黑色にして全体に褐色の短毛を有し、其形狀斑紋等凡てエゾゼミに酷似す。觸角黑色にして長さ一分六厘、口吻茶褐色にして長さ二分五厘、先端少しく黑色を帶ぶ。前胸背は濃き橙黃色にして、中央に黑色縱線二個を有し周緣は橙黃色を呈す。中胸部の斑紋形狀等、少こしもエゾゼミと異ならざるも白色斑を欠く。頭胸部の裏面は、黑色の中に橙黃色の斑紋あり。翅は前後共に膜質透明、翅脉は褐色にして翅端に至るに從ひて黑褐色を呈し、前翅の翅端に近き二つの橫脉上には焦茶色の斑紋を有し、後翅の內緣の一室は濃褐色を呈す。腹部の背面は黑色にしてコエゾゼミと等しく、第五關節以下の各接合部には橙黃色の斑紋を有し、裏面は全く濃褐色を呈す。肢は各々褐色なり。雄の鱗狀辨は褐色にして殆んど丸く、中央に於て重なり合ふ。雌の產卵器は黑褐にして、長さ二分五厘ロ圖は雄蟲にして、イ圖は即其の鱗狀瓣を顯はしたるものなり。該種は宮城縣北海道等に產し松村博士より二頭を贈られたり。

アカエゾゼミの圖

(第三版圖の該種は明治十九年八月陸前金華山に於て田中芳男先生の採集せられたるものを寫生したり)

(十九)リウキウクマゼミ(Cryptotympana fascialis, Walk.)　躰長一寸三分内外、兩翅を擴張する時は四寸、其形狀クマゼミに酷似す。躰は光輝ある黑色にして、全体金色の細毛を有す。頭部は極めて平たき三角形をなし、複眼は黑色、單眼赤色をなす。觸角は黑色にして長さ一分八九厘、額部は著しくは隆起せずして中央部は黑褐色を呈し、口吻黑色にして長さ三分餘、前胸背は其幅廣く板狀部は小形なり。中胸部は大きく、前方の二溝はあまり深からず、中後胸の腹面には白粉を有す。翅は前後共に膜質透明、翅脈は綠色にして翅端に至るに從ひ黑色を呈し、前後翅の基部は黑色を帶ぶ。腹部裏面の左右には金色の細毛著しく密生す、肢は共に褐色にして黑色斑を有し、細毛を生す、雄の鱗狀瓣はクマゼミに比すれば少しく小さく、下方に至るに從ひて細く先端尖れり。該種は琉球及び臺灣、支那に捿息し未だ内地にて發見せしを聞かず。

(二〇)クサゼミ(Gn? Sp?)　躰長雌は六分五厘、翅の開張一寸八分五厘、体茶褐色を呈し、頭部は小さき三角形にして茶褐をなし、複眼暗褐色にして著しくは凸出せず。單眼赤色にして頭頂に三個存在し額面は著しく隆起す。口吻短かく、先端少しく黑みを帶ぶ。前胸背も茶褐にして中胸は綠褐を帶び、背面には茶褐色を呈せる太き四個の縱帶を有す。頭胸の裏面は其色少しくうすくして短毛を有す。翅は前後共に膜質透明、翅脈綠色にして翅端に至るに從ひて黑綠を呈す。腹部は表裏共に茶褐色を呈し、末端の一節は著しく延長し、黃褐の產卵器を包圍す。該器は長くして三分に達す、雄は未だ標本を得ざれども、こは沖繩縣に於て獲らしものにして、安藤喜一郎氏の惠贈せられたり。

此の他當所には尙二、三種の標本を藏すれども、不明の点あれば研究の上、他日照會するの期あるべし

# ◎胡桃の葉蟲

兵庫縣佐用郡久崎村　井口宗平

余が住家の附近なる山林に數株の胡桃ありて二三年生位の若芽なりしに昨年六月中不圖多くの葉蟲發生し殆んど完葉なきの有樣となりしかば、之が研究をなしたるに案外面白き事多かりき。而して只一回の研究にして甚だ不完全を免れざるも、其結果を貴誌に投じて敎を乞はんとす

該蟲は鞘翅目中葉蟲科に屬するものにして、學名をGastrolina thoracica Baly といふ。成蟲は体長二分五厘体幅一分一厘ありて全体甚だ扁平なり、頭部は三厘許りの正方形をなし、光澤ある黑綠にして數十の小凹點を密布し、頭頂の兩側觸角の基部に當る處ろは多少隆起す、複眼は漆黑色を呈し、頭部の兩側にありて少しく突出す。觸角も亦黑色にして十一節よりなり長さ七厘五毛、第一節は球狀に膨大し第二節は甚だ小さく、其他の各節はほゞ同大なれども末節はやゝ大なり。前胸は幅七厘長さ二厘五毛あり、其前緣の兩角は突出して頭部の後半を包圍し、後緣の兩角はやゝ尖れり、色は淡樺色にして中央縱に巾三厘許り黑色を呈し、全面に不正形なる點刻ある事頭部に同じ中、後兩胸の背面は濃色なる飴色を帶び、其腹面は黑綠にして點刻あり。腹部は五節にして樺色なれども、中央は廣く黑色をあらはせり。翅鞘は藍綠にして幅七厘長さ一分七厘、長方形をなし多くの點刻縱條を有し、肩部少しく隆起す。菱狀部は半圓形にして漆黑色を帶び、肢は三對とも殆んど同長にして長さ二分、腿節は少しく膨大し脛節の先端及び跗節の第三節迄は灰黃色の短毛を密生し、第四節は分岐せる第三節より出でゝ毛を缺く。

此蟲は擧動甚だ不活發にして、物に驚く時は直ちに死を擬し、五月中旬頃より出でゝ胡桃の葉を喰害す卵は黃色楕圓形をなし葉裏に大抵四五十粒宛產附するものにして、其狀瓢蟲のそれの如く直立して密集せり。幼蟲は其初め多數一葉に群集して表裏を擇ばず葉肉を喰害し、漸次他の葉に移る、かくて其被害

の葉は脈條のみとなり、全く綠色を失ふに至る。かくて二回位脱皮する間は群集し居れども漸く成長するに隨ふて分離し、老熟する時は皆四散し、多くは葉の表面にありて喰害し其貪食なる實に驚くへきものなり。脱皮は其まゝ葉に附着せるを見たり。幼蟲の老熟せる者は体長約三分五厘ありて楕圓形をなし、恰かも七星瓢蟲の幼蟲の如き觀を呈す。色は灰色にして稍や褐色を混じ、各節に五箇黒色の突起ありてそれより各二本の短毛を生ぜり、口部及第一節の背面は黒色にして、第二第三兩節の背面には特に大なる突起あり。肢は黒色を呈す。其將に蛹化せんとするや尾端を葉裏に固着して垂下し、胸背より割れて蛹体出づるものにして、幼蟲の脱皮の腹部に當るところは伸長して紐狀をなし、頭部及び胴部は縮みて皺狀をなし蛹の尾端の腹面に附着す。故に蛹は頭部を下方にして垂下するものなるが、一葉裏に多きは二十餘も垂下し居るものあり、此際もし葉を動搖する時は蛹も亦振動して一種の奇觀を呈せり。蛹は不正圓形にして灰褐色を帶び、翅鞘部灰黒色を呈し肢、觸角等は腹面に卷縮せり。而して蛹期は十日以上二週日以内なるが如く、一世代の日數及發生回數は未だ不明なれども、五月下旬より六月上中旬の間に於ては成蟲、幼蟲、蛹の三者を併せ見るを得、其後は更に之を見る事なかりき。

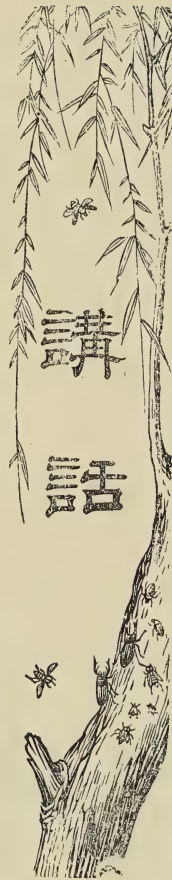
胡桃葉蟲の圖

此蟲の幼蟲には一種の寄生蠅あり、即ち葉下に縣垂して將に脱皮蛹化せんとして其儘死せるものをとりて体中を檢するに、其内部に充滿せる一頭の蛆あり、之を採集して飼育箱中に容れ置きたるに、蛆は漸次寄主を辭し匍匐して土中に入り蛹化せり、此の寄生を受くるものは頗る多く余が實見したる所によれば殆んど五割に達せり。

蠅の蛹は黒褐色にして長三分内外、土中に入りてより十二、三日にして羽化す。成蟲の雄は体長三分五

厘、翅張六分、顔面は銀白色にして黒色の剛毛多く、腹眼は赤褐色なり。胸背の地色は灰黄色にして銀白色の光澤を有し、黒色なる五條の縦線あり。腹部も亦胸背と同色なれども第一第二兩節の後縁は著しく黒色を呈せり。菱狀部の前半は灰白色に後半は灰色を帯びたる赤褐色なり。全体に極めて短かき黒色の剛毛を密生し、胸部、菱狀部及び腹端にあるものは殊に長大にして腹端のものは簇生せり。肢にも亦黒色の短毛多く殊に腿節に密生し爪は褐色なり。雌は体長三分、翅張五分内外ありて全体鉛色の光澤ある黒色にして、顔面は雄に比すればやゝ黒色を帯び、菱狀部は体と同色にして後端かすかに赤褐色を呈せり。

以上は實に不充分なる研究を記述したるものなるも、本年は更に精査して報道する處ろあらん事を期す

編者曰ふ　該種は明治二十二年六月十二日岐阜市近傍の稻葉郡島村字早田に於て採集したることあれば玆に記し置きぬ

## ◎分類上の困難

米國理學士　桑名伊之吉

左の一節は二月廿五日同氏が岡山地方へ出張の歸途當所に立寄られし際一場の談話を乞ひそれを所員の筆記したるものなれば多少の誤謬を免れざるべし且字句の穩當を欠く等は一に其責編者にあり讀者之れを諒せよ

私は此頃岡山地方へ貝殼蟲調査に參り、只今其歸り掛けに一寸御邪魔した樣な譯で、今晩十一時の列車で歸らねばならぬから、時間も誠に少なく且御話致すにも腹案もないから、只自分が研究中に尤も困難に感じたる分類の事に就て少しく申上けませう。

扨分類の非常に困難なることは私の申す迄もなき事で御座いますが、分類は自然的と人意的との二つに

別れます。自然的とは即ち生物の系統を其儘間違へない樣にするので、假令ば人と猿とは如何なる違ひあるか等の系統を正しく調べて分類するのである。人意的分類は系統に注意せず、外見上異同の點を調査して分類するのであるから存外間違が起る。然しながら其系統を調べることは非常に困難であるから今日は皆人意的に分類して居るのである。

凡て自然界は分類の出來ぬもので、甲と乙とは異れりと思ふものも、能く研究すれば系統が一であるとか、或は能く吟味すれば中間物が出來て甲と乙と連絡する樣になつて、迚も分類の出來るものでない。其れが即ち自然で、分類の確り出來るのは即人意的である。分類に於て甲と乙と差異のあるは、其中間物を見出さゞる爲に判然區別し得るのである。乍然千百の枝も其本は一本の幹となる如く區別が付かぬ樣になる。今多くの昆蟲を捕へて之れを區別するは甚だ困難なるものであるから、先づ先輩の著書に依らねばならぬ。其書物も現今大に混雜して、學者によつて夫々得意の點のあるものと見へ、甲は何々と云へは乙は何々と答へ、遂に初學者を迷はしむることが多い。乍然何れの分類が正當なりや否やの點に於ては團扇の指し樣がない、公平に云へば何れも宜く、又何れも違つて居ると云ふことも出來るのである故に先づ初めは何れの書物でもよいから、一つの書につきて充分研究し、然る後に他の書籍によりて對照するがよい。一体七つとか或は九つとかに分けて居つたものも、或は十二、十三多きは十九目にも分つ樣になつて、今日では大層目が增へて居るが、實際に於て實物が夫丈增加したかと云へば、幾分新らしきものもあれども左樣に實物が增へた譯でなく、便宜上澤山に分ける樣になつたのであるが、茲に又二つの論が起る、或る人は目を多くするは面倒なりといひ、或る人は可成異なる點を調べて細かく分けた方がよい、即ち目の多い方が便宜なりとして漸次多くなつたのである。故にリンニアス時代に直翅目に入れてあつたものを、今日では異目としたものが多くある。斯る場合には出來得る限り系統的に調べて、異目とした理由を明かにせねばならぬ。書物に就ても以上の如く隨分困難であるが、實物に就ては其困難は尚多い。今鱗翅目と毛翅目とを採りて、極端と極端とを比較すれば直ちに區別が出來るが、毛翅目の高等なるものと、鱗翅目の下等なものとを比較すれば殆んど區別が付かぬ。口具を見ても兩者殆んど異ならざるあり、翅の鱗粉を鏡下に照しても區別し難きものがあつて中々困難である。故に毛翅目を鱗翅目に入るゝ人も多い。一歩下れば毛翅、一歩進めば鱗翅目に入るので、自然界より見れば判然區別し能ざるものである。又變態と云ふことは分類上甚必要なるもので、擬脈翅目と脈翅目とは變態の如何に

依て區別が出來て居る位であるが、貝殼蟲の雄と雌とは變態を異にし、即雄は完全變態、雌は不完全變態をなすものなれば、仮りに雌雄を異目となすを得るかといへば決して異目となすべからざるものである、即一母蟲より出でたるものであるから、如何に變態其他形態等が異なるにもせよ同種とせねばならぬ。此の種類の判定と云ふことは甚だ困難なるもので、一母蟲より生じたるものなりや否やを確むることの出來ざるものが甚だ澤山ある。植物すら隨分六ヶ敷が、常に移動する昆蟲に於ては尚更のことである。若し種々なる点を比較すれば、同種のものでも一は跗節が三節一は四節といふ様な違ひや、又觸角の關節が右と左と違ふと云ふ如きことがあるから、一の定義を下しても、一母蟲より生じたるものもそこに入るゝことの出來ぬ様なことがある。二者同一にあらずとの定義の如く、同種にても異屬のものとこ比較するよりも尚異りたる点を見出すことがあつて、非常に種類の鑑定は六ヶ敷ものである。是れ專門家の必要なる所で、專門家は經驗上一見して大概異同を區別し其目見當を以て鑑定を下したものが餘程確である。羽蝨專攻家ケロッグ氏は、顯微鏡にて蟲を見るよりも顯蟲鏡に依て見て、腦に浮びたるものを判定すると確實なりと云ひしことありしが、專攻家は種々の經驗があつて、筆にも口にも現はすことの出來ぬ處がある。又屬は折々變るもので、貝殼蟲の如きも屬が折々變る。即澤山になる。專攻家がそれを比較して相似たるものを集め、更に其れに新らしき屬名を付する故、種名が同一で屬名の異りたるものが出來る。之れ又初學者を迷はしむるものである、其時は新らしき屬をとり、舊きを捨てるが普通です。然れとも舊く付けたる摸範的の屬があるが、其れは決して捨つることが出來ぬ。且種名に於ては決して變へることが出來ぬ、然れども前申す通り、同一種にても異屬のものよりも異りたるものあれば判別に苦む、特に採集したるものは系統の知れざる處から、往々同種のものも異種と誤ること多く發生期の如何により、彩色形態等の差異を以て異種として分類せられしもの多かりしも、現今は大分、明かになつて來て、從來異種として別々の名の居き付りしものも、同種として合一さるゝものが出來た。貝殼蟲で云はゞ、桑の貝殼蟲が桐、杏、桃、蜜柑等托生植物の異たるに從ひ、別々の名稱が付いて居つたが、能く研究すれば即一種となる。如斯塲合には其紀元を調べて一番舊き名を採用し、他の名は異名とせねばならぬ。然るに詳しく調べもせず、又自分の付けた名を取消さぬものが多いが、是れ大に困る所である。故意にそうせなくとも參考書の足りない爲に、自分の目が屆かない處から、舊き名の分らざる爲め止を得ず新らしき名を採ることがある。斯る塲合には其是否を判決することが出來ぬ。今日本に於て

も日増に名稱も分り、分類のことも分るが、それに付て初學者の大に困ることがある。即學派と云ふよりも書物により又は師の意見によりて異なり、獨逸より來る名、又は英米より來る名稱等を見れば往々異なりたるものありて大に惑を來すが、命名者を見て舊き方を採らねばならぬ。兎角名稱の異なるを以て色々攻撃するものあれども、之れ止むを得ざる次第にして、分類を研究する上に於て心得置くべきことである。既に申した如く、自然的は枝葉が多くに分れて居ても幹は一つである如く、判然區別すべきものに非されども、吾々の便利上、之れを何目とか、何科とか區別するのであるが、其區別するには如何するかと云へば、各其特徴を見出すのである觸角なら觸角丈百も千も比較し、或は口具とか、肢とか翅脉とか其れ〳〵一部分つゝ澤山對照して、種々なる特徴を見出し、而して何目に入る、何科何屬に入る等の區別をするのであるが、彩色などは變化の多きものゆへ當にならぬから、体軀の構造によりて著しき特徴を見出すのが必要である。且一つの者を深く研究するのが肝要で。かくすれば一を見て十を覺ることが出來、大低當が付く樣になるものであるから、可成一つのものを詳しく調べる必要がある。色々申上げ度ことが御座いますけれども、最早滊車の時間も切迫しましたから是にて御別れを致します。

## ◎岐阜縣巡査教習所に昆蟲學の一科を設けられたる顚末

名和昆蟲研究所長　名和　靖

本篇は本年一月岐阜縣巡査教習所に於て同囑托講師名和靖氏の講演されしもを同所内の廣瀨警蟲生之を速記せられしものなり

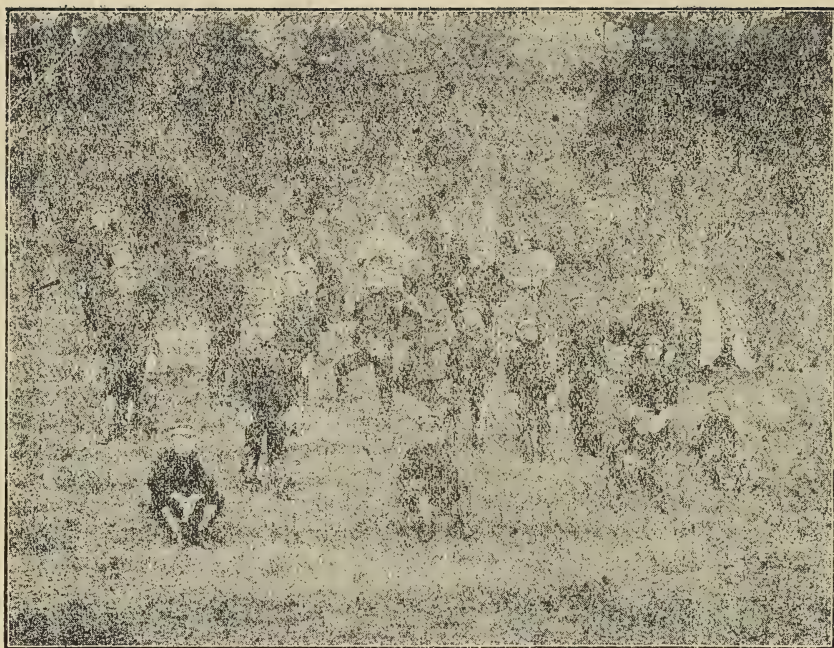
既に諸君に於ても御承知の如く、當所第九十八期受業生より昆蟲學の一科が加へられまして、短期で誠に不充分ではありましたが、兎に角私が一通り御話を致しました。今期即ち第九十九期受業生に對しても、引續き私が講演することになつて居ます。つきましては私が當所に於て昆蟲學の講演をなす樣になりたる顚末を一通り申上げた方が宜敷からんと存し、先づ總論として一通り其顚末を御話致し、然る后に順次昆蟲學の説明に移りませう。

諸君に對して昆蟲學の思想害蟲驅除益蟲保護法の研究の必要なることは、最早私が喋々申上げざるも御承知ならんも、尙ほ私の感じたる事柄の大畧を御話し致しませう。こう申すと勢ひ私の身の上話をせねばなりませぬが、全体私が非常に警察官に昆蟲學の必要を感じたるは昨今に始まりたる事にあらず、余程古き事にて、一般世人の未だ昆蟲の何者たるを知らざるずつと以前恐らく今より廿年程も前より其必

要を感じました。其れは外でない、縣廳の只今の第四課がまだ勸業課と稱せし時代、丁度私が明治十五年に岐阜縣農學校卒業後、縣廳とは深き關係を持ちて居りまして、勸業の事は日夜念頭を去らず、其農學校には農事雜誌を發刊して居りまして、私は常に其雜誌に記載をしました。其當時害蟲發生に付ての縣廳への報告が、郡役所からと警察署からとの報告は、三日乃至一週間の遲速がありまして、警察署の手を經て來りたる報告は非常に早く、郡役所の手を經て來りたるものは非常に遲くありましたから、私は其源因を調べて見ましたに、郡役所の方にては、各町村に於て害蟲が發生すると、町村人民は其事を町村役塲に申出で、町村役塲に於ては其申出を聞き止むを得ず之を郡役所に報告する、郡役所は其報告に基き又止むを得ず縣廳へ報告すると云ふ順序にて、縣廳へ報告するまでには大に手間どるから延引するのであります。これに反して警察署にありては、各駐在所の駐在官は、各町村を巡視中若し害蟲の發生を見聞せらるゝ時は直ぐ、署長に報告し、署長は直ちに縣廳に報告せらるゝ順序であるから、警察署の方はいつも瞬速でありました。そこで知事初め當局者に於ても、報告は極めて迅速にあらざれば害蟲の驅除は其の効を奏する事は出來ぬと常に申して居られました。如何に妙法の驅除法がありましても、其驅除の時期が遲れました時には何の効も奏する事は出來ませぬ。私は其當時より、少なくとも警察官の直接瞬速なる報告に依らざれば驅除の効を奏する能はざることゝ深く感じました。然れども今より廿年も前の事にて、只今の樣に講習會などの企もなく如何とも致し方なく、其後私の非常に感しました事は明治廿九年でありました。私は本職を師範、中學に奉して居りまして、農業動物學等を受持ち、傍ら昆蟲を研究して居りましたが、敎職と昆蟲の研究とは兩立せざる事を感じ、廿九年の三月に斷然本職を辭すると同時に、名和昆蟲研究所の名稱を世間に發表した次第であります。當時飛驒國に害蟲の發生したる報告がありましたから、私は其れを調査に出張致しました。何んでも六月頃と思ひましたが非常の風雨で、道路は泥濘にて腕車の心捧が二度も折れ、益田郡の下呂に來た頃は腕車は役に立たゝず、且荷物は澤山にて一歩も動く事は出來ず、大に當惑の折柄宿屋の主人が申すには、警察署へ腕車の周旋を御願ひするが一番宜しからんとの注意でありましたから、私は下呂警察署に行き腕車の周旋を賴みました。其時の下呂の署長は明田一直と申す方で御座いましたが、署長の云はるるには、腕車の周旋は今直にと言ふ事は出來ぬから、兎に角今日は當地に滯在せられよ、明日は必ず車を周旋致さう。誠に御氣の毒だけれども車の周旋の代りに、害蟲の話しを致し吳れとの要求でありまして、私も挨拶の仕樣もなく暫く考へましたが、

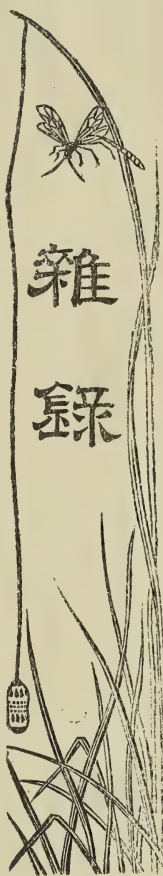
署長の懇望でありましたから一席の昆蟲の話を致しました事がありました、此の事は先回も御話致しましたが、當所の池田部長も其當時下呂署に御出でになつて、私の話を聞かれたと云ふ事でありました。其時は何んでも警察署の召集日でありましたから、只今にては確と記憶は致しませぬが何でも六月の十五日か三十日に相違ありませぬ。且私は其當時如何なる事を話したか記憶致しませぬが、兎に角私は非常に愉快に感しました。其時明田署長の云はるゝには、當地方は岐阜近傍と違ひ、警察事務も少ないから可成人民の保護と凡ての豫防に重きを置かねばならぬ。今害蟲驅除法の如き、警察官は第何條より驅除に從事せざる可らずとの明文なきも、警察官が害蟲驅除益蟲保護の一斑を承知し置きて、驅除豫防の際寄々警察官が農民に對し注意を加へたらんには、廣き意味にては農民の保護者ともなり、又害蟲驅除豫防法の目的を達する事を得んとの署長の意見に私は非常に感服致しました。即ち世人の多くは法律の明文に拘泥するに不拘、明田署長は害蟲驅除益蟲保護の一般を心得置き、農民に注意警戒するは廣き意味に於ては保護の一部なりと言はれたる其の一言には大に感じました。其の後一二年を過ぎましてから再び益田郡下原村を巡回せしに、只今名前は忘れましたが下原村駐在所の巡査の云はれるには、私は先年先生に蟲の話を聞いてより以後は、巡回の都度色々の蟲に氣がつく樣になりたりと云はれたる事を聞きました。其外の詳しき成績は聞かざるも、明治三十年の浮塵子大發生前に此の擧ありし事は紀念の來歴と思ふて居ます。其の後私は各地方にて昆蟲講習會を開會する度每に豫め町村長に賴みて警察官の御出席を請ひしは、其の實一言にても駐在所巡査等に昆蟲の事を聞て貰へば他日驅除豫防上の參考にもならんかとの微意にて、警察官の臨席を望みたる次第で御座います。其處で明治三十二年に於て富山縣に招聘せられまして、一週間の昆蟲講習會を開く事になりました。それは明治三十年に全國に浮塵子大發生の爲めに、昆蟲講習會が俄に盛んになつて來まして、富山縣にても六月廿一日より一週間開會する事になりまして開會前に打合を爲す必要があるから、十九日には來て呉れとの事でありました、故に私は十九日に富山市に參りましたれば、書記官は直ちに私の宿を尋ねて來られ、講師は何か希望はなきやとの御尋ねでありましたから、私は先づ講習會の組織を尋ねました。すると書記官の云はるゝには、其れは郡役所の郡書記や、農事試驗場の技手や有志者凡そ百名許講話を聞く事ゝなりて居るとの事であつたから、私は其處で一つ希望を述べた。それは小學校の敎師に聞かせる事は余程利益があると思ふから、願くは實業家と敎師と半分半分位に敎員を出席させて貰ひたいと注文致しましたら、書記官の言はるゝに、

冬期昆蟲採集の圖（前號冬の蟲採りの記事參看）

名和正氏撮影

は今俄かに小學校の敎師を集める事は困難にて其の希望を充たす事は出來ざるも、其外何か希望はなきかとの事でありましたから、私は然らば警察官を出席させて貰ひたいと申しました、書記官には早速警部長に御協議下されまして、各署より巡査部長一名づゝ非常召集して三日間出席させるから、可成三日間に警察官に參考となる可き事を話し呉れとの御注文で御ざりました。依て私は其れを快諾致しまして十名の部長の御方には特に參考となるべき事は筆記し貰ひたいと內々約束して講話に掛りましたに三日の約束が過ぎて四日目にも相變らず制服を着けて部長が出席して居られますから、私は不思議に堪えず惣代に聞きましたら惣代の言はるゝには、私共が先生に申上る事を失念致して居りましたが、實は私共は先生の御話を三日聞き、半途で歸署するは如何にも殘念であるから昨夜警部長殿の御宅へ參り其の次第を申上げ、私共が中途にて歸署すれば責任を負ふて驅除する事は出來ざるも一週間の聽講を許さるれば、我々歸署の上、部內の駐在巡査を召集して三日間の講習を爲し然る後誓つて充分の効を奏する考であるから、願くは修業證書を得る迄聽講を許されたしと警部長に請願せしに、幸ひにも警部長も尤の事なりとて聽許せられました、故に引續き講習を受くる事になりたりとの事を聞きて、初めて其の疑

を解きました。其後講習を卒業せし部長五六人より、害蟲驅除の實況に付部内の狀況を通報がありました樣に記憶して居ますが、富山縣は只今申上ぐる通り、警察官は其れが爲めに一般に昆蟲思想を抱かれました。名和昆蟲研究所の爲めに國庫補助問題の起りし時に富山縣選出の代議士でありまして只今は故人の稻垣示君が非常に盡力せられたる事を聞きましたが、當時其の何の故たるを知らざりしも稻垣示君が盡力せられたるは、名和が富山縣にて昆蟲の爲に効がありたるより多少の便宜を與へてやらなければならぬと云ふ主旨より、御盡力になつたと云ふ事を近頃に至り漸く聞きました。斯くて巡査敎習所には是非昆蟲の一科目を加へて、昆蟲思想の普及を圖りたいものだと思ふて居りましたが、明治三十四年に富山縣にては巡査敎習所へ昆蟲學の一科を加へたと云ふ事を、檜垣知事が警部一名を御連れになり、研究所へ御出の節承りましたが、御列席の川路知事公も他縣に先鞭を付けられたるは殘念なりと云はれた事がありました。私は當敎習所へも昆蟲の一科を加へる事に付きましては只今高須の署長をして居らるゝ渡邊君が當所に在勤中に、御前が承知し吳れるなれば一科を加へる事に手續をするがどーだと時々御話がありました。私は其の際には色々の事情がありまして、直ちに御受けする事は出來ませぬでしたが、只今申す通り隣縣の富山縣にては昆蟲の一科を加へられたるに不拘、岐阜縣にて未だ其運びに至らぬは誠に殘念と思ひ居りましたに、今回計らずも警部長と當所長の御熱心により御贊成下されて、遂に當敎習所に昆蟲學の一科を加へられ、私が講演する事になりまして、今より考へると、廿年前に警察官に昆蟲學の思想の必要を感じたるものが、今日漸くにして其れが實地に行はるゝ樣になりたるかと思ふと誠に夢見る心地が致します。尙其の他の方面より考へて見るに、警察官にして昆蟲學を知らざる時の不利益は、明治三十一年に稻葉郡島村に姬象鼻蟲が桑の木に發生しまして、桑の枯枝に夥しく喰ひ込みて居りまして、縣廳では島村全体に縣令を施き「ドシドシ」驅除法を勵行せんとの意氣込でありましたが、私は先づ待つて下さい、成程法律は非常に必要なるものなるも、猥りに法律は出すべきものにあらずと考へまして、私の關係する害蟲驅除に法律の力を借りては譬へ効あるも面白からぬと思ひ、先づ私の力で出來る丈けは法律の力を借らずやる心算にて、島村の法藏寺と云ふ寺へ村の有志者を集めまして害蟲の實物を示し、驅除の方法を敎へ、愈々驅除を實行する事になりまして、或は怒り或は叱り或は賞揚し種々雜多の方法を用ひてやつと八分通り枯枝の切り取りは出來ましたが、殘り二分はどうしても驅除する事が出來ぬ、何と云ふても頑として應じませぬ、玆に至りて法の必要が生じて來ました、其の法律は

警察官の力でありますﾞ、警察官の力を借らざれば到底二分の驅除は出來ませぬから、警官に出で丶貰ふことになりまして、二名の警官が御出張下さつた。今迄私共の云ふ事を聞かなかつた人々は何んと云ふかと云ふに、「ホントウニャル ツーダナー」と云ひ私共を馬鹿にして居るから實に腹が立ちました。最早警官の命令でやれと云はれますから、止むを得ず斧や大きな鋸で、無法に且御義理的に枯枝を切りましても、警官はそれを見て何んとも注意がない、私は其時初めて氣が付きまして、是れは初めに警官と打合せて置かなかつたのが缺點であつたと思ひ、他の事に言寄せ警官二名を傍らに呼び、内証にて、姫象鼻蟲驅除の桑の切り方はこうこうである、只今切りて居る樣な風にては驅除にならぬから斯々の點に御注意下されと、私は出張の警官に害蟲の説明をした事がありました。此の時一層昆蟲思想の警官に必要なる事を感じましたが、兎に角打合をせずに驅除にかゝつたと云ふ事が私の手落でありました。警官に於ても平素制裁のある法律を施行する上に於ては其制裁のある點は能く承知し置き、人民には之れに背かざる樣充分の戒告を加へる事が必要と思ひますと同時に、警察官が注意を加へるにも、其注意すべき點が不明にては、人民にも注意する事が出來ぬより、警察官が昆蟲學の一通りを心得て置くのは最も必要の事で御座います。續ひて一昨年も揖斐郡の講習會へ出張致しました時にも、十名許りの警官が御出席になりまして、其處で一の問題が起りました。其れはどう云ふ問題かと申しまするに害蟲驅除はどの邊迄關係すべきものか、其程度は如何にと云ふ質問でありましたから、私は其の質問の起りたる理由を尋ねましたに、苗代時期にも、本田に於ても害蟲驅除に從事しましたが、甲地の驅除を勵行すれば乙地は更に驅除せず、乙地に轉じて驅除を勵行すれば甲地は手を拱して驅除せず、馬鹿氣たる事にて殆んど鳥を追ふ樣で誠に間が悪るくてならぬとの事でありました。其れは御尤もの話と思ふ、警官の力は最後の力にて、初めより之れに關係するは面白くないと思ふ、郡役所なり町村役場なり、充分にやりたる後、どうしても驅除の出來ぬ塲合に、初めて警官の力を要するので、初めより警官の驅除に從事するは宜敷あるまいと思ふ。尚警官が驅除に從事するに付ても、昆蟲學の一斑を知り、其利害得失を辨へ、而して後ち驅除に從事せんには一層の効を奏するならんと答へました。頃日富山縣の各巡査駐在所の掲示板を見て來た人の話には、駐在所の前の掲示板には害蟲の標本を掲げ、且つ簡單の説明を附しありと十一月の新農報之れは大阪にて發行するものでありますが、其れにも其事が記載してありました。斯く必要なる點を、親切を以て農民一般に示す時は、農民は不知不識之れに敬服すると云ふ事を聞きて居り

ます、どーぞ豫防時代害蟲の卵の時代に、充分に驅除豫防の出來るやうに致したきものであります。昆蟲研究所にをきましても、七十何回の修業證書を授與し修業人員六千余名に垂んとするも其れが殆んど役に立たず、郡書記などゝ折々衝突を來たす事ありて、結局不足は私の處に來るので、只今の處にては昆蟲學は利用せられ居るより寧ろ惡用せられて居るように見へます。其れ故に現今にては一ヶ年間の長期の講習會を開き、又た一面には警官に昆蟲學の講習を爲し、警官に飽迄充分の注意をしていたゞいて害蟲驅除に付きては大々的効果を奏せんとの希望を有して講演を進行せん心算であります。恰も日本軍が旅順の二百三高地を占領せし其れ以上の價値あるものと思ひ居るのであります。

## ◎昆蟲文學

### 蟋蟀吟（自其六至其十三）　福井椿陰

抑揚緩急又高低。重濁輕清各不同。己解傷心陳痛悼。未知豪氣吐虹霓。徒於詞客空嘉賞。何在征夫獨悽淒。呼喜呼悲任人說。無心無意盡聲啼。

新涼初動滿天街。處處蛩聲入夢佳。清笛一聲生破壁。素琴幾曲起空階。短歌長詠送浮世。嘯月吟風托寸懷。身命由來草頭露。千呼莫用勤年鞋。

南山曰。作者詠出眞情。

（十六）

胸裏寸心猶未灰。向人何意說悲哀。啾啾聲裏暑先去。切切吟邊秋已來。雖學高低催織韵。莫招冷熱語氷咍。微軀亦有不平在。鳴徹終宵重幾回。

終生不知有陽春。鳴盡三秋抵死身。空學機聲驚懶婦。叨爲琴韵伴佳人。清風明月凄涼夜。疎雨殘燈寂寞晨。閨怨離愁都付汝。啾啾仔細訴蒼旻。

南山曰。征婦讀此篇紅涙欄干。

秋風風裏自成群。寂寞蕭條一付君。客枕三更難穩睡。楚歌四面不堪聞。馬嵬唧唧歸寒雨。青塚啾啾属寒雲。衆響弄來無意語。人間獨有涙紛紛。

南山曰。鳴者無心聞者漏嘆聲。鳴者非邪聞者是耶。

如悲如訴夜何喧。又似人間得失論。酔後來聞春日野。月明去訪淺茅原。死瞑冬曉風霜烈。生泣秋天雨露恩。愛汝驚醒疎懶夢。機聲砧響滿千村。

星影寥寥夜色闌。牽牛花上露團團。高低叨弄風前吹。緩急誰爲月下彈。解得人情知冷熱。嘗來世味說甘酸。曉涼人枕殘燈暗。夢和蛩聲一様寒。

南山曰。已解人情與嘗世味甘酸者。永夜聞蛩聲感慨不可堪。

身世由來傾刻間。高吟風月寸心閑。輿衣朱紫臨朝列。寧設蓬蒿屬散班。衆響曾非論得失。多言何有極嘲訕。入秋我亦弄饒舌。蟋蟀吟成不忍删。

南山曰。連吟數章意到筆到。描盡風露清吟凄凄唧唧無復餘蘊。非君奇才烏能得如此。珍重珍重。

虱。虱者。属半翅類。多生於人體者也。然保身清潔則不生也。人若生之。則爲不潔以耻之矣。然在彼支那則如爲當然不耻者。故有與客相對。捫虱而談時事以裝英雄者。又自稱半風子以爲得意者云。夫同文同軌之國。而至以一昆蟲一則爲不潔以耻。一則爲裝英雄衒風流之具。以爲得意。何其人情之相異甚也。(啓嶽倫草) 南山曰。我國與支那。輔車相依。而人情相去殊遠。我愛清潔。愛淡泊。愛脫落。彼愛溷濁。愛濃艶。愛執拗。我國男子不猥悲嘆涕泣。而彼邦人公然哀鳴落涙。其狀實可憫笑矣。此文。特於半風子。叙人情異同。可謂見一端推全般者也。筆路輕妙文理暢達。

## 雜詠

＊

志紀臣

海棠の花うつくしとあかねさす紫蝶の來て飛べる見ゆ

大きなる御門鳳蝶にたはむれて飛べる小さき紫しじみ

菜の花の中路を細み袖ふれて右に左に虻鳴きたちぬ

＊

渚

か黒なる醜の熊蜂頭持ち捕らばささずとふロシャの如けむ

＊

坪内華外

山吹を折らまく寄ればつま黄蝶二つ飛びたり眠りてありけむ

＊

笛成朝臣

枸杞を摘むおなじ籬のうばらより足長蜂の出でて行きけり

ふもとのや
去年伐りし桑の株より一つ一つ出で去る蜂の
いづくゆくらん

＊　華峯生
春を淺みただ綠なる野邊の草いづれを花と蝶
の舞ふらん

＊　深井青海
芽のふふむ石榴の枝にされ果てし鴫の草莖の
椿象あはれ

## 虻

木瓜の花せはしき虻のなく音かな　冷石
あぶの來る　揚梅の花　咲きにけり　同
笹子道虻に追はれて逃げにけり　同
虻の其あと翅ぬいて飛ばせけり　四山
あぶ飛んで菫摘む子をめぐりけり　同
製糸場あぶが又來て騷ぎけり　同
花のあぶ見て居る園や日の光　城東
あぶの居る　其豆垣や　暮れんとす　同
飛びめぐる虻に馴れたる菜摘かな　歸麓園
あぶ來鳴く　早咲の茨　一花かな　同

伯樂の虻を追ひつつ語りけり　四澤
あぶ入れて弄ぶ兒や紙袋　城北
あぶの聲峠の茶屋に晝餉かな　好之
園行けばむれ立つあぶの伸りかな　疎影
八ッ手葉の　下や何咲く　あぶの群　寒愁
草莖に風なき日なりあぶのとぶ　小蛄
椎の花終日散るや虻の聲　百非
草のあぶ花の白きに移りけり　琴雨
茨垣に高く虻なき飛ぶ日かな　琅々
南檐に藥干したり虻の聲　水村
あぶの其羽根につきたる花粉かな　去水
山里の崖にあぶ飛ぶ薊かな　寒茶
折鶴に虻を捕へて入れにけり　翠園
あぶの聲　蒲公英の咲く　堤かな　明笛子
大根の花に虻なく雨間かな　一樂
あぶ一つ　流るる椿　追ひにけり　至泫
虻のなく垣の五加木を摘みにけり　華園
妻ごめや豆花垣の虻の聲　同
西陣のおへこさはがす虻一つ　同
虻の聲俄かに吹ける木の芽かな　同
野馬追うて行く虻戻る茨かな　同

## ◎昆蟲に關する歌（一）

奥島欣人輯

歌の分類みた様な事がやつて見たくなつた。其動機となつた原因は解らないので。幻影を捕捉するが如きものであるが、終に現實とならつた結果は此昆蟲歌の纂輯である。先づ昆蟲を撰んで着手したのは、動物中の最小であると云も佳なるべき昆蟲に對して、往古よ

り歴代の歌人が幾何の注意を拂ひ、幾何の詩想を喚起して、此最小動物を美化し得たかを研究して見たいからである。又昆蟲學者諸君の側から見ても、其專門の科學的研究以外に古今の歌人が此昆蟲に對して如何なる觀察をなして居るかを研究するのは、亦一の興味ある問題だらうと思ふ。故に此昆蟲歌集を昆蟲世界へ投ずる事としたのである。

### ▲萬葉集以前の昆蟲歌

神武天皇の三十一年四月、

天皇倭國を巡視し、腋上嗛間丘（ワキノカミノホヽマノオカ）に登りて國見し、歌つて詔はく

あなにゑや、國をえつ、うつゆふの、眞幸國（マサキクニ）といへど、蜻蛉（アキツ）の、となめせるが如し。

仁德天皇の皇后

石之日賣命（イハノヒメ）御歌

那莵務始能（ナツムシノ）、譬務始能（ヒムシノ）虚呂望（コロモ）、赴多弊耆氏（フダヘキテ）、箇區瀰夜儴利破（カクミヤタリハ）、阿珥豫區望阿羅孺（アニヨクモアラズ）。

此歌は昔から不可解の歌とせられて居る。殊に始め二句「なつむしのひむし」は夏蟲の灯蟲と通俗に解せらるれば俳句の歳事記にもある灯取蟲にて昆蟲部に屬し、愚庵禪師は螢の題にて「なつむしのひむし」と詠みて居るから、之を螢と解すべく又昆蟲の部に屬するのである。伊藤左千夫氏はこれを「夏蒸しの日蒸し」と解す。此說なれば全然昆蟲以外のものなり。余は諸說の執捨をなさずして附記する事としたのである

雄略天皇の四年秋八月、

天皇河上小野に行幸し御獵の時、虻飛來つて、

天皇の御臂を嗜ふ。是に蜻蛉忽然飛來つて蝱を嗜ひて去れり。即

天皇の御歌に曰く

大和の、をむろの岳に、鹿伏す（シヽ）と、誰れかこのこと大前に奏す（マチ）、大王は、そこを聞かして、玉纏の、胡床（アグラ）に立たし、倭文（シヅ）まきの、胡床に立たし、鹿待つと、朕坐（ワガイマ）せば、さ猪（ヰ）まつと、朕立せば、たくぶらに、虻かきつきつ、その虻を、蜻蛉はや囓（ク）ひ、はふ蟲も、大王につかへまつらふ、汝がかたはおかむ、あきつしまやまと。

因て蜻蛉を讀へ、此地を名けて蜻蛉野と爲す。」と書いてある。此歌は日本紀のものを掲ぐ。古事記のと大同小異である

日本最古の歌集たる萬葉集以前の歌の中に於て、昆蟲に關係ある歌は右の三首に過ぎない。萬葉以前の歌で動物に關する歌を分類すると

鳥類二十三首、獸類十一首、魚類五首、蟲類（昆蟲以外）四首（内貝二首、蟹一首、蜘蛛一首）

となる。又昆蟲歌を分類すると、「夏むしのひむし」の歌は不明なれば表に掲げぬ事として、他の二首に於て

蜻蛉二、虻一、

となる。前掲の分類を見ると、動物中にては鳥獸の如く形大にして人目に入り易きものが多く、昆蟲部類にても蜻蛉の如きに過ぎぬ。故に古代の歌人が取材の廣き割合に細密な點に迄は至らなかつたらうかと、思はれる。姿美しき蝶、聲美しき蟋蟀は、何故是等の歌人の詩想に入らなかつたらう。然し後代の歌人臭き歌人と此時代の歌人とを同様に見倣して論じやうとするのが素より不當である。右は作歌の技倆等に就て謂ふのでないのは斷つて置く

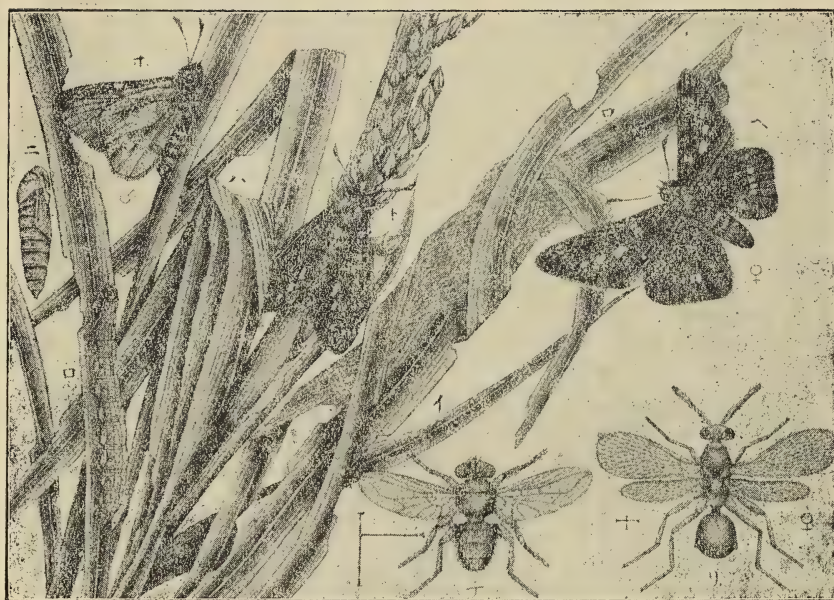
次に更に萬葉集入つたら如何なる種類の昆蟲現れるだらうか。

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄　（其四）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

稻作害蟲の一にして、成蟲は体長六、七分翅の開張一寸二分乃至一寸四分、觸角は棍棒狀をなし其先端尖りて灣曲せり。頭部には黄綠色の毛を密生し、胸部大きく亦黄綠色の軟毛（ヤワラカなる毛）あり。翅は黑褐色にして稍綠色を帶び、黄褐色の緣毛を有す。而して前翅三角形をなし普通大小八個の白点を耳狀に列ね、后翅には四個の白紋を一文字形に列ぬ、是れイチモジセセリの名ある所以にして、腹部は翅と同色を呈す。幼蟲はハマクリムシ、ハマキムシ、カジムシ、ツトムシ等の稱ありて、充分成長するときは一寸四五分に達し、淡綠色にして形紡錘狀をなす。頭は大きくして黄褐色を帶び、其兩側は黑し。背上には、綠色の縱線を有し、老熟すれば、腹脚の基部に白點を生ず。蛹は細長くして赤褐色を帶び、胸背は隆起し、末端の一節は甚だ細く先端尖れり。年三回の發生をなし、氣候適順にして溫度高く、稻の成育宜しき年柄には殊に多く發生するを以て、世人誤りて豊年蟲と呼び、驅除の必要なきもの丶如く思ふものあれども、そは大なる誤りにして、此蟲の性質を知らざるよりかゝる誤りを來せしなるべし。五六月頃羽化して、稻葉に饅頭形の卵子を一所に一粒つゝ産付し、數日を經て

（五）イチモジセセリ

イチモンジセセリ圖

（イ）卵子
（ロ）幼蟲
（ハ）稻葉を綴りたる繭
（ニ）蛹
（ホ）成蟲の雄
（ヘ）同　雌
（ト）同靜止の背面
（チ）幼蟲に寄生する寄生蠅の放大
（リ）蛹に寄生する寄生蜂の放大

孵化す。幼蟲は糸を吐き葉を綴りて其内に入り、漸次大きくなるに從ひ、數葉を綴り合せて巢となし、時々頭を出して葉を食害す。其害八九月頃に最も多く。時としては田面一体に綴り合せ、穗の出づる能はざる爲め、收穫皆無のことあり。九月頃山に入り、笹等に產卵し、幼蟲若くは蛹にて越冬し、翌年五六月頃出で、稻葉に產卵すること前の如し。而して、普通の害蟲は風通しの惡しき處に多く發生するを常とすれども之れに反し此の蟲は風通しのよき處を好むを以て、隨て風通しのよき場所に發生多し。

驅除法　大畑潰殺器を以て潰し殺すべし又は「コウジウバンバ」（飛驒地方にて用ふる器械の名）にて幼蟲を打ち殺し、後其竹櫛を以て綴られたる葉を解くべし、其他箱の一方に稻扱狀の竹櫛を裝置し、綴りたる葉を解くと共に、蟲は箱の內に入る樣の器械を以て驅殺するを良しとす。若し水の自由なる土地に於ては、折々田面の水を落して乾せはゴミムシの幼蟲は其內に入りて此の蟲を捕食するを以て、其害を免るゝことあり。陸稻の此の害にかゝることの少なきは、必竟之れが爲なり。且幼蟲、蛹等の寄生蜂及寄生蠅の爲めに斃さるもの多し。

イナゴの圖

（イ）卵塊　（ロ）卵子の放大　（ハ）幼蟲　（ニ）蛹　（ホ）成蟲の雄　（ヘ）同雌

（十八）イナゴ　稻作害蟲の一にして、成蟲は体長八分乃至一寸四分、口は咀嚼に適し頭部三角形をなす。觸角糸狀にして短かく面に三個の單眼あり。胸部の兩側には、太き黒褐の縱線を有して、胸背は平かなり。翅は綠色にして短かく、腹部の末端に達せず、前翅は細長く、平直にして稍硬化（カタクナル）し、後翅は膜質にして扇狀に疊むことを得べし。腹部第一節の側面には聽器を有す。前中肢は短かく、後肢は甚だ長くして跳躍に適し、脛節に二列に多くの刺を有す。幼蟲は其形成蟲に似て、只小なると、翅のなきとの差あるのみ。年一回の發生をなし、六月頃より幼蟲出でて稻葉を食害し、漸次成長して九月頃成蟲となり、後ち稻株又は土中に産卵す。卵は數十粒を一塊とし、膠質物を以て之れを包む、其狀恰も土塊の如し而して卵の儘越冬し、翌年六月頃孵化して苗代田に集り、稻葉を食害すること甚し。

驅除法　苗代田に於て、捕蟲器を以て掬ひ取るべし。田を鋤き起し水を入るれば、卵塊は輕きを以て皆水面に浮び、風の爲めに畦ぎわに集まるものなれば、之れを掬ひ取りて殺すべし。而して其採りたる卵及蟲

は、肥料に用ふるを良しとす。

## ◎蟲界瑣談　第二

千葉縣　齋藤啓二

(三) カマキリと木の葉蛾　カマキリが草間に潜むときは、其綠色なる躰軀は、防禦攻擊兩ながら大に便利を有すること今更云ふ迄もなし、又木の葉蛾の類が草間に靜止するときは、其形狀色彩は、敵をして眞の枯葉と誤認せしめ、以て巧みに攻擊を免るゝは實に奇妙なりと云ふべし。此のカマキリと木の葉蛾に付て、余曾て面白き一事を實見せり。一昨年十月のことなりし、或る日當り好き田地の傍に菜を栽培せる畑ありしが、折しも霜枯に食物に不足せる多くのイナゴ類は皆此菜葉上に群集し來りて加害するに至れり。然るに、此に綠色なる大カマキリの一頭あり、此の菜葉中に身を潜め、以て葉上に來るイナゴを捕獲せんと伺ひ居るに、此のカマキリの腹下に一頭の小形の木の葉蛾の靜止するあり、而かもカマキリの后肢は木の葉蛾の翅端と相磨せんとさへするに、カマキリ更に好餌の腹下にあるを知らずして、却りて遠方なるイナゴを凝視せり。木の葉蛾は此の危險の位置にあるを知るや知らずや、己れの保護色を恃み、飽迄靜止の狀を保ち居りしは、自然の作用、保護色の妙用、覺へず余をして感歎措く能はざらしめけり。

(四) ヒゲナガサヽキリの觸角に付て　螽蟖科蟲類の觸角は皆甚だ細長なれども、殊にヒゲナガサヽキリの如きは最も顯著なるものならん。即ち彼は身長僅に五六分を出ざるに、觸角の長さ三寸以上ありて身長の殆んど五倍を起ゆ。此の觸角の作用に關して面白きことあり。余嘗て昆蟲採集の際或る芝生に息ひ採品を整理しつゝありしに、傍の草中より一疋のヒゲナガサヽキリ躍ね出して余が前に靜止せり。余は乃ち之を捕へんとて、手を前方に擧ぐるや、彼は逃ばんともせず、急に其觸角を余が手の方に向けたり。其の動作の敏捷なるに覺へず注意を惹き、更に手を后方に回せしに、彼は又其觸角を后方なる余が手の方に向けたり。依りて此度は右手を前方に、左手を后方に差向けしに、彼は其の右方の觸角を前方に、左方のものを后方に向けたり。余は甚だ面白きことに思ひ、種々に試みしに、彼は每に余が向くる手の方に其觸角を向くるを常とせり。而して其距離は一尺より二尺の間に於て甚だ能く感し、其れ以上は感ぜざるものゝ如し。(とは云へこは尙大に研究を要す)是れ盖し彼が嗅感によりて、余が手に向つて警戒するなるべく、其他の物に對しても亦同樣の動作をなすならん。其觸角の甚だ細長なるは、盖し此の目的

に向つて大に有利なるを知るなり。

## ◎北米合衆國に於ける鳥類と昆蟲

在米國 近藤伊祐

昆蟲と鳥類との關係の深きは今更余の喋々を待たざる處にして、恩師名和先生は此處に意を止められ、余の名和昆蟲研究所に研究中、學友渡邊氏獵を巧みにせられしを以て氏に其必要を說かれ、氏は冬季間鳥の胃中の昆蟲に就き研究せられ大に得る所ありき。當米國にては、已に之れ等に就き專問に研究せらるゝもの乏しからざるも、未だ我日本國に於ては、專門に之れが調査をせらるゝの士あるを聞かざるは甚だ遺憾とする所なり。讀者諸君少しく之れ等に留意せられなば、農業界を利する尠少ならざるべし。余や渡米以來日未た淺く、充分の調査をなすの暇なきも、當國に於て蟲類の少なきには意外の感ありき若し一度田舍に遊ばは、何人も同樣の感を起すべし、殊に害蟲類は種類少なく、且秋に入るも蟲の鳴聲を聞かざるは、余輩蟲を友とせるものには殆んと季節を忘れしむ、斯くも蟲類の少なきは、一は未だ森林原野の開墾せられざるに基因するならんも、又一は鳥類の多きは確に其一因たらん。當米國に於て小鳥の多きは實に驚くの外なく、森林に入れば樹枝は鳥糞の爲めに多くの白斑を有するを見ても、如何に鳥類の多きかを推知するに足る。何故に斯く鳥類の多きかと言へば、人口稀薄にして獵者も小鳥を狩獲らず、政府も益鳥保護の爲めカスミ(網)等にて鳥を獲るを一切禁せられたるに因るならんも、又一つは一般の人智高く、益鳥を愛し害蟲を憎む觀念深き故ならん。今一例を擧くれば、當國のブラツクバード(黑鳥)は、農夫の畠を耕鋤する際には數百數千群をなして來集し、鋤起せし處の蟲類を喰ひ盡す有樣實に見事にして、甚だ有力なる天然の驅除者なりき。今我日本國に於て、頑迷なる農業者に害蟲驅除を勸告すれば、夫れ等の輩の多くは曰く、害蟲は千年も昔より今の通りにて、年々子を產むかは知らねどもさまで繁殖せざるを以て驅除の必要なしなど、隨分蔭にて小言を吐くもの少なからず。之れ一理なきにあらず、我國の一大害蟲たる螟蟲の如きも、昔より驅除せざるも左程增加せざるは讀者の已に知らるゝ處なり。之れ其原因一二に止まらずと雖も、敵蟲敵鳥等の在るありて自然に制裁せらるゝが故なり、然れども世の進步に供ない、生存競爭の甚だしき今日にありては、到底この自然驅除にのみ一任するを得ず、特に我日本國の如き比較的益鳥の少なき國に於ては、此の天然驅除を利用すると共に、人爲を以て充分の豫防驅除に努め、收獲を增大ならしめざるべからず、況んや一朝均衡を失せば忽ち大繁殖をなし

作物を加害すること、明治三十年の浮塵子の如き實例に乏しからざるに於ておや。然るに今日の害蟲驅除たる、自然に放任し人力を勞するを厭ひ、而して只其効果のみを云々するは誤れるの甚しきものなり加ふるに目下我國に於ては鳥類大に減少するの傾向あり、大に鑑みざるべからず、聊か感ずるの餘り、稿を草し貴誌に寄することゝなしぬ。

# 調　査

## ◎靜岡縣磐田郡產の昆蟲(五)　(神村直三郎氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

●(九五)クハハムシ(Luperus impressicollis Motsch.)三月十三日。

●(九一)バラノルリハムシ(Chryptocephalus approximatus Baly.)四月廿九日、体長一分六、七厘全体ルリ色にして圓筒形の種なり。

)クロボシハムシ(Chryptocephalus instabilis Baly)四月廿四日、体長一分八厘乃至二分四厘、赤褐色圓筒形の種にして、翅鞘に各三個つゝの黑斑あり、一名アカジクロホシといふ。

●(一〇四)フヂノハムシ(Phytodeeta rubripennis Baly.)四月十七日、体長一分七厘乃至二分、圓形なる種にして頭胸部黑く、翅は黑色にして周緣褐色を呈するを常とすれども、又全体褐色なるもあり。

●(一〇〇)アカガネハムシ(Acrothinium Gaschkewitchi, Motsch.)四月廿九日、体長二分二三厘、頭胸部深綠色にして、翅は赤ミを帶びたる金綠色を呈し光澤あり、一名キンサルハムシといふ。

●(一二三)ヤナギノハムシ(Zina 2o-punctata Soep)三月三十一日、体長二分二厘乃至三分の稍細長き種にして黃褐色を帶び、翅鞘に各十個の黑點あり

●(九七)ウリハムシ(Aulacophora femoralis Motsch)四月廿四日、一名ウリバヘといふ。

●クロウリハムシ(Aulacophora nigripennis Motsch)六月十七日、頭胸部黃褐色にして、翅鞘は黑色を帶ぶ。

●(一九二)ヨモギノヒメハムシ(Nodina chalcosoma

Baly.) 六月十二日、体長一分二三厘の小形種にして稍圓形をなし、全体青綠色なると黑味を帯びたるとあり。

●(二一八)ヤナギノトビハムシ(Graptodera sp?) 三月三十一日、体長一分六厘内外の長形種にしてルリ色を呈し、カミナリハムシに似たり。

●(二二〇)ヤナギノルリハムシ (Gynandrophthalma chrysomeloides Lacord.) 六月十七日、体長一分二厘乃至一分四厘、体形サルハムシに似たる種にして、全体ルリ色を帯び稍扁平なり。

●(二一六)ヂンガサムシ(Aspidomorpha difformis Motsch.) 五月廿日、体長二分三厘、鼈甲色にして殆んど透明なる上翅を有し、体は翅鞘の下に隠れ宛も陣笠を被りたる狀をなす、故に此の稱あり。一名ベッコウムシといふ。

●(二一五)アカザノヂンガキムシ(Cassida nebulosa L.) 七月四日、体長二分五厘、形前程に似たれども全体褐色を帯ぶ。

●(一九七)ヒゲザウムシ(Bruchus scutellaris F.) 七月八日、体長一分斗、翅鞘赤褐色を帯び、觸角櫛歯狀を呈す。

●(二一七)ミハシラムシ (Hemicera zigzaga Mors.) 五月十八日、体長一分五厘乃至二分、楕圓形の種にして、金屬性の光澤ありて美麗なり。

●(一九〇)キマハリムシ(Plesiophthalmus nigrocyaneus Mots.) 六月五日、

●(一〇三)モモブトキクスヒダマシ (Oedemera montana Mars.) 三月三十日、体長二分乃至二分三厘の細長なる種にして綠色を帯びたる黑色を呈し雄の后肢の腿節は甚だ太し。

●(一二二)キクスヒダマシ(Xanthochroa Cyanipennis Mars.) 五月七日、休長四分五厘乃至五分の細長なる種にして黃褐色を呈し、翅鞘は青く腹面及肢は黃褐色なり。

●(一二三)トビイロハムシダマシ(Cistela oculata Mars.) 五月十九日、体長一分八厘乃至二分三厘、褐色の種にして翅鞘稍穹狀をなす。

●(八五)シロザウムシ(Episomus turritus Gyll.) 五月十五日、体長五分内外、全体灰白色にして背面は稍黑味を帯ぶ、口吻太く翅鞘に數個の瘤狀突起あり。

●(一九六)コシロザウムシ(Episomus Sp?) 六月一日前種に酷似したる種にして稍小さく全体灰白色を帯び、口吻は前種より遙に細し。

●(一一七)オホザウムシ(Sipalus granulatus F.) 四月十九日、体長七分内外、(口吻を算せず) 黑褐色の大形種なり。

●(八七)マツノマダラザウムシ(Signatipennis Sp?) 四月一日、体長五分内外暗褐色の種にして、翅

鞘には黄色の斑紋あり。
●(一一一)ヒメザウムシ(Baris deplanata Roel.)四月九日、体長一分内外光澤ある黒色種なり。
●カシバザウムシ(Myllocerus griseus Roel)四月九日、一分六七厘の小形種にして、暗褐色に黒色の微細なる斑紋あり。
●(一〇八)ナシザウムシ(Anchomenus magnus B-ates.)四月七日、一名モモノチヨツキリムシといふ。
●(九九)オトシブミザウムシ(Apoderus jekelli R-oel.)腹端より頭部迄二分、口吻一分、頭胸部黒く翅は赤褐色を呈し、肢は黒色なり
●(九四)ヒメクロオトシブミ(Apoderus nitens R-oel.)七月十七日、黒色小形種にして、肢は褐色を帶ぶ。
●(一九一)コフキザウムシ(Eugnathus disti nctus Roel.)体長一分五厘乃至一分八厘の小形種にして全体青き細鱗を装ふ。
●(一九三)シラクモザウムシ(Piazomuas lewisi R-oel.)六月十九日、体長二分内外、腹部圓形の種にして暗灰色を帶ひ翅鞘の下方は灰白色の雲狀紋あり
●(一九四)ゴボウノザウムシ(Larinus griseopilos-us Roel.)二分五厘乃至三分、黒色にして白色の細毛を有し不明の斑紋をなす。
●(一九五)ブダウハマキザウムシ(Rhynchites lac-unipennis Jekel.)五月廿七日、体長一分三四厘口吻七厘内外、紫黒色の小形種にして翅鞘殆んど方形をなす。

## ◎滿洲の農業と室內害蟲

出征軍陸軍歩兵少尉　藤井二郎

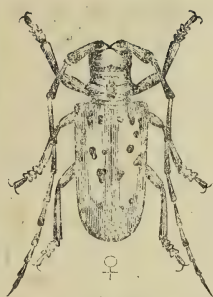
編者曰く同氏は山口縣の人にして嘗て當所に於て開設の第十一回全國害蟲驅除講習を修了し爾來熱心に斯道を研究し居られしが時局の爲め召集に應じ幾多の辛酸を甞め專心軍務に從事の傍滿洲の農業及昆蟲界を視察して大に得る處ありとて昨年十二月二十三日を以て當研究所長に宛て情況を報ぜられたれば茲に掲ぐることゝはなしぬ。

拜啓、目下冽寒の候に御座候處、先生には不相變御壯健益々御熱心に御研鑽之事と爲國家奉大賀候。私

事本春出征候爲め、愛讀致居候昆蟲世界も、留守宅より出征中御送與無之様申上候通り、國家危急存亡の秋に際し、一心軍務に從事致居候處、私等の如き平和の時期に在りて實業に從事するものは、山野を跋涉し軍務に從ふ傍ら當滿洲地方農業の狀況を親しく視察し大に得る處有之候。內地にありての考にては、とても支那人のなす仕事に於て我々を益する所無之ものと思考罷在候處、渡淸以來視察せし所によれば、隨分我農業の摸範となすべき點種々有之申候。先生の方には格別關係も無之候へ共、今其大略を列記せば、各戶自活の發達、家內の親睦、副業として養豚養鷄の盛なること、牛馬の馴致なる養成、農具、肥料、防寒の爲め家屋の構造、衣服の製法等に有之候。昆蟲類は山口縣に比し其の種類及び蟲數甚だ少く候、之は氣候一般に寒く、殊に冬季嚴寒の爲めかと存居候、併し非常に多數にして最もうるさく感ずるは蠅、南京蟲、蟲名不詳(支那人は老張蟲と稱す標本添付致置候)に有之候。先生に御通知致さんとする最も奇異なる現象は、目下氣温攝氏零點下十五度乃至三十度の時にありて、室內に在ては蠅數十羽生存し、日中は活發に運動し、用捨なく身体及び食物等に來集致し居候こと有之候。是等の事は未だ嘗て內地に於て目擊せざる次第にして、私共は可成火溫を用ゆるの惡習慣に附せざる爲め、本年は余程愼み居候、冷室に於て如此有樣に有之候間、陣中にありて執務の餘暇を得一寸御通知申上候。時候柄御用心專一に奉祈候早々

## ◎星紅天牛の被害樹と昆蟲供養會

愛知縣寶飯郡　田中周平

豫て研究中の星紅天牛の被害植物は今日漸く判然せり。そは一昨年の夏寶飯郡塩津尋常高等小學校長松尾幸次郎氏が、該成蟲はタマノキに集まる事を話されしを手掛りとして、小生研究中今年二月に至り赤坂小學校第三年生永井榮次郎なるものタマノキ(樟科の植物にて樟に似たり)を割りしに、該樹は無數に穴を穿たれ其穴に成蟲三頭蟄居せるものを其儘持來りて余に示せり、就て見るに紛ふ方なく星紅天牛の成蟲にて他年の宿望を果し甚だ愉快を覺えたり。茲に該成蟲並被害樹の一部を郵送して御高覽に供す。昨年三月春分の日、小生催主となり學校隣の正法寺に於て昆蟲供養會を執行せしが、本年亦去三月廿三日、同寺に於て小生催主となり

♀

ホシベニカミキリの圖

供養會を執行し、同院主多田了和、桂寺住職石川某御油町講堂住職高田順道の三氏にて讀經をつとめられ

次に催主は蟲供養の主意を述べ、且昆蟲世界九十一號に掲載の青柳浩次郎氏の蜜蜂の話を談じ尙名和昆蟲研究所の害蟲驅除の方針に就き逐條說明したるに一同大に感じたる所ありたり。終りに二三の害益蟲及害蟲驅除の方針を一枚刷となしたるものを各自に一枚つゝ、及佛前に供したる餅一個つゝを出席者貳百余名に配布して午後五時閉會したり。序に弊校生徒全体に冬季昆蟲採集の記を綴らせ全部取纏めの上送付すべければ御批評相成り度し。

## ◎昆蟲に關する葉書通信　（四十八報）

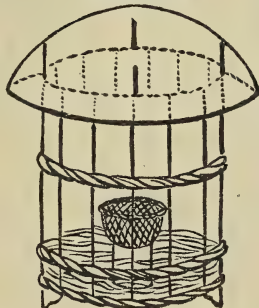
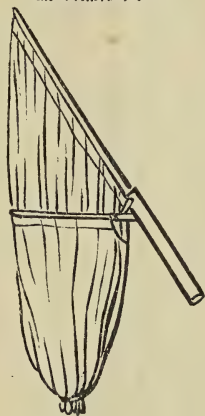
（一六七）冬季昆蟲の潜伏所を見て驚く（兵庫縣佐用郡久崎村井口宗平）　本年二月歸宅后、貴所に於て研究中に採集せし（冬季昆蟲）標本を村民に示したるに、岐阜邊は氣候温暖なればかく多數棲息するならんも、此地方の如きは皆死滅して見るべからずといふもの多し。さらば實地を見んとて、二月廿五日山野に伴ふて、草間に越冬せる浮塵子、椿糸等を目撃せしめたるに、彼等は愕然として深く覺醒せるものゝ如し。同日の採品は案外多數なりしが、今其重なる種類を擧ぐれば、石起及草分採集にて獲たるものスナムグリ類、ハチカシ類、サビキコリ類、コメツキムシ類、瓢蟲類、葉蟲類、椿糸類、歩行蟲類等。叩網採集法に獲たるものは浮塵子類、クサカゲロフモドキ類、葉蟲類、瓢蟲類等なりき。

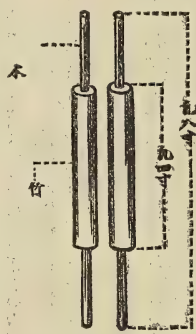
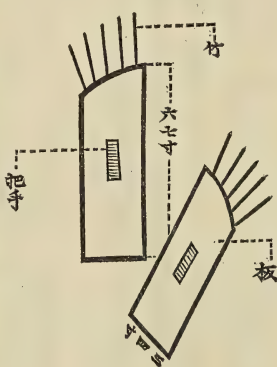
（一六八）時局と小兒（靜岡縣岡田忠男）　此頃靜岡縣伊豆國の函南村と云ふ村の一部落に、十數人の兒童が一團を作りて居たが、此一團は、今日の時局に際し遊戲を以て時日を送るを潔とせず、何か父兄の手傳をなし、又一方には國に對する心の僅なりとも報ひんと種々熟議の上、村内に於て目下（二月頃）桑園に多敵の枝尺獲棲息するを以て、之れを驅除するは一は一家桑葉の生産を高め、一は蠶兒飼育上桑葉の不足を補ひ、且つ能く兒童の手を以て成し得らるゝ業なれば、退校后此驅除をなさんと議一決し着手せんとしたるが、各々頭數を調査し置くの必要あるを以て、此尺獲を入るゝ器を要す。是等は兒童の手にて能く購求すること能はざれば、其地の有力家某氏に語る。某氏此擧に賛し、直ちに玻璃壜數十個を與ふれば、此一團の兒童は、居村桑園の尺獲を悉く驅除し、今は（三月末）隣村の桑園に及ぼし、其採集頭數數万頭に及びたり。實に此等一團の兒童が、斯の如き事を思ひ立ちて實行したるは、實に美事と云ふべし。

# ◉害蟲驅除豫防方法

本年三月三日岐阜縣告示第四十四號を以て發布せられたる害蟲驅除豫防方法左の如し

害蟲驅除豫防方法

●一螟蟲　一　稻苗代及本田（移植后七月末まで）に於て卵塊を採集し之れを益蟲保護器に入れて孵化の螟蟲を殺し寄生蜂の保護を圖るへし且成蟲は捕蟲器を以て捕殺すへし　備考　益蟲保護器は圖の如く桶に少許の水を入れ之れに數滴の石油を注ぎ中央に石又は木片等を置き其上に籠の類を載せ其中に卵塊を入れ置き凡そ十日間を經過せしめ益蟲の發生したるものは飛翔するの便を與へ又螟蟲の孚化したるものは石油を注きたる水中に墜落せしむるの裝置をなすへし但し桶の緣は籠より高きを要す且桶には笠の類を以て覆ひ風雨を防き又は螟蟲の這ひ出てさる樣注意すへし　捕蟲器は竹又は電線用の針金を曲け之れに便宜の布を以て圖の如く製し捕蟲器の緣は竹皮又は其他の材料を以て纒ひ破損し易からさるを可とす　二　稻苗代及本田に於て心枯及枯穗となりたる稻莖を根部より切取り螟蟲の蝕入せるものを打ち殺すへし　備考　枯莖の切取に便なる鎌は左圖の如く鐵線に刃金を付したるものを使用する可とす

鉤刈鎌

●二浮塵子　一　稻苗代及本田(移植后十月初旬まて)に於て捕蟲器を以て之れを掬殺し又は田面に油類を注き拂ひ落して驅殺すへし　備考　注油量は石油又は輕油を一反歩に凡一升五合を標準とすへし又墜落するものは幼蟲にして成蟲は捕蟲器(咽喉付のもの)を以て掬殺すへし注油法は油を竹筒に穴を穿ちたるもの等に入れ稻の葉に觸れさる樣一樣に滴下すへし　●三苞蟲　一　七月乃至九月の頃捲束せし稻葉を解きて幼蟲及蛹を捕殺するか又は潰殺器の類を以て潰殺し且捲束せる稻葉を解梳すへし　備考　潰殺器は左圖の如きものを製し兩手に持ちて害蟲を潰殺するか又打ち合せて之を殺し且稻葉を梳き上くへし　二　捕蟲器を以て成蟲(イチモヂセヽリ)を捕殺すへし　●螟蛉　一　稻苗代に於て捕蟲器を以て幼蟲及成蟲を掬殺し且稻葉を以て捲束したる繭の水上に浮ふものを掬ひ取り之を驅殺すへし　二　本田に於て石油輕油又は米糖を撒布し幼蟲を拂ひ落して驅殺すへし　備考　石油又は輕油は一反歩に付凡六合を又米糖は一反歩に付凡五升を標準とし撒布すべし

潰殺に使用するもの

打合せて殺し且梳き上くるもの

(未完)

●岡部子爵夫人の來所　三月廿三日岡部子爵夫人の一行は、愛國婦人會員募集の爲め當市に來られし際、當昆蟲研究所に立寄られ、親しく所内の摸樣を視、熱心に昆蟲標本を縱覽せられたり。因に岡部子爵は、今回韓國に地を求め、同地の經營に盡さるゝ由なれば、實業上の參考にもと當所發行の書は悉く取揃へ寄贈したり。

●國民後援戰事講話會　三月卅一日、圓覺派管長代理として旅順攻圍軍從軍布敎師たりし間宮英宗氏を聘し、當所に於て國民後援戰事講話會を開きしに、時節柄聽衆多く意外の盛會にして、名和所長の開會の挨拶に次て柴田隨行員は我國の歷史上外寇のことより說き起し、目下の日露戰役の摸樣、我

軍の連戰連勝の原因等を詳細に講演せられ、次に間宮禪師は、戰事に於ける殺生戒と題し、凡て何事によらず無駄なことをなすは是れ殺生戒を破るもの、換言すれば活動を妨ぐるは即ち殺生戒を破るものにして、反之無駄な事をなさず凡て活動を妨げざるば是れ殺生戒を保つものなることより說き起し、戰事に於ても作戰を誤り、無益に我が部下を多く損する如きは之れ殺生戒を破りたること、害蟲の驅除と雖も、作物に害を加ふる蟲類を驅除するは決して殺生戒を破るものに非らざることより、詳細に人生の多方面に說き及ぼして殺生戒の意義を說明し、漸次戰爭談に移りて、我兵の長所及短所を指摘し、國民の覺悟後援の必要等を縷述せらる。特に我勇士の働振り、悲慘たる戰鬪の摸樣に至りては、聽衆をして覺えず袖を絞らしめたり。

◉**堀內英力氏の消息**　堀內英力氏は〇〇軍に從ひ征露の途に上り、軍務の傍ら屢々滿州の昆蟲を採集して當所に贈られしことは、已に本誌上に於て讀者諸君も了知せらるゝことなるが、曩に某地の激戰に於て名譽の傷を負ひ、歸郷療養中此程全癒し、再び出征の途次岐阜驛に於て、忠愛婦人會員に托し當所に刺を通せられしが、愈々目的地に到着せられ紀念として山黃蝶の一種を採集して當所に贈られたり、毎度氏の熱心には實に感服の外なし。

◉**害蟲研究成績の發表**　今回靜岡縣農事試驗場は害蟲硏究成蹟第一報を發刊し、當所にも該書を贈られたれば、直ちに繙きしに、害蟲の飼育調査に關する事項、及害蟲驅除に關する事項とに別ち、前者には着色圖版六葉、其他多數の表を以て多く未だ世に發表せられざりし事項を掲け、后者には目下驅除に困難しつゝある害蟲十種に就て、驅除の成蹟を載せ、尙附錄として病害試驗の結果を記したる有益なる書なり。因に同調査は岡田忠男氏主任たりと。

◉**山崎延吉氏の書簡**　同氏は愛知縣第七課長に職を奉し、屢々同縣葉栗郡光明寺村眞理會に聘せられ、實業改良上に盡力せられし人なるが、去月十九日當所長は該眞理會へ聘せられ出演の際、同氏も亦出演せられたり。其后當所長に宛て一書を送られたるが、書中甚た面白き節あるを以て左に之を掲ぐ

謹啓、多年の宿望を果たし、葉栗郡光明寺の眞理會員の喜びは、小生の喜び程はあるまじと存候、何卒將來御懇意を願度、名刺にかへて御講話中の所感を呈し申候。（公共心なければ害蟲驅除は行はれずと思ひけるまゝ、むし〳〵と田畑の蟲は驅りされど人の心に無私はさり得じ。蟲多きむしの世なれど無私はなし蟲をされ人無私になれ人。）（害蟲驅除も益蟲保護も無智識なれば出來ずと思へば、

拔け目なき人の世なれど恐そろしき蟲を無視して大損をする。）（世の中、無視はよし無視はをそろし國民の無私を無視する今の世の中。むし〳〵と蟲聲高き世の中に無私になされぬ人心か那。）（間宮和尚と語りて（大人の難業苦行談を）、蟲〳〵と人を敎へし君の名を無私先生と人は云ふなり。てんと蟲氣もつけざりし國民を敎へし人の名和無私となん）敢て斯る妙なとを誰れ彼れ撰ばす申す男と將來思召被下度候早々不一。山崎延吉　　名和大人

## ◉三宅幸三氏の信書

岐阜縣惠那郡串原村三宅幸三氏は、本月六日同村害蟲驅除協議の爲め該協議會へ臨席し、豫定時間に開會に至らず、無聊の余り左の三首を草せりとて、當所への信書の端に記しあれば茲に錄す。

人々や皆諸共に蟲取れよ皇軍人に心等しく。
一十二十八三七百六十百二六四十〇四三一九三一十二九九六一十四九

快よやはふ蟲學び湧くてふと迷ひし人に道さとしなば
九九六四八八二六四万七一八九兆十万四一四一十二三千三十四七八

稻蟲や災もなく國富ん苗代驅除にとく注意せば
一七六四八八三八一百七九九二十万七八四六九千四二十九十二五千八

## ◉害蟲驅除豫防費支出

第二豫備金より支出する害蟲驅除豫防督勵費は、從來各府縣より害蟲發生の情況を農商務省に報告すると同時に其督勵費を請求し來るの例なりしが、斯くては其驅除及び豫防の時機を失し、之れが爲め被害を大ならしむること往々之れあるを以て、農商務省にては是等報告の有無に拘はらず、前年度の通り豫防費の支出方を大藏省と交涉中なりしが、大藏省に於ても之れに同意し、第二豫備金より七萬圓を支出することゝなりたりと云ふ。尙ほ本年は既に各府縣に於て害蟲發生の摸樣あるを以て農商務省にては成るべく發生の初期に於て之を驅除若くは豫防し以て遺策なからしめんとの方針にて、近々各府縣に技師及技手を派遣し、大に之れが督勵をなす筈なりと云ふ

## ◉山名村の害蟲驅除

愛知縣丹羽郡山名村は有名の養蠶地なるが、昨今桑の害蟲枝尺蠖は冬季の潛伏所を出て、桑の發芽を害する甚しきを以て、驅除法として村費を以て買上ぐる事に決し、最初は百匹一錢、目下八厘にて買收しつゝあるが、着手后一週間許りにて尺蠖は石油の空罐二箱に充滿し、之が買收費三十餘圓を支出し村內の桑樹害蟲は大畧驅除したり、而して此利益概算千圓位ならんと云ふ。因に本年枝尺蠖の多きは啻に山名村に限らず、一般に餘程多きが如し、此程當所長は研究生と共に岐阜市附近の桑園にて約一時間の採集に一人平均二百頭以上の尺蠖を獲たり。宜しく注意して早く驅除せざれば意外の損害を蒙らん。

## ◉特別研究生の入退

特別研究生として入所せられたる三重縣野田彌一郞氏は、目的の一ヶ月

間の研究を終へ本年一月三十一日、兵庫縣井口宗平氏は同一ヶ月の研究を了へ二月四日、愛媛縣清水守三郎氏は七十一日間研究の上二月十六日、三重縣北山辰三氏は五十一日間研究の上三月四日何れも退所せられ、又愛媛縣加藤政一氏は最初二ヶ月豫定にて本年一月卅一日入所せられしも、尚今後六ヶ月研究することゝし、愛媛縣長尾欽次郎氏は一ヶ月半の豫定にて三月六日入所、沖繩縣技手前田休太郎氏は一ヶ月の豫定にて三月廿七日入所せられたり。故に目下研究中のもの五名にて。其外申込者數名あり。因に目下千蟲萬豸潜所を出で飛揚するの時期に向ひ、加ふるに名和梅吉氏歸朝以來漸次整頓しければ、研究者には大に好都合なるべし。

◉戰捷紀念として昆蟲世界を贈る　當所は曩に中田久子孃及忠愛婦人會に依頼し、當所發行の昆蟲世界四千部を傷病兵に頒ちしが、今回又更に奉天附近の戰捷紀念の爲め、同誌を傷病兵に頒ち聊か艱苦の萬一を慰め度心組を以て、五百部を忠愛婦人會に送り其取扱方を依頼したり。

◉害蟲驅除講習會　第三回岐阜縣長期害蟲驅除講習會は本月五日より、第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習會は本月十一日より何れも目下開會中なるが、詳細は次號に報告すべし。

◉岐阜縣昆蟲學會第七十六回月次會記事　同會は本月一日午后一時より當昆蟲研究所樓上に於て開會し、先づ名和副會頭開會の辭に次で、第一席沖繩縣技手前田休太郎氏は、沖繩縣下に於ける害蟲と題して沖繩縣の地理氣候風土より說き起し、同縣害蟲の種類經過の內地と異なる點より、引て驅除豫防の方法を說明せられ、第二席愛媛縣長尾欽次郎氏は、愛媛縣稻作害蟲の種類と題して縣下越智郡地方の稻作害蟲の種類、其習性經過の大畧より之れが驅除豫防法に就き實驗の結果を述べられ、第三席當昆蟲研究所調査主任名和梅吉氏は、米國害蟲視察談と題し米國有用植物に加害する昆蟲の種類に就て、氏が視察の結果を詳しく報告せられ、第四席名和副會頭は武儀郡地方の害蟲驅除視察談を詳說せられ、後一同茶話會に移り午後五時無事閉會したり。

◉水曜昆蟲談話會記事　當所內に於て每週水曜日夜間開會の同會は相變らず盛會なるが、前號報告後に於ける談話の要領を擧ぐれば左の如し。

◉名和梅吉氏は米國聖路易に於ける博覽會の狀況、並に渡米中に於ける害蟲視察談、及び蚜蟲の研究法に就て說明せられ◉名和正氏は夜盜蟲驅除豫防の一方法としてコールタール合劑の簡單有効なる製法より、驅除の効果等に就て氏の實驗談あり◉名和愛吉氏は稻

の螟蟲に就き昨年本巣郡船木村の郷里に於て、多方面より觀察したる有益なる視察談あり●石田和三郎氏は昆蟲雜話と題し各雜誌に掲げたる二化生螟蟲の最も簡單有効なる驅除法を照會せられ●谷貞子氏はクダマキモドキの卵子解剖に就て、氏か卵中の幼蟲を觀察せられしに十二關節より成り、其の色は黄色にして頭部は恰も鱗翅類の幼蟲に類似せりさて、其の詳細を説明せらる●馬淵治郎氏は十數種のサシガメムシに就て、觸角及び前肢の比較研究談あり●穗岐山巖氏はアリモドキガメムシとトビイロモモブトガメムシとの比較及びガメムシ數十種に就て詳細なる觸角の比較、及びイ子ガメムシ、アヅキガメムシの各特徴を説明し●加藤政一氏は冬季桑園に於て枯葉の中に潜める昆蟲調査中、別に取調べたる僅か二十枚の枯葉中に、エダシヤクトリ五頭、クワケムシ三頭、スキムシ二其の他の昆蟲五種を得たりさて標本を示し、尙ほ蠶に寄生する蛆の驅除豫防、及びムネアカゴミムシ、セグロゴミムシ等に就て外部の研究を報告せられ●北山長三氏は、蔬菜害蟲サルハムシの驅除實驗談あり●其の他長尾欽二郎氏はルリカミキリ及びリンゴカミキリの梨樹を害する有樣、其の發生時期より驅除法等の實驗談ありたり。

## ●近刊雜誌中の昆蟲記事短評（其二） 石田鼓蟲生

各近刊雜誌中の昆蟲記事は可成毎號餘白の許す限り掲載し且記事の連續したるものは完結の上に於て紹介すべければ幸に之を諒せよ

●鳥取縣農會報第九十八號寄書欄に於て、麥の奬勵及泥蟲驅除法と題し、同縣西伯郡の人鹿野熊太郎氏曰く、濕氣多き土地にては、キリウジカガンボなる害蟲の爲め非常に麥作を害せらるゝ事あり、其豫防法としては、麥種を水に浸し、笊に上げて水を切り、桶に移して適宜の石灰を混し、充分攪拌して石灰の附着せるものを蒔き、上より堆肥を以て覆ひ置く時は害なしと、鼓蟲生は未だ實驗せざるを以て其良否を知らず。

●信濃博物學雜誌第十三號、及愛媛縣農會報第六十九號雜報欄に、米國天文學者ランデ氏は、食前必ず庭園に赴き、芋蟲を捕へ來り食して曰く、蜘蛛の如きは胡桃の味あり、芋蟲の或る者は牡丹杏の味あり、而して金龜子蟲は粉にしてそつぶに入るゝ時は妙味云ふべからず、而して、近日貴婦人紳士を無血蟲のみよりなる料理にて招待せんさて、大に其營養分に富めるを論じ、近日中に一書を發表する旨の記事ありたり。先年昆蟲翁が、某教育大會席上に於て、蟲料理の献立を話してさへも、宴會の贊成者を減じたる事實に對し、米國貴婦人紳士は、果して之に應ずるの勇ありや否や。

●理學界第二卷第六號説話中に、岐阜縣高等女學校教諭糟谷美一氏は、我忠勇なる幾十萬の貔貅が遼東の野に進んで、數日の行軍、十數時間の戰闘に疲れたる陣營の夢を妨ぐるのみならず、皮膚に惡傷を起して大に苦しむるものは床虱の害なりさて、其習性形狀被害の有樣等を詳説せらる。今や之を驅除するの好時季なれば、滿洲軍は敵以外の强敵を驅除しつゝありと云へば、近き將來に於て其効を奏するの時期あらん。

●養蜂雜誌第三號に「蜜蜂の凍死と餓死に就き」と題する青柳浩次郎氏の説。米國シユー、エス、バービリン氏の述を花間散史の抄譯したる「蜜蜂の痢疾に就て」と題する記事。及加藤今一郎氏の「蜂蜜收得に關する要件」等、一讀參考に資するの價値あり。同誌第四號論説欄には、昆蟲世界九十號講話欄に記載しある者と同一の青柳浩次郎氏の講話筆記、及び米國ウイリアム、エー、セルサー氏の蜜蜂に就

てゝ爾して、北米合衆國ワシントン府農務省化學局にては、贋造蜂蜜を防がん爲蜂蜜の定義を作りて、蜂蜜は花より集められたる精にして蜜蜂の巣房中に生じたるものに限るべき事を布告せられたり、云々の投稿。其他有益なる記事あるも、本誌に圖版の挿入なきは何となく寂寥の感あり。

●博物學雜誌第五十三號雜錄中に、仁部富之助氏の秋田縣地方の昆蟲方言の記事あり。

●博物學雜誌第五卷第五十四號には、博物思想涵養の目的にて、動物標本社の懸賞募集に掛る小說中、三等賞の撰に當りし白露氏の女の御國と題して、蟻の習性經過及社會的生活の有樣を綴りたるもの、及び石山生の亡國の民と題して、蟻の性質を記したる短篇小說を掲げられたり。

●岡山縣農會第六十七號、石川縣農會第三十六號に、農商務省農事試驗場報告第三十號にて發表せられたる、油類の浮塵子驅除効力試驗成蹟表、及岡山縣下の螟蟲卵塊査定表等あり。

●福岡縣農會報第六十八號雜報中、明治三十七年度、同縣各郡にて驅除したる螟蟲驅除成蹟表あり。

●京都府農會第百五十號の郡町村農會記事に、各郡農會より害蟲驅除に關する報告あり。就て之を見るに、竹野郡外二三郡を除くの外、孰れも熱心に螟蟲及浮塵子驅除の實行に勉めたるが、螟卵採集の如きは多くは小學生徒を利用する傾きあり、浮塵子驅除に要せし一反歩の注油量は、大低壹升以上貳升迄にして、其油の種類は、鯨油、輕油、石油等なるか、兎に角軍國の農民として、昨三十七年度に修めたる結果の偉大なるを感ずると共に、其局に當る人の熱心思ふべきなり。

●動物學雜誌第十六卷第百九十四號論說欄に、中川久知氏の熊本に於ける昆蟲の觀察二三と題し、昆蟲世界第八十八號に記載したるものと同樣の記事あり。又同誌卷尾に、日本產蜻蛉三種の着色圖あり。

●岐阜縣農會第四十三號寄書欄、外數種の雜誌には、養蜂協會より出したる、軍國の農家に告ぐと題したる記事あるが、そは蜜蜂が農家の副業として最も有利なるものなれば、之を奬勵して軍費の充實を計らざるべからずと云ふにあり、尙本誌外各地農會報に同樣の記事あれども畧す。

●新潟縣農會報第十二號雜錄中に於て、同縣南蒲原郡巡回教師伊藤實一氏は、螟蟲の發生盛にして稻莖甚しき蝕害を受け、驅除に困難なる場合に、稻莖を土際より刈取り、根際に蟄在の螟蟲を盡殺して新芽を發生せしむる時は收量、及驅除の一方策として如何なる効を奏するやを試驗し、又螟蟲か老熟せざれば越年する事能はざるや否やを撿定せられて、其結果を報ぜられたるか、該試驗に就き氏に問はんと欲する處は、前者にありては稻莖、刈取當時一般の稻の伸工合如何と、後者にありては第一齡より五齡迄の幼蟲を見別くる方法且蝕害中の螟蟲は、稻を刈り取れば其莖をば食せざるものなるや、之れ余の疑の存在する所なり。又同縣農事試驗場員蟲生氏は、金龜子蟲の幼蟲及夜盜蟲の驅除法にタール及除蟲菊粉の有効を說き、其使用法を說明せらる、其効果の如何は當所研究の上紹介するの時あらん。又氏は、螟蟲卵蜂の事に就て簡單に述べられたり。

●青年農會報第九十六號及九十七號の講壇欄内に、蚜蟲に就てと題して、東京駒場亞麻生氏の蚜蟲の種類、其習性經過より、柑橘の煤病及蟻との關係、之に對するフルマス氏の實驗及防除方法等を七頁に渡り講說せらる。

●德島縣農會報第二十三號寄書欄には、西ヶ原農事試驗場内岩本光五郎氏が、小貫農學士の監督の許に、二化生螟蟲か幼蟲の態にて藁の內に越冬し、翌年に至り幾割位羽化するものなるか、其經過中如何なる時期に尤も多く斃死するものなるや、又其羽化したる蛾類が產卵して繁殖し、再び越冬に至る迄の加害の割合等に就き、試驗の結果を報告せらる。

●滋賀縣農會報第三十三號郡市町村農會記事中に、高島郡及栗太郡の螟蟲驅除の成蹟表を掲げらる。

●果樹第二十二號雜報欄には、介殼蟲と赤壁蝨の驅除に就て、簡單にして普通農家にも使用し得べきものは、煙草の浸液、除蟲菊粉の溶液、及松脂曹達液の三種なりとて、其製法及使用法を掲げらる。其有効の有無は、當所實驗の上紹介するの時期あらん。

●良友雜誌第五十四號に、愛知縣田中周平氏は、忠勇なる我帝國軍人が蝨の爲に困難せらるゝと聞き、之が驅除法としてひのし使用驅除を建策せられたるが、戰地にては忽ち之れが策を入れ、土工作業用の方匙を火のし代用として驅除を施行せしに、其結果大に良好なりとの出征軍人よりの通信を掲げらる。蝨の驅除法は是迄楠公の十八番たる熱湯の計を用ひ來りしが、之に換ゆるに火熨の計は戰地の驅除としては妙案之れにこゆるものなからん。

●土佐蠶絲時報第三十六號講話欄には、桑樹害蟲驅除法と題し、高知縣農學校教諭武內讓文氏は、昨年一月より桑樹害蟲十數種に就き、其習性經過より、之れに對する外界の制裁、及驅除豫防に關する實驗談を、十七回の長きに渡りて解說せられ、愈本號を以て完結せられたるは氏の蠶業界に盡したる偉大なりと云ふべし。

●大日本農會報第二八一號懸賞募集稻螟蟲防除方法欄に、群馬縣青木周太郎氏の三等賞を得られたる螟蟲驅除法は、苗代田にて採卵點火誘殺苗撰み等をは必ず實行せしめ、本田の枯莖、枯穗の切り取りは發生甚しき地方に於て實行せしめ、又收穫後には刈株、及藁の處分を必す實行すべしとて、其方法を說明せられたるが、該蟲生の見る所にては、余り拔んでたる說とも思はれねど、或は此普通の方法が却而突飛なる方法に優れる事多からん乎。尙本號には、昆蟲世界誌上に記載しある中川久知氏の寄生蜂の記事、及び昆蟲世界第九十號短評中に紹介せし、前田氏の浮塵子と氣候の關係と題する記事あり。

●同誌第二八二號懸賞稻螟蟲防除方法欄には、三等賞の撰に當りたる新潟縣人長谷川秀太郎氏と、松田紋三郎氏の驅除法と、群馬縣の小林傳四郎氏の驅除豫防法あり、而して長谷川氏は、二化生螟蟲第二期の幼蟲蛹化の時期に、藁稈を出でゝ藁と藁の間に蛹化するが故に、五月中旬頃鳩に積み置きたる藁束を解き打振る時は、藁十貫に對して四百乃至千頭以上の蛹幼蟲を捕獲するを以て、一人にて一日五十貫以上二百貫を打振り、之に對する二萬頭內外の螟蟲を捕殺すべければ非常なる効力ありとなし、松田氏も之れと大同小異の說にして、只異なる点は蛹及、幼蟲を採るに藁すぐりをなさしめ、其屑の如きは牛馬の敷料、其他適宜に處分し、純良なる藁中

に殘存の虞れあるものは、杵にて搗き貯藏すべし云々の注意あり。又小林氏の說は、實驗よりは寧ろ理想を以て滿され、一讀氏の理想界の人たるを想像するに余りあり 審査員の報告中に、當撰者と雖も間々理想に走り實行普及の点疑なきにあられども云々とあるは或は意の此邊に存するに非らざるか。然しながら小林氏其人は實驗に乏しきの人にあらず、此理想を以て實驗に當らば得る所多からん。又本誌論說欄には、稻を害する彈尾類と題して、小貫信太郎氏が三重縣安藝郡白子町附近稻田に發生したるイ子ジノミ、イ子トビムシの形体を記載し、續て彈尾目三亞目に就き大略を說明したる學說は一讀の價あり、豉蟲生は未だ此の種の蟲類が稻作に何程の害を與ふるかを知らず、宜しく研究を要す。又同誌質問應答欄に、上田農學士が梨の樹皮に瘤狀を呈し居る標本を以て、直翅類の蟬類が產卵管を以て樹皮を穿ち產卵せしものなりとの御答は、現品を見ざれば判斷し難きも大に疑なき能はず、又活字の誤もある樣に見受けたり。

●蠶業の燈第八十九號、及蠶業新報第四十二號以下の論說欄には、農學博士大森順造氏の膿蠶の病原槪論と題して、膿蠶病に就て由來學者の說として蠶體生理作用の異常不適當なる飼育より起るとなす者、及び動植物の寄生より發する者なりと成す者の二派に別れ佐々木理學博士等の如きは前說を唱ふるも、余及宮原學士の如きは後說を主張するものなりとて、實驗の結果を論據として、其理由を說明せられたる有益の記事なり。

●高知縣農會報第四十號論說欄に、筑台野老と稱する人の柑橘の栽培に就てと題する記事中、柑橘害蟲の重なるものはズイ蟲、避債蟲、烏蠋。天牛蟲なりとて驅除法を示せし中に、最も害の恐るべき天牛か重なる害蟲の中に記しありながら、驅除法のなきは不審議なりと能く〳〵見れば、ズイ蟲と稱するは天牛の幼蟲鐵砲蟲にして、成蟲の天牛と全く別物にして記載したれば、扨こそ天牛が如何なる所で何程の害をする者なりやの說明に苦みたる結果、其驅除法も泣寢入りとせられたるが如し。受賣販賣の効能も茲に至て三文の價値なし。

●愛知縣農會會報第八十號抄錄欄內には、本年の螟蟲驅除要法と題して、小貫信太郎氏の螟蟲驅除法を抄錄して、左の項目に分ち解說せらる。

（一）藁を一所に集めて諸所に散在せしめず　（二）藁稼（わらにを）附近藁の貯藏物に誘蛾燈を設け蛾を誘殺す　（三）藁搔をなす事
（四）苗代は人家附近を距れて設くべし　（五）共同苗代を最も可とする事　（六）苗を遲く植ゆる事　（七）二毛作は皆株切を行ふ事
（八）一作地及深田に於ては早く春耕する事

●**昆蟲標本陳列舘參觀人員**　去る三月中に於ける、當所常設の昆蟲標本陳列舘を參觀せし總人員は一萬七千七百二十八人にして、一日平均六百五十六人强に當り、內尤も多かりしは廿一日に於ける四千九百七十八人、最も少なかりしは十六日に於ける三十一人なり

ツマグロヨコバヒの圖

第貳版圖

(イ)卵塊の放大
(ロ)卵子の放大
(ハ)二眠起の幼蟲放大
(ニ)四眠起の幼蟲放大
(ホ)蛹の放大
(ヘ)成蟲の雄放大
(ト)同雌の放大
(チ)加害の有樣
(リ)被害又は産卵の爲め變色せし有樣
(ヌ)卵の寄生蜂放大

# 昆蟲世界

第九卷第九拾貳號

(明治三十八年四月十五日發行)　(毎月一回十五日發行)


## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題(但季は夏の事)　南山君選

▲短歌　昆蟲亂題(但季は夏の事)　潮音君選

▲俳句　瓢蟲十句(五月五日占切)　華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

## ◉武田工學士考案　圖案用昆蟲標本廣告

此圖案用昆蟲標本は京都高等工藝學校教授工學士武田吾一氏の考案によりしものにて蟲の種類により大中小の三種に分ち桐箱に表裏の二面を硝子となし其中に適宜の昆蟲を固定したるものなり故に表面より見るには勿論腹面を見んとするにも蟲を取出す要なければ直接標本に手を觸れざるを以てこれを損することも少なし而して各種學校の實物寫生並に教授用標本として適當なるのみならず工藝上の參考に資すべき點多ければ圖案用として殊に工藝學校等には必要欠くべからざる好標本なり

名和昆蟲研究所

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

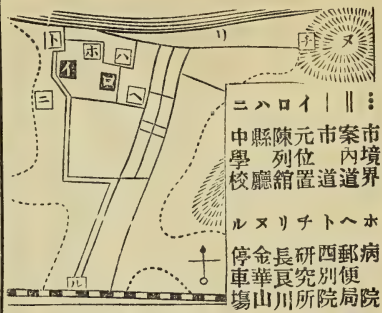
名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第七十七回月次會(五月六日)　第八十一回月次會(九月二日)

第七十八回月次會(六月三日)　第八十二回月次會(十月七日)

第七十九回月次會(七月一日)　第八十三回月次會(十一月四日)

第八十回月次會(八月五日)　第八十四回月次會(十二月二日)

---

イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　チ　リ　ヌ　ル

：市境界　‖案內道　｜市道　イ元位置　ロ陳列館　ハ縣廳　ニ中學校

ホ病院　ヘ郵便局　ト西別院　チ研究所　リ長良川　ヌ金華山　ル停車場

## ◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所は從來上圖の如く(イ)の位置にありしが今回當市公園内即ち(チ)の位置に移轉せり又常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)は從前の通り岐阜縣物產館構内にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

(注意)本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵劵代用は五厘切手にて壹割増とす

◉廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす


明治三十八年四月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二(岐阜市公園内)　名和昆蟲研究所

發行者　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二　名和梅吉

編輯者　同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戶　小森省作

印刷者　同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二　河田貞次郎

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] MAY. 15TH, 1905. [No.5.

# 昆蟲世界

第九卷第五冊　明治三十八年五月十五日發行　第九拾參號

## 目次（禁轉載）



（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

# 本所移轉擴張寄附金品領收廣告（第十二回）

一金五拾錢也　佐賀縣杵島郡佐留志村　江頭和太郎君
一金貳圓也　沖繩縣技手　前田休太郎君
一金壹圓也　岐阜縣大野郡丹生川村　田中利平君
一金壹圓也　宮崎縣南那珂郡細田村　竹井繁滿君
一金五拾錢也　愛知縣中島郡稻澤高等小學校生徒諸君
一金五拾錢也　愛知縣知多郡龜崎町　山田周子君
一金壹圓也　愛知縣立高等女學校教諭　近藤光治君
一金參圓也　愛知縣立高等女學校　生徒諸君
一金參圓拾錢也　岐阜縣八幡警察署詰巡査　塚本富吉君
岐阜縣付知分署詰巡査　都竹重太郎君
岐阜縣大垣警察署詰巡査　丹羽喜代松君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　堀江森三郎君
同　金子德藏君
同　長谷川仁三郎君
岐阜縣大垣警察署詰巡査　近藤威雄君
岐阜縣岩村分署詰巡査　白荻福松君
岐阜縣高田警察署詰巡査　太田利平君
岐阜縣多治見分署詰巡査　加藤直三郎君
岐阜縣太田警察署詰巡査　小林兼吉君
岐阜縣高富警察署詰巡査　村田淺次郎君
岐阜縣太田警察署詰巡査　三輪增兵衛君
岐阜縣揖斐警察署詰巡査　喜田良作君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　白木七十郎君
岐阜縣大井分署詰巡査　山田龜次郎君
岐阜縣大垣警察署詰巡査　井上富彌君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　木澤外太郎君
岐阜縣土岐津警察署詰巡査　小川哲二君
同　柴田源太郎君
岐阜縣上有知分署詰巡査　佐曾利國三郎君
岐阜縣池田分署詰巡査　二木八代吉君
岐阜縣御嵩警察署詰巡査　岩田俊三君
岐阜縣金山分署詰巡査　山田與三郎君
岐阜縣關警察署詰巡査　松浦金四郎君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査　石原新五郎君
同　木村奥左衛門君
岐阜縣大垣警察署詰巡査　中村助吉君
同　田村梅三郎君
岐阜縣岩村分署詰巡査　坪井貞次郎君
岐阜縣中津警察署詰巡査　松谷菊次郎君

小計拾貳圓六拾錢也
累計金九百貳圓貳拾六錢也

右御寄附相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十八年四月十二日　名和昆蟲研究所



## ◉購讀者諸君へ謹告

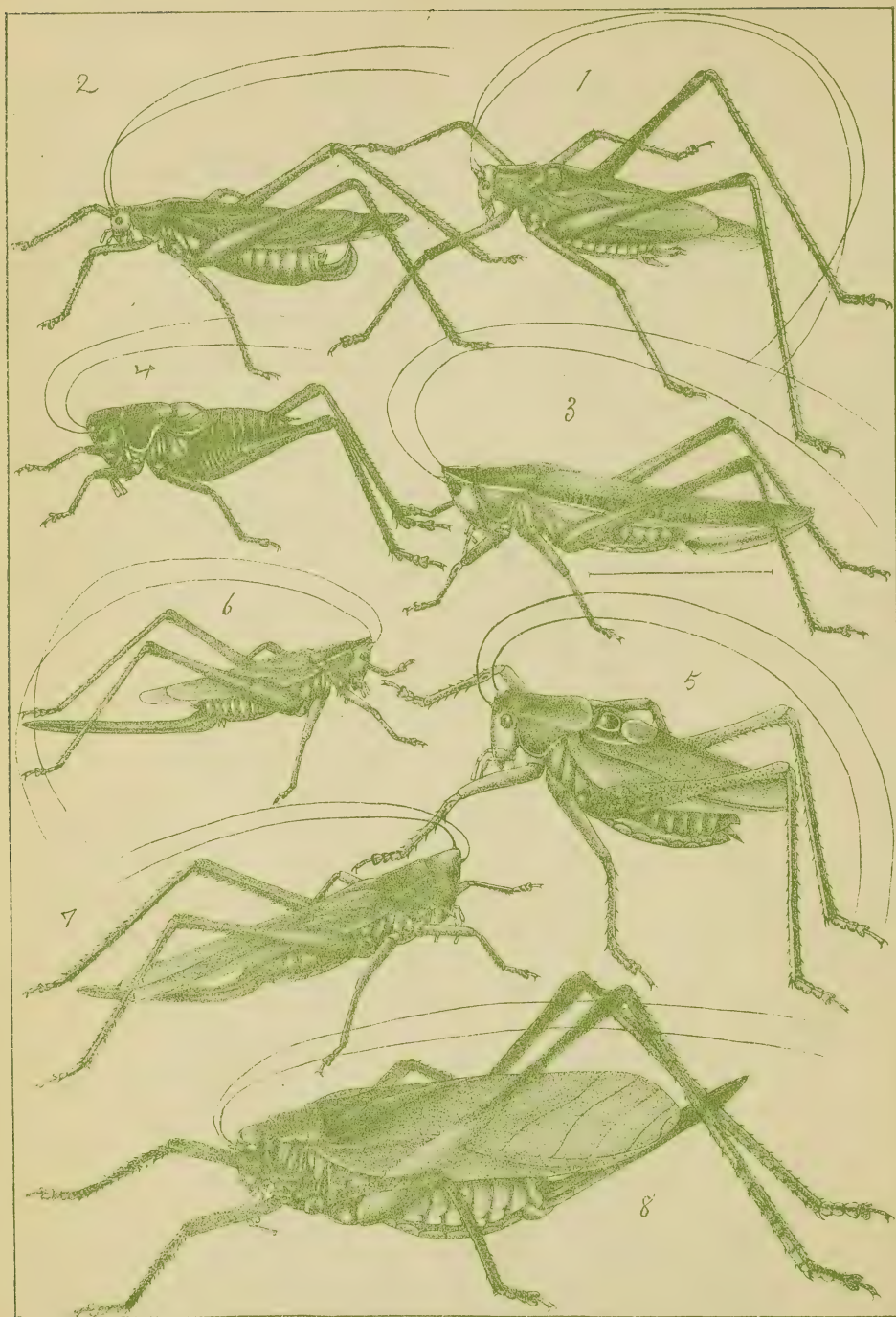
本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市公園内
名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

## ◉昆蟲學特別研究生募集

今回數十名の特別研究生を募集し特に此際何時にても隨意入所を許す、規則書入用の向は往復葉書にて至急照會あれ直に送致すべし

螽斯類八種

# 論説

## ◎韓國に於ける農業と害蟲驅除

韓國は一葦帶水を隔てて我國と相隣り、三面海を環せる半島國にして、廣袤壹萬四千餘方里、人口千二百萬を算す。氣候風土我國と大差なく、耕地百萬町歩の上に出で、六大江は國內を縱橫に貫流して灌漑運輸の便を與へ、山には幾多の鑛物を藏し、海には漁獵の利乏しからず、實に一國の要素備はれりと云ふべし。由來我國は韓國と唇齒の關係を有し、彼我の交通は遠く古に胚胎して近時漸次頻繁となり、韓國貿易の半以上は實に我國との貿易額なり。而して韓國は純然たる農業國にして、輸出品全額の九割以上は農業上の生產物に採り、穀菽は其重要品たるに拘らず、農法甚だ疎放にして、水田は殆んど一毛作にて二毛作をなすは極めて稀なり。國內を交通する大小の河川ありと雖も之れを利用するの方法を講するなく、農業上の施設殆んど人意を加へたるものなし。況や樹植の道を講じ、水源の涵養を圖る如きに於てをや。故に旱魃の爲め、收穫皆無の悲境に陷ること往々にして珍らしからず、假令天候順を得て豊作と稱する年柄なるも、農法の疎放なる施肥其他の幼稚なる爲め、我國平年作の半に過ぎざるの有樣なりと。是れ實に施政の紊亂より、民に改良增收の心なく、只口糊を凌ぐを以て足れりとなすの現情に徵すれば無理ならぬことなるも、此天與の豊地を有しながら、寶山空手に等しきは實に惜むべきことなら

ずや。日露開戰以來、我國の威信は彼土の上下を動かし、本邦在韓人の數頓に增加し、今や各般の事業は多く本邦人の手に劃策せられ、着々施政の改善を圖るの秋に當り、韓國の國是たる農業上の改良を促すは本邦人の任務にあらずや。我國の人口年々四拾萬以上を增加するは統計の示す處にして、農民の割合に耕地の少きに過ぐるは明なる事實なれば、此際多く彼土に農民を移殖し、該農事改良の端緒を開き能く之れが指導啓發を圖るは啻に韓國農民の幸福なるのみならず、又彼の勞働を售るの目的を以て、千里の波濤を超へ甚しく人情風土を異にせる遠き海外に移住するに比すれば、我國民の利益亦尠少にあらざるべし。抑韓國農業上改善を加ふべき點二、三に止らずと雖も、茲に最も注意を促すは害蟲の防除是なり。見よ我國は農法の進步見るべきもの尠からずと雖も、害蟲の驅防に至りては未だ幼稚の域を脱せず、從て遠く海外に渡航し、廣く地を開き、將に其收穫を見んとするに當り往々失敗に歸し、嘆聲を漏すもの尠からず、是れ必竟害蟲を輕視するの結果にして、特に果樹類の如き永年の收利を期するものに於て甚しとす、豈に恐れざるべけんや。韓民は我國の半作を以て已に豐年を謠ふ程なれば、害蟲の如何は更に意に介せざるを以て常に棲息せざる如き感あるも我國と氣候殆んど相似て作物亦相等しきより推せば、之れに伴ふ害蟲も亦我國と同種のもの多かるべし。是れ啻に想像に留まらず、彼地より送られたる蟲類を見ても明かなり。只其被害の程度如何は未だ知るに由なきも、口糊を凌ぐを以て足れりとなす韓民の眼に映せさるは素より其所なり、然れども幾多害蟲の分布し居る以上は年々其被害を免れざるべく、假令目下に於て蟲害尠しとするも、今後作物の改良に伴ひ、害蟲の繁殖旺盛となるは從來の實蹟に徵して明なれば、韓國農事の改善を圖るを以て任務とする我國民は、豫め其害蟲の種屬を調査して、驅除豫防の道を講ずるも亦我國民の責務となし、朝に韓國農業の改善を圖り、夕に害蟲の防除を講じ以

て圓滿なる發達を圖るべし、寧ろ害蟲の防除は農業上重要なる一要素にして、之れを行はざれば農事の改良は圖るべからざるものと覺悟すべし。然れば即ち韓國に於ける害蟲の調査をなすは今日の急務たるに拘らず、未だ着手せしものあるを聞かざるは甚遺憾の至なり。願くは同志の士、一日も早く彼地に渡りて、之れが調査を遂げられんことを切望に堪へざるなり。

# 學說

## ◎柳川に於る螟蟲卵寄生蜂利用の試驗

農商務省農事試驗場九州支場　中川久知

筑後國山門郡中山村に、柳川舊藩主伯爵立花寛治君の農事試驗場ありて、明治十九年以來、其試驗の成績により同地方の農事に改良進歩を促したることは、農界に於て普く知る所なり。余は明治十三年巳來伯と相知るを以て、昨年來屢々同氏の邸を訪ひ、害蟲驅除豫防の話を交換せし末、終に本年は同伯の試驗田に於て左の試驗を施行する事とし、捨苗代の場所も已に撰定を了りたり。依て世人の參考の爲め、其設計書及理由を左に記して本誌に寄することゝせり。

### 捨苗代兼寄生蜂繁殖試驗

(目的及理由)螟蟲の性たる、長大なる苗を撰みて產卵するものなるを以て、本田の中央に捨苗代を設けて稗を播下し、挿秧後に至るも七月中旬まで存續し、茲に一個の誘蛾燈を設置し、毎夜點火するときは

寄生蜂は其宿主たる卵塊彌々多ければ其繁殖彌々盛にして、又苗代期長ければ繁殖の代數増加し、頗る多數の蜂を生ずるものなり。熊本地方の如き、五月一日頃播種の苗代に於て、六月下旬に至れば二化性螟蟲卵の七割を斃すに至り、此間世代を經ること凡四代なりとす。（一代中卵期より羽化まで一週間にして、羽化すれば直ちに雌雄交尾し即日宿主に産卵す）故に苗代を七月中旬まで存續するときは善く七八代の繁殖を遂げ、苗代內の二化性螟蟲は殆んど八九割を斃死せしむるに至らん。其上此捨苗代地は本田の中央に位するを以て、其內に繁殖したる寄生蜂は四隣に擴散し、本田に産附したる螟蟲卵を斃死せしむる事頗る多き理なり。

以上の理由により本試驗を施行し、天然驅除の効果を見んとす。

（設計）前文の理由と目的とにより、試驗方法を設計すること左の如し。

一、本田一町歩に對し、其中央に十坪の捨苗代を設け、其中に誘蛾燈一個を置く。

二、右の苗代には稗を下種す、其量は一坪一合五勺蒔とし、五月一日に播下す。（當時水なければ乾土に下種し置く）

三、誘蛾燈の點火は、五月十五日頃より七月十五日頃までとす。

四、捨苗代産付の螟蟲卵は調査用の外摘採せず。

但し一週日毎に卵數を計へ、帳簿に記入す。（卵數を計ゆる際竹杭を卵の所在に建つるを便とす）

五、五月廿日より十日毎に十塊宛採卵し、（二化）寄生蜂に罹りたる部合を調査す。

六、捨苗代は七月十五日に撤去し、苗は肥桶に投じ腐敗せしむべし。

螟蟲の産卵するもの頗る多かるべし。

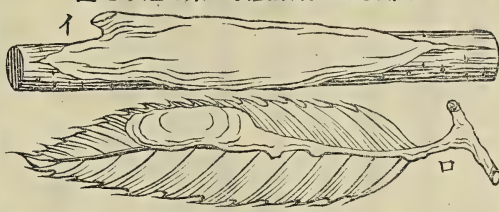
七、捨苗代周圍の田地に於ては、移植後十日目毎に捨苗代より最も隔りたる田面(試驗區域內にて)に於て採卵し、(二化十塊以上)寄生に罹りたる步合を調査す。

八、(七)と同時に試驗地以外に於て、二化性の卵を採收し、寄生に罹りたる步合を調查し、(七)と比較すべし。但し苗代地より隔りたる田面に於て採卵すべし。

## ◎花布紋蛾及其幼蟲に關する小觀察

千葉縣　齋藤啓二

先きに余が初めて、花布紋蛾の雄蟲が發音器を有し、發音の機能あることを略報したりしに、此事たる昆蟲學上頗る珍奇に屬し、未た先輩諸氏の報ぜざる所なりしを以て、大に同好者の注意を惹起し、其後幾何ならずして鳥羽氏の同樣なる報告あり。今又本誌前號に於て、齋藤朝之助氏の同樣の研究報告ありて、且つ精細なる解剖圖を附せられたり。依りて之を考ふるに、余が所謂花布紋蛾は名和昆蟲研究所の命名にかゝり、佐々木氏の櫟巢蟲蛾と同物なれば、二氏の得たるものも必ずや本種と同一種ならんと信ずるなり。嘗夫れ余が先きの報告たるや、眞の略報に過ぎずして、元より其詳細を委さゞりしを以て、其後少しく研究する所あり、將さに發表せんとするに際し、偶同姓者たる氏の研究報告に接す、是れ當然余が爲さゞるべからざりし所のもの、今氏に依りて之を發表せらるゝは余の大に喜ぶ所なり。故に余は茲に聊卑見を述べんとするも、此蛾の形狀幷に其發音器等に關する事項は全く之を省き、又幼蟲の形狀經過等は佐々木氏の書に讓るとゝなし、茲には唯同氏の書に見へざる二三の點を摘記するに止めんとす。

花布紋蛾の羽化するは、六月下旬より七月上旬の間にあり。雌蟲は櫟の葉裏に數百の卵子を一所に產付し、尾端にある紅毛を以て之を蔽ふ、故に樹下より仰視すれば直に發見することを得べし。此卵子孵化す

れば、直に其葉より蝕害を初め漸く他葉に及ぶ、而して其蝕害の方法は、裏面より只葉緣のみを浸蝕して、相交錯せる無數の細脈幷に表皮は決して之を蝕害することなし。又幼蟲は糸縷を吐き、卵子の附着せられたる點を嚢狀の巢となし、朝夕之に棲息し、此處にて第一回の脱皮をなす。此葉はロ圖の如く遠く枝上にまで絹糸によりて纏繞せられ居るを以て、他葉の落下するに及んでも決して落下することなく、依然として繋留せられ枝上に翻々たるが故に、此葉に依りて直に此蟲の棲息することを察知するを得るなり。幼蟲は時として此の嚢中（ロ圖）にて越冬することあれども、多くは枝間又は幹部に、更に嚢狀の巢を營み（イ圖）、之に潜伏して越冬するを常とす。そは灰褐色を呈し脹起し居るも、色澤樹皮に紛はしきより、動もすれば不注意なる觀察者の眼界を免がれ易し。此嚢狀物は大小種々ありて、之に潜伏せる幼蟲は五六頭より百頭內外に至る。春期加害を初むる後と雖、朝夕又は冷氣の時は、日中も尙此巢中に潜伏するを常とす。此幼蟲は四月中旬頃より這出て、櫟楢等の新葉に群集して之を食害す。而して此期及其以後に於ける加害の狀態は、秋期の時と異り、恰もヒオドシ蝶の幼蟲が朴樹を害する如く又シリアゲ蟲が李樹等を害するが如く葉の全部を食盡するを以て、忽ちにして全樹枯木の觀を呈す。而して其數極めて多く、實に吾地方に於ける櫟楢林の最大害蟲なり。

花布紋蛾の幼蟲嚢狀の巢を造りし圖

（イ）は越冬の爲めに造りしもの
（ロ）は一眠前に於て棲息の爲め造りしもの

成蟲は其色彩甚だ美麗にして、花布狀の摸樣を有するを以て即ち花布紋蛾の名あり。而して其雄蟲が腹部に發音器を備へ、以て發音することは甞て述べたるが如し。此發音器は即ち他の蟲類のものと同じく、全く雌雄陶汰の結果たるは云ふ迄もなし。余は昨年飼育試驗の際、羽化せる雌雄兩蛾を其まゝ飼育箱に

入れ置きしに、七月七日午後六時過に至り、雄蛾が發音し始むるや、傍にありて眠るが如き狀態にてありし二三の雌蛾は、此音を聽くや懆惶として動き出し、皆雄蛾の方に集まるを目擊せり。

幼蟲には二種の寄生蜂ありて、其大部は之が爲に斃るゝものなり。此蜂に付ては次回に於て報告すべし。

因に花布紋蛾は本文にも記したる如く、吾地方に極めて多く產するものなれば、標本希望の諸君は遠慮なく申込まるべし、羽化期を待て應望せん。宛名は千葉縣印旛郡遠山村。

## ◎臺灣產螢に關せる第三回報告附南淸に於ける螢火の一斑

在岐阜　永澤小兵衛

この第三報は、明治三十七年一月印行の昆蟲世界の資料にもと、一昨年十二月中旬に、上海の客棧にて起稿せるものなりしが、未だ之が淨寫を終らざる中に、遽かに歸程に上りたると、昨年一月初より、筆を他稿に執り居たるとにより、忘れたるにはあらねど久しく其儘にて打過したるを、此頃臺灣の一知友より、當地は又もや新螢の飛ぶ頃ともなりつるに、第三報告は、幾年の後に閱讀なせん心得なるか、との詰責をうけたれば、恐縮の餘りに、匆々舊稿を補修して、また揭ぐることゝはなしぬ。讀者諸君子、逆じめ此由を辨へ玉はずんば、篇中往々時日の訝しく思はるゝ節もやあらん。茲に謹みてその次第を稟す。

余は既に、臺灣產螢の種別と、その性狀分布の異同とを略報せしかども、未だその北部の各地（苗栗臺北間の）に蕃息せる種類を悉さゞりしを以て、爰に最終の報道として、その梗要をものせんとす。且南淸地方に於ける事物は、他年、讀者諸君子が、臺灣滿韓の昆蟲を研究せられん時の參考ともなるべければ、其二三を末尾に附記せり。但し一處定住の身とは異なり、輕々觀察せし結果を、羈旅の餘暇を以て採筆せるものなれば、その著眼も、その記述も、固より十分ならぬ節多からん。諸君子冀くはこれを恕せよ。

◎臺灣北部の螢種　臺灣にて苗栗と云へば、螢火の多產地と目さるゝ土地なるを、その生發期を違へたる爲にや、去る八月廿三日より、三夜に亘りたる採集の成績に依れば、概ねツマグロ　チヤバネ種

(戊號)ばかりにて、他には、少數のヒメ クロボタルを獲たるのみ。それより北進して、新竹に抵り、同月廿六日、城外の田間に於て、數時間の採集を行ひたるに、苗栗とは全く事かはりて、此には單だチャバネ種(乙號)一種を認めたるも怪しかりき。その翌日は、轉じて桃仔園停車場附近を搜索せしに、此時には、一螢の火光をすら目擊せずして止みたるが、更に市街に傍へたる卑濕地に於て、都て三種の少許を獲たり。即はちチャベリ クロボタル(甲號)、チャバチ ボタル(乙號)、ヒメ クロボタル(丁號)是れなり。さらば此地は、臺北とは同一分布地域たるにや。斯くて、二ケ月目とて。臺北に歸りたるは八月廿八日の事なりしが、奇しくも七月の初めに、全く其影を隱してチャベリ クロボタルの、復た郭外到る處に飛翔せるさまを見たりしかば、乃はち連夜に亘りて、採集を試みしが、わきても、圓山と大稻埕との間なる田畔に多かりき。此際チャベリ クロボタルと併せ獲たるは、彼の鳳山にて多く獲たるヒメ クロボタルの數頭なりしが、この實驗によりて推斷せば、前者は疑ふらくは、二化生以上の種類にて、後者は少くとも、全土の三分二强を、その蕃息區域となしゝものに似たり。

今既記の事實を綜合せば、臺灣螢の珍奇なる種類は、多く中部より南部にかけて蕃息し、最南部には二三の常種を産せるが如きも、とかく採集上の不便多きより、明確たる觀察を遂げ難し。而して北部には國語學校にて獲たる草山螢のごとき。未だ他に類なき種品もあれど、要するに多種類とは稱し得ずと云ふに歸著せり。されど、纔かに縱斷旅行一回の觀察に止まりて、周ねく採集比檢を遂げたるにあらねば遽かに斯く斷定せんことは固より憚りあり、たゞ向後の究明の功に竢たんのみ。因に云ふ、余は恒春鳳山間、約二十五里の地域に於て、每に採螢の機會を失せしことを憾むの餘り、打狗より書を海口の齋藤勝雄氏が許に贈りて、採螢の送附を請ひたるに、七月末に車城海口間にて獲たるものなりとて、八月一

日發信中に包入して、十餘頭を贈られたれば、就てこれを比檢せしに、皆チャバ子(乙號)のみなりき。當時、氏が手翰の一節にいへらく、七月廿九日より強風雨の起りて、螢影の消散せしに、加へて稻も悉ごとく苅取られたる後の事とて、昨今は採集せん望み絕えたれど、この月の下旬より九月中旬にかけて復た發生せんこと必定なれば、その折には重ねて追贈せん胸算なり云々。さらば此黃翅螢種も、また年二回以上の化育を遂ぐる種類にやあらん。是れ、昆蟲研究家の、宜しく注意すべき事項たるべし。玆にその顚末を記して、齋藤氏の厚意を鳴謝し、兼てチャバネ　ボタルは、最南端にも蕃息せるものなる事を、讀者諸君子に敬告す。

◎**蛆螢の差別**　古來和漢の書冊に、蛆螢と稱せるものあることゝ、チャベリ　クロボタルの性狀の一斑とは、第一回報告中に陳述せしが、其後數回の經驗を累ぬるに從びて、チャベリ種の蛆螢は、水濕を帶びたる草叢(臺北の如く)に若くは、河水と稍遠ざかりたる荒地(臺南の如くに)に棲息し、チャバネ種に屬せる蛆螢は、水田などの泥水に浮游するものなることを知れり。即はち前者は、光輝熠燿として、その老成せるものは、徐ろに蘘草を岐ふて梢頭枝端に緣るも、幼少の間は、草根深く群棲團集するの性ありて、その體皮は軟柔に、各節の聯繫は、宛がら鱗鎖のごとく、屈伸極めて自在なり。嘗て試みに之を毒壺に投せしに、未だ數分時を經ざる間に、やがて四體は硬化せりき。之に反して、後者は、恒に汚水濁潦に生育して、その光力も最も微かに、外甲は硬剛にして、上に二條の隆起線を劃せるを見る。特に驚きたるは、之を毒壺に入るゝも、毫も感覺なきものゝ如くにて、約四五十分時は、夷然として其生動を持續せる事なり。蓋し邦產へイケ　ボタルの類ひなるべし。又前者の體色は、純黑にして、その腹背には、數條の縱線を彩どるに、後者は土壤に扮せる灰褐色を帶ぶるまでにて、一の文飾もなく、その

節片また大ひに趣むきを異にするのみか、身長外貌も、共に相同じからず。斯れば和漢の史書に、草螢と稱せるものは、主はら無翅螢種の雌蟲を指し、土螢と稱せるものは、無翅螢種及び常種の幼蟲の名にて、その水螢と云へるは、茶翅螢種と、平家螢の幼蟲とを併稱せるものかと思はる。但し茶緣螢種の蛆螢に有せる縱線には、黄紅白色の別ありて、恰かも齡期を表示せる特徴のやうにも見ゆれど、未だ飼養せしことなければ、之を明言せんこと難し。

(註)　水螢は、秘傳花鏡、陸氏草木疏、和名鍼線、大和本草、薬名和訓鈔にも見えたれど、土螢は薬名手引草などのみありて、草螢は和訓部類抄、和訓栞にその訓釋あり。されど單だミズボタル、ツチボタル、クサボタルと訓せたる釋名のみなれば、孰れの書にも擧げ置けり。按ずるに、漢詩に流螢の稱は少なからざれども、水螢と云へるものは、李子卿の賦の他に未だ見當らず。而して賦の「彼何爲而化草、此何爲而居泉」の句素より推すときは、清國に最も蕃殖せる茶翅螢種の幼蟲を指しゝものかと疑はる。又詩には、草螢と云へるがあれど、是は草叢に棲める螢と云ふ義にはあらで、草上を飛遊せる有翅螢を形容せし語なるべし。明の楊愼が梁の蕭和が賦の「聊披書以娛、性悅草螢之夜翔」を引きて、草螢の一種を指しゝものなりと斷ぜしは、蓋し兩者の差別を辨へぬ爲に混錯せるにや。

◎清國極南の螢種　余が南清厦門埠頭に上りたるは、去る九月の初めにて、殘炎なほ赫灼たる頃なりしかば、胸裡に螢火亂飛のさまなどを描き乍ら、勇躍して上陸せしに、底事ぞ、厦門港とは名のみにて見渡す限り石壁の嵯峨たる赤裸々の一孤島たるのみか、その泉樹の勝に富めりと聞ける、對岸の鼓浪嶼すらも、殺風景なる拳大の小嶋にて、微かに數頃の水田あるに過ぎざらんとは。されば始めより、捕螢の望みを絕ちて、一回も採集を試みざりければ、今これを言ふに由なけれど、領事館員及び富田庄藏氏等の談には、此地また普通の茶翅種を產せりと雖も、それすら極めて少なし。昨年の夏頃、渡瀨氏の請に應じて、十數頭を贈附せしかども、その後杳として復報に接せざれば、種品の如何より、分布區間の事などは、未だ詳答し難しと云へりき。淹留旬日の後、更に柑橘園の害蟲を見まほしく思へて、それよ

り漳州府に入りしに、端なくも一戸三藏氏が厚意によりて、數夜その西南門内外に捕螢せしが、此際一種の小螢と、臺灣産に同じき茶緣螢とを獲たり。そも此新たなる小螢は、翅色淡褐にして、その體軀の細小なる、擧動の穩柔なる、放光の微弱なる、宛然ヒメ　クロボタルかと見紛ふばかりのものにて、採集の成績より言ふときは、その蕃殖力も、さまで旺盛ならざるべしと思はれたり。乃ちこれを(癸號)に列して、假りにヒメ　チヤバネボタルと命名し置きぬ。踵で府城を距ること三十清里なる、浦南に採蟲せしが、その歸途にて、多くの無翅螢種の蛆螢と、普通の茶翅螢種とを併せ獲たり。是より漳州の産螢は臺灣のものと、粗ぼ近似の種類たることを臆想せしかば、石碼に舍せし時にも、一士人を隨ひて、隈なく水田池溝の間に捜求を遂げしかども、遙か彼方に颺飛せる二三の燐光を認めたるのみにて、生憎や、余が羅網に入りしものとては、たゞ茶翅螢種の一雄に過ぎざりけり。されば、その他の種類の、棲息せるかせざるかは、全くこれを言ふに由なし。さもあれ、上記の事實に因りて概觀せば、南北兩溪の沿岸各地には、茶緣螢種、茶翅螢種の他に、なほ一種の小螢種を産せること丶、假ひ水田池溝に富める土地たりとも、平生潮汐の浸潤をうくる時は、螢火はをさ〳〵其處に蕃殖せぬこと丶を明らむべし。

◎**清國南部の螢種**　斯くて、福建の南方より北上して、閩江を遡のぼり、宿りを福州城外の南臺に求めたるは、九月二十六日(陰曆八月六日)なりき。氣節既に秋分を過ぎたれば、本邦ならんには、殘螢の影だも無かるべきを、有繫に煖地の事とて、猶ほ茶翅螢種の亂點群飛せるもの多く、一夕にして數十頭を獲るは、最と容易なりき。たゞ其種類の一種なりしは、少しく物足らぬ心地せられて、過ぎにし臺灣の興味を追懷せしが、尋で遊跡を浙江の杭州に印せるに迨びて、圖らずも一の新螢を、西湖畔の金沙港にて捕獲せり。そは十月二十二日(陰曆九月二日)の事なりき。此種は其外貌、酷はだ茶緣螢種に類せる

ものなれども、彼が如く上翅に飴色したる邊緣は無くて、その色すら、更に深黑なり。語を換へて言へば、この新螢は、その族の特徵たる扁濶肥大の體軀を有したると、半透明なる大胸背を以て、その頭部を覆蓋せる狀は、臺灣產の茶緣螢種に彷彿たれども、其身稍瘠せて翅緣の文采を闕き、且翅翼の正黑細長にして、少しく軟柔なるやう見ゆるは、是れ兩者異同のある所なり。仍りて謂へらく、茶緣螢種は、熱帶地方に特有の產にして、この新獲のものは、溫帶大陸の常種にはあらざるかと。されども、時已に湖邊の翠巒蒼嶺に、半は黃紅を點綴せる秋晚のことゝて、之を多獲せん望みとても無かりければ、遂にこの疑惑を永釋すべき端緒をも得ずして止みぬ。想ふに、是は、天竺山の淸谿より、孤山の幽渚に亘る一帶の水際に、無翅螢種の蕃息地を府せる秘密を啓示せし現象にやあらん。而して斯る深秋に、螢火のなほ殘存せるは、見慣れぬ邦人の眼にこそ、最と奇しく映じたれ、支那に寒冷の候に飛螢ある由は、多くの文詩にも見えて、唐の郭震が句の「秋風凛々月依々、飛過高梧影裏時」のごとき、杜甫が「十月淸霜重、飄零何處歸」のごとき、さては許渾が「蒹葭水暗螢知レ夜、楊柳風高雁送レ秋」など、孰れも霜後の叙景に詠めり。されば淸の周禮觀が秋螢の詩に「遠レ候亦能飛…可レ憐秋色裡、相映亦暉々」の句あるも宜なり。然るに、我が奈良平安二朝頃の文學者は、何事も唐樣に擬ひたりしかば、眞の秋螢を知らずして、これを詩歌に詠みけん、我國に、概ね八月には隻影なき螢火を、初冬十月頃のものとなしゝものなり。その例は、くだ〳〵しければ玆に引かざれど、近くは釋梅癡が「玉階且免氷紈撲、其奈飄零十月霜」と詠みけるも、この誤解に胚胎せるものなるべし。乃はち古來、邦人が詩歌に詠める秋螢と云ふものは、皆漢人の口吻をまねたる假想物の名にして、漢土に所謂秋螢と稱せるものは、金風蕭條の頃に飛行せる一種の無翅螢の雄蟲たるべし。

さて、杭州に於て捕獲せる秋螢は、曩に余が私斷せし如く、果して朝鮮對馬の邊まで分布せるものと同種（昆蟲世界第七十一號第十八頁の第三行以下參看あれ）なるか、將た別種なるかは、未だ確言し能はねど、此地にて、滿洲の風土に通ぜる士人の言に依れば、畢竟は、遼東半島產に異ならざるが如く、又福建候補知縣謝揩氏が談にて、泗川省成都府華陽縣附近には閩漳地方に絶無なる異螢ある由を聞き得たれば、恐くはこの種が、支那全封彊の溫帶を通じて、その分布地域を畫せずとも限るまじ。ともかくも、漢士の古書には、その西北部に無翅螢を產せる趣きを報せるに、加へて謝氏の此言あり。今將た一新螢の吾が手に入れるすらあれば、假し彼此の種屬に、多少違ふ所ありとも、彼の國人が無翅螢種の棲息を認知せしは、決して五七百年この方の近代にあらざること明確にして、また其種屬の、弘く尨大帝國を橫斷分布せしことも、略ぼ推測せらるべし。但し余が臺灣產無翅螢種に、邦稱を擬せし折には、その胸背の特徵を採らずして、主はら羽翼の異同を標準とし丶かば、今に至りて、杭州にて獲たるものに適當せる對稱の得難きに窮惑せり。依りて臺灣產のチャベリ　クロボタルをムナビロ　チャベリ　クロボタルと改ため、杭州產のものをばムナビロ　ハネナガ　クロボタルと命名せんとす。猶ほこ丶に漏らしたる幾多の事項と、淸領土內の螢種とに就きては、他日稿を更めて、讀者の淸覽に供へん心算なれば、之が拾遺篇の終るを俟て、賴ひに叱正の榮を賜はらんことを。

## ◎鳴く蟲に就て（五）（第五版圖參看）

名和昆蟲研究所內　谷　貞子

私は本誌第八十九號より第九十二號に亘りて、不完全ながらも本邦產蟬類二十種の記述を終りしかば、こ丶に本號より同じ題下に邦產螽斯類十八種に就き逐次記載せんと欲す。されども其初めこの鳴蟲てふ

ものを記載するにあたりてしるせし如く、此金華山麓のみに於て、自身に採集せし所の十四五種のものと、其他に當研究所秘藏の特別標本三四種とによりて研究せしものなり。さはいへたらぬ私の研究淺ければ、不充分を免るゝ能はざるは素より其所なるも、そは後日の研究を俟て補足し、今は只其大要を記すに止めんとす、讀む人幸に諒してよ。

### 螽斯類の發音器

螽斯類も亦蟬類と等しく、發音するは雄蟲にして、其音調特に雅美なるを以て、世の人の多く之れを愛で飼養する者少なからざるも、たゞ尾端に劒あるものはこれを好まざるが如き感あるは、畢竟そな雌蟲にして、鳴々せざるより吾人の耳を樂しましむる能はざるに由るものにして、即ち其形態の如何を問はず一に雌雄淘汰の結果雄蟲の鳴聲に變化を來たせし一種特有の音調を賞するや明らかなり。されば若し野外に於て鳴きつゝあるものを捕へしならば、百といひ千といひ、悉く雄蟲にして皆發音器を有するも蟬類のそれに比すれば、其形狀位置及び發音の方法に至る迄其趣を異にす。今仔細に之を觀察すれば其大小形狀こそ各々異にすとはいへ、いづれも前翅の基部は殆んど直角に折れて、ほゞ三角形をなせる硬き部あるべし、これ即ち發音器にして、左翅は之を右翅の上に重ぬ、甲圖は即ち右翅の表面にして、乙圖は左翅の裏面なり。而して右翅の該部の中央には、丸きもあり楕圓なるもありて、種類により一定せざれども、いづれも透明なる薄膜あるを見る。之れ即ち發音鏡(ロ)にして、同表面の上左端には翅脈の少しく褐色がゝりし(イ)あるべし、これを硬質部と名づく。次に左翅の裏面を撿すれば、上方に當り横に走れる隆起せる所あるべし、猶之につき仔細に觀察を下せば、極めてこまかき鑪形をなす、これを鑪狀部(ハ)といふ、丙圖は即ちこれが放大圖なり。而して其發音するや、左翅の鑪狀部(ハ)を以て右翅

の硬質部(イ)に摩擦し、初めて各々得意の美聲を發するものにして、多くは左右兩翅の裏面に鑢狀部(ハ)を有すれども、比較的左翅のものは發達す。

さて此科に屬するものは乾燥の地を好み、蟋蟀類の如く光線を忌む性質なく、常に雜草中等に棲息す。されば自ら其色彩も草木に酷似し、綠色又は褐色のもの多し。頭部は多く圓錐形にして頭頂の尖れるもの多く、複眼は圓形、卵形、又は橢圓形にて一定せず。單眼を缺き、顏面に白色の顆粒狀物を有す。前胸背は前緣より後緣廣く、中胸部を覆ひ兩側は下端狹し。前胸腹面には刺を有するもの多く、又中後胸の腹面には花瓣樣のものあり。雄は前翅の基部に發音器を有し、後翅は膜質靜止の時は之を扇狀に疊む。腹端には突起を有す前肢の基節には一本の刺あり、脛節の基部に聽器を有し、後肢は長くして飛躍に適す、跗節は四個、第三節の先端裂けて第四節を出す、雌は腹端に劒狀或は鎌狀の產卵器を有す、卵は土中或は樹枝に產卵す。

ウマオヒムシノ發音器
(甲)右翅の表面(乙)左翅の裏面(丙)ハ部の放大圖(イ)硬質部(ロ)發音鏡(ハ)鑢狀部

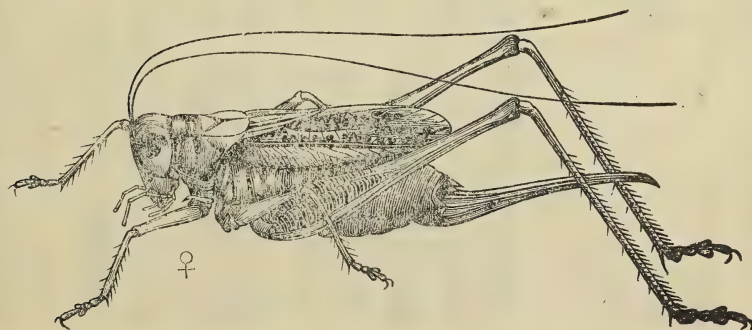
(一)キリギリス(Gompsocleis mikado, Burr.) 体長一寸二分、綠色と褐色との二形あり、頭部は淡綠色、頭頂圓くして尖らず、複眼卵形濃褐色を呈し、觸角は其色濃褐にして、體より少しく長し、前胸背は平濶にして後緣廣く且圓し、色は綠色の中に樺色の斑紋と、二列に褐色縱條あり、兩側は綠色と樺色とを混ず、周緣は隆起し前胸腹面には一對の刺あり、胸部腹面の色は淡樺色をなす、前翅は長さ九分腹部と殆んど同長、綠色にして縱脈黑褐、翅端に至るに從ひ綠色をなす、後緣に近き翅脈間に黑褐色の

斑紋あり、後翅は膜質にして小さく翅脈黒褐をなす腹部は緑色にして背面褐色、兩側緑色をなし、腹面は淡樺色をなす、肢は淡緑色にして、各腿節の內側には黒き齒狀の凸起と、各脛節の內外側とに刺を有し發音器は他種に比すれば大形にして、發音鏡は殆んど方形をなす。雌の產卵器は劍狀にして長さ八分、褐色を帶びて先端濃褐なり、成蟲は多く七、八、九、十月頃最も多く現出し、日當りよき堤防等の草叢にて、晝間チョン、ギース、チョン、ギース、と鳴々し、本邦何の地にも棲息す。

（二）イブキキリギリス（Decticus japonica, Boliv.）　体長八分、體は光輝ある黒褐色をなし、頭頂圓くして尖らず、縱線を有すれども判明ならざるもあり、複眼は卵形濃褐色をなし、觸角黒褐にして體より少しく長し前胸背は濃褐色にして平濶、其後緣は廣く且丸し、中央に逆八字形の淺き凹紋を有す、兩側は黒褐色周緣各々濃褐をなし、前胸の腹面には刺を有せず、色は各々鹿毛色をなし、翅脈黒褐、前翅は長さ五分腹部の第六關節まで達す、後翅は小にして其色淡し、腹背は濃褐にして兩側黒褐をなし、腹面は濃褐なり。肢は各々褐色、各腿節の基部は黒褐をなし。脛節の內外側には細刺を有す、發音器は大ならずして發音鏡は卵形をなす雌の產卵器は黒色鎌狀をなし、長さ三分、基部濃褐なり、成蟲は七、八月頃多く現出し、常に山間の茂れる草叢中に棲息す、該蟲は伊吹山及び飛驒地方に於て獲らる。

キリギリスの圖

♀

イブキキリギリスの圖

(三)コバネキリギリス(Platycleis Bonneti, Boliv.) 体色形状前種に酷似し、體長七分、光輝ある黒褐色にして、體の背面は濃褐色、頭部は黒褐、頭頂より後頭にかけて茶褐の縦條あり、複眼暗褐にして卵形をなし、其の上端より後方にかけ淡樺色の線を有す。頭頂は圓くして尖らず、觸角黒褐、體より僅か長し、前胸背は濃褐にして平濶に、中央に逆八字形の黒色凹紋あり、兩側は黒褐色後縁灰褐をなし、前胸腹面には刺を有せず、前翅は灰褐にして小さく、長さ一分餘、腹部の第三關節迄達し、翅脈黒色をなす。雌は雄より翅猶小さし、後翅は小形にして灰白色をなし、前翅の下に之を隱す。腹部は其色黒褐、腹面は暗褐を呈す、肢は各々濃褐色にして各脛節の內外の兩側には細刺を有す。雌は産卵器黒色にして基部暗褐、鎌狀にして長さ三分あり。成蟲は七、八、九月頃日當りよき堤防等の草叢にて、晝夜を分たずリリ、リリ、リリ、と其音高く鳴々す。(第五版第四圖)

# 雜錄

## ◎昆蟲文學　(十七)

蝶蜂蠶等　碧梧桐氏選

蜂の飛ぶ園生の林檎咲きにけり　華園

人參の花に蟻出て夏隣　同

〰〰〰

蜂の飛ぶ檜山の峠越えにけり　同

木蓮に虻の來る日を雨となり　明笛子

朝まだき茶畑の蜂を燒きにけり　同

いぶせきや 蠶莚を呼ぶ 座敷まで　觀魚
土くれの 下より出でし 地蜂かな、　冷石
たそがれて蠶飼女の灯を待間かな　歸麓園

○

檜山の坂行く道や蜂の聲　碧梧桐
積藁に誰が花させし虻の聲　同
潮落ちし宿の眺めや虻の聲　同
御微行の茶の木畠や蝶々飛ぶ　同

名和昆蟲研究所(一句)

琉球の蝶一箱をかけにけり　同
高潮の夏めく風に蝶々かな　同

## 雜詠

*

朝まだき起き出で丶庭に下り立てばすでに虻なく木蓮の花　志紀臣
園の内咲く花多み山吹に躑躅櫻に虻移り鳴く

*

梅はみな散り痩せしかば桃の花園に尋ねて飛ぶるりたては　深井淸海

*

朝日影うららに照る檜の木の林のほとり岐阜蝶の飛ぶ　所嘉吉

*

紫に白に咲きたる園の花同じ色なる蝶の飛び居り　ふもとのや

*

蝶二つくるへる下の野茨に羽や觸れ破らんの愁ひぞわがする　坪内華外

*

多度山の秫が瀧の瀧津邊に飛びてありたる胡蝶思ほゆ　潮音生
春の野に飛ぶ蜂だにも花なくば蜜とふ甘き露は得ずけり

## 瓢蟲

捕らんとすてんたう蟲の落にけり　四澤
似て非なり二十八星瓢蟲　同
苗木畑てんたう蟲を愛しむ　同
日覆の幕の上這ふ瓢蟲　同
瓢蟲庭の日和に飛びにけり　同
幕を這ふてんたうむしの美しき　城東
さまざまのてんたう蟲の口繪かな　同
足のなきてんたう蟲や粘付紙　蓼江
ありまきの群やてんたう蟲居たり　歸麓園
ころげ落ちて見えず瓢蟲だまし　三川
つまむ手に殘る臭さよ瓢蟲　同
美しき瓢蟲の珍種かな　同

# ◎昆蟲に關する歌（二）

奥島欣人輯

## ▲萬葉集の昆蟲歌（イ）

讃酒歌十三首中の一首　　大伴旅人卿

今の代に樂しくあらば來生者蟲に鳥にも吾はなりなむ

老身重病經年辛苦及思兒等歌　　山上憶良

たまきはる内の限りは（謂、瞻浮洲人、壽一百二十年也、）平らけく安くもあらむを、事もなくもなくもあらむを、世の中のうけくつらけく、いとのきて痛き瘡には、鹹塩を灌ぐちふが如く、益々も重き馬荷に上荷打つといふことの如、老にてある吾が身の上に、病をら加へてあれば、晝はも、歎かひ暮らし、夜はも息づき明かし、年永く病みし渡れば、月累むうれへさまよひ、異事は死なと思へど、五月蠅なす、騷ぐ兒共を、打捨てゝは死は知らず、見つゝあれば心は燃えぬ、かにかくに、思ひ煩らひ、音のみし泣かゆ。（反歌畧）

蟋蟀歌　　湯原王

暮月夜こゝろもしぬに白露のおく此庭に蟋蟀鳴くも

詠勝鹿眞間娘子歌　　高橋連蟲麿

鷄が鳴く吾妻の國に、古にありけることと、今までに不絶言來る、勝鹿の眞間の手古奈が、麻衣に青衿つけ、直さをゝ裳には織りきて、髮だにも搔は梳らず、履をだにはかず行けども、錦綾の中につゝめる齊兒も妹にしかめや、望月の照れる面わに、花のごと咲て立てれば、夏蟲の火に入るが如、港入りに船こぐ如く、よりかぐれ人の言ふ時、幾許も生けらぬものを、何すとか身をたなしりて、浪の音の騷ぐ湊の、奥津城に妹がこやせる、遠き世にありける事を、昨日しも見けむが如も、所念かも。（反歌畧）

寄蟬相聞　　作者不詳

ひぐらしは時と鳴けども君戀ふる手弱女われは時わかずなく

詠蟬　　作者不詳

暮かげに來鳴くひぐらし幾許も日毎に聞けど飽かぬ聲かも

詠蟋蟀　　作者不詳

秋風の寒く吹くなべ吾宿の淺茅がもとに蟋蟀鳴くも

かげ草の生ひたる屋外の暮陰に鳴くこほろきは聞けど飽かぬかも

庭草に村雨ふりて蟋蟀の鳴く音きけば秋づきにけり

詠風　　作者不詳

萩が花咲きたる野べにHぐらしの鳴くなるなべに秋の風吹く

寄蟋蟀相聞　　作者不詳

こほろぎの待ちよろこべる秋の夜を寢るしるしなし枕と吾れは

寄花相聞　　作者不詳

草深み蟋蟀さはに鳴く宿の萩見に君は何時か來まさむ

旋頭歌　　作者不詳

蟋蟀の吾床のべに鳴きつゝもとな起きゐつゝ君に戀ふるに寢がてなくに

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄　（其五）

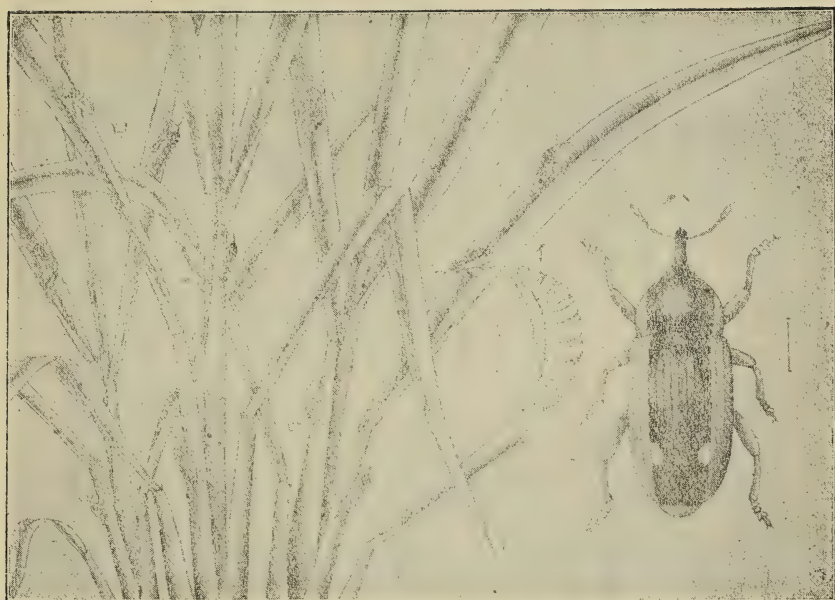
名和昆蟲研究所員　小竹　浩

（七）キリウジカヾンボ　稻作害蟲の一にして、成蟲は二枚の翅を有し、後翅は變じて撥狀をなす。體長四分五厘乃至六分、翅の開張一寸一分乃至一寸三分、頭は小さく複眼圓くして黑く、觸角十三節より成りて糸狀をなし短かく、雌は雄より更に短かし、而して各節に粗毛を有す。下脣鬚長くして殆んど觸角の如し。胸部球狀をなし、翅は稍灰褐色を帶びて、脈條（翅の脈をいふ）縁紋（翅の端に近き處の前縁にある紋をいふ）は黑褐なり。腹部圓筒形にして雄は其先端膨大し、雌は尖りて二個の突起あり。肢は極めて細く、且長くして體の二倍半乃至三倍半に達す、幼蟲は土色を帶び圓筒狀をなし、各節に小さき黑

キリウヂカトンボの圖

(イ)卵子の放大
(ロ)幼蟲加害の有樣
(ハ)幼蟲の放大
(ニ)蛹の放大
(ホ)成蟲の飛揚を遠方より見たる狀
(ヘ)成蟲の雌
(ト)サナヘトンボのキリウヂカトンボを捕食する狀

點を整列し、尾端には十二個の肉狀突起を有す。蛹も亦圓筒狀にして各節の後緣に數個の小突起を有し頭部に根棒狀をなしたる二個の呼吸管あり、年一回の發生にして、三、四月頃より羽化し、濕地の土中に產卵す。卵は黑くして細長く、上に笠狀物あり。孵化すれば苗代田に來りて、稚苗の根を喰ひ切り、これが爲め發生多き地に於ては、往々二、三回も籾の蒔き直しをなし、遂ひに移植時期を失し、甚だしく收穫を減少せしむ。又は麥田に來りて其根を害することあり。然れども是れ其根を好むにあらず、堆肥(つみごえ)若くは紫雲英(げんげ)等の有機質肥料を多く施すときは、其れが腐敗有機質物を好みて之れに集り、其際根をも喰ひ切るものなり。幼蟲の儘土中又は稻株等の中に入りて越冬し、翌春蛹となり四月頃最も多く羽化す。

驅除法　此の蟲は苗の稚き時、水を落したるときに入り來りて根を害するものにして永く水中に棲む能はざるを以て、之が害にかゝりたるときは、直ちに水を深く張れば、皆畦に匐ひ上るものなり、故にそれを捕り殺すべを可とす。然れども此幼蟲を捕り殺すこと困難なれば、豫め畦の内方の周

圍に巾七、八寸深三、四寸の溝を堀り、假令苗代田面の水を悉く落すも、此溝には常に水を湛へ置くの工夫をなせば、決して害を受くることなし。且此蟲は前に述べたる如く、腐敗有機質を好むを以て、此の蟲の多き地方は有機肥料を多量に施さゞる樣注意すべし。

イネザウムシの圖

（イ）幼蟲の放大

（ロ）成蟲加害の狀

（ハ）成蟲の放大

（八）イネザウムシ　體の長さ一分六厘乃至二分位の小さき蟲にして、頭部前方に長く延び、宛も象の鼻の如くなりて稻を害するを以てイネザウムシの稱あり。觸角は膝狀にして先端球桿狀に膨大し、上翅は甚だ堅く、腹部を覆ふの鞘となり、其背面暗色にして兩側は灰色を呈し、（翅を疊みたるときを云ふ）下方には二個の灰色點を有す。幼蟲は蛆狀にして黃白色をなし、頭は淡褐なり。年一回の發生にして、成蟲の儘多く雜草中に入りて越冬し、翌年五六月頃より苗代、又は本田に集り稻莖に產卵す。孵化すれば幼蟲は稻の根を害し、大に其生育を妨げ往々黃變せしむることあり。

驅除法　圓形捕蟲器の內に拂ひ落して殺すべし。又は腐りたる筍を田中の所々に挿し置けば、其臭を尋ねて集まるものなればそれを採り殺すべし。

## ◎優曇華

静岡縣駿東郡　間宮英宗

優曇盋華、又は優曇鉢羅華と云い靈瑞華、瑞應華と譯す。瞻部洲を繞りて輪王の行路有り、廣さ一踰繕那、海水常に之れを掩覆す、輪王出れば水退沒して路露出す、衆寶莊嚴し栴檀香水之れに灑げり、路側に優曇樹有りて華を敷くと云ひ、其の花敷けば、天下人民愛悅、天下安穩豊樂、國土無干戈儭、諸人無病長壽、臨命終時無若、諸水清淨、諸華薫香、の七德ありと云へり。此花生ずれば輪王出づ董花に似たり葉は梨に似たり、菓の大さ拳の如く其味甘し。華なくして子を結ぶ、亦華あるも値い難し。三千年にして一たび現ず、金輪王の出る時大海減少して金路現ず、時に此華出て金輪王の先兆を爲すと云へり。左れば何時の頃より、日本にてはクサカゲローの卵を以て優曇華と云いならわせしや、迷信も甚しと云ふべし、佛の本懷にあらざるべし。先生冀くば國家の爲め、害蟲殺生の决果、寧ろ蟲地獄の苦るしみも又甘受せらるべし。

## ◎昆蟲見聞錄（其二）

三重縣阿山郡　西岡嘉十郎

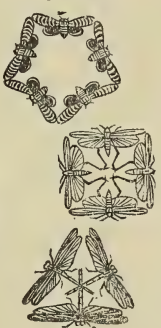
**螟二化性螟蟲油菜莖內蝕入に就て**　昨年八月發行本誌第八十四號雜誌欄に於て、佐賀縣農事試驗場技手松尾英雄氏は、二化性螟蟲油菜莖內蟄伏發見と其經過研究ヨ就てと題し、二化性螟蟲が春期油菜莖內に蟄伏蛹化せる實驗と、及び是れに對する驅除の方法との研究說を揭げられたり。予一讀して其當時聊か疑ひを起し、以後是れが研究をなさんと欲したれ共、時期既に後れて果さゞりしが、遂に本年四月五日是れが研究を試みんと欲し、二化性螟蟲の幼蟲十頭を採取し、同日午後二時油菜を入れたる飼育箱內に投入せしに、凡一時間を經て蝕入し始め、內三頭は午後七時迄に、殘り七頭は翌日午前八時迄に悉く蝕入せり。(未だ蛹化せず)而して其蝕入の狀態は、稻莖蝕入のそれに毫も異なる所なかりき。依て尚引續き左の二項を調査せんと欲し目下設計準備中なれば其成蹟は追て報告することある可し

（一）二化性螟蟲の油菜莖內に蝕入する塲合は、單に其蟄伏所を失ひたる螟蟲のみなるや、又例令好蟄伏所あるも蛹化前に當り食欲を逞ふせんが爲めなるや。

（二）冬作田(重に油菜を栽植せる田)と苗代田との誘蛾數は何れに多きや。

**六、二化性螟蟲藁稈蟄伏數に就て**　本年四月三日、二化性螟蟲の冬期に於ける藁稈內蟄伏數を調査せんと欲し、藁（早生比曾河內種にして宅地近傍に栽培しありしもの）十束に就きて調査せしに、總計五十六頭を捕獲したり。內藁一束に付蟄伏蟲數最多廿三頭、最少二頭にして、平均一束五頭六分の割合となる今假りに一反步の收穫藁五百束（當地にては普通）とすれば、其中に蟄伏せる螟蟲は實に二千八百頭の多きに達す、然らば藁の處分法も亦螟蟲驅除豫防の一方法として、大に實行するの價値あるものと信ず。

# 調

# 査

## ◎靜岡縣磐田郡產の昆蟲（六）（神村直三郎氏送附）

名和昆蟲研究所分布調査部

●（一四三）クロフカヾンボ（新稱）（Gn? Sp?）四月廿八日、雄は体長七分、翅の開張一寸四分、觸角鞭狀にして粗毛を有し、第一節は太くして長く、二乃至七節は殆んど球形にして漸次小さし、胸部鈍褐にして、腹部は褐色に腹端稍黑味を帶ぶ。翅は淡褐にして前緣に接し數個の黑褐色斑を有し、肢は褐色にして腿脛節端は黑く、跗節稍黑味を帶ぶ。三十五年初めて岐阜縣大野、吉城の兩郡に於て一頭つヽを獲られたるが今回又神村氏より一頭を送られたり。

●（一四一）キリウジカガンボ（Tipula nubifera, Coquillett.）四月廿八日、

●（一四二）ヒメクサバヘ（Bibio Sp?）三月廿七日、毛蠅科に屬し体長三分、複眼黑く背面より見るときは其周緣銅色を帶ぶ、体黑く翅は透明にして緣紋黑し、後肢は灰黃色にして腿脛節端は黑く、前中肢は黑色なり。

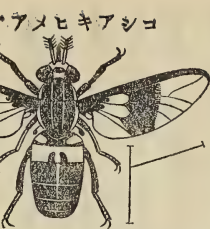
●（一四六）カウカバヘ（Sargus tenebrifer, Walker.）八月十二日、水虻科に屬し、体長五分乃至六分、翅の開張一寸一分內外、全体黑く、第二腹節の兩側は透明色を有し、翅は稍暗色或る種の蜂に似たる種なり。

●（一三七）コナメウジアブ（Odonfomya staurophora, Schiner.）七月三日、水虻科に屬し、体長三分五

厘乃至四分、翅の開張六分内外、胸部黒く菱狀部灰黃色にして二刺を有し、腹部稍扁平にして黒く四條の灰黃橫帶あり。而して其上方にあるものは中央切斷す、翅は透明なり。

●（二三六）ウシアブ（Tabanus Sp?）八月廿日、虻科に屬し体長七分、複眼大きく紫黒色にして光澤あり。觸角赤褐色を帶びて、第三節は叉狀をなし先端黒し、稜狀部圓く鱗狀瓣は大なり。

●（二三九）ウマアブ（新稱）（Tabanus Sp?）六月十九日、虻科に屬し体長四分五厘、觸角僅に叉狀をなし先端黒し、体灰色に翅は稍暗色なり。

●（二四〇）コシアキヒメアブ（新稱）（Chrysops Sp?）五月一日、虻科に屬し、体長三分余、翅張七分、胸部黒くして四條の黃色縱條あり。翅は透明にして中央に大なる黒斑を有す腹部の基部は透明色を帶び、背面の中央に一縱線あり。

コシアキヒメアブの圖

●（二四七）クロアシナガアブ（Gn? Sp?）六月十七日、黃蠅科に屬し、体長三分翅張六分五厘、複眼大にして頭頂に於て殆んど相癒着し、後頭に單眼を有す。体黒くし腹部細長く。雌は先端尖れり、肢は長くして黒色なり。

●（二四八）オホシギバヘ（新稱）（Gn? Sp?）四月十日、舞蠅科に屬し、頭小さく複眼銅色を帶び、胸部暗綠色にして背面に三條の黒色縱線ありて中央にあるものは細し、腹部は黒く末端に二個の刺狀物を有す。翅は稍茶色を帶び肢は黒し。今回初めて神村氏より雌一頭を送られたり。

●（二三八）シリナガアブ（Dasypogon japonica, Bigot.）五月廿九日、食蟲虻科に屬し、体長七分余、複眼黒くして相隔離し頭頂に單眼を有す、全体褐色なる種にして胸部には黒斑あり、腹部長くして五、六の兩節は稍黒し。

●（二四一）シホヤアブ（Promachus ater, Coquill.）七月四日、食蟲虻科に屬する最も普通なる種にして、雄は腹端に白色毛を簇生す。

●（二四三）オホムシヒキアブ（Acilus virgatipes, Coquill.）六月廿九日、食蟲虻科に屬し、体長八分內外、翅張一寸二分、前種に似たれども腹部稍細く、且腹端に白色毛を有せず。

●ムシヒキアブ（Asilus angusticornis, Loew.）四月廿四日、食蟲虻科に屬し、体長六分翅張一寸、前種よりは腹部一層細く、灰白色の短毛を有し、肢は黒くして脛節褐色なり。

●（二四〇）オホイシアブ（Laphria mitsukurii, Coquill.）四月十日、食蟲虻科に屬し、体長雄は六分內外雌は七分內外、翅張雄は一寸一分雌は一寸六分內外を算す。複眼黒く相隔離し其間に單眼を有

す、掃狀毛は黃色にして長く、体黑く腹部の下半は赤褐色を帶び、形狀色彩殆んどオホマルバチに似たる種なり。

●(二四二)コウヤツリアブ (Spogostylum distigma, Wied.)七月廿三日、長吻虻科に屬し、体長四分翅張一寸、体黑色にして翅の基半は黑く、末半は透明にして透明部に二小黑點あり。

●(一四五)ヒラタアブ(Syrphus porcinus, Coquill.)三月廿七日、喰蚜虻科に屬する最も普通種なり。

●(一四八)オホハナアブ (Megaspis zonalis, Fabr.)五月十五日、喰蚜虻科に屬し、体長五分翅張一寸內外、体肥大にして腹部殆んど丸く、其基部透明色を帶ぶ。翅は透明にして其基部及中央の前緣に接して黑褐色部あり。

●(一四七)アヲハナアブ(Bristalis viridis, Coquill.)四月廿八日、喰蚜虻科に屬し、体長四分翅張八分、複眼銅色にして相隔離し、其間に單眼を有す。胸腹部は光澤ある藍色を呈し、肢は黑く脛節の基半のみ黃白色を帶ぶ。

●(三〇七)コシアキハナアブ (Volucella japonica, Bigot.)六月十七日、喰蚜虻科に屬し、體長六分內外翅張一寸二、三分。複眼茶褐色を帶び稍隔離し、其間に單眼を有す。胸部黑く、雌にありては其兩側稍褐色を帶ぶ、翅は鼈甲色にして中央及先端に黑斑あり。腹部扁大にして黑く、第一節は透明色を帶ぶ。

●(二四四)シマハリバヘ(Servillia jakovlewii, Port.)九月九日、寄生蠅科に屬し、體長五分五厘翅長九分五厘、複眼銅色胸部黃褐、腹部は黑色にして三條の黃色橫帶を有し、胸部及腹部には刺毛を有す。

●(三一〇)イチモジセヽリヤドリバヘ (Tachina Sp?) 九月四日、寄生蠅科に屬し、體長二分五厘翅張五分、複眼銅色にして顏面に銀白色毛を密生し、胸背は灰色、腹部は黑色にして灰白色の帶斑あり、腹端細くして刺毛短かし。

●(三〇九)シモフリスヾメヤドリバヘ (Tachina Sp?)六月八日、寄生蠅科に屬し體長三分餘、前種に似たれども稍肥大なり。

●(二五一)チヤバネゴキブリ(Phyllodromia germanica, Steph.)六月二十一日、以下の各種は本誌第八十二號乃至八十五號に揭載したれば、玆に其記載を畧す。

●(三〇八)ナナフシムシ (Lonchodes niponensis, Dehaan.)六月廿一日。

●(二七七)カマキリ(Tenodera Capitata, Sauss.) 九月九日。

●(二五〇)コカマキリ (Pseudomantis maculata, Thunf.)六月廿一日。

●(二四九)ハラビロカマキリ (Hirodula bipapilla

Serv.)九月九日。

●(二五八)トノサマバッタ(Pachytylus determinatūs, Thunb.)八月廿七日。

●(二五五)クルマバッタ(Oedaleus marmoratus, Thunb.)八月十日。

●(二六一)ヒメバッタモドキ(Trilophidia annulata, Thunb.)採集月日不明。

●(二九〇)イナゴ(Oxya velox; Fabr.)十月四日。

●(二七九)ハネナガイナゴ(Oxya Sp?)八月二十六日。

●(二五四)アシベニイナゴ(Eupreponemis plorans, Charp.)九月十日。

●(二五二)ナキイナゴ(Gn? Sp?)七月四日。

●(二五三)シヤウリヤウバッタ(Truxalis nasuta, Linn.)九月九日。

●(二六二)オンブバッタ(Atractomorpha Sp?)八月廿六日。

●(二五六)キチキチバッタ(Gn? Sp?)採集月日不明。

●(二六〇)ツチイロバッタ(Criotettix bispinosus Dalm.)四月廿八日。

●(二六三)ハネナガバッタ(Paratettix histricus, Stal.)五月一日。

●(二五九)ヒシバッタ(Tettix japonicus, Dehaan.)五月廿七日。

●(二七三)クダマキモドキ(Holochlora brevifissa, Brunner.)八月廿五日。

●(二七〇)ヒメクダマキモドキ(Phaneroptera nigo-antennatu, Brum.)八月十日。

●(二七八)クツハムシ(Mecopoda elongata, L.)九月十日。

●(二七四)ハマオヒムシ(Locusta plantaris, D. H.)九月十日。

●(二七一)クサキリギリス(Conocephalus fuscipes, Redt.)八月廿六日。

●(二五七)クビキリバッタ(Conocephalus thunburgi, Stal.)四月廿四日。一名ツユムシ。

●(二七二)カヤキリギリス(Conocephalus Sp?)八月廿二日。

●(二六四)ヒゲナガサヽキリギリス(Xiphidium longicorne, Redt.)九月九日。

●(二六五)ヒメササキリギリス(Xiphidium Sp?)八月廿七日。

●(二六九)キリギリス(Gomphoscelis mikado, Bur.)八月二日。

●(二七六)ヤブキリギリス(Locusta japonica, Brun.)七月三十日乃至九月十二日。

●(二九一)エビコホロキ(Diestrammena marmoratus, Brun.)九月廿七日。

●(一五二)ノミバッタ(Tridactylus japonicus, De-

haan.)五月一日。

●(二六六)エンマコホロギ (Gryllus chinensis, Web.)九月十日。

●(二六七)ミツカドコホロギ (Loxoblemmus Haanii, Sauss.)九月九日。

●(二六八)オカメコホロギ (Loxoblemmus equestris, Sauss.)八月三十日。

●(二八〇)スズムシ(Homoeogryllus japonicus, D. H.)九月十六日。

●(二七五)マツムシ (Calyptotryphus marmoratus, D. H.)九月十日。

●(二九二)マダラスズ(Gn? Sp?)九月廿八日。

## ◎對馬國産の昆蟲（三）（平田駒太郎氏送附）　名和昆蟲研究所分布調査部

●ノコギリカミキリ(Prionus insularis, Motsch.)体長一寸一分體扁平にして全體黒く前胸特に光澤あり、觸角鋸齒狀をなし、前胸の兩側には鋸齒狀突起を有し、複眼甚だ大きくして赤褐色を帶ぶ。

●クロカミキリ (Spondylis buprestoiles, L.) 體長七分、體稍圓筒形をなし、觸角短く一分六七厘を算す、全體黒色にして腹面は色稍赤味を帶ぶ、

●セスヂカミキリ(Xystrocera globosa, Oliv.) 體長八分内外稍細長なる種にして、觸角濃褐色を帶びて長く體の二倍以上に達す。胸部濃褐色を呈し深綠色の環紋ありて中央縱に一條を畫す。翅鞘褐色にして中央及邊緣に深綠色の縱線あり。前肢短かく其腿節殊に太し。

●タケベニカミキリ (Purpuricenus lemminckii, Guirin.) 體長四分乃至六分、前胸及翅鞘紅色にして他は全體黒色なり、前胸背には五個の黒點を有し、稀には翅鞘に二個の黒點を有するあり。

●モンクロベニカミキリ（新稱）(Purpuricenus spectabilis?) 體長八分、頭部及觸角は黒く、前胸球狀にして紅色を帶び、五個の黒紋ありて兩側に刺狀突起を有す。腹部大きくして翅鞘紅色に、其基部に二個の黒紋と下方に帽子形の黒紋を有す、肢は黒色なり。

モンクロベニカミキリ圖

●コスギカミキリ(Semanotus rufipennis, Motsch.) 體長三分、前胸球狀にして黒く、觸角先端に至るに從ひ褐色となる、翅鞘暗赤色を帶ぶ。

●ミドリカミキリ (Callichroma tenuatum, Bates.) 體長五六分細長の種にして腹端細くなり、全體緑色を帶ぶ。觸角黒く前胸の兩側に刺狀突起あり。肢は紫黒色を帶びて後肢は甚長し、此種は色澤に變化多し。

●オホミドリカミキリ (Chelidonium quadricolle, Bates.) 體長九分内外細長の種にして、觸角長く

體の二倍に達し、頭部及翅鞘は深綠色を帶び、前胸藍色にして兩側に突起あり、肢は紫黑色にして後肢は甚だ長く、前種に酷似して翅色變化多し。

●トラカミキリ(Clytus chinensis, Chevr.) ●コトラフカミキリ(Clytus Sp?) ●タケノトラフカミキリ(Clytus annularis, Fabr.) 以上三種は本誌第八十九號に記載あるを以て茲に畧す。

●ホシベニカミキリ(Scotinauges diphysis, Pasc.) 體長七、八分暗紅色の種にして、前胸の中央に一個の黑紋あり。兩側には刺狀突起を有す、翅鞘には黑點を撒布すれども其數一定せず。肢は黑し、(本誌前號及第七十五號參看)

●キボシカミキリ(Gn? Sp?) 本誌第八十七號及第八十八號參看

●トビイロスヂカミキリ(新稱)(Gn? Sp?) 體長八分觸角體より長く、頭胸部は黑點と黃色との斑紋を有して一見暗褐を呈す、翅鞘には鳶色の縱線を有して灰色と黑色との斑紋あり、肢は灰黑色なり。

●ホシカミキリ(Melanauster chinensis, Forster.) 一名ゴマカミキリといふ。

●オホシロカミキリ(新稱) (Olenecamptus Sp?) 體長六分六厘、觸角濃褐にして長く、(六節の中央にて折れたるを以て全長を知るに由なきも體の二倍以上に達せん) 頭胸の背面及翅鞘は白き短毛を密生して宛も白粉を裝びたるが如く、其兩側褐色の縱帶をなす、前胸は頭部と同幅にして圓筒狀をなし、肢は濃褐にして短かし。

●ヨツモンサビカミキリ(新稱)(Mesosa japonica, Bat.) 體長五分、腹部太くして稍扁く、觸角體と殆んど同長にして灰黃と黑色とを交互し、複眼は分れて四個となる前胸には四個の黑紋あり、翅鞘は灰黑にして黃褐の微斑を有す、肢は短くして赤黃斑あり。

●フサホシサビカミカリ(新稱)(Mesosa Sp?) 體長七分五厘内外複眼は分れて四個となり、體形前種に酷似し、觸角體より稍や長く黑色にして第一節は甚だ太く、各節の基部灰黃色を帶ぶ。前胸の中央橫に瘤狀隆起をなし、兩側に各二個の短かき刺狀突起を有す。翅鞘は褐色にして毛より成りたる大小幾多の黑點を滿布し、基部にある二個は大きくして總狀をなす。肢は黑くして灰黃斑を有し腹面より見れば、肢の基部暗紅色を帶び、腹部には四對の暗紅色點を印す。

●キクスヒ(Phytoecia ventralis, Chever.) 體長三分黑色の種にして、前胸の中央に一個の赤紋あり肢は黑色なれども腿節は褐色なり。

●オホキクスヒ(Oberea japonica, Thunb.) 一名リンゴカミキリといひ體長五、六分細長の種にして、頭部及觸角黑く、中胸部黃褐を帶び、翅鞘は黑色にして基部は黃褐を呈し先端刺狀に突起す。肢及腹面は黃褐にして、腹端の一節は黑し。

## 通信

### ◎稻刈株螟蟲越冬調査

宮崎縣農事試驗場　兒玉龜太郎

稻の大害蟲たる螟蟲は、吾宮崎縣下に於て稻刈株には如何なる場所に最も多く、亦稻藁中には二、三化性共に潜伏越冬するや否やを調査研究せんが爲め、余は本年三月九日より十五日間を費し、宮崎、兒湯二郡の內八ケ村を調査したり。其調査方法は之を四區に別ち、濕田、乾田及麥田の刈株各貳拾株宛、亦貯藏藁壹把に就き有無幷生死を調ぶるにあり。先づ郡役所、郡農會に照會し、昨年其所轄內にて比較的最も被害の多き村落を調査したるに、二化性三化性共最も多く越冬するは乾田を第一とし、次は麥田に散在せる稻株なり。濕田には殆ど越年するものなし、之れ湛水の爲め死滅するものならんか。藁稈には二化螟蟲のみにして三化性更になし。三化螟蟲は乾燥を嫌ふとは一般の唱ふる所なりしが、果して然るなり。今其調査の結果は左表の如し、若し讀者諸彥の參考の一助とならば幸甚。

| 區別＼調査町村 | | | 宮崎郡大淀村 | 同郡住吉村 | 同郡那珂村 | 同郡廣瀨村 | 兒湯郡富田村 | 同郡都農村 | 同郡川南村 | 同郡下穗北村 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 濕田 | 二化性 | 生 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 |
| | | 死 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| | 三化性 | 生 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 | 二 |
| | | 死 | 〇 | 〇 | 二三 | 六 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二八 |
| | 痕跡 | | 九 | 一六 | 二 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 一六 | 四五 |
| 乾田 | 二化性 | 生 | 一二 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一三 |
| | | 死 | 二 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二 |
| | 三化性 | 生 | 〇 | 五 | 〇 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一七 | 二七 |
| | | 死 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 一 | 〇 | 一 | 七 | 一〇 |
| | 痕跡 | | 三七 | 三 | 七 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 五二 |

| 麥田 二化性 生 | 麥田 二化性 死 | 麥田 三化性 生 | 麥田 三化性 死 | 麥田 痕跡 | 藁稈 二化性 生 | 藁稈 二化性 死 | 藁稈 三化性 生 | 藁稈 三化性 死 | 藁稈 痕跡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五 | ○ | ○ | ○ | 七 | 七 | ○ | ○ | ○ | 五○ |
| 一 | 一 | ○ | ○ | 二一 | ○ | ○ | ○ | ○ | 三三 |
| ○ | ○ | ○ | 九 | ○ | 一 | ○ | ○ | ○ | 一 |
| 二 | ○ | 四 | 五 | 一六 | ○ | ○ | ○ | ○ | 二 |
| ○ | ○ | ○ | ○ | 一 | 一 | 一 | ○ | ○ | 五 |
| ○ | ○ | 一 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 二七 |
| ○ | ○ | 一 | 六 | 一 | ○ | ○ | ○ | ○ | 七八 |
| 五 | ○ | ○ | 三 | 二 | ○ | ○ | ○ | ○ | 九 |
| 一三 | 一 | 六 | 二三 | 四八 | 九 | 一 | ○ | ○ | 二○五 |

備考　濕田は刈取後絶ず湛水のもの。乾田は稍や濕潤なるもの。麥田は麥作の間に放棄せる稻株。藁は小屋内に貯藏のもの。

右の表に依て見るときは其數尠少なるが如くなりと雖、藁を除くの外は、僅に一反歩の七百五十乃至九百分の一に過ぎず。故に之を一反歩ニ換算するときは、實に驚く可き多數なるを信ずるなり。

## ◎三重縣阿山郡昆蟲研究擔當人會の協議事項

三重縣阿山郡昆蟲研究擔當人　西岡嘉十郎

本郡昆蟲研究擔當人協議會は、去る二日午前九時より郡衙内に於て開催せられ、左の協議事項を決議したり。

(一)明治三十六年八月發布擔當人規定の履行に力むること。　(二)調査の精確を期すること。一ヶ所にても誤謬ある時は、郡表の成蹟を亂す可し。　(三)明治三十七年度調査の概評。　(四)螟蟲調査の件　(イ)誘蛾燈に對する有卵無卵の蛾數調査。一前期は五月廿日より六月廿日迄とし、後期は八月五日より三十一日迄とす。一報告例前年の通り。一點火の位置は遠く變更す可らず。一卵の有無は精確に調査を要す。一點火後初めて十蛾以上の誘殺を認めたる時は本郡役所及び其町村役場へ急報のこと。(ロ)卵蜂調査　一前期の調査に止む。一方法は前年に準ずと雖も、六回の採卵を八回と更正す。一卵塊の附着せる葉のみを摘み取り紙袋に封ずること。一密封するを要す蜂の羽化脱出することあり。一卵塊は殊更らに撰擇す可らず。一密封したる卵塊は乾燥に失せざる樣注意す可し。(ハ)時期による螟蟲蟄伏數調査　一切り採りに際し余り遠く位置を換へざるを可とす。一方法及び報

告例は前年の通り。一切り採りは可成早くより之を初む可し。一斃死蟲は寄生に多きか、又病菌に多きかを備考に記入す可し。(ニ)藁置場及冬作田と苗代田との誘蛾數調査　一苗代に於ける一齊點火中は、同時に藁置物及冬作田に點火し、各所に於ける誘殺蛾數の多少を調査せんとす。(五)浮塵子調査の件　(イ)各期に於ける發生經過の狀態を調査し報告のこと。(ロ)苗代に於ける驅蟲準備、並に各期に對する驅除方法時期等は、必ず一般に對し摸範の實を期すること。(六)其他の害蟲に對しても常に視察に勉め異常の形跡を認めたる時は報告を怠る可らず。(七)每に標本を製し實物的に講話に一般を誘導すること。以上

## ◎昆蟲に關する葉書通信（第四十九報）

(二六九)埋木の蟲喰　(靜岡縣岡田忠男)余は昨年十一月二十二日、富士山麓の勢子辻と云ふ所に行きたり、其時其處では神代木を發掘しありしが、先年名和先生より化石の話を聞きしことありしかば、直ちに埋木中の昆蟲の搜索に懸りしも一つも發見せざりし。唯蟲喰の木と稱し、直徑一、二尺の木に、多くの小さき縱穴の明き居たるを發見したり。依て堀人に問ひしに答へて曰く、是は古代蜂の爲めに斯の如き狀を呈したるなりと。故に蜂の一部分なりとも發見せんと、大に搜索したりしも遂に一も發見し得ざりしは殘念なりき。孰れ尙今後一層搜索する積りなるも、埋木間で昆蟲を發見するは容易ならず、唯穴の明きたる蟲喰と云ふを見出したるのみ。

(二七〇)共進會と昆蟲　(同人)此頃靜岡縣濱松市に開ける東洋輸出品共進會を見しに、陳列場の天井は一面に糸瓜棚で糸瓜は下垂し、其間には靑葉と紙製金色の蜻蛉の飛び居る樣、又土城十太郞氏の出品は、糸瓜にて蜻蛉の形二つを作りありし意匠は巧なりし。其他濱松織田利三郎氏の出品の參考品には、生姜螟蟲の酒精漬あり、靜岡縣農事試驗場の出品には、生姜螟蟲及夜盜蟲の經過標本、及び驅除劑數品ありし。靜岡縣漆器同業組合出品の漆器には。蝶の繪を多く畫かれしもの多かりき。是等は此會の昆蟲に關係したるものゝ重なるものなり。

# 雜報

## ●害蟲驅除豫防方法（續）

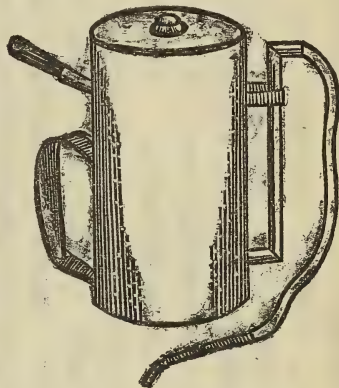
本誌前號に其一部を照會せし岐阜縣告示第四十四號を以て發布せられたる害蟲驅除豫防方法の續き左の如し

●五切蛆　一稻苗代に一旦深く水を湛へ該蟲の畦畔に這ひ上りたる后苗代田の周圍に溝を掘り該蟲の侵入を防ぐべし。備考　切蛆は永く水中に潛みて呼吸する能はざるを以て若し苗代田に發生したるときは一旦灌水を深くすべし然るときは切蛆は周圍の畦畔に上るべし此時四周の溝を深くし再び該蟲の侵入するを防ぐべし　一成るべく幼蟲卽ちキリウジ、蛹、成蟲卽　キリウジカガンボを捕殺すべし　●六稻蝨　一五、六月頃始めて田面に灌水するの際浮ぶ所の卵を採集し之を肥料瓶に投ずべし。二稻苗代に於て捕蟲器を以て幼蟲を捕殺すべし　●七彪蟲　一稻苗代に於て捕蟲器を以て捕殺すべし又被害甚しきときは葉先黃變部を切取り之を燒却すべし　●八椿象　稻抽穗の際咽喉付捕蟲器の類に拂ひ落して驅殺すべし　●九葉蟲　一ドロハムシは稻苗代及本田（移植后七月頃まで）に於て成るべく深く灌水し石油を注ぎ拂ひ落して驅殺すべし。備考　一反步の注油量は石油又は輕油凡一升五合を標準とすべし又幼蟲の群集せるものは藁箒の類を以て拂へば之れに附着するを以て併て之をも驅殺すへし。二クワハムシ、ヒメハムシ五月より七月までに於て廣口の捕蟲器に拂ひ落し驅殺すべし　●十象鼻蟲　一イチゾウムシは苗代及本田に於て捕蟲器の中に拂ひ落して驅殺すべし。二ヒメゾウムシは冬季桑樹の枯枝を切り之を燒殺すべし又四月乃至九月の頃に發生したるときは廣口の捕蟲器中に拂ひ落し驅殺すべし。備考　ヒメゾウムシば桑樹の刈枝の殘梢の枯死せる部分に蝕入し越冬し居るを以て小鋸にて之を切取り直ちに之を燃料となし燒殺すべし又該蟲は他の襲擊に遭ふときは死狀を爲し直に落下するの性あるを以て其性質を利用し左圖の如き廣口の捕蟲器を受け拂ひ落して驅殺すべし。三ナシゾウムシは五、六月頃廣口の捕蟲器に拂ひ落して驅殺すべし又梨果の落ちたるものは直ちに拾ひ集め適宜の方法を以て其の內の幼蟲を驅殺すべし。備考　落ちたる梨果は直ちに之を拾ひ取り肥料瓶に投し幼蟲を死滅せしむる等適宜の方法を執るべし　●十一天牛　一秋季產卵したる個所を搜索し卵及幼蟲を潰殺又は刺殺すべし。二夏季成蟲を驅殺すべし。三春夏季樹幹より蟲糞の排出せる所より驅殺劑を注入して驅殺すべし。備考　驅殺劑は除蟲菊粉一匁を溫湯一合の內に入れ能く攪拌し左圖の如き注射器に容れ注入すれは幼蟲卽ちテツポームシを驅殺し得べし但水を以て除蟲菊粉を溶く場合には一晝

廣口蟲器

凡三尺五寸

注射器

鐵葉製にして五、六合入のもの口はごむ管を付し注射口は硝子管を付するを便とす

夜浸漬すべし　●十二小蠶蟲　一秋、冬季に於て被害部を切取り直ちに燒棄すべし　●十三尺蠖　一エダシヤクトリは冬、春季に於て幼蟲を捕殺すべし。但黑色に變じ樹上に斃死せるものは益蟲の寄生に罹れるものなるを以て其儘になし置くべし。二トゲシヤクトリは四、五月頃幼蟲を捕殺すべし又冬季根際の土を掘起し蛹を乾殺せしむべし　●十四葉捲蟲　一クワノシンムシは春季桑芽の枯凋したるものを摘採し其中の該蟲を殺すべし。備考　シンムシの蝕入するや嫩芽枯凋黑變の後數日を經過せば化蛹の爲他に移轉するを以て加害期中は時々驅除を怠る可らず又益蟲保護の一法として左圖の如く摘採したる桑芽を籠に入れ肥料瓶の上に凡一週日以上吊し置きたる後之を其肥料瓶に投ずべし。蠶糞は直ちに田畑の肥料となさず一度肥料瓶に投入し腐敗したる後に用ゆべし。備考　シンムシの蛹化せるものは桑の青葉中に存在せるが故に之を判別し難く隨て他の桑葉と混じて給桑すること多し依て蠶糞中に混在せる蛹を驅除せんが爲に一旦肥料瓶に投ずるなり。秋季枝元の桑葉を摘採し堆肥となすか又は秋蠶の飼料に供すべし。備考　シンムシは桑葉に產卵して發生し秋季落葉前幹枝に移轉して越冬す依て其移轉に前ち之を摘採して秋蠶に用ゆるか又は堆肥となし其蠶糞は前項の如く腐熟せしむれば驅殺の目的を達するを得べし然れども桑葉の全部を摘採するときは桑樹を枯死せしむることあるを以て枝末の新葉は之を殘し置くべし又產卵せる桑葉は枝元に多く枝末の桑葉には產卵せざるを以て之を採るの必要なきなり。二イトヒキハマキムシは樹皮に附着せる卵塊は石油又はコールタールを塗抹するか又は削り取るへし幼蟲は廣口の捕蟲器内に拂ひ落して驅殺すべし。三クワハマキムシ及チグロハマキムシは幼蟲は葉と共に潰殺するか又は摘採して肥料瓶に投入すべし、冬期樹皮の裂目、朽木及落葉間等に潛伏せるものを驅殺すべし　●十五蛅蟖　一キンケムシは五、六月頃幼蟲を捕蟲器等の中に拂ひ落し驅殺し又六、七月頃葉裏にある繭及卵塊を摘採驅殺し又冬季樹皮の裂目又は枯葉間等に潛伏せるものを驅殺すべし。二クワケムシ五、六月頃幼蟲

を捕蟲器等の中に拂ひ落し驅殺し又九月頃葉裏にある卵塊及び秋季枝葉に幼蟲の群集せるものを共に摘採驅殺すべし。三ホシハマキムシは五、六月頃幼蟲及蛹を葉と共に摘採驅殺すべし。四チヤケムシは冬季葉裏にある卵塊を摘採して驅殺し又四、五月幼蟲の群集せる枝葉を剪伐驅殺すべし。備考　其附近にある山茶科植物にも發生するを以て注意驅殺すべし　◉十六避債蟲　一五、六月頃發蛾前に於て被害樹は勿論附近の樹木に附着せるものを捕殺すべし　◉十七夜盜蟲　一春又は秋季に於て幼蟲を驅殺すべし。二被害植物の根際に藁等を布き其下に集まるを俟ち驅殺すべし。三畑の周圍に空溝を掘り陷落するものを驅殺すべし。備考　ヨトウムシは隊伍を爲し移動するの性あり故に畑の四邊に幅凡五寸深凡一尺位の溝を掘り一旦陷落すれば又上り難き樣急峻に爲し置くべし又其溝底に深き小穴を穿ち漸々移轉するに際し更に此の穴中に墜落せしめ驅殺すべし、空溝を設くるときは他に蔓延せしめざるの利あり　◉十八偽瓢蟲　一六、七月頃捕蟲器の中に幼蟲及成蟲を拂ひ落し驅殺すべし。

## ◉小學校生徒の昆蟲採集記

愛知縣寶飯郡赤坂高等小學校生徒一同は、去る二月中職員指導の下に冬季昆蟲採集を行ひ、且一般に之が記文を綴りしことは豫て田中校長より承知せしが、此程該記文全部を得たれば、紙面の許す限り順次照會することゝなしぬ。

冬季昆蟲採集の記（一年生城所孝）　昆蟲は夏にかぎらず、冬にてもすみ居るものなり。夏は外に出で多くの害をなし、冬は草木などの根にかくれをるものなり。余は二月十四日の日、多くの生徒とともに、田中先生につれられて、池のつゝみに昆蟲採集に行きたり其時、びんは勳君と共有なりければ、勳君とともに、あちこちとさがしつゝ歩み、蚊の一種類なる蟲を二匹、ドロツトムシ、チヤバチアブラムシ等を捕へ學校に歸りたり◉（同細井佐市）吾等は先生につれられて、征露二年二月十四日、すなはち火曜日体操の時間にいけがうちに行きたれども少しもとれず、しかし、よく草をわけて見ればチヤバチアブラムシ、ウンカ、ドロツトムシなどをえたりなほも草をわけて、さらんとしたるに、はや時間はき、ふゑはなりたれば、たゞちにならびて、學校に歸りたり。そののち二三日すぎ、學校のうんどーじよーのすみのどてのところにてツチハンメウ、ヒシバツタ、カメムシの一種、ハネカクシをはたり。昆蟲はこのよーに冬にても居るものなれば、冬中にとれば大に夏の豫防となる也◉（同松田勳）我は二月十四日の風そよ〳〵とふくうらゝかなる日、田中先生につれられて池川地に行きたり。これは冬季昆蟲採集をなさんが爲めなり。我は城所孝君とゝもに昆蟲を取りたり。すべて昆蟲には害蟲と益蟲とのくべつあり。其の中の害蟲は種子などの害をなす。冬季採集は夏のよぼーなり、とらへたる昆蟲の名はチヤバチアブラムシ、ドロツトムシなりき。我と孝君とは大に喜びたり◉（同永井兼次）我は二月十六日に家のやぶの木より、赤かみきりをとりました。この蟲は、たもの木にをります。冬は其たもの木のしんを食ふ。夏になるとはれがはへてさきにいつた、たもの木より出でゝ、ほうぼうにとまつてをります。人はほちゆーきなどで、其の害蟲をとらへてごくびんにいれます。冬昆蟲をとるのは夏のため◉（同中島末三郎）二月十四日には先生といつしよに、いけがうちに昆蟲をとりに行きました。私は野で日あたりをしてを

りましたが、それから蟲を取りました。私が石をおこして見ましたら、黒きかめ蟲が出たから、私はよろこんで先生のところにもちてゆきまして、先生にあげました。それからごみをとつて見ましたら、キリウジのよー蟲がおりましたから、又先生のところにもちて行きました。それよりみぞを見ましたら、ドロツトムシがおりました。それ取りて先生のところにもちて行きました。それより歸りました◉（同原田角藏）吾等は二月十四日、すなはち火曜日体操の時間に、田中先生につき從ひて池のつゝみに、昆蟲を捕りに行き、つゝみの下の細き川べにて、ドロツトムシ、トンボの幼蟲等を得たり。なほ、つゝみにて草をわけ、石をとりあげ見れば、ブチブチムシ（コメツキムシ）といふ蟲を得たり。此らの蟲は毒瓶のせんをぬきて入れ、せんをさしたり。此の毒瓶は、余と安茂君と共有の物なりき。此より此の昆蟲を見、大いにうち喜びて學校に歸りたり◉（同白井つれ）私は二月十四日に先生につれられていけがうちに昆蟲をとりに行きました。昆蟲と云ふものは冬でもをるものであります。冬になりますと、あぜや土の下にかくれてゐて、夏になれば出てがいを致します。私は先日、昆蟲をとりに行つて、あぜをさがしてをりますと、ぶーび蟲のいつしゆと、と蟲とが出てきましたから捕へました◉（同磯野かつ）私は二月十四日に池がうちのところへ、田中先生といつしよに、むしをとらへにゆきまして、二人のくみで、水かまきりに、くろごみむしに、水すましなどをとらへました。冬でも昆蟲はこのよーに居ますから、冬のうちに、夏のよーじんをするのがかんよーです◉（同高田たつ）私は二月十四日に、田中先生につれられて、いけがうちのほーへいつて、くみの人と二人で、むしをとりました。むしのなは、こおひむし、水すまし、などでした。いまでは、むしは、寒くありますから、石の下や、草の中や、いしかけの間にをります。また夏になると、その蟲が皆でますのですから、冬のうちに捕へるのは、夏の助になるのです◉（同井上ぎん）こんちゆーは、冬でも居ります。二月十四日に、田中先生といつしよに、いけがうちのほーへ、こんちゆーをとらへにゆきました。ところが私が稻のかぶちをさいてみましたら、ずい蟲がをりましたから、捕へました。冬とつておくと、夏のためになるのです◉（同中村エツ）私たちは、二月十四日に、先生が、二人づゝのくみをつくつて下さいましたから、先生とゝもに、池がうちに昆蟲をつかみにゆきました。昆蟲は冬でもをりまして、なつは、そとにでゝいますが、冬は石の下や草のなかなどにいますから池のきはの、草のあるところをさばいて、みづかまきりと、こおい蟲とを、つかみました。

◉**征露紀念昆蟲採集**　征露第二年四月十一日より、第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習會を名和昆蟲研究所内に開設し、岐阜縣巡査教習所には、害蟲驅除の學科を加へられてより、既に三回の卒業生を出し今や第四回の授業中なりしかば、岐阜縣短期害蟲驅除講習會の開かるゝを好機とし、合同して征露紀念の爲め、養老山に昆蟲採集を試みしに、總員八十余名を二軍に編成し、總司令官名和梅吉氏指揮の下に四月十六日午前七時岐阜發西行列車にて大垣驛に下車し、夫れより徒歩して綾野、大坪、飯田、直江、高田等の諸村を過ぎ養老公園に着し、暫時休養の後戰鬪開始の令下るや、各々得意の武器を振ふて縱横

無盡に獲物を追ひ、遂に其獲る處意外に多く、總司令官は、現場に於て獲物に就き、夫々說明或は批評を試みられ、各自得る處多く、同日午後三時歸途に就き、六時大垣發列車にて無事歸所したり。因に横井大垣警察署長、西村高田警察署長林同巡査部長は此の一行に加はりて種々の便宜を與へられ、特に河田西濃印刷株式會社主事は此擧を賛し、大垣と養老てふ案内記を寄贈せられたるが、今其案内記中昆蟲に關する記事は左の如し。

養老山昆蟲採集案內

昆蟲類は山林原野を擇ばず池沼河水の別ちなく各特殊の種類の棲息するありて何れに採集を試むるも獲られざるの地なかるべし然れども饒多の種類を獲んとせば植物の種類多き山林に索むるを良しとす養老山は植物に富み隨て昆蟲の異種多く採集の好適地なれば近來昆蟲學の發展と共に此の山水明媚の地に昆蟲採集を試むるもの漸次多きを加ふるに至りたれは此の地に於て獲らるるもの丶中にて珍種に屬すべきもの數種を紹介せんに鱗翅目の　ギフテフ　アゲハモドキ　クロバセミヤドリ（セミヤドリガ）　カラスバアゲハ　オナガアゲハ　ヒメイチモジ　ハナセヽリ類　毛翅目の　大黑カゲロフ　直翅目のトビナナフシ　其他有吻目の蟬類　甲翅類のミヤマクハガタムシ等は其重なるものなるが普通なる種に至りては枚擧に遑あらず且一度叩網採集を試みたらんには實に珍種異品の多き驚くべきものあり又大垣より養老に至るの間に於て獲らるヽ種類亦尠少にあらず

◎第三回岐阜縣長期害蟲驅除講習會　同會は去る四月五日より一ヶ年の豫定にして、名和昆蟲研究所內に開會せしが、入會者郡上郡野口次兵衛氏、安八郡野田稻司氏の二名なるも、兩人とも非常の熱心にて日夜研究に餘念なければ、定めて好成績を擧げらるならん。

◎第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習會　は、去る四月十一日より二週間、名和昆蟲研究所內に開會せしが、出席會員三十三名にて、每日午前八時より十二時迄、昆蟲學大意、昆蟲分類法、害蟲驅除豫防法の授業をなし、午後一時より四時迄は野外實習、或は藥劑の製法、其他驅除豫防に關する法令等の研究、其他午後七時半より九時迄自修をなし、廿四日証書授與式を擧行せり。今其式の次第を記さ

んに、川路知事代理として吉田事務官より証書を授與して一場の告辭をなし、以て名和講師の訓諭、十時不破郡長の祝辭朗讀、江崎講習生惣代の答辭にて式を終り、後紀念の撮影をなして無事終了を告げたり。今其祝辭幷答辭等を掲ぐれば左の如し。

## 祝　詞

書に曰く、民は是れ國の本、本固ければ國康しと、誠なる哉此語や、苟も茲に國土あれば必ずや之れに伴ふ國民あり、茲に國民あれば必ずや社會の構成を要す、從て之れが活動を扶くるものなくんばあらざるなり。何ぞや、財政即ち是なり、假令ひ皮相的美觀の國家あるも、財政の基礎確立せざるときは、國權を伸張して富强の實效を奏すること能はず、故に地方經濟の整理發達は、最も緊要のことに屬す。果して然らば、何を以てか之れを云ふ、殖産興業の實利的進歩に俟たざるべからず。即ち孜々汲々官民一致、斯業の改發に勉めずして可ならんや。維時明治三十八年四月廿有四日、茲に害蟲驅除講習會修了證書授與の式を擧行せらるゝに當り、不肖參吉郎此席末に列するの光榮を得、何の幸か如之哉、故に一言以て祝意を表せんと欲す。惟ふに害蟲の農産物に損傷を與へ、延ひて農家經濟に多大の影響を及すことは爭ふべからざるの事實たり。故に我縣知事閣下は、夙に之れが驅除撲滅の方法を講究し、大に殖産事業をして改良發達せしむるの方針を採り、鋭意勸奬せられ着々其効を奏しつゝあり、今又各郡に令して生徒を募集し、害蟲驅除講習會を開設せられ、本日を以て之れが終りを告げ、親しく臨て修了の證書を授與せらる、生徒諸氏の光榮何物か加之。蓋し、生徒諸氏か勉焉從事したるの結果たるべしと雖、抑亦名和講師の、學理に基き實驗に徵し、懇篤なる薫陶に由るにあらずんば焉ぞ能く如此哉、然らば即ち諸氏は此名譽を負ふと同時に、其責任の重且大なることを覺悟せざるべからず、何となれば、將來各郡に於ては害蟲を驅除し、産物を增殖し、地方經濟の鞏固を謀んは諸氏の手腕に俟つもの大なればなり。況や諸氏が熱心從事して、講習の實効を擧ぐるは即ち師恩に報ゆる所以なるに於てをや。而して國家活動の基礎たる民力をして益々確實ならしめ、二十世紀の帝國臣民として耻ぢざることを勉めずして可ならんや、今此場に列し欣喜措く能はず、聊か蕪辭を述べ謹で祝詞に代ゆと云爾。

明治三十八年四月二十四日　　岐阜縣不破郡長從六位勳六等　十　時　參　吉　郎

## 答　辭

岐阜縣第八回短期害蟲驅除講習會は、本日を以て所定の科目を修了し、茲に修業證書授與の式を擧げられ、知事閣下及び來賓諸賢の臨席を辱し、加ふるに懇篤なる告諭を以てせらる、生等の光榮何ものか之に如ん。抑も萬般の事利を興さんと欲すれば、必ずや先づ之が害物を除去せざるべからず、殖産力の增進は諸害蟲の驅除豫防に如くはなし、然りと雖も完全に而も經濟的に之が驅防を行わんと欲すれば、須からく害蟲の習性經過を知らずんば能はず、生等短日の講習なりと雖も、講師の懇篤熱心なる薫陶により、幸ひに其一端を窺ふことを得たり。自今以後講師の教訓を實行し、軀を以て驅除豫防の衝に當り、觀察を鋭敏にし、研究を精確にし、以て講

師の高庇の萬一に酬ひ、併て告諭に背かざらんことを期す。聊か蕪辭を陳して答辭とす。

講習生惣代　江崎九郎助

明治三十八年四月二十四日

### ◉再び警察官と昆蟲學

本誌第八十九號（一月發刊）の本欄中に、警察官と昆蟲學と題して少しく記載したるとあり。其後の實況を記せば、巡査敎習所の方は全く第三回を終り、目下は第四回目の授業中なりと云ふ。尙ほ終業の人員は約七十余名岐阜警察署部內の巡査（駐在巡査を併せて約八十名）を毎月二回宛の招集日午後二時間を應用して、漸次昆蟲學思想を養成するの計畫ありし事は既報の如くなりしが、愈々窪田警視の熱心よりして、去る二月より始まり本月末を以て結了する事と確定せり。假令講話時間の僅少なりとはいへ、斯學思想の發達せし事は實に意外なりと云ふ◉岐阜縣巡査敎習所の敎官廣瀨警部の熱心により、四月十六日を期して敎習所の第百期生三十二名と、第八回岐阜縣害蟲驅除講習生三十二名と征露紀念昆蟲競爭採集を養老山に試みたるに、遂に警察官の勝に期したりと云ふ。大ひに注意すべき事なり◉岐阜縣關警察署內には、尤も參考となるべき害益の昆蟲標本多數を蒐集して一塲に陳列せりと云ふ、其主任は笹島部長にして、常に巡視の際に於て集めらるゝは素より、駐在巡査の招集日には夫々携帶せるものをも一々整理して保存せると云ふ、實に熱心と云ふの外なし。過日當名和所長も一覽して驚かれたるが、一々實地に適當なるものゝみにして、部內に發生の害蟲驅除施行の際には、直に適當なる參考品となる由なり◉其他各警察署に於ても追々昆蟲講話會を開かるゝ趣きなれば、漸次報導する事あるべし◉岐阜警察署に於ては害蟲驅除豫防に關する注意書を印刷し、部內の各駐在巡査の去る招集日に際し、夫々注意の上受持ち部內の各區長へ向け、直接巡査より配布せしめて害蟲驅除の完全を期せらるゝは、全く窪田警視の熱心より出でたりと云ふ、何れも斯くありたし、其注意書は次の如し。

本年三月三日縣令第六號害蟲驅除豫防規則發布に付農民は第一左記に注意を要す。（一）害蟲が田畑に發生し、又は發生の虞あると認めたる時は、作人は直ちに驅除豫防に着手し、口頭又は書面を以て町村長又は警察吏に屆出べし。（規則第三條）。（二）稻苗代田の床地は幅四尺以內長さ適宜とし、各床の間隔八寸以上となすべし。（規則第八條）。（三）作人は害蟲を驅除すべき事を郡長又は町村長より命せられ、行はざる時は拘留又は科料に處す。（四）作人は本年に限り、苗代田を

明治卅八年何月何日許可

平蒔苗代

住所氏名

三尺以上

幅四尺以內長さ適宜、其間八寸以上の床地に作り難きときは、種を播かぬ前、事由を具し町村長を經て郡長に、市は市長を經て知事に願出で許可を受け、左記の樣式の標示になすべし。前項　第一、第二、第三、第四項に背むくものは拘留又は科料に處せらる。

◉三縣協同の桑樹害蟲心蟲驅除　桑樹害蟲心蟲は、岐阜縣に於ては今より三十年前、武儀及び益田二郡の一部に發生せしのみなりしが、爾後漸次蔓延して、縣下は素より隣縣愛知、長野兩縣を通し、廣袤廿餘里の桑園に蔓延するに至りしを以て、去る三十一年以來極力之れが驅除勵行を爲したる結果、稍効果を見るに至りしかど、尙全滅を圖らんが爲め、前記の二縣へ對し、三縣連合して協同的大驅除をなさん事を照會したるに、二縣に於ても之れに贊同し、發生地に對し驅除豫防を勵行すべき旨照會し來りたるに依り、岐阜縣に於ても、本月一日吉田本縣第三部長より左の通牒を各郡長へ發したり。

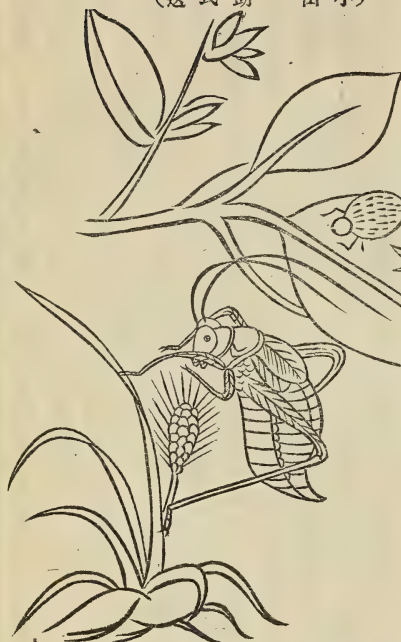
桑樹害蟲心蟲驅除豫防に就ては、數年來督勵の結果、較其成蹟を見るに至り、幾分被害の程度を減ぜしと雖も、未だ依然として加害を免るゝ能はざるのみならず、一面之れが發生區域を擴大したる地方之有を以て、若し本年之れが驅除豫防を縮假するに於ては、又加害の程度を復舊し、數年の辛勞を水泡に歸せしむるの遺憾有之れのみならず、本縣主要の生產業たる蠶業上に及ぼす處の損害は、當に個人の利害のみに止らず、延て本縣の生產力に影響する所尠なからざるを以て、本年は一層之れが驅除豫防を勵行し、該蟲の全滅を期する覺悟を以て嚴重に督勵相成度依命及通牒候也

追て貴郡に於て、本件に關する施設方法を設け、至急御回報相成度、尙本年三月本縣令第六號害蟲驅除豫防規則第四條の發生報告は遲滯なく其都度御急報相成度、爲念申添候也

◉害蟲驅除協議會　岐阜縣不破郡に於ては、去月廿九日午前十時より同郡役所に於て、過般修業せし第八回岐阜縣害蟲驅除講習修業生一同會合し、不破郡害蟲驅除研究會組織の件、及び本年の害蟲驅除方針に付き討議したる結果、研究會を組織し、十時郡長を會頭に江崎九郎助氏を副會頭に推選し、次で左の各項を遂行することを決し散會したり。

一害蟲及益蟲を採集して標本を作り、一般人民に周知せしむること。　一昆蟲標本を製作し郡農會へ寄附すること。　一十戶乃至二十戶以內に害蟲驅除委員一名を置き、町村會議員、區長等を悉く害蟲驅除實行委員に擧げて、今春苗代田短册形施行の際より之れが督勵の任に當らしめ、害蟲驅除講習修業生と協力一致し、驅除の實効を擧けしめんことを。各町村長に協議すること。　一捕蟲器を名作人に一個づゝ備へしむること。　一　地主をして、小作人に對し害蟲驅除を奬勵せしむること。

因に當日の會合には坂本縣屬も出席して懇しく協せられたり。

清人の畫きたる昆蟲摸様　（小田　助氏送）

◉小田勢助氏の消息　同氏は、當所に於て開設の第一回全國害蟲驅除講習會に入り、昆蟲學研究后熱心に斯學を研究し居られしが、開戰以來、某師團付として出征し、過日の奉天附近の大戰鬪にも參加せられ、目下某所に健在中、清人の畫ける昆蟲摸様を見當りたりとて、紀念の爲め摸寫して當所に寄せられたり。其末文に曰く「南京蟲や蝨が御入用なれば一ダース位は直ちに御送り可申候」と、不相變南京蟲軍や蝨隊の襲撃には、流石の日本軍も噤口さるゝならん。

◉山脇農商務書記官の來所　山脇農商務書記官は、商工業視察の爲め九州地方へ出張の歸途、四月十五日當市に立寄られたるが、恰も第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習開會中なりしを以て、特に一場の談話を請ひたれば、直ちに承諾して同夜講習生に對し談話ありたり。尙夜中の事なればとて、翌十六日再び來所せられ、親しく所內の摸樣を視察し、夫れより當市の重なる商工業家を巡視して、午後七時の列車にて東上せられたり。今講習生に對する談話の要領を左に掲ぐ。

農商務書記官演說要領

私は農商務省の書記官です、今回商工業視察の爲め九州地方へ出張して歸り路でずが、本縣は害蟲驅除法等も勵行せられ、特に名和先生は斯道を研究せられてあると云ふことは兼て聞き及んでゐましたが、斯く諸君が日夜を分たず研究せらるゝことは國家の爲

め實に喜しい次第であります。歸省の上は必ず此由を農商務大臣に復命する積りであります。凡て害蟲は農事に取りては年々多大の損害を與へてをるので、彼の米國の如きは綿の害蟲のみでも一ヶ年七千万圓以上の損害は確に與へたと云ふことであります。どうか諸君は滿州へ渡つてゐる我同胞軍人の事を思つて、能く能く研究せられて國家の爲めに盡されんことを希望致します。只一言の希望を陳べて挨拶に代へてをく次第であります。

◉來所の學生と昆蟲講話　當昆蟲研究所の昆蟲標本陳列室の縦覽希望の爲め、縣内は素より近縣よりの學生團体の來所者は意外に多く、其内重なる團体を記せば、滋賀縣師範學校女生徒三十一名、三重縣農學校生徒二十六名、愛知縣中島郡稻澤高等小學校生徒八十余名、並に愛知縣立名古屋高等女學校生徒約三百名等にして、必ず紀念として當所長より一場の昆蟲に關する講話をなし、且つ各生に對し昆蟲世界又は昆蟲に關する相當の印刷物を配布し、特に學生に斯學思想の普及を圖らるゝを常とす。

◉蝨の退治法と蚤の價　事稍々舊聞に屬し、一般讀者にも既に知れ渡りたる事ならんも、一は以て我忠勇なる征露軍の餘りに顯はれざる勞苦の一端を知り、一は以て死馬の骨に千金を投ずるよりも尚驚くべき話柄なれば、茲に錄することゝなしぬ

蝨狩の進歩として「幕營で蝨狩する小春哉」ポカ〳〵と小春日和の暖かい時シヤツとヅボン下とを脱で之を裏返し、さてドツカと腰をおろしたものだ。最前から一心不亂に縫目を見詰て居つた一人は、「これは驚た、殆んど一個大隊ばかりが此處の地隙に展開して居る哩といへば、又一人が「已の方には既に散開して、襟の隘路から胴の開豁地を前進中ぢや」とばかり須臾は默として探險に從ひつゝある中「エー取逃したか殘念じやナー」などと頓狂な聲を振り絞つて、男之助を極め込む者もある。イヤもう陣中たわいなさ、隙さへあればこの蝨狩に憂身を窶して居るのです、まして此頃は防寒のため身体は毛で固めて居るのだから、尙以てその跋扈跳梁憎むべきでどうにもかうにも仕方がない。尤も「蝨紐」とか「蝨とり粉」とか云ふものを内地から寄贈して來るけれども、それは一匹か二匹位の退治力はあらうが、大口徑の砲彈見たように、地下の岩窟から吹飛ばすほどの勢力ある藥品でない以上は、勝利に誇る蝨軍の鏖滅を期すことは出來ぬ。唯此に一つ何が幸になるか解らぬもので、嚴しい烈寒が蝨撲滅の方便を與へて吳れる、これがため幾萬の將卒愁眉を開いたといふ始末、その方法たるや、蝨澤山の服を夜乾しにするので、約そ零度以下何十度の寒天に晒して、蝨奴を凍殺して仕舞ふと云ふのです。若しそれ月冴えて朔風吹荒む處、衣を一竿に貫いて置くこと數時ならば、氷結して冷なること刃の如く、縫目々々の地隙に潜伏する部隊は、あへなく凍死の運命と相成るのである。而してこの夜乾しを實行するに先だち、晒すべき衣服に水を吹かけやうものなら、凍結の度一層を増して、蝨退治に非常の効力を増すこと神のごとし。と攻圍軍の最前線よりＳ Ｋ生の報として客年十二月二十七日發行の大阪每日新聞に見へたり◉又た蚤の價に就て驚くべき話柄あり、英人ロスチヤイルド氏は、世界の富豪家とし

て世に知られたる人なるか、又蚤の專門家として有名なり。先年其令弟の本邦に來られし際。當所にも立寄られ、第一に蚤の標本を拜見したしとの事に、一同は呆れ返りたる事は、本誌第六十五號に記載した事があつたが、頑に蚤の專門家丈あつて、廣く世界に亘り、多年苦心して集めたる多くの蚤の標本を、聖路易博覽會へ出品せられたる事は、好話柄として廣く歐米人間に傳へられたるが、米國にありて此のことを傳へ聞きたる一西比利亞人は、博覽會に赴きて態々其蚤の種類を點撿したる後、自國に歸りて、出品中に見えざる北極に產する狐の蚤二匹を携へ來り、一匹二千五百弗にてロスチヤイルド家へ賣渡す交渉中なりと。

◉**害蟲驅除監督技師の出張**　農商務省は豫て害蟲驅除豫防に就き遺策なからしめんとの方針を以て、各府縣に技師を派遣し、大に督勵をなす筈なりしことは本誌前號にも掲げしが愈々左の通り決定し、監督技師は既に夫々出張せられたり。

◉東京、埼玉、千葉、栃木、茨城、群馬、山梨の一府六縣（農事試驗場技師小貫信太郎氏）◉石川、富山、福井、新潟、長野の五縣（同桑名伊之吉氏）◉神奈川、静岡、愛知、三重、岐阜、滋賀の六縣（同堀正太郎氏）◉大阪、京都、奈良、和歌山、高知、德島、香川、愛媛の二府六縣（同齋藤萬吉氏）◉熊本、大分、鹿兒島、宮崎、山口、廣島の六縣下（同大塚由成氏）◉福岡、佐賀、長崎の三縣下（同中川庄司氏）◉島根、鳥取、岡山、兵庫の四縣下（同莊島熊六氏）

◉**岐阜縣昆蟲學會第七十七回月次會記事**　同會は本月六日午後一時より當昆蟲研究所樓上に於て開會し、先つ名和副會頭開會の辭に次で、第一席長期講習生野口次兵衛氏は害蟲驅除の各宗敎に對する態度と題し、宗敎の範圍性質方便及目的より解き及ほし、迷信を打破し社會の幸福を增大せしむる爲め、宗敎家をして專ら害蟲驅除の機關たらしむるの適當なるを說明し、苟くも日本臣民たるの義務を怠らしむる如き宗敎は、破滅するの外なしと論及し、第二席岐阜縣師範學校內柘植善次氏は昆蟲心と題して、現今の學者中各自志す所の一方の學に偏するもの多く、諸學科互に相連絡せさるを以て、種々なる欠点を生ずる事より、各種動物の心を忖度し終りに蜂、蟻の如き實に面白き社會的生活をなす驚くべき程なるも、此等に道德心なるものありや否や之等の研究に就て示敎ありたき旨を述べらる、第三席長期講習生野田稻司氏は瓢蟲に對する觀察談と題し、該蟲の習性經過及其体部の搆造に就て詳細に述べられ、第四席特別研究生加藤政一氏は、愛媛縣昆蟲方言に就きて列擧せられ、第五席研究所主任名和梅吉氏は蚜蟲驅除試驗に就てと題して、蚜蟲の被害は莫大なるに反し、之に意を注ぐ者少なきは慨嘆の至りなりとて、其種類被害の狀態より藥劑試驗の効果等に說き及ぼし、其試驗方法を述べられ、最后に名和副會頭の蚜蟲驅除に就ての聞見談より、引て現今の害蟲驅除に說き及ぼし、其結果を述べらる。后雜談に移り午后五時無事閉會したり。

## ◉水曜昆蟲講話會記事

當所內に於て、每週水曜日夜間開會の同會は、相變らず盛會なるが前號報告後に於ける講話の要領を擧ぐれば左の如し

名和梅吉氏は、梨の害蟲視察談、及び益蟲の利用法に就て、詳細に説明せられ、尙ほノコギリ蜂の話に就て四五月頃は大發生期なれば、研究に好時期たる事を説き、鋸蜂と樹蜂との區別より、被害植物、產卵の狀況、場所及び卵の形狀等を説明せらる◉石田和三郎氏は、害蟲驅除と癈物利用に就てと題し、有益なる説明あり◉名和愛吉氏はアゲハ蝶採集の奇法として、該蝶を採集するは一疋のアゲハ蝶を木に止め置けば、交尾を目的として多數集り來るものなれば、それを待ち伏せ掬ひ得らる、故に目下アゲハ蝶の僞物即ち繪畫等を止め置くも、集るや否やを試驗中の事を述べられ◉谷貞子氏は、前會に於て、クダマキモドキの卵塊解剖の結果を報告したるが、該卵は全く蜂の寄生を受け居りしものなりしこと、及び蚜蟲の寄生蜂に就て詳細に述べられ◉加藤政一氏はアヲゴミムシ及び其の雌雄に就て詳細なる比較談、カワラゴミムシ、フタボシゴミムシ等に就て外部の研究を報告せられ◉野口次兵衛氏は、害蟲驅除と佛敎との關係に就てと題し、迷信を打破する考案を照會せられ、カブラハバチ及クワハムシの外部の研究談、及び驅除法の大要を説明せられ◉長尾欽二郎氏は、アケビノキノハ蛾の加害狀況、其の發生時期より驅除法等の實驗談あり、◉前田休太郎氏は、昆蟲學の研究は如何にすべきかと題し植物及び昆蟲の本能幷に其關係に就て多方面より觀察せられし事等を説明せらる◉野田稻司氏は講習會に入りたる原因を述べられ尙ヒラタアブの習性經過を説明せらる◉臼井房之氏は、石川縣下に於ける浮塵子及螟蟲の大發生を視察せしことより、害蟲の恐るべき事を述べられ◉磯村近藏氏は、當市昆蟲思想の發達と題して所感を述べらる◉木島盛策氏は苗代害蟲驅除と題し、螟蟲の採卵其他注油驅除等に就き説明せらる。

## ◉袖珍害蟲防除要覽

本書は農作物害蟲三十七種に付、經過より加害の狀況、寄生蟲をも添付したる圖版三十葉を挿入し、之れが詳しき説明は勿論、其他種々なる事項を網羅したるものにして、害蟲驅除に關係する人の必要書なるのみならず、害蟲驅除講習會等の敎科書として適當の書なれば、發行日尙淺きにも不拘、續々注文の申込ありて、遠からず品切となるべし。(廣告欄參看)

## ◉近刊雜誌中の昆蟲記事短評

前號紹介後に於ける諸雜誌中の昆蟲記事は意外に多けれども餘白なきを以て次號に讓る讀者諸氏幸に諒せよ

## ◉昆蟲標本陳列館參觀人員

去る四月中、當所常設の昆蟲陳列館を參觀せし總人員は、四千八百十七人にして、一日平均百五十三人强に當り、其內尤も多かりしは、五日に於ける六百三十五人、尤も少なかりしは、二十六日に於ける二十八人なりき。

イネノズイムシの圖

第壹版圖

（イ）卵塊
（ロ）同放大
（ハ）莖中にある四眠起の幼蟲
（ニ）莖中にある蛹
（ホ）成蟲の雄
（ヘ）同雌
（ト）同靜止の狀
（チ）卵の寄生蜂放大圖

# 昆蟲世界

第九卷第九拾參號

（明治三十八年五月十五日發行）（每月一回十五日發行）


## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　○○○○昆蟲亂題（但季は夏の事）　魯嶽君選

▲短歌　○○○○昆蟲亂題（但季は夏の事）　潮音君選

▲俳句　○○○○蝨蟲十句（六月五日占切）　三川君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

◉前號に瓢蟲十句とありしは蚤十句の誤植なり

## ◉武田工學士考案 圖案用昆蟲標本廣告

此圖案用昆蟲標本は京都高等工藝學校教授工學士武田吾一氏の考案によりしものにて蟲の種類により大中小の三種に分ち桐箱に表裏の二面を硝子となし其中に適宜の昆蟲を固定したるものなり故に表面より見るには勿論腹面を見んとするにも蟲を取出す要なければ直接標本に手を觸れざるを以てこれを損することを少なし而して各種學校の實物寫生並に教授用標本として適當なるのみならず工藝上の參考に資すべき點多ければ圖案用として殊に工藝學校等には必要欠くべからざる好標本なり

名和昆蟲研究所

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第七十八回月次會（六月三日）
第七十九回月次會（七月一日）
第八十回月次會（八月五日）
第八十一回月次會（九月二日）
第八十二回月次會（十月七日）
第八十三回月次會（十二月四日）
第八十四回月次會（十二月二日）

市境界　案内道　市道

イ 元位置　ロ 陳列館　ハ 縣廳　ニ 中學校

ホ 病院　ヘ 郵便局　ト 西別院　チ 研究所　リ 長良川　ヌ 金華山　ル 停車場

## ◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所は從來上圖の如く（イ）の位置にありしが今回當市公園内即ち（チ）の位置に移轉せり又常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）は從前の通り岐阜縣物産館構内にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共　金拾錢　〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす


明治三十八年五月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園內）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡警村大字公鄉三番戸
編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] JUNE. 15TH, 1905. [No.6.

# 昆蟲世界

第九卷第六册　明治三十八年六月十五日發行　第九拾四號

## 目次（禁轉載）



（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

新刊廣告

# ●日本鱗翅類汎論　全

定價金壹圓五拾錢　郵税金　錢
菊版　紙數三百頁　圖版十二葉入

本書は總論形態第二篇通論分類篇の四篇に大別し更に形態篇を第一章卵第二章幼蟲第三章蛹第四章成蟲の四章に細別して其形狀より内外の構造習性其他多くの事項を詳細に記述し通論を更に第六章に別ちて生存上に於ける彩色及裝置より分布、鱗翅類の効用、有害鱗翅類、鱗翅類の敵蟲幷疾病等を説明し分類篇に至りて蝶亞目を八科に蛾亞目を三十八科三十七亞科に別ち各科に於ける特徴を記して其分類の要點を示し之れに學名の明なる蝶類百五十六種蛾類五百五十餘種を配して説明を付し且蛾類二百十餘種を實物大に寫したる鮮明の寫眞版十二葉を挿入して種類を明かにし百十五個の木版圖を本文中に加へて之れが欽を補ひ特に著者が此の種の良書なきを患ひ多年の研究を實地に訴へ或は習性に構造に特に分類上必要にして各科に挿入したる翅脉圖は一々多數の翅を鏡下に照し比較窮明して分類の要點を確め其記事の親切叮寧なる本邦著述中此の書の右に出づるものなく久しく暗澹たりし斯學界に一大光明を放ちたるものといふべきなり

明治三十八年六月　名和昆蟲研究所

---

## ●征露紀念特別昆蟲學講習會

開期　自八月十一日 至八月廿四日　二週間

今や我國民は大々的雄飛するの時機到來せり此際征露紀念として特別なる昆蟲學講習會を開き益斯學の奮興を期せんと欲す斯學に志あるの志は速に手續を經由せらるべし

申込期限を七月二十五日迄と定むると雖も當所の都合により隨時申込を謝絶することあるべし

規則書入用の向は郵劵貳錢相添へ至急照會あれ

明治三十八年六月　名和昆蟲研究所

---

出版廣告

## ●名和 日本昆蟲圖説　第一卷

◎鱗翅目　天蛾科（着色石版十八度摺）
定價金五圓、小包料金拾五錢

---

## ●購讀者諸君へ謹告

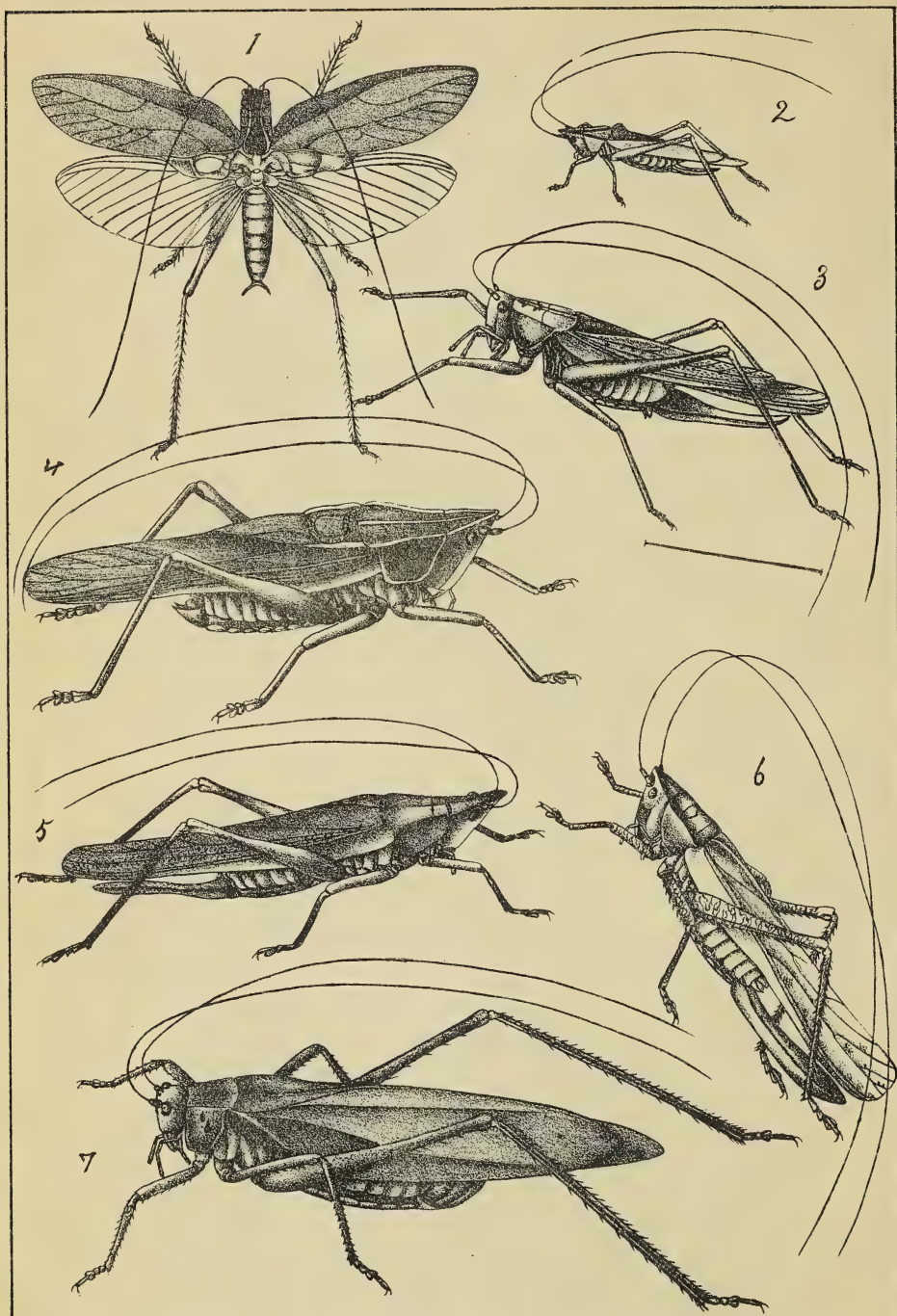
本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

---

## ●昆蟲學特別研究生募集

今回數十名の特別研究生を募集し特に此際何時にても隨意入所を許す、規則書入用の向は往復葉書にて至急照會あれ直に送致すべし

1 ウマオヒムシ　2 ハネナガサヽキリ　3 ミドリサヽキリ　4 カヤキリ　5 クピキリバツタ　6 ヒサゴクサキリ　7 クダマキモドキ

# 論說

## ◎苗代田害蟲驅除の効果

害蟲の驅除を容易に且完全ならしめんとせば、必ず其因て來る處を窮め、之れに適する方策を採らざるべからず。然らざれば徒に多くの費用と勞力とを費し、結局其効果を見る能はざるは既に幾多の事實の証明する處なり。見よ世の多くは害蟲の旺盛を極むるを見て、始めて俄然發生せし如く考へ、周章狼狽驅除に着手するを以て頗る困難を感じ、其結果意の如くならず、假令其困難を排して漸く驅除したりとするも、收穫亦皆無となるの類往々珍らしからず。恰も死に瀕したる病人を見て醫を迎ふると同樣、焉ぞ其快復を期すべけんや。

抑も事の起るは起るの時に起るに非ず、必ず其因て來る處なくんばあらず。本田の害蟲は既に苗代田に其基を作り、苗代田の害蟲は遠く冬期に胚胎するものなれば、冬期に於て可成豫防的驅除をなさゞるべからず。少なくとも苗代田に於て極力之れを驅除し。後日の憂なからんことを圖るべし。試に本誌第一卷第三號を繙き、去る明治二十三年に當所長名和先生が、岐阜市附近の拾坪計りの或る苗代田に於て僅か五六分間に掬はれたる蟲數實にイナゴ二百五十頭、ツマグロヨコバヒ百二十一頭、其他イ子ノアヲムシ、イ子ノズヰムシノガ、ガメムシ類、イ子ゾウムシ等四百四十七頭、外ニ益蟲十一頭、双翅類八十頭

を合せて總計五百三十八頭の多きを得られたるを思へば、豈に苗代驅除を忽にすべけんや、人或は曰はん數百の害蟲何かあらんと。夫れ然り、數百の害蟲は何時迄も數百にて終らば其害恐るゝに足らず、然れども苗代時期の雌雄一番は、秋季に二万以上に蕃殖する浮塵子類あるを悟らば、實に悚然たらざるを得んや、況や僅か十坪計の地にて、數分間に獲たる數なるに於てをや、苗代時期に於て蟲の少なきを以て等閑に附するは大なる誤りなり、甚しきは、一見して余が苗代には害蟲は更に居らざるものと思ふもの尠なからず。之れ居らざるにあらず、知らざるなり。試に一掬を振へ、數百の害蟲立所に獲られん、時として稻の苗代田にあらずして、寧ろ害蟲の養成所たるを感ぜしむることあり、少くとも、常に稻と害蟲の共同苗代たるは免るべからざる事實なり、識者此恐るべき害蟲を未發に防がん爲め、苗代田改良を促す已に久し、然も未だ普及せりと云ふべからず、中には督勵により止むを得ず唯形を改めたるのみにて、苗代に於て一回も捕蟲器を使用したることなきものありと聞く、滑稽も亦甚だしと謂ふべし。是等の輩は稻苗代は純然たる稻苗代と誤認し、害蟲軍の潜に戰鬪準備をなしつゝあるを知らざるなり、よし多少之れを認むるも、一頭の蟲は始終一頭にて終ると思ふを以て、斯る滑稽を演ずるものならん、嗚呼何ぞ夫れ想はざるの甚だしきや。明治三十一年に靜岡縣濱名郡に於て、苗代害蟲驅除の結果四斗二升入三十八俵半の浮塵子を捕殺し、確に本田の大害を免れたる事實あり。是れ其因て來る處を知り、適當の方法を施したる結果に過ぎず、農家諸氏能く之を玩味し唯形の改良に止まらず。進で其目的を完せんとを勉むべし、我岐阜縣は本年三月縣令第六號を以て、害蟲驅除豫防規則改定の結果、改良苗代の行はれざるの地なきを疑はずと雖も、或は其目的たる驅除を忽にするの滑稽なしとも限られず、苗代改良を奬むるもの、奬めらるゝの諸士は、少くも害蟲驅除の目的を達する爲に形を改むるものたるを忘るゝ勿れ

稲苗代は純然たる稲代なりと、思ふなかれ、純然たる稲苗代たらしめんが爲めに形を改め、驅除を容易ならしむるに外ならず、苟も苗代に於て害蟲の驅除を完全ならしむれば、先づ大体に於て七分通り害蟲を驅除したるものと謂ふべく、仮令本田に發生するも、苗代驅除を等閑に附する者に比すれば、其多少驅除の難易同日の論にあらざれば、返すがへすも苗代驅除の完全を圖るべし、然れども玆は一般の害蟲に就て廣義に論したるものなれば、種類により苗代田に少なく、却て本田期に入りて盛に産卵する螟蟲の如きものあれば、苗代に於て、全然事成れりと誤解する勿れ。宜しく機を見て先を制し、着々成功を圖り。以て軍國民の面目を汚すなからんことを切望す。

## ◎佐賀縣に於る二化螟蟲發生の奇現象

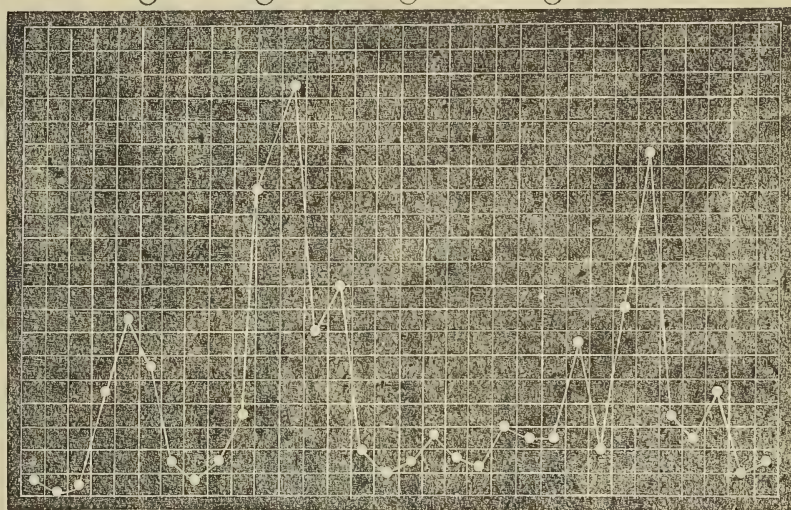
中川久知

余は本年二月、佐賀縣農事試驗場に於て附近の田地に於ける、三化螟蟲越冬の狀況を調査せし時、昨年同場に於て、日々二化螟蟲を誘殺したる捕蛾表を得たれば、歸宅の後五日間の平均數を算し、之を半旬平均として一表を調製せしに、頗る奇異なる顯象あることを覺知せり。

抑も佐賀縣農事試驗場附近は、早稻五割五分、晚稻四割五分を栽培し、早稻は五月下旬に、晚稻は七月上旬に移植す。而して中稻は全く之を闕く。これ中稻は三化螟蟲の被害最も大なるを以てなり。斯の如き栽培法を施行するにより、移植期は前後二回に分れ、其間三十日乃至四十日の間隔ありとす。仍て右の半旬平均表を掲げ、此奇現象を生ずる原因を說明すべし。

明治三十七年佐賀縣農事試驗場に於る二化性螟蟲捕蛾數

四月第五半旬（自舊暦三月六日至同十日）
同　第六半旬（自同十一日至同十五日）
五月第一半旬（自同十六日至同二十日）
同　第二半旬（自二十一日至同二十五日）
同　第三半旬（自同二十六日至四月一日）
同　第四半旬（自同二日至同六日）
同　第五半旬（自同七日至同十一日）
同　第六半旬（自同十二日至同十七日）
六月第一半旬（自同十八日至同二十二日）
同　第二半旬（自同二十三日至同二十七日）
同　第三半旬（自同二十八日至五月二日）
同　第四半旬（自五月三日至同七日）
同　第五半旬（自同八日至同十二日）
同　第六半旬（自同十三日至同十七日）
七月第一半旬（自同十八日至同二十二日）
同　第二半旬（自同二十三日至同二十七日）
同　第三半旬（自同二十八日至六月三日）
同　第四半旬（自六月四日至同八日）
同　第五半旬（自同九日至同十三日）
同　第六半旬（自同十四日至同十九日）
八月第一半旬（自同二十日至同二十四日）
同　第二半旬（自同二十五日至同二十九日）
同　第三半旬（自七月朔日至同五日）
同　第四半旬（自同六日至同十日）
同　第五半旬（自同十一日至同十五日）
同　第六半旬（自同十六日至同二十一日）
九月第一半旬（自同二十二日至同二十六日）
同　第二半旬（自同二十七日至八月朔日）
同　第三半旬（自同二日至同六日）
同　第四半旬（自同七日至同十一日）
同　第五半旬（自同十二日至同十六日）
同　第六半旬（自同十七日至同二十一日）

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

此の表を檢するに第一回の發生は五月中旬を以て最盛とし、其後は八月上旬と、九月の上中旬に分て盛に發生し居れり。故に一見二化螟蟲が同地にては一般に三回發生するもの丶如く見ゆれども、余は之を同地方に固有なる稻の栽培法に歸すべきものと信ず。而して八月上旬に於て見る所の發生は、早稻を早植するにより、移植後本田に於て發育化蛾したるものにして、九月上旬より中旬に亙る發生は、晩稻移植後に發育したるものとす。

凡そ二化螟蟲の第一回發生期は、其地に栽培する稻の移植期の早晩に關するもの丶如し。これ螟蟲は莖

中に住するを以て、莖の成育速なれば、發育も亦た從て速なるによるべし、之を証せんが爲め、左に佐賀、柳川、熊本に於る移植期と、二化螟蟲の第一回發生期を比較し、左に表示して參考の用に供すべし

| 地名 | 二化螟蟲第一回發生期 | 挿秧期 | 作付歩合 |
| --- | --- | --- | --- |
| 佐賀 | 五月中旬 | 早稻五月下旬<br>晩稻七月上旬 | 早稻五分五厘<br>晩稻四分五厘 |
| 柳川 | 六月下旬 | 早稻六月上旬<br>晩稻七月上旬 | 早稻五分<br>晩稻五分 |
| 熊本 | 七月上旬 | 晩稻六月下旬 | 晩稻全部 |

## ◎伊吹山に於ける一日採集の昆蟲

名和昆蟲研究所調查主任　名和梅吉

伊吹山は岐阜市を距る西方十里餘、江濃の境にあり。甚だ高からざるも海面を拔く四千尺、昔時植物の種子を播種したりといひ傳ふ。さればにや此の山甚だ植物に富み、年々之れが採集の爲め登山するもの多く、夙に植物研究者の眼に映じたる有樞の山なりき。元來、植物と昆蟲とは唇齒の關係を有するを以て植物の豊富に伴ひ、昆蟲類の饒多なるや自然の勢なり、當所長名和先生は、二十餘年來年々此山に昆蟲を探り、予亦之れに從ひ、十數年間無二の採集地として年々必ず此地を踏まざるなく、予が研究材料の過半は實に此山の賜なり。予本年三月歸朝以來、採集の念荐りに禁ずる能はざるも、俗務蝟集容易に其意を果す能はざらしめたり。斯くては遂に春期の採集期を逸するを憂ひ、斷然意を決し、去月十二日所員並に長期講習生等一行四名と共に伊吹山に、昆蟲採集を企てたり。此日早朝輕裝して岐阜驛に至り、

七時五分の西行列車に乘し、大垣、垂井、關ヶ原、柏原を經て九時長岡驛に下車し、夫より徒歩道を北に取り、高番、春照を過ぎ伊吹山麓なる上野に着せしは既に十時過なりき。予久振りに此地に來り、何となく懷しく、宛も故郷に歸りし心地せられ、山亦笑を含て予等一行を迎ふるに似たり。此日風穩に天晴れ、草花は此處彼處に蕾を破り、昆蟲採集には屈強の日なり、此の採集の目的は、唯種類の多からんことを望めるを以て、採集方法として、掬網と叩網との二法を採りたり、(掬網にも種々あれども、草間樹隙を撰ばず、圓形捕蟲器を以て亂掬するの法を採り、叩網採集法とは、捕蟲器を葉下に受け、亂に樹枝を拂ひて、網に入るものを捕獲するの法なり) 種類を多く獲んとせば此法に如くはなく、特に敵を襲擊するに避くべからざる良法なればなり。一行は直ちに戰闘陣形を以て前進に移り、樹木を拂ひ草間を亂掬し、従て獲れば従て毒瓶に投じ、或は箱に収め紙に包み、歩一歩敵を壓迫し、進擊又進擊中には挺身蛺蝶軍を突擊するあり、或は身を潜めて敵の動靜を探るあり、行々遂に樹林を離れて草原に出で、茲に捕虜を収容して糧食を喫し、暫時休養せんとすれば。忽ち蜂軍の北に飛ぶあり、驀然武器を取て追擊捕獲し、或は健氣にも敵の前進するを見ては、十分引付けて一擧に捕獲し、夫れより再び敵の根據地たる樹林に進擊して、縱横奮戰敵を捕獲する無數、遂に時間に制せられて、三時頃攻擊を中止し、退却の止むなきに至りたれば、徒歩長岡に出で、四時半長岡發東行列車にて一同凱旋せり。其後の調査によれば、捕虜の重なるものは、膜翅目の小蜂科三十種、小繭蜂科二十三種、鋸蜂科の十六種、其他八科に亘りて計百十一種、鞘翅目には、葉蟲科の三十二種を始め、象鼻蟲科の二十種、瓢蟲科の十二種、其他青象鼻蟲科、葉捲象鼻科螢科等計二十三科百三十一種に上り、雙翅目に屬するものは、蕈蠅科の十四種を初め、家蠅科の十二種、扁前蠅科、大蚊科等計十七科に亘り六十四種を獲たり、鱗翅目に屬するもの

は、厚翅小蛾科の五種、鳳蝶科の四種を初め、小灰蝶科、穀蛾科等計十九科三十四種、有吻目に隷するものは、椿象科浮塵子科の各七種、凸眼椿象科木蝨科等計十三種三十三種に及び、其他彈尾目の一科一種、擬脉翅目の四科九種直翅目の一科一種、總翅目の一科一種、脈翅目の二科五種、毛翅目の一科三種總計十一目に亘り、九十三科、三百九十三種を獲たり。惜むべし、此の日は翌日の用務の爲め此地に泊するを得ざるの事情に制せられ、一日の採集とは云へ僅に五時間以內、且多く山麓のみを採集したるものなれば採品意の如くならず、然れども四百種に近きを見れば、如何に此地の昆蟲に豐富なるかを想像するに足らん、若し事情一、二泊を許し、少くも中腹以上に迄探撿を遂げたらんには、實に其獲物の多くして、如何に興味を以て充たされたるならん。予十數年來此地に採集を試みたるも、常に夏期に多くして、春期の採集は今回を以て初めとす、從て此採品には珍種多く、調査に多大の困難を感ぜしめたると同時に、又非常の愉快を與へたり。此の珍種異品の記載は後日に讓り、今は唯昆蟲としての伊吹山を照會し、且此採品を一括して表示するに止めんとす、因に蚜蟲科に入るものは、特別の方法を採らざれば採集し能はざるを以て一も手を下さゞりしが、隨分多くの種族を認めたり。且此の方法を以て春夏秋冬に亘り、山麓より絕頂迄隅なく探窮せば、實に幾千萬種に上る想像の及ばざる處にして、荐りに予が四期に於ける採集の野心を勃興せしめたり。

明治三十八年五月十二日伊吹山採集蟲表

| 目 | 科 | 種類數 | 計 |
|---|---|---|---|
| 彈尾目 | 黃色蜨蟲科 | 一 | 一科一種 |
|  | 蜉蝣科 | 一 |  |
|  | 蜻蛉科 | 一 |  |
| 擬脉翅目 | 豆娘科 | 二 | 四科 |
|  | 積翅蟲科 | 五 | 九種 |
| 直翅目 | 稻螽科 | 一 | 一科一種 |
| 總翅目 | 有管尨蟲科 | 一 | 一科一種 |
|  | 貝殼蟲科 | 二 |  |

| 目 | 科 | 種數 | 計 |
|---|---|---|---|
| 有吻目 | 木蝨科 | 三 | 十三科 卅三種 |
| | 角蟬科 | 一 | |
| | 横皷蟲科 | 七 | |
| | 泡吹蟲科 | 一 | |
| | 薄翅横蚑蟲科 | 二 | |
| | 蟬科 | 一 | |
| | 食蟲椿象科 | 二 | |
| | 軍扇蟲科 | 一 | |
| | 細角椿象科 | 一 | |
| | 凸眼椿象科 | 四 | |
| | 有緣椿象科 | 一 | |
| | 椿象科 | 七 | |
| 脈翅目 | 擬草蜻蛉科 | 三 | 二科 五種 |
| | 攀尾蟲科 | 二 | |
| 毛翅目 | 石蚕科 | 三 | 一科 三種 |
| 鱗翅目 | 殼蛾科 | 三 | 十九科 卅四種 |
| | 螟蟲蛾科 | 一 | |
| | 藍螟蟲蛾科 | 一 | |
| | 小蛾科 | 一 | |
| | 厚翅小蛾科 | 五 | |
| | 斑尺蠖蛾科 | 一 | |
| | 梅尺蠖蛾科 | 一 | |
| | 斜條尺蠖蛾科 | 二 | |
| | 笹波尺蠖蛾科 | 一 | |
| | 尺蠖蛾科 | 二 | |
| | 朽葉尺蠖蛾科 | 一 | |
| | 粟蚕蛾科 | 一 | |
| | 錨紋蛾科 | 一 | |
| | 挵蝶科 | 一 | |
| | 小灰蝶科 | 三 | |
| | 蛇目蝶科 | 一 | |
| | 蛺蝶科 | 二 | |
| | 粉蝶科 | 二 | |
| | 鳳蝶科 | 四 | |

| 目 | 科 | 種數 | 計 |
|---|---|---|---|
| 雙翅目 | 扁前蠅科 | 九 | 十七科 六十四種 |
| | 斑翅蠅科 | 一 | |
| | 家蠅科 | 一二 | |
| | 寄生蠅科 | 二 | |
| | 蚤蠅科 | 一 | |
| | 喰蚜蠅科 | 六 | |
| | 長脚蠅科 | 一 | |
| | 長吻蠅科 | 一 | |
| | 舞蠅科 | 一 | |
| | 食蟲虻科 | 一 | |
| | 鷸蠅科 | 一 | |
| | 水虻科 | 一 | |
| | 毛蠅科 | 三 | |
| | 蕈蠅科 | 一 | |
| | 擬蚊科 | 二 | |

| 目 | 科 | 種數 | 計 |
|---|---|---|---|
| 鞘翅目 | 大蚊科 | 七 | 二十三科 百三十一種 |
| | 擬蛾蠅科 | 一 | |
| | 象鼻蟲科 | 二〇 | |
| | 青象蟲科 | 一〇 | |
| | 葉捲象蟲科 | 七 | |
| | 地膽科 | 一 | |
| | 赤翅蟲蠅 | 一 | |
| | 花蚤科 | 一 | |
| | 擬天牛科 | 一 | |
| | 小擬蟻科 | 四 | |
| | 僞步行蟲科 | 一 | |
| | 豆象蟲科 | 一 | |
| | 葉蟲科 | 三二 | |
| | 天牛蟲科 | 二 | |
| | 金龜子科 | 七 | |
| | 螢科 | 八 | |
| | 叩頭蟲科 | 六 | |
| | 吉丁蟲科 | 三 | |
| | 出尾蟲科 | 三 | |
| | 擬鰹節蟲科 | 四 | |
| | 扁蟲科 | 一 | |
| | 瓢蟲科 | 一二 | |
| | 隱翅蟲科 | 二 | |
| | 步行蟲科 | 三 | |
| | 斑蝥科 | 一 | |

| | | |
|---|---|---|
| 膜翅目 | 鋸蜂科 | 一六 |
| | 樹蜂科 | 三 |
| | 沒食子蜂科 | 一 |
| | 姫蜂科 | 六 |
| 膜翅目 | 小繭蜂科 | 三三 |
| | 小蜂科 | 三〇 |
| | 卵蜂科 | 一三 |
| | 蟻科 | 四 |
| 膜翅目 | 赤胸擬蠟科 | 一 |
| | 士蜂科 | 二 |
| | 胡蜂科 | 四 |
| | 蜜蜂科 | 八 |
| | 十二科 | 百十一種 |

# ◎第一回岐阜縣分布調査（一二）

名和昆蟲研究所員　名和正

本調査は、從來分布調査主任小森省作氏の擔任なりしも、同氏は或る所用の爲め、該調査を繼續する能はざる事情あり、さりとて此儘打捨つべきにあらねば、予不肖を顧みず該調査に限り同氏の業を繼き、本誌の餘白を汚さんとす。然れども、該標本中變色したるもの少なからざれば、幾分の誤謬は免れざるべし、讀者諸君幸に諒せよ。

蜻蜓科(Aeschnidae)　擬脈翅目に屬し、翅は膜質にして網狀の翅脈を有し、前緣の中央には結節あり後翅は前翅より大にして、前翅三角室の前緣長く、內緣最も短し、靜止のときは水平に開置す。口具は能く發達して咀嚼に適し、觸角針狀にして短く、複眼は大にして、頭頂に接するものと稍接せざるものとあり、腹部は細長にして、雄の生殖器は腹部の第二節にあり。

(一四三)コオニヤンマ(Hagenius japonicus, selys.)　サナヘトンボ亞科(Gomphinae)に屬し、体長雄は二寸九分、雌は二寸八分、翅張雄は三寸八分雌は四寸、体黑色にして複眼は稍隔離し、其間に二個と、複眼の前方に二個の齒形突起を有す、前頭の前緣は黃褐に、中胸背には黃色丁字形の隆起ありて、其兩側に一條つゝの黃色縱條あり、中胸の側面には、大小二個の黃條と、一個の黃色圓紋を有す、后胸の側面は大半黃色を帶び、翅は透明にして、緣紋黑褐色若くは鈍褐色を帶びて細長く、三角室の中央に一橫線あり。雄にありては、后翅の內緣角內方に屈る、第二腹節の背面に黃條と、其側面には太き黃色の縱帶

あり、三節乃至八節の兩側には黄斑を印す。山縣、武儀、惠那の三郡に於て五頭を獲られたり。

（一四四）コサナヘトンボ（Gomphus sp!）　前種と同亞科に屬し、体長一寸三分五厘、翅張二寸餘、体黒色にして複眼は相隔離し、前頭の前緣は黄色なり。中胸背には丁字形の隆起ありて、一横帶と其上方に二條の縱線あり、更に其の上方に小黄點を印す。中后胸の側面には、三條の太き黄條あり。サナヘトンボに酷似したれども、腹部背面の斑紋少なきに反し、側面には各節二個つヽの黄斑を有する等異なる点多し。益田郡にて、初めて秋神小學校尋常科第四學年、上垣内久吉氏の手によりて只一頭を獲られたるのみ。

（一四五）ヨツヲトンボ（Gn? sp?）　体長雄は一寸九分雌は二寸、翅張雄は二寸三分五厘雌は二寸六分複眼は稍隔離し、前頭に灰黄色隆起斑あり。上唇に二黄紋と其基部に一横帶を有し、胸背胸側及第一第二腹部の斑紋はコオニヤンマのそれに酷似し、第三乃至第七腹節にも黄斑を有し、第七節にあるものは大なり。翅は透明にして基部稍黄色を呈し、緣紋黒色なり、雄は後翅の內緣角內方に曲り、第七、八、九の三腹節は扁大となりて、第八、九腹節の兩側に黄紋あり。末節殆んと黄色を帶び、四個の長き附屬物を有するを以てこの新稱を附せり、福岡小學校尋常四學年、大山とも子氏の手によりて獲られたるものを惠那郡より一頭送られたり。

（一四六）オニヤンマ（Anotogaster (Cordulegaste) Seiboldii, Selys.）　オニヤンマ亞科（Cordulegasterinae）に屬し、体長雄は三寸二分、雌は三寸四分翅張雄は三寸八分雌は四寸三分、体黒色にして複眼は頭頂に於て相癒着し、前頭の前緣黄色を帶び弓狀に凹む、顏面の中央に黄色の横帶と、上唇の基部に二個の黄斑あり、中胸の背面には長き軟毛を密生し二個の黄斑あり。翅は透明にして、緣紋細長く黒色を帶び、中

後胸の側面には太き黄條を有す。後胸背に二個楕圓形の黄斑を印し、第一及第二腹節は太く、第二乃至第八腹節には各黄帶あり。養老、加茂、惠那、大野、益田の五郡に獲られたり。

（一四七）コシボソトンボ (Fonscolombia. maclachlani, S.) ギンヤンマ亞科(Aeschninae)に屬し、体長雄は二寸五分雌は二寸七分、翅張雄は三寸六分雌は四寸內外、体黑褐にして複眼は頭頂に於て相癒着し、前頭の後半は黄色に額面黑褐、顏は黄色を帶ぶ。中胸の背面に二個の綠色條と、中央に著しき隆起線あり。中後胸の側面には、各一條の太き黄條を有す。翅は透明にして緣紋褐色を帶び、後翅の內緣角雄は內方に曲る。第三腹節甚だ細く縊れたるを以て此名あり。各腹節に細き黄帶と、雄の第二腹節の側面には突起を有す。羽島、本巣、山縣、土岐、惠那、大野の六郡に於て獲られたり。

（一四八）カトリトンボ (Gynacantha hyalina, S.) 前種と同亞科に屬し、体長雄は二寸二分雌は二寸四分、翅張雄は三寸雌は三寸一分五厘、体黑褐色にして複眼は頭頂に相癒着し、前頭の前緣少しく黑味を帶び、顏及口具は黄褐色なり。翅は透明にして緣紋褐色に、後翅の內緣角雄は內方に曲る。第一第二腹節は甚だ太くして黄斑を有し、以下の腹節は甚だ細く、殊に第三節にて縊れ、各節に三角形の小斑と細き橫帶とを有す。雄は第二腹節の兩側に綠色を呈したる突起あり。羽島、養老、不破、本巣、加茂、可兒、土岐、惠那、益田の九郡に獲られたり。

（一四九）ギンヤンマ (Anax parthenope, S.) 前種と同亞科に屬し、体長二寸四分、翅張三寸六分內外体黄綠にして複眼は頭頂に相癒着し、前頭及顏は黄綠に、前頭の前緣に黑褐の橫帶あり。翅は透明にして稍黄褐を帶びあり、緣紋褐色を呈す。第一第二腹節は大きくして青綠色を帶び、第三節以下細くして赤褐若くは黄褐なり。背上に太き黑褐の縱線ありて、側面には黄斑を印す。羽島、土岐の二郡に於て獲

れたり

(一五〇)ヒメコシボソトンボ(Aeschna milni, S.)　前種と同亞科に屬し、一名ミルントンボと云ふ。体長雄は二寸二分雌は二寸五分、翅張雄は三寸余雌は三寸四分、体黑くして複眼は頭頂に於て相癒着し前頭の後半は綠色に額は黑く、顏は綠黃其中央の、上唇に接する處は黑く、上唇の基部及下唇は黃色なり。胸背には隆起ありて、其兩側に黃綠條を有す、中、後胸の側面には各一條つゝの太き黃斑と、其間に一小黃点あり、第一、第二腹節は稍太く、以下の腹節は細く、第三節に於て縊れたることコシボソンボのそれに似たり。各節に黃斜帶ありて腹面に於て太く第二節にあるものは、中央に於て切れ、其下方に短橫帶を有す、雄は側面に突起あり、翅は透明にして緣紋黑く、後翅の內緣角雄は內方に曲る。大野、益田の二郡にて、各一頭つゝを獲られたり。

## ◎鳴く蟲に就て(六)(第五版並に第六版參看)

名和昆蟲研究所內　谷貞子

(四)クツハムシ(Mecopoda, elongata, L.)　聒々兒、又紡績娘とも云ふ、体長一寸一分、綠色と褐色との二形あり頭部は綠色と白色とを混じ、頭頂は尖らずして灰褐色をなす、複眼卵形にして褐色をなし、觸角褐色にして長さ体長の二倍に達し往々黑斑を有す、前胸背は平濶後緣廣くして圓し、色は綠色、左右兩緣は灰褐なり、中央には後方に弓曲せる二個の橫溝を有す、兩側は綠色と灰褐とを混し、下方は狹からずして周緣少しく隆起す。前胸腹には刺を有す。前翅は長さ一寸六分、綠色を帶び、翅脈も亦綠色をなす、後翅は膜質、前翅より大にして、翅端は綠色をなす。腹部は綠色、腹面暗綠色を呈す。產卵器は劍狀にし

て長さ一寸、綠色をなし、先端濃褐なり。肢は三對共に暗綠色、各腿節の基部は綠色にして、黃黑點を散布し、各脛節の內外側には刺を有す。發音器は灰褐色にして大形に、發音鏡は大にして二室に分れ、鑪狀部は左翅のみに存ず。成蟲は八月中旬より九月下旬に亘りて、堤防の草叢、其他竹藪等に於て、夜間其音高くガシャガシャと鳴々す、千蟲譜に「紡績娘、赤靑褐の三種あり、其盛に啼く時翼を動し、薄暮より夜中索々として聲をなす事連綿不止、極めてかまびすし、因て唐山の人聒々兒と云ふ」とあるは即ちこれなり。本邦到る處に棲息すれども未だ赤色のものを見ず。（第五版第八圖）

（五）ウマオヒムシ(Locusta plantaris. D.H.) 馬追蟲、体長七分、体綠色をなし、頭胸の背面は褐色をなす、頭頂は尖り、複眼は黑色にして圓し、觸角褐色にしてまゝ小黑斑を有し長さ体に倍す。前胸背は長く、其後緣は廣く平濶にして且圓し、中央には橫に淺き凹紋を有し、兩側は各々綠色をなす、前胸の腹面には刺を有せり。前翅は綠色にして長さ一寸、腹部の外に出づる事三分五厘、翅脉綠色をなし、發音器は褐色中央に、ほゞ卵形の綠色紋あり。發音鏡はやゝ長楕圓形をなし鑪狀部は左翅のみにあり。後翅は前翅と畧ぼ同大翅脉綠色をなす。腹部は背腹共に綠色を呈す。肢は各々綠色。各脛節は黃綠色をなし、內外の兩側に細刺を有す。雌は前胸背の後緣圓からず、且前翅の幅狹し。產卵器は綠色にして長さ五分、劍狀にして、尖端褐色をなす。成蟲は八、九月頃最も多く現出し、地上三四尺程の草木の枝に靜止し、盛にスイン、スイン、、、スイーンチヨ、スイーンチヨ、と其音高く鳴々す、本邦いづれの地にも分布す。（第六版第一圖）

（六）ヤブキリギリス(Locusta japonica Brun.) 絡緯、又之を草馬といひ体長一寸一分、体綠色をなし頭胸腹の背面には褐色縱條あり、頭部は綠色と白色とを混ず。頭頂は尖り、複眼褐色にして、楕圓形を

なす、觸角濃黄綠色、体に倍す、前胸背はほゞ平濶なり、後緣は圓し、中央に逆八字形の淺き凹紋あり、兩側は其色黄綠色をなす、前胸腹には刺を有す前翅は長さ一寸、腹部より長き事二分綠色にして内緣の基部は褐色をなし、翅脉は淡褐發音器は小形なり、發音鏡は圓形をなす。後翅は膜質、淡褐をなし前翅より短かし。腹部は背の中央を除くの外綠色を帶び、肢は各々綠色にして、各腿節に齒狀凸起と各脛節の内外側に細刺を有す。雌の産卵器は長さ一寸一分、綠色をなし、先端少しく褐色を呈す。成蟲は六月上旬より九月頃にかけ最も盛に現出し、常に竹藪、又は樹幹に靜止して晝夜の別なく高音にリース、リース、と鳴々す。(第五版第五圖)

(七)サヽキリ(Xiphidium melanum, D. H.) 体長五分、体綠色をなし、頭胸腹の背面には、褐色縱帶ありて、其兩緣は黒色を帶ぶ、頭部は綠色、頭頂は尖り、顏面は斜なり、複眼は黒色圓形にして突出す、觸角は黒褐、基部黒色にして長さ体に五倍す、前胸背は狹くほゞ平濶なり、中央には一個の淺き凹紋を有し、後緣圓し、兩側は綠色、前胸腹には刺を有せず、前翅は細長くして、長さ五分五厘、腹部の外に出ずること二分、前緣は濃褐色にして、内緣灰褐なり、後翅は膜質、暗色なれども、前緣は黒く、翅脉黒褐を呈し、長さ前翅に等し。腹面は綠色、産卵器は煉瓦色にして、長さ二分五厘鎌狀をなす、肢は各腿節綠色を呈し脛節は、藁色にして、内外側に細刺を有し、各關節部は黒色をなす、發音器は少しく隆起し、ほゞ方形をなし、發音鏡は楕圓形をなす、成蟲は九十月頃、堤防其他笹のある所等の、日光の直射せざる地に棲息し、晝夜の別なく、其音高くジリ、ジリ、ジリ、と鳴々す

サヽキリの圖

♀

(八)ヒゲナガサヽキリ(Xiphidium longicorne. Bedt.) 躰長七分、体綠色をなし、頭胸腹の背面には褐

色縱帶ありて、兩縁黄色をなす、頭部は綠色、顏面斜なり、頭頂は尖り、複眼褐色にして圓し。觸角は濃褐色を呈し、長さ、ほゞ体に六倍し、基部の二節は綠色なり、前胸背は細長く、後縁圓し、中央に淺き二個の横溝を有す、兩側は三角形にして綠色をなし、前胸腹には刺を有す。前翅は白茶色を帶びて長さ六分、翅脉淡褐をなし、後翅は其幅廣く、前翅とほゞ其長さを同じくし、翅脉褐色をなす。腹部の兩側、並に腹面は綠色をなす、産卵器は褐色にして、長さ九分、劍狀をなす。肢は各々綠色なれども、後翅の脛節は黄綠色をなし各脛節の内外側に細刺を有す、發音器は翅と同色にして、發音鏡は長方形をなす、成蟲は九、十月頃に現出し、常に堤防、其他の草間、又は稻葉等の日あたりよき地上一尺内外の所に靜止し、盛にジリー、ジリー、と鳴々す。(第五版第六圖)

(九)ヒメサゝキリ(Xiphidium maculatum, Legouill.) 體長四分、體綠色にして頭胸腹の背面に褐色縱帶あり、其兩縁黄色をなす。頭部は綠色、顏面斜にして頭頂尖れり、複眼黑褐にして圓く、觸角黑褐長さ體に三倍す。前胸背は細長く後縁圓し、兩側は綠色を帶び三角形をなす、腹面に刺を有す。前翅は其幅狹く、長さ五分、中央に黑褐點を有し、翅脉暗褐をなす、後翅は前翅と同長其幅廣く、膜質なり翅脉は黑褐、前縁鹿毛色をなす、腹部の兩側並に腹面は、綠色なり、産卵器は劍狀樺色にして、長さ二分五厘あり、肢は各腿節綠色を呈し、脛節は灰褐にして内外側に細刺を有す、發音鏡は方形なり、成蟲は九、十月頃堤防其他日あたりよき草間に棲息しジリジリジリジリジリ、、、と其の音短く鳴々す。(第五版第三圖)

(一〇)ハネナガサゝキリ(Xiphidium longipenne, D. H.) 體長六分五厘、體綠色をなし、頭胸背の兩縁には二條の褐色線を有し、頭部は綠色、顏面斜なり。頭頂は尖り、複眼圓く暗褐をなす。觸角は濃

褐にして長さ略ぼ體に二倍し、基部綠色を帶ぶ。前胸背は狹長くして後緣圓く、中央には淺き凹溝を有す兩側は三角形にして綠色をなし、腹面には刺を有す。前翅は、長さ七分腹部より長きこと三分綠色にして內緣褐色に、翅脉綠色なり。後翅は前翅より長きこと二分、前緣綠色をなし、翅脉褐色を呈す。腹背は褐色の縱帶を有し兩側並に腹面は綠色をなす、產卵器は長さ二分、綠色にして、尖端褐色をなす肢は各々綠色、各脛節に細刺を有す、雄の發音鏡は殆んど圓形なり、これが鳴聲並に捿息せる場所に至りては未だ私の知らざる所なり。(第六版第二圖)

(一一)ミドリササキリ(Tetratara monstrosa, Bedt.)　體長三分五厘、體淡綠色をなし、複眼濃褐色にして圓く、頭頂は尖り、觸角は濃黃綠長さ體に四倍し、まゝ黑斑あり。前胸背は綠色、細長くして後緣圓く。兩側は綠色をなす。前胸腹には刺を有せず。前翅は淡綠色、細長く、長さ五分五厘、腹部の外に出すこと二分半、內緣黃綠をなし、翅脉綠色、微細なる暗褐點を散布す。後翅は膜質、前翅より長きこと一分、幅甚だ廣し、前緣は綠色、翅脉黑褐をなす、腹部は綠色にして產卵器は長さ三分、綠色、薙刀狀をなし先端褐色なり。肢は各腿節綠色をなし、各脛節は黃綠にして細刺を有す、雄の發音器は小形にして、發音鏡は長楕圓形をなす。而してまゝ頭頂より翅端まで濃褐帶を有するもあり、成蟲は八、九、十月頃、山間の樹枝を叩網する時、往々獲らるゝ事あれども、未だこれが鳴聲をきかず。(第六版第三圖)

(一二)クダマキモドキ(Holochlora japonica, Brum.)　體長一寸一分、體綠色をなし、頭部は綠色と白色とを混じ、頭頂尖り、其兩側に白點を有す。複眼は黃綠にして卵形をなし、觸角褐色、長さ體に倍す、前胸背は狹長にして後緣圓く、中央には横にく字形の凹紋を有し、兩側の後緣は上部にて著しくきれこみあり。前胸腹には刺を有せず、前翅は綠色にして、長さ一寸五分、腹部の外に出づること七分、翅脉

綠色をなす。後翅は膜質、先端少しく綠色をなし、前翅と其長さを等しくす、腹部は綠色、產卵器は長さ三分、薙刀狀にして、綠色を帶びたる黃土色なり。肢は三對共に綠色、各脛節の內外側に細刺を有す發音器は小形、發音鏡はほゞ三角形をなす、成蟲は、九、十月頃樹幹に靜止し、盛にグル、、、、、と其音恰も管を卷くが如き聲もて晝間多く鳴々す。(第六版第七圖)

正誤、本題(四)に於てハゴロモセミの記事中安田由熊氏云々とあるは安部由熊氏に又アカエゾセミの學名を Cicada pyropa, Mats. と且同記事中「第三版圖の該種は」の八字を省き田中芳男先生とあるを田中節三郞先生と訂正す

# 講話

## ◎蟲供養に就て法話

靜岡縣駿東郡　間宮英宗

本日は例年の蟲供養施餓鬼を修行せられますに就て、聊か拙衲の所感を述べて、諸士へ法施を致さふと存じます。

正法念經には「一所寺を造立するよりも、寧ろ一命を救ふに如かず」と說いてあります。又歸元直指と云ふ書物に、一元禪師は「食ふ所の肉は皆是れ累世六親眷屬なり、秖た頭を改め面てを換へて各々相知らず、嗚呼肉を食ろふ者をして宿命智あらしめば、其心苦痛して食ろふも亦咽を下らざるべし」と云ふ樣な事がありまして、佛敎では、絕對に殺生も許さず、肉食も許さぬかと云ふに、そうばかりではないが、今日は害蟲を殺すかわり、一塲の莊嚴なる施餓鬼會を勸めて其水を田へ流し、其法幢を畑へ建て、、害蟲を殺さないで、害をなす蟲へ却て甚深微妙の法供養をして遣かはさるゝとは、誠に慈悲仁惰を根本とする佛菩薩の本懷である。然し蟲供養をして、其れでみな害蟲は自然に驅除が出來ると思ふて居る人があつては佛敎の眞理にも違背するから、先づ十重禁戒の最重罪なる、殺生戒の明文を一と通り拜讀して、其れから戒の眞意義をお話して皆樣へ佛敎の本領を誤解せられぬ樣致したいと思ふ。梵網經には、

快意殺生戒第一としてあります、第二第三と十重禁戒、四十八輕戒と順に說いてあるから、第一とあるので所有戒法でも先づ殺生戒を最上の罪としてある。快意意と云ふ二字は、藏疏に殺心猛盛にして勇快情に稱ない、三時に(三時とは過去、未來、現在、)無間なり、故に快と云ふ事がございます。殺生と云ふ二字は、五隊相續して假りに衆生あり、若し一色を害すれば、則ち四心倶に滅して彼の相續を斷んず、之れを名づけて殺すと爲すとあるが、兎も角衆生の存生は、前滅後生〳〵と、水の流れも蠟燭の火も同じ事、前の水は流れて行て後の水が新らた生して流れて來るから、活動波瀾、淵となり瀬となり、遷流相續して居るので活て居るが、其流れを防止すれば、水は停滯して死水となる、蠟燭の火も只見て居れば同一不變に見へますが、之れも前の火が滅して後の火が生じ、新陳代謝火の生命を相續して居る間は、四邊を照して明るいが、其相續を停止すれば消滅するから、此を水を殺し又火を殺すとも云ふてよい。凡そ生とし活る衆生も其通りで、出息入息刹那生滅を相續して居るから姿が活て居るので、其生滅相續の氣息を止めれば殺生と云ふのである。何故に此殺生を佛はそうやかましく制禁せられたかと云ふに、智度論にも「設い世界に滿つる寶も身命に直ること有ことなしと」ある通りで、含靈の重んずる所ろ壽に過ぎたるはなし、如何なる王位も財寶も、生命には代へられぬ、其命をとることが罪惡で無くて、何します。然し善だ惡だと云ひますが、善とは如何なる形をして居りますか、惡とは如何なる姿をして居るかと云ひましたら、皆樣は何と御答へになりますか。善は人は助けるのが善だとか、惡とは人の困る事を爲すのを惡と云ふ樣な、ボンヤリと通俗には善惡の差別がしてある樣ですが、人を助ける人を救ふと云ふても、細別すれは助けるだか困るしめるだか分らぬ事があります。譬へば門に立つ乞食です何卒か一文と見る影もない姿で、救ひを求めて來る者に世間の人一般が施すが善いで、助けると云のだろう乎、施すから乞食がある乎、乞食が有るから施すの乎、壯年血氣の若者が世間に助けて呉れる人がある、ナアニ門に立てば食つて通れると云懶惰な精神を起して、天晴れ世間に活動する人物になれる男子を、世の慈善家が乞食で一生暮らさすのだとすれば、助くるのか將た殺すのか分らない、懶惰の懶の字を御覽なさい、立心扁に賴むと云ふ字だ、獨立獨行の堅全なる意志のない、依賴心のある志を懶け物と云ふのだ、人を賴むから乞食になり、明日を賴むから今日を怠り、來年を賴むから今年を怠り、來世を賴むから現世を怠り、遂には一生を半醉半醒で半分死んで暮らす樣な人間をこしらへて、其れで善とは云はれぬだろう「善とは群居の生育を保護する是れを善と云い、これに反するを惡と云ふ」と鳥尾中將など

は云はれましたが、一寸分り好い說だ。其れでは群居の生育だから、蟲も鳥も獸も群居して居るから、害蟲一疋殺しても惡かと云ふに、其殺す精神に依つて善ともなり惡ともなる。釋迦如來は實に殺生を厭はれて、梵網經には「若し佛子若自ら殺ろし、人を敎て殺ろし、方便して殺ろし、殺ろすを讃嘆し作を見て隨喜し、乃至呪して殺さしむ。殺の因殺の緣殺の法、殺の業あらば、乃至一切有命の者故らに殺すことを得ざれ。是れ菩薩は應さに常住慈悲心、孝順心を起して方便救護すべし。而も反つて更らに快意を以て殺さば、是れ菩薩の波羅夷罪なり」と說てあります。菩薩と云語は菩提薩陲の畧語で、中華に譯して覺有情と申して、慈悲の修行をする人と見たらよい、佛子と云ふ事も佛法修行する弟子と云ふ事、波羅夷罪と云事は極惡罪と譯します。まあ斯ふ云ふ恐ろしい戒經を、其儘頭から振り舞はされたら、人間は始めから生活する事も出來ない。人參でも牛蒡でも、生々發育して居る米でも麥でも其通りですから、食はずに飢死だ。然し又開遮の法も說いてある。(開遮とは、開は則ち混交覆障する者を排して內部實質を顯示するなり、包含せる所を開き條を立て明擧するなり、則ち一体を分解して各々別々に認知し得せしむるなり、所謂殺してよい塲合に依つて許す方なり。遮は梵語に閻魔と云、遮して惡を造らしむ、殺すなりと云ふ方なり)から、菩薩修行する者は心得て置かねばならぬ。佛道修行する者、佛敎信者たる者は活ける如來の御敎へを殺ろして、死佛法にして貫つては困る。其れは彌勒の瑜伽論に斯ふある「菩薩若し重罪を作らんと欲する者を見ば發心思惟すべし、我若し彼の惡衆生(害蟲の如き露國の如き)の命を斷ぜば當さに地獄に墮すべし、若し其れ斷ぜずんば彼れが(害を爲す者)罪業成就して當さに大苦を受くべし、我れ寧ろ彼れを殺して那落迦に墮つる共、終に其れをして無間の苦をうけ令めず」と。斯云大慈悲心大孝順心を以て殺生するならば佛陀の本懷にして、群居の生育を保護し、乾坤宇宙の安寧を計る所の最大功德となるのであるから、今度の戰爭に皇軍の勇士が多くの敵を殺す、殺すは殺すが菩薩の慈悲の殺生であるから、敵を一人も多く殺して早く露國に改悟せしむるが最上の功德であるのだ、宣戰の御詔勅を拜見しても分る、世界の平和を攪亂し東洋億萬の蒼生を苦るしめて、正義公道の重罪を作さんとする露國だから、露國の爲めに吾は如何なる損害を受くる共、彼れをして世界列國より鋒鉞の苦をうけざらしめんために、世界になり代り、天より降し給ふも同樣なる御戰であるから決して罪にはならぬ否至尊無上の功德である。當春私は岐阜愛知兩縣下巡敎の際、不思議な因緣で昆蟲學專門の大斗名和先生の御招きに依て、昆蟲研究所で一日講話を致しましたが、其席上でも其他へ參りましても、私は名

和先生の蟲を殺ろす熱心な事に感心して、非常に讃嘆致しました。實は今時の僧侶も、名和氏の如き熱心な者が一縣下に一名宛ありましたら、佛教の弘通も國家に有益なる事も一層だろうと深く感じました。斯く云ふと梵網經に迷ふて居る人は、間宮と云ふ和尚は菩薩の波羅夷罪を犯して居る邪魔外道だとの御誹謗もございましよう、從軍して作戰上多大ゝ人を殺すを見て隨喜し、歸朝しては昆蟲殺しの名和を讃嘆する狂亂の僧だとも云はれましようが、若し出征軍人が敵を殺して地獄に陷て苦しむならば、私は軍人諸士の身代りになつて劍樹刀山へ進んで先登致し、無間の苦しみを喜んでうけます。親愛なる名和氏が、若し蟲地獄へ落て其苦をうくると云ふならば、私は名和氏の手を採て名和氏を天上界へ往生さしても、自分が身代りに成つて蟲地獄の苦しみを甘受致します覺悟でございます。と申は名和氏の熱心に害蟲を驅除して農作物の利益を計り、益蟲を保護して營々役々、所謂煩惱の害蟲を殺し、菩提の益蟲を相續保護して國家の利益を計る菩薩である。萬一日本全國に害蟲が蔓延して、一粒の米一撮の麥も取れず、其結果雜草も生育せず牛馬も斃れる、人も死ぬと云ふ場合になつたら、遂には害蟲も根底から絕無に歸する事なれば、到底人を殺し牛馬を殺す重罪を犯さんとする害蟲を殺ろして、早く善所に生を轉せしめんとの慈悲心から、此害蟲殺生を敢て致さるゝのだから、殺生戒を破る所ではなく大に護持する法になるのです。左れば名和氏は間接に人を生育し、牛馬を保育し居る事になるから、始めに拜讀した一所寺造立處ではない、八萬四千の大伽籃を建立するも同樣である。其處で今日在座の皆樣も、御經さいよめば害蟲驅除が出來ると思ふて居られましては、私も甚だ心苦しい。若し迷信の深い人が、仁王般若經の講義を聞いて、經中にある七難即滅七福即生と云ふ言を誤解して、只た仁王經を讀みさいすれば米が取れると云ふので、田の草も採らず碌々肥料も施さず、害蟲驅除もなさず只仁王經をよんでばかり居つたが、愈々秋となつたら、今日はみのるか明日はみのるかと思つて、讀んでもよんでも稻は枯れるばかりである、モウ耐らへられなくなつて、大きな聲でソーラ仁王般若經だぞ、南無仁王般若經だぞと、田の畦を終日終夜御經の本を以て擲いて步いたが、遂に何の天祐功德もなかつたので狂亂して仕舞つたと云ふ事がある、御經の功德は精神の害蟲を驅除精神の米を收穫し、精神の雜草を拔除するには目前に實驗があるが、先に談じた樣な、今の迷信家の樣な依賴心、懶惰心などを驅除するには最も功驗がある。然し其れならば今日の如き盛大なる蟲供養しても何の功德もないかと云ふに、蟲供養した今日の仁情を以て、名和氏が多年の經驗に依つて敎へられた害蟲驅除の方法を實行すれば、慈悲ある人の攏網には殺し

てくださいと蟲が喜んで死にに來ますから、仁王經の信者を眞似せず、殺生戒の制禁に迷はず、乞食に施して人を懶惰ならしむと同樣宋襄の仁に學ばず、宜しく瑜伽論の御主意に隨ひて害蟲驅除を致されて秋の實りを御願いなさらん事を企望致します。

護生ハ須ク是レ殺ス　殺シ盡テ始テ安居　要セバ會セン箇ノ中ノ意ヲ　鐵船水上ニ浮フ　（古德之頌）

## ◎昆蟲採集奇談（幻燈使用）其四

昆蟲翁說明
鳴蟲女史筆記

夜中採集の際乞食の聲に驚かさるゝの圖

（四）夜中採集の際乞食の聲に驚かさる

今から十五六年も前の事でありましよう、私が京町に居りました時の事で、これも忠節林に於ての出來事ですが、私の家の近邊に高等小學の一、二年生にでもなろうと思ふ子供が二三人もありました。所が其子供や親達は、私が毎夜夜中採集に行きますのを、如何にも面白い事の樣に思ひまして、折々私にたのみますから、或る夜つれて行きました。例の通り先づ初めに砂糖を塗りつけて行きますと大きな櫟の木の、丁度私が砂糖を塗ろうと思ふ位の高さの所に、腐つた樣な紐がからげてありましたから、これは何んでも草刈小供が、木の太さをはかつてそのなりにとる事を忘れたものであろう、兎に角この上へぬつてやろうと思ひまして塗つてゆきました。それからしばらくたちまして、此度蛾をとりにまわるのです、所が蛾は實に多く居りますから、小供等も大層喜んで面白そうに付いて來ました。

それからその大きなくぬぎの木の所迄來ましたから、私はこゝに居るぞと申しましたら、小供等も一生懸命

に見樣としのて木傍へ寄りました。すると向ふの方で、慣れな聲で「どうかよろしく御賴み申します」と申しました。すると小供等は、思はず聲高くアッと云ふより早く逃げて行きました。してよくそのものを見ますと、三間も向ふに蚊帳がつりてありまして、其そばに鬚の蓬々とはへた老人の乞食が坐つて居ります、此の櫟に結び付たる紐は、即ち其の蚊帳のつり手でございます。それから私も實は其不意に驚きました事でありますから、思はず「なぜ初めに來た時にそれを云はなんだ」と申しました。すると乞食は「私も初めに申上樣とは思つて居りましたけれども、だまつて御通りになりましたから、それなりにして居りましたに、又まはつて御出になりまして、此處に居るぞと仰になりましたから、御叱りを蒙らんうちと思ひまして申上ました次第であります」と答へました。先づそれはよかつたが、よく自分の足基を見ますると、いばらが澤山にづぼんにかゝつて居ります。これは何故かと云ふに、始終草刈小供が木の枝等が落ちて居れば皆持つて行きますけれども、このいばらだけは持つて行かずそこらにほつて置きましたのを、乞食が拾ひ集めてこの大きなくぬぎの木の根元へ積んで置きました。それを知らずに小供が蟲を見るために、そのそばに行きまして、逃げるときにそのいばらに引つかゝりましたから、つひそばに居りました私に、ひつかゝりましたので、容易に放ることが出來ません。先づ難儀してそれをはなし、小供は一体何處へ行つたかとあたりを色々さがしましたけれども居りませんから、やむを得ず家に歸りまして子供の家を尋ねると、何だか最前吃驚した樣子で飛で歸りましたが、一体何んで御座いましたとの事で、只今の始末を話し大笑をした事でありましたが。乞食は私が洋服を着て居りましたから、巡査だと誤認して、なんでも叱られぬ内にと向ふから聲を掛けたのです、それはまあ私等の研究しますす頃は、こんな事がどの位あつたかも知れませんが、兎に角これも奇談の一つです。

# ◎昆蟲文學

岐阜公園所見

公園莽々謗荒園、忽看大蟜竿上翻、休怪昆蟲名氏住、風光一變往來繁、魯岳曰余亦所欲言三四極妙

岐阜西野町　山田生

暮春見蚊　山田藍溪

落花委地雨霏霏。懊惱吟心酒亦非。早已新蚊知節序。又乘輕暖向人飛。

魯嶽曰。三四有諷刺不甚露是詩人筆。

雜詠　坪内清之助

*

病む蠶撰り出せるをうなゐ子が團扇の上に數へならべし

亡き人の奥津城所夕訪ひて在りし世愛でし螢放ちぬ

*　ふもとのや

窓近き下枝の若葉てら〳〵と夕日に照りて羽蟻飛ぶ見ゆ

御手洗の清水眞清水わくら葉の散り浮くなべに羽蟻飛びたり

*俳歌二首　潮音生

夏蠶飼ふ古家を樹々の緑かな芥子の畠に飛ぶあげは蝶

かぶと蟲泉溢るる樟の根に日影搖いて居るげんごらう

蚤

寢心や蚤くふことも知らで明けし　四澤

夜半の灯のみに寢られぬ話かな　同

のみ出でて梁山伯を騷がせけり　同

燈下讀書本の上飛ぶ蚤一つ　同

老の身の寢覺嘆つや蚤の事　同

のみ飛ぶや松葉散り刺す干蒲團　歸麓園

澁紙に蚤飛ぶ音や枕元　同

五月雨の今朝晴れて蚤飛ぶ日かな　同

のみ飛ぶや風吹き通す朝の宿　同

此頃の白き寢卷や蚤の糞　城東

のみとり粉一夜安けく眠りけり　同

夏瘠の我脛のみにくはれけり　城北

のみがくふ乳臭き子のうつつかな　耕雲

五六人團欒の席や蚤の飛ぶ　友水

蚤に寢ぬ子の衣むいて裸かな　華園

鬼の書賛

陣中記おかしく書いて蚤のこと　同

褌の蚤を亡者にとらせけり　同

紫陽花に蚤の衣をふるひけり　同

草の戸の淸らに蚤も居ぬような　同

## ◎昆蟲に關する歌（三）　奥島欣人輯

### ▲萬葉集の昆蟲歌（ロ）

晩蟬歌　大伴家持

こもりのみ居ればいぶせみなぐさむと出立ち聞けば來鳴く日晩し

詠　蟬　作者不詳

もだもあらむ時も鳴かなむ蜩の物念ふ時に鳴きつゝもとな

寄物陳思　作者不詳

足日木の山田守る翁が置く蚊火のしたこがれのみ吾は戀居らく

たらちねの母が飼ふ蠶の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて

なか〳〵に人とあらずば桑子にもならましものを玉の緒ばかり

相　聞　作者不詳

荒玉の年は來ゆきて、玉梓の使し來ねば、霞立つ長き春日を、天地に思ひたらはし、垂乳根の母が養ふ(カ)蠶の、眉ごもりいきづきわたり、吾戀ふる心の中を、人にいふものにしあらねば、松が根の待事とほみ、天傳ふ日の暮れぬれば、白妙の我衣手も、通りてぬれぬ。（反歌畧）

挽　歌　防人妻ㇾ所作也

此月は君も來まさむと、大舟の思ひたのみて、いつしかと我待ち居れば、黄葉のすぎてゆきぬと、玉梓の使の云へば、螢なすほのかに聞きて、大士平太穂跡（此一句解し難し）立ちて居て行衛もしらに、朝霧の思ひまどひて、杖不足八さかの嘆き(ナゲ)、嘆けどもしるしを無みと、何所(イツク)にか君が坐(ネ)むと、天雲の行きのまにまに、射鹿(イユシヽ)の行も死なむと、思へども道の知らねば、獨り居て君に戀ふるに、音のみし泣かゆ。（反歌畧）

常陸國歌　作者不詳

筑波根の新桑繭の絹はあれど君がみけししあやに着ほしも

遣新羅使人當所誦詠歌　秦　間　滿

暮さればひぐらし來鳴く伊駒山越えてぞ吾來る妹が目を欲り

安藝國長門島舶泊磯邊作歌　大石蓑麿

岩ばしる瀧もとゞろに鳴く蟬の聲をし聞けば京師(ミヤコ)し思ほゆ

同　作者不詳

戀しげみなぐさめかねて蜩の鳴く島陰にいほりするかも

至築紫舘遙望本郷悽愴作歌　　作者不詳

今よりは秋づきぬらし足引の山松かげに晩蟬(ヒグラシ)鳴きぬ

昔有老翁號曰竹取翁也此翁季春之月登丘遠望忽値煑羹之九箇女子也百嬌無儔花容無止于時娘子等呼老翁嗤曰丱父來乎吹此鍋火也於是翁曰唯唯漸趨徐行著接座上良久娘子等皆共含咲相推讓之曰阿誰呼此翁哉爾乃竹取翁謝之曰非慮之外偶逢神仙迷惑之心無敢所禁近狎之罪希贖以謌即作歌　　作者不詳

綠子の若子が身には、垂乳爲母に抱かえ、褨襁平生が身には、結經方衣氷津裡に縫ひ着、頸つきの童子が身には、結機の袖つけ衣、着し我を、似よれるよち子等が身には、みなのわだか黑なる髮を、ま櫛もてこゝにかき垂れ、取束ね擧ても纏きみ、解亂り童兒丹成見羅丹津蚊經色丹名著來（此數句古來讀み方に種々あり原本の儘とす）紫の大綾の衣、住の江の遠里小野の、ま萩もてにほしゝ衣に、狛錦、紐に縫つけ、刺べ重ね並べ重ね服(キ)て、うちそをそみの子ら、あり衣の寶の子らが、打栲はへて織る布、日晒しの麻手づくりを、敷もなすはしきに取敷き、宿にふる稻置處女が、夫(ツマ)とふと我にぞ來る、彼方の二綾した沓、飛鳥の飛鳥男が、長雨禁み縫(イ)ひし黑沓、刺佩きて庭に佇み、な立ちぞと諫むる少女が、ほの聞てわれにぞ來る、みはなだの絹の帶を、引帶なす韓帶ょ取らし、海神の殿の盖(イカラ)に、飛翔けるすがる◎◎◎の如き、腰細に取りて餝らひ、眞十鏡取並懸て、おのが容姿顧らひ見つゝ、春さりて野べを廻れば、面白みわれを思へか、天雲も行たな引きぬ、還りたち大路を來れば、打日刺宮女(オミナ)、刺竹の舍人壯子(オトコ)も、しぬぶらひ還らひ見つゝ、誰が子ぞと思ほへてあらむを、斯くぞ醜なる、古のさゝきし吾や、はしきやし今日やも子等に、いさにとや思ほえてあらむを、かくぞ醜なる、古の賢き人も、後の世のかゞみにせむと、老人を送りし車、持て歸り來し。（反歌畧）

河村王宴居之時彈琴而即先誦此歌以爲常行也（古歌）　　作者不詳

朝霞み蚊火屋が下に鳴く蛙しぬびつゝありと告げむ子もがも

天平十八年八月七日夜集于守大伴宿禰家持舘宴歌　　大目秦忌寸八千島

日ぐらしの鳴きぬる時は女郎花咲きたる野べを行きつゝ見べし

○

萬葉以前の歌は歷史に關係ある者のみ今日迄遺つて居るのであるから、敍景歌などは殆んど絕無であるが、萬葉集となると歌集として編纂したのだから取材も多方面となる、隨つて材料に用ひたる昆蟲の種類も右に揭けたる如く增加して居る、それを統計して見ると

蟬(蜩)　十、　蟋蟀　七、　蠶　四、　蚊(蚊火)　二、　蠅　一、
螢　拾一、　夏蟲　一、　すがる(蜂)一、　蟲(とのみある)一、

此中で單に形容詞として用ひられ、或は形容詞の一種たる枕辭として用ひられ居るのもある。蚊火は或は鹿火であるかも知れない、が昆蟲歌の纂集者は我田引水で是歌を昆蟲部に編入する事としたのだ。尙此集に虛蟬の語がある、うつせみは其解釋に二種ある、一は蟬殼とし他は現身(ウツシミ)の義とする、僕は萬葉集中にある蟬が虛蟬殼でなければならぬと云ふ歌を認めなかつた、其何方にも通用する者でも後者の義とした方が適切であるべく感ぜらるゝから、昆蟲歌には加へぬ事とした、虛蟬は萬葉に多く用ひらるゝ例に依つて現身の假字であらうかと考へる。古今以下には蟬殼でなければならぬ歌を發見する。

萬葉集全部四千四百九十六首中動物の歌が二割弱ある、それを分類すると

鳥　類　五百四拾三首
獸　類　百六拾五首
蟲　類(昆蟲以外)　四拾五首
魚　類　二拾八首
抽象的動物(龍)　一首

鳥類の中でも霍公鳥は一種で百五十四の多きに達し鶯、鶴、鴈が是に次ぐ、獸類では馬と鹿が多い、蟲類では貝と蛙が多い、魚では鮎だ。萬葉以前に現れた昆蟲で蜻蛉と虻の二種が萬葉には一首も見えないのが不思議だ。

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄（其六）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

(九)クハノシンムシ　桑樹の一大害蟲にして、成蟲はハイオビヒナカクバと稱し、体長二分余、翅の開張

五分餘、前翅は長方形をなし、暗黒色にして翅底（翅の基の方をいふ）に近く灰白色の横帶あり。且翅端に近く斜に灰白の帶斑ありて、外緣部は淡褐を帶ぶ。後翅は暗灰色にして、緣毛灰白なり。幼蟲の十分成長したるものは、三分五厘内外に達し、淡綠又は淡褐色を帶び、頭部は光輝ある黑色にして、尾端亦稍黑し、体の各節には疣狀の黑點を有して、細き灰白色の毛を粗生す。年一回の發生にして、九月頃より幼蟲は葉を辭し、枝の基部に下り、其樹皮又は芽の附近に於て粗薄の白き繭樣物を作り、其中に入りて越冬を遂げ、翌春桑芽の出づる頃、潛所を出でゝ桑芽に移り加害す。之れが害を受けたるものは、殆んど霜害に遇ひたるの觀あり。六月頃老熟して被害芽を去り、新に他の桑葉に移りて葉を猪口狀に捲き、薄き繭を造り其内に蛹となる。七月中旬頃最も盛に羽化し、葉裏に一所に一粒つゝ產卵し、凡一週日を經れば孵化して葉裏の葉綠層を食ひ、茲に糸を吐きて蜘蛛巢の如きものを造り、其の內に棲息す。漸次生長して、秋季に至れば其葉を辭し、樹皮又は芽の附近に移り、糸を吐き其內に越冬すること前述の如し。

驅除法　（一）五月頃被害の桑芽を摘み採り、該蟲を殺すべし。然れども、此蟲には數種の寄生蜂ありて之れを斃すこと多ければ、摘み採りたる被害葉は、籠類に入れ肥料壺等の上に吊し置けば、十日內外を經て、寄生蜂は羽化して飛揚するを以て、其後に於て被害葉を肥料壺に投入し、害蟲を殺すと共に益蟲の保護を圖るべし。（二）猪口狀に綴りたる葉を摘採して、肥料壺に投入し其蛹を殺すべし。被害の枯芽を摘採するは勿論なるも、稍時期の後れたるときは、折角枯芽を採るも幼蟲は既に該所を辭し、新しき無害の葉に移り、猪口狀に綴りて蛹となり、殘り居るは蜂の寄生を受けたるもの多きを以て、斯る時機後れたる際は、此の蛹を採ることに注意せざるべからず。然らざれば如何に枯芽を一葉も殘す處なく摘採りたりとも、其効意の如くならず、年々驅殺するも依然として發生加害するは、かく目に當らざる所に其種を遺す故なり。（三）八、九月頃枝基の葉を摘みて蠶兒の飼料となすべし。產卵する頃は、春蠶の飼料として刈り採りたる桑芽の未だ四、五寸位の時にして、且芽に產卵せず、故に產卵後桑芽は漸次成育して、八、九月頃には多くは枝の半ば以下の葉に棲息加害するものなれば、枝の先端三分の一位を殘し、以下の葉を摘採せば大に驅除の効を奏すべし。而して此の摘み採りたる葉は、秋蠶の飼料とせば實に一擧兩得といふべし。茲に注意すべきは、蠶糞は必ず肥料壺に投じ、腐熟せしめたる後肥料とすべきことなり。若し其儘蠶糞を桑畑等に入るゝときは、折角驅除したるシンムシも、蠶糞中に殘り居りて、直

（イ）卵の放大
（ロ）夏季害蟲の狀
（ハ）冬期越冬の狀
（ニ）春季被害の桑芽
（ホ）老熟の幼蟲
（ヘ）造繭せし狀
（ト）蛹
（チ）雄蛾飛揚の有樣
（リ）同雌
（ヌ）成蟲靜止の狀
（ル）幼蟲に寄生する寄生蜂の放大
（ヲ）蛹に寄生する寄生蜂の放大

ちに桑樹に移り、翌年の種を作るの恐あり、故に必ず蠶糞は肥料壺に投入し、腐熟せしめ蟲を死に至らしめて後肥料とするを良しとす。啻に驅除の目的に叶ふのみならず、肥料使用の上より見るも、亦斯くありたきものなり。

此の蟲は今より二十余年前に、飛驒益田郡に於て初めて其發生を認めしも、其當時は加害の輕微なると、昆蟲の智識の皆無なるを以て、害蟲驅除の如きは耳を傾くるもののなく、其儘等閑に附しありしが、漸次蕃殖蔓延して大に加害の度を增し、今や飛驒一圓は勿論、郡上、武儀、惠那、土岐、加茂等に傳播し、其損害實に十万圓を下らざるべし。加ふるに愛知、長野の兩縣にも既に發生し居るを以て、昨年來三縣聯合共同驅除の議あり、本年は愈機熟し、去月來之れが實行中なれば、本年は大に其効果の擧るべきを喜ぶと共に、實戰者の飽く迄周到の用意を以て、遺算なからんことを希望するものなり。從來岐阜縣下に於ては、隨分矢釜敷驅除を勵行し、餘程被害の低減を見し地なきに非ざるも、輙もすれば、本年は被害少なしとて等閑に附するものなきにあらず、是れ大なる誤にして、最初加害少しと

て打捨置きたるを以て、今日の大事を見るに至りたるに非らずや、寧ろ被害の少なき年に於て極力驅除せば勞少なくして好結果を收むるを得べきなり。災害は最微に發し困難は至易に生ずと、實に之れを謂ふなり。返す返すも今年は害少しとて枕を高くする勿れ、被害の少なき年こそ愈全滅の機熟せりと覺悟し、益々努力せられんことを切望す。

余初め此の害蟲驅除豫防實驗録を草するに當り、高等小學兒童諸氏の愛讀を希望し、極めて簡單を主として記述せしが、今回に限り少しく詳細に涉りたるは、別に他意あるに非らず、唯該クハノシンムシは目下岐阜縣下に於ては恐るべき桑樹の一大害蟲にして、初め驅除を等閑にせし結果、今日の大害を見るに至り如上の愛知、長野縣は勿論、新潟縣に發生し居ることは、去月十八日西頸城郡に於て採集したりとて、當所へ寄せられたる現品によりて明かなり。尙其他如何なる地に發生し居るやも知るべからざるを憂ひ、常に注意して、其發生を認むれば直ちに十二分の驅除を勵行し、後日の憂なからんことを懇望の餘り、勢ひ冗長に失したり、讀者幸に咎むる勿れ。

## ◎養老山昆蟲紀念採集顛末

廣瀨警蟲生

明治三十八年四月十六日、第百期巡査敎習所授業生三十二名は、名和昆蟲研究所第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習生、及同所特別研究生四十名と共に、二軍に編制し、第一軍司令官には廣瀨、池田、居相の三敎官、第二軍には石田、名和正の兩助手、總司令官には近頃米國より歸朝せられたる名和梅吉氏之れに當り、彼の瀑布を以て有名なる養老山に昆蟲紀念採取の擧あり、今禿筆を呵し左に其の顛末を記さん。

嚴師名和昆蟲翁常に言へらく、害蟲の防除は恰戰爭の如し、幾多將校下士卒を訓練し、策戰計畫を定めたる後ちに非らざれば實戰に臨むこと能はざるが如く、害蟲軍に對するも又然り、平常昆蟲學の基礎を定め、幾多の人物を養成し、然る後戰に蒞まざれば其の効を收むること能はず。然るに既往の實蹟に徵すれば、害蟲軍の攻擊方法は、恰も兵法を知らざる指揮官が、訓練なき烏合の兵を卒いて勁敵と抗爭するが如し、連戰連敗素より其の處なり。甚しきは敵と味方の差別を誤り、大不覺を見ること往々有之、顧みれば日露砲火を交へてより、海に陸に連戰連捷、皇師の向ふ所風靡せざるなく、大に我が國威を宇內に

發揚したるは、是れ偏に

大元帥陛下の御陵威に因ると雖も、又た我陸海將士の忠勇義烈に歸せずんばあらず。然りと雖も、戰は前途尙遼遠なり、唯だ目前の勝利に驕醉せず、上下擧て最終の目的を達することに勗むへきは、國民刻下の急務なり。古の戰はいざ知らず、今日の戰は單に兵力のみに信頼すへからず、財力も又與かりて力あり假令千百の艨艟、百萬の貔貅ありと雖とも、軍資の供給を欠かんか亦如何ともすべからず。我等幸に此聖世に生れ、千歲一遇の時局に際し、勤儉己れを持し、軍資の出途を講じ、外征の將士をして後顧の憂なからしめざるべからざるなり。然り而して、外敵は唯り露軍のみりなと雖とも、尙之れより一層恐るべき一大勁敵の內に在ることを記臆せざる可らず。其は即ち害蟲軍の總大將たる螟蟲、逼將たる浮塵子之れなり。彼等强敵の、日夜間斷なく吾人農產物を侵害する年々數千萬圓の上に出で、殊に本年の如きは、冬期間氣候槪して溫暖なりし爲め、此等大將の、稻株又は雜草中に籠城して越年せしもの頗る夥しく、既に四國九州地方にありては、害蟲軍の先鋒を見るに至りたりと。宜なり、農商務省の臨時害蟲豫防費七萬圓を支出し、之が防除に務めらるると、兄等幸ひに斯學に志すの士、奮然蹶起、害蟲攻擊軍の先鋒隊となり、緻密熱心なる當局の策戰計畫と、農民諸氏の精神的實行等を促進し、以て外征將士をして後顧の憂ひなからしむるは兄等の一大責任なり。兄等三春の好期節、須べからく先づ花に醉ひ、月に戲るゝ陋心を打破し、養老山中昆蟲の消息を探ぐるも亦快ならずやと、嚴師の言未だ全く終らざるに異口同音其の擧を賛し、衆皆勇躍時の至るを待つ、之れ此擧の發揚なり。發程の前夜令あり、第一軍第一分隊より第六分隊に至る、第二軍第一分隊より第六分隊に至る各兵は、各所屬司令官の指揮する處に從ひ、圓形捕蟲器、方形捕蟲器、採取箱、毒瓶等の武器を携へ、十六日午前七時岐阜驛發西行列車に投じ、大垣驛に至り總司令官の指揮を俟つべしと、命に接せる吾等同志は、藁草履脚伴、握飯に旅裝の準備整ふも、天晴害蟲軍の總大將を生擒せんとの大野心勃々たるを以て、碌々寢に就くこと能はず、春霄一刻價千金も、此の夜に限り何となく長く、鷄鳴曉を報ずるや、室を飛出で朝飯を喫し、武器を搔き取り停車場へ馳け付くれば、八十名に垂んとする我等一行は、種々異樣の粉粧をなし、巨多乘客の耳目は一時に吾等一行に集注せられ、西南戰爭の城山の始く、官賊兩軍の一時に落合ひたるに彷彿たりと嘲り或は昆蟲軍の大侵擊なりと批評を試むるも耳にも掛けず、朝霞靉靆たる金華の山を後に、午前七時大垣驛

に直行せり。同日午前七時四十分大垣停車塲前に集合總司令官の命令を待つこと約十分間、忽ち傳令來り、第一軍第二軍共各分隊に分れ、兩軍第一第二分隊は、共に不破郡静里、綾野、大坪、飯田、直江の田畑堤塘の獨立採取をなし、午前十一時養老郡養老山麓の偕樂園に至り命を俟つべし、自余の分隊は、第一第二兩分隊と、若干の距離を保ちつゝ沼道の採取をなし、遲くも午前十一時三十分に偕樂園に到達すべしとの命あり。吾等第一分隊に屬する同志五名は、大垣停車塲を一直線に西南に、大垣城一名巨鹿城を右に眺めつゝ、右に左に十數丁、杭瀬川を渡りて不破郡静里村の堤防に出ずれば、滿郊の風物頓に面目を改め、雲雀は青空に囀り、田畑の紫雲英未だ滿開に至らずと雖ども、梨花菜花今を盛りと咲き揃ひ、路邊の菫蒲公英吾等一行を迎ふるが如く、葱々たる麥浪中サナヱトンボの飜へるあり、思はず圓形捕蟲器を以て之れを捕獲すれば、其は味方の雜兵なりとて忽ち司令官の呵責を蒙むるあり、遙に菜花に戯るゝスジクロ蝶を生擒すれば、其は蔬菜の害蟲にして敵の下士官に相當せりと賞せらるゝあり、或は蒲公英花上にベニシヾミ、ツバメシヾミを捕獲せり、そは「スカンポ」「カタバミ」草の害蟲なりとの指導を受けつゝ、綾野、大坪、飯田の諸村落を、敵兵を追擊捕獲しつゝ牧田川を渡り、養老郡高田町を過ぎ押越、石畑の二村を經て、坂路養老公園偕樂園に到着せしは豫定の午前十一時なりき。公園偕樂園は一名千歳樓と稱し、養老山東麓にあり。園内老櫻巨松多く、今や爛熳たる櫻花概ね辭し去り、黃金を欺く山吹の咲き亂るゝあり、躑躅の咲き初むるあり、一溪の流水清陰に依り、老龍の宛延たる處茶亭あり。

キクスイゴミムシの圖

其の幽邃にして閑雅なる世間多く其の比を見ず。先着の余等は、樓下大廣間に携ふる處の握飯を喫しつゝ待つこと霎時、第一軍第二軍各分隊續いて來たり、正午迄園内適宜の個所に於て喫飯をなし、正午より午後三時迄で、各分隊方面を分ち養老山中の敵を極力襲擊すべしと、名和總司令官より全軍に令せらる。頓で正午十二時、戰鬪開始の號報全軍に傳はるや、我こそ先登第一の勳功を奏せんと、各自競ふて險に攀ち峻を辿り、荊棘岩石の嫌ひなく各部署に向ひて一時に突貫せり、其壯觀なる旅順の總攻擊も斯くやあらんと想はしめたり。第一分隊たる余等同志は、先づ瀑布に向ひ攻擊を取ることに決し、羊腸崎嶇たる山道を偵察しつゝ、歩を進むると丁余、忽ち後方に聲あり、敵の伏兵三五櫻樹の蔭にありと、熟視すれども得ず、名和總司令官徐ろに來り、伏兵

目前にあり斯くして捕獲すべしと、指導を受くる再三、敵の伏兵たる尺蠖蛾隊の一卒キハダゴマダラを得ること數頭、余等は總司令官の眼孔の鋭敏にして、而も伏兵の巧妙なる隱見自在に感じつゝ、右に左に步を進むるに從ひ、先發部隊は翠壁雲を含みて萬木深き邊、敵に向ひて一齋射擊を加ふるあり、或は飛泉落下する處衣巾を濕すを顧みず、石起し採集を爲し、敵所在を探るあり、或は碧樹森々として水空を洗ふ處、敵の參謀官とも見紛ふギフ蝶を發見して、之を逸せざらんと互に精鋭の武器を振ひて之を圍包するあり、路傍に咲き遲れたる櫻花の歷亂たる邊、芳草に坐して捕虜の多數を誇るあり、漸く進むに從ひ觸岩怒聲萬雷の如く、白雲呑吐して山明滅たり、初めて知る身の瀑下に來りたるを、仰ぎて青空を望めば清流萬木の中より迸り來り、千尋の飛瀑青壁を潤し、恰も白虹洶を下りて走り、空劍天に倚りて立つの趣あり、水の清冽にして地の幽邃なる、禿筆の能く形容す可きにあらず。余等は奇岩怪石を東西に走り、石起採集を試みて無名の步行蟲數頭を捕獲し、尙石屛峭立の間を攀ぢ登りて瀧の頂上に至れば、無數の山脈南北に連なり、宛延たる一帶の溪流は落花を送り、遙に東南を眺望すれば、渺茫たる尾濃の平野は歷々目睫の中にあり、眼下鏡の如く青空に映ずるは、之れ鴨を羅するを以て有名なる下池なり、其の風景絕佳なる、身は之れ仙境に在るの想ひあり。忽ち躑躅花上アゲハ蝶ギフ蝶等の飜へるを瞥見するや驀然之れを侵擊して、數頭を得、或は雜草を搔き分け、或は叩き網を以てチャバネカメムシ、オホツマクロヨゴバヒ等を生擒し時針午後二時半を報ずるを以て、倉皇武器を收めて豫定の集合地點たる偕樂園に歸り來れば、他分隊も概ね歸り來り、互に採取箱を前にして獲物の多きを誇るに似たり。

總司令官たる名和梅吉氏は、庭前の中央に起立し、第一軍第二軍とも、逐次當日の獲物を講評せらるゝこと左の如し。

本日第一第二の二軍を編成し、害蟲軍に當らんとせし目的は、全く養老山中に出沒し以て危害を加ふ處の大敵を攻擊するに外ならず。幸に只今各司令官、及下士卒諸氏の勇敢なる奮鬪に依り我軍の勝利となり、玆に凱歌を奏するに至りしとは、余の深く其の勞を謝する處なり。今其の第一第二の兩軍に於ける戰鬪中、分捕せられしものゝ結果に就て見るに、第一軍と第二軍とは自ら差異あるを發見す、即ち第一軍の獲物は第二軍の獲物よりも奮鬪せざれば得られざるものあり、故に右獲物より察する時は、第一軍の攻擊點は高く山腹以上にあり、第二軍は即ち山腹以下を目標として攻擊せれしものなるべし。

抑も此の攻擊點たるや、別に前以て定めたるに非らざるも、自然に斯の如き結果を得たるは誠に奇と謂ふべし。而して兩軍とも敵の下士官モンシロテフ、ギフテフ、キテフ、シヾミテフ類を始め、椿象類、鋸蜂、虻或は蜉蝣の捕獲は大差なきも、第二軍は小形種のもの多く、第一軍は大形のもの多かりし、加ふるに肺病患者に內服せしむるときは全癒すると呼稱する所のイボタムシの親分種ショクコウノニシキ幷に蟻軍に對し待伏しつゝ全滅を圖らんとするウスバカケロウの幼蟲アリジゴク等を獲たるは、全く第一軍の勳功と云ふべし特に未だ會て獲たることなき瓢形の步行蟲及双翅類の一新種を捕獲したるは特筆大書して永く該分隊の名譽を傳ふべきなり。本日は斯く山中に出沒する敵軍と戰ひ大勝を得たるも、前途尙遼遠なるを忘れず、他日大平野に於ける戰鬪開始の節は、一層活潑なる攻勢を取り、敵將を生擒して、拔群の勳功を樹てられんことを希望すると共に、益々諸氏の健康を祈る云々。

講評終りて後ち、全軍肅々隊伍堂々、大垣驛に至れば停車場前の柳は早や路に翻りて吾等一行を麾くが如し、一同團体切符を求めて午後六時四十分、大垣驛東行列車にて各自歸途に就けり。此の行多數の敵兵は捕獲し、或は無數の負傷者を生せしめて痛く敵の戰鬪力を減殺せしめたるに不拘、味方に取りては一名の病傷者を生せざりしは、偏に總司令官閣下の策戰計畫の巧妙なると、全軍志氣の旺盛なるとに職由せずんばあらず。唯り遺憾とする處は、名和昆蟲翁の、公務の爲め此の行に參與せられざるの一事のみ。聊か昆蟲攻擊軍動作の顚末を記し後ちの紀念とす。

トビイロムシヒキアブの圖

因に、名和總司令官の講評中新種云々とありしは、即上圖に掲けたるものにして、一は步行蟲科に屬し、体長三分漆黑色を呈し、特に頭胸部は光輝あり、觸角及肢は赤褐色を帶ぶ。形ち極めて瓢に似たり。今回初めて採集したる種なるを以て、紀念の爲め養老の菊水に因み、キクスイゴミムシ（菊水步行蟲）の新稱を附せられたり。他の一は食蟲虻科に屬するものにして、体長五分五厘、複眼黑く、前中胸背は黑褐、後胸背には黃褐色の長軟毛を密生し、腹部褐色を帶ぶ。そをトビイロムシヒキアブと命名せられたり。尙橫井大垣警察署長、西村高田警察署長、林部長の諸氏は、此の一行にかはりて種々の便宜を與へられ、特に河田西濃印刷株式會社主事は此擧を賛し、大垣と養老てふ案內記を寄贈せられ、策戰上多大の便宜を與へられたるは、既に前號雜報欄內にものせられたるが、更に茲に附記して其厚意を謝す。

# 調査

## ◎對馬產の昆蟲（四）

（平田駒次郎氏送附） 名和昆蟲研究所分布調査部

●アカガネオサムシ(Carabus procerulus, Chand.) 体長八分內外、全体銅色を帶び、翅鞘には、細き條溝と點刻とを有し後肢を欠く、肢は黑色なり。

●アヲヘリオサムシ(Damaster hortunei?) 体長一寸乃至一寸三分の大形種にして、觸角鞭狀をなし、頭胸部銅色を帶びて光輝あり、翅鞘は黑色にして點線狀の隆起線を有し、兩緣は綠色にして、見様により黃金色を呈す。兩翅鞘相癒着して先端針狀をなし、後翅を欠く、肢は黑くして甚長し。

●アヲゴミムシ(Chlaenius abstersus, Bates.) 体長五分、深綠色にして前胸は稍銅色を混じ、中央に一縱溝と其兩側後方に短條溝を有し、觸角及肢は褐色を呈す。

●キモンゴミムシ(Chlaenius subhamatus, Chaud.) 体長四分五厘、頭胸部黑綠にして翅鞘は黑く、先端に近き處には各一個つゝの黃紋あり、肢は褐色を呈す。

●キベリゴミムシ(Chlaenius circumductus, Fabr.) 体長四分五厘、深綠色にして、翅鞘には黃色の緣を有す、觸角及肢は黃色なり。

●コガ子ゴミムシ(Chlaenius Costiger, Chaud.) 体長七分五厘、觸角褐色、頭及前胸は銅色を帶びて前胸には一縱溝を有し、其兩側の後方に大なる凹陷あり。翅鞘黑綠色にして條溝淺く太し、稜狀部黑く、肢は褐色を帶びて腿節端少しく黑色を帶ぶ。

アカガ子オサムシの圖

●ウスイロヨツモンゴミムシ(Panagaes japonicus, Chaud.) 体長三分三厘、ヨツモンゴミムシに酷似したる種にして黑色を帶び、前胸圓く、微細の點刻を有し、中央に一縱溝あり。翅鞘には四個の赤褐紋を印すれども判然せず、其隆條緣には切れ込みを有し、前胸及翅鞘に細毛を粗生す、肢は黑褐色なり。

●コゴミムシ(Anisodactylus signatus, Ill.) 体長四分、全体黒色の種にして形稍圓く、觸角の基節は赤褐、先端に至るに從ひ黒し。唇鬚赤褐を帶ぶ。翅は稍短くして、腹端少しく露出す。

●アカアシゴモク(Harpalus tridens, Mor.) 体長三分六厘内外、黒色にして頭及前胸は光澤あり。翅鞘は稍褐色を混へ、條溝淺く、肢は赤褐色なり

●オホクロゴモクムシ(Harpalus sp?) 体長六分、細長の種にして黒色を帶び、光澤少なく、觸角暗褐、頸太く、前胸には細き不明の縱溝あり、肢は黒色を呈す。

●クロゴミムシ(Triplogenius ingens, Mor.) 体長六分五厘内外の黒色の種にして、觸角暗褐を帶び、頸に一條の横溝を有し、前胸の中央に一縱溝ありて、翅の條溝は普通なり。

●ヒラタゴミムシ(Anchomenus maguns, Bates.) 体長三分五厘乃至四分五厘、扁平の黒色種にして光輝あり、觸角赤褐色、前胸の兩側緣は廣し。

●ルリゴミムシ(Colpodes spelendens, Mor.) 体長四分扁平の種にして、頭部及前胸は赤褐色、翅鞘は瑠璃色を帶び光澤ありて條溝淺し、肢は褐色にして腿節端は黒味を帶ぶ。

●ルリムネコヒラタゴミムシ(Colpodes sp?) 体長二分四厘扁平の種にして、觸角は黒褐に、頭胸は深綠色を帶びて、前胸に一縱溝あり。翅鞘黒褐を呈して條溝甚淺く、肢は暗褐なり。

●アカアシコヒラタゴミムシ(pterostichus Sp?) 体長二分八厘、黒褐色にして光澤あり。觸角及肢は赤褐色を帶び、前胸には一縱溝を印す。翅鞘の條溝は淺し。

◎コナガゴミムシ(Pterostichus longinquus, But.) 体長二分七厘、細長の種にして光澤ある黒色を有し、觸角暗褐、前胸圓くして細き縱溝あり。兩翅の接觸部隆條をなし、肢は黒褐なり。

●アカアシヒサゴムシ(Pterostichus Sp?) 体長二分八厘、光輝ある黒色種にして形瓢に似たり。觸角赤褐、前胸圓く、中央に細き一縱溝あり。翅鞘の條溝は細く、兩翅の接觸部隆條となる、肢は赤褐なり。

●アカアシゴモクモドキ(Pterostichus Sp?) 体長四分、黒色にして肢は赤褐色を帶び、アカアシゴモクに酷似すれども、翅鞘には光澤あり。前胸にはアカアシゴモクのそれと異なり點刻を有せず。

●アカヘリヒメゴミムシ(Pterostichus Sp?) 体長二分五厘、細長の光澤ある黒色種にして、觸角赤褐、胸部及翅には赤褐の細緣あり。前胸には中央に一縱溝を有し、肢は赤褐なり。

●コヒラタゴミムシ(Pterostichus Sp?) 体長三分内外の小形種にして、全体黒色を有し、前胸大きく翅鞘と同幅にして、中央に一縱溝あり、後緣に

四個陷刻を有す。

●ヒロムネクロゴミムシ(Stomonaxus platynotus, Bat?) 体長七分五厘、光澤ある黑色にして胸部廣く、上唇の兩側黄色を帶ぶ、頭部複眼の間に陷刻あり。前胸の前緣に黄色の短毛を密生し、翅鞘の條溝は稍深くして粗なり、肢は黑色を帶ぶ。

●コマルガタゴミムシ(Bradytus Sp?) 体長二分五厘、黑色種にして觸角赤褐、前胸の兩側緣は赤褐を呈し、中央に一縱溝あり腹端稍尖り、肢は赤褐にして稍黑味を帶ぶ。

●ムネアカルリゴミムシ(Dictya cribricollis Mer.) 体長二分五厘、扁平の種にして、觸角、前胸及肢は赤褐を帶び、頭及翅鞘は瑠璃色なり。翅鞘には極めて淺き點刻條を有し、其の先端截形をなし、腹端少しく露出す。

●クロヒサゴムシ(Brachynus Sp!) 体長七分、瓢形をなし、頭部及觸角は赤褐、前胸細長く、黑色を帶びて中央の大部は赤褐なり。翅鞘は黑くして光澤なく、其先端截形なり。肢の腿節は褐色にして其先端黑く、脛、跗節は暗褐なり。

●オホアカガシラゴモク(Brachynus Sp?) 体長五分弱、頭胸部赤褐、翅鞘黑くして條溝甚だ淺く翅端は截形をなす、肢は褐色なり。

●マルガタゴミムシ(Amara chalcites, Zim.) 体長三分五厘、圓形の種にして全体黑色を帶び光澤あり。觸角及肢は稍褐色を呈し、翅の條溝は淺し。

●フタホシゴミムシ(Planetes bimaculatus, Macleay.) 体長四分五厘、黑色稍扁平の種にして光澤少なく、觸角及口具は褐色を帶び、頭胸部には微細の點刻を有し、翅鞘には中央より稍上方に二個の黄色圓紋あり、肢は褐色を帶ぶ。

●ルリム子ゴミムシ(Poecilus lepidus, Fabr.) 体長四分、頭胸部黑綠色を帶び、觸角赤褐色、前胸廣くして翅鞘と同幅なり。翅及肢は黑し。

●ヒロム子ゴミムシ(cophosus Sp?) 体長五分、細長黑色の種にして甚だ光澤あり。觸角は黑褐、前胸の前緣は後緣より廣く。一縱溝及陷刻を有す。翅鞘の縱溝深からず、肢は暗褐にして光澤あり。

●ミキデラハンメウ(Pheropsophus jessoensis, Mor.) 体長五分五厘、頭部淡黄褐色にして一個の黑斑を有し、翅鞘黑色を帶びて、中央及上下に黄斑あり、中央に在るものは大なり。

## ◎岐阜縣郡上郡産の昆蟲(一)

(塩田健藏氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

調査主任云ふ、郡上郡は飛騨に接する地にして、岐阜地方とは昆蟲の種類も甚だ異りたるもの尠しとせず、幸ひ同郡には揖田健藏氏の熱心に昆蟲を研究せらるゝありて、其採品は一通り當所に送らるゝ由なれば、順次本欄に登載することゝなしぬ。而して種名下の月日は採集月日にして皆本年の採集品なれば年號を畧す讀者乞ふ之れを諒せよ。

●キベリゴミムシ(Chlaenius circumductus, Fabr.) 四月二十一日、歩行蟲科に屬し、本欄記載の對馬産のそれと同種なり。

●ヨツモンゴミムシ(Dischissus quadrinotatus, B.) 四月十二日、歩行蟲科に屬し、体長三分五厘、黒色種にして觸角糸狀をなし黒く、第一節は太くして赤褐なり、前胸は殆んご圓く、翅鞘は判明なる四個の褐紋を有し、上方にあるものは大なり、肢は褐色をなす。

●ヒラタゴミムシ(Anchomenus magnus, Bates.) 四月十二日、本欄に記載せる對馬産のそれと同種なり。

●コルリゴミムシ(Colpodes lampros Bates.) (新稱)四月十二日、歩行蟲科に屬し、体長三分扁平の種にして、頭、胸赤褐を帶びて複眼黒く、翅鞘は碧色を呈す。觸角糸狀にして補色を呈し肢も亦褐色なり。

●マルガタゴミムシ(Amara chalcites, Zim.) 四月十二日、歩行蟲科に屬し、体長三分内外、黒色圓形の種にして光澤あり。觸角糸狀にして甚だ細く第一乃至第三節は黃褐にして他は黒し。肢は腿節黒く、脛節赤褐色なり。

●ミヰデラハンメウ(Pheropsophus jessoensis, Mor.) 四月廿一日、歩行蟲科に屬し本欄記載の對馬産のそれと同種なり。

●トビイロゲンゴロウ(Rhantus pulverosus, Steph.) 四月十一日、龍蝨科に屬し、体長三分五厘、前胸は色淡く、中央に黒斑あり。翅鞘は暗褐色にして緣は色淡し、腹部は漆黒色なり。

●カメガタガムシ(Cercyon sp?)(新稱)四月十一日水龜蟲科に屬し、体長二分五厘の小形種にして、黒色を帶び光澤あり。形龜に似たるを以てこの稱を附せり。

●マダラコメツキ(Corymbites notabilis?) 四月廿五日、叩頭蟲科に屬し、体長七分、細長の種にして觸角黒く糸狀をなし、頭小さく、前胸黒くして褐色の細毛を密生し、其後緣の兩側は針狀をなす。翅は黒色にして褐色斑あり。

●サビキコリ(Lacon fuliginosus, Cand.) 四月廿二日、叩頭蟲科に屬し、体長四分五厘、赤銹色を呈し、頭甚だ小さく、過半前胸の凹陷內に入り、縱に二條の溝を有す、前胸大にして翅鞘穹狀をなし、翅尖細まる。

●コガタノサビキコリ(Gn? sp?) 四月五日、叩頭蟲科に屬し、体長三分七厘、小形の種にして前種

に似たれども、色稍や黒味を帶ぶ。

●アリモドキ(Thanasimus formicarius, L.) 四月廿六日、擬蟻蟲科に屬し、体長三分、或る種の蟻に似たる種にして、体黒色を帶び、觸角棍棒狀をなし、前胸は頭部と同幅にして長く、翅鞘黑くして基部の三分の一は赤褐を帶び、翅端に近き處に灰黃色の橫帶あり。

●ビロウドコガネ(Serica orientalis, Motsch.) 四月十日、金龜子蟲科に屬し、体長三分、黒色にして天鵞絨樣の光澤あり。腹面は濃褐色にして、肢は淡褐色を帶びて細し。

●ハナムグリモドキ(Glycyphana argyrosticta, Motsch.) 四月廿二日、金龜子蟲科に屬し、体長四分內外、深綠色をなし、全体に短き黃褐毛を粗生す。翅鞘には各數個の黃斑を有す。

●コスギカミキリ(Semanotus rufipennis, Motsch.) 四月廿日、天牛科に屬し、体長三分乃至三分七厘翅鞘は赤褐なるあり、紫黑を帶びたるありて一樣ならず、肢は三對共腿節甚だ膨大せり。

●カメノコハムシ(Melospila consociata, Boly.) 四月十日、葉蟲科に屬し、体長二分四厘、黒色の種にして觸角鋸齒狀をなし、翅鞘には稍龜甲形に橙黃色の斑紋を有す。

●ヤナギハムシ(Lina 20-punctata, Scop) 四月九日、葉蟲科に屬し、体長三分、頭胸部碧色を呈し前胸の兩側は赤黃色をなし、翅鞘は赤褐色にして十個つゝの黒點を有す。然れども翅鞘の色には變化あり。

●ユリハムシ(Galerucella sp?) 四月十九日、本誌八十一號參看。

●クロスナムグリ(Opatrum sp?) 四月十一日、僞步行蟲科に屬し、体長三分五厘、全体黒色の種にして觸角棍棒狀をなし、頭胸部には微小なる點刻を有し、翅鞘には粗き條溝を有す。

●コゴミムシダマシ(Lyprops sinensis, Marseul.) 四月十九日、僞步行蟲科に屬し体長三分二厘、体黑褐にして細長く、稍扁平、觸角赤褐、連環狀にして先端稍膨大す。

コゴミムシダマシの圖

●オホマルクチキムシ (Aephitobius diaperinus, Panz.) 四月二十六日、僞步行蟲科に屬し、体長三分五厘、光澤ある黑色の種にして、頭部小さく、前胸大きく殆んど方形をなす、觸角棍棒狀にして褐色を呈し、肢は赤褐なり。

●トビイロクチキムシ(Uloma bonzica Mars.) 四月一日、僞步行蟲科に屬し体長二分七厘頭部黑色にして其他は全体褐色を帶び前胸の前緣中央に凹所を有す。

●オホクチキムシ(Allecula fuliginosa, Maklin.) 四月廿五日、朽木蟲科に屬し体長五分黒色にして

翅鞘は穹狀をなし腹端細く觸角赤褐にして糸狀をなし肢は赤褐にして腿節の下半は黑味を帶び後肢は甚長し。

●トビイロムツハシンクヒ (Tomicus bistridentatus, Fichh.) 四月七日、小蠹蟲科に屬し、体長一分一二厘、褐色の種にして圓筒形をなし、前胸甚長く、翅鞘の先端には大小三個つゝの刺あり。

●オホツマグロヨコバヒ (Tettigonia ferruginea, Fab.) 四月十一日、横蚑蟲科に屬し、体長四分乃至四分五厘、体綠色にして、頭部に二個、前胸に三個、稜狀部に一個の大なる黑點を有し、翅端黑色なり、腿節は黑く、脛跗節は黄色にして黑斑あり

●マツモムシ (Notonecta triguttata, Mots.) 四月十一日、本誌第七十一號の學說欄參看。

●ナベブタムシ (Aphelochira Shirakii, Mats.) 四月十四日、本誌第七十一號並に第八十九號の學說欄參看。

●ヤニサシガメ (Velinus nodipes, Uhler.) 四月十二日、食肉椿象科に屬し、体長四分乃至四分五厘黑色を呈し、各腿節に瘤狀物を有し黄紋あり。全体脂樣物を帶びて、小蟲の粘着するを捕り食ふ。

●アリモドキガメ (Pamera hemiptera, Scott.) 四月八日、凸眼椿象科に屬し、体長二分二厘乃至二分五厘、細長の種にして蟻の或種に酷似す。觸角四節にして末節は稍太く、頭胸部黑色、翅は灰褐色にして短く腹端に達せず、前肢の腿節は膨大にして、内側に數個の刺を有す。

●チャバネガイダ (Halyomorpha picus, Fabricius.) 四月二日、椿象科に屬し、体長五分乃至六分、觸角細く糸狀をなし全体茶褐色にして微小の黑斑を有す、前胸に四個の微小なる疣狀點を有す。

●イブキクサガメ (Eysarcoris lewisi, Distant.) 四月廿二日、椿象科に屬し、体長二分、圓形の種にして灰黑色を呈し、前胸の中央兩側に突出して稍針狀をなし、稜狀部には二個の白點あり。

●キモンツノガメ (Gn? sp?) 四月廿三日、椿象科に屬し、体長四分、觸角綠色にして先端に至るに從ひ黑みを帶び、前胸の側緣綴色をなし、兩側角狀に突出し、稜狀部黑色にして黄色紋あり。翅の兩緣は綠色、肢亦綠色を帶ぶ。

●コガイタ (Eurydema rugosa, Mots.) 四月十二日椿象科に屬し、体長二分五厘乃至三分、黑色にして頭部の緣は紅色の隆起線を有し、前胸の四周紅色帶を匝らし、中央に紅色の一縱條あり。稜狀部及翅の硬皮部の緣に紅色條を有する、美麗の種なり。

●マルクロクサツノガメ (Gn? sp?) 四月二十一日、黑臭椿象科に屬し、体長三分、黑色稍圓形の種にして光澤あり、複眼は甚だしく突出し、其前方に小なる角狀突起あり。中胸の前緣稍健に、各

一個の角狀突起を有す。稜狀部は大きく腹端に達す、腹端に二個の刺狀突起あり。

●ヒゲジロハサミムシ（Anisoladis marginalis, Bon.）四月九日、本誌第七十九號參看。

●チャバネゴキブリ（Phyllodromia germanica, Steph.）四月五日、本誌第八十二號參看。

## 雜報

### ●三度警察官と昆蟲學

前號の雜誌に再び警察官と昆蟲學と題して記載したる內、岐阜警察署部內の巡査に每月二回二時間宛講話せしを報せしが愈々五月三十一日に於て、上に示したる如き證明書を六十六名に窪田警視より授與せられ、後紀念として當研究所の寫眞部員は一同を撮影し、茶菓の饗應ありて直に開散す。何分窪田警視の熱心より他の摸範ともなるべき筈なれば、後日大ひに見るべきものあるべしと信ず

> 證明書
>
> 姓名
>
> 右ハ明治三十八年二月一日ヨリ同年五月三十一日迄昆蟲講話ヲ聽講セシコトヲ證明ス
>
> 名和昆蟲研究所長　名和靖㊞
>
> 前記ノ證明ニヨリ此證書ヲ授與ス
>
> 明治三十八年五月三十一日
>
> 岐阜警察署長
>
> 岐阜縣警視窪田武洪㊞

●同上の聽講諸氏には、何分僅少時間のことにして、到底滿足なる知識を得しにあらざれば、爾後斯學の深味を研究せんとて、一人も殘らず昆蟲世界を購讀せらるゝこととなりしは感服の外なし●本巢郡北方警察署長渡邊研三郎氏には、前々號の本誌講話欄に掲げたる、岐阜縣巡査敎習所に昆蟲學の一科を設けられたる顚末と題する內にある通り、渡邊氏が先見を以て敎習所に昆蟲學を加ふる云々の如き熱心家なれば、岐阜警察署を摸範として愈々本月始めより、部內駐在官を併せて約三十名の警官に、昆蟲學講話を開始せられしは實に美擧と云ふの外なし。其他各警察署に於ても續々申込あるも到底一時に應ずべからざるを遺憾とす●岐阜縣巡査敎習所に於ては、相變らず熱心なる所長今村兎毛氏、幷びに敎官警部廣瀨壽太郎氏には、受業生に對し出來得る限り實地應用に適するため、常に敎習所構內に於て昆蟲を採集せしむるのみならず、敎官監督の許に當研究所員の誘

導にて、山に野に採集を試み、或は苗代田害蟲驅除の實地練習等に勉めらるゝは、誠に感服の至りなり

●台灣總督府技師農學士川上瀧彌氏には、過日當所へ立寄られ、台灣に於ても害蟲驅除勵行に警察官の關係尤も必要なりと認むるを以て、上京の際農商務省に於て參考となるべきことを尋ねたるに、現今にては岐阜縣に於て頻りに勵行し居らるゝ由を聞きたるを以て、態々立寄たりとのことなれども、如何にせん未だ日尚淺きを以て、他の模範となるべき滿足なる成績の擧らざりしことを述べたる次第なり。故に願くば一日も早く、他の模範となるべき成績の、續々擧らんことを警官諸氏に深く希望する所なり。

◉出征軍人の消息一件　兵庫縣出身井上藤太郎氏は、曩に當所主催の第十四回全國害蟲驅除講習會に入り、修了後熱心に斯學を研究し居られたるが、昨年十月召集に應じ服務中、今回愈々○○師團附として出征したれば、今後は任地の昆蟲を採集の上、共に安否を報導すべしとて、上圖の昆蟲模樣付繪葉書を以て當所へ通報ありたり●岡崎治市氏は岐阜縣揖斐郡の人にして、嘗て三年間程當所に居られたることあり、而して曩に森宗太郎氏等と同時に、出征幾多の艱難を嘗られ、目下○○地に健在なるが、五月二十日付にて、此頃蝶が澤山發生致し候に付、小生も紀念の爲め御送付致し度も、捕蟲器もなく、昨日も射擊に行き候際、帽子にて叩き落して二三種を獲たれば、乍不完全御送付申上候との書面に、ヒメシロテフ、シヾミテフ、ヒメイチモジの三種を添送せられたり。何れも其沈着なる尚演習地に於けるが如く、我軍の連戰連捷素より其所なり。

井上藤太郎氏の送られたる葉書の昆蟲模樣畫

◉害蟲調査　當所調査主任名和梅吉氏は、本縣廳の委囑により、飛驒一圓の害蟲調査の爲め、五月廿日より、出張せられしが、意外に面白き事實の發見ありて、將來驅除の上に、尠なからざる利益を得るのみならず、其採集品の如き、一見研究者をして垂涎せしむる珍種甚だ多く、一面純正昆蟲學上にも多大の利益を得、本月九日歸所せられたり。

◉**臺灣の稻六大害蟲**　臺灣總督府技師川上瀧彌氏の、當所に惠與せられたる稻六大害蟲の着色圖入の一枚摺は、大に參考となるものにて其六大害蟲とは、二化螟蟲、三化螟蟲、稻黑横這、ヒメトビウンカ泥負蟲、鉄甲龜是なり。內地の害蟲と異なるは一の鉄甲龜なるが、該蟲は本誌第八十七號中に、圖入にて小貫農學士の詳しき說明あれば、就て見らるべし。

◉**証書授與式の景況**　第一回岐阜警察署員害蟲防除講習會は、本年二月より時局の必要上、同署長窪田警視の發企にて同署內に開會せられ、每月二回召集の都度、名和昆蟲研究所長を聘して講習を受けつゝありしが、四ケ月の豫定期間滿了せしを以て、去る五月三十一日、同署內會議堂に於て、証書授與式を擧行せり、今其模樣を記さんに、當日の來賓には川路知事、坂口第四部長、今村教習所長等にして午後二時一同着席、窪田署長は聽講署員に一々証書を授與し、名和講師の告諭、來賓の祝詞演說、窪田署長の訓戒、講習生惣代の答辭にて式を終り、後一同紀念撮影をなし、午後四時半散會せり。因に受証者六十六名にて、一同は時局の今日、誓ひて一層の實効を奏せんと勇み居れりと。其答辭左の如し。

答辭

本邦の農業大に發達せりと雖とも未だ充分なりと云ふを得ず、殊に害蟲驅除に至りては甚だ幼稚なりと信ぜらる、當署長茲に見るあり此目的を達するには、平素執行の任にある警察官吏にして、昆蟲學の大意すら知らざるに於ては、到底完全なる執行を得て望む可からずとなし本年二月以來、名和先生の講話を聽講することゝなり、爾來懇篤熱誠なる講話を拜聽し生等大に裨益する處あり本日當署に於て証書授與の式典を擧げられ、生等幸に其席末に列するの光榮を得欣喜の至りに堪へざるなり、殊に先輩諸賢の來臨を辱ふす、何の光榮か之に如かん。生等將來益々斯道の研究に努め、異日此光榮に酬ゆるの日あらんとを期す。聊か蕪辭を呈し、聽講者一同を代表し答辭を述ぶ。

明治三十八年五月三十一日

岐阜警察署昆蟲學講義聽講者惣代　巡査部長　吉川亜之助

◉**輕便殺蠅法**　本誌に於ては屢々各種の蠅取法を掲載して、尤も五月蠅き蠅の驅除法を紹介し置きたるも、容易に効を奏すると能はず、其內坂井雅太郎氏發明の美術的蠅叩は、極めて有効にして一時間能く四百余頭を斃死せしむるに足るも、如何にせん無數の蠅群の來襲に遇ひては、之れを擊退すること容易ならず、茲に於て一の輕便殺蠅法の行はるゝに到れり。其法は上圖の如く口廣の鉢に白水（米を炊きたる水）を八分目程容れ、叉鉢の內側白水の稍上に、米の粉を水にて練りて附着せしめ置くなり。然るときは直に無數の蠅は集まり來り瀕りに舐め居れり。此際團扇を以て、急に數回續けて叩けば、悉く

輕便殺蠅法の圖

水中に墜りて溺死すること妙なり。從ひて集まれば從ひて溺死せしめ、如何なる蠅群も直に減少せしむることを得。實驗上此法によりて、一日一鉢にて一合に近き量を得たり是を養鯉に與へしに、喜びて捕食する樣特に面白く實に一擧兩得といふべし。

◉**心蟲の分布**　桑樹害蟲シンムシの發生地は、岐阜縣下のみならず愛知、長野の兩縣には勿論、北進軍の先發隊は、目下新潟縣西頸城郡に進入したることは、同縣屬宮地良致氏より送付の現品によりて明なれば、大に警戒すべきことなり。

◉**心蟲驅除概況**　石田和三郎氏は岐阜縣害蟲驅除囑托員として、心蟲驅除監督の爲め、五月十日より飛驒國益田郡へ出張せられしが、其の報告を一括すれば、同郡は隨分發生の多き地方なれども、概して本年は稍少なき方なり。依て此際全滅を圖る覺悟を以て、各町村役場は勿論、郡役所警察署に至る迄殆んど總出の有樣にて驅除を督勵し、本月十二、三日頃全く該驅除を終れりと。又同囑托員所嘉吉氏は、惠那郡地方へ出張中なるが、同氏の報告を一括すれば、昨年驅除勵行の結果、本年は餘程發生少なく、木曾川以北は比較的發生多きも、以南は至つて少なく然れども極力驅除を勵行し、本月十日頃終結を告げたるが、警察官等も非常に熱心に奬勵せられ、監督能く行屆きたりと。尙郡上郡へ出張中の、同囑托員大橋由太郎氏は、去る十日驅除を終へ歸岐せられしが、該郡の模樣は前記と大差なく、各村熱心に驅除を實行したりと。

◉**森助手書簡に添へて滿洲の昆蟲を送る**　當所助手森宗太郎氏は、出征後軍務の餘暇を以て屢々彼地の昆蟲を採集し、當所に送られたることは度々本誌上に照會せしが、今又去る五月廿

六日、膜翅目四種、鱗翅目九種、鞘翅目十種、半翅目四種計廿五種六十一頭を、左の書簡に添て送付せられたるが、中にもヒメギフテフ、クジャクテフ、アゲハノテフ等は本邦產と同種にして、書中旅順開城を紀念として得し昆蟲云々の通り、一月三日盛京省方子園にて、木皮採集にて獲られたる紀念の昆蟲、テンタウムシ十頭、ヨコバヒの一種三頭をも送せられたり。而して同氏の書簡を見るに、昆蟲研究を樂みとし戰爭の困難を忘れたるものゝ如く、一言半句も其艱苦に及ばず、嗚呼此熱心ありて始めて何事をも成功し得べし、我軍の勇敢なる實に因ある哉。今左に其書簡を照會せん。

拜啓爾來御不音に打過ぎ候處、貴所員諸氏定て御壯健ならんと奉遠察候、迂生も幸に其後壯健に軍務に從事仕居候間、乍憚御休意有之度候。却說本年一月三日旅順開城を紀念として得し昆蟲其他、近日得し昆蟲とを御送附申上候。實は蜂蝶類は澤山飛揚し居れ共、軍務の爲め容易に列外に出る能はざる故、人の休憩しある時、或は單獨にてある時に、木の小枝を以て叩落し採集仕候物なれば、完全なる者は少なけれ共御送付申上候。尙今後余暇有之候はゞ採集仕り。御送附申上る考に御座候。殊に小生の感ぜしは、ヒメギフテフ、クジヤクテフ、ヤマキテフ、等の多きに御座候。其他チヤバチセヽリ、コツバメヒメシロテフ、ヒメヒヨウモン、(此は最も小形) ヒヨウモンテフ、其他小蛾類及び糖蛾類を見受け申候、寄生蜂類はアメバチ、姫蜂科の種類、小蜂科の種類、其他胡蜂科等多く飛揚しありしを見受け申候。次に四月四、五日迄は草木の芽を見ざるも、三四日の間に暖氣急に加はり、それにつれ又木の芽の出で方實に急激にて、昨日の冬影も俄然本日は春景色と變り、昨日迄一の開花を見ざるも、本日は滿山雪かと見あやまる程の梨花、此れに紫色つゝじ、或は黃花に綠翠滴らんとする實景、迚も內地人の豫想の付かざる處に御座候。若し此處を一掬せば、多數の珍種を獲るならんと察せられ候へども、如何にせん採るに捕蟲器なく、軍規又それを許さず、實に遺憾に御座候。然れ共熱心は岩をもとほすとかや、迂生にして熱心あらば、必ず實行し得らるゝならんと其時期を竊にまち居る次第に御座候。軍務多忙亂筆御免

◉岐阜縣昆蟲會第七十八回月次會並水曜昆蟲談話會記事　同會記事は每號必ず報道するの例なりしも餘白のなき爲め次號に讓る。

◉寄稿家諸士に謹告　原稿輻輳の爲め此限ある紙數に悉く登載する能はず投稿家諸士幸に諒焉。

◉昆蟲標本陳列館の觀覽人　去る五月中、當所常設の昆蟲陳列館を參觀せし總人員は、四千八百十七人にして、一日平均二百一人强に當り、其內最も多かりしは十七日の五百三十七人、最も少なかりしは九日に於ける七十六人なりき。

イネノズイムシの圖

第壹版圖

(イ)卵塊
(ロ)同放大
(ハ)莖中にある四眠起の幼蟲
(ニ)莖中にある蛹
(ホ)成蟲の雄
(ヘ)同雌
(ト)同靜止の狀
(チ)卵の寄生蜂放大圖

# 昆蟲世界

明治三十八年六月十五日發行

第九卷第九拾四號

每月一回十五日發行


## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題（但季は夏の事）　魯嶽君選

▲短歌　昆蟲亂題（但季は夏の事）　潮音君選

▲俳句　羽蟻十句（七月五日占切）　華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園內名和昆蟲研究所

## ◉武田工學士考案　圖案用昆蟲標本廣告

此圖案用昆蟲標本は京都高等工藝學校教授工學士武田吾一氏の考案によりしものにて蟲の種類により大中小の三種に分ち桐箱に表裏の二面を硝子となし其中に適宜の昆蟲を固定したるものなり故に表面より見るには勿論腹面を見んとするにも蟲を取出す要なければ直接標本に手を觸れざるを以てこれを損すること少なし而して各種學校の實物寫生並に教授用標本として適當なるのみならず工藝上の參考に資すべき點多ければ圖案用として殊に工藝學校等には必要欠くべからざる好標本なり

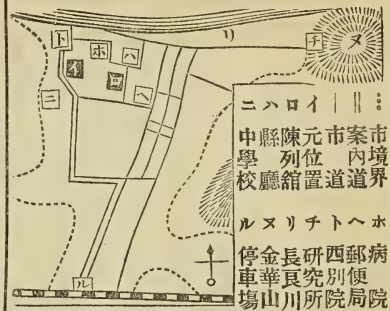
名和昆蟲研究所

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市公園內名和昆蟲研究所內にて開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第七十九回月次會（七月一日）　第八十二回月次會（十月七日）
第八十回月次會（八月五日）　第八十三回月次會（十一月四日）
第八十一回月次會（九月二日）　第八十四回月次會（十二月二日）

## ◉名和昆蟲研究所案內

當昆蟲研究所は從來上圖の如く（イ）の位置にありしが今回當市公園內即ち（チ）の位置に移轉せり、又常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）は從前の通り岐阜縣物產館構內にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢　三十行以上壹行に付き金拾錢とす


明治三十八年六月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二
（岐阜市公園內）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戶　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED
BY
**YASUSHI NAWA**
DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"
GIFU JAPAN.

VOL.IX.] JULY. 15TH, 1905. [No.7.

# 昆蟲世界

第九卷第七册　明治三十八年七月十五日發行　第九十五號

目次 (禁轉載)



(每月一回十五日發行)

名和昆蟲研究所發行

## 本所移轉擴張寄附金品領收廣告（第十三回）

一金五拾貳錢也 岐阜市 小川眞哲君
一金貳圓也 名古屋市傳馬町 野崎惣兵衛君
一金拾圓也 秋田縣仙北郡高梨村 池田文太郎君
一金五圓也 同縣同郡六郷町 小西忠兵衛君
一金參圓也 仝 大西忠兵衛君
一金參圓也 靜岡縣駿東郡高根村 瀧口源太郎君
同 松井幸三郎君
右二名紹介人靜岡縣 間宮英宗君
一金壹圓五拾錢也
岐阜縣池田分署詰巡査 飯田馬吾一君
岐阜縣岐阜警察署詰巡査 平野武一君
同 丸山光五郎君
同 木多林君
岐阜縣大垣警察署詰巡査 久保田藤之助君
同 藤原義雄君
同 福田德次郎君
岐阜縣揖斐警察署詰巡査 吉村歌之助君
岐阜縣八百津分署詰巡査 日比野才助君
岐阜縣金山分署詰巡査 石原元市君
岐阜縣中津警察署詰巡査 小平佐四一郎君
岐阜縣大藪分署詰巡査 石原貞君
岐阜縣巡査教習所教官警部 廣瀨壽太郎君

小計貳拾五圓〇貳錢也
累計金九百貳拾七圓貳拾八錢也

右御寄附相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十八年七月十二日 名和昆蟲研究所

## ◉昆蟲分布調査材料募集

〇直翅目 キリギリス科、コホロギ科
〇有吻目 蟬類 〇擬脈翅目 トンボ類

昆蟲分布調査材料として一般の蟲類御寄送を希望するは勿論なるも特に前記の類には御注意御送付を望む

名和昆蟲研究所

## ◉征露紀念特別昆蟲學講習會

開期 自八月十一日至八月廿四日 二週間

今や我國民は大々的雄飛するの時機到來せり此際征露紀念として特別なる昆蟲學講習會を開き益斯學の奮興を期せんと欲す斯學に志あるの志は速に手續を經由せらるべし
申込期限を七月末日迄と定むると雖も當所の都合により隨時申込を謝絶することあるべし
規則書入用の向は郵券貳錢相添へ至急照會あれ

明治三十八年六月 名和昆蟲研究所

## 出版廣告

名和 日本昆蟲圖說 第一卷

◎鱗翅目 天蛾科（着色石版十八度摺）
定價金五圓、小包料金拾五錢

## ◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

名和昆蟲研究所 昆蟲世界會計部

## ◉昆蟲學特別研究生募集

今回數十名の特別研究生を募集し特に此際何時にても隨意入所を許す、規則書入用の向は往復葉書にて至急照會あれ直に送致すべし

紫雲英と鬚長蜂との關係

# 論說

## ◎國民の覺悟と征露紀念特別昆蟲學講習會

日露開戰早々本誌第七十九號に於て、千變萬化螟蟲の羽化に際り、内は螟蟲軍の跋扈を慨き、極言之を鎮定撲滅して國帑の充實を圖るべきを說き、爾來再三語を換へ、我征蟲軍の努力を促したりしが、幸に昨年は其功ありて、秋實の增收を來せしは國家の爲め大に賀すべきことにして、旅順攻圍軍の成功、奉天附近の全勝、日本海々戰の豫期以上の効果に比すれば、到底同日の論に非ずと雖も、亦征蟲軍の効績も決して沒すべからざるなり。今や戰局の發展に伴ひ我國威の宣揚は日月と光を爭ひ、世界の耳目を聳動せしめ、列國競ふて所有讚辭を惜まず甚しきは恐怖心をも漏すに至りしは、實に我軍隊の勇猛無比なると、我國實力の如何とを證するに餘あるものにして、帝國上下一般の喜び禁ずる能はざる所なり。然れとも其半面には、幾十萬の貔貅の萬艱と將士幾萬の犧牲を拂ひしを想はゞ誰か萬腔の同情と敬意とを表せざるものあらんや。加ふるに苦熱燒くが如き候に入り、出征軍の辛勞一段の重きを加へたり。嗚呼等しく國民にして軍に從はざるもの、何ぞ安座晝寐に耽るべけんや。又何ぞ一層各自の業務を奮勵し、益々深遠不撓の志を以て、大に國家に對する本分を盡さゞるべけんや。今回八月十一日を期し、開講せんとする征露紀念特別昆蟲學講習會の主意も亦之れに外ならす。故に二週間の開期中、五日間は特に

伊吹山に出張して實習講話を催し、會員は各自露營の覺悟を以て、博く該山に於ける昆蟲を採集探窮し一々之れを類別して其種名を定め、其種の普通と珍異なるとを問はず、悉く採集者の氏名を併記し、伊吹山昆蟲目錄を製せば、一は出征將士の勞苦の萬一を窺ひ、一は自他を稗益する大なるを信じ、一紀念事業として之れを決行せんとす。苟も斯學に志あるの士は、言を暑熱に託して此の好機を逸するなく勇進奮勵會に加はり、外は萬化螟蟲の降伏と相待て、内は昆蟲學界の發達を謀り、以つて直接には劍を取て征蟲軍の指揮者となり、間接には之が後援者となり、昨年に倍するの好果を收め天晴れ軍國民の技倆を發輝せられんことを希望するの餘り、不備を省みるの遑なく、進んで此の講習を開く所以なり。

## ◎飛驒一圓に於ける苗代田害蟲調査顚末

名和昆蟲研究所調査主任　名　和　梅　吉

害蟲驅除の完全を望まば、先づ極力苗代田の害蟲を驅除せざるべからず。苗代田の害蟲驅除を容易ならしめんには、勢ひ平蒔苗代を改めて、短册形苗代にすべきは已に定論ありて、今更喃々するの要なし況や唯に害蟲驅除のみに止まらず、幾多の便益あるに於てをや。されば農業の進步したる地方に於ては久しき以前より實行せられたりと雖も、我岐阜縣下は未だ隈なく普及せりと云ふべからざるは甚だ遺憾なり。依て本年三月害蟲驅除豫防規則の改定と共に、苗代田の床地は巾四尺以内となすべきを定められ

たり。然るに飛騨國は著しく温度の低き爲め、苗代田に於ては更に害蟲の發生したることなく、從て害蟲驅除豫防の上よりは、短冊形苗代の必要なしとの説をなすものあるに至れり。故に縣當局者は、果して其說の如く、飛騨國に於ては苗代田に害蟲の發生なきや否やを確めんとて、遂に實地調査をなすことに決し、予に該調査を囑托せられたり。依て予は五月廿日岐阜市を發し、廿日間の豫定を以て飛騨三郡を一巡し、調査を遂げたれば其大要を記述せんとす。

元來飛騨國は美濃國の北部地方と、越中、加賀、越前及近江の一部と共に、所謂濃飛の高原を形成して本邦第一の高地帶に屬し、就中飛騨國は其最高部を占め、到る處高山大岳起伏して一圓を圍繞し、平地は甚だ少なし、氣候一般に寒冷にして、年中平均温度凡十三度内外、夏季は廿三度内外、而して同國大野郡高山測候所の觀測によれば、三十五年より三十七年に至る三ヶ年間の平均温度、六月は十八度三、七月は二十一度五、八月は廿三度一にして、之れを北海道地方の氣候に比すれば多少高温なるも、一般昆蟲の採集結果より見るに、其種は北海道に產するものと同種多く、氣候上岐阜地方よりも寧ろ北海道に似たるものゝ如し。斯く氣候低温の爲め、苗代田の整理、播種期より植付時期等、美濃地方とは大差あり、從て害蟲の發生も多少影響を來せしものゝ如し。普通飛騨國に於ける籾種の播種期は八十八夜後にして、植付期日五月末より六月上旬に亘り、益田郡は遲き方にて六月中、下旬なりと云ふ。予の益田郡に到りしは五月下旬にて、稻苗は一、二寸許に生育し、捕蟲器を以て掬捕を試みしに、イネノアヲムシの成蟲、浮塵子其他双翅類に屬する多くの蠅類を獲たり。大野、吉城の兩郡に到りしは六月上旬にて、恰も植付の時期に當り苗も能く生育し、從て害蟲も亦多かりき。一括すれば今回調査の結果、苗代田害蟲としては イネノズヰムシ、イ子ノアヲムシ、ウンカ及ドロハムシ、イネゾウムシを認め、苗代田に害

蟲の發生することなしとの想說は、氣候寒冷の爲め、苗代時期には未だ發生せざるべしとの想像より出たる臆說なることを確めたり。今少しく該種の情況を畧述せん。

イチノズヰムシは、六月上旬に至り吉城郡古川町、及國府村地內に於て其成蟲を認め、且卵塊をも發見したり。依て考ふるに、飛驒國にては六月上旬より蛾化を始め、漸次其數を增し來り、本田に移植後に多く產卵するものゝ如し。

イネノアヲムシは、三郡共に各所の苗代田に於て其成蟲を認め、六月上旬に至りては大野、吉城兩郡の苗代田には既に孵化して幼蟲となり、稻葉を食害するあるを認めたり。

ウンカも亦三郡共に各所の苗代田に發見せられ、其種類五種ありて、ツマグロヨコバヒ、フタテンヨコバヒ、セジロウンガ最も多し。

イネザウムシは、三郡共に局部の苗代田に於て其發生を認め、其發生地に於ては、何れも加害甚しきものなり。其加害の模樣は、稻の僅かに發芽せし頃に於て甚しきも、三四寸許に生育せしときは、假令加害するも餘り目立ざるやの觀あり。特に吉城郡に於て、通常稻苗の腐敗したりと稱し、枯黃して水面に浮び居るものに就て調査せし處によれば、全く該蟲の所爲たるを認めたり。之れが驅除法としては、充分水を湛へ、然る後捕蟲器を以て掬ひ取るか、或は箒（廢物利用として心止りのものを用ふるを良とす）を各所に立て置き、之れに來集するものを捕殺すべし。

ドロハムシは、飛驒一圓に於ける大害蟲なり。益田郡に於ては、調査時期早かりし爲め發見せざりしかども、大野、吉城の二郡にては到る處の苗代田に發生多きを認めたり。六月上旬には、何れも苗代田に飛來して產卵するもの多く、早きは已に孵化して幼蟲となり、食害するもの少なからざれども、普通に

其當時產卵時期なるが如く認めたり。其產卵するや二化性螟蟲のそれの如く、苗葉の表面先端に近き處に、一所に四五粒乃至十數粒宛並列して產附するものとす。卵色始めは苗色を呈すれども、漸次暗褐色に變化するを常とす。而して苗代の周圍、即耳苗に多く產卵すること亦二化性螟蟲のそれの如し。驅除法としては、苗代田に多く集りて產卵するものなれば、其發生を認めたる後は、毎日捕蟲器を以て掬捕し、廣口の器中に水と石油の少量とを入れ置き、其中に投入すべし。此の法を行ふには可成多く水を湛へ、午前十一時頃より午後四五時頃迄に再三施行するを可とす。其他採卵法を行ふべし。該蟲は、前述の如く苗葉の先端表面に、且苗代田周圍に多く產卵するものなるを以て、容易に發見し得べければ、毎日苗代田を巡視して、成蟲の掬殺と共に採卵に努め、該卵に附着の苗葉を摘採して潰殺するを可とす。

右の外ムクゲムシ、ハムクリバヘ等をも認めたれども、以上の五種は最も注意すべき害蟲なりとす。要するに、氣候低溫にして害蟲の發生なしと稱する、飛驒國の苗代田に於てすら右樣の結果なれば、如何なる地方の苗代田にも、六月頃に到れば無論各種の害蟲發生せずとは謂ひ難ければ、害蟲驅除上便利なるのみならず、籾蒔草取り、其他種々なる手入に便なる改良苗代を實行し、後日の大害を未萠に防ぐの注意あるを要す。然れども此改良苗代の主意を了せざる農家諸君の多き間は、只當局者の督勵により、余儀なく四尺幅の苗床に造りたりとも、眞の驅除、其他の手入等の充分行はれざるは實に國家の爲め遺憾とする處なり。依て調査の不充分をも省みず、之れが顚末を記して農家諸士の一考を求めんとする所以なり。

## ◎第一回岐阜縣分布調査(一二)

名和昆蟲研究所員　名和正

蜻蛉科(Libellulidae)　擬脉翅目に屬し、翅は膜質にして綱狀脉を有し、蜻蜓科のそれと異ならざる

も、前翅に於ける三角室の前緣は短かく、後翅の三角室と大に趣を異にす。複眼は大にして頭頂に相接すれども、後頭は判然す。

（一五一）タカネトンボ（Somatochlora viridiaenea, Uhler.）　コヤマトンボ亞科（Cordulinae）に屬し、體長雄は二寸、雌は一寸八分、翅張雌雄共に二寸七分内外、體は光澤ある黒綠色にして、前頭及顏面は藍色、上唇黒色、兩腮及下唇は黄色なり。翅は透明にして緣紋黒く、第二腹節の後緣には細き黄帶あり其兩側の下方には、一個の大なる黄紋を有す。雌雄によりて腹部の形狀を異にす。即雄は第三節の中央縊れ、第四節と共に細く、五節以下は稍太し。雌は基部太くして、腹端に至るに從て漸く細まれり。益田郡より尾崎尋常小學校第二學年、田堀秖氏の採品一頭を送られたるのみ。岐阜地方にては稀に獲る所の珍種なり。

（一五二）ウスバキトンボ（Pantala flavescens, Farb.）　ハラビロトンボ亞科（Libellulinae）に屬し、體長雄は一寸六分、雌は一寸五分、翅張雄は二寸八分、雌は三寸一分、體黄褐色にして複眼黒褐を帶び、顏は黄色なり。翅は透明にして緣紋黄褐、膜瓣白く、内緣黄色を帶ぶ。腹部黄色にして、背面には黒斑あり養老、不破、武儀、郡上、加茂、土岐、惠那、大野、吉城の九郡に於て獲られたり。

（一五三）シホヤトンボ（Orthetrum japonicum, S.）　前種と同亞科に屬し、（以下同亞科）體長一寸八分、翅張三寸内外、體色雌は麥藁色を呈して黒斑を有し、雄は灰色を帶び共に腹端は黒色なり翅は透明にして緣紋黒く、翅尖稍褐色なるあり。岐阜、稻葉　羽島養老、不破、本巣、山縣、武儀、加茂、惠那、大野、吉城の一市十一郡にて獲られたり。

（一五四）オホシホカラトンボ(Orthetrum melania, S.)　體長雄は一寸八分、雌は一寸七分、翅張雌雄共に二寸八分內外、雌雄體色を異にし、雌は麥藁色を呈して黑斑を有し、雄は灰色なり。腹端の三節は雌雄共に黑く、稀には然らざるものあり。前頭、顏面及口具は黑色にして、翅は透明、後翅の基部には大なる黑褐斑あり。緣紋黑色を呈す。武儀、加茂、惠那、大野、益田の五郡に於て獲られたり。

（一五五）コシアキトンボ(Pseudothemis zonata, Burm.)　體長一寸三分乃至一寸五分、翅張二寸七分乃至二寸九分、體黑色にして、胸部の兩側に二個の黃色斜條あり。翅は透明にして緣紋黑褐に、翅端は少しく褐色を帶び、後翅の基部に暗褐の大斑あり。腹部黑色にして、雄は三、四の兩節黃白を帶び、雌は其黃白斑の中に一個の黑條あり。共に第五節乃至第七節の側面には小さき黃斑を有す。惠那郡より、茄子川高等小學校第一學年田中新次郎氏の採集に係るもの、一頭を送られたり。

（一五六）ハラビロトンボ(Lyriothemis lewisi, S.)　體長雌雄共に一寸一、二分、翅張雄は二寸內外、雌は二寸二分、雌雄體色を異にし、雄は胸部黑色にして顏面黃色に、其上緣は青藍色を帶ぶ。腹部灰黑色にして扁く、先端細し。雌は胸腹共に枯黃色にして、黑條斑を有し、腹端雄の如く尖らず。翅は透明、緣紋暗褐に翅底稍黃褐色なり。本巢郡より本田尋常高等小學校高等科第二學年、關谷幸造氏の採品一頭を送られたり。

（一五七）シヤウジヤウトンホ(Crocothemis servilia, Drury.)　體長雄一寸五分乃至一寸七分、雌は一寸五分、翅張共に二寸五分乃至二寸七分、雌雄によりて體色を異にす。雄は紅色にして斑紋なく、前頭の前緣三角狀に凹陷す、翅は透明にして、基部樺色を呈し、緣紋褐色なり。雌は體黃色にして、著しき斑

紋なく、翅は透明にして前緣部は稍鼈甲色を帶び、翅底は黃色に緣紋黃色を呈す。土岐、惠那の二郡に於て獲られたり。

(一五八)ハッチャウトンボ(Nannophya pygmaea, Rambur.)　體長五分、翅張九分乃至一寸、雌雄體色を異にす。雄は紅色にして斑紋なく、顏は黃色、翅は透明にして基部黃色を帶び、緣紋は暗褐なり。雌は胸部黑くして、中胸の背面には大小四個の黃紋と、側面に一條の、且後胸側面に大なる黃斑あり。腹部は黃褐にして黑帶を有す。武儀、可兒の二郡に於て獲られたり。

(一五九)ミヤマアカネ(Diplax pedemontana, Müll. race. elata, S.)　體長一寸乃至一寸一分、翅張二寸內外、體色雄は赤色雌は黃褐なり、顏面は黃褐若くは赤黃を帶び、翅は透明にして緣紋赤褐或は黃色に翅端に近く褐色の廣き橫帶あり。腹端にある附屬物は、甚だ小にして黃色を帶ぶ最も普通の種にして、岐阜、安八、羽島、海津を除くの外、各郡より多數を送られたり。

(一六〇)オホキトンボ(Diplax uniformis, S.)　體長雄は一寸六分、雌は一寸五分、翅張雄は二寸六分雌は二寸四分、體黃色にして斑紋なく、複眼は上半褐色に下半は黃褐なり。頭部及顏面は黃色を帶び、翅は黃色にして前緣部は稍色濃く、緣紋淡黃色なり。岐阜、稻葉、羽島、養老、不破、揖斐、山縣の一市六郡より送られたり。

(一六一)ナツアカネ(Diplax sinensis, S.)　體長一寸二分內外、翅張一寸九分乃至二寸、體色雄は赤色にして雌は黃色を帶び、顏は黃褐にして、額の上緣は中央凹陷し、中胸の兩側には黑條を有す。翅は透明にして基部僅に黃色を帶び、緣紋赤褐、腹端の附屬物は黃色なり。最も普通の種にして、安八郡を除くの外各郡より多數を送られたり。

（一六二）ノシメトンボ(Thecadiplax infuscata, S.)　體長雄は一寸三分乃至一寸四分、雌は一寸一分乃至一寸三分、翅張雄は二寸二三分、雌は一寸九分乃至二寸二分、體黄色にして胸側には黒條を有し、腹部赤く斑紋なく、雌は體黄色にして中胸に三條の太き黒條を有し、腹部亦黄色にして細き黒横條と側に稍太き黒縦條とを有す。翅は共に透明にして縁紋暗褐を呈し、翅端褐色を帯ぶ。

豆娘科 (Agrionidae)　擬脈翅目に屬し、前二科に似たれども複眼は頭の兩側に相隔離し、翅は膜質にして碁盤目狀の脉條を有し、三角室を欠く。前後同形をなし翅底は細く、翅質弱きを以て遠く飛翔せず靜止のときは翅を體上に直立せしむ。

今回の採品中此科に屬するもの十二種あれども、本誌第四十一號口繪に着色石版圖を挿入し、同論説欄内に名和梅吉氏の説明あるを以て、其處に漏れたるもの丶外は唯其名稱を掲ぐるに止む。

ハグロトンボ亞科(Calopteryginae)に屬するもの

（一六三）アヲハダトンボ(Calopteryx virgo, L.)　（一六四）ハグロトンボ(Calopteryx atrata, Selys.)

（一六五）オホカワトンボ(Calopteryx cornelia, Selys.)　（一六六）ヤナギトンボ(Mnais strigata, Hagen.)

イト丶ンボ亞科(Agrioninae)に屬するもの

（一六七）アヲイト丶ンボ(Lestes temporalis, Selys.)　（一六八）モノサシトンボ(Psilocnemis annulata, Selys.)

（一六九）キイト丶ンボ(Ceriagrion coromandelianam, Selys.)

（一七〇）アカヾネトンボ(Agrion sp?)　體長一寸一、二分、全體銅色にして胸背には長き黒褐の斑紋を有し、翅は透明にして縁紋褐色を帯ぶ。揖斐、惠那、益田の三郡に於て獲られたり。

（一七一）イト丶ンボ(Agrion quadrigerum, Selys.)　（一七二）オホイト丶ンボ(Agrion sp?)　稲葉郡佐波

尋常高等小學校高等科二學年、近藤まさを氏採品に係るもの一頭を送られたり。 （一七三）ホソイト、ンボ (Agrion sp?) （一七四）アカイト、ンボ (Agrion sp?)

以上の三科の採集數を表示すれば即ち左の如し。（表中△印は十頭以上）

| 番號 | 種名 | 岐阜市 | 稻葉郡 | 羽島郡 | 海津郡 | 養老郡 | 不破郡 | 安八郡 | 揖斐郡 | 本巣郡 | 山縣郡 | 武儀郡 | 郡上郡 | 加茂郡 | 可兒郡 | 土岐郡 | 惠那郡 | 大野郡 | 益田郡 | 吉城郡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一四三、 | コオニヤンマ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | 一 | 二 | — | — | — | — | 二 | — | — | — |
| 一四四、 | コサナヘトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — |
| 一四五、 | ヨツチトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — | — | — |
| 一四六、 | オニヤンマ | — | — | — | — | — | 一 | ○ | — | — | — | — | — | 一 | — | — | 三 | 一 | 一 | — |
| 一四七、 | コシボソトンボ | — | — | 一 | — | — | — | ○ | — | 二 | 一 | — | — | — | — | 一 | 二 | 一 | — | — |
| 一四八、 | カトリトンボ | — | — | 一 | — | 三 | 二 | ○ | — | 一 | — | — | — | 五 | 四 | 八 | △ | — | 三 | — |
| 一四九、 | ギンヤンマ | — | — | 一 | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — | — | — | — |
| 一五〇、 | ヒメコシボソトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | 一 | — |
| 一五一、 | タカ子トンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — |
| 一五二、 | ウスバキトンボ | — | — | — | — | 九 | 四 | ○ | — | — | — | 七 | 二 | 八 | — | 九 | △ | 三 | — | 一 |
| 一五三、 | シホヤトンボ | 一 | 六 | △ | — | △ | 二 | ○ | — | 一 | 五 | 八 | — | 七 | — | — | △ | 三 | — | 二 |
| 一五四、 | オホシホカラトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | 一 | — | 一 | — | — | 三 | 一 | 一 | — |
| 一五五、 | コシアキトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — | — | — |
| 一五六、 | ハラピロトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | 一 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一五七、 | シヤウジヤウトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | 一 | 二 | — | — | — |
| 一五八、 | ハツチヤウトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | 一 | — | — | 二 | — | — | — | — | — |
| 一五九、 | ミヤマアカネ | — | 三 | — | — | △ | △ | ○ | 五 | 四 | △ | △ | △ | △ | 五 | 六 | △ | △ | △ | 六 |
| 一六〇、 | オホキトンボ | 一 | 二 | 二 | — | 四 | 二 | ○ | 一 | — | 一 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一六一、 | ナツアカ子 | 三 | △ | △ | 五 | △ | △ | ○ | 八 | 八 | △ | △ | 七 | △ | △ | △ | △ | △ | △ | 五 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一六二、ノシメトンボ | — | 一 | 三 | — | 七 | — | ○ | — | 四 | 一 | 二 | 一 | 四 | 一 | 一 | 五 | 四 | 一 | 一 |
| 一六三、アヲハダトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | 一 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一六四、ハグロトンボ | — | 三 | 五 | — | △ | 四 | ○ | 五 | △ | △ | △ | 四 | 四 | 一 | 六 | △ | 五 | 二 | — |
| 一六五、オホカワトンボ | — | — | — | — | 一 | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一六六、ヤナギトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | 二 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一六七、アヲイトヽンボ | — | 四 | 五 | — | — | 四 | ○ | — | — | — | 二 | 七 | 七 | — | 三 | △ | △ | 八 | △ |
| 一六八、モノサシトンボ | — | 三 | — | — | — | — | ○ | — | 三 | — | 一 | — | — | 一 | — | — | — | — | — |
| 一六九、キイトヽンボ | — | 一 | — | — | — | 二 | ○ | — | — | — | 六 | — | — | 二 | — | 二 | — | — | — |
| 一七〇、アカャネトンボ | — | — | — | — | — | — | ○ | 一 | — | — | — | — | — | — | — | 四 | — | 二 | — |
| 一七一、イトヽンボ | — | 五 | 一 | — | 六 | 二 | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | 二 | — | — | — |
| 一七二、オホイトヽンボ | — | 一 | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一七三、ホソイトヽンボ | — | 二 | — | — | — | — | ○ | — | — | — | 五 | — | 四 | — | 四 | — | — | — | — |
| 一七四、アカイトヽンボ | — | — | 一 | — | — | 一 | ○ | — | 一 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

## ◎鳴く蟲に就て（七）（第五版並第六版圖參看）

名和昆蟲研究所内　谷　貞子

（十三）ヒメクダマキモドキ（Phaneroptera nigo-antennata, Brunner.）　體長八分、綠色と褐色との二形ありて、全體に濃褐の細點を散布す、頭部は綠色、頭胸背の中央は淡褐を呈し、複眼卵形にして濃褐色をなす、觸角褐色にして長さ體の三倍なり、前胸背は平濶にして後緣圓し、兩側は綠色、下方は狹からず、前胸の腹面には刺を有せず、前翅は長さ八分、腹部の外に出づる事四分、綠色にして內緣濃褐色をなし、翅脉綠色をなす、後翅は膜質にして前翅より遙に大きく、翅端綠色、翅脉褐色を呈す。腹部は綠色、產卵器は長さ二分薙刀狀をなし、綠色にして先端褐色を帶び、上方に屈曲す。肢は各々綠色、各脛節の內側に細刺あり。發音器は黑褐色、發音鏡は殆んど長方形にして、鑢狀部は左翅に有するのみ。

成蟲は八、九月盛に堤防の草間、又は樹枝の地上一二尺の所に靜止し、ヂーンス、ヂーイツと夜間鳴くす。本邦到る所に分布す（第五版第二圖）

（十四）ヒゲナガキリギリス（Gn? sp?）　體長一寸體綠色を呈し、前種に能く酷似したる種なり、頭部は淡樺色をなし、複眼濃褐にして圓し、觸角長く體長に畧ぼ四倍して濃褐を帶び、基部は著しく膨大す。前胸背の中央に褐色縱條ありて、後緣は前緣より遙に廣く、後緣に近き兩緣は少しく凸起せり。兩側は綠色と淡黃とを混じ、下方は狹からず、腹面には刺を有せず、前翅は綠色にして長さ九分腹部より出づる事三分、內緣褐色を呈し、翅脈褐色をなす、後翅は膜質、前翅より少しく大形にして、翅脈褐色を帶び、翅端綠色をなす事前種に同じ。發音器は濃褐色を呈し、發音鏡はほゞ耳形をなし鑢狀部は左翅のみに存す、腹部は黃綠色なり。肢は各々細長くして褐色をなし、各節の接合部は黑色にして、腿脛節の內側に細刺あり、該種は飛驒國益田郡の小坂並に美濃の揖斐郡の谷汲にて獲られしものにして、雌は未だ標本を得ず（第六版第一圖）

（十五）クサキリ（Conocephalus fuscipes, Redt.）　體長一寸、綠色と褐色との二形あり、頭部は圓錐形、頭頂尖らずして突出し、其周片は白色の細き橫線を有し、複眼は腎臟形にして濃褐色をなし、額面には白點を印す。觸角淡褐體と略ぼ同長にして基部綠色をなす。前胸は綠色背面はほゞ平濶にして後緣圓し兩側も共に綠色にして腹面には刺を有す。前翅は長さ一寸三分腹部の外に出づる事五分、綠色にして其幅狹し。翅脈綠色をなして、まゝ翅上に黑褐點を散布するものあり。後翅は膜質にして前翅より短かく、翅脈綠色をなす。腹部は綠色、產卵器は劍狀にして長さ八分、濃褐にして基部綠色をなす。肢は三對共に腿節綠色に、脛節は淡褐色をなし、腿脛節の內側には細刺を有す。發音器は小形、發音鏡はほ

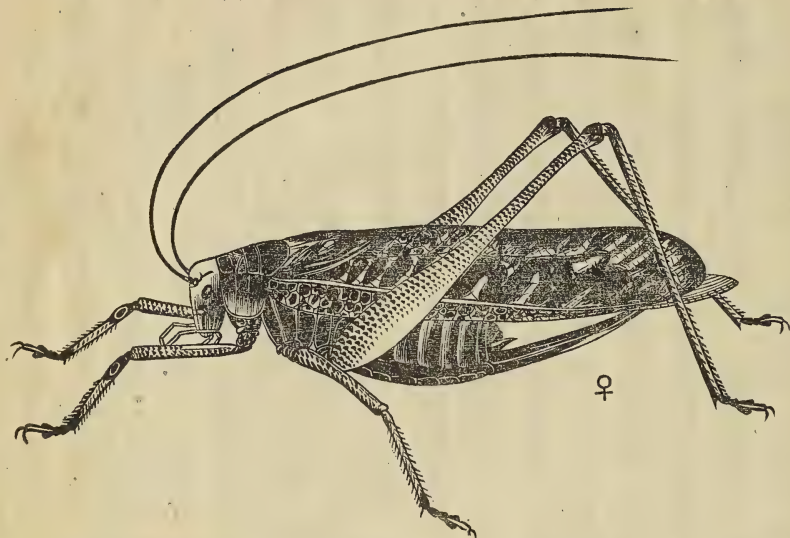
ゞ圓し。成蟲は八、九、十月頃に最も多く現出し、晝夜の別なく草間或は稻田に於てジ――、と鳴々す。

タイワンクツハムシの圖

♀

（第五版第七圖）

（十六）クビキリバツタ（Conocephalus Thunburgi, Stal）

體長一寸二分、綠色と褐色との二形あり、頭部は圓錐形にして頭頂は此種に限り著しく前方に凸出し、其周片に鈍白色の細線を有し兩側に黃線あり複眼腎臟形にして暗褐色を呈すれども、色澤一定せず觸角淡褐を帶び體と同長にして基部に切込みあり。前胸背は綠色、ほゞ平濶にして後緣圓し、兩側の下緣は黃色をなし、腹面には刺を有す。前翅は綠色にして長さ一寸五分、腹部の外に出づる事八分、翅脉綠色をなす。まゝ翅上に黑褐點を散布するあり。後翅は膜質、前翅より僅かに短く、翅脉綠色をなす、腹部は背の中央に濃褐色の縱帶を有し、他は綠色をなす。產卵器は綠色にして長さ五分五厘、劒狀をなす。肢は各々綠色各腿脛節の內側に細刺を有す。發音器は綠色發音鏡は圓し、成蟲は十、十一月頃より、翌年五、六月頃にかけて、堤防其他處々の草間、又は稻田に於て其音高く鳴々す。但し十、十一月頃には晝夜共鳴々すれども四、五月頃には夜間多く樹

枝に登りて鳴々す。臺灣に於て獲られたり。（第六版第五圖）

（十七）カヤキリ（Conocephalus acuminatus, Fabr.） 體長一寸五分、體綠色を呈し、頭胸背に黄色の不判明なる縱線あり、頭部は圓錐形にして頭頂著しく尖る。顏面は褐色に黄色を混じ、複眼圓く黑褐をなし、觸角黑色にして體より長し。前胸背は平濶にして中央に淺き凹紋を有し、兩側の後緣は綠色をなす、前胸の腹面には刺を有す、前翅は綠色にして長さ一寸六分腹部の外に出づる事五分、翅脈綠色を帶ぶ。發音器は小形發音鏡は圓し。後翅は膜質前翅よりやや短く、翅脈綠色をなす。腹部は背腹共に綠色なり。肢は各々綠色、各腿脛節の內側に細刺を有す。產卵器は劍狀にして長さ一寸二分、綠色を呈す。成蟲は七、八、九月頃に現出し、山間の草原に棲息す、されど未だ其鳴聲をきかず（第六版第四圖）

（十八）ヒサゴクサキリ（Conocephalus.? sp?） 體長一寸、體褐色を呈し幽に藍色の細點を有し、頭胸背に瓢形の濃褐色紋あり。頭部は圓錐形にして頭頂尖り、顏面に山字形の綠色紋と觸角下に濃褐線とを有す、複眼褐色を帶びて圓く、觸角褐色にして長さ體に四倍す。前胸背は其廣狹く平濶なり。中央には淺き凹紋を有し、兩側各々褐色をなし、前胸腹には刺を有す。前翅は長さ一寸四分腹部の外に出づる事八分褐色にして不判明なる黑褐色の斑點を散布し、翅脈褐色をなす。後翅は前翅とほゞ同長にして膜質をなし、翅脈褐色をなす、腹部は濃褐、產卵器は長さ六分、上方平直なるも下方灣曲して薙刀形をなし濃褐色をなす。肢は各々褐色にして不判明なる淡綠色の細斑を散布し、腿脛節の內側に細刺を有す。發音器は小形發音鏡は圓し。該蟲は第一回岐阜縣分布調査の際、美濃國羽島郡笠田小學校四學年田中亮二、同國揖斐郡大野高等小學校二學年小里健治郎、同國本巢郡席田小學校四學年堀口一郎の諸氏、其他愛知縣丹羽郡に於ても九月に獲られたり。されども未だこれが捿息せる場所を知らず。況やこれが鳴聲に至

りては更に知るに由なければ識者の明敎を待つ。

(十九)タイワンクツハムシ(Gh? sp?)　體長一寸三分五厘、體黑褐を呈し、頭部は黑褐にして頭頂は尖らず。複眼卵形にして黑褐をなし、觸角褐色にして長さ體長の二倍に達し、往々黑斑を有す。前胸背は平濶、後緣廣くして圓く、中央には後方に彎曲せる二個の横溝を有す。左右兩側は上方其色濃し。前胸腹面には刺を有す。前翅は長さ一寸九分五厘、腹部より出づる事一寸、褐色にして不判明なる黑褐紋を有し、翅脉褐色をなす。後翅に膜質、前翅とほゞ其長さを等しくし、翅端前翅と同色なり、翅脉褐色をなす。腹部は黑褐、產卵器は劍狀にして長さ九分、褐色をなし、基部濃褐を呈す。肢は各々褐色にして黑褐斑を有し、各腿脛節の內側には細刺を有す。發音器は大にして濃褐を呈し、發音鏡は二室に別る該蟲は臺灣及び沖繩にて獲られたり。

## ◎三化螟蟲の驅除に關する所感

農商務省農事試驗場技師　中川久知

編者曰く、本篇は同氏が福岡縣下の某所に於て講話せられたる大要なるが、今其筆記を得たれば茲に登載し博く讀者に照會することゝなしぬ。

余は今回害蟲驅除豫防法の實施上に付き、福岡、佐賀、長崎三縣下に於る狀況を視察せんが爲め、本縣下豊前國筑上郡を始めとし、筑前國遠賀郡朝倉郡を巡回し、佐賀縣下東西松浦の兩郡を經て長崎縣に移り、北高來、東彼杵、北松浦の三郡を巡り、更に筑後國に移り、八女、山門の兩郡を視察致しました。此行素より日數に制限ありて、普く各郡を巡行するに遑あらず、隨て大体の觀察に止ると雖も、各縣の

人心自ら異る所あるを以て、該法律の運用上地方によりて多少相異る所なきにあらず、然れとも此等は專ら行政上の事に屬し、茲に明言するの必要が御座いませぬ。唯だ三化螟蟲の驅除に關しては、兼て抱持したる意見を倍々鞏固ならしむるに就て此行は與つて最も力ありたりと信するを以て、本種害蟲の驅除を勵行する上に於て參考の爲め聊か本縣下の當業者に向て余の所感を陳述する次第で御座います。

三化螟蟲の性たる一年三回羽化して稻草に產卵し、其第三回は八、九月の交に於てす。其卵孵化するや幼蟲は個々分離して穗を支ゆる莖の上節の下部に喰入するものです、これ此部は節中の最軟部なる故でありませう。爾後莖の內面を食し、漸く長ずれば漸く下り、收獲期に至りては遙に根際に達し、刈取の際は株中に住するものです。然れども昨年の如き九月以後の溫度低下し、去る明治二十六年已來、十一年間の平均よりも下位に在るときは、刈取の際切斷部の上方に在りて、藁中に存在することありと云ふとも、此等は素より莖の枯燥するに至れば遂に死亡するものであります。余は昨年十一月、三化螟蟲の住する稻株數百を得たれば、其中より三化螟蟲の害を被むらざる生莖十本を取り、別に枯藁十本を右の生莖と同じ長さに切り、枯藁は豫め蒸して濕潤ならしめ、何れも三化螟蟲を一頭ツヽ喰ひ入らしめ、善く濕氣を與へて溫室に入れ、溫暖なる氣中にて一週間飼育せしに、枯藁中のものは毫も藁を食したる形迹なく、二頭を除き悉く死したるも、生莖中のものは莖の內面を蝕して明らかに成長し、而して枯莖中に生存せし二頭は、其後日ならずして斃れました。これ三化螟蟲は二化螟蟲と異り、枯藁を食して成長することなき證據であります。三化螟蟲は稻を刈取りたる後は、刈株中にて多くは薄き繭を造り、冬期間其中に蟄伏し、翌年溫暖漸く加わり、五月中旬に至れば化蛹し、軈て羽化するものなれども、若し此株を堀上げて毫も濕氣を與へず、室內にて全く風乾し置くときは、四月下旬までに悉く斃れます。もし田面を鋤き堀起し、麥を播種するときは、株の一部は地上に露出し、一部は土中に埋沒するから、其の中地上に露出するものは雨露に曝されて早く枯死し、二月中旬までには在中の蟲は過半死に就くも、土中に埋沒したるものは土中の狀態によりて其趣大に異り、田地卑濕にして、麥を播下するに土壤を堆積するも尙ほ土中に濕氣多く、俗に「ジクシクスル」と云ふ田地にては、株は悉皆二月中旬までに腐敗し、三化螟蟲の生存するものなきも、柳川地方の如く土地粘性にして、晴天には非常に硬き塊をなす地方にては、土中の株は適宜の濕氣を有するを以て、二月頃に至るも十中七八は生存するものであります（第一表參照）以上は株を鋤き起したる塲合に於て述べたるものですが、若し休閑田の如く、株を其儘存置す

るときは、在中の蟲に如何なる影響を及ぼすかと云ふに、株を刈りたるまゝ存在する場合にては、株は急に枯死することなく生存するにより、在中の蟲は氣候寒冷となるまで成長を繼續し、二月に至るも尚ほよく生存するものが多いのです。（第一表立株の項參照）然れども、もし其田面に多量の砂を有するときは、立株にても善く腐朽し、二月に至りては一頭も生存するものなく、屍体は黴を生し株は朽壞して黴臭を發する樣になります。これ土中に空氣の流通宜しきが爲めでありませう。

左表は本年二月中旬、筑後の八女、山門、三潴の三郡、肥前の佐賀、杵島の二郡、肥後の八代郡に於て數千株を割裂し、在中の蟲を調査したる成績中より前項に述べたる事實の參照に供する爲め、一、二を摘記したるものです。

### 第一表

| 地名 | 稻種 | 切斷有無 | 調査株數 | 株の狀態 | 三化總蟲數 | 三化生存蟲數 | 三化屍數 | 体長平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐賀縣杵島郡山口村 | 神力 | 無切斷 | 一〇〇 | 立株 | 七四 | 六四 | 一〇 | 五、四九 |
| 筑後國山門郡東宮永村 | 都 | 切斷 | 二〇〇 | 田面露出 | 一二六 | 六二 | 六四 | 五、二一 |
| 同上 | 同上 | 同上 | 二〇〇 | 土中埋沒 | 一四六 | 一一六 | 三〇 | 五、三〇 |
| 同上 | 同上 | 同上 | 五〇 | 三寸ノ下埋沒 | 三六 | 三〇 | 六 | 四、九三 |
| 筑後國八代郡下妻村 | 神力 | 同上 | 六〇 | 田面露出 | 二三 | 一二 | 一一 | 四、四三 |
| 同上 | 同上 | 同上 | 六〇 | 土中埋沒（切斷上等） | 一八 | 一二 | 六 | 四、二六 |
| 同上 | 同上 | 同上 | 六〇 | 同　上（切斷劣等） | 二五 | 一八 | 七 | 四、五五 |

（備考）體長は生存する蟲の平均體長なり

要するに、三化螟蟲は生莖にあらざれば之を食して成長することなきを以て、稻株枯死したる後は成長するの途なしと雖も、もし稻株全く死するに至らず、翌年發芽するを得ず、小形の蟲も再び成長をなし得べきものです。然れども完全に切斷したる株にては、翌年に至り發芽するものなきゆへ、斯の如き場合は余未だ之を實驗したることが御座いませぬ。而して株中にて越冬する蟲は、株の乾燥によつて死するも、多くは株の腐朽によりて死するものであります。尤も五月中下旬に至り、將に腐朽し畢らんとする株中、生存するものなきにあらざれども、之等は已に概ね化蛹し、或は將に化蛹せんとする大形の蟲のみです、これ恐らくは前年秋末に於て、己に充分の成長を遂げたるものゝ內、幸にして生存し得たるも

のであらう。故に刈取後早く株を枯死せしめ、隨て速に腐朽せしむる事は三化螟蟲の驅除に於て最も有効なることであります。

刈取後に於て如何にせば株は早く腐朽するやと云ふに、鬚根を切り除きて養分吸收の途を絕ち、株を枯死せしむるに如くはなく、これ稻株切斷法の原理にして、株切は讀て字の如く株を切斷するので、蟲の切斷ではありませぬ。聞く處によれば、株切は在中の蟲を切斷する爲の方法なりとて、株を切るに方り蟲に切り當りて液汁の飛散するを見て、切斷の能事了れりとするものあれども、蟲は決して株中に於て同一の高さに並び居るものでなく、隨て一回株を切斷するに、在中の蟲を殺すこと多きも五割を超過することなく、今筑後地方に於て据切と稱する切斷法は、恐らく此蟲切の目的に出たるものならんも、切斷部以下に少なからざる莖を遺し、其下に鬚根附着するにより、下部は久しく生存して殺蟲の効力は薄弱なるものです。宜しく鬚根の附着部を切斷して株を堀起し、速に枯死せしむべき方法をとらねばなりませぬ。福岡、佐賀の二縣に於て、古來三化螟蟲の繁盛を極めたる地方を調査するに、筑後に於ては三潴、八女、山門の三郡にして、佐賀縣にては三養基、神崎、佐賀、杵島の四郡です。此等は何れも有明海に面する强性粘土にして、乾燥するときは煉瓦の如く極めて堅硬となり、在中の株を固封し、腐朽を防止する傾向あり、又今回築上郡上紀井村、遠賀郡石峯村に於て調査せし所によれば、三化螟蟲の所在地は何れも赤色粘土です。而して同行せし吉村技手に、糟屋郡役所に就き調査を委托せしに、同郡役所の記錄によれば、

宇美村大字障子嶽、七十町歩、全部三化。須惠村大字佐谷、五十町歩、全部三化。篠栗村字金出、三十町歩、三化七分二化三分。久原村上部落、七十町歩、三化五分二化五分。山田村字伊野、四十町歩、三化五分二化五分。香推村下原、四十町歩、三化四分二化六分。小野字菰野、八十町歩、三化五分二化五分。

にして、三化の部合減少するに隨ひ、土地の赤色漸く淡らくといふ有樣です。而して赤色の漸く減ずるは肥料の施用により、土中に有機物漸く增加するによるものにして、土壤も亦た漸く膨軟となり、空氣の流通宜しきに至りしものと思はれます。(肥料を用ゆるときは株の腐敗を促すバクテリヤの繁殖を來すこともあるべし)

右調査は三化螟蟲の粘土地に於て繁殖するものなることを證明するに足らん。これ前に述べたる如く、

株の腐朽大に後れ在中の蟲を容易に越冬せしむるが爲でありませう。然れども枯穗の多少は、必ずしも之を生したる田地の性質によるものにあらず、何となれば三化螟蟲の第一回羽化は越冬したる地に於て爲すにより、蛾は附近の苗代にのみ産卵すべきも、二回三回目の羽化に於ては、繁茂せる稻草の莖中に於て化成したる蛹より出で、四方に飛散し、殊に第三回羽化は、中稻若くは早熟の晩稻が抽穗する時期の前後にあるを以て、開花前後の稻を撰んで自在に産卵することを得、隨て土性と何等の關係も無きものであります。今回築上郡に於て調査したる所によれば、下に述たる第二表中白玉晩糯を栽培したる田面には昨年枯穗多く、中晩糯を移植したる所は反て枯穗なかりしと云ふにも拘はらず、今回(五月九日)取調たる時生存せし蟲數と近頃に至り死したる蟲數の合計(死してより日數を經れば蟲體腐爛して全く消滅し、或は彈尾類の爲に食ひ盡され屍體を見る事能はざるもの多く、死體の存在は近時まで蟲の存在せしを証す)は、枯穗の少なかりし田面に於て多かりしを以て知るべく、而して前者の土壤は多少の砂を含むも、後者に於ては砂粒を見ざりしにより、越冬の便否は土性と大なる關係あることを再び証明することが出來ます。

第二表(築上郡上紀井村字傳法寺)

| 稻種 | 調査株數 | 三化總蟲數 | 生蟲數 | 屍數 |
|---|---|---|---|---|
| 中晩糯 | 一九 | 一三 | 二 | 一一 |
| 晩糯 | 二三 | 一 | 一 | ○ |
| 白玉 | 二四 | 三 | 一 | 二 |

以上所述の理由により、粘土地に於て三化螟蟲の發生したる場合は、力めて驅除を行ふにあらざれば、善く越冬繁殖して長く其土地に固着し、害威を逞ふするに至らんとは疑ひありませぬ。而して其驅除たるや株の切斷を以て最も有力なる一の方法として宜しい。今試に切斷を施行したる筑後地方と、切斷を行はざる築上郡とに於て、五月中に於る三化螟蟲の生存蟲數を比較する時は、實に左の如き差異あるものです。

第三表

| 地名 | 稻種 | 株數 | 切斷の有無 | 三化螟蟲生蟲數 |
|---|---|---|---|---|
| 築上郡上紀井村字傳法寺 | 中晩糯 | 一〇〇 | 無切斷 | 一〇、五 |
| 遠賀郡石峯村字小石 | 神力 | 一〇〇 | 無切斷 | 一五、八 |
| 八女郡下妻村 | 同上 | 一〇〇 | 切斷 | 四、〇 |
| 山門郡東宮永村 | 都 | 一〇〇 | 切斷 | 一、〇 |

(備考)本表は蟲數を百株に對し改算せしものなり

右の内八女郡下妻村と、山門郡東宮永村に於ては、第一表に示したる如く本年二月に於て株中の蟲數を調査せしにより、當町の生存蟲數を五月に於るものと對照し、減少の割合を示せば左の通りであります。

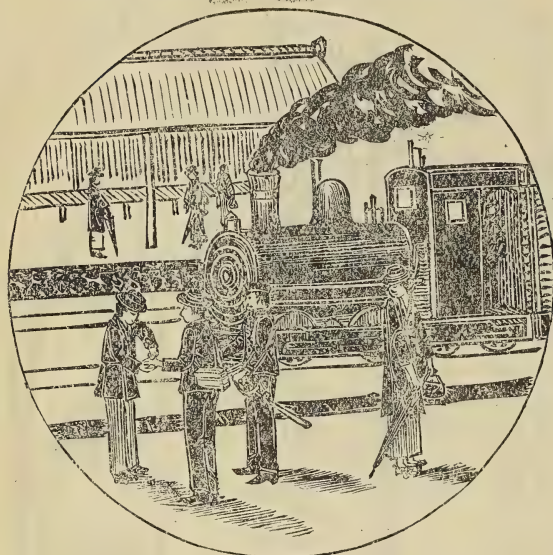
第四表

| 地名 | 二月調査に於ける百株に對する生蟲數 | 五月の調査に於る百株に對する生蟲數 |
|---|---|---|
| 八女郡下妻村 | 二三、三頭 | 四、〇頭 |
| 山門郡東宮永村 | 四六、二 | 一、〇 |

右の表によれば下妻村に於ては凡そ六分ノ五、東宮永村に於ては四十六分ノ四十五を減じたる割合です。前の第三表は、明かに株を切斷するときは在中の蟲數大に減少し、驅除の効力判然たるを知るものです。抑も三化螟蟲は二化螟蟲と異り、卵期に於て僅に寄生蜂の爲に侵害せらるゝも、(之とも二化螟蟲の如く多量の被害なし) 爾後害敵の爲に斃さるゝもの甚た少いものです。故に第一回羽化の母蛾力産卵して繁殖する割合は、度學連數の數字に示す所と大差なかるましと信じます。故に第一回の産卵が、本田なると苗代なるとは大に本種害蟲の繁殖に關係あるものです。何んとなれは苗代に産卵するときは容易に採卵し得べく、隨て當年繁殖の根原を絶す得へき筈なれども、本田に産卵するときは、採卵の効果不完全にして、其結果は大に繁殖して多數の枯穗を生するの虞があります。故に早植の場所に於ては大に繁殖し得へき道理です。然れとも早稲のみ栽培する地にては、早稲は收穫期早きを以て、株の腐蝕も亦た速なるにより、非常の繁殖を見ることなく、唯た最も恐るへきは、早稲と晩稲の具備する地方です。これ第一回の産卵を早稲移植后に受け、第三回の産卵を晩稲に亭て甚しく繁殖するのです。

上に述たる如く、稻株の腐蝕は株の枯死する時期の遲速によりて左右せられ、株の枯死は切斷の早晩によりて遲速すること、三化螟蟲は枯莖を食せさるにより、刈取后株の未た枯れさる間は(氣候温暖なれば)發育するを得ること、又た早稲の早植は本田に卵を多く産付せしむることを知らば、休閑田の多き地方は勿論、一般に株の腐敗を遲延せしむへき土性の田面にては、是非共收穫後間も無く株を切斷して速に其腐蝕を促かすの方法を採らねばなりませぬ。而して已に株の切斷を施行し居たる地方にて、一切早稲の早植を禁し、第一回の産卵は悉く苗代にせしむるの方法をとるを必要と信じます。

## ◎昆蟲採集奇談 (幻燈使用) (其五)

昆蟲翁説明
鳴蟲女史筆記

## （五）　伊吹山に昆蟲採集の爲め衰弱の結果虎列刺病患者と疑はる

伊吹山は植物に富み、從て昆蟲の種類が多いから、年々必ず一度は登山して昆蟲採集するを一の樂みとして居ましたが、只今から二十年程も前の事でありますゝ、私が岐阜縣中學校に奉職して居りました時、八月の夏季休業中に、例により伊吹山へ十日程も唯一人採集に行きました事がありました。所が其時、噂に越前の敦賀へ西洋人が昆蟲採集にきて居ると云ふ事をきゝましたから、一度その西洋人にあつてみたいと思ひまして、長濱から滊車に乘つて敦賀へ參りました。其頃は諸方に虎列刺病が流行いたして居りましたから、各停車塲等は一々それがために檢疫するので、なか〳〵混雜をいたします。敦賀驛でも檢疫なか〳〵嚴重で御座いまして、遂に私が注意患者と見られて、私一人を殘されて、檢疫醫は勿論、警察官までもしきりに私の手の甲の皮膚をつまんでみたり眼をみたり、又どちらの方から來たか、又何をして居つたなどとうるさく質問されますから、私は委しく其の質問に對して事情を逑べまして、別段虎列刺病の流行地などは通りませんが、それは多分十日程も伊吹山で別に滋養物も食べずに昆蟲採集をして居つたから、身体が衰弱した結果遂に筋肉の彈力性がなくなつたものであろうと云ふて、採集した處の標本等を見せましたれば、漸く其疑が晴れた樣子で遂に許されましたが、なにしろ一時は檢疫醫や警察官迄がしきりに手の皮をつまんで見るので、私も非常に一時は心配いたしました。それから早速西洋人の宿を尋ねました所が、もはやたつていつたあとでありました。實に耻をかいた上に虻蜂とらずで、こんな馬鹿らしい事は前にも後にもほんとうに初めてゞあります。

身体衰弱の爲め虎列刺病患者と疑はるゝの圖

## ◎昆蟲文學　（十九）

撲螢　　柳　菱齊

一柄氷紈如月圓。鬟雲風動木蘭船。誰敎情緒芊綿思。付與流螢徹夜燃。

魯嶽曰。起承寫景轉結寫情。頗有老杜之香霧雲鬟濕清輝玉臂寒之槪。

### 雜詠　　胡桃澤勘内

＊

ありまきを拂ひ遣らふと水打つや楓のわか葉露落ち止まず

ありまきのこゝだつきたる薔薇の芽の莟ながらに萎みけるかも

みやこ草しみ咲く上にかはげなの群れ飛ぶ見えて日は夕なり

藻の花をめぐるまひ〱止らむと見れど止らずなほめぐるかも

夕闇は道たづ〱し然れども螢を見つゝ行くがおもしろ

＊　　坪内清之助

草の上に蚋群れ舞ひて夕ぐれの雲脚早く雨催ひせり

＊　　信山生

春行きて夏さり來ればあらを野の松の梢に初蟬鳴くも

＊　　ふもとのや

牆の内葉を卷く芋の畑を廣み門田の螢來てみだれたり

＊　　潮音生

紫陽花の花か飛びしと見るまでにうすむらさきのしゞみ蝶かも

人の世し降ちてあれや這ふ蟲にみちをしへとふ名こそありけれ

### 蝨

よきものを參らせんとて蝨かな　　歸麓園

物臭の大臣が袖のしらみかな　　同

白妙の紙に這はする蝨かな　同
しらみとる端居の人に落花かな　同
參禪の袈裟這ひ上る蝨かな　同
大海に捨つる船路の蝨かな　同
蝨とる苦學のいとまくかな　四澤
干してある温袍に這ふしらみかな　同
面壁の頸筋を這ふしらみかな　同
南無阿彌陀指頭に拈す蝨かな　同

旅衣せんすべもなきしらみかな　城東
病む人の下衣を脱がす蝨かな　城北
しらみ狩戰地の友の便りかな　四山
蟲眼鏡の下にうごめく蝨かな　蓼江
滯陣の雜兵共やしらみ狩　三川
旅僧をとめて蝨をおそれけり　同
蝨頭剃つてくりく坊主かな　同

## ◎昆蟲に關する歌（四）

奥島欣人輯

### ▲古今集の昆蟲歌

秋の歌

讀人しらず

我ためにくる秋にしもあらなくに蟲の音きけば先ぞ悲しき

人のもとにまかれりける夜きりぐすの鳴けるを聞てよめる　藤原たゞふさ

蛬（きりぐす）いたくな鳴きそ秋の夜のながき思ひはわれぞまされる

是貞のみこの家の歌合のうた　藤原敏行朝臣

秋の夜の明くるも知らずなく蟲はわが如ものや悲しかるらむ

題しらず　讀人しらず

秋はぎも色づきぬれば蟋蟀わがねぬごとや夜はかなしき
秋の夜は露こそことに寒からし草むらごとに蟲のわぶれは
君しのぶ草にやつるゝ故郷はまつ蟲の音ぞ悲しかりける
秋の野に道もまどひぬ松蟲の聲する方に宿やからまし
あきの野に人まつ蟲の聲すなり我かと行ていざとふらはん
もみぢ葉のちりてつもれる我宿にたれをまつ蟲こゝら鳴くらん

蜩のなきつるなべに日は暮ぬと思ふは山の陰にぞありける
ひぐらしの鳴く山里の夕ぐれは風よりほかにとふ人もなし
寛平御時きさいの宮の歌合の歌　素性法師
あれのみや哀と思はん螽斯なくゆふかげのやまと撫子
離別歌　讀人しらず
すがるなく秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとか待たん
ふる歌にくはへてたてまつれる長歌　壬生忠岑

くれ竹の、よゝの古言、なかりせば、伊香保の沼の、いかにして、おもふ心を、のばへまし、あはれ昔へ、ありきてふ、人麿こそは、うれしけれ、身は下ながら、言の葉を、天つ空まで、きこえあげ、末の世までの、あとゝなし、いまもおほせの、くだれるは、塵につげとや、ちりの身に、つもれることを、とはるらん、これを思へば、古も、くすりけがせる、けだものゝ、雲にほえけん、こゝちして、ちゞのなさけも、思ほえず、一つ心ぞ、ほこらしき、かくはあれども、照る光、近きまもりの、身なりしを、誰かは秋の、くる方に、あざむき出て、みかきより、とのへもる身の、みかきもり、をさ〳〵しくも、思ほえず、こゝの重ねの、内にては、嵐の風も、きかざりき、今は野山し、近ければ、春は霞みに、たな引かれ、夏は空蟬、鳴きくらし、秋は時雨に、袖をかし、冬は霜にぞ、せめらるゝ、かゝる佗しき、身ながらに、つもれる年を、しるせれば、いつゝの六に、なりにけり、これにそはれる、わたくしの、老のかずさへ、やよければ、身はいやしくて、年高き、ことの苦しさ、かくしつゝ、ながらの橋の、長らへて、難波の浦に、立つ浪の、なみのしはにや、おぼゝれん、さすがに命、をしければ、越の國なる、白山の、かしらは白く、なりぬとも、音羽のたきの、おとにきく、老ず死なずの、藥もが、きみが八千代を、わかえつゝ見ん。(反歌畧)

藤原の後蔭がから物の使に長月のつごもり方にまかりけるにうへのをのこども酒たうびけるついでによめる　藤原かねもち
もろともになきてとゞめよ蛬あきの別はをしくやはあらぬ
ひぐらし(物名)　紀貫之
そま人は宮木ひくらし足引の山の山びこよびとよむなり

うつ蟬(同)　在原しげはる

浪のうつせみれば玉ぞ亂れける拾はゞ袖にはかなからんや

かへし(同)　壬生忠岑

袂より離れて玉を包まめやこれなんそれとうつせみんかし

やまがきの木(同)　讀人しらず

秋はきぬ今やまがきのきり〴〵すよな〳〵鳴かん風の寒さに

からはぎ(同)　在原滋春

うつ蟬のからはきぬ毎に留むれどたまの行へを見ぬぞ悲しき

にがたけ(同)　讀人しらず

命とて露をたのむにかたければ物わびしらになく野べの蟲

戀歌

夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我身下もえにせん　紀友則

明たてば蟬のをりはへなきくらしよるは螢のもえこそ渡れ

夏蟲の身をいたづらになすことも一つ思ひによりてなりけり

霄のまもはかなく見ゆる夏むしのまどひまされる戀もするかな

夕されば螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき

蟲のごと聲にたてゝはなかねども涙のみこそしたに流るれ　清原深養父

夏蟲を何かいひけん心からわれもおもひにもゆるべらなり　凡河内躬恒

寛平御時后の宮の歌合の歌

蟬の聲きけばかなしな夏衣うすくや人のならんとおもへば　紀友則

こめやとは思ふものから蜩のなく夕ぐれは立またれつゝ　讀人しらず

蜑の刈る藻にすむ蟲の我からと音をこそなかめ世をば恨みじ　典侍　藤原直子朝臣

堀川の太政大臣君身まがりにける時深草の山にをさめてける後に詠ける　僧都勝延

うつせみはからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて

藤原の利基の朝臣の右近中將にてすみ侍りけるざうしの身まがりて後人も住まずなりにけるに秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見いれければもとありし前栽いと茂く荒たりけるを見て早くそこに侍りければ昔を思ひやりてよみける　みはるのありすけ

君が植し一むら薄蟲の音のしげき野べともなりにける哉

方たがへに人の家にまかれりける時にあるじのきぬを着せたりけるをあしたに返すとてよみける　紀友則

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふ蟋蟀なく　凡河内躬恒

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなん物にやはあらぬ

古今和歌集總數壹千百首中動物を分類すれば

鳥類　百拾八首　獸類　拾六首　蟲類（昆蟲以外）　五首　魚類　〇

萬葉では鳥類が最多くして次が獸類であつた、古今に至つて遂に昆蟲は參拾七首の多數で獸類を追ひ越してしまつたのである、今昆蟲を統計種別すると

蟬（蜩）拾三首　蟋蟀　六首　松蟲　四首　夏蟲　三首　螢　二首　すがる（蜂）一首　蚊遣　一首
藻にすむ蟲　一首　鳴蟲　六首

斯の如くで、藻に住む蟲は何であるか知れないが昆蟲でないと云へないから昆蟲部へ入れた、鳴蟲とあるは單に蟲の聲とか蟲の音とかあつて其種別の明瞭でないのである。

イトヒキハマキムシの圖

(イ)卵塊 (ロ)二眠起の幼蟲 (ハ)四眠起の幼蟲 (ニ)蛹 (ホ)成蟲の雄 (ヘ)同雌 (ト)同靜止の狀 (チ)幼蟲の寄生蜂

# ◎害蟲驅除豫防實驗錄(其七)

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

(一〇)イトヒキハマキムシ　桑樹の一大害蟲にして、成蟲は体長三分乃至四分、翅張七分五厘乃至九分五厘、前翅は細長くして前緣稍々弓狀に曲り、褐色を帶ひて長短三條の暗褐色斜帶あり。翅を疊むときは、二個の交錯斑と二個の稜狀斑とを現はす。後翅は暗褐にして斑紋なく、緣毛灰褐なり。幼蟲は淡綠色にして長さ八九分に達し、第二節以下各節毎に背面の中央淡黑色を帶び第一節に二個の大なる斑紋と、第二、第三の兩節には小なる斑点を有す。蛹は三分五厘內外にして褐色なり。年一回の發生にして四、五月頃幼蟲發生し、桑葉を捲き其內に入りて食害すること甚だし、若し被害樹を動搖せしむるときは、皆糸を引きて垂下するを以てイトヒキハマキの名あり。五月下旬より六月上旬頃、葉を捲きて其中に入り蛹となり、六月中、下旬に羽化し、後枝叉は幹等に數十乃至百餘粒の卵を一所に產付す其狀恰も膏藥病の初に似たり。其儘越冬して翌年四、五月頃孵化し、桑葉を捲き之れを害すること前に述べたる如し。此の蟲は岐

阜、滋賀、福井の諸縣に多く、常に高木造りの葉に發生多し。明治廿八年滋賀縣長濱近傍に大發生をなし六百餘町歩殆んど皆無の有樣となり、其損害實に十萬圓に上れりと聞く、實に恐るべき害蟲なり。凡そ害蟲と雖も、年々斯く恐るべき害を與ふるものに非らざれども、氣候其他益蟲との關係により、時として非常の慘害を加ふるものなれば、苟も害蟲と稱する以上は、平素よく留意し、決して油斷すべからず。

驅除法　樹幹に產付したる卵塊を、冬季農閑の候に削り取るか、若くばコールタール、又は石油を塗るを良しとす。幼蟲は樹を搖るときは糸を引きて下るを以て、捕蟲器内に拂ひ落して殺すべし。

## ◎虱の手紙

在米國桑港之一虱

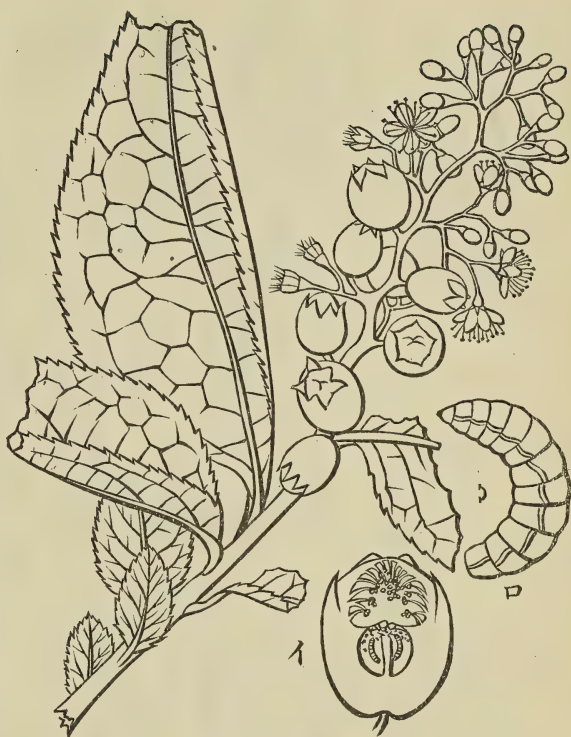
昆蟲世界第九十一號にて千葉縣の高橋徵一てふ方は、飼鷄の体に寄生する羽虱や羽蝨等を害蟲として彼等を人爲的に驅除せん御希望のよし、自分も昆蟲界に其者ありと知られ居り、又人間てふ我儘勝手の動物に尤も憎惡せらるゝ虱てふ者に有之、矢張り有害無益のものとして、人間樣より見當り次第逮捕の控訴や上告の期間も與へず、即時死刑に處するてふ非道の待遇を受け居り申候故、同屬相憐の古諺に厚き羽虱の肩を持ち、左に一問を呈し申候。宇宙間に絕体的有害にして、絕体的無益の動物、即ち換言すれば、丸で人間の役に立たずと云ふもの現存致し居り申候哉、此に難問を解する御參考にもと思ひ、左に自分が上より仰せ付けられし役目を皆樣に御紹介申上候。

自分は人間其他下等動物一般の衛生委員に命べく候故、不肖其を全ふせん爲め、晝夜の別なく一寸の休息もなさず、不潔の場所を巡視し掃除を督勵し、若し己が命令に從順せざるものは即時に處罰し、若し己れ一身にて到底命令の執行を全ふする能はざる場合には、己が親戚は勿論、近所隣の者等をも召集し命令違犯者を懲罰罷り在り候。然れども若し命令違犯者にして十分とは行はざるも、可なりに清潔法を實行する場合には、攻擊を止め他の方面へ向ふ次第に有之、決して罪なき人間を苦しめ害すると云ふ譯には御座なく候。若し上より自分等一族を衛生委員として御派遣なされし曉には、如何なる事の起るならん、人間てふ動物は至つて構はぬもの故、彼等の居所は塵埃積んで山を爲し、彼等の着衣は垢を以て光り初め、彼等の身体は不潔のため皮膚病に冒さるゝや必せり。斯の如く論じ來れば、虱の一族程人間社會に有益無害なる昆蟲は他に無之と自ら慢り居り申候。此他に申述べ度きことは山々なれども、書餘は御返答を頂載しての後に讓らん、艸々。

## ◎三田洞へ昆蟲採集の記

名和昆蟲研究所員　鳴　蟲　女　史

さつきの十六日と云ふに、我等は山縣郡岩野田村字三田洞に昆蟲採集をなす。此地は岐阜を去る事約一里半、此日の採集はなべての採集と事變り、當名和昆蟲研究所長の監督の元に、今二歳と四ヶ月になり給ふ孫君を主とし、其他に同行者として、所長の令夫人を初め瓢蟲女史、且つは下女に至るまで都合七人、巳れ專ら採集の任にあたる。午前十一時頃とおほしき頃、みな／＼顏面に笑をふくみ、あだかも櫻花と見まようばかり、中にも正男の君の如きは、花にたわむる胡蝶の如く、さながら同行者をしてたのしからしむ。而かも此日は天氣晴朗、大空にはたゞよふ雲のちぎれだになく、實に我等が採集にはいとも適せし日なりけり。一行は長良橋より長良を北に、かねて螢に名高き岩崎にとは行きたり。折柄いと／＼激しき流れありけり、こは定めしカワトンボウの種々見出しつるならんと、あちこち見たづぬるうち、右より左より飛びくるさまの愉快さよ、各々己れを忘れあやふきによぢ、されども／＼盡くるを知らず、されど未だ目的地に達せさる事と、もはや採集箱には滿されしのとにより、やむなく名殘をとめて進み行きける。時しもあれ、路傍の土手に小さき孔のいと數多くありけるを、師の君には見出し給ひぬ。これヒゲナガバチの巣なりと、而して又其話を續けられ、このあたりに紫雲英あれば、蜂は自ら花粉其他蜜を携へ、己が兒を養はんがため來つゝあるものにして、吾知らず花粉媒助をなし居るなりと。而してよくそを觀察するに、其深さ三四寸、その外これが巣の殼をも共に採集をなしをきぬ。其さま恰かも樫の實の如し。次に、ハンノキに雪と見まよう鋸蜂の多く發生し居りしを見る。其他今をさかりにさきみだるゝカマツカの花のかたへに、數しれぬ蟲癭のつき居る事恰かもこれが實の如く、いとうつくしくてうすみどりをなしたりける。其他春蟬は山中の松樹中にてジーワ、ジーワ、といともはげしく鳴々し、人をして自からその心をうきたゝしむ。とかくしつゝ大師堂につく、實に此庭のさま、ものふりたる木、苔深き巖のあたり、あるは家ゐのさまのいとゆかしき事等、畵にかくとも筆に及びがたし。吾等はかゝる好きけはひをうちながめつゝ、共々たのしく菓子などたふべ、しばしのつかれをぞ休めける。されども正男の君には、いとまめまめしくて勞れ給ひしけわひもなく、躰に餘る捕蟲器は、醉ひたる人のそれのごと、右に左にうちふり給ふの愛らしさよ、または楓のごとの掌に、かひなにあまる毒瓶や採集箱より針とり出しさすまねし給ふをこがましさ、如何なる人をあまりの事に舌をまかざるものはなし。

カマツカ蟲癭の圖　（イ）は蟲癭、切斷の放大　（ロ）は幼蟲の放大

かくて尚この山奥にわけ入りて、各々なにか獲んものと、あたりをかれこれさがしつるうち、かねて大師堂の前にかけられたる、懸樋の水源へとはたどり入りつ。その水の清くすみ渡れるのうつくしさよ、人の心もかくあらまほしけれ。此あたりは松樹多く、所得がほに鳴きける春蟬の音もいとかまびすし。右に左にかうべうちふり、處々を見たづぬる折しも、松の芽には數しれずアワフキムシの多くつき居りしを發見す。如何に菅の根の永きさつきの折なればとて、永らくはかくなすべきにもあらざれば、各々歸り路にとはつきたりけり。思ひきやいとたやすく家にとつきにき。時に丁度六時をぞ報せし。

實に今日の一行に、正男の君がいまさゞれば、かくは愉快は感せざらまし、且其獲物といひつねに已等が遠く目の及ばさるもの〻數々をとりつくし、中にもいと目新らしきは、ヒゲナガバチ及其巣鋸蜂、或はカマツカの蟲癭等實に其成蹟といひたのしかりける事どもなり。

かゝりし事は、いまだ曾て人々の見得ざる所なるが、こは大に奬勵しかくなしたきものにこそ。今左に其獲しものを掲げんに。

コヤマトンボ、　サナエトンボ、　シホヤトンボ、　カワトンボ、　アヲハダトンボ、　ハルセミ、　ヒゲナガバチ、　オトシブミ、　イトトンボの一種、　コハナムグリ、　尺蠖蛾の一種、　モンキバチ、　オウイシアブ、　コガ子マダラ、　ヒゲナガバチ、　蟲癭類。

## 通信

### ◎吾人の目に映じたる加州の害蟲

在米國　近藤伊祐

本年加州「モントレイカントリ」の地方に於ては、蠶豆を多く栽植せるが、二月頃より何れの畠にも往々一株宛枯死するものを見うけたり。初めは病害ならんと想像し、兎も角顯微鏡下に照さんと、先づ根分の狀態を見んとて一株切り取りたれば、豈計らんや病害には非らず、正しくハリガネ蟲の害を受けたるものなりき。根部には七八頭乃至十數頭も集まり、此蟲のため下種の際發芽も惡しく、此の地方にては砂地、粘土地を撰ばず、ハリガネムシ發生して、本年の如きは非常の被害なりき。同しく「モントレイカントリー、ワックンビール」地方の果樹園、殊に日本人の果樹園及び小規模の果樹園は、果樹の洗滌をなさゞる爲め、年々害蟲增加し、毛蟲の如きは非常に多きものにて、一株に多きは十余巣、少なきも二三巣宛もある有樣にて、岐阜縣人河合氏所有畠の苹果樹には棉蟲をも受うけたり。「サクラメント」近在の畠の果樹類は、皆大規模の爲め果樹の洗滌も年に必ず三回以上は行はざるべからざる規定の爲め、一頭の毛蟲も見うけざりしには大に感じたり。又同「サクラメント」近在の果樹園に入り、「フラム」（日本のスモヽの類）樹を見れば、目今は孰れも非常なる蚜蟲にて、樹下に至れば甘露を垂し、下に行くことも出來ぬ位なり。然れとも耕作者は年々之には注意せざる由なれは、木の芽は恰も桑の委縮病に係り居るものゝ如し。如何に土地の豊沃なるにもせよ、住人の一向之れに意を止めざるは惜むべきことなり。

### ◎害蟲買收規程

和歌山縣海草郡龜川村農會

和歌山縣龜川村農會長桑原林之助氏は本年六月八日龜農第三二號を以て本村農會害蟲買收規定を左の通り改正し本年六月十日より實行せり。

海草郡龜川村農會害蟲買收規程

第一條　本村農會に於て、稻苗代幷に本田に於ける螟蟲及桑畑、又は橘等に於ける驅除を勵行する目的を以て、其螟蟲及天牛成蟲の買收を行ふ。農業者は勿論老幼を論ぜず、村民一般に盛んに螟蛾螟卵及天牛成蟲の採捕を行ふべし。　第二條　螟蟲及天牛成蟲の買收價格左の如し。　螟蟲蛾、十疋に付、金貳厘。螟蟲卵、十塊に付、金四厘。天牛成蟲、一疋に付、金四厘。　前項買收價格の外、尙ほ多獲者に對し左の割合を以て增價を爲す。　螟蟲蛾、壹千疋以上、十疋に付五毛增。螟蟲蛾、二千疋以上、十疋に付壹厘增。螟蟲卵、五百塊以上、十塊に付壹厘增。螟蟲卵、壹千塊以上、十塊に付貳厘增。天牛成蟲、一百疋以上、一疋に付壹厘增。　第三條　採捕したる螟蛾は五十疋毎に、螟卵は五十塊毎に、天牛成蟲は十疋毎に容袋し、其字係り役員、若しくは本村農會事務所に差出すべし、前項の捕蟲に對しては、其時々領收證書を交附す。捕蟲の領收證書は別紙書式に依り調製し、其領收せし月日及蟲數を記入して事務員之に証印するものとす。本會に於ては捕蟲の領收證書と同樣の帳簿を備へ置き、領收證書に記入する毎に同一事項を登記し置くべし。　第四條　第二條の買收代金は精算の上第三條第二項の領收證書と引換に交付す。　第五條　買收締切の期日は其時期に臨み之を公示す。

注意　此領收證書は代金支拂の際入用に付紛失すべからず

海草郡龜川村大字何々
何　某

捕蟲領收證

| 買收價格 | 螟蛾十疋に付 | 螟卵拾塊ニ付 | 天牛成蟲一疋に付 |
|---|---|---|---|
| | 千疋以下　貳厘 | 五百塊以下　四厘 | 百疋以下　四厘 |
| | 千疋以上　貳厘五毛 | 五百塊以上　五厘 | 百疋以上　五厘 |
| | 二千疋以上　參厘 | 千塊以上　六厘 | |
| 月　日 | 螟蟲蛾數 | 螟蟲卵數 | 天牛成蟲數 |
| 何月何日 | 何　疋㊞ | 何　塊㊞ | 何　疋㊞ |
| 月　日 | | | |

## ◎クワノシンムシの分布

新潟縣　宮地良致

曩に現品を添へて報導せし如く、當縣下西頸城郡に突然シンムシを發見せしは意外なりき。該蟲に就き仔細に調査するに、岐阜縣系統を引て長野縣より來りしこと明なり。それは西頸城郡當業者の談によれば霜害（シンムシの被害芽を霜害と稱し居れり）は古來此地方には嘗て見受けざりしも、三四年前信州より鼠返しと云ふ桑苗を買入れしに、該果苗は霜害に係るもの漸次多く、殆んど全部霜害に逢ひ、今は該鼠

返しを植付くるものなきに至れり。爾來他の桑にも害を受くるものあるに至れりと。之れに依て觀ればシンムシの信州より傳播せしは明なる事實なり。今や當縣に於て、只に西頸城郡全部を侵害するのみならず、先發隊は既に中頸城郡直江津附近に迄分布せり。依て之れが驅除豫防必要上、急速に知事閣下に報告したるも、本縣に於ては未だ之れが處置をなさず、蠶病豫防技師河田勝三郎氏の手に委し調査せしめありと。第一部長笠井事務官は、シンムシ驅除の經驗を有せらるゝを以て、佐柳第三部長に忠告せられたる由なるも、今に驅除法の發表なきは殘念の至りなり。

## ◎昆蟲に關つる葉書通信

(一七一)小學校生徒の美擧(三重縣阿山郡　西岡嘉十郎)　三重縣阿山郡新居村立尋常高等小學校にては、去る五月九日及び十四日の兩日、全校生徒四百六十九名をして、苗代田に於ける螟蟲卵塊の採取をなさしめたるに、其成蹟頗る良好にして、毫も田面を害する等の苦情もなく、大に農家の歡迎を受けて採取の便宜を與へ、共同一致運動の結果、其採取したる卵塊數は二萬六千五百余の多きに達したれば、之れを村農會に納め、其奬勵金貳拾圓余を受取たるが、其内幾分を割ひて本村戰死者の遺族に贈り、尚餘す所は傷病兵或は出征兵士の慰問として悉く之れを送金せりと。實に感心なる心掛けにして、之れ全く同校長山川金市郎氏を如め、職員諸氏が奬勵の宜しきを得たる結果とは云ふものゝ、又た生徒等の此美擧たる、豈賞せずして可ならんや。

(一七二)オスグロサヾナミ(ハンノキケムシ)の分布(岐阜縣郡上郡　壚田健藏)　本年四月發行の本誌上に有之候ハンノキケムシは、當地にも非常に發生致し、「カワヤナギ」の葉を食害致し候。目下は漸く卵より孵化せし時代に御座候。右御報申上候也。(五月三日報)

(一七三)螟蟲驅除成蹟優等者の受賞(愛知縣寶飯郡役所)　明治三十七年中螟蟲驅除成蹟優等者に對し左記の通り褒賞を授與したり。

(各通)　赤阪高等小學校長田中周平。鹿菅尋常高等小學校長水野龍次郎。壚津尋常高等小學校長松尾幸次郎。神ノ郷尋常小學校長松井佐助

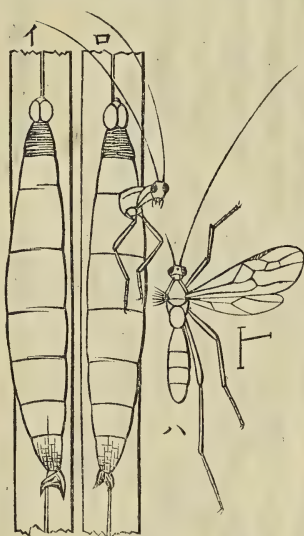
明治三十七年中、兒童を督勵して害蟲驅除特に螟蟲採卵を實行せしめ、其効果著しきは以て他の摸範となすに足る。依て昆蟲標本製作全書一部、害蟲防除要覽一部を贈與し、其効蹟を表彰す。

明治三十八年五月十八日　寶飯郡長　中山眞琴

# 雜報

●皇孫殿下への献納品　當所は昆蟲に關する二三の品を特に謹製し、川路知事の傳献により、皇孫殿下へ献上の筈なりしが、去月廿八日、名和梅吉氏現品を携へて上京し、本月四日献納の手續きを了したりとの通報ありしも、未た歸所せられざれば、委細は次號に讓る。

●本號口繪の説明　第七版圖は紫雲英とヒゲナガバチとの關係を示したるものにて、本號學說欄に之れが説明を揭ぐる手筈なりしも、記事輻湊の爲め次號に讓ることゝなしぬ、讀者幸に諒せよ。

●アメイロヒメバチに就て　稻のアヲムシを斃す蜂の種類は甚だ多きものなるが、上圖は又其一なり。此頃來此の種に付き各地よりの質問甚多く、中にも岐阜縣不破郡宇都宮網雄氏は、現品及圖を添へて送くられたれば參考の爲め茲に揭ぐ。該種は小繭蜂科に屬するアメイロヒメバチと稱するものにして、（イ）は褐色となり殆んど細長き繭、若くは蛹の如く見ゆるも、こは該蜂の寄生にかゝり斃れたる稻螟蛉の蟲体なり。其蜂の幼蟲は螟蛉の体内を食し其内に蛹化し、羽化すれば、蟲体を喰ひ破りて出づ、（ロ）は即其有樣にして（ハ）は成蟲なり。

アメイロヒメバチの圖

●征露紀念特別昆蟲學講習會　來る八月十一日より二週間、見出しの如き會を開設する事となつた。其場所は當研究所内と、伊吹山との兩所である。夫が今回開設の特色と云ふので誠に面白い▲十一日より十八日迄は所内にて普通昆蟲學大意、昆蟲分類法、害蟲驅除益蟲保護法大意、昆蟲採集幷標本製作法等に關する件を研究し、然る後即ち十八日以後に於て凡そ五日間、伊吹山にて採集の昆蟲に就

修業證書

何縣(府廳)族籍
何之誰
何年何月生

右本所規定ノ征露紀念特別昆蟲學講習科目ヲ修了セシコトヲ證ス

年　月　日　所印

名和昆蟲研究所長
名和靖㊞

修業證書

何縣(府廳)族籍
何之誰
何年何月生

右本所規定ノ征露紀念特別昆蟲學講習中伊吹山ニ於ケル實習講話ヲ修了セシコトヲ證ス

年　月　日　所印

名和昆蟲研究所長
名和靖㊞

き説明するのである▲伊吹山は岐阜より極めて便利であるのと、又極めて其目的とする昆蟲の種類が多い。現に前號の本誌にもある通り、伊吹山に於ける一日採集の昆蟲が能く三百九十三種に達するを見ても明である。若しも多數の人が五日間も採集せば、如何に多くの種を得るや到底想像の及ばざる所である▲特別採集として出征軍人の萬分の一辛苦を知る爲めに、海拔四千尺の山頂にて徹夜採集をも試むるの準備あれば、從ひて特別の種を得るも自から難からずと信ずるのである▲伊吹の百草は已に世人の知る所なるも、未だ伊吹の千蟲を知るもの恐くは稀なるべし。今回こそ伊吹の千蟲か萬蟲かは豫め知る事は出來ざるも、多數の種を世人に知らしむるの好時期なりと確信するのである▲兎も角會員各自採集の昆蟲標本を、講習後調査の上印刷物に附して希望者に別つの計畫である。其印刷中には特別紀念として一々採集者の姓名を附する筈なれば、茲に大に競爭の起る事を信ずるのである▲なぜかと云ふに敵の捕虜も雜兵あれば將校もある如く、昆蟲に於ても同樣にて、或は普通種を得て得意とするもあれば、珍種又は新種を得て敵の大將を捕へたると同樣誇るものもあるであらふ▲是等採集者の名譽を保つ爲めに、珍種又は新種には、紀念となるべき名稱を與ふるのみならず、勉めて挿圖の上、世人に知らしむるの考へである▲右の次第なれば勢ひ競爭せねばならぬのである。惡しき競爭は厘毛たりとも禁せざるべからざるも、好き競爭は勉めて奬勵すべきものである▲是等競爭者の一人でも多きを好むが故に特に伊吹山採集の際のみ加ふるを許し、証明書も二樣となりて居るのである▲右の次第なれば、意外の多人數となることは豫め覺悟し居る次第である、只今の所でも續々申込のあるのが第一の証據である▲規則書入用の方は、廣告欄にもある如く照會あれば直ちに送附すべし。

◉僧侶に對する昆蟲講話　步、騎、砲、工の四兵を以て敵軍と戰ふと同樣、害蟲軍を攻擊するも亦鞭(敎員)、袴(官吏)、洋刀(警官)、珠數(僧侶)の四方面より進擊するを以て尤も確實なりとす。然るに是迄は鞭並に袴に對しては、相當に斯學の智識を普及し來りしも、洋刀に至ては誠に昨今の事にして、珠數に至ては全く皆無の有樣にてありし。岐阜縣本巢郡長豊田幾次郎氏は茲に見る所ありて、七月一日より三日間、郡內の僧侶約六十名に對し、郡衙樓上に於て一、二の兩日は專ら農事上の講話、三日の一日丈は害蟲驅除益蟲保護法に就て、午前九時より午後四時迄當名和所長の講話あり、終りて紀念の爲め一同の撮影をなせり。僅々一日の講話なれども、意外の感動を與へたる樣子なれば、定めて將來に於て得る所多かるべしと信ず。又富山縣に於ては、越中敎區敎務所の主催にて、富山市本派別院內に、來る九月を期して約二週間の昆蟲學講習を開設して、多數の僧侶に斯學の智識を普及せしめらるゝ由なれば、慥に將來に一大變化を來す事と確信す。斯くなりし上は、害蟲軍は恐く退却準備の方針を執るならん。

伊吹山昆蟲採集目錄の一例

二五六　アゲハテフ(學名)全部(普通)三、八、一六、六二、七五、
五八九　クロバトキクヒムシ(學名)中部(新種)九六、
八八二　ヒゲナガカミキリ(學名)上部(珍種)二〇、九七、
一〇三五　トウゴウテントウムシ(學名)上中部(新種)四、一〇〇、
一二二〇　ロシヤウンカ(學名)全部(珍種)二、六、九、五二、九〇、
一二九三　マカロフミヅムシ(學名)下部(新種)二、七、
一三五八　イブキハサミムシ(學名)上部(普通)一、五、二〇、八五、
一三八二　オホヤマカマキリ(學名)上部(新種)三五、
一四〇四　カマキリカゲロウ(學名)中下部(珍種)一八、四四、
一四四八　ノギトンボ(學名)中部(珍種)六七、八八、

右の如く新種は素より、珍種幷に普通種と雖も、是迄名稱の無きものには、此際勉めて紀念となるべき新稱を撰ぶ考へなり。最も特別なる新種には、採集者の姓を用ひ、插圖の上特に詳說すべし。

伊吹山を上中下の三部に別ち、海面約一千尺迄を下部となし、夫より約三千尺迄を中部となし、尙夫より頂上迄即ち約四千尺迄を上部として分布の有樣を區別す。

會員の順序に依りて番號を與へ、別に府縣市郡町村姓名の一覽表を作り置き、其番號を以て直に何の誰なることを現せり。即ち次表の如く二なれば二化螟蟲、七なれば七星瓢蟲の如し。故にアゲハテフは誰々の採集したること一目瞭然たり。

二、害蟲縣鱗翅目郡螟蟲科村、二化螟蟲
七、益蟲府鞘翅目郡瓢蟲科村、七星瓢蟲

◉切拔通信昆蟲雜報の發行　本月より見出の如き雜報の第一號が、本誌雜報欄內に發行せらるゝに至れり。其理由は、切拔通信社並に各地方の有志者より、新聞紙上に現はれたる昆蟲に關する記事は、細大となく悉皆集合し來るを以て每月多きは二、三千件、少きも數百件に下りたることなし。其內には讀者の參考となるべき件多々ありと雖

容易に報ずること能はず、悉く筐底に納め置く次第にて如何にも殘念なれば、今回特に切拔通信昆蟲雜報と題し、毎號四頁限り、特に參考となるべき件を撰拔して掲載することはなしぬ。尤も第一號は突嗟の間に編輯したるものなれば、不完全極まるも、次號よりは漸次改良する筈なれば、特別愛讀あらんことを望む。

◉四度警察官ご昆蟲學　或る警察官の談話を聞くに、昨年迄は害蟲の卵と思ひしもの、本年は益蟲の繭と變じました。其理由は、稻の青蟲寄生蜂の繭は、農家一般害蟲の卵と申して驅除し居れば矢張左樣に考へたり。然るに一度昆蟲學の端緒を聞かれたる以上は、忽ち變じて益蟲の繭となりました。故に昨年に變りて、本年は一塊も驅除を許しませんでした◉又或る警官は農夫の頻に桑樹の天牛を驅除する爲め、小形の幼蟲を桑枝の產卵塲所より取除くを見るに、往々卵粒中に數十頭の小蛆あるを見たり然れども深く感ずる所なかりき。其後昆蟲學大意を聞いてより爾來、其小蛆こそ大害蟲の卵粒內に寄生して斃す所の大益蟲なれば、常に農夫を警戒して充分に保護するに至らしめました◉又或る警官は驅除勵行の際には、折々惡意を以て又は無意にて、此蟲は益蟲なるや又は此蟲は何んと申す害蟲なるやを尋ねられし事あり、其時には一大閉口したるも、今日は幾分の返答も出來、又皈りて調査すべき手續きもあれば非常に心强くなりました。是も全く昆蟲學の一端を知りたるの効果と存じます◉或る警察署に於て駐在官をも集めて講話する際には、必ず一頭以上の昆蟲を携帶する事に致しあれば、熱心なるは一人數十頭に達し、是等を集むれば何時も數十種數百頭に達せり。其內螟蟲の卵塊あれば、浮塵子の各種あり稻蝨あれば螟蛉あり、枝尺蠖あれば桑葉蟲あり、瓢蟲あれば蜻蛉あり、實に有名なる害益蟲の多數ば直に集り來るを以て、特に携帶せし標本も餘り必要を感ぜず、各自の採集品に就て說明し得らるゝを以て受講者の感動は一層確實となるを常に見受けたり、中には昆蟲以外の物を携へ來るものあり。見るに是れ當時世間に八ヶ間敷云ふ所の毒麥なりき。故に昆蟲を主として研究するも、其智識は決して昆蟲界のみに止まらず、多方面に發達して意外なる好果を得るものなれば、深く留意して研究ありたし◉岐阜縣巡查敎習所に於ては、本月十日第百一期生、即ち昆蟲學の一科を加へられしより第四回目の授與式を擧行し、今村所長より十二名に修業証書を授與し、後例の通り紀念の撮影をなせりと云ふ。

◉森宗太郎氏の熱心遂に長官の知る所こなる　同氏は出征后軍務の餘暇には、昆蟲研究を無二の樂みとなし居られしことは、既に讀者の知られし所なるが、六月下旬〇〇聯隊全傳令に命しで思ひ〳〵の蠅採器を作らしめられたりと。時に森氏も傳令の一人として其の命に應じ、雀躍一の新考案

を呈せしかば、聯隊長殿一等軍醫殿等の知る處となり、家蠅に就て一塲の談話を命せられ大に面目を施し、目下軍醫部付となりて、露軍よりも五月蠅しとて、一般に嫌はれ居る蠅軍征討の研究に從事するに到れりと。何れ詳細報導の期あるべし。

◎昆蟲摸樣の紙屑籠　寺島昇氏より寄贈せられたる外國向紙屑籠は、蜻蛉の飛翔の樣、蟷螂が桔梗に止まりて得意の斧を振り翳す狀、又一方にはトノルマバッタオンブバッタ等を畫き、名こそ紙屑入なれども、竹の磨き骨を奇麗に編みて美術的に製したれば、如何なる室に据へ置くも見苦しき品にあらず。

昆蟲摸樣付紙屑籠の圖

◎第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習會　去る四月開會せし同會は、前號に於て其概況を報導せしが、今左に講習員の氏名を掲ぐると同時に附言し置くべきことは、講習員の殆ど半ば不破郡より入會されたる事なり。害蟲驅除の効績如何は、其源因種々あれども、監督其人を得ると得ざるとは、慥に之が一因たり。同郡は茲に見るあり、郡會の決議を經て幾分の費用を支出し、各町村役塲吏員、若くは有力者を一名つゝ、各町村より撰出して受講せしむることゝなれり。されば全員三十三名中、同郡より十五名の入會者ありて、何れも責任を重じ、一意專心夜を日につぎ研學せられ、修了後は各自害蟲驅除監督の任に當り、且つ害蟲驅除の實行を圖るを第一の目的として、昆蟲研究會等の組織も成りたりと聞く編者は此擧を喜ぶと共に、將來益鞏固なる發達を望む。

第八回岐阜縣短期害蟲驅除講習會々員名簿

| 組名 | 役名 | 郡名 | 村名 | 氏名 | 生年月 | 畧歷 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一組 | 級長 | 不破郡 | 垂井町 | 江崎九郎助 | 嘉永元年五月 | 元岐阜縣巡査 |
| | 組長 | 同 | 今須村 | 上村松次郎 | 明治五年三月 | 小學校補習科卒業、農業ニ從事 |
| | | 同 | 關ヶ原村 | 岩田孫七 | 同十三年一月 | 中學校二ヶ年修業、村役塲書記 |
| | | 同 | 荒崎村 | 兒玉小市 | 同二十年四月 | 中學校二ヶ年修業 |

| 組 | 役 | 郡 | 村 | 氏名 | 生年月 | 履歴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第二組 | 組長 | 不破郡 | 青墓村 | 山中松太郎 | 應應元年二月 | 元岐阜縣巡査、青墓村助役 |
| | | 同 | 合原村 | 栗田彌三郎 | 明治五年四月 | 小學校卒業、目下村會議員 |
| | | 同 | 靜里村 | 高橋爲藏 | 同廿一年一月 | 高等小學校卒業 |
| | | 同 | 綾里村 | 早野治作 | 同廿五年二月 | 高等小學校卒業、農事講習會修業 |
| 第三組 | 組長 | 不破郡 | 表佐村 | 臼井房之 | 慶應二年十一月 | 郡農事講習會修業 |
| | | 同 | 荒崎村 | 小島權次郎 | 明治九年十二月 | 郡害蟲驅除講習會修業 |
| | | 同 | 府中村 | 室武平 | 同十五年八月 | 高等小學校卒業 |
| | | 稻葉郡 | 岩村 | 大野馨 | 同廿四年四月 | 高等小學校卒業 |
| 第四組 | 副級長 | 不破郡 | 宮代村 | 北河吾六 | 安政三年四月 | 宮代村役場書記 |
| | | 同 | 宇留生村 | 山田小作 | 明治三年十月 | 小學校卒業、村役場書記 |
| | 組長 | 同 | 岩手村 | 柏卯兵衛 | 同五年一月 | 高等小學校卒業 |
| | | 稻葉郡 | 北長森村 | 飯沼芳太郎 | 同廿三年四月 | 同 |
| 第五組 | 組長 | 安八郡 | 下宮村 | 野田稻司 | 明治十五年三月 | 大垣中學校二學期修業 |
| | | 加茂郡 | 富岡村 | 服部松三郎 | 同十八年六月 | 高等小學校卒業 |
| | | 稻葉郡 | 北長森村 | 林茂一 | 同廿四年五月 | 同 |
| | | 武儀郡 | 富野村 | 佐藤保一 | 同廿二年三月 | 同 |
| 第六組 | 組長 | 海津郡 | 大江村 | 安藤識太郎 | 明治十八年十月 | 短期昆蟲講習會修業、海津郡農會書記 |
| | | 武儀郡 | 小金田村 | 古川六治 | 同二十年十一月 | 高等小學校卒業、郡蠶業講習會修業 |
| | | 羽島郡 | 中屋村 | 松尾重右衛門 | 同二十一年一月 | 高等小學校卒業 |
| | | 惠那郡 | 長島町 | 磯村近藏 | 同十二年十二月 | 元村役場收入役 |
| 第七組 | 副級長 | 大野郡 | 丹生川村 | 田中利平 | 明治十年十二月 | 丹生川村役場書記 |
| | 組長 | 同 | 上中島村 | 水谷六郎 | 同十七年三月 | 高等小學校卒業、郡農事講習會修了 |
| | | 羽島郡 | 羽栗村 | 木島盛策 | 同十五年十月 | 高等小學校卒業 |
| | | 可兒郡 | 平牧村 | 奧村金次郎 | 同廿二年十月 | 同 |
| 第八組 | 組長 | 大野郡 | 丹生川村 | 田近慶英 | 明治十年七月 | 大野郡書記 |
| | | 可兒郡 | 伏見村 | 長谷川今男 | 同廿三年十一月 | 高等小學校卒業 |
| | | 武儀郡 | 大矢田村 | 後藤郡平 | 同十一年一月 | 高等小學校二ヶ年修業、郡農事講習會修了 |
| | | 郡上郡 | 北濃村 | 松山信次郎 | 同十三年二月 | 元小學校准教員 |
| | | 不破郡 | 赤阪町 | 青木三右衛門 | 同九年三月 | 元岐阜縣巡査、赤阪町役場書記 |

# 切抜通信 昆蟲雜報 第壹號

明治卅八年七月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

## 學說

### ●害蟲調査に就て

本縣農事試驗場東豫試驗場の技手矢野延能氏は本年「せじろうんか」の發生例年より早し或は大發生の兆候にあらずやとて調査並注意事項を寄送せられたれば左に揭げて當業者の參考に資す

本縣農事試驗場東豫分場附近に於ける本年「せじろうんか」成蟲の發現は六月十三日の夜分場豫察燈に來りし十頭を以て初めとす是れ近年になき早出なり此種は東豫分場三十四年以來の調査によれば三十五年六月十七八日の發現最も早く（當年第一化期の成蟲ならん）同下旬生育促進せられたる稻田及苗代田に集來產卵し七月上旬幼蟲多く同中旬下旬成蟲となり一般の稻田に分布產卵し七月下旬八月上旬夥多の幼蟲發生し此時始めて當業者の目に觸るゝに至るを發生多き年の例とす爾後稻收穫に至る迄の間絕へず繁殖をなし被害劇甚なる種類の一なり而して今一種の恐べき種なる「とびいろうんか」と共に寒氣に抵抗する力甚だ弱く盛暑の候天氣快晴夜間清涼なるを打續けば發育繁殖遲々として進まず之に反し陰鬱蒸熱夜間人をして煩悶せしむる如きを連續するときは特に繁殖急劇慘害を逞ふするものなれば今後若し不幸にして一朝前記後段の如き不良の氣候に遭遇することあらん乎初期の早出繁殖上に多大の影響を及ぼし或は大發生を見るに至らん然れば今より苗代及生育早き本田に就き其成長產卵幼蟲の存在に注意し防除の機を觀察するは敢て無用のことにあらざるべし（卵は葉鞘又は中筋の側面の外皮に縱裂孔を存じたる內部組織中にあり此縱裂孔は肉眼にては褐色短縱線をなせり）（愛媛新報）

## 講話

### ●効驗ある害蟲驅除法

（月田農務局技師の談）

明治二十九年害蟲驅除法施行以來實際効驗の著しかりし二三の方法を擧ぐれば下の如くである

▲新智識者の利用　町村內の若手で有力なる者を勸誘して成る可く短期の農事講習會等に入會せしめて農事上の新智識を與へ而して此等新智識者を害蟲驅除の實施委員などに推薦したる地方は實に意外の好成績を擧げつゝある▲警察官の助力　駐在巡査より與へらるゝ注意は害蟲驅除に取つて侮るべからざる利益を現はして居る地方に依ては警官を短期講習會に參加せしめます〳〵其の實行を期して居るが此等も是非普及させたいものである▲學校兒童の熱心　學校兒童を害蟲驅除に使役することに就ては一時種々の議論もあつたが教員を短期講習に加入せしめたる上兒童を適當の時間に使役したる地方に於ては着々として其の効を奏したのである現に或る地方の農會の如きは賞を懸けて學童に親蟲や卵塊を驅除採取せしめたる爲め益蟲と害蟲とに對する觀念自ら進歩し來り蜻蛉の如き益蟲を愛護して有害なる蝶類を驅除するやうになつたのだ▲地方長官の强硬　古澤滋氏が山口縣知事であつた時は思ひ切つて害蟲驅除に熱中せられ萬一これに怠慢であつたら免職させかれまじき見幕で部下を督勵

した爲め各郡長何れも戰々兢々として其命令に精勵してあつたこれ位にすると驅除の効驗も一ト際著くなるからこゝ當分の間は府縣知事の强硬主義も矢張必要のことであらうと思ふ（山梨日日新聞）

●山の手の蠅と乘馬

馬の居る所には蠅、蠅の居る處には馬と云ふ風に馬と蠅とは離るへからざる關係になつて居るが牛込赤坂四ツ谷麻布邊に年一年と蠅の增して來ると云ふのも矢張り右の次第からである大將中將などになると屋敷も廣いから二頭三頭の馬が飼はれてあつても世間に蠅の迷惑をかけるほどではないが吾れ〳〵同樣の並み住ひの軍人が其の狹ま苦るしい屋敷の中に廐を構へて乘馬を置くことは山の手の蠅の多くなるのと大關係を持つて居るのでつまり山の手地方の蠅の三四分通りは是等軍人の乘馬に依つて發生されると云つて決して過言であるまいと思はれる、扨て其の蠅はどんな害をするかといはゞたゞ五月蠅のみでなく或は食物により或は腫物に觸れるなどして恐る可き病毒を媒介するものであるから、ならうことなら一匹も居ないやうに退治したい位であるが其れには旣に發生したのを採ると云ふよりも發生しない豫防法を實行するのが大切である、シテ見ると例の軍人の乘馬は銘々の狹い屋敷内に飼つて置くことは衞生上忽諸に看過す可き小問題でなからうと思はれるから市内なり市外なりの何れかへ三四個所の乘馬合飼所を作り、馬丁をして朝率き出し晩率き入らしめるやうにさせたなら軍人本人に取つて格別な不自由もなくして、公衆衞生に向つて一大利益を與へる譯になるから、これは棄て置かずに調查して貰ひたいものであると某理學博士は物語られた（東京市、報知新聞）

## 雜報

●小學兒童螟蟲驅除比較　防府町立松崎尋常高等小學校及び華浦尋常高等小學校にては各生徒をして苗代田に於ける螟蟲驅除を奬勵しつゝありて各兒童等も熱心之が捕獲に從事せるが今日までの比較に依れば松崎小學校兒童の捕獲數は華浦小學校生徒の捕獲に倍せる趣きなるが是は畢竟するに松崎小學校側の田面廣きと螟蟲の發生割合に多きに依るものならんと云ふ（長岡日日新聞）

●神流村害蟲驅除　多野郡神流村にては小學生徒をして六月二十六日より二十九日まで害蟲驅除を行はしめ螟蛾四千百匹、螟卵三百四十七、雜蟲十匹を捕獲したり、尤も同村附近は比較的蟲害少しと（上州新報）

●岩船郡の害蟲驅除　目下養蠶並に田植の季節にして農家一般多忙の時期なるより蕈鳰搔拂の如き兎角等閑に流るゝ虞あるを以て同郡役所にては特に郡視學を各町村へ派し學校生徒をして放課後之を實行せしむることとし學校長に協商せしめたる結果岩船町にては六月五日より之を實行したるに其成績良好なりしよし（新潟縣、東北日報）

●兒童の害蟲驅除　兒湯郡都於郡尋常高等小學生徒の害蟲を驅除したるは左記の如くにして皆村役場に買上げしと云ふ螟蟲蛾四萬六千二十八同卵二萬千九百十三（宮崎縣日州）

●害蟲驅除の訓令　山邊郡にては本年稻苗代の浮塵子及び螟蛾の發生は比較的少なきも此の機に乘じて害蟲の全滅を圖るは最も急務なれば共同驅除を行ふべしとの訓示を發したりといふ（奈良新聞）

●神崎驅蟲狀況　神崎郡八幡村立高等小學校にては頃日職員は生徒を督して各字苗代の害蟲驅除を行ひ捕獲害蟲は一々村役

場に報告なし居れり五峰村各字にても害蟲驅除勵行中なるが六月八日は郡役所より孕石郡書記出張し小暮巡査部長各字區長農事係り役場員立會にて石油驅除を行ひ効果良好なりしと（近江新報）

●市害蟲驅除　岐阜市にては六月十八日正午迄に各苗代田に作人の氏名を記したる立札をなさしめ各農民には捕蟲器を作らしめ午後一時より驅除を施行せしめ縣衙市役所、警察官吏、立會の上監督し廿一、廿四、廿七日も晴雨を論ぜず午後一時より驅除を行ひ同樣監督をなす筈に付若し同日螟蟲の採卵又は捕蟲器を以て其他の害蟲を驅除する事を怠る者は法令規定により斟酌なく處する筈なりと（美濃新聞）

●害蟲驅除豫防　後月郡役所并原警察署に於ては本縣令に依る第二回螟蟲驅除豫防苗代田に於ける害蟲網羅捕獲を勵行せしめんとて六月十日迄に郡內各町村に郡書記、署員を派して町村主務吏員駐在所巡査と共力して實地に就き其勵行を監督したり（岡山縣、山陽新報）

●杉要の害蟲驅除成績　信夫郡杉妻村にては六月五日より同十九日迄十四日間役場員駐在巡查及び學校長等は當業者並に學校生徒等を指導して苗代田に於ける害蟲驅除を實行したる結果螟蛾二萬〇六百九十九卵塊三千百九十七を採取したりと（福島縣福島新聞）

●害蟲驅除功勞者　授賞の議は縣廳より各郡長に內申を求めたる處人數極めて多くして更に再申を促したり彌不日行賞の沙汰ある可し（德島每日新聞）

●害蟲驅除獎勵金交附　既記本縣農會害蟲驅除獎勵規程に依り各郡市へ交附すべき獎勵金は六月六日農會より各郡市へ交附たしるが郡市農會にては更に町村農會の驅除豫防の成績に依りて補助金額を別ち町村に配附する由なり（三重新聞）

●害蟲驅除懸賞決議　犬上郡豐鄉村民は農事上には熱心なる村落なるか昨年害蟲驅除の際懸賞法を以て實行せし結果非常の好成績を顯はしたるにより北川村長は本年も同樣の法を設け驅除せんとの考案を持出し既に村農會にて害蟲驅除懸賞金百圓を決議したるが今回害蟲發生の模樣あるを以て六月廿七日より村長自ら草鞋懸けにて監督驅除に盡力なし居れりと（近江新聞）

●野崎村の害蟲　那須郡野崎村に於ては雜木林中に害蟲發生し面積五十餘町步の綠葉全く蠶食し盡し枝梢に殆むど殘葉なきに至り且近隣一百四十餘町步に蔓延せるに至りしが同村長は之れを縣廳に報告せしに依り笛木技手は出張調查を遂くるに何分手遲れとなりしが應急の驅除法を講究せる由なるが害蟲は尺蠖と稱する身長僅かに一寸程の昆蟲にして枝梢に止まりて生命を保てる者は總て變化の結果蛾と爲りて四方に散亂する者なれば今後の被害の思はるゝ者ありとの事也（下野日日新聞）

●南京蟲の驅除　步兵第七聯隊補充大隊にては廿七八年戰役後營舍內に南京蟲發生し每年此頃の時節に至れば蔓延して兵士を苦しむること少なからざるを例とす本年も今や日を逐ひ同蟲を跋扈跳梁甚しき由にて昨今頻りに驅除方を勵行し居ると云ふ（石川縣、北國新聞）

●苹果害蟲驅除の件　苹果に最も恐るべき介殼蟲は六月中旬より除々發生する季節となりたれば小樽區役所にては道廳の督勵に基き部內各栽培者に向け此際唧筒又は噴霧器を以て三十倍又は四十倍の石油乳劑を使用し之が驅除に努むべき旨注意を爲したるが其期限は六月十日より三十日までに三回以上乳劑を撒布すべく而して區役所にては道廳農工課より出張の吏員と共

驅除の成績を檢査する筈にて若し不充分と認むる時は更に乳劑の撒布を命ずべしと尙驅除に使用する輕便噴霧器はゴム付にて價格二圓以内のものある由にて區役所にては栽培者の便宜を計り購買の周旋を爲すべしと云ふ（小樽新聞）

●害蟲の發生　日高郡湯川村及藤田村には目下苗代へ「黑蝨翅蟲」發生し其被害の甚だしきものは苗枯死に至らしめたる箇所すくなからずして被害反別兩村通じて約三町歩なり目下驅除中なりと云ふ（紀伊毎日新聞）

●桃の蟲害　毎年俗稱象鼻蟲と云へるが桃の結實に害を與ふることなるが本年も亦該蟲發生し就中都窪郡茶屋町地方最も甚だしき模樣にて目下害蟲驅除豫防法を講じ居れり今其被害前後の經過を聞くに桃の結實するや果實の外部に密接して產卵し夫より莖を傷け時日の經過するに從ひ產卵したるものは孵化して果實の內部に蠶食して發育し之れと同時に莖は腐敗して地上に墜落し羽化したるものは漸次產卵し蔓延するものにて本年は到底滿足の收穫は得られまじと云へり（岡山縣、山陽新報）

●出水後の害蟲　昨今の雨大出水のため各地の害蟲は風に吹拂はれ雨に洗はれ餘程自然的驅除に効ありたるが農民は此場合何時も自然の驅除に安心して勵行を怠り他日俄に害蟲の發生を見て狼狽するの實態あり故に本年も此轍を踏んかさて縣廳は不日一般農民へ向け注意警戒を促すの計畫ありと（德島毎日新聞）

●害蟲の蔓延　近來基隆廳管內到る處の水田に泥蟲及び鐵甲龜と稱する二種の害蟲發生し次第に蔓延して作物を害すること鮮少ならざるにより農家にては孰れも其の驅除に苦心し居る由

記者曰く泥蟲鐵甲龜の驅除法に就ては六月七日及九日の紙上に詳記せり（臺灣日日新報）

●昆蟲飼育場の新設　太田海上郡長が勸業に熱心なることは世人の洽ねく知る所なるが昨年通常郡會の開かるゝに當り勸業費中更に昆蟲飼育研究補助費なる新費目を設け幾許の補助を與ふるの議は滿場の容るゝ所となり客月を以て知事は之れに認可を與へ郡長は直に準備を了し郡內の斯業熱心且つ經驗ある嚶鳴村の石毛丑太郎氏に囑託を爲し去る十五日實地場所の臨檢を爲したりといふ而して石毛氏は同郡嚶鳴村の人にして家世々農を業とし夙に之が改善に志し斯業の模範を作り農作物害益蟲に關するが如きは最も能く研究せられしが昨年岐阜縣の名和昆蟲研究所に學び引續き今回に及び斯業の爲に貢獻するもの尠なしとせずと云へば旁々以て好都合なるべし（千葉縣、新總房）

●害蟲研究會　中新川郡役所にては農作物害蟲の性狀經過及び被害の程度を研究し普く當業者に周知せしめて一層驅除の必要を自覺せしめる一方法として諸種害蟲の標本を蒐集し四日は郡役所、五日は上市町本誓寺六日、は五百石町了信寺、七日は東水橋町照蓮寺に於て郡內農事獎勵會員を召集して害蟲研究會を開く筈なるが當日は農事試驗場技手及富山縣第三部員各一名出張すといふ（富山縣北陸政報）

●益蟲　靜岡縣各部落に飴色寄生蜂、黃繭寄生蜂、麥俵、福俵などの益蟲に氣付ずして驅除するもの多しとは遺憾なり（中央新聞）

●害蟲驅除法違犯　吉敷郡大歲村字朝田下瀨長右衛門（五二）及び同村字矢原秦八十吉（四九）の兩名は去月十九日大久保郡長の發したる螟蟲驅除に關する郡令に違背し本月六日より十一日まで所有苗代田害蟲驅除豫防を爲さず告發中なりしが一昨日山口警察署に於て各々科料金參拾錢に處せらる（防長新聞）

## ◉岐阜縣昆蟲學會第七十八、九回月次會記事

同會談話の要項を左に照會せん。

第七十八回は六月三日午後一時より當名和昆蟲研究所内に開會せしが、當日は雨天にも係らず意外に盛會にして、午後一時開會し、先づ名和副會頭開會の辭を述べられ、引續き苗代田の害蟲驅除と題し、短冊形の苗代は唯だ害蟲驅除を行ふがためのみに作られしものにあらずして、此害蟲驅除は寧ろ第二の目的なり、されば農事改良上第一に之を實行すべきことより、其床の作り方三種を一々摸型を以て其効用を說かれ、第二席岐阜縣巡查教習所教官廣瀨壽太郎氏は、吾より見たる苗代田と題し、英國のデームス河に設けられたる沈澱裝置法より說き起して、現今我國に於ける苗代田の最も不完全なる事を嘆き、今後大に改良せざる可からざる事を戒め、且又授業生に對し害蟲驅除を勵行する上に於ては、害蟲の何物たるやを能く了知するは勿論、大に農民の信用を得るには、普通昆蟲學の必要なる事を實例を擧げて論述せられ、第三席授業生福田德太郎氏は從軍中の失敗談と題し、氏が出征中に於ける有樣を述べられ、第四席江西鑿州氏は宗敎と害蟲驅除との關係と題し、第一農民の迷信を打破し、容易く害蟲驅除を實行さするは即ち我々の任務なりとて、種々なる方面より解說を試み、後一同所内に培養せられたる西洋イチゴ、或は菓子を喫し同五時閉會したり◉第七十九回は本月一日同所に於て開會せしが、雨天にも係らず遠方よりの參會者尠なからず。午後二時開會の挨拶に次きて小竹浩氏は戰局の發展と害蟲驅除の關係と題し、先づ戰局の發展を述べ、昨今害蟲驅除の漸く行はるゝは、一般農民も時局に鑑る所ありし結果にして、此機を逸せず益々害蟲驅除を奬勵し、害蟲の恐るべきことを一般農民に普及する好時機なることを論じ、爾後の方針を述べられ、次に長期講習生野口治兵衛氏は、兒童敎育上に於ける玩具の價値を論じ昆蟲思想の養成に及ぶと題し、世界各國の玩具と敎育との關係を論じ且ッ昆蟲標本を兒童の玩具に應用しなば多大の價値あるならんとて、其の製作法の說明をせられたり。次に江西鑿州氏は昆蟲學者の目的と題し、頗る有益なる講話ありて午後五時閉會を告げたり。

## ◉水曜昆蟲談話會記事

當所内に於て每週水曜日夜間開會の同會談話の大要を左に照會せん。

名和梅吉氏は昆蟲採集法に就き詳細なる說明を與へ、後注意採集の必要なること、及伊吹山に於て一日採集に得たる昆蟲調查の結果より、彼の地の斯學研究上最も價値あることを說明せられ◉名和正氏は椎の花に集る昆蟲百六種に就て、倚玄參科の植物と昆蟲との關係を述べられ◉小竹浩氏は對馬產の天牛十數種及ハグロトンボとアオハダトンボとの簡單なる區別法、異節類の分類に就て詳細なる說明をせられ◉名和愛吉氏は本巢郡北方地方及重里村地方にて採集したる梨の害蟲シンクヒイ、ホシハマキ等の被害の情況を報告せられ◉谷貞子氏は山縣郡三田洞地方昆蟲採集狀況、目下鳴々せるハルゼミ。クビキリバツタ、ギフヤマスヾ、ケラ等に就ての研究談、倚玩弄用昆蟲に就て最も興味ある方法を照會せられたり◉野田稻司氏はオホツマグロヨコバイとヒゲナガバチとの研究談、及本巢郡地方紫英の害蟲視察の摸樣報告、昆蟲の生存競爭と防禦本能觀察談、苗代田害益蟲調查報告、稻の螟蟲研究等を述べられ◉石田和三郎氏は益田郡に於ける心蟲驅除の實驗談◉野口次兵衛氏は昆蟲採集中の所感、及尺蠖の保護色と擬態に就て實地觀察談、四、五の二ヶ月間に採集せし擬象二十餘種に就て大体の構造及分類、カブラハバチ及尺蠖の飼育成蹟報告。眞福寺地方の苗代田害蟲調查等を報告せられたり因に本會は凡て實物若しくは放大圖を以て研究したる結果を最も詳細に報告するを以て興味多く、加ふるに名和所長は每會必ず出席せられて評訂せらるゝはは勿論、隨時有益なる談話ありて、頗る有益なる會なり。

## ◉大橋由太郎氏の昆蟲調查

同氏は第一回岐阜縣長期害蟲驅除講習修了後熱心に斯學を研究し居られしが、今回獨力琉球、臺灣に於ける昆蟲を調查せんとて、不日出發さるゝ由。

# 昆蟲世界

明治三十八年七月十五日發行　第九卷第九拾五號　每月一回十五日發行


## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題(但季は夏の事)　魯嶽君選

▲短歌　昆蟲亂題(但季は夏の事)　潮音君選

▲俳句　衣魚十句(七月五日占切)　三川君選

△占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園內名和昆蟲研究所

●衣魚(シミ)は三、四の小形蟲にして体細長く銀白色を帶べり一名きらゝむしともいふは雲母の光澤を有する故ならん古きは衣類紙類を害す形又魚に似たるを以て漢名衣魚と書す腹端には三個の鞭狀の尾樣物あり

## ◉武田工學士考案　圖案用昆蟲標本廣告

此圖案用昆蟲標本は京都高等工藝學校教授工學士武田吾一氏の考案によりしものにて蟲の種類により大中小の三種に分ち桐箱に表裏の二面を硝子となし其中に適宜の昆蟲を固定したるものなり故に表面より見るには勿論腹面を見んとするにも蟲を取出す要なければ直接標本に手を觸れざるを以てこれを損することも少なし而して各種學校の實物寫生並に教授用標本として適當なるのみならず工藝上の參考に資すべき點多ければ圖案用として殊に工藝學校等には必要欠くべからざる好標本なり

名和昆蟲研究所

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市公園內名和昆蟲研究所內に於て開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第八十回月次會(八月五日)　第八十一回月次會(九月二日)　第八十二回月次會(十月七日)　第八十三回月次會(十一月四日)　第八十四回月次會(十二月二日)

⋮ 市境界　‖ 案內道　｜ 市道　イ 元位置　ロ 陳列館　ハ 縣廳　ニ 中學校

ホ 病院　ヘ 郵便局　ト 西別院　チ 研究所　リ 長良川　ヌ 金華山　ル 停車場

## ◉名和昆蟲研究所案內

當昆蟲研究所は從來上圖の如く(イ)の位置にありしが今回當市公園內即ち(チ)の位置に移轉せり又常設の昆蟲標本陳列館(五間に十八間)は從前の通り岐阜縣物產館構內にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

(注意)　本誌は總て前金に非ざれば發送せず　◉爲替拂渡局は岐阜郵便局　◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾錢とす　三十行以上壹行に付き金拾貳錢


明治三十八年七月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二（岐阜市公園內）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戶　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎





明治三十年九月十日內務省許可

西濃印刷株式會社印刷

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

**YASUSHI NAWA**

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL. IX.] AUGUST. 15TH, 1905. [No. 8.

# 昆蟲世界

第九卷第八册　明治三十八年八月十五日發行　第九拾六號

(每月一回十五日發行)

目次　(禁轉載)

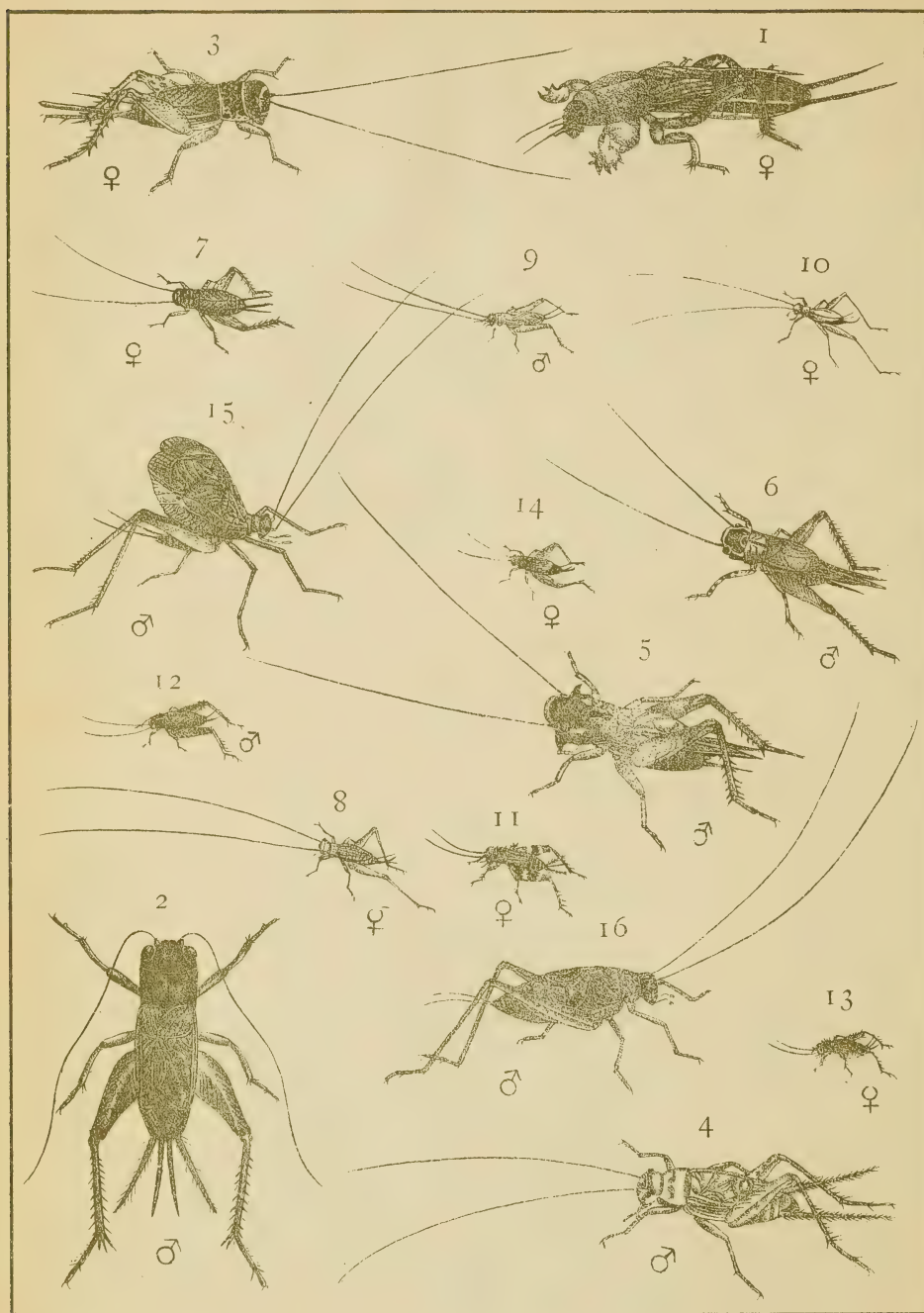


名和昆蟲研究所發行

# 特別廣告

本誌は去る明治三十年九月十五日を以て第一號を發刊し、爾來種々なる艱難辛苦の間に成長して漸く本月に至り、號を重ぬる九十六、年を經る茲に滿八年、其間一回の休刊なく、年は一年と改良を加へ愛讀者諸君の厚意に醻んとするも、素と微力にして到底滿足を與ふる能はざるを遺憾とす。幸に愛讀諸君の厚意により、漸々本號に達したるは當所々員一同の滿足する所なり。今や征露の時局も愈々發展したると共に、害蟲軍の逐討も愈々急激に發展せしめざるべからず。されば本誌の特色とする作戰計畫を運用實行して、蟲軍の壓迫勦滅を圖るべきなり。故に記者は益進んで特別なる作戰方法、即秘密の方法を續々誌上に掲載して愛讀者諸君の參考に供せんとす。且本年十二月に於て第一百號に達して全く第一世期を終り、明年一月發刊の百一號即ち第二世期の初號なれば、此期に際し大に祝意を表せんとす。其方法に至りては、今より饒々敷云ふの要なければ、只讀者の想像に任せんのみ。

明治三十八年八月

名和昆蟲研究所

1 ケラ
2 エンマコホロギ
3 コホロギ
4 ウスイロコホロギ
5 ミツカドコホロギ
6 オカメコホロギ
7 ヒメコホロギ
8 クサヒバリ
9 キンヒバリ
10 イブキスヾ
11 マダラスヾ
12 ヤマトスヾ
13 ヒメクマスヾ
14 ヒゲシロスヾ
15 スヾムシ
16 マツムシ

# 論說

## ◎害蟲驅除には簡單有効なる器械を擇ぶべし

害蟲驅除豫防の完全を圖るには、其蟲の習性經過を究むるは勿論なるも、又一面には適當なる器械の力に賴らざるべからず。而して、器具の適否は、仕事の遲速、驅除の完否に著しき差異を生ずれば、勉めて有効なる器具を擇ぶべしと雖も、如何に有効なればとて、其價の甚だ廉ならざるものに至りては、一般農家に使用せしむる能はざるや論を俟たず。之れ當所が害蟲驅除豫防方針の一つとして、常に簡單有効なる器械と、確實廉價なる藥品を擇ぶべしと唱導する所以なり。然るに簡單なる器具は、價の廉なるを以て其効少なきものと誤認し、强て複雜不廉の器具を用ひんとするは大なる誤なり。夫れ器具の精粗繁簡は、目的により各異なりと雖も、害蟲驅除用の如き、簡單なりとて必しも効少なきものにあらず、複雜なりとて其効多しと云ふべからず。且つ複雜なる器械は、價の廉ならざるは自然の勢にして、其使用法の困難なる、或は破損し易く、或は修理に容易ならざる等の憂ひあれば、到底一般農家に普及せしむること能はざるべし。假令比較的有効なるものも、普く供用せざれば、協同一致の最も必要なる害蟲驅除には、決して多大の効果を望むべからず。況や複雜不廉の器械も、輕便廉價なるものに劣ることあるに於てをや。然るに世間往々其効力の如何を省みず、複雜なる器具を賞揚し、或は改良に改良を加へ

たる簡單有効なる器械も、更に改造して無効に陷らしむることあるは實に遺憾なり。仮へば彼の捕蟲器の如き、鉄葉の柄は樫の棒に替へ、其竹の輪を電信線に變じ、大に重量を増して使用に堪へざらしめ、或は莖切鎌の「バネ」は不必要なりとて之を取り去り、却て隣莖を傷くる等は、皆實地經驗の智識に乏しきより出でたる結果にして、當所常設の昆蟲陳列舘に蒐集したる、各種の驅除器械を看覽するもの丶多くは、複雑なる器械を見れば之れを賞揚し、簡單なるものに至りては一向に目を觸れざるを見ても、如何に複雑なる器械が、効力の如何にかゝはらず、一般に重要視せらるゝかを証するに足れり。又一面には、只價の厘毛たりとも廉なるものを以て滿足し、更に矩合の良否を考へざるは、其實未だ能く器械の味を知得せざる反響にして、寧ろ憫むべきなり。

抑も害蟲驅除器械は、農家の重要なる一武器にして、殆んど兵士の銃劍と等しきものなれば、之等の武器の普く備らざる間は、何んぞ害蟲軍を征服するを得んや。されば當局者たるもの、徒に外見の如何に心醉せず、充分實驗の上、簡單にして有効、且廉なる器械を奬勵して、普く農家に供用せしめ、以て驅除の偉効を奏せられんことを希望す。

# 學説

## ◎紫雲英の改良と昆蟲との關係（第七版圖參看）

名和昆蟲研究所長　名和靖

紫雲英は本邦に於ける緑肥中最も稱揚せらるゝものにして、又其の栽培の最も廣き事は誰人も能く知る

所なり。而して美濃は其種子の特產地として夙に其名高きことは、第五回內國勸業博覽會審査報告によるも明なり。是れ全く美濃國本巣郡を中心とし、近傍兩三郡の或る部分にあるのみにして、年々種子の輸出は十數萬圓に達し、尙常に不足を告ぐるのみなれば、到底良種子をして希望者に滿足せしむること能はざるは實に遺憾とする所なり。第一年々種子に增減を來して一定せざるは、全く蚜蟲被害の程度に依りて左右せらるゝを常とす。故に蚜蟲驅除の必要を感じ、極力試驗の結果石油乳劑を以て充分に効を奏するの見込あれば、當業者の盡力次第にて大に防除し得らるゝ事と信ぜり。第二紫雲英の花粉媒助如何は、種子の良否增減の別るゝ所にして、目下種々の昆蟲に依りて媒助せらるゝも、就中多きものは鬚長蜂なる事を知る。即ち該蟲の有無多少は、紫雲英の結實に大關係を來すや明白なり。故に紫雲英栽培家たるものは常に注意して、該蟲繁殖の道を講ずるは目下の急務なりと信ず。第七版圖は即紫雲英と鬚長蜂との關係を示したるものにして、圖中の(イ)は鬚長蜂の雄(ロ)は其雌なり。(ハ)は雌の將に紫雲英の花中に頭部を挿入して花蜜を舐め、其際自然に花粉媒助の行はるゝ有樣を示し、(ト)は土手の乾燥したる土中に、鬚長蜂の無數に孔を穿ちて子孫を繁殖せしむる實況、(チ)は孔の底に花粉、花蜜を貯へて其內に一卵を產附する塲所なり。(ニ)は其卵より孵化したる幼蟲の老熟したるもの、(ホ)は幼蟲の蛹化する爲めに造りたる繭なり。而して鬚長蜂(Habropoda, sp?.)の雄蟲は体長四分內外、翅張七分、頭部黑く、觸角亦黑くして鞭狀をなし、複眼長卵形にして、三個の單眼は後頭部に殆んど一横列をなし、琥珀色を帶ぶ、顏面は黃色なり。胸部は圓くして黃褐若しくは褐色の長軟毛を密生し、翅は透明にして稍暗色を帶び、圍繞したる副前緣胞は三個を有す。腹部は黑色にして、殆んど圓形なれども腹端尖り、數條の灰白色の軟毛帶を有す。肢は三對共に細毛を有す。雌は体長四分五厘、翅張八分、觸角短かくし

て一分五厘、腹部肥大して褐色と灰白色毛とを以て交互に横帯をなし、後肢は長軟毛を密生し殊に太し此種に酷似したるコヒゲナガバチ(Eucera longicornis)は一見區別し難きも、前翅の圍繞したる副前縁胞は二個なるを以て、區別し得べし。而して此鬚長蜂の强敵として、最も恐るべきものはモンキバチにして、(へ)に示したるものなり。此ものは常に鬚長蜂の穿ちたる孔中に出入し、鬚長蜂に寄生して其繁殖を防害すること實に甚だしきものなり。此モンキバチ(Nomada japonica, Smith.)の雄は体長三分五厘、翅張六分五厘、頭部黑色にして觸角黑褐若しくは褐色を帶び、複眼長卵形をなし、三個の單眼は後頭部に存してヘ字形をなし、胸部黑色にして背面の中央に二個の稍凸起したる赤褐紋あり。翅は透明にして稍や暗色を帶び、前翅の外縁部は稍や濃色なり。腹部は黑褐と赤褐若しくは黃色とを以て横帯を形成し第二節には二個の大なる黃紋あり、之れモンキバチの稱ある所以なり。肢は三對共に赤褐なれども、後肢の脛節は黑味を帶びたるあり。雌は雄に比すれば形の稍や大なると、觸角短きとの差あるのみ。

紫雲英と鬚長蜂とは實に密接の關係を有し、之れが花粉媒助の功勞者としては、第一に鬚長蜂を推さゞるべからず。然るに往々如上モンキバチの如き敵蟲ありて、意外の妨碍をうくる事あるを以て、是れのみに依賴すべきものにあらざれば、尙他に好適の方法を求めざるべからず。他の方法とは即ち蜜蜂の飼育を以て之れを補ふの最良手段ならんと信ず。現今諸方に養蜂の業起り、最早副產業として養蜂の利益を悟るに至りたるは大に喜ぶべきことなり、是れ只に養蜂としてのみの利益に止まらず、一面紫雲英の種子に利益を及ぼし、所謂一擧兩得と云ふべきものなれば、特に紫雲英の特產地に於ては、増々該業の發達せんことを希望して止まざるなり。

# ◎桑の泡吹蟲に就て

静岡縣　岡田忠男

桑樹の害蟲夥多ありて地方によりて異るは、他の農作物の害蟲多々ありて地方によりて異ると擇ぶ所なし。本縣に於ける桑樹の害蟲多種あれども、殊に地方を限りて發生するを認むるは此泡吹蟲にして、縣下或地方を限りて發生するもの丶如し。此害蟲に就ては余り他の地方に發生せざるものなるか、或は發生するも被害僅少なるがためか、未だ本誌に掲載せられざるも、余の見る所によれば、樹液を吸收する所の一害蟲と認むるを以て聊か卑見を述べんとす。抑々泡吹蟲に付ては、未だ記載せられたるもの少く去る三十六年松村博士が、獨文を以て發表せられたるもの丶外未だ聞かざるなり。其際松村博士の請求により、余は本縣產の泡吹蟲(當時採集しありたるもの)九種を送りたるに其後悉皆學名を付せられて通報に接しぬ。其內Euclovia okadae n. sp なる新屬名は、名譽なる、余の姓を冠せらる丶に至れり。此名譽と共に余は益泡吹蟲を研究せんと欲する念起ると同時に、先輩學者の此泡吹蟲に關する發表を待ちつ丶あるも、未だ此蟲に關する報告を得ざるは、余の如き後進者の大に遺憾とする所なり。

桑の泡吹蟲に付ての研究は、昨夏、縣下御殿場に於て昆蟲講習會を開きし際、談桑樹の害蟲より泡吹蟲に及ぶも、余は未だ此蟲に付ての研究なければ、爾來研究せんことを約す。故に本年一月以降、一研究事項として、此泡吹蟲の如何なるものなるやを研究するに到りたる次第なり。

學名と方言　桑の泡吹蟲は、有吻目同翅類アワフキヨコバヒ科に屬するものにして、先年余が松村博士の鑑定を乞ひたるもの丶內、Aphropora intermedia uhl. と云へる學名を有する種に該當せり。余は桑に寄生したるを以て、特に桑のアワフキムシの稱を附したるものにして、方言をツバキムシ(御殿場地方の方言)と稱し居れり。是れ人の涎液に類似したるを以てならん。

**本縣に於ける該蟲の分布**　本年調査したる處によれば、此蟲は春期氣候概して低温なる地方にして、且つ濕氣を帶ぶるの地方に多く是れを見るのみにして、本縣南部の海岸に瀕し、温暖なるの地方には未だ曾て見ざるなり。故に本縣には富士山麓、天城山麓の桑園に此蟲を見る而已なり。而して此蟲の捿息する桑園は、多く陰所又は樹間の桑樹にして、他の日光の直射充分なる桑園には寄生せざるもの丶如し。

クワノアハフキムシの圖

（イ）は桑樹に幼蟲寄生の狀
（ロ）クワノアハフキムシの幼蟲放大圖
（ハ）其成蟲放大圖

**發生の時期及加害の狀態**　毎年五月下旬頃より、桑葉の發芽と同時に枝と芽葉との間に泡を吹き初め、次第に膨大するに至れば幼蟲は他に轉じ、一樹數箇所に泡沫を見る、六月中旬より下旬に至れば泡沫中に住したる幼蟲は他に轉じ、腹端を固着して脫皮し、遂に成蟲となる。此蟲は、昨年よりの調査によれば年一回の發生するもの丶如し。而して幼蟲の時代に於て、口吻を樹皮中に挿入して加害するを以て、其寄生を受けたる芽は生長惡しく、葉は殆んど開展せざるに至る。成蟲も多少加害すれども、或る時には他の草木に移轉し加害するもの丶如し。故に主なる加害は幼蟲の時代にありとす。

**成蟲**　雌雄共体長四分内外にして同形同大なり、色灰白色にして、背上灰黑の二斜線八字の如く、尙ほ背上後半は山形をなして灰黑色を呈す。頭は三角形にして複眼は黑褐色を呈し、兩眼の中央に紅色なる二個の單眼を存す。前中兩脚は各所に黑點を顯はし、後脚は唯爪の部分のみ黑色を呈す。口吻は腹

面に付着し、三節よりなりて末節は少しく黒點を有し且太し。胸腹の二部は共に茶褐色を呈し、雌は腹面の中央より産卵器を突出せり。此雌蟲は産卵器を以て桑樹に産卵するもの丶如きも、未だ其箇所を認めず。以上述べたるは余が見たる泡吹蟲の顛末にして、桑樹の害蟲中又一つを加へたるを以て、茲に照會したる次第なり。尚ほ此蟲の幼蟲には、一種の蛆寄生し居りしを以て、試育の結果一種の寄生蠅を得たるも、今茲には記さず。

## ◎藍の髓蟲驅除豫防法

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

常に藍作物に發生して害を加ふる蟲類數多あり、就中藍の莖中に蝕入加害する所の髓蟲、象鼻蟲、及び嫩芽古葉に寄棲し、そが液汁を吸收して萎凋せしむる所の蚜蟲類は重なる害敵とす。之れ恰も稻作加害蟲種中、螟蟲、浮塵子及び苞蟲を三大害蟲として一般に認定せらる丶如く、前掲三種類に屬する蟲種は實に藍作に於ける三大害蟲と認定すべきものなり。時期恰も右三大害敵の發生期に際し居れば、其一たる髓蟲に就き習性、經過幷に驅除豫防法に關する梗概を記述し、以て大方諸彥の參考に資せんと欲す。素より經驗に乏しければ、足らざる所は識者の垂敎を期待せん。

元來藍の莖中に蝕入加害する所の髓蟲には、余の經驗に由れば二種類あり。去れど今此處に記さんとする種は、最も普通に發生するものにて、通稱アイノズヰムシと云ひ、そが成蟲をキサザナミウスバと稱するものなり。成蟲即ち蛾は、其名の如く全躰黃褐色を呈し、翅上に暗褐色の波狀線を保持し、加ふるに他の小蛾類に屬するものよりも、外觀上餘程薄き翅を有せり。躰長幷に翅の擴張は、雌雄に依り多少の差異あれども、普通躰の長さ四分内外にて、翅の擴張は八分乃至九分餘を算するものなり。特に

前翅上に三個、後翅上に一個の波狀線を有するを以て他種と區別し得べし。年々五月の頃より發生し、晝間は藍の葉間、或は其近傍にある雜草繁茂の塲所に潜伏し、夕景より圃間を飛揚し、交尾の後藍の莖葉に卵子を産附するものなり。一母蛾の産する卵子は數多なりと雖も、一所に産附せずして數ケ所に離産するを常とす。卵子は扁平にして、産下せられし當時は殆んど白色を呈すれども、漸次孵化期に近くに從ひ、變色して黑褐色を呈するに到れり。而して産卵後孵化迄には約壹週日乃至拾餘日を要す。幼蟲は孵化の初め僅かに四、五厘にて灰白色を呈し、頭部のみは黑褐を色彩し、全躰には幽微なる細毛を存せり。其最初の蝕入個所は軟弱なる嫩芽部にして、漸次生育するに供ひ下部に蝕下し、終に枯死せしむるに到る、而して被害莖に存ずる葉は自然黑變するものなれば、圃間通行の際には比較的遠距離の所より該蟲の發生如何を認知し得べし。

イ　ロ

アヰノズイムシ加害の圖
(イ)は被害の狀
(ロ)はアヰノズイムシ(自然大)

亦被害の甚しき藍莖は上部にて曲折するものにて、仔細に被害莖を檢する時は莖側に小孔を有し、夫より脫糞の漏出せれらて、吐出せし絹絲に纏着するを見らるべし。其曲折の狀、幷に充分老熟せし幼蟲の形狀は上圖に示すが如し。即ち幼蟲の老熟せしものは、躰長八九分內外、幅一分許にて、背面と腹面とは色澤を異にせり。頭部幷に第一節の背板は黑褐色を呈し、背面は一体に淡褐色に褐色の縱條を存し、腹面は淡黃色を現せり。而して每關節上には幽微なる六個の圓點を有し、夫より細毛を生ず、幼蟲の蛹化するや、被害莖內或は葉間に於て、薄繭を結びて蛹化するを常とす。蛹は四分內外、褐色を呈し、背部は稍々濃色なり。蛹化後一週日內外を經て羽化し、産卵加害すると前述の如し。

藍の髓蟲に關する梗概は、如上記述の有樣にて、五月以來秋期迄には、約三回の變化をなし加害するものなれば、秋季收穫期に達する頃には大ひに多數を增し來り、被害の程度大なるや明けし、最も八、九月の頃に於ては、一時に卵子、幼蟲、蛹及び成蟲等を發見し得るとあり。之れ全く該蟲の發生不揃にして、一定し居らざるの結果に外ならず。而して秋季に發生せし幼蟲は、蛹化せずして其儘適所を選みて蝕入し、以て越年するを常とす。今左に該蟲の驅除豫防法の一斑を示さん。

第一捕蛾。　越年せし幼蟲は、五月の頃に到り蛹化し、續ひて成蟲即ち蛾化するものなれば、藍の苗床に生育する頃より常に注意を怠らず、圃間を巡視し該蛾を發見次第捕殺すべし。最も該蛾の多數は、本田へ移植後に現出するものなれば、苗床時代に於ける時よりも一層注意を加へて、本田の捕蛾に勉むべし。該蛾誘殺の爲め誘蛾燈を使用するものあれども、奏効顯著ならず。

第二被害莖摘採　既に藍莖内に幼蟲の蝕入せしものは驅殺し難ければ、被害莖を摘採して、莖内にある幼蟲を潰殺し、以て後害を防ぐべし。且蛹は葉間の薄繭中にあるものなれば、共に潰殺に勉むべし。

第三他植物に對する注意　前記の方法に依り驅防に勉むると雖も、該蟲の發生する他植物、假令ば大小豆を始め、自然生の藍と同科に屬する植物に注意して、共に驅防を量らざる時は其効少なし。特に自然生の「イヌタデ」「オホイヌタデ」等に發生すれば、藍作地の近傍に於ては該植物に注意し、以て驅殺に勉むるは最も肝要の事とす。

## ◎滿州家蠅に就て

滿州某軍於陣中　名和昆蟲研究所助手　森　宗太郎

編者曰く同氏が滿州某軍陣中に於て家蠅驅除の研究を命ぜられたることは既に本誌前號に於て照會し置きしが同氏は爾來鋭意研鑽遂に意見を草して復命せられしかばそを印刷に付し某師團の各隊に頒たれたる由がなる其原稿なりとて左の一篇を同氏より贈られたれば茲に掲ぐることゝなしぬ。

明治三十八年六月二十七日、某師團軍醫部の命を受け、同日より七月十三日迄、滿州家蠅に就て研究せ

し顚末を畧記し、以て復命せんとす。凡そ動物は共同棲息をなすものなるか故に、生存上交互に利害相償ふは自然の道理なり。例之蟻の蚜蟲に集るや、蚜蟲は之れに與ふるに甘露（排泄物）を以てす、故に蟻は自ら蚜蟲を保護し、昆蟲の花に集まり其甘液を吸ふや、其報酬として花粉の媒介をなして結實せしむる等、比々皆然らざるはなし。獨り蠅は、他動物の排泄物、又は常に堆溜し易き塵芥汚物を嗜好し、之を食して生存繁殖するの習性を有するものにして自ら他の動物の澤を受けつヽ毫も之が報酬を知らざるのみならず、尚も吾人人類の生存上に迄で害を及ぼし、甚だしきは吾人の最も恐るべき傳染病の媒介を爲すは醫學上確認せらるヽ所、蠅族習性の惡むべく且恐るべきは論を俟たず。居常吾人の身邊を飛翔し殊に吾人の飲食物上に集散するか如きは斷して許すべからず。古人の所謂（五月蠅）とは言寔に宜なり須く之が驅除の方法を講し、全然蠅族の撲滅を謀らざるべからざるなり。然り而して其方法を講するの前に於て蠅の習性經過を知るは無用のことにあらざるを以て、其大要を述べ次て驅除法に移らんとす。

蠅は動物學上節肢動物昆蟲綱双翅目中の一種屬（滿州家蠅は其家蠅屬）にして、成蟲は淡黑色、雌雄多少の差異あれども背に黑色の縦線あり、頭部は黑色にして茶褐色、二個の複眼及び觸角を供ふ、胸部には一對の發達せる上翅と、二個の小形鱗片狀の下翅、及三對の肢を供へ、各肢共に短細毛を密生し、殊に跗節に多くして尚吸盤を供ふる等、惡疫の一大媒介に適し、而して複眼は比較的雌は小形に、雄は大形にして、雌雄淘汰の原則を茲に現し吾人をして雌雄の區別を容易ならしむ。兩性即ち雌雄とも雜食すれども、殊に腐敗液体を嗜好す、卵巣の稍生熟するに至れば、馬糞塵芥等に集り、間隙に入りて産附せんとするや、生殖器を押入して一所に長楕圓形乳白色の卵を約四、五百粒つヽ産附す。若し産卵しある馬糞を顚覆すれば、巨萬の卵塊、恰も石灰を撒布せしが如し。産卵の時刻は概ね午前九、十時より、午後四時

頭に至て止むを普通とす、其卵子三、四日を經過すれば、幼蟲は卵殼內にて生熟し、前後に活動して卵殼は破裂し、出て食すること四、五日にして一眠をなし、二、三、四眠と普通昆蟲の如く眠次を經て、稍乾燥せる地下二三寸の所に蛹化す。其密集せる所にありては、一所に幾升の多きを見、吾人をして驚くの外なからしむるものあり。此蛹約四、五日經過すれば羽化す。又越年は蛹にて、多くは家の內外乾燥せる土中に於てす(內地に在ては成蟲にて越年す)るを發見せり。當地方(滿州某地)にては四月下旬、猶蠅を發見せざりしも、五月上旬に至りて多く羽化するを見、又室內蠅の增多するを見るも、越年の事跡明なるを知るべし、以上は蠅の習性經過に於ける大要なり。

總て驅除法には、天然驅除と人工驅除の二あり、天然驅除は絕對的に行はるゝもの甚だ少なく、殊に蠅族の如き自然繁殖盛なる習性を有するものにありては、到底之を天然驅除にのみ依賴すべからざるは勿論なりと雖も、茲に天然驅除に於ける二、三の實見を記せば、

一、鞘翅目步行蟲科ゴミムシ類に屬する幼蟲にして、(淡褐色帶黃白色の二種を發見す)恰も百足蟲の小なるに似て、活潑に有機物体內を馳驅し、常に蠅の幼蟲を捕食するあり、其一頭にして一晝夜に凡三、四十頭を捕食するを實驗せり。而も此幼蟲は其數多きを以て、天然驅除の効大なるを知る。

二、一種斃蠅黴菌あるを發見す。此の黴菌に就き研究を重ね、之れを應用せば多大の効果を得るに至らんか。

前述天然驅除は、土地及氣候等により多少差異あるべしと雖も、到底之れのみに依りて吾人に及ぼす蠅族の害を避くる能はざるを以て、大に人工驅除の方法を講し、共同以て之が實施を勵行し、少なくも其危險を遠くることを勉めざる可らず。就中其實施に易く、而も効果の大なりと信ずべき方法二、三を列

記せん。

第一法　馬糞、塵芥を燒却すること

但蠅は植物性有機物に產卵するを常とすれども、殊に馬糞、塵芥の腐敗せるものを嗜好するを以て、此法を行へば根本的驅除し得べし。

第二法　幼蟲の發生せる馬糞、塵芥は之を堆積し二、三日を經過せば幼蟲は外部に近く集中（醱酵熱を避けて）するを以て、此部分を採り地下二、三尺の深さに埋沒すること。

第三法　捕蟲器を以て成蟲を捕獲し、或は適當の殺蟲藥（蔾芦の類）を用ひて之を斃し、其斃蠅は燒却若くは地下に埋沒すること。

以上記する所は短時日の研究にして參考の價値なからんことを恐る右復命候也

明治三十八年七月

## ◎鳴く蟲に就て（八）（第八版圖參看）

名和昆蟲研究所內　谷　貞子

本誌前號に於て、邦產蟋蟀類十九種に就き、各々簡單ながらも其記載を終りしかば、本號より私の採集にかゝる蟋蟀類二十餘種と、當研究所秘藏の特別標本二三とにより、研究せし大畧を記載せんとす、而して此の類は昨年以來この公園地附近にても、已に數種の新種を得たるより推せば、尙此の他に異種の多からんことを信ず。幸に此の他の種を藏し給ふ方は、垂敎を給はらば、私の喜び之れに過ぐるものなし、讀む人、願くば一片の報を惜み給ふ勿れ。

### 蟋蟀類の發音器

此類も亦前の蟬、螽斯のごとく、雌雄淘汰の結果雄蟲の鳴聲に變化を起したる事、今更又くり返さずと

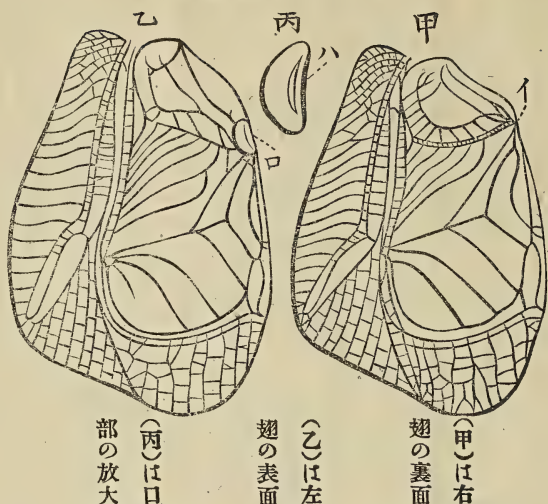
も明らかなり。中にも鈴蟲、松蟲の如き、

スヾムシの前翅

甲　丙　乙

イ　ハ　ロ

(甲)は右翅の裏面
(乙)は左翅の表面
(丙)はロ部の放大

邯鄲、草雲雀の如き、いづれも其音聲優美且高尚にして、世の人多く之を愛で飼養せざるはなし。畏くも　皇后陛下には殊の外邯鄲の啼音をば好みあらせらるゝ由にて、いつも其季節になれば公卿、華族の方より献上せれるゝ向もありとほのかに承はる、これも偏に其鳴聲を賞美せさせらるゝによるものなり。今これが發音器の構造、並に其發音の方法に付之を觀察せんに、螽斯類とほゞ其構造を同じくす、而していづれも前翅は背に接し平濶にして、兩側は垂直なり通常右翅は之を左翅の上に重ね、甲圖は即ち右翅の裏面にして、乙圖は左翅の表面なり。翅脈は螽斯類と異りいづれも、內緣の基部に近く集合し、右翅に於ては該部より横に走れる鑢狀部(イ)あり。又左翅の該部を檢すれば、恰かも耳狀をなせる(ロ)あるべし。丙圖は即ちその放大圖にして、外緣に沿ひ褐色がかれる硬質部(ハ)あるを見る其發音するや、右翅の鑢狀部(イ)を以て左翅の硬質部(ロ)に摩擦し、各々得意の美聲を發するものなり、されど、多くは左右兩翅の、裏面に鑢狀部(イ)を有するも比較的左翅のものは發達せず。

扨此科に屬するものは螽斯類と異り、光線を忌む性あるが故に、常に石下、土中又は雜草の繁茂せる中に棲息するを以て、自ら其色彩も土色を呈せるもの多し。頭部は大抵圓く、複眼は圓形をなし、額面に

は淡褐色の顆粒狀物を有す、觸角は鞭狀をなし、前胸背の中央には二個の楔狀紋を有し下端狹からず。雄の前翅脈は波狀にして、雌は網狀をなす、後翅は長く靜止の時は之を扇狀に疊むも、中には退化して之を缺けるもあり。腹端には二本の尾狀突起を有す。前肢の脛節に聽器を有し、後肢は長くして飛躍に適し、跗節は三個にして第一節は長し。雌は腹端に槍狀の產卵器を有し。多く土中に產卵す。但ケラの如きはこれを缺如す。

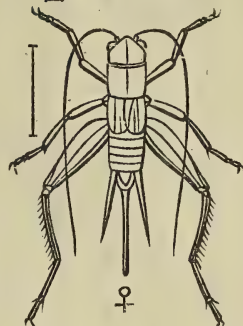
（一）ケラ（Gryllotalpa africana, Pall.）螻蛄　　躰長九分、体は光澤ある黑褐を呈し、短かき軟毛を有し裏面は鹿毛色をなす、頭部は小形、複眼黑色にして圓く、觸角灰褐にして長さ三分五厘、複眼の前方にあり、前胸背は頗る大にして、頭部を通じ卵圓形をなし前緣少しく內方に凹陷し、後緣圓く突出せり。中央には一個の楔狀紋を有す。前翅は小形にして長さ四分、腹部の半ばに達し、翅脈濃褐色をなす。後翅は膜質、大形にして前翅の外に出づること三分、前緣及び翅脈は暗褐なり。腹部は平たく、尾狀突起は灰褐にして長さ三分、肢は各々鹿毛色にして肥大し、前肢は短大扁平にして、脛節及び跗節は鋸齒狀をなし、恰かも鼴の脚の如く能く土を開掘するに適す、產卵器は有せず、成蟲は六月頃より翌年四、五月に渡りて現出し、畔又は土手の濕地を好んで棲息す、夜ジーと、其音高く鳴々す本邦到る所に分布せり、而して古より之を蚯蚓の鳴くと稱し、歌や句に「みゝず鳴くなり」云々と讀み出されたる事等往々見る所なるが、彼の古今注に蚓一名密蟺、一名曲蟺、善長吟於地中、江東謂之歌女、とあり。又抱朴子には、蚓無口而揚聲、とも又宋の梅堯の詩には蚯蚓在丘穴、出縮常自盈、龍蟠亦以蟠龍鳴亦以鳴、自謂與龍比とあれば、こは支那より傳はり來りたる事明らかなり。然れども爾雅正義の螻蛄の下りに「善鳴善飛」とあり、又梅園日記に「或人之を驗めしに、蚯蚓は鳴かず、螻蛄の鳴くにぞありけるとかや」云

々とあり。これによれば、中にはまれに蚯蚓にあらずして螻蛄なる事を解し居れる人のある事明かなれど、兎に角俗に蚯蚓の鳴くと唱ふるは、即ちこれが鳴聲なり(第八版第一圖)

(二)エンマコホロギ(Gryllodes mitratus, Sauss.) 油胡盧　躰長八分五厘、体黒褐色にして、裏面灰褐なり、頭部は大形、顔面鹿毛色をなし、後頭黒色にして光澤あり。複眼楕圓形にして黒色大形に觸角は焦茶色にして長さ一寸二分、前胸背は方形にして灰色の短毛を生じ、兩側の下縁は灰褐色をなす。前翅は長さ五分五厘、油質の光輝ある暗褐色にして、腹部よりやゝ短かく、躰側に於ける部は灰褐色を呈す。後翅は膜質、前縁暗褐、翅脈の多くは白色をなし、前翅の外に出づること三分、腹部は大形なり、尾狀突起は長さ四分、焦茶色をなす、肢は各々焦茶色を呈し、後肢の脛節の內側に八個の細刺を有す。雌の翅は雄と同長、産卵器は長さ七分暗褐を呈す。成蟲は九、十月頃最も多く現出し、十一月中旬の降雪後と雖も、往々其鳴聲を聞くことあり、多く堤防其他畑中の塵埃堆積の場所、或は草間に於て晝夜の別なくコロコロコロコロ、リリリリー、と其音高く鳴々し、本邦いづれの地にも棲息す。(第八版第二圖)

(三)コホロギ(Gryllodes berthellus. Sauss.) 蟋蟀　躰長六分五厘、体灰褐を呈し、頭部は圓く黒色なり顔面に淡褐の斑紋と、後頭に六條の短線とを有す、複眼暗褐にして圓く、觸角黒褐にして体に倍す。前胸背は方形にして黒褐色をなし、不判明なる褐色斑ありて、灰色の短毛を有す、兩側の下縁は灰褐色なり、前翅は長さ二分五厘、腹部より短かく、前縁灰褐なり。後翅は退化して白色小形なり。腹部は大形腹面灰褐なり。尾狀突起は長さ三分、暗褐色をなし、産卵器は濃褐長さ四分五厘、肢は灰褐にして黒褐の細斑を有し、後肢の脛節の內側の刺は、七本あり雄の前翅は三分腹部を出すこと一分五厘なり。成蟲は八、九、十月頃より十一月中旬にかけて盛に人家近くに現出し、夜間リユー、、、と其音高く鳴々し

我國到る所に棲息す。（第八版第三圖）

（四）クマコホロギ（Gryllodes blennus. Linn.）黑蟋蟀　躰長三分五厘、体黑褐色を呈し裏面淡褐なり。頭部は圓く、黑色にして光澤あり、複眼は楕圓形にして濃褐に、觸角は濃褐色にして、躰にほゞ二倍せり。前胸背は方形にして、黑褐色を呈し、茶色の短毛を生ず、前翅は短かく長さ一分、腹部を露出する事一分五厘、前緣灰白なり。後翅は退化し、白色にして、頗る小形なり。尾狀突起は長さ二分、暗褐を呈す、産卵器は褐色にして長さ三分、肢は各々樺色にして、後肢の脛節の內側に六刺を有す。雄の前翅は長さ二分五厘、腹部を僅に露出す。成蟲は山近き濕潤の地の草間に八、九月頃現出し、晝夜の別なくチッチッチッ、、、、、又チッチーチッチーとも其聲高く鳴々す。該種を一名ツヾレサセコホロギとも云ふ。古今集に「秋風にほころびぬらし藤袴、つゞれさせてふきりぎりす鳴く」とあるは即ちこの蟲をよめるものなり。

クマコホロギの圖

♀

（五）ウスイロコホロギ（Gryllus domesticus, Linn.）　体長六分、体褐色を呈し、頭部は褐色にして圓く光澤あり。額より頰にかけ濃褐帶紋を有し、複眼黑褐にして楕圓形をなす。觸角黑褐にして体に倍せり。前胸背はやゝ方形褐色にして、濃褐色の短毛を生じ、後緣黑褐にして中央の楔狀紋は濃褐色をなす。兩側は黑褐斑を有し、前翅は長さ二分乃至三分、褐色にして翅脈濃褐をなし、前緣灰褐なり。後翅は膜質前緣灰褐にして前翅より長きこと四分、翅脈褐色をなす。中にはこれを缺くもあり。腹部は大形、尾狀突起は長さ五分、濃褐色をなし、肢は各々褐色にして黑褐の細點を有す。後肢の脛節の內側には七刺あり。雌の翅は退化す、産卵器は濃褐にして長さ四分、成蟲は七月頃より最も人家近くに現出し中にも床

下等に於て夜カチヤ、、、、、と其音高く鳴々す。（第八版第四圖）

（十六）ミツカドコホロギ(Loxoblemmus haanii, Sauss.)三稜蟋蟀　躰長七分、黒褐色を呈し、裏面は灰白色、雄の頭部は大にして額、頬及び基唇板は上下左右に突出して菱形に變形し、其色漆黒色をなし、斜に一平面となる。頭頂には褐色の横線を有し、後頭部は漆黒色にして褐色斑を有す。複眼は黒色にして楕圓形をなし、觸角焦茶色にして体に倍す。前胸背は黒褐にして前縁廣く、不判明なる褐色斑を有し、焦茶色の短毛を生ず。前翅は長さ二分五厘、前縁灰白色をなす。後翅は大形、前翅の外に出ること三分翅脈淡褐色をなし、まれに之を缺けるもあり。尾狀突起は長さ二分五厘、濃褐色を呈す。肢は各々灰褐色にして、細かき黒褐點を密布し、後肢の脛節の內側には七刺あり。雌はコホロギの雌に酷似せるも、顏面稍や平たくして黒く、前翅は長く三分五厘あり。産卵器は短かくして長さ二分八厘、成蟲は八九月頃人家近き所又は堤防等に最も多く現出し、夜チュチュチュ、、、、、と其音高く鳴々す。（第八版第五圖）

（十七）オカメコホロギ(Loxoblemmus equestris, Sauss.)福女蟋蟀　躰長四分、躰黒褐色、其の裏面は灰白色を呈す。頭は漆黒色にして、雄の顏面は前種に似て平たく斜なるも、頬はさまで突出せず。複眼は黒色楕圓形にして、頭頂に淡褐色の横線と、後頭に不判明なる褐色縱線とを有す。觸角黒褐にして略ぼ体に二倍し、前胸背は方形にして判然せざる褐色斑有り、中央に褐色の楔狀紋を有し、兩側は黒褐色をなす。前翅は長さ二分五厘、前縁灰白なり。後翅は膜質大形にして、前翅の外に出ること三分、又稀に之を缺くもあり。尾狀突起は黒褐にして長さ二分五厘、肢は各々暗白色にして黒褐の細斑を有し、後肢の脛節の內側には七刺あり。雄は頭部圓く、前翅は長さ三分五厘、産卵器は濃褐にして長さ三分あり。成蟲は九、十月頃より十一月中旬の降雪後迄も、つねに山間の光線入射乏しき地の、小石又は落葉の下

等に現出しリー、リーリー、又リリリリ、リリリリ、と晝夜の別なく鳴々す。（第八版第六圖）

（八）ヒメコホロギ（Gn? sp?）　躰長二分五厘、体黒褐を呈し、頭部は圓くして光澤あり。頭頂には褐色の横紋を有し、後頭暗褐をなす。複眼黒色にして楕圓形をなし、顔面には褐色斑あり。觸角黒褐にして体に倍し、前胸背は方形にして不判明なる褐色斑を有し、黒褐毛を生ず。楔狀紋は濃褐なり。前翅は短かく長さ一分、前縁灰色を呈し、翅脈黒褐をなす。後翅は退化して其痕跡だになく、尾狀突起は長さ一分五厘、暗褐色を呈す。肢は各々灰褐にして、黒褐の細點を散布し、後肢の脛節の內側には五刺を有す産卵器は長さ一分五厘、濃褐色を呈す。雄の前翅は長さ一分六厘あり、成蟲は九、十月頃堤防等其他の光線少なき所に棲息し、常に草間又は小石の下等にて、晝夜の別なくチリリリ、チリリリ、と其音高く鳴々す。（第八版第七圖）

# 講話

## ◎滋賀縣師範學校女生徒に對する當所長の演説

編者曰く、左の一編は本年二月六日、滋賀縣師範學校敎諭栗原秋作氏外二名は、同校女子部生徒三十一名を引率して來所せられし際當所長が挨拶に代へ談話せられたる大要を筆記したるものなり。

私は當研究所長でありますが、此頃御校敎諭國枝小三郎氏の紹介がありましたが、過日男子部の人の參られました時は、私は都合惡るく巡査敎習所の方へ參つて居りましたから、御目にかゝる事を得ませんで實に殘念に思ひました。又今日も丁度月曜日でありますから出張の日であるが、今日は代りに助手が參つた樣な次第である所が又縣廳へ俄に知事の用にて參りまして、丁度只今歸つた樣な事であります、

今迄に團隊で當所へ御出下さつた人には、必ず陳列室を御覽に入れたり、又は說明もいたしますけれども、いつもながら不得要領で畢つてしまつて、畢竟其效はないと云ふのである、されば今日は少しく此昆蟲學の一端を御話して置いて、他日大ひに斯學上骨を折つてもらはなければならんのである。さて諸君は本月を以て御卒業なさるゝそうですが、來月よりは第二の國民に對し、大に其智識を御別ちなさるゝと云ふ順序で、實に國家にとりて大なる利益を御あたへになるのである。されども此時局に際してはいつもより二倍三倍の力を以て、今迄を假りに席上敎育とすると、此後よりは一も實地二も實地と、其今日まで得られたものを實地に行ふて、なさらねばならない時です。實に此日露戰爭は連戰連勝、實に此上もなき喜ばしい事ではあるけれども、これを一歩退いて內部の有樣を見ると、實業界に於ては連戰連敗、實になげかはしき次第である。さればこれを種々の方面より進んで補はねばならむ、而して此昆蟲と云ふものは、動物學のうちほんの一部分にしか過ぎないけれども、これが吾々人類に與ふる所の損害は、實に驚くより外はないのである。かの明治三十年には浮塵子と云ふ極くこまかな所の蟲が、七千五百萬圓と云ふ大損害をあたへたのである、中にも北陸地方は其害が非常に多くあつて、殆んど皆無となつたと云ふ樣な有樣、福井、石川、富山等の縣は各縣共に五百萬圓以上の大損害をうけたと云ふ事であるが、もしこれが明治の初年であつたとすれば、交通不便の爲め外國米を買ふ樣な事はとても出來んから、畢竟大飢饉となるのであるが、これは文明になつた御蔭であるのです、さてその浮塵子といふものは極めてこまかなものでありまして、誰が見ても、こんな小さなものがかくも大害をなすものかと、一向人々がほんとうに思はないのである。されどもこれが幾億萬となく集まつて害をするから、非常に大なる害をあたへるのである。さて世の中の大害蟲とも云ふべきものは大抵体が小さくあつて、且つきたなくて見るにたらん樣なものである。丁度病氣で云へばバクテリヤの如きもので、それ等が實に多くよつて害をするので、虎列刺病だとか赤痢病だとか云ふものは、極めて小さく、顯微鏡でも千倍位なものでなければ容易に見る事の出來ぬ所の細菌であるが、それが恐しい害をするのである。害蟲も形の小さなものが却て大害を與へるのです。今浮塵子又は螟蟲が大害をするから、大に驅除をせねばならむと云ふた處で、それは諸君には少しも關係がない樣であるけれども、世の中はすべて連鎖的の關係を有してをるから、害蟲が發生して米を食へば米が高くなる、從て不景氣となる、其不景氣は種々の方面に影響する、かくの如くに世の中は丁度銳敏なる秤の如きものであるから、七千五百萬圓の大損害は

實に全國に大影響を與へたのである。これが世の開けないさきは局部飢饉であつたけれども、世が文明になると局部飢饉はないかはりに、全部飢饉が起るのである、されば昆蟲の如き小なるものでも、決して輕卒に見過す事は出來ぬから、大に研究をなさねばならないのである。かの螟蟲の如きも、現今年々の統計上四千萬圓以上は、これのために食せられてをると云ふ事である。されば直接間接にこれ等の事を農業者は勿論、其他の一般の人々にも知らせてをかねばならんが、今日は女子の方のみであるから、女子の方として最も必要な衛生に關する昆蟲の事を御話いたしましよう。例へば蚤、蚊、蠅等其他多くあるけれども、これらのものは直接吾々に關係があるから、知らない人はなかろうと思ふ、然らば蚤は只今は何處に居るかと云ふに、疊の間の埃の中で親で以て立派に冬をこして居るのである。即ち冬眠をして居るのである。これが彼岸頃になると出てきて、卵を其埃りの中に產む、それはみなさんも御存しの白い卵で、それが孵化すると灰白の長い蟲即ち幼蟲となるのである。それからそれが老熟して、極く粗末な繭を作つて中で蛹となる。そうして四月の末から五月の始め頃親となるのである、丁度產卵から羽化まで三十五日程かゝります。すると五月頃になると、どこの家でも私の家は近頃非常に蚤がふへましたと云ふと、向ふの人も亦私の家も近頃蚤がわきましたとちやんと云ふ事はきまつて居るのである、丁度朝太陽が東から出て、夕に西へ入ると同し樣である。されば四月頃は丁度幼蟲の時であるからして世の中の人は知らぬのである。されども前にも云ふた樣に、蚤は不潔の所にしか居らんのであるから私の家に蚤が近頃出ましたと云ふた人があつたならば、それはあなたの家はまだ掃除が行屆いて居りませんから、もつと清潔になさいと云ふてよろしいのです。蚤は半寄生と云ふて子供の時は埃を食して活きて居るのです。されば清潔にして塵さへない樣にしてをいたならば、其子供は生育致しませんから、たとひ親を逃かして置いたとてかんじんの子供が生育をせないから、繁殖をせんのである。

維新以後は、以前と異なつて餘程蚤がへつたと申しますが、或人はこれは石油が出來た故だと云はれたけれども、決してそうではないのです、それは衛生衛生と云ふて、清潔にするからである。されは蚤が若しも一匹でも居る樣な事であれば、其家はまだ清潔が行屆いて居らぬからの事である、されはこの蚤の發生經過を知つて居つたならば、大清潔法も必ずよく行はるゝであろう、その發生經過とは昆蟲たるものはみな卵、幼蟲、蛹、成蟲とこの四つに變化するので、丁度蠶で云ふて見るならば、卵の時代はかの蠶卵紙で、幼蟲の時は桑の葉を食する時、蛹と云ふと繭の中に入りて食物をとらずに居る時を云ふ、

成蟲とは白い所の蛾であつて卵を産むものでありますが、蚤でも此通りである。さりながらたれでも、親と卵は知つて居りますけれども、幼蟲又は蛹等、況て繭抔と云ふたとて、到底知つて居る人は少かろうと思ひます。それが少しでも昆蟲學の一端をきいた人であッたならば、昆蟲の變態をしッて居らるゝから、蚤には必ず幼蟲も蛹もなけらねばならむからと云ふて、大に疑問が生じてくるのである、されは浮塵子螟蟲の驅除法を知つて居つたとても、蚤の事を知らむ樣な事ではなんにもならむ、故にたれでもこの蚤の習性經過位は知つて置く必要があるのです。さればこれを某小學校では、各級に飼育して生徒に實地に敎授せりと、又或人の如きは已が家に來客のある時は勿論、外出の時迄も飼育瓶を携へて人々に示されたと云ふことを承知して居ます。これはだれでも一度は必ず御實行がしてもらゐたひのであるこれを少しく女子の方が御注意して下さつたならば。乳呑兒などはどの位幸福かも知れぬのです。即ち大人ならば蚤が食へば掻く事が出來ますけれども、赤兒でありますと掻く事も得致ざず、又痒とも得云はず、たゞ泣くばかりであるから大に注意をせねばなりませぬ。されは昔より「角力取を追ひ出す蚤の力かな」と云ふ句もあります通り、隨分蚤は厄介なものです。蚊は美濃尾張の平原から、滋賀縣では湖水の東の方にマラリヤ病が多いが、このマラリヤ病は蚊の媒介によつて起るもので、この蚊は他の蚊と異なつて、羽に斑があるから、一見してよくわかるのである、次は昆蟲の自然淘汰に就て御話しましよう、これは生存競爭の結果、斯くの如くになつたものであつて、即ち適者生存である。即ち敵の目に觸れない樣に、自然に知らず知らずのうちに淘汰されて、この樣になつたので、即ち木の葉蝶の如きは枯葉と少しもちがはぬのであるが、此蝶の敵と云ふと小鳥であるが、もしこれが木にとまつたとすると、もう迚もみつかりません。例へて云ふて見ると、赤毛布の上へ五色の紙を細かく切てばらまいて、小供にこれをひろはせてみると、赤色のものは大抵拾つてないのである、その樣に外界の事情に適して居るものは大抵殘るのである、又弱いものが強いものゝ樣な形をして居るとか、それは／＼この自然淘汰と云ふは面白いものである。されば今後諸君が野外でもし蝶を御捕りになつたならば、たゞ美しい蝶であるとかと云ふ事よりも、何故こうも美であるか、又如何なる源因によりて此花には彼樣な蝶が餘計に集るかと云ふ事をよく御考へになりましたら、又興味が多かろうと思ひます。此自然淘汰の一部として、雌雄淘汰と云ふ事がある、メスグロヒヨウモン、とて雌は黑くて雄は黄ない、ジヤコウアゲハ、は雄の体より普通の人造麝香よりは余程よい香を出します、其他蟬やギスは雄がないて雌がなかん又ノコギリムシ

やクワガタムシ等の顎は雄が發達して居る、カブトムシやダイコクムシは角があるが、皆悉く理由があるのです。それは皆雌雄淘汰の結果である、この雌雄淘汰と言ふは女子教育に最も必要があるのであるが、この雌雄淘汰や自然淘汰の事を御話しするときりがないから、こゝらでやめて居きますが、どうぞさき程も御たのみした樣に、蚤を必ず御飼育せられて、兒童に自然の趣味を與へられんことを希望いたします

## ◎昆蟲採集に就て

第三回岐阜縣長期講習生　野口次兵衛

編者曰く、此の一節は去る五月二十四日の水曜昆蟲談話會席上に於て、同氏の話されたる大要なるが、初學者の參考にもと、玆に登載することゝはなしぬ。

近頃昆蟲學の發達につれて、昆蟲採集法をも大に進歩し、私如きが決して諸君がたの御參考になる樣な御話は出來ませんが、唯自分が今迄に實際行つて、聊か感じたことをれ話致す考へであります。私が當所にお世話になりましたのは一ヶ月許り前なので、何分にも日が淺く、其上素養が無いものですから、昆蟲學に就ては勿論、採集法すらも十分に解りませんので、誠に先生方に御厄介を掛ける次第で困つたものであります。處が先生方に於かれましては、日夜にいと親切に御教示下さいますので、何より喜ばしい事でございます。私が入所致した當時は昆蟲採集と云へば唯空中を飛行する蝶、蜻蛉、地上を匍匐する歩行蟲などを捕へるのが本領であると信してゐたのです。處が先輩研究生の採集法を見ますると昆蟲の居そうもない藪を無暗に叩く殆ど兒戯に類する樣な奇妙なことをされるが、後で覗いて見ると案外澤山飛び込んでゐた、實に不思議でたまらない。そこで問ふて當座の恥問はで末代の恥と云ふことがあるからと思つて、藪から捧でも出した樣に、採集法の大体の説明を請求しました。すると先輩は、いと丁寧に左の如く話して呉れました。

ヤナギハムシの圖
(イ)は蛹化の有樣放大圖
(ロ)は成蟲の放大圖

昆蟲採集法にも色々あるが、大体から申せば叩き網採集、節網採

集、掬網採集、石起採集法等あり、尙陷穴採集、糖蜜採集、雜草採集などもあると一々例を示し、各得失利害を示されたから、余は滿足して再び採集にとりかゝりました。早速叩き網採集を實行して見ると、成る程無數の昆蟲が飛び込んでゐる其代り蜘蛛も入れは花も入る、木の葉も入れば塵芥も入る、是迄の一時間の仕事は確かに一分間位に出來ると思ひました。

其後五月十日水曜昆蟲談話會の席上で。近頃米國から歸朝せられた名和梅吉先生から、昆蟲を採集するに、普通採集よりも注意採集の方昆蟲の特性等を知る上に於て遙かに勝ることを御注意下さいまして深く感じ、其后長良川附近に採集しました時、普通採集、注意採集の二法を兼て行ひました。今其當時のことを一二申しませう。鵜飼を以て全國に知られてある長良川の沿岸を、手當り次第採集して參ります内、向ふにある柳が、殆ど青き葉が無きまでに枯れて、葉か黑くなつて下つてゐるから、はて變んだな、之には何ぞ理由があるに相違ないと近寄て見ると、豈圖んや鞘翅目葉蟲科に屬するヤナギハムシが發生し其幼蟲が然も無斷で葉を食ひ盡し、自分は蛹になつて葉の代理とも云ふ如く、配合よく懸垂し、枯葉の如く擬態をして敵の目を避けてゐるのは、巧妙驚くの外なしである。それを少し注意して見ると、頭部をぴん〳〵搖つてゐる有樣は、實に何とも譬へ方の無い面白い者でありました。暫らくしますると脫皮して成蟲が出ました。之が即ちヤナギハムシで、体長凡そ二分九厘許りあつて、翅鞘は(羽化の始め)灰白色の地に黑点が二十個あります。一見しては柳の幹の色に僞して保護色をもつてゐます。此成蟲は再び他の柳の樹に移りて繁殖を圖るのでありませうが、自然界の妙法、到底人爲の及ばざる驚くの外なしであります。尙進んで行きますと、荳科植物に屬する萩の若芽に、体長五分余もあるシロゾウムシが澤山止つてゐましたから、注意して見まするど、切りに食葉するもあり、又切に保護色を利用して意外の所に蟄居するもあり、面白く其有樣を觀察することを得て、容易に悉く捕獲し、最早他の昆蟲は見えませんでしたけれども、念の爲めに叩網を致しましたら、案外奇妙なる異蟲が澤山踊り込みました。能く調査して見ますと實に愉快です。木の皮の樣なシミヅクモドキ鬼の面の樣なツノヨコバイ、堅い樣なシロフアカガネハムシ、又るり色をしたヤナギトビハムシ、其外クロホシハムシ、ガヾンボの一種、蚊の種類蜂の類數多く、實に自分ながらあきるゝ程でありました。斯く面白く採集する内にも、前の方法では昆蟲の特質、擧動、食物等をも調査することを得て、昆蟲と植物との相互の關係を知り、他に應用する等の利益多く、後の方法では前の如き利益無き代りに、僅かの時間で多くの昆蟲を採集し得て、研究の材

料に利益少からぬと信じます。此頃も先生の御伴をして斯の有名な伊吹山に昆蟲採集を試みた時も、皆々非常の好成蹟を得ましたが、譬へ蟲の數が多くないにしても、斯くしたならば惱裡に利する所は確にあること信じて疑ぬのであります。吾人は此后此法によりて大に材料を集めて大に研究し、以て軍國の民に恥ぢず、報國の萬一にも盡さん覺悟であります。唯實地行ひました事のみを言葉の前後も省ず申し述べましたが、當時採集しました昆蟲も、殘らず標本として此處に御座いますから御覽を願ひます。

## ◎昆蟲文學（二十）

### 螢　中村清一郎

江村日沒草如煙。箇箇團團映碧漣。常被緇衣如老佛。好棲甘露即神仙。風輕宮女立池畔。雨暗野童迷柳邊。別有功名埀竹帛。警他懶惰幾靑年。

### 雜詠

ふもとのや

老松にいのぼる蟻のさらにまた角豆の蔓にうつれるもあり

*

角豆這ふ蟻見てあれば細りたる蔓のとがりゆ落ちにけるかな

*

志紀臣

藻草刈り濁る古江のすみがてにまひ／＼まはり水馬とぶ

朝吹くや杜若の花の露おちてまひ／＼の輪のくづれけるかな

*

坪内清之助

二日三日鋏鳴らししわが園の凉しき樹樹に蟬來鳴きけり

巓の雲を杳けみいこひ立つ山路の松に蟬みだれ鳴く

*

潮音生

あぶらせみ松に鳴くむた濃き色の炎に咲けるのうぜんの花

蓮葉の卷葉をやぶる醜蟲のはらへご盡きぬ世にこそありけれ

## 羽蟻

うつろ木のうへ這ふ雨の羽蟻かな　四澤
羽蟻飛ぶ斜陽の梓川原かな　同
湧く羽蟻川に水なき橋柱　同
草原に根骨やありて羽蟻とぶ　同
草庵の樞戸を這ふ羽蟻かな　同
若竹の葉をなす頃や羽蟻飛ぶ　歸麓園
羽蟻飛ぶや毒蛇目の咲く椎の蔭　同
出水晴庇瓦に羽蟻かな　同
板庇朽ちて羽蟻の飛ぶ日かな　城東
草花に水車の羽蟻飛ぶ日かな　同
經藏の椽の下より羽蟻かな　冷石
うつろ木の椎から出たる羽蟻かな　同
辨慶の釣鐘堂や羽蟻とぶ　琅々
夕榮の海士の小家や羽蟻とぶ　同
桑の木の蟲穴出づる羽蟻かな　至浤
塚に咲く花百合に飛ぶ羽蟻かな　同
羽蟻とぶや裏山にたつ新部屋　城北
打ち起す畑の土から羽蟻かな　四山
崩れかかる物置小屋や羽蟻とぶ　蓼江
南天の花古庭の羽蟻かな　去水
椎茸の木に水やるや羽蟻とぶ　水村
十藥の葉裏葉表羽蟻かな　朗笛子
道ばたの朽木を出づる羽蟻かな　佳月
屋根に干す蠶莚や羽蟻飛ぶ　耕雲
羽蟻飛ぶ檐にてりてり坊主かな　華園
山嵐階樓に羽蟻飛びかはす　同
羽蟻たつや鷄頭既に秋の色　同

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄（其八）

名和昆蟲研究所助手　小竹浩

（一一）ヲグロハマキムシ　桑樹の一大害蟲にして、成蟲は体長四分内外、翅張七分五厘乃至九分、前翅褐色にして、外緣に近き處に細き一條の白色線あり。又基部に近く一條の細き白條を有し、且中央に太き二條の白帶ありて後緣に接せず、其中間後緣に近く一個の眼形紋を有す。後翅は褐色にして前翅より色稍濃く、中央より稍外緣に近き處に、外緣に並行せる一條の細き白條あり、其内方に前緣に接して二個の大なる白斑を有す。腹部細長にして、腹端黑し。幼蟲は綠色にして各節に黑點を有し、蛹は細長くして褐色を帶ぶ。年數回の發生をなし、幼蟲の有樣にて樹皮の裂目、又は朽木枯葉等の中に入りて越冬し、翌春に至りて成蟲となり、五月頃卵子を葉裏に五六粒つゝ産附す。幼蟲は絲を吐きて桑葉を綴り其内に在りて食害す。其害夏秋の候に於て最も甚し。

驅除法　幼蟲は葉と共に潰殺するか、又は蟲の生息する被害葉を摘み採りて肥料瓶に投すべし。此の

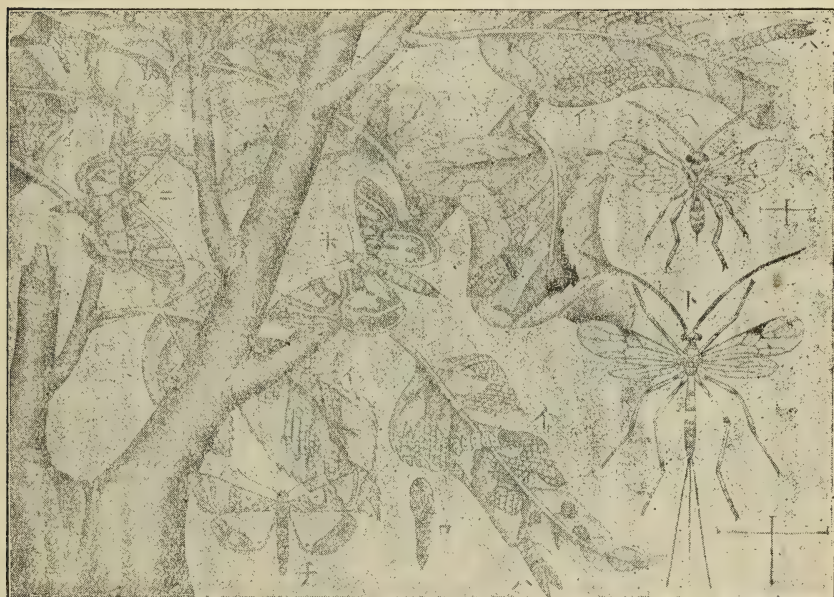
幼蟲を潰殺するには、草履の如きものにて兩方より挾み打つを良しとす。摘み採りたる被害葉を肥料瓶に投ずるは、其中の幼蟲を弱死せしむるの目的なれば、汚水の上に葉の浮き居る如きことあるべからず。若し多數摘み採りたるときは堆肥となすを宜しとす。冬期樹皮の裂目、朽木、及落葉等の間に潜伏するものを殺すべし。落葉せば直ちに掻き集めて堆肥となし、常に桑園を清潔にするは、種々なる害蟲を驅除するに効あるものなり。

（一二）クワハマキムシ　桑樹の害蟲にして体長三分乃至三分五厘、翅張六分五厘乃至七分五厘、前翅は前種と異ならず。後翅は内方の大部分白色にして、外方は外緣に並行して暗褐なり。幼蟲、蛹、及被害の模樣、經過、越冬の情態等前種と畧ぼ似たるを以て茲に記さず。從て驅除の方も亦前種に等し。

## ◎警察官と昆蟲學講習

廣瀬警蟲生

天然自然の化育を禀け、此の土に生育する植物の種類、其の數幾億萬なるを知らず。斯かる無數の植物も、外物の刺擊により、充分の發育をなすもの甚はだ稀なりとす、植物の生

第一一圖　オグロハマキムシ及クワハマキムシの圖

（イ）オグロハマキムシの幼蟲　（ロ）同蛹　（ハ）同蛹の出殼　（ニ）同成蟲の雄　（ホ）同雌　（ヘ）（ト）同幼蟲の寄生蜂　（チ）クワハマキムシの成蟲

長亦難哉。然らば植物をして健全なる發育を遂げしめんと欲せば、須く先づ植物の危害を除去し、保護の實を完全にせざるべからず。今や天然の危害たる風雨雷霆に付ては、人爲の保護法なしと雖も、植物の一大勁敵たる昆蟲に付ては、害蟲驅除豫防法、並に害蟲驅除豫防規則の設けあり、火災に付ては森林法、並に山林原野火入取締規則あり、野火取締規則あり、斧斤の危害に付ては森林法並に保安林施行規程の設あり、表面保護の道備はれりと雖も、一度其内容を觀察すれば、未だ全く保護の道至れり盡せりと云ふべからず。當局官吏は學理と實際に暗く、學者は人民の迂愚を嘲るのみにして、學理の要求を實地に施すの勇氣に乏しく、實務家は學者の學理に馳せ經濟に疎きを嘆し、無經驗なる官吏の指導は之れを實行するに躊躇し、兩々相待つて調和せざる結果は、延ひて保護の實を擧ぐること能はず、予輩想ふに、最下級の執行官として其數最も多く、而も人民に直接して意想外に信賴するものは、現時警察官を措て他に求む可らず、此等警察官にして學理の一斑を解得し、學者と實務家との中間に介在して其精神の在る處を示し、着々其步を進めたらんには蓋し保護の實を完ふすることを得、吾人の幸福を亨くること尠少ならざらん。聞く近來岐阜縣警察官に昆蟲學講習の擧ありと、之れ予輩の理想を實際に行はれたるもの、予輩は日本海海戰の大捷と共に、一大盃を擧げて其の擧を賛し、且之を祝する所以なり。

正誤　本誌前々號本欄内養老山昆蟲紀念採集顛末の記事中トビイロムシヒキアブとせしはトビイロハナアブの誤にして花虻科に屬するものなれば茲に訂正す

## ◎野薔薇の尺蠖

静岡縣　神村直三郎

本年五月二日、一方は山、一方は田にて、こゝを南下する小流れあり。無論こは予が居住する遠江、天龍川の東岸磐田郡岩田村なり。此小流の畔は道にして、予はこゝに採集を試みたるなり。此路傍に野薔薇あり、予は鋸蜂の產卵箇所にても見付けんものをと、其若芽を注視したるに、蜂は見ずして予が視線に映じたるは一種の尺蠖なりき。即これを捕獲して飼育したり。此時幼蟲は体長一寸二分、全体綠色にして頭は比較的小さく褐色を帶べり、背線は亞背線の部位まで僞白色を呈し、其兩側は濃綠色なり、氣門線の位置に於ても亦少しく白味を帶びたり。第五節乃至第八節の各節の左右に淡紅色の突起あり、其中七節にあるものは最も大きく八節六節にあるもの之れに次ぎ五節のものは最小なり。且十一節の背面に二本の長突起ありて淡紅色を呈し、七節側面のそれよりも長く、腹面は概して淡紅色なるも、六、七及

十節以下の各節は稍濃色なり。脚は普通の尺蠖のそれの如く、胸脚は三對、腹脚は一對、尾脚は一對にして、何れも皆淡紅色を帶ぶ。故に幼蟲全体の彩色は頗る面白く、即野薔薇の嫩芽及嫩棘の淡紅色や淡綠色と全く一致するのみならず、其棘の形狀長短に至るまで、全然彼此區分し難き巧妙を極めたるに至りては、更に心なき者に至るまで一見驚かしむるの價値あり、保護色擬態の極微は獨り枝尺蠖の專有たるを許さゞるなり。五月十九日に蛹化したりしが、其色淡綠色にして、長さ六分徑二分を算す。六月十三日羽化せり、其体長四分八厘、開翅一寸三分五厘、全体黃色を帶び、複眼は漆黑に糸狀の觸角を有し其長さ二分五厘、前翅の外半は褐色、內半は黃色を呈し、外半後緣に近く僅に黃色斑を散布し、內半全体に少しの褐色斑を見はせり。又中央室の尖端にある所に一の濃褐色點あり、而して內外の境界には濃褐色線を斜走して後翅迄連續せり、後翅は略三角形にして、前翅より通ぜる濃褐線を中央に受け、其內外略同色にて、前翅の內半と一致したる色彩なり。前後兩翅共其外緣は鋸齒狀を呈せり。以上は只一頭を飼育したる結果にして、雌蟲なりしかば、雄蟲の如何なるものなりしかは疑問なり、願くは實驗家の補足を待つ。

## ◎昆蟲見聞錄　（其三）

三重縣　西岡嘉十郞

七、スジグロテフ產卵の狀　去る四月廿七日、予或る桑園に於て從業中、偶々スジグロテフの飛來せるを見しかば、暫く彼の擧動に注視し居りしに、傍らに栽植しありし夏大根の葉上に止り、止りては飛び飛びては止り、居靜常ならざれば、怪みて熟視せしに、豈圖んや產卵しつゝありしなり。即ち彼の產卵せんとするや、葉面に止まり一粒づゝ產附す。卵の形狀色澤等は、同科のモンシロテフのそれと毫も異ならずと雖も、只異なる所は、モンシロテフにありては多く葉裏に產附するなるに、スジグロテフにありては然らずして、多く葉面に產附するの點にあり。

八、二化性螟蟲油菜莖內蝕入調査の二　予は前々號の本欄に於て、二化性螟蟲の幼蟲が、油菜莖內蝕入調査を行ひし結果は、單に蟄伏所を失ひたる幼蟲のみ蝕入するものなるや、又例令好蟄伏所あるも、蛹化前に當り、食慾を逞ふせんが爲め蟄伏蝕入するものなるやに就きては、尙調査を重ねて後日更らに發表することある可きを約し置きしが、其後是れが調査を行ひしを以て茲に其結果の大略を報せんとす。即ち去る四月十二日、二化性螟蟲幼蟲の蟄伏せる稻藁二十本を採取し、其蟄伏せる部分（幼蟲の蟄伏せ

る儘のもの）を長さ三寸餘に切斷し、之れを結束して稻株に擬し、油菜を植込みたる飼育箱内に投入し置き、越へて五月十日試みに之を檢せしに、未だ一頭も油菜莖内に蝕入せしものとては無かりしを以て、予は早計にも、好蟄伏所ある幼蟲は斷じて油菜莖内に蝕入せざるものと信じたりしが、尙其儘に放置し遂に又越へて六月五日再び之れを檢せしに、豈圖んや蝕入せざるものなりと確信し居りし幼蟲は、二十頭の内六頭は油菜莖内に蝕入し、既に三頭は莖内に於て蛹化し居るを發見したり、依て直ちに冬作田（油菜栽植田）に至り實地の調査を行ひしに、風の爲め折れたる油菜には、多く螟蟲幼蟲の蟄伏せるを實見せり、依是觀是、螟蟲の幾分は油菜莖内に蝕入蛹化するものなることを確め得たり、右調査の成蹟により其要領を摘記すれば次の如し。　一、二化性螟蟲幼蟲の稻刈取後稻株に蟄伏し居るものは、春期化蛹前に當り、昨年充分なる發育を遂げしものは、其儘稻株中に於て蛹化す。　二、昨年發育後れ不充分なるもののみ、化蛹前に當り食慾を逞ふせんが爲め、油菜莖内に蝕入蛹化するものなり。　三、例令發育充分にして食慾なきものと雖も、其蟄伏所を失ひたる場合には油菜莖内に蝕入す。

## ◎簡單說明昆蟲雜錄（第壹號）

●農事試驗場報告（第三十一號）　飼育驅除等の試驗。煙草のフシムシ（木蝨蟲）、稻二化螟蟲蛾の發生蔓延豫防に關する實驗等（技師莊島熊六）。避陽性昆蟲の光線に對する抵力試驗、地蠶の土中に於る化蛹の深さに就て等（技師中川久知）。其他調査の部に於ても技師の種々有益なる實驗を載す。頁數は百六十四にして表類七葉あり、農商務省農事試驗場に於て發行す。

●肉叉蚊第三回報告（全一册）　臺灣地方病傳染病調査委員會幹事高木友枝氏の同會委員長後藤新平氏に供せられし緒言は次の如し『本會囑託宮島幹之助は本島に最普通なるアノフェーレス及び其熱帶麻刺利亞寄生蟲との關係並に臨時委員木下嘉七郎は本島各種肉叉蚊及び其各種麻刺利亞との關係を調査し報文を提出せり故に之を前編後編に分ち肉叉蚊第三回報告の名を以て高覽に供す』頁數百六十七、圖版極めて精巧なるもの六を加へ最も詳細なる研究の結果を記載せらる。

●新編養蠶教科書（全一册）　理學博士佐々木忠次郎著、東京成美堂發行、定價金九十錢、頁數二百八十八、挿圖九十一。第一章總論より蠶蛾、卵、兒、養蠶法等を始め第三十章桑樹の有害動植物附萎縮に終る極めて詳細なる良書なり。

●害蟲及益蟲（全一册）　米國理學士桑名伊之吉著

東京育成會發行、定價金九十錢、頁數二百〇二、挿圖六十一。總論第一章動物界に於ける昆蟲の地位より第十一章害蟲驅除豫防法一斑。各論第一章稻の害蟲より第八章益蟲にて終る。尙附錄として昆蟲採集及標本製作法等を載せたる良書なり。

●青森縣農事試驗成績（第四號）　害蟲試驗成績の部は（昆蟲主任技手新渡戶稻雄）ブランコケムシ並に毒蛾の二種、記載は六頁、圖版は二葉にして其經過並に防除の方法を載す。

●養蜂雜誌（第十號）　蜂王研究に於て得たる事實（靑柳浩次郎）。養蜂の趣味（伊藤幼蜂）等十六頁全く養蜂記事を以て滿載す流石專門雜誌と云ふべし。

●動物學雜誌（第貳百號）　雜錄中に蠅の蛹時代に於ける變化に就て（三宅恒方）僅々一頁餘の短記事にして其研究の困難なると如何に有益なりしかを云へり。

●大日本農會報（第貳百八十九號）　クモガメムシに就て（農學士向坂幾三郎）圖入にて該蟲の經過の有樣を詳細に研究して其結果を二頁に餘る記事を載せたり。

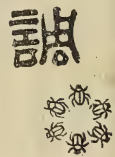
●大和農報（第二十七號）　昆蟲展覽會（技師美濃部鏘太郎）前號より引續き連載にて五頁に餘る所の記事を以て該會の組織方法等を詳細に示されたり。其他目下必要なる害蟲驅除法と題して稻の螟蟲、浮塵子、螟蛉、苞蟲の驅除法を載す約三頁なり。

採集紀行（警部廣瀨壽太郎）岐阜縣巡査教習所受業生並に岐阜縣短期害蟲驅除講習生と養老山に競爭採集を試みたる顚末を四頁に餘る紙上に於て記載せらる。口繪として全紙大の寫眞銅版を以て第一回岐阜警察署員害蟲防除講習會卒業紀念寫眞を載せ雜報欄に於て其說明を詳記す。

●新農報（第七十八號）　飛驒國苗代田の害蟲調査談（名和梅吉）圖入（ドロハムシ）にて苗代稻に發生す害蟲の種類並に其他に就て約四頁を記載す。害蟲驅除新論（增田操）前號より引續き連載にて本號には第五章自然淘汰の續き八頁餘を記載せらる。

●園藝之友（第一年第三號）　花の蟲（佐々木忠次郎）前號の續き本號には圖入にて巵子の蠋の習性經過驅除法に就き一頁半を記載す。

●松の操（第二十九號）　名和昆蟲研究所案內（谷貞子）研究所の位置を始め構內の植物園より研究室內の模樣特に昆蟲標本等に關し約三頁半に亘りて詳記せらる。

●昆蟲生態學　矢澤米三郎、澤田鉀義兩氏の合著にして明治三十六年七月初版を公にし目下第四版を發行したるが紙數二百二十六頁圖版百二十一を挿入し池沼、溪流、果園、森林、路傍、圃塲、室內の七篇に分ち、更に之れを細別して平易に昆蟲の生態、研究の方法等を記述せるものにて、其內容は、カムストック氏のインセクトライフに類するを見る。而して四版の口繪には初版の口繪即蜉蝣の群飛に代ふるに奇麗なる蟬類八種の着色圖を以てせり定價八十

# 調査

名和昆蟲研究所分布調査部

## ◎對馬産の昆蟲(五)

(平田駒次郎氏送附)

●コゴミムシダマシ(Lyprops sinensis, Morseul.)
体長三分黒色長形の種にして、觸角棍棒狀をなし翅鞘には微小なる點刻と、不明の縦溝とを有す。此種は異節類、僞歩行蟲科に屬し前中肢の跗節は五節後肢の跗節は四節なり。(以下同科に屬す)

●ゴミムシダマシ(Tenebrio ventralis, Marseul.)
体長四分六七厘、前種に酷似したる長形種にして全体黒褐色、翅鞘の條溝は稍深く觸角及跗節は前種に等し。

●オホゴミムシダマシ(Setenis valgipes, Marseul.)
体長八分五厘、形前種に似て、全体黒色、頸稍長く、前胸の中央に一縦溝あり。翅鞘には微小の淺き點條を有す。腹面及肢は光澤あり、觸角及跗節は前種同様なり。

●オホスナムグリ(Opatrum recticolle, Motsch.)
体長三分五厘、体黒色にして光澤なく、翅鞘上の條溝は大なり、觸角及跗節は前種同様なり。

●オホマルクチキムシ (Alphitobius diaperinus, Panz.)

●マルガタムシモドキ(Pedinus strigosns?) 体長二分六七厘、黒色長楕圓形種にして、マルガタムシに酷似せり。頭部小にして下向し、前胸大にして其前縁弓狀に凹み、翅端は著しく穹狀に曲りて圓形をなせり、觸角及跗節は前種と同様なり。

●ミハシラムシ(Hamicera zigzaga, Marseul.) 体長一分八厘乃至二分、圓形にして、赤、青、黄、紫等を混じたる光澤を有する美麗種なり。形瓢蟲に似たり、翅鞘には點條を有し、跗節は前種同様なり。

●ムラサキクチキムシ(Gn? sp?) 体長三分三四厘、形長く頭胸黒色なれども、翅鞘の色彩は前種と等しく條溝淺し。肢の跗節は前同様なり。

●クロヒサゴムシ(Gn? sp?) 体長四分五厘、全体漆黒色にして、形瓢形をなし、翅鞘の條溝は淺く、肢は三對共に腿節著しく膨大し、跗節は前種同様なり。

●オホキマハリ(Plesiophthalmus aeneus, Motsch.)
体長六分黒色にして灰紫色の光澤を有し、觸角長く先端稍太く、肢は細長くして跗節は前種に等し。

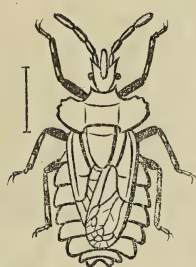
●モモブトキマハリ(Gn? sp?) 体長四分、細長の種にして、灰紫色の光澤あり、前胸幅稍廣く、腹端は急に細まれり、肢は赤味を帶びて腿節膨大し、跗節は前種同様なり。

●トビイロハムシダマシ(Statyra rufobrunea, Marseul.) 体長三分五厘長形の種よして、全体褐色を帶び、翅鞘の基部稍黒味を帶び、前胸は赤味を帶ぶ、跗節は前種同様にして、葉蟲に似たる種なり。

## ◎岐阜縣郡上郡産の昆蟲 (塩田健藏氏送附)

名和昆蟲研究所分布調査部

(六三)ヒメアカシマサシガメ(Haematoloecha sp?) 三月七日、食肉椿象科に屬し、体長三分頭及前胸黒く、前胸より中胸に亘りて一縱溝あり、中胸は紅色にして翅は黒色を呈し腹部より稍長く、兩側の基部僅かに紅色を帶び、腹緣は紅色にして黒條を有し、肢は黒し。

(二七)(六六)オホサシガメ(Gn? sp?) 五月十九日、前種と同科に屬し、体長七八分灰褐色にして頭長く、前胸の兩側に刺狀突起あり、中央には一縱溝を有す、翅は腹部より長く、肢は細長くして体と同色なり。

ノコギリヒラタガメムシの圖

(七〇)ノコギリヒラタガメ(Gn? sp?) 七月廿日扁椿象科に屬し、体長二分六厘体黒くして不明の微小黒斑を有し、前胸は異様に兩側に突出し、腹緣は鋸齒狀をなし、肢は黒色にして白斑を有す翅は腹部より短し。

(六五)アカヘリガメムシ(Arocatus melanostoma, Scott.) 凸眼椿象科に屬し、体長二分五厘、頭赤くして中央黒く、前胸黒くして其四周は赤く緣どり、中央に一の赤縱條ありて稜狀部に達す。翅は黒くして硬皮部は赤緣を有し、腹部は紅色肢は黒し。

(六〇)クロスナガメムシ(Pachycephalus opacus, Uhler.) 七月一日、前種と同科に屬し体長三分灰黒色の種にして、腹緣には黄條あり、翅は腹部より短し。

(四)(五三)カボチャガイダ(Homolocerus punctipennis, Uhler.) 五月十六日、有緣椿象科に屬し、体長四分五厘、褐色の種にして、觸角の末節は稍黒味を帶ぶ、翅の硬皮部の中央には一小黒點を印し、腹緣は大にして黄色條を有す。

(五一)アワガメムシ(Corizus hyalinus, Fabr.) 六月廿四日、前種と同科に屬し、体長二分五厘暗灰褐色にして、腹緣に黄色の條あり。

(三)(五二)キボシガメムシ(Menida violacea, Motsch.) 五月八日、椿象科に屬し一名ヤマガメム

シとも稱す、体長二分八厘、紫黑色にして光澤あり、稜狀部の先端に黄紋を有す、翅は腹部より稍長く、中後肢の脛節には灰黄斑あり。

(四六)ルリガメムシ(Zicrona coerulea, Linn.) 四月廿六日、前種と同科に屬し、体長二分二厘、全体青藍色を帶び、稜狀部は腹部の中央より稍長く、翅は腹部より稍長し。

(六七)イブキガメムシ (Acanthosoma distinctum, Dallas.) 六月十七日、前種と同科に屬し、体長五分內外、体綠色にして腹部は赤褐に、黑橫條を有し、雄の腹端には二分したる角狀突起物を有し肢は黄褐なり。

(四七)キベリルリカイダ (Macroscytus sp?) 四月十六日、黑椿象科に屬し、体長二分六厘、稍扁平なる種にして、全体黑く瑠璃色の光澤を有す。後肢の脛節には多くの刺毛あり。

(二六)コクロガイダ(Aethus nigropictus, scott.) 四月廿八日、前種と同科に隷し、体長一分五厘、黑くして瑠璃色の光澤ある楕圓形の種にして、翅の薄膜部は灰褐を帶び、後肢の脛節には刺毛を有す。

(三二)ヒメクロクサガメ(Gn? sp?) 四月十一日黑臭椿象科に屬し、体長二分二、三厘、黑色にして光澤なく、稜狀部大にして腹端に達せり、肢には刺毛なし。

(六二)マルガメムシ(Coptosoma biguttata, Motsch.) 六月十九日、圓椿象科に屬し、体長一分圓形の種にして、漆黑色を帶び、稜狀部非常に發達して腹部全体を蔽ふ、其基部に二個の黄紋あり。

## ◎靜岡縣磐田郡産の昆蟲（七）

(神村直三郎氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

(一八六)ヤニサシガメ(Velinus nodipes, Uhler.) 食肉椿象科に屬し、体長四分乃至四分五厘、全体脂樣の粘質物を被ひ脂色を呈す、觸角の第一節には二個の黄斑あり、前胸の中央縱に一條溝ありて、其兩側膨起し、且其前緣の兩側に大なる突起あり、翅は腹部より長く、腹緣は大な黄色の細き緣を有り、肢の腿節には多くの瘤狀物を有す

(一五四)ササゲガメムシ (Riptortus clavatus, Thunb.) 四月廿四日、凸眼椿象科に屬し、体長五分五厘乃至六分、暗褐色細長の種にして、中胸の兩側は針狀に突出す。後肢の腿節は太くして內方に短刺を有す。

(一八〇)ホホヅキガメムシ(Prionolomia sordidus, Thunb.)　六月廿六日、前種と同科に屬し、体長三分五厘乃至四分五厘、灰褐色の光澤なき種にして、腹縁に灰黄條を有し、後肢の腿節は甚だ太し。

(一七八)クモガメムシ(Leptocoris varicornis, Fab.)　六月十二日、前種と同科に屬し、体長六分細長の種にして、或る種の「クモ」に似たり、全体黄褐にして少しく綠色を帶ぶ、觸角の各節端は黑し。

(一五八)フタホシガメムシ(Physopelta gutta, Burm.)　五月七日、前種と同科に屬し、体長三分六七厘乃至四分五厘、稍黑味を帶びたる紅色にして、觸角の末節には黄斑あり、頭は三角形をなし、翅の硬皮部の先端に一個の半圓紋と中央に一個の大なる圓紋とを有す。

(一五七)ハリガメムシ(Cletus bipunctatus, H'S.)　四月十七日、有緣椿象科に屬し、体長三分五厘内外、稍細長の種にして、全体暗褐色を帶び、中胸の兩側は針狀に突出して刺端黑し、觸角の末節は稍太くして黑味を帶ぶ。

(一五五)カボチヤガイダ (Homoeocerus punctipennis, Uhler.)　五月一日、前種と同科に屬す

(一七九)アヅキガメムシ(Homoeocerus concoloratus, Uhler)　六月十九日、前種と同科に屬し、体長五分内外、稍細長の種にして全体褐色を帶び、腹緣は狹くして小黑点を有す、觸角の末端節は稍太し。

(一八一)オホクモガメムシ(Homoeocerus marginatus, Uhler.)　七月二十日、前種と同科に屬し、体長六分内外、細長の種にして、全体綠褐色を帶び中胸の兩側は針狀に尖れり、觸角長く末端節稍太し。

(一六〇)アヲガメムシ(Nezara viridula, Linn.)　四月十七日、椿象科に屬し、体長四分五厘乃至五分、全体綠色にして、觸角の第三節以下の各節先半は黑し、稜狀部は大にして先端尖らず。

(一八五)アカスヂアヲガメ(Nezara sp?)　五月十七日、前種と同科に屬し、体長三分五厘、全体綠色にして中胸に赤き一横條あり。

(一五三)トビイロガメムシ (Gonopsis affinis, Uhler.)　五月七日、前種と同科に屬し、体長五分五厘、全体褐色にして頭部三角形に尖り、中胸の兩側稍尖りて上下の如く、稜狀部細長くして先端圓く、腹端は切葉狀をなす。

(一五九)オホチャイロマルガメ(Menecles sp?)　五月七日、前種と同科に屬し、体長四分内外灰褐色の種にして、頭部の尖端二裂し、頭部より中胸に亘りて細き隆起線を有し、中胸には四個の小なる瘤狀物を横列す、稜狀部の基部の兩側に稍突起したる小黄斑を有す。

## ◉皇孫殿下への献納品

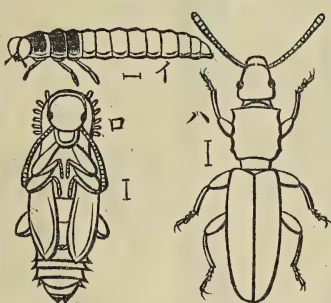
本誌前號に於て、當所より昆蟲に關する上記嘉納狀の如き三品を
皇孫殿下に献納せしことを漏らせしが、名和梅吉氏は平野侍醫の案内にて青山御所へ參殿、後藤次席に面會し親しく献納品の畧說を申上げ、翌日中山大夫殿より　皇太子殿下並　妃殿下へ天覽に供し、同殿下より　皇孫殿下を御座所へ召され、親しく　皇太子殿下より御手づから　兩皇孫殿下に下されたる由、其節　兩皇孫殿下には各自に玩具用昆蟲標本を持せられ、蝶々〳〵と殊の外御悅びの御樣子なりしやに漏れ承る。其后去月十六日發行の萬朝報掲載の、皇孫殿下の御近狀と題する記事を見るに、兩殿下には頗る活潑を渡らせられ、每日御苑の木の下蔭の涼しき處に出で給ひ、小高き處に馳け登りての戰爭遊び「敵を擊退したるぞ砲臺を占領したり」など仰せられ、御遊戲に倦じさせらるゝ時は、採集網を手にし給ひて昆蟲を捕へられ、動物標本を作らう抔と仰せらるゝなり云々。實に御聰明の程國民一同の感に堪へざる所なり。

一名和日本昆蟲圖說（第一卷）貳部
一昆蟲回轉器　貳個
一教育的玩具用昆蟲標本　貳拾四個
右
裕仁親王
雍仁親王 兩殿下へ献上相成則供　御覽候此段申入候也
明治三十八年七月十日
東宮大夫　侯爵中山孝麿
名和靖殿

## ◉當所長の功勞賞牌受領

當昆蟲研究所長名和靖氏は、昆蟲界に功勞あるのみならず、多年教育界に貢献されしは一般の認むる處なるが、今回大日本帝國教育會より功勞賞牌を受領せられたり。因に今回該功牌を得たる者全國を通じて三十名なりき。

## ◉螟蟲驅除と莖切器の勢力

稻の螟蟲が年々損害を與ふる所の金額は、恐く四千萬圓以上に拙するは疑ふべからざる事實である▲此大損害を防ぐの方法に種々あれども、現今に於ける最も良法と

稱ふるは簡單有効なる所の莖切器を以て白穗を切り取るのである▲此莖切器は靜岡縣燒津町農產園主人吉野寅之助氏の發明されしものにて、現今は北海道より臺灣に至る迄多少採用し居らざる所はないのである、就中千葉、新潟兩縣の如きは、各數萬個の共同購入を爲し、大ひに好果を得しとの報知が來た▲此頃或る僧侶は、該莖切器を暑中見舞として門徒に與へたしとか、又は出征軍人の遺族に與ふるとかの話を耳にしたとがある▲何れの手段方法にても宜しければ、農家に廣く該器を行き渡らしめ、後螟蟲軍を總面攻擊し始めて効を奏するの端緖を開くのである、故に一刻も早く該器の普及を圖らねばならぬ▲或る人は螟蟲軍の敗北の程度に依りては、結極莖切器の必要を感ぜぬ時代も來るものならんと云へり。如何にも右樣の次第なりと信じて居た▲然るに此頃秋田縣仙北郡の大地主會員數名漫遊の際當所に立寄り、種々の談話の際、富樫明治郎氏には莖切器の効力は決して螟蟲軍に對する白穗切取を以て滿足すべきものでない▲現に秋田地方にては、稻撰種には穗頸より摘み取りては面白からず、一度莖切器の手に入りたる以上は、一莖宛充分下部より自由に切り取り得るを以て、籾種の成熟上尤も好都合なりと信ずるの餘り、現今は慥に白穗並撰種の爲併用し居るとのことである▲右の有樣なれば早晩莖切器は白穗切取用の時代を去りて、全く撰種に專用さるゝに至るならんと信ずるのである。否是非共早く全力を盡して此塲合に達する樣せなければならぬのである▲希望する所は、莖切器の歷史的には白穗切取器なれども現今の實用は全く撰種專用なる時期を一日も早く眼前に來さしめ度きものである、何分莖切器の勢力は、將來極めて好望のものと確信するのである▲茲に至りて害蟲驅除と云ふ消極的時代を去りて、良種撰擇と云ふ積極的時代に變化したのである、吾人の常に希望する點は全く茲にあるのである。



菓子を食ふ蟲の圖

（イ）幼蟲放大（ロ）蛹放大（ハ）成蟲放大

## ●菓子の蟲

夫から夫へと云ふ題に、菓子箱餘程手摺れとると云ふ句を或る人のものされたる所なるが、こはよくその實を顯はしたるものにして、時々他より菓子箱贈られたるの際、中の菓子に黴の生じ、甚だしきに至りては蟲さへ發生し居る事あり。こは偏に世の吝嗇家の他より贈られしものを、其まゝ蓋をもとらず蓄へ置き然る後漸くつかひ道を得れば、棚より早々とり出し他にこれを遣す事まゝある事實なり。願くは此菓子箱の張紙に何月何日製すと記せられたし、この蟲は上圖に示せる如く（ハ）成蟲は体長一分位、光澤ある褐色の

甲蟲にして体扁たく、胸部の兩側は鋸齒狀をなし、蛹(ロ)は白色にして七厘内外幼蟲(イ)も亦白色にして第二三節の背上は黒褐色をなす。性澱粉質を好む、されば好んで常に菓子類を食す。

◉昆蟲の間に昆蟲の馳走　去る頃のとなりき、尾張國葉栗郡光明寺村に於て開設の、同郡教育會に招聘せられて出席し、同村尾頭壯之亮氏方に一泊したるが同氏は豪家の事なれば、特に昆蟲翁をして滿足を與へらるゝの考へなるにや、翁の眼より見れば、恰に昆蟲の間にて昆蟲を饗應せらるゝ心地せり。其昆蟲に關する重なるものを擧ぐれば、床にはクロアゲハとモンシロテフを書きたる文晁の逸品を掛けられ、床の上には梅逸の筆に成りたる、最も趣味ある蟲の行列を書きたる細長の額面を掲げ、又欄間には、各種の蝶十頭の透し彫あり、其他菓子器にはキリ〴〵ス茶器には群蝶、煎茶碗には蝶、薄茶碗には蜻蛉の模樣あり、實にあらゆるもの昆蟲ならざるはなく、尙ほ食したる米は一昨年收穫のものにて、蟲臭きとは爭ふべからず、是も主人の注意にて古米を撰ばれ、特に蟲害豫防の方法を質問せられしは實に妙、昆蟲翁も茲に到りて尾頭氏の熱心にして且つ注意深きには感服の外なしと云ふべし。

◉松方伯の來所　伯爵松方正義殿には、八月一日來岐の際、川路岐阜縣知事の案内にて特に當所に立寄り、昆蟲標本を縱覽の上、親しく害蟲驅除の件に就き、勸農局出版の農事月報第七號にある蟲災諭言に基き、詳細なる說明ありたるは所員一同の最も敬服する所なり、而して當所よりは昆蟲に關する印刷物、幷に各種の標本等を一切献上せり、其内警察官幷に僧侶に對する、昆蟲學講習の紀念撮影の寫眞を以て特に滿足されたり。

◉安八郡害蟲驅除講習會　岐阜縣安八郡農會主催の同會は、當所調査主任名和梅吉氏を聘し、去月廿六日より三日間、大垣中學校内にて開會せしが、講習會員は害蟲驅除監督員、區長、町村役場吏員警察官、其他有志者等にして、期日の甚だ短きと、目下害蟲驅除監督の必要より、害蟲防除要覽によりて重なる害蟲を主として講話あり、廿八日講話終了後、四十三名に修了証書を授與したり。

◉簡單說明昆蟲雜錄第一號　今回標題の如き見出を以て雜錄欄に掲載するの理由は、前號本欄内に於て切拔通信昆蟲雜報第一號の現はれたるより、讀者諸君の非常なる歡迎を來したると同時に、各雜誌中にある昆蟲記事の大略をも知らさしめよとの忠告あり、然るに記者能々考ふるに、是迄屢々雜報欄に於て近刊雜誌中の昆蟲記事短評と題して紹介し來りしも、折々中絕して讀者に滿足を與ふると能はざれば、今回の忠告を期として、斷然雜錄欄内に一項を設け、每號多少に拘らず、執筆の上昆蟲雜報と互に相待ちて、斯學の發達進步を讀者諸君に紹介せんとす。請ふ增々愛讀あらんことを望む。

# 切拔通信 昆蟲雜報 第貳號

明治卅八年八月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

## 學說

### ●苹樹を害する葉捲蟲

余過る六月中旬南津輕郡に於て採集せる葉捲蟲の種類は七種にして內五種は理學博士松村松年先生によりて左記の如く命名せられたるが他の二種は未だ其名あるを知らずこゝに各蟲の異なる點を約言せん

(一)アトキバネハマキ　は靜止の時に於て頭端より翅端まで四分五厘幅肩部に於て二分翅端は三分あり地色は黄褐色にして肩部と翅の中央には黑褐の雲紋あり又前翅前緣の中位に半月形黑褐紋あり又翅尖と胸部の背にも黑褐色の毛あり他に小波狀線あり

(二)カクモンハマキ　は前翅灰黄色にして靜止の時に於て丈け三分五厘幅廣き所は二分强翅端は二分ありて胸部に八字形紋を有し其下部には不正紋形ありて其間に綾形を形成せり紋の色は暗褐色なり

(三)キマダラハマキ　地色は褐色を帶べる黄色にして網狀黑線あり而して他に前緣より後緣に後走せる黑條二條を有するが故に相互合して楔狀を呈す丈けは三分五厘幅肩部二分翅端一分五厘なり

(四)リンゴノハマキ　全体淡褐色を帶べる暗黑色なり斑紋は太き不正の二橫線一は翅底に一は中央を他に前翅の前線に沿ふて一個宛の大なる暗褐斑を有す

(五)リンゴノメムシ　は丈け二分餘幅一分二三厘暗灰色にして不定黑斑散在す性敏活なり

(狂昆生青森縣、東奥日報)

## 講話

### ●桑名技師の講話要領

害蟲驅除豫防監督員
講習會に於ける

時局に對する責務として農事改良を奬勵するの要あり就中害蟲驅除豫防は其最たるものなり害蟲の發生は時機を一定せず場所の如何を問はず油斷隙間のあらざるものなり時局に付き各種の奬勵事項あり綠肥の栽培堆肥の增加改良、牛馬耕の奬勵等一として積極的ならざるなしと雖も如何に收穫を增加する手段を講するも害蟲の如きありて其辛苦經營を破壞したらんには恰も破網を持てる漁夫に等しく其愚や知るべきなり今日縣當局者が此の事を憂ひ諸君を煩はして玆に會同する所以も亦他に理由あるにあらざるなり、害蟲驅除豫防の事たる固より人の爲めに斯くするにあらず縣令の爲めに斯するにあらず然るに往々人なき所に之を怠り縣令の主旨に戾り自家の利益を拋棄するは現時の農家か手足の農家にして頭腦の農家にあらざるが爲めなり農事はご博學を要し多能を要するもの實に他にあらざるなり又害蟲驅除豫防に關し區々たる小事に口を極めて議論を戰はし貴重の時日を空過するものあり此の如きは最も戒めざる可らず今害蟲驅除豫防の實狀を列擧すれば

(一)當局者の巡視する報に接し重き足を急劇に田野に運ぶなり(二)豫定の順路より岐路に巡視する事あれば縣令に背き法令に違反したるもの發見せらる(三)甲乙相隣れる町村郡にして其町村長若くは郡長の意見相同しからざる爲めに若くは感情の衝突ある爲めに方法順序の統一を欠くものあり

其他種々あれども要するに實地に從事する督勵員の害蟲に關する智識の缺乏是れなり尙ほ稻田の發生する有害無害の諸多の昆蟲につき説明せんに益蟲を別つて

益蟲
- 有用蟲—蜜蜂、蠶
- 有益蟲
  - 肉食—大顎發達
  - 寄生
    - 寄生蜂
    - 寄生蠅

とす英人スミス曰く世界の昆蟲卵の七割五分は天然に此寄生蟲の爲めに驅除せらるゝと云ふ而して天然自然の驅除豫防の巧妙なるは到底人爲の及ぶ所にあらず（千葉縣、新總房）

## 雜報

●害蟲驅除の効　農商務省の報告するところによれば本年は入梅前後より時候不順なるに拘らず農作物に害蟲の發生する少なく偶ま發生するも驅除宜しきを得且一局部に限られて一府一縣通じて蟲害に苦む如きをなしと、是れ實に樺太占領にも劣らぬ一快報として地方人民の喜びは申すも愚か敵地にありて家事を思ふ忠實の子弟も初めて胸を撫で卸すなるべし、今や人力缺乏して公私の出費甚だ多く殊に毎度勸告するが如く戰後永く重税を負はざるを得ざるや勿論なれば暑にも堪ゐ寒にも耐えて從來よりも二倍三倍の勤勞を勵み一合にても收穫を多くせざるべからず、吾輩は地方農民か苟も心を緩うせず或は小學生徒をして害蟲驅除の良習慣を馴致せしめ或は共同的に害蟲發生の豫防をなし又或は慈善業の一として之を行ひ害蟲を驅除すると恰も我軍の敵軍を掃蕩するが如く美事ならしめ開戰の當初涙を揮て國民の誓ひし如く出征軍人と相待つて最後の勝利を獲んことを切望す（大阪毎日新聞）

●本年の米作と害蟲　本年は梅雨前より氣候極めて不順と爲りたれば各地とも農作物害蟲の發生多からんとの豫想なりしに春來農家が一般豫防に力を注ぎたる結果其の發生意外に少なく年々昨今は稻作に浮塵子、螟蟲、螟蛾等發生の報告頻々として農商務省に達する時期なるも本年は是等報告も甚だ尠なく且つ多少報告は到達するも僅に一村若くは一部發生に過ぎずして各縣下を通じて發生せりとの報告は全く之れなきを以て本年は害蟲の爲め米作の減收を見るが如き地方は全然之なかるべしと云ふ（東京、日本）

●倉庫內驅蟲法　倉庫內に發生して米麥等の穀類を害する蟲類を驅除する方法として此程本縣米穀檢査監督山崎敬義氏より都窪郡倉敷米穀出張所理事內田穰氏へ送致したる方法に依り同郡中洲村豪農守屋文治氏の試驗せし結果に依れば頗る有功なるものなりとのことなるが其方法を聞くに左記の如しと云ふ

一、二硫化炭素（藥品）を其儘鉢に入れ倉庫內三四ヶ所へ裝置す但二三の倉庫の割合

一、此藥は液体にて揮發し易き性質あるが故に此揮發を利用し蟲を斃死せしむ

一、倉庫內に裝置すべき時間は二十四時間乃至三十時間にて足れり

一、此藥を裝置するに當りては喫烟若しくは燐寸を携帶するは危險なり箇は火氣を誘引し易き性質を帶ぶればなり

一、其量は約二千六方尺に對して一磅を要す其代價七十三四錢位の物なり

一、右の藥品を裝置する時は倉庫入口窓等を密閉するを要す

一、俵內の蟲をも斃死するの効力あり然れども決して米麥其他の穀物には害を及すの憂ひなし

因に記す右の藥品使用は米國にては久しき以前より穀類に使用せし趣にて箇は夏期に行はるゝ

ものなるも冬期又は春期倉庫内の害蟲を驅除するは別に便利なる方法もありと云ふ(岡山縣、山陽新報)

●足羽郡の苞蟲發生　足羽郡東鄕村各字の稻作に苞蟲發生しつゝあることを七月十五日始めて發見し目下縣廳及び郡役所より當該吏員出張して專ら驅除勵行中の由なるが調査報告によれば發生の區域見積反別は約百七十五町歩餘に亘り就中東鄕二ヶ小路、上東鄕、脇三ケ、上毘沙門の各字は被害最も甚だしきものゝ如し(福井新聞)

●椿象蟲發生　阪田郡醒井村大字上丹生にては頃日稻田に椿象蟲を發生せしにより目下驅除中なりと最も未だ格別の事なきより今の内に熱心驅除すれば不日全滅すべき見込なりと(近江新報)

●泥蟲の發生　龜田郡大野村に泥蟲發生せしに就ては過般當支廳にては廳令を發して夫々驅除法を勵行せられ居る事なるが其后七飯湯の川上磯地方にも續發せし趣にて支廳よりは掛員をして實地を調査せしめたる結果不日又々同地に對しても廳令を發して驅除を勵行せしむべしとの事なり(函館日日新聞)

●捕蟲網の好評　本縣農事試驗場に於て先頃新式の浮塵子捕蟲網を發明調製したるが其後同捕蟲網を更科、埴科、上高井、上水内各郡の苗代田に試驗したるに何れも大好評を博したる由にて其實用的なるを認め二三村農會よりは試驗場へ向け該網の調製方を依賴し越せりと云へるが試驗場にては及ぶ丈け一般に其の普及の方法を執らるゝ筈なり(信濃日報)

●害蟲發生地　其后の報告に依るに肝屬郡は郡内全部浮塵子と椿象とを生じ椿象は殊に沿海地方に多く發生せりされど未だ初期に屬するを以て格別の被害を認めず次に揖宿郡にては今和泉村に浮塵子を喜入村に浮塵子並に椿象を發生せりと(鹿兒島新聞)

●害蟲發生の狀況　高岡郡吾桑村國見部落に於ては害蟲黑蟲發生せし爲め七月五日第一回捕獲驅除を勵行したる結果反別六町歩に對し害蟲一斗六升一合を捕獲したるが第二回驅除は同八日より勵行中にして同郡多ノ鄕村押岡多ノ鄕部落にも浮塵子及黑蟲發生し目下各部落に亘り驅除豫防中なり(高知縣、土陽新聞)

●浮塵子其他發生　農事試驗場吉田分場附近の稻田に浮塵子(ツマグロヨコバイ、ヒメトビヨコバイ)發生し目下驅除中なりと又た美濃郡地方の藺田に青蟲發生し慘害を極むる處あり吉田分場にては之れが驅除豫防方法を印刷して夫々配付せりと(島根縣、山陰新聞)

●忠實なる警吏　盜賊を追ひ小賭場を檢擧するのみが巡査の任には決してあらざるなり、こゝに安八郡中川村駐在所詰佐竹巡査と云へるがありて、國力充實に最も大關係ある害蟲驅除の事を極力勵行し同管區内をして同郡内は勿論縣下有數の好摸範たる結果を示さしめたり、今同巡査が無智の農民に接する狀況を聞くに、先づ其者が會得出來得るまで懇ろに害蟲驅除の要を解き而してそれを一度に限らず二度三度に至るまでも說き聞かしたる後ちに於て、もし服從勵行せざるものは駐在所へ引致し更に又說いて着手せしむるやうに努め、さなくても激務の晝夜を殆んど之れに忙殺されて今日の結果を生ぜしめたりと、徒らに行政權を振り廻はし人民を蔑視する巡査達ちは宜敷之れに依つて鑑るべし(美濃新聞)

●害蟲發生　富士郡加島村松本には青蟲著しく發生し稻葉を喰ひ盡すより農民は頻りに驅除に從事し居れり(靜岡民友新聞)

●蟻を食へば強くなる　さは古來我國に傳はる諺にして一寸考へるさ實に馬鹿氣たる樣なれご歐洲學者の間には此諺が一個の眞理として認められ居れり其說には蟻の體内には蟻酸さいふ强き一種の酸類あり此酸は人体に對する不思議の强壯劑なるが如く此物質若くは此の鹽類液を血管に注射する時は神氣爽快さなり活力增進し食慾亢進し勞動に對する疲勞は半減し腕力は加はり殊に朝起きて手足のだるき人などに之を注射すれば翌朝は拭ふが如くリウマチ、癲癇、痙攣などを患ふる者には確に効果あるが如しされば獨逸にて昔より此等の患者は蟻をすり潰して入れたる湯にて局部を蒸すを常さし他の地方には痛める手足を蟻の巢の中へ突込む風習さへありこれらは穴勝ち謂れ無きとにはあらず因に蜂の毒も矢張蟻酸なりレウマチス、癲癇などの患者か態々蜂の巣を攪亂して患部を整さする風習は我國にもあるやう記臆せるが外國にも古來同じ習慣あり右蟻の話さ合して見るべき問題なり猶蟻酸は激藥なれごも毒藥に非ず（東京新聞）

●滿洲軍蠅取の懸賞　昨今滿洲軍では蠅軍の襲擊に大層閉口して居るさのことで外から家の内に入るには鼻や口に手を蓋ふのである座敷一面は黑豆を數き詰めた樣なので專ら蠅軍の驅逐に務めて居る其の方法は蠅一合の戰利に對してミルク一鑵を引替へさいふ懸賞で一日平均一家で三四合の比例で驅逐して居るさうながそれでも却々捗取ぬさのことだ（中央新聞）

●害蟲驅除授賞式　七月七日惠那郡長島町農會は同地中宮座に於て今回害蟲驅除に就き特に勉勵せし者三十名に對し褒狀賞品授與式を擧行し式後害蟲驅除及び夏期衛生等に關する幻燈演說會を開催したるに來會者多く盛況なりし（岐阜日日新聞）

●山梨昆蟲研究會打合會　は七月十日縣農會内に於て開會し協議の結果來十二日總會を開き（一）昆蟲標本を作製し縣農會物產共進會に出品する事（二）教育會其他の需に應じて同上の作製を爲す事（三）會長を設置する事（四）寄付金を募集する事等の決議を爲す事にして散會したりさ追て同會は先年岐阜市名和昆蟲研究所講習會を卒業せる渡邊昶友、三枝繼次郎、阪本直、赤坂榮輔、岡田隆次郎、渡邊重義、中澤樂平、功刀幸平、丸山與一雨宮猪七、林亮、大順賀藤勝、上原眷平、山本德次郎の人々にて組織せるものなり（山梨日日新聞）

●害蟲驅除地主會　新居郡中萩村大字萩生松木義市氏方に於て七月十二日同村地主會を開催せしが懸賞法害蟲驅除費として四拾圓を支出することを協定せしが尙ほ同日宇摩郡の平井氏も臨席し誘蛾燈三十個を同村農會へ寄附せり（愛媛新報）

●害蟲豫防功勞者褒賞　時局に際し主務省に於ては各府縣知事に對し稻作害蟲豫防は殊に注意すへき旨内訓する所ありし爲め本年は害蟲の發生甚だ少きことは既報の如くなるが就中富山縣下に於ては床次知事熱心之か豫防驅除に注意し一般農家に對し大に督勵せしに非常の好果を奏したるより今回知事は縣下各町に於ける害蟲驅除豫防につき功勞顯著なるもの四十二名に對し木杯一個づゝを贈與したる由（時事新報）

●八頭郡各小學校生徒の害蟲捕獲數　昨日迄に捕獲したる數は蛾六十二萬七千四百二十五、卵七十四萬七千五百三十五塊なりと（鳥取縣、因伯時報）

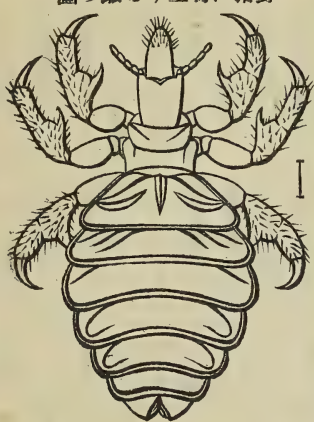
●螟蟲發生（浦和）　入間郡南古谷村稻田には螟蟲及葉卷蟲を生じ同郡名細村稻田には螟蟲を生じ驅除豫防中なり（東京朝日新聞）

◉不破郡昆蟲研究會　同會の組織あることは前號に漏らせしが、去月九日之れが發會式を同郡會議事堂に於て擧行せり。今其摸樣を記さんに、同郡各町村長、郡會議員、警察署長を初め、本縣第三部員大野勇氏、當所員小竹浩氏等をも出席し、十二時十時會頭の開會の辭に次て大野、小竹兩氏の祝辭演説にて式を終り直ちに祝宴會に移り、席上小竹氏の昆蟲研究の必要談、大野氏の害蟲驅除監督に就ての注意談、其他會員よりの目下發生の害益蟲に就ての質問、小竹氏の應答等ありて午後五時退散せり。該研究會の規則左の如し。

不破郡昆蟲研究會規則　(第一條)本會は昆蟲學を研究し及害蟲驅除を圖るを以て目的とす。(第二條)本會々員は害蟲驅除講習生を以て組織す。(第三條)事務所は不破郡役所内に置く。(第四條)學識經驗あるもの若くは本會に功勞あるものは、本會の決議を以て名譽會員に推選することあるべし。(第五條)本會に左の役員を置く、會頭一名、副會頭一名、幹事一名　一會頭は郡長を以て推選し副會長幹事は會員より選擧す、二副會頭及幹事の任期は二ヶ年とす、但再選するも妨なし、(第六條)本會役員事務左の如し、一會長は本會一切の事務を掌理す、一副會長は會頭の事務を補佐す、一幹事は會頭の命に依り本會の事務を處辨す。(第七條)集會を分ちて通常臨時の二種とし、通常會は毎年三月九月の兩度開會し、臨時會は必要ある毎に開會す。(第八條)會員中本會の体面に關すべき所爲ある時は會員に諮り除名す。

◉征露紀念特別昆蟲學講習會　同會は去る十一日より當所内に於て開會せしが、其講習會員は多數の府縣に亘り、且有力者の多きことは、是迄の講習會に多く其類例を見ざる程なり、而して一同は時局に鑑み、非常の決心を以て研究さるゝことなれは、必す好成蹟を得らるゝならん、何れ詳細は次號に報告すべし。

野猪に寄生する蝨の圖

◉野猪に寄生する蝨　岐阜縣郡上郡墻田健藏氏は野猪より採集したりとて蝨二頭を當所に贈られたるが、其の形体即ち上圖の如し。

◉神愛兩郡昆蟲學講習會概況　滋賀縣神崎、愛知兩郡教育會聯合昆蟲學講習會を、八月二日より六日迄五日間、愛知川の進廣館に於て開設す。日々の出席會員は二百四、五十名、(内女子二十名許)にして敎授時間は午前七時半

より午後四時迄とし、晴天には午後山中公園に於て專ら野外實習を試みたり。講師は當名和所長にして六日午後証書の授與式あり。証を受くるもの一百七十八名の多きは、全く主催者の懇切なると、會員諸君の熱心なるとに依り、極めて好結果を得たるは誠に賀すべきことなり。式終りて後茶菓の饗應にて全く無事閉會す、因に記す、野外實習の際特色ある昆蟲を採集したるものに賞を與ふるの約あれば、意外の熱心を以て各自採集をなせり。閉會前に於て、約の如く講師よりは特色ある昆蟲に對し一々説明の上其採集者には昆蟲に關する賞品を數名に授與されたり。

## ◉松村博士の來信

理學博士松村松年氏より、當名和所長に宛たる書信の內に、「前略、小生目下旅行中にて、八月五日には兵庫丸に便乘して小笠原島に採集可致出發仕候、數日前秋田、青森の界にある有名なる十和田湖畔に採集仕り、中々面白き得物を發見仕候、八月十八日歸京仕鹿兒島に行き度き考へ故歸路拜眉の榮を得る哉も不知と存候云々」何れ有益なる通信を俟ちて、本誌に揭載の上讀者に報せんとす

## ◉滿洲鳳蝶の小視察

森宗太郎氏の陣中尙昆蟲研究に熱心なるは、已に本號學說欄を見るも明なることとなるが、尙七月十一日付を以て、滿洲鳳蝶に就て觀察せられし一節を報せられたれば、之れを左に照會せん。

滿洲鳳蝶は年三、四回の發生にして、蛹にて越年するものゝ加し。而して五月中旬より同下旬に亘りて羽化し、六月上旬迄に產卵し五、六日を經て孵化す各齡期間四、五日にして六月上旬蛹化、七月下旬羽化產卵し、且つ八月上旬第三回羽化。九月上旬第四回羽化產卵したるものは、孵化して生長し。蛹期に入りて其儘越年するものゝ如く見受けり。(予は昨年飼育したるも陣中のことゝて意の如くならず) 雌蟲は馬兜鈴に止り、腹部を葉裏に付け七、八十個を產附す、卵子は圓形にして粟粒の如く、其色淡黃色を帶べり。幼蟲は全体黑色にして頭部に淡褐色の斑紋を有し、黑毛を密生す。第一環節には背面に二個の長き黑刺角を供へ、それにも黑毛を密生し、其基部は黃斑紋を有す。背線の兩方に各節一個、側線上に各節一個の短き黃刺毛を供ふ、而して第三節背面の二個は基部黃色を帶び、他刺より長し第二節より第五節に至る腹側面には、小なる刺を有し、其他の環節には黃點あり、蛹は上圖の如く、成蟲は本誌八十三號に圖說あれは之れを畧す。

マンシウアゲハの蛹の圖

## ◉牧田宇三郎氏の滿洲昆蟲送付

同氏は出征某師團野戰病院付にして、公務の餘暇に採集したる、左の滿洲昆蟲標本を、研究の材料に資せられたしとて、當所に寄せられたるが、玆に氏の厚意を感謝すると共に、該蟲の種類數を擧げて永く紀念とす。

小蛾類八種九頭。クサカゲロウ一頭。ハネカクシ一頭。椿象類三種三頭。浮塵子類四種四頭。ゴミム

シの一種一頭。トラフカミキリの一種一頭。ヒメハンメウの一種一頭。ハサミムシの一種一頭。計廿一種廿二頭。

## ◉岐阜縣昆蟲學會第八十回月次會記事

毎月第一土曜日開會の同會模樣を左に照會せん

同會は本月五日午后一日より、當昆蟲研究所内樓上に於て開會し、先づ名和梅吉氏は副會頭に代り開會の辭を述べ、第一席長期講習生野田稻司氏は害蟲驅除奬勵法の所感と題し、本年害蟲驅除に就て奬勵されたる各種の方法に就き、感じたる點を述べ第二席小竹浩氏は農家の武器と題し、農家に害蟲驅除器械の必要なるは兵士の銃劍に等しきものにして、必ず各戶設備を要するものなることより現今行はるゝ其器具の種々なる長短を擧げて注意を促し。第三席永澤小兵衞氏は、歷史地理と蟲名との關係と題し、諸國の神社或は人名等の蟲にちなみしものゝ數々を擧げて説明し、第四席三宅幸三氏は本會へ出席の筈なりしも、都合上害蟲驅除と捨苗代と題する記事を送られたり。第五席名和梅吉氏は、目下の害蟲驅除と題し、農民の殆んど形式的に驅除を行ひ居るは慨嘆の至りなりと述べられ。第六席山縣郡中島由太郎氏には、害蟲驅除を勵行するにあたり、目下の昆蟲志想の皆無なる農民に對しては能く其害蟲の何物たるやを話し、自から其恐るべき事を覺らしめなば、自然行ふべき旨を、小學兒童に例へて之を述べられ、後一同茶を喫しながら雜話をなし、五時閉會を告げたり。

## ◉水曜昆蟲談話會記事

當所内に於て毎週水曜日夜間開會の同會談話の大要を左に照會せん

名和梅吉氏は、東京に於ける昆蟲界と題し目下、東都各地に於ける昆蟲學研究の模樣を照會せられ、尙目下研究すべき要點、及被害形ハカジに就て研究上尤も有益なる講話をせられ◉小竹浩氏は、毛翅目の分類に就て、最も容易にして且つ記憶し易き特徵を擧て説明せられ◉名和愛吉氏は、本巣郡重里村に於ける兩度の採集模樣、及得物を照會せられ◉谷貞子氏は、直翅目の昆蟲に就て各實物により説明せられ◉野口次兵衞氏ば、稻葉郡岩崎方面に於ける大豆の害蟲がメムシ、メマキムシ、ハムシ其他に就て照會し、今後の幼蟲飼育の方針と題して如何なる方法に依る可きかを一同に諮り、尙松毛蟲、ハンノキ毛蟲の飼育及採集したる金龜子蟲廿二種に就て説明せり◉野田稻司氏は本田に移植後の害蟲調査、及四ヶ月間に採集したる天牛類十八種に就て各特徵を説明し、尙桑の害蟲なるキンケムシを斃す寄生蜂に就て照會せり◉町田弘氏は我國養蠶業の位置と題し尤も有益なる講話せられ◉嵯峨根熊藏氏は、京都府加佐郡地方に於ける害蟲驅除の方針、及び浮塵子驅除の良法として石油撒布する便法を照會せられ◉佐藤保一氏は、竹毛蟲に就て説明し。法をも一同諮らる◉小谷作治氏は、京都府地方に於けるエンマコホロギの驅除法を照會し、カヒガラムシの驅除法をも説明せられ、尙養蠶奬勵法と題し、信濃地方の養蠶發達の有樣を述べ奬勵法を照會せらる◉福永俊藏氏は余が昆蟲學研究の目的と題し、自己の略歷より斯學研究の必要を感じたる所以を述べ今後數ヶ月間專心研究せん旨を述べらる。

## ◉昆蟲標本陳列舘參觀人員

當所常設の昆蟲標本陳列舘を六月中に參觀せし總人員は三千〇四十五人、一日平均百十三人弱、内尤も多かりしは四日の三百四十二人最も少なかりしは廿一日に於ける三十三人なり、七月中の總人員は二万五千百十二人、一日平均九百六十六人弱内尤も多かりしは九日に於ける二万三千人、最も少なかりしは廿六日に於ける四十三人なりき

## ◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)
壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

(注意)　本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢
三十行以上壹行に付き金拾錢とす


明治三十八年八月十五日印刷並發行

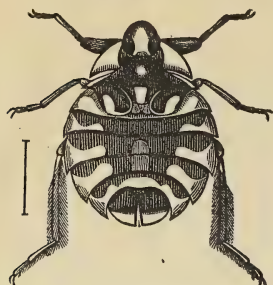
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二 (岐阜市公園内)
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戸　編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

**YASUSHI NAWA**

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] SEPTEMBER. 15TH, 1905. [No.9.

# 昆蟲世界

第九巻第九冊　明治三十八年九月十五日發行　第九拾七號

（毎月一回十五日發行）


## 目次（禁轉載）




名和昆蟲研究所發行

## 本所移轉擴張寄附金品領收廣告（第十四回）

一金貳圓也　京都府加佐郡高野村　嵯峨根熊藏君
一金壹圓也　滋賀縣愛知郡北蚊野　北村兼次郎君
一金七拾貳錢也　愛媛縣北宇和郡宇和島　矢野廣太郎君
一金壹圓也　神奈川縣中郡岡崎村　井上　福松君
一金五拾貳錢也　千葉縣安房郡岩井村　中山順之助君

小計金五圓貳拾四錢也
累計金九百參拾貳圓五拾貳錢也

右御寄附相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十八年九月十二日　名和昆蟲研究所

正誤　第十三回本欄廣告中秋田縣仙北郡六鄉町大西忠兵衛君とありしは同郡高梨村大西忠之助君の誤に付茲に訂正して其粗漏を謝す

## ◉滿洲產昆蟲特別廣告

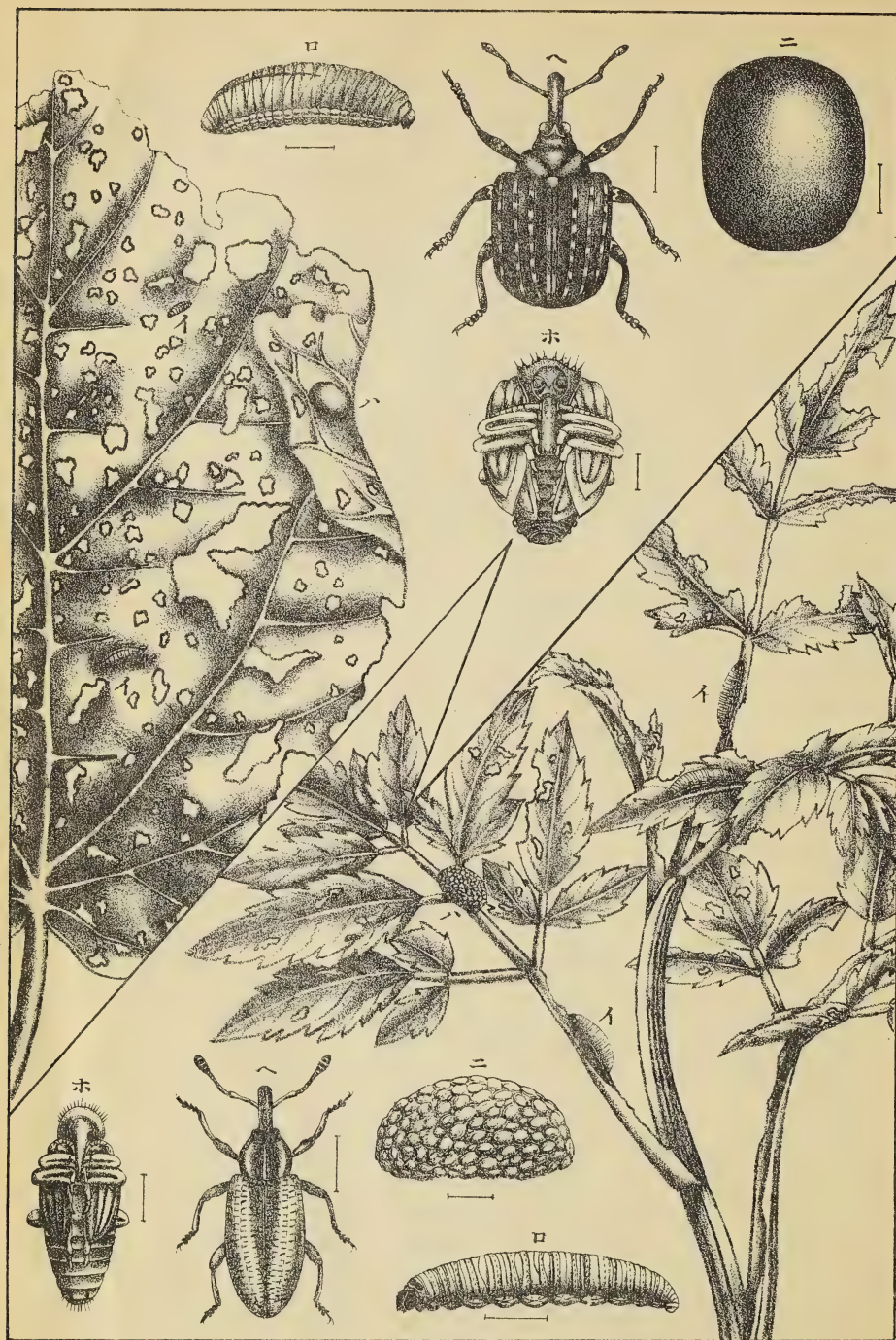
忠實なる出征軍人諸士が滿洲產昆蟲を採集して當所へ送附せられし事は其都度本誌上に於て略報し置きたれば讀者は既に其大略を知らるゝならん而して目下續々小包便其他の便法を以て多數送附せらるゝの報ありしを以て到着の上は早々報告の義務を怠らざるも到底多數のものを容易に盡し難きを以て茲に當所は特別紀念として滿洲產昆蟲を一括して永く後世に殘さんことを期せり願くば此際續々御送附あらんことを切望す

岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

## ◉特別廣告

本誌は去る明治三十年九月十五日を以て第一號を發刊し、爾來種々なる艱難辛苦の間に成長して漸く本月に至り、號を重ぬる九十七、年を經る茲に滿八年、其間一回の休刊なく、年は一年と改良に改良を加へ愛讀者諸君の厚意に酬んとするも、素と微力にして到底滿足を與ふる能はざるを遺憾とす。幸に愛讀諸君の厚意により、漸く本號に達したるは當所々員一同の滿足する所なり。今や征露の時局も愈々發展したると共に、害蟲軍の逐討も愈々急激に發展せしめざるべからず。されば本誌の特色とする作戰計畫を運用實行して、蟲軍の壓迫勦滅を圖るべきなり。故に記者は益進んで特別なる作戰方法、即秘密の方法を續々誌上に掲載して愛讀者諸君の參考に供せんとす。且本年十二月に於て第一百號に達して全く第一世期を終り、明年一月發刊の第百一號即ち第二世期の初號なれば此期に際し大に祝意を表せんとす。其方法に至りては、今より饒々敷云ふの要なければ只讀者の想像に任せんのみ。

明治三十八年九月　岐阜市公園　名和昆蟲研究所

圖過經のとシムウザラダマとシムウザボイ

## ◎萊菔類の害蟲猿葉蟲驅除豫防法

名和昆蟲研究所調査主任　名　和　梅　吉

余は本誌前號に藍作の害敵たる藍髓蟲に就き記述し置きたりしが、今回は將に其發生を認知せられ益々繁殖して萊菔類に大害を加へんとする所の猿葉蟲に就て記述せんとす。抑も萊菔、蕪菁等を始め、總ての菜類に集來し好んで喰害する蟲類蓋し尠からず。就中此處に記述せんとする猿葉蟲の如きは、一般蔬菜栽培家の常に憂慮する一大害蟲と謂ふべし。去れば左にその習性、經過幷に驅除豫防法に關し余が知得せる梗概を記述し、以て大方諸彥の參考に資せんと欲す。

常に萊菔、蕪菁等に發生加害する葉蟲類數種あり。其最も普通なるものは縞葉蟲、菜蚤葉蟲、及び爰に記述せんとする猿葉蟲なりとす。此種は亦サンショウムシ、コガネ、ダイコムシ、カヾミムシ及サル等と稱し、各地方に依り方言種々ありとす。形躰小にして、體長僅かに一分內外より一分四五厘を算し、全躰光輝ある黑色圓形の種なり。頭部は最も小形、常に前胸中に陷入するやの觀あり。觸角は他の葉蟲類に比し短かく、稍棍棒狀を呈し十一節より成れり。脚部も亦短かく、跗節は四個より組成し、第三節は通常他の同類中に見るが如く縱裂するを常とす。而して翅鞘上には細點より成りたる縱條を現せり、

年々五月の頃より現出して加害すと雖も、元と同期間に於ては、彼等の糧食たる蔬菜の栽植せらるゝものの少なきを以て、從ひて其繁殖緩慢なるを常とす。故に秋期萊菔類の繁茂時期に到る迄は、殆んど其發生を認知し能はざる程なり。然りと雖も彼害蟲は、假令最も嗜好する所の栽植蔬菜類なくとも、自然生の十字花科植物に依り露命を繫ぎ以て其期を待ち、期到れば直に飛來し加害を逞ふすると同時に、子孫の繁殖を圖るものなれば、其甚しき塲合には往々全圃の蔬菜をして皆無の結果を生ぜしむることあり。然るに一般に該蟲の發生に付き加害程度を唱導せらるゝは、重に其最も加害の劇甚なる時にあるものゝ如し。抑も十、十一月の頃に到りては彼等の加害終極に垂んとする塲合にして、前述の如く五月の頃より秋季大害を加ふる迄には、既に二、三回の發生經過を終り、其數を增殖し來りしものと知るべし。

元來該蟲は飛揚する事少なく、之に近く時は能く地上に墜落するの性あり。期到れば雌蟲は葉莖或は葉裏に小穴を穿ち、其中に一顆の卵子を產附するを常とす。卵子は僅かに四厘內外、楕圓形を呈し黄色なり。凡そ數日乃至十余日を經て、孵化して幼蟲となる。其幼蟲は淡黃黑色を呈し、老熟期に近く時は漸次濃色を呈し、一分七、八厘より二分內外に達せり。毎關節上には肉狀突起を存し、之より細毛を生ずるを常とす。而して此幼蟲時代には、喰害すると成蟲よりも極めて大なるものなり。幼蟲の老熟せるものは、加害植物の根際土中に入り蛹化す。蛹は一分二三厘許、淡黃色を呈し局部に刺毛を有せり。最も該蟲の一世代に費やす時日は食物の多寡、氣候の寒暖等に依り一定せずと雖も、概ね卵期には數日乃至十余日、幼蟲期には二週日より三週日余、及蛹期には數日乃至二週日間を費やすものゝ如く。素より成蟲に至りては能く數ケ月の生存期を保ものなり。即ち成蟲期にて一般に冬季を經過するものゝ如き然りとす

サルハムシの圖

猿葉蟲に關する梗概は前述の如くにして、五月以來秋期迄に充分なる食物を得る塲合には能く四五回の變化をなし、漸次其數を増加するものなれば、秋期萊菔及菘類の多き塲合には一層繁殖するを以て、從ひて受くる所の加害程度の大なるは自然の結果と謂ふべし。去れば十、十一月頃に到りては、一時に卵子、幼蟲、蛹及び成蟲等を發見するを得爲めに其何れのものが幾世代のものなるや判別し能はざるものとす。而して一般に十一月頃に到りては、漸次土中或は塵芥下、或は雜草の根際等に潜伏し、以て冬眠を爲すものなれども、亦屢々冬期降雪融解の頃に蕓薹等の眞葉上に發見することありとす。今左に其驅除豫防法の一斑を紹介せん。

第一成蟲幼蟲の捕殺　　該種は成蟲、幼蟲共に吾人の近く時は能く墜落するの性あるを以て、該蟲の發生を認むる時は、直に捕蟲器或は箕の如き手頃の器物中に掃ひ落して驅殺すべし。

第二藥劑驅除　　該蟲驅除豫防上一般に使用し、有効なる藥劑と稱するは石油乳劑（石鹼十八匁、石油一升、水五合以上混合液を原液と謂ふ）除蟲菊加用石油乳劑（石油乳劑原液稀薄の際、別に除蟲菊粉二匁を一升の微温湯中に溶解せし液を混和せるもの、其割合は石油乳劑四、五十倍稀薄液に四十分の一を混和するものとす）煙草乳劑、及除蟲菊粉と石灰末とを混和せしもの等なるべし、兎に角除蟲菊粉は、凡ての乳劑に混和使用せば有効なりと雖も、只價格の不廉なるは經濟上遺憾とする塲合あり。

第三誘引驅殺　　該蟲を誘引集來せしめて驅殺するには二法あり、一は普通の播種期に先ち、彼害蟲の嗜好すべき白菜の如きものを播種し、之に集來せしめて驅殺すると、一は萊菔、蕪菁等の圃間に藁或は雜草、或は塵芥等を堆積し置き、冬眠の爲め之に集來するを驅殺することと之なり。右二法中、第一の方法は年々加害甚しき塲所にて往々實施せらるゝものなり。

第四他植物に對する注意　年々加害を受くる場所にては、春季以來自然生十字花科植物に注意し、以て發見次第捕殺に勉むべし。

## ◎黑鋸蜂に就て

兵庫縣佐用郡久崎村　井口宗平

去る四月廿五日の事なりき、余は河邊なる野生の薔薇を訪ふて、昆蟲世界の實地研究をなし居たるに、チウレンヂ蜂の外に數多のクロノコギリバチの集まれるを見、そはいづれの目的を以て集來せるやを究めんと欲し、其擧動を熟視せしに、彼は蚜蟲の多き嫩芽に飛び來るや、猛烈なる勢を以て蚜蟲の群を銜けり。此に於て略々其目的を察し、一層これを熟視せしに、彼は蚜蟲を捕ふる事數頭、口内に充つるに及んで、頭を擡げて悠然としてこれを咀嚼し、嚥下し了るや更に前の勢を以て啄食す、蚜蟲群は今にも全滅に至らんとするの有樣となりしが、蚜蟲は其勢に僻易しけん、續々這ひ下り、或ひは愴惶逃れんとして落下するあり、數分時にして其嫩芽には蚜蟲の影を留めざるに至りぬ。其權幕の素晴らしき、又其敏活なる擧動には余思はず快哉を叫べり。喰蚜蟲類多しと雖も、未だ嘗てかくの如き暴食をなすものあるを聞かざりき。將た余が淺學寡聞なるによつて然るか。其當時は確實に此種の蜂の何れもが、盛んに捕喰せるを實見せしが、其後更に探究するの機會を失しければ、其果して終始かくの如きか、將た其幼蟲の食草の何なるかを知らず、又該種に類似せる鋸蜂も、亦多く薔薇に集來せるを見ければ、飼育箱内に於て實驗せんとせしも、終に何等の結果をも得ざりき。故に或ひは甘液をなめんが爲めに來れるにや、將た食肉性のものなるや更に知悉するによしなし。唯こゝには少時間内に於ける實驗を陳述して、識者の明敎を仰かんとす。終りに臨んで、該蜂の体軀の構造、其他に就て研究せしところを述べんに、

雄は体長二分五厘乃至二分七厘、翅張四分五厘乃至五分、雌は体長三分五厘、翅張六分五厘内外にして孰れも全体光澤ある黑色を呈す。觸角は黑色紡狀にして十節よりなり、基部の三節は小さく其中第二節は球狀にして稍大ひなり。前胸馬蹄狀をなして、其後端翅の基部に達し、中胸ほゞ六角形にして胸部の大部をしめ、後胸は小なり、後肢の基節頗る大にして長さ七厘あり、其基部より漸次先端に至るに從ひて細し。各肢の脛節の末端には各二刺を具へ、雌の產卵器は褐色にして、黑色の鞘に包藏せらる。雄の尾端には二箇の突起あり。此蟲の具有せる黃白色部には、頗る著しき變化ありて、多數の標本を比較する時は殆んど歸着するところを知らず、或ひは別種にはあらずやとの疑念をさへ生ぜしむる事あり先づ顏面に就て述べんに、其黃白色部のはづかに上唇及下顎鬚、下唇鬚に止まれるもあり、又其額片に及べるあり。更に複眼及單眼を除くの外は、頭部全体に、又甚だしきは觸角の下面一帶に亘れるものさへあり、胸部に於ては菱狀部及前胸背の中胸背に接するところ細く八字形をなし、後胸背には相對せる二小紋あるは普通なれども、亦全く黃白部を欠けるあり。又八字形の部相分裂して數箇となり、又は中胸背に二紋を加へたるあり、或ひは菱狀部の黑色なるあり、其他千變萬化かれにありてこれになきありこれに見ざるもの亦かれに具へたるあり、尾端の白色部は、有せざるもの丶方多きが如し。脚に於ては後肢の基節及各肢の脛節黃白なるは普通なれども、其變化亦非常にして、脛節に代ふる跗節を以てせるあり、或ひは基節の內側のみなる事あり、外側に限れる事あり、はづかにあらはれしもの、殆んど全く黃白なるもの、又各肢の基節皆黃白なるものあるなど、實に奇といふの外なし。

附記　此稿を了りて後五月廿一日、復該蜂のミドリアブラムシを捕食するを見たり、余は終に其誤らざるを信ずるなり。

# ◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査（一三）

名和昆蟲研究所員　名和正

石蠶科(Phryganeidae)　雌雄によりて小腮鬚の關節は其數を異にし、雄は四節雌は五節より成る。觸角の基部短大にして、翅は廣く不透明なり。幼蟲は池、沼澤及溝渠等の卑濕の地に生息し、水棲植物の枝葉、又は水中に墜落せる枝葉等を綴り、圓筒形の巣を作りて其内に棲息し、成蟲は夜間飛揚す。

（一七五）ムラサキオホヂムキ(Holostomis regina, M'L.)　体長雄は七分内外雌は七分乃至一寸、翅張雄は二寸乃至二寸四分、雌は二寸三分乃至三寸、觸角暗褐にして連環狀をなし先端細く、短剌毛を密生す。複眼黒く、三個の單眼は黄白若くは黄褐なり。顔及口具は褐色、前胸は小さく、中后胸は大にして何れも剛毛を有す。翅は黄土色にして焦茶色の大小紋を散布し、前縁にあるものは大きくして濃く、外縁にあるものは翅脈上に点布す。基部には剛毛あり。後翅は幅廣くして紫黒色を帶び、先端に近く黄土色の廣き横帶あり、翅底には細毛を密生す。肢は脛跗兩節黒褐に、他は黄褐なり。雄の腹端には短き鑷子狀の附屬物ありて、內方に曲る。松村博士著千蟲圖解のムラサキトビケラは即ち是なり。

（一七六）ヂムキカゲロウ(Phryganea japonica, M'L.)　体長雄は五分乃至七分五厘、雌は七、八分。翅張雄は一寸四分乃至一寸九分雌は二寸乃至二寸二分。觸角連環狀にして黒褐に、先端細くして黄褐を呈す。複眼黒色三個の單眼は黄褐なり。頭部及前胸背には灰色及黄色の剛毛を密生し、前翅は鹿毛色にして微細の斑紋を有し、中央に黒褐縱帶あり、基部には稍長き剛毛を有す。後翅は幅廣くして、黄土色を帶び先端暗褐なり。肢も黄土色にして脛跗兩節は暗褐を呈す。雄は腹端に二個針狀の附屬物を有す。松村博士著千蟲圖解のツマグロトビケラは即ち是れなり。

（一七七）ウンモンヂムキ(Phryganea sordida M'L.)　体長五分乃至六分、翅張一寸三分乃至一寸四分

觸角濃褐にして先端細く色淡し。三個の單眼は琥珀色を呈して基部黑く、前胸には長き灰白及黑色毛を密生す。前翅は灰黃白色にして、濃褐の大小斑紋は雲紋狀をなし、內縁角に近く一個の曲玉狀に似たる白斑あり。後翅は透明にして、外縁少しく暗色を帶ぶ。肢は跗節に黑斑を有し、雄の腹端には短き針狀の附器を有す。

褐翅石蠶科(Limnophilidae)　前種同樣雌雄により小腮鬚の關節數を異にし、雄は三節、雌は五節より成る。觸角の基節太くして長く、前翅は細長くして、內縁稍弓狀をなすもの多し。幼蟲は、或は急流に或は止水中に生活し、往々樹の根際に生する蘚苔中に生活するあり。巢は自由に動くことを得。

(一七八)マツカハヂムキ(Glyphotaelius damorsus, M'L.)　体長七分乃至九分、翅張一寸八分乃至二寸二分、觸角暗褐にして先端に至るに從ひ褐色を帶びて細し、三個の單眼は琥珀色にして、頭頂平たく、灰白の短毛を有し、前胸は梯形をなし灰白毛を有す。頭頂より中胸に亘りて一縱線あり。前翅は半透明にして松皮色を呈し、外縁は波狀をなし、其後半は刳りたるの觀あり。翅の中央には稍斜に灰白の横條紋あり、內縁の二脈上に黑褐の條斑を有す。後翅は殆んど透明にして、先端少しく黃色を帶び、脈條黃色なり。肢は黃褐にして跗節は稍黑味を帶ぶ。千蟲圖解のエグリトビケラと同種なり。

(一七九)スヂヂムキ(Nemotaulius similis, Banks.)　体長四分五厘乃至五分五厘、翅張一寸二分五厘乃至一寸四分、觸角赤褐にして先端は色淡くして細く、單眼は黃褐を帶ぶ。頭頂平たく、前胸稍大にして其後縁に稍長き黃色毛を有す。前胸より中胸に亘りて中央に一縱溝あり。前翅は淡黃褐にして不明の灰色斑を有し、副內縁脈に沿ふて二個の黑條斑と、內縁脈に沿ふて一條の太き黑條あり、翅尖にも亦黑縱條あり。後翅は透明にして脈條黃色に、翅端は稍黃色を帶ぶ。肢は黃褐なり。千蟲圖解のスヂトビケラ

是れなり。

（一八暗）トビイロヂムキ(Nothopsyche pallipes, Banks.)　体長四分乃至四分五厘、翅張一寸一分五厘乃至一寸四分、頭部〇褐に觸角黒く、單眼は淡黄色にして基部暗褐に、后頭部には黒き剛毛を粗生す。前胸は黄褐色にして黒き剛毛を有し、中胸に亘りて中央に一縱溝あり。中胸背は暗赤褐にして、翅の基部前方に疣状物を有し、夫れより黒色の剛毛を簇生す。前翅は淡き暗褐色にして半透明をなし、斑紋なく、後翅は透明にして僅に灰色を帶ぶ。兩翅共に胸條黄褐なり。肢は黄褐にして、后肢の脛節の半は稍暗色に、跗節には黒き短刺毛を有す。

長角石蠶科(Leptoceridae)　雌雄の小腮鬚は共に五節より成りて細長く、前翅は甚だ細長く短毛を密生し、觸角甚だ長し。幼蟲は池沼或は急流の何れにも棲息し、砂を以て圓筒狀の巢を造り、少しく彎曲するもあり。

（一八一）コヂムキカゲロウ(Stenopsyche griseipennis, M'L.)　体長五六分、翅張一寸四分乃至一寸八分体黄褐にして觸角褐色を帶び、細長くして体に二倍す。三個の單眼は黄色を呈すれども、基部は黒し前胸は甚小にして頭部と共に灰白毛を密生し、中后胸には同色毛を粗生す。前翅は細長くして、乳白素地に微細なる暗褐斑を密布し、后翅は乳白色にして半透明をなし、内緣に長き白毛を有す。肢は黄褐を帶び、中肢の脛節に黒褐斑あり。雄の腹端には針狀の短き附器を有す。千蟲圖解のヒゲナガトビケラ是也。

（一八二）ホソバトビケラ(Molanna sp?)　体長三分乃至三分五厘、翅張一寸乃至一寸二分、觸角暗褐を帶ひ、頭部及前胸には黄褐の短毛を密生す。翅は前后共に甚だ細く、前翅は灰褐を帶びて、中央に一個其外方に數個の透明紋あれども、往々不明なり。后翅は半透明にして、前翅より稍色淡く、内緣の基半

に長軟毛を密生す。肢は灰褐なり。此種は惠那郡千旦林小學校、宮川繁一氏の採品一頭を送られたるのみ毛翅目に屬するものにて今回の採集にかゝるものは以上の三科八種のみなりしが、今之れを表示せば左の如し。

| 番號 | 蟲名 | 岐阜市 | 稻葉郡 | 羽島郡 | 海津郡 | 養老郡 | 不破郡 | 安八郡 | 揖斐郡 | 本巣郡 | 山縣郡 | 武儀郡 | 郡上郡 | 加茂郡 | 可兒郡 | 土岐郡 | 惠那郡 | 大野郡 | 益田郡 | 吉城郡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一七五、 | ムラサキオホヂムキ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | 二 | ― | ― | 三 | 三 | ― | 三 |
| 一七六、 | ヂムキカゲロウ | ― | 一 | 二 | 二 | 四 | 一 | ○ | ― | 二 | 一 | ― | ― | ― | ― | ― | 一 | 二 | ― | ― |
| 一七七、 | ウンモンヂムキ | ― | ― | 一 | 三 | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | 一 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| 一七八、 | マツカハヂムキ | ― | 一 | ― | ― | 四 | 一 | ○ | ― | 四 | ― | ― | ― | ― | 二 | ― | 一 | 三 | 一 | ― |
| 一七九、 | スヂヂムキ | ― | 一 | 五 | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | 一 | 一 | ― | 一 | 一 | ― | 一 |
| 一八〇、 | ヒロバヂムキ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | 一 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | 一 |
| 一八一、 | コヂムキカゲロウ | ― | ― | 一 | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | 七 | 五 | ― | ― | ― | ― | 二 | 七 | 一 |
| 一八二、 | ホソバトビケラ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ○ | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | 一 | ― | ― | ― |

## ◎桐樹の害蟲疣紋象鼻蟲に就て（第九版上圖參看）

名和昆蟲研究所助手　森　宗　太　郎

元來桐樹に寄生して害を加ふる蟲類は、他樹に比し余り多からざるもの丶如し。是迄に余が目擊する所にては、樹心中を喰害する所のクモガタコホモリと、葉を加害するものにては金龜子類及び此疣紋象鼻蟲等にして、此他往々蚜蟲の寄生することありとす。右の內疣紋象鼻蟲に就き聊か數年前に於ける實驗の有樣を左に記述し、以て紹介し置かんとす。

イボザウムシ（疣紋象鼻蟲）は鞘翅目中象鼻蟲科に屬するものにて、翅鞘上に多く、疣狀紋を有するに由り

此稱あり。其が學名は未だ明かならざるも、Cionus屬の種なるが如し。躰長口吻狀の末端より腹端までは一分八厘內外を算し、頭部の複眼部より腹端までは一分四、五厘とす。全躰黑色にして灰白紋を散布し且翅鞘上には疣狀紋を縱列し、其間に亦灰白點を有せり。稜狀部は稍や楕圓形を爲し、茶褐色の細毛にて被はれたり。而して翅鞘の接合部には、中央と後部とに、稜狀部と同樣の着色紋を保有するを常とす。觸角は膝狀を爲して十節より組成し、基節は非常に長く、殆んど他の九節の合長に等しとす、而して先端の四節は膨大して葱花狀を呈せり。脚部は三對共に殆んど同形にて黑色、之に灰白鱗毛を生じたり。且つ四蹠節を有し第三節は縱裂し、爪は二個にて赤褐色を呈し著明なり。該蟲は四、五月の頃桐樹の新葉開發するの候に現出して產卵し、孵化すれば葉裏にありて其葉を咬害し網狀をなすを常とす。充分老熟せしものは躰長二分余に達し、鈍黃褐色にして無脚、恰も蛆の觀あり。然し頭部は能く發達して咀嚼に適する口器を有するを以て普通の蛆とは明かに區別し得べし。期到れば葉裏或は其近傍の草木葉に於て造繭す其狀殆んど球形にて赤褐色を呈し光輝あり、繭內にある蛹は淡灰黑色にて翅、脚部等は余程水色を保ち美なり。躰長一分六七厘を算す、余が目擊せし時は五月の下旬なりしが、大概造繭し終り、中には既に成蟲となりたるものも多かりき。兎に角採集せし多くのものは六月上旬に到りて羽化し終りたり該蟲の大要は前揭の如しと雖も、余は不幸にして未だ其後に於ける經過を實驗せざれば此處に報じ難し若し大方諸君の該蟲に就き研究されしものあらば、幸に垂敎あらんことを請ふ。

第九版イボザウムシ圖解　（イ）は幼蟲（ロ）は其放大圖（ハ）は繭（ニ）は其放大圖（ホ）は蛹の放大圖（ヘ）成蟲即イボザウムシの放大圖

## ◎文學上に於けるタマムシの位置

在岐阜　永澤小兵衛

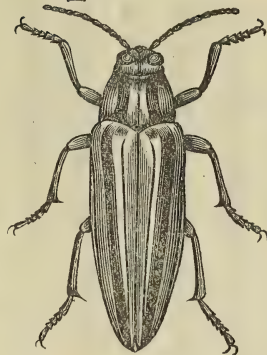
**たまむし**玉蟲（邦名）。吉丁蟲、綠金蟬、金蟲（漢名）

鞘翅目、甲蟲亞目、鋸齒樣角類の吉丁蟲科に屬せる昆蟲にてコメツキ　ムシとは、最と近似せる族類なれども、此はたゞ飛翔するのみにて、稽首翻跳の技能あることなし。種品頗る多くして、形に大小あり色には紫黑、銅褐、金碧等の差へあり。且その幼蟲にも、無脚なると、有脚なるとの別さへあれば、被害植物も、亦自から數種の多きに上り、松、槲、林檎、朴等は、常にこれが爲に蝕損せらる。性、温地を好み、畿內より四國に亘る地帶の附近には、その蕃殖盛んなれども、北の方、水戶海岸を過ぎて、黑松自生帶の極端部に到れば、その影漸く失せて、纔に樅林に棲息せるものあるのみ。この簇中、最も能く人に知られしものは、金光を帶びたる碧綠色の大形種のみにして、他は未だ詩文の料にも、兒女の翫弄にも、將た工藝品の裝飾にも供へられざるが如し。そは邦俗のこれを光潤の、熒々たる翠玉に擬へてタマ　ムシと呼び、漢土に金蟲又は綠金蟬と名づけ、又北米合衆國に於ける最大種は我がウバ　タマムシに彷彿たるヴワルジニア產のものなるに、猶ほこの族の總名を金光蝎(Metallic Wood-borer)と稱へたる等の事實に徵して知るべし。幼蟲は樹心を穿蝕して、往々林園の枯衰を促がすことあれども、一たび羽化せば、樹液花汁に聚まるものなるを以て、隨ひて、その害も薄らぐ。概ね季春より出現して、酷熱殘暑の交に生殖作用を終へ、卵粒を樹皮下に產みつく。その生存期は、迥に他蟲よりも長くして、中には能く十數年の齡を保つものもありと云なり。

そもタマ　ムシは、本邦固有のものなれども、國文學者に持はやされしは、鎌倉時代に入りての後なり四季物語八月の記事、選蟲の條に

宮の若人だち、后宮或は內の宮の仰言にて、內部、鳥部野、栗栖野などにて、くさ〴〵の蟲選と申して、それかれかなど奉るに、形たどろ〴〵しうも、聲の限をつくし、をかしきもあり。又形は美しう、玉蟲などいひていみじけれど、蟋蟀促織絡線にさへ劣りて聲立てぬもあれど、この蟲が、やんごとなき幸あるものにて、宮の曹にて、何くれの御局にも、御櫛笥の中なる白粉の中にまろびて、

骸は人をさへ野邊にふでたんめるならひなるに、十年二十年の後までも、御物の中に包ませ置かせ給ふことよ。かうやうの物等、雲井にまうのぼる。昔賢き人も草を耕して、位にのぼりしをさへ、珍しうありがたき事に物するに、殊にこれはやうかはれり。

と見え、又新撰六帖の第六に、九條三位入道の歌あるは、その證とすべし。斯くて、室町時代の中葉頃に、玉蟲草紙と云ふが、先づ世に出で、踵でコウロギ草子にも、タマ　ムシの狂歌を載せたるが更に江戸時代に至りて、益々その位置を高め、遂にあらゆる文學の資料とはなれり。さらば。平安朝時代には全く之を文學以外に置きたるかと云ふに然にもあらず。固より此の頃は、婦人の奩底に祕められし一翫弄物たりしならんも、古今集の玉結びの歌、壬生忠岑家集の空蟬の歌、及び相模家集の露の歌などには、如何にも此蟲に言懸たらんやう思はるゝ節ありて、能く新六帖の歌意に通へるのみか、また林羅山が韓非子より引きたる楚の和璧の故事にも合へれば、恐らくは諸を詩料に取りしなるべし。況して續日本紀に從五位上美濃直玉蟲が、本國の國造となりたる事實を記し、葉室時長の作といひ傳へたる源平盛衰記の元暦二年二月二十日（平家物語には十八日とあり）の記事に、平家方より、玉蟲の前を小舟に乘せ、陸岸近く漕寄せて、扇を擧げて源軍を招がせける由を載せ、順德院の御撰と聞えたる八雲抄にも、スズ　ムシ、マツムシなどゝタマ　ムシの名を擧げ置かれたれば、既にそれより以往、既に之を人稱にも、宮中の愛玩にも供へしこと明かなるをや。又萬葉集に、湯原王が詠める「草まくら旅には妹は率たらめど櫛笥の中のたまとこそ思へ」の歌あるは、早や奈良朝時代より、この蟲を媚藥に用ゐたる的證にて、唐の陳藏器が本草拾遺の「吉丁蟲、甲蟲也、背正綠、有レ翅在ニ甲下一、出ニ嶺南賓澄諸州一、人取帶レ之、令下レ人喜好相愛上、

タマムシの圖

媚藥也」の意を聞かせたるものにぞあるべき。然るを本居宣長は、匣中の玉の如き妻なれば、旅には誘ひ來り難き義に解し、加藤千蔭は、その妻を匣中の玉の如く惜み思ふ意に解して、倶に男女戀愛の秘事に說及ばざりけるより、當時の風俗を寫し〻可惜名歌も、得て解し難きものとはなり畢りぬ。而してタマムシを媚藥に用ゐることは、漢俗の我れに移りし迷信の一なるが、それより再轉して、諸を衣服の間に藏むれば、衣裳に事缺かぬとの俗說も起りけるにや、社會事彙の迷信の條に、その事見えたり。嬉遊笑覽にも、玉蟲を貯ふる事、古き事にや、異本四季物語蟲撰みの條に(中略)漢土に媚藥といふことあり、本草にも往々見ゆ。其物を貯へもてば、人に愛でいつくしまるゝとあり、玉蟲も是等の意にや、北戸錄蝙蝠の條下に、媚藥種々擧げたり、蟲もあり草もあり、諸艶大鑑に、手なれし鏡臺引出しゆかしく見るに、はらや筥に玉蟲云々、江戸枝折、椰の葉に今玉蟲のうしろ向。また眞珠をはらやに雜て置けば、其珠分身して數多くなるとて、兒女のする事なり」云々とあり。想ふに、最と古くより、文人に知られしものなるべけれど、歷代の撰集に收められざる爲、自から詠題にも漏れけるにや。（未完）

## ◎鳴く蟲に就て（九）（第八版圖參看）

名和昆蟲研究所内　谷　貞　子

（九）クサヒバリ（Cyrtoxiphus ritsemae, Saus.）狗蠅黃　軀長雄は二分二三厘、灰黃を呈し、頭頂に褐色の横線を有す。觸角は長さ一寸五分灰褐色をなし、複眼は綠褐にして橢圓形なり。前胸背の前緣は黑褐中央に黑褐點を横列し、濃褐の細毛を粗生す。雌は方形なれども雄は稍梯形をなす、兩側の下緣は黑褐色をなす、前翅は長さ一分五厘、膜質にしてまゝ黑斑あり、翅脈は淡褐、前緣黑褐なり、後翅は退化す、腹部は灰黑、尾狀突起も淡褐色にして長さ一分、產卵器は長さ一分、鈎狀にして光澤ある濃褐色を

なす、肢は灰黄色にして各腿節に黒褐の二條線あり、後肢の脛節には刺を有す、雄の前翅は長さ一分七厘、其幅廣し、成蟲は七八月頃より九月頃、笹原等の中にて晝夜の別なくヒッリヒッリヒッリ……と其音高く且清亮の聲にて鳴々す、千蟲譜に、狗蠅黄、ヤブスヾ、クサヒバリ、秋風立て新涼の頃朝より晝までなく羽をたて鈴蟲の如し其蟲は極小にして聲は清亮遠くに聞へ連綿として小鈴を搖撼するが如し、木葉の枯れたる卷葉にすむ、冷氣に至れば屋中紙窓に入て啼く初秋涼氣を待て聲をなす故に一名アキカゼと云小樊に養て秋色を助くべし」とあり(第八版第八圖)

(十)キンヒバリ(Gn? sp?)　躰長二分、体黄褐色を呈し、頭部は小形にして粗毛を有し、複眼は卵形にして黒褐なり。觸角は褐色にして体に三倍す。前胸背は黄色にして細毛を有し、其前緣狹し。前翅は膜質にして、翅脈黄色を呈す。腹部は黄色、尾狀突起は長さ五厘餘黄色をなす、肢は体と同色にして、後肢の脛節には細刺を有す。成蟲は七、八月チッチッチリー、チッチッチリー、と其音高く且美聲にて鳴々す東都等にて往々蟲屋の鬻ぐ所のものなり。雌は未だ見ず(第八版第九圖)

(十一)イブキスヾ(Gn? sp?)　躰長二分、雄は体の形狀前種に能く酷似し、雌は頭胸部小にして光輝ある濃き紅紫色をなし、細毛を有す。複眼は楕圓形にして黑く、觸角は暗褐にして体に三倍し、基部は膨大して黒色なり。前胸背は方形にして雄にありては其後緣雌より廣し。前翅は長さ一分五厘、膜質にして翅脈黄褐色なり。後翅は退化して極めて小形、腹部は紅紫色にして、尾狀突起は長さ五厘黄褐色をなす。産卵器は鈎狀にして長さ七厘あり、肢は各々黄褐にして前中の兩肢は黑色、各關節の接合點は褐色をなす、後肢の脛節には細刺を有す、雄は前翅一分七厘能く腹部を覆ふ。成蟲は八、九、十月頃に現出し、常に山間の濕潤なる地にて晝夜の別なくリュウフリュウフリュウフ……と美聲もて其音高く鳴々す。此

種は初め伊吹山にて採られしを以て此名あり。

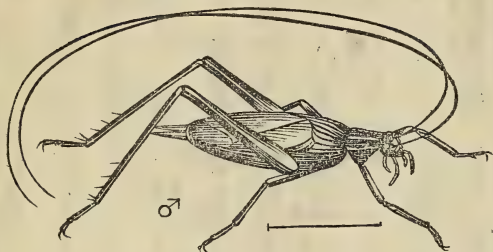
(十二)マダラスヾ(Nemobius nigrofasciatus, Nats.)　雄は体長二分、頭胸腹の上面は淡褐色の中に黒褐點を散布し、細毛を有す、顔面は光澤ある黒色にして、複眼楕圓形黒褐なり。觸角は淡褐にして体より僅に長し、前胸背は方形にして、其兩側黒色をなす、前翅は長さ七厘黒褐翅脈も亦褐色にして腹部の下半を露出す、後翅は白色、退化して小形なり、腹面は灰色、尾狀突起は長さ一分、黒褐色にして白色斑あり。産卵器は長さ一分、褐色にして鎗狀をなす。肢は各々灰白色の中に黒色斑を有し、後肢の脛節に刺を有する事他の種に等し、雄の前翅は長さ一分二厘、腹端を僅かに露出す。成蟲は六、七月頃と十、十一月頃との二回に現出し乾燥濕地を撰ばず到る所の草間にてリリリ、リー、リー、リー、リー、と其音低く鳴々せり(第八版第十一圖)

(十三)ヤマトスヾ(Nemobius nigrofasciatus, Mats.)長聲兒　躰長二分、其形狀は前種に能く酷似し体は淡褐色にして黒褐點を散布し雄の顔面は光輝ある黒褐色なり、觸角は暗褐にして略ぼ体に倍し、複眼卵形にして黒褐色をなす、前胸背は前緣僅かに狹くして兩側黒褐なり、前翅は暗褐にして長さ一分五厘、翅脉淡褐、腹端を僅に露出す、後翅は白色をなし、退化して極めて小形なり。尾狀突起は長さ七厘、腹部と同色なり、肢は各々淡褐色にして、細かき黒褐點を有し、後翅の脛節に刺を有する事他の種に等し産卵器は長さ一分褐色をなす、成蟲幼蟲共に前種と同じく六、七月頃と十、十一月との兩度に現出す、千蟲譜にヤマトスヾ「自園中深草中にあり、蟋蟀中最小者也。形小なりと雖も啼響は意外に遠くに聞ゆ、積年此蟲聲を聞とも形を知る事なし。文政五壬午秋月佐藤左門此蟲を捕て贈來、始て小紗樊中に蓄ふ新御殿に献ず、一個は七月の末より八月三十日、夜も枕邊にをき連綿不絶雅韵あり、秋情を慰す。佐藤

氏名を知らずこれを假に長聲と稱す、又音通長生と號す、有詩云、微物看難見無知亦有名聲々鳴不息恰似祝長生」とある如く晝はチ——、又ヂ——と夜はリユ——、リユウ——、、と晝夜を別たず鳴々す（第八版第十二圖）

（十四）ヒメクマスヾ(Nemobius histrio, Sauss.)　雌は躰長二分、其形狀極めて前種に酷似し、光輝ある黑色にして細毛を有す、複眼は楕圓形にして黑色をなし、觸角は黑褐にして体より僅に長く、下顎鬚の先端の二節は白色をなせり、前胸背は方形、其後緣は雄は稍廣し。兩側は背と其色彩を異にせず、前翅は長さ七厘腹部の上半部のみを覆ふ事前種に等し、後翅は退化す、腹部も黑く尾狀突起は長さ八厘黑褐色なり産卵器は長さ六厘濃褐色なり、肢は各々黑褐色にして前種と等しく細毛を有す、雄の前翅は長さ一分五厘、光輝ある黑色なり。成蟲は八、九、十月頃、山邊の光線入射乏しき地に現出し、常に枯葉又は小石の下等にて晝夜の別なく低音にて。リリリリリ、リリリリリ、、、、、と鳴々するをきく。（第八版第十三圖）

（十五）ヒゲシロスヾ(Gn? sp?)　躰長二分、此種は形狀、色彩等前種に極めて能く酷似すれども、体幅少しく廣く、觸角は名の如く中央白色をなし、体とほゞ同長なり、前翅は雌雄共に長く、雄は長さ一分五厘全く腹部を覆ふ雌は長さ一分あり、成蟲はジ——、と其音低く鳴々し常にヒメクマスヾと同棲す（第八版第十四圖）

（十六）スヾムシ(Homoeogryllus japonicus, D.H.)金鐘兒　体長五分、体黑色、雄の頭部は小さくして光澤あり、複眼は卵形にして黑褐色を呈し、觸角は体の二倍以上ありて基部は黑色、中央は黄白色にして先は黑褐色をなす。前胸背は小にして、著しく中央に於て凹み、灰褐色の斑紋あり。兩側は黑色をな

す。前翅は長さ四分五厘、黑褐色にして上面廣く、平直にして全腹部を覆ふ。又前緣は斜に內方に折れて腹側を覆へり、後翅は退化してたゞその痕跡を殘すのみ、圖版の該蟲は即ち鳴々せる狀態なり。腹部は小さくして腹面灰黑色をなし、尾狀突起は長さ四分、灰黃色をなす。肢は各々黑色にして、腿節の基部及び脛節は灰白色を呈し、後肢の脛節に刺を有する事他の種に等し。雌の前翅は長さ三分腹端僅に露出し、其翅脈は網狀をなす。產卵器は長さ四分、濃褐色を帶ぶ、成蟲は七、八、九月頃堤防等の草間に棲息し夜。リーン、リーン、と鳴々する事能く人の知れる所にして昔より詩に歌に讀まれしもの尠なからず。（第八版第十五圖）

（十七）マツムシ（Calyptotryphus marmoratus, D.H.）金琵琶　雄は躰長六分五厘、体褐色を呈し複眼卵形にして黑褐色を呈し、觸角褐色にしてほゞ体に三倍す。頭胸背には褐色斑と中央に黑褐縱條とを有せり。前胸背は前緣狹く、楔狀紋は淡褐色をなす、兩側は濃褐色なり。前翅は長さ五分、幅廣くして腹部を覆ふこと前種の如く、且つ透明にして翅脈淡褐を呈し黑點を有す。後翅は長く前翅の外に出づ。腹部は淡褐、尾狀突起は褐色にして長さ三分あり。肢は三對共に褐色にして、後肢の脛節は其色濃く、刺を有する事他種に等し。雌の前翅は前種と異なる事なく長さ三分八厘斗、產卵器は長さ五分、黑褐色をなせり。成蟲は八、九月頃山間の薄等の中にて夜、チン、チンチロリ、と鳴々す。これも昔より普く人の知れる愛玩昆蟲なり。（第八版第十六圖）

カンタンの圖

（十八）カンタン（Oecanthus longicaudo, Mats.）邯鄲　躰長四分五厘、躰淡黃綠

色を呈し、雄は頭部小にして垂直なり。複眼は綠色にして楕圓形をなし、觸角黃綠にして体にほゞ三倍す、前胸は細長くして後緣廣し、雌はほゞ長方形をなす。兩側は其色背面と異なる事なし、前翅は長さ三分五厘、透明にして、翅脉は黃綠、其腹部を覆ふ事前種に等し、後翅は膜質にして長く、常に前翅の外に出づ。腹部は黃綠、尾狀突起は長さ一分余、其色腹部と異ならず、肢も亦淡黃綠色にして細く、後肢の脛節に刺を有する事他種に等し。雌の翅も前種と異なる事なく、產卵器は褐色にして長さ二分五厘あり、成蟲は七、八、九月頃、山間の薄の葉等に止まり晝夜の別なくフヒヨロフヒヨロフヒヨロ、ゝ、ゝと其音高く鳴く、彼の千蟲譜にカンタンギス、邯鄲きり〳〵すとも、文政二巳卯の秋月蟲を售るもの持出て、世人蓄ふものあり、余初めて此蟲を蓄て聲をきくに、夕より終夜連綿不止、愛聽するにたへたり、乙丑八月御小納戶佐野與八郎、庭中にて得る所の一小蟲あり、閏八月同僚河野良以より贈來る狀松蟲に似て狹小、背は茶にして尾に至る半身黃色なり。聲至て微なれども、夜半枕邊にて聽くに連綿不止愛賞するに耐へたり。是俗に云邯鄲ぎすなり」とあり。

## ◎征露紀念特別昆蟲學講習會員五分間演說

去月十一日より二週間開會の講習會は例により各府縣代表者一名つゝを撰んで五分間演說を行ひしが今左記名の演說大要を本欄に收錄することゝなしぬ

### （一）自然の敎訓　　和歌山縣　阪本長藏

諸君よ、獅子は荒野に吼えて食を求め、鳶は炯眼を放て獲物を索むるを見て、畜生界のみの修羅場とな

す勿れ。ウジムシ、アヲムシの蠢々たるを以て無能となす勿。蜂蝶の花に戯れ、マツムシ、アブラゼミの聲を限りに鳴くを見聞して無心のものとなす勿れ。彼等の生活は他に何等の關係なしと思惟する勿れ諸君知らずや、彼等の裏面には實に複雜極りなき因緣關係の存在することを、翻て活眼を開て人間界を觀察せば如何でせう、獅鳶の呑噬搏奪、ウジムシ、アヲムシの蠢々たる如きは殆んど一般にして、利のある所を爭ふは蜂蝶の蜜に赴くが如く、戀の爲めには各種の活劇を演することマツムシ、アブラゼミの聲限りに鳴くと彷彿たるを覺へます。嗚呼生物界は吾人人間界のパノラマです。吾等の學べき所彼にあり、吾等の戒むべき所も彼に存し、彼等生物界は常に生きたる敎訓を吾人に與へつゝあるのである。予は今期の講習に於て、名和先生の薔薇の一株に於ける昆蟲の活世界を聞きて一層適切なる例を眼前に呈出せられたるを喜ぶのである。かゝる敎訓は亦無生物界にも多々存在するのです。彼の溪間の小流を御覽なさい、其潺々として晝夜やまざる所、如何に淸く、如何に眞面目に、如何に根氣強きかを。其行路にあたりて大石の妨害するものあるも、騷がず怒らず、從容として進み其勢力を集中し、遂に其の石を廻りて流れ、或は其上を超越して流下する所、宛然大偉人の小人輩の妨害に逢ひて騷がざるが如く、困難に出逢ひて屈せざるが如く、實に是れ無言の大敎訓で御座いませう。故に予は重ねて、生物界も無生物界も、共に敎訓の活歷史なりと云ふを憚りません。

## （二）小學校に於ける昆蟲展覽會

愛知縣　近藤平三郎

私は現今害蟲驅除難の聲喧しき時代に於て、小學校昆蟲展覽會なるものが續々天下に開かれん事を望むものであります。此の展覽會は、小學校兒童の直接採集した所の昆蟲でなければなりませぬ、然らば此會たるや俄かには開き得べきものではありませぬが、現今我國に於ては農業は餘程重んぜらるゝ樣になり、小學校にも必須科目として農業科を置かれ、土地の情況によりては必ず加設すべきものとなりました。故に各地方の農村の學校は、之を機として此の科目を加設せられたれども、多くは机上の學問のみに傾く弊のあるは大に遺憾千万であります。故に先づ校園とも云ふべき實習地（勿論完全を望むのではない）らしきものを作り、實地に兒童に勤勞せしむる傍ら大に害蟲驅除、益蟲保護の要領を說き、猶兒童をして昆蟲採集を實行せしむるのです。如斯して集まれる昆蟲を以て展覽會を開くのであります。斯く申せば、實行難を說く人もありましようが、難きが如くにして難きにあらず、何事もなさねばならぬ也です。頑固なる農民は、自家の秋穫に直接關係ある害蟲益蟲の聲をきくと雖も、左程に耳を傾くべ

き程穎敏なるものではないけれども、我が最も可愛ゆき子や孫が採集にかゝる昆蟲展覽會ときけば、ドレ一つ見たいものであると云ふ觀念は誰しも起るものですから、仕事を繰り換へてでも出掛るといふは世の父兄たるものゝ弱点です、否特点です。小學校教師は之の機を逸せず、害蟲驅除益蟲保護を吹き込むのです。又家庭に於ては小供より是等の話をさする、然すれば如何に頑迷無智なる農民も、不知不識の間に害蟲驅除益蟲保護の何たるを知り、次第に其方法を試みる樣になる、進んでは自發的に農村共同組合も組織されます、所謂一致共同の實を擧げられ、ドシドシ害蟲驅除も益蟲保護も實行せらるゝのです。世には無暗に注入的に吹き込むものもありますが、自發的でなければ其價値が至つて少ないと信じます。故に農民をして自發的に害蟲驅除益蟲保護をなす端緒として、續々天下に小學校昆蟲展覽會を開かれん事を望むのであります、茲に失禮を省みず聊か卑見を述べました。

### （三）昆蟲宗布教使　　三重縣　辻　喜三郎

諸君の多數は伊勢大廟に御參拜の途次、僕の郷里一身田驛を通過なされし事と存じます。而して驛の東に一大伽藍のあるを御見止めになりましたでありましよう、即ち眞宗高田派本山專修寺と申します。只今の法主殿は學德共に高く、大に布教に力をつくされました結果一般の民風大に改まり、犯罪者等を出すこと極めて少く、誠に喜ばしい次第であります。然し一利一害とでも申しましようか、佛教盛なると同時に、其の眞の教理を解し居らざるものゝ中には、隨分弊害の存ずる樣に思はれます。例へて申しますれば、害蟲驅除の事につきましても、殺生をしてはならぬと思ひ込みし結果、終に螟蟲を殺すとか浮塵子を拂へなどゝ言附けましても、それは殺生であるからと稱し一向に手を下す傾きが見へませず、寧念佛を唱へて居つた樣でありました、所が近年は小學校教育の力、且つは農會等の盡力によりて、害蟲驅除の大になすべきものなるを知り、又それと同時に實行するの運に立至りし樣であります。殊に小學校教育の任にある人は、意を斯の事に少しく注ぎ給はん事を祈るのであります。何故となれば、昔よりも申しまする如く三ツ兒の智惠八十までとて、幼年の際理解せしめをく事が大に必要であるからであります。さて我が郷里地方に於きましては、害蟲の驅除すべきは認承致せしなれども、未だ其の方法に至りては頗る幼稚にして、今より改良すべきもの多々あるべしと信じます。合せて益蟲保護を實行せしむること、これ實に目下の急務であろうと思ひます。即ち僕の郷里の佛教の盛なると共に、今一つの昆蟲宗なる宗教を輸入して、貴賤貧富相共にこの宗教を崇拜せしめたいのであります。所で彼の佛教の輸入あ

りしは、確かに欽明天皇の御宇にして、佛敎及び經論を彼の百濟から奉るとあります。我が昆蟲宗の佛像とは何でありませうか、これはとりもなほさず僕が朝夕崇拜して止まざる所の昆蟲標本でありますこの標本は害蟲にまれ益蟲にまれ、工夫を凝らして製作されし完全なるもの程、靈驗いと新高なりと世間に噂すべきものと定め度いものです。次に經論は何かと申しますれば、こは云ふまでもなく昆蟲學に關する書籍の事でありませう、當研究所に於きまして發行せられし諸書の如きは、一々名を申しませぬけれども、實に我が昆蟲宗の無上の良寶典と申すべきであります。この尊ぶべき經論を、今吾々は容易に繙く事を得まするのは、實に當所長名和先生を始めとして、夫々力を致されし當所員諸君の賜として深く謝せざるべからざる所であります。あゝ今や我昆蟲宗は、佛像及び經論己に備はり、大に目出度き事の極みであります。されども古人も申されし通り、道弘らず弘むるものは人にありで、昆蟲宗に於きましても其の布敎使傳道使、即ち昆蟲學者なるものが大に必要を感じるのであります、大々的に吾人は昆蟲宗の名僧智識の輩出を切望するのであります。願くは昆蟲學者の我郷里に害蟲驅除山益蟲保護寺を建立し、高田本山の世敎に益せらるゝが如く大に昆蟲宗を布敎して、以て農産物增殖を圖り、愈戰勝國として、世界一等國として、我大日本帝國をして花あり實あらしめん事を祈るのであります。

## (四)農業思想發展の新方面

徳島縣　高田唯輔

微小なる幾多の昆蟲が、學者によりて研究せられ、實地家によりて應用せられ、昆蟲世界なる複雜なるものが、整然と世の中に知らるゝに至りたるは、畢竟先輩者の苦心察するに餘りあることである。而して或は昆蟲界の人事に當つては、人類の精神鍛錬陶冶に、或は實地の農耕に資する所甚だ大なるものである。さて斯く關係する所廣且大なる昆蟲も、一二の人の知るのみにては其効甚だ小なるもので、從つて農業も振起せざるを憂るのである、されば昆蟲の智識を有する實地家を作るには、畢竟敎育より外はない、今日農業敎育を見るに稍進歩し、中等農業學校も各府縣に設立せられ、又初等敎育に於ても、農業の趣味養成の爲めに農業科を必須科とせられ、今後其活用宜しきを得ば、該思想の發達は喜ぶべき結果に達することゝ考へます。併し此敎育の範圍、實地家全体より見るときは一部分の人に限れり、故に他方面即ち農民大部分を占め居る所の忠勇なる兵士に此思想を養ひ、滿期後には入營前より一層進歩したる思想智識を得て農耕に從事するに至らば至極結構と信じます。親友なる功五級勳五等砲兵大尉故鈴木公三氏は、甞て廣嶋の聯隊に於て、所屬の中隊に農業雜誌類を寄贈して兵士に一讀せしめ、其効の著

しきものを經驗せりと、全國の軍隊に於て此方法及び其地の方法に於て農業思想を養成する事を得ば、國本培養の趣旨に叶ひ、一段の進歩發達と云はざるを得ない。又他の一方面は、監獄の犯罪人に農業思想を注入することである。彼等は人類の害蟲の如く恐れ忌みきらはるれども、博愛と云ふ點より見るときは寧ろ可憐なる同胞と云はざるを得ない、畢竟彼等の犯罪は、働かずして安樂を求めたいと云ふ薄弱なる思想より出でたる者である。之れを救ふには僧侶の說敎甚だ可なりであるが、只口ばかりの說法では物足らぬ心地がする、それで此思想を打ち破る所のものは、農業を好む思想である、粒々皆辛苦で骨を折りて後收穫を得るのであるから、先づ働くと云ふことが第一に必要である、彼等犯罪人に農業の思想を與へ、殊に昆蟲の害蟲益蟲の話によりて人類社會に應用して會得せしめば、南無阿彌陀佛の說法よりは遙に効があると信ずる。而して彼等は出獄後生產的國民となるので、國本培養の趣旨に副ふことが出來ると信じます。薄弱なる思想を有する人々を堅固なる地盤に引き來るには、農業思想を與ふるが第一である。兵士は八九分通りは農業者であるから、此上もなき好都合である。監囚人の多くは農民でないけれども、多くは不生產的の人民であるから、生產的の人民に導くに農業の思想を與ふるは一番近道で必ず成効すると信ずる、今後農業趣味養成の新方面は、此二方面にあると信ずるからして一言述べた次第であります。

### （五）昆蟲學大意を聞きて往時を追想す

滋賀縣　武田喜八

余嘗て中等敎育を受けし頃、動物學の一部として昆蟲學を學びたることが御座いましたが。其當時は徒に敎科書の記臆に流れて、一般學生の最も嫌惡する學科の一でありました、爾來十年予は又斯學を顧みたることなかりき。然るに近時小學校に農業科を加設せらるゝに至り、予もこの時勢の變移に依り、再びこの無味索々の學を講究するの已むを得ざるに逢ひ、今回當講習會に加入したる次第である、然るに豈圖らん、流石は斯界の名星たる名和先生の事とて、徑に學理を說き、緯に實地を研究せしめ、不知不識の間に斯學の興味を喚起せしめられました、予は始めて、生物の學は決して乾燥無味のものにあらずして、趣味津々たる到底他學科の及ばざるものなることを覺り、加ふるに生物界の現象を討究し、自然の法則秩然として其間に存在することを知るに至つて、實に其高尙深遠の學にして、益々趣味の深きを感じました。翻て今日小學校に於ける農業科敎授の實況を見るに、或る敎育者は放言して曰く、農業敎授は小學兒童を農業技術者に仕立つるにあらず、唯農業上の趣味を喚起すればそれで充分である、彼の

不熟練の實習田の如きは決して設くるの必要なしと。得々然として教壇に立ち、死物の教科書を繙て、不知半解の學理を說くものあるに至つては實に云ふに忍びないのであります。甚しきに至つては小學校の農業科を以て一の贅物と見做す輩も御座いまして是等一部の教師は、小學校農業科を以て一の專門教師に依賴し、兒童が害蟲若くは益蟲を捕へ來りてその名稱習性を問へば即ち曰く、こは余の關する處にあらず宜しく農業主任先生某に問へと、嗚呼亦思はざるの甚しきもので御座います。全國幾萬の教育者中、尚此種の教育者あらば、將來に於ける第二の國民をして、再び余が十年以前に受けし如き畸形的教育法を受けしむる所以にして、國本培養上實に心配に堪へませぬ、予は斯學の興味深きを感ずると同時に、現今の兒童に向て、余が嘗て生物學につき誤認せし如き觀念を抱かしめざる樣希望するの餘り、茲に所感を述べた次第であります。

（二十一）

## ◎昆蟲文學

新蟬　　杉山鴻之進

占得綠陰深處鳴。案頭穿耳兩三聲。此聲最愛淸於水。洗盡九春紅紫情。

重陰綠樹晝蕭然。更愛綠陰淸唳蟬。一曲啾々聽正好。幽軒靜處餘響傳。

夏夕流螢　　魯嶽倫草

淸音戞玉碧琅玕。疎雨半庭露未乾。風裏流螢明又滅。掠過詩髩一星寒。

雜詠

＊　　ふもとのや

涼風に蟬飛びかはし鳴きかはす樹立の中の苔淸水かな

紫陽花の花しだれ咲く石垣の石にとまりてなかぬ蟬かな

＊　　神村直三郎

田草とる兒等心してよき蟲のたいこむしをばうちなつくしそ

先人の遺稿古りたりきららむし　同
御經や梵字の如き紙魚の穴　同
箱の蓋とるや手に這ふきららむし　城東
きららむし日向に拂ひ落しけり　同
歌書の紙魚俳書の紙魚を笑ひけり　半之助
紙魚這ふや曝書の上に松の影　歸麓園
古つづらたたいて衣魚を拂ひけり　三川
きらむしのちり〳〵逃て失せに鳧　同

* 潮音生

水にちるいなづまよりもはかなしとくさかげろふの名やおひにけん
くさひばり鳴くさびしさは麥に落つる春野の聲に似ずあるものを

衣魚

取る手より紙魚こぼれけり大般若　四澤

## ◎昆蟲に關する歌 (五)

奥島欣人輯

▲竹の里歌の昆蟲歌

正岡竹の里人

百中十首時代の歌

高殿の御簾たれこめて春寒み飛び來る蝶をうつ人もなし
夜の戸をさゝぬ伏屋の蚊帳の上に風吹わたり螢飛ぶなり
釣垂れて魚餌につかず蜻蛉のとまりては飛ぶ河骨の花

獵官の聲高くして炎熱いよ〳〵加はる戲れに蒼蠅の歌を作る

つかさある人をたとへば厨なる喰ひ殘しの飯の上の蠅
日の照す晝こそあらめ烏羽玉の夜を飛ふ蠅のにくゝもあるか
馬の尾につきて走りし蠅もあらんとりのこされし牛の尻の蠅
屎蟲の臭きを笑ふ笑ふものは同じ厠の屎の上の蠅
憎きものうなしねを刺す蚊はあれど睡らんとする顏の上の蠅
山も見えず鳥もかけらず五百日ゆく八重の汐路の船の中の蠅
世の中は馬屋のうしろの畑に生ふる唐撫子の花の上の蠅
世の中は憎さもこゝに終りけり炮碌の尻の黐の上の蠅
こゝも猶うき世なりけり草鞋編む田舍の翁の背の上の蠅

○

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは

蟬

物干の衣の袖に蟬なきて晝照草に日はゆふべなり

夢さめて戸いまだ明けぬ閨の中に蟬なく聞ゆ日和なるらし

椎の木の木末に蟬の聲老ひてはつかに赤き鷄頭の花

ガラス窓

窓の外の蟲さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし

新婚祝

上つ毛の新桑繭の小衾にをし鳥縫ひて君を祝はむ

牛

八千巻の書讀み盡きて蚊の如く瘦すく〵生ける君牛を喰へ

風

白玉の眞玉さゝ花吸ふ蝶の吹きまごはさえ又飛びかへる

○

綠羽の蠅のみこさが蠅つどひ黃屎の饗をきこしをす見ゆ

『人の紅葉狩』と云ふ文の中に

茂春も三子もしやべる啞蟬の默もやむべき巴子ならなくに

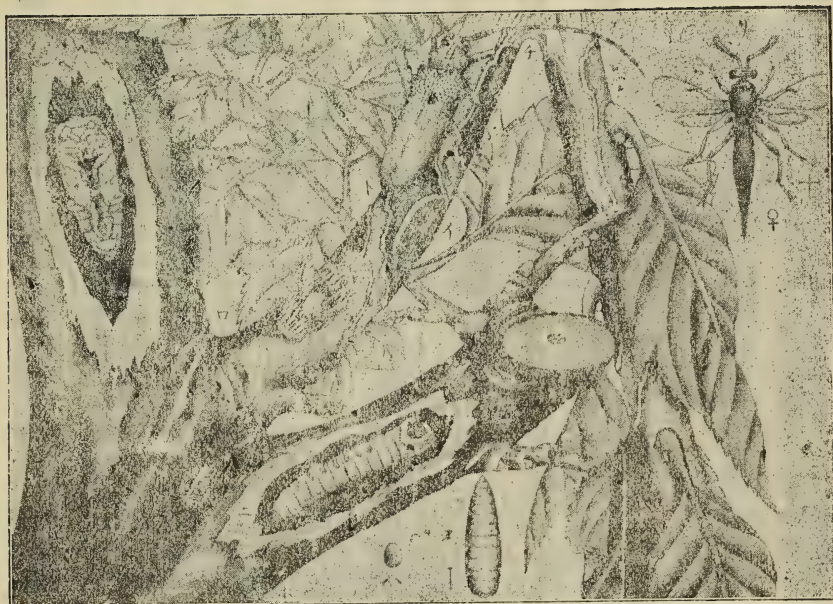
明治最近に逝去して、生前日本派の一新調を開きし正岡子規氏の歌である、種別をすると

蠅拾一首、蟬四首、蝶二首、蚊二首、螢一首、蠶一首、蜻蛉一首、蟲(種別ナキ者)一首、

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄（其九）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

（一三）クワカミキリ　桑樹の害蟲としては既に記せし處のクワノシンムシ、イトヒキハマキ、クワハマキ等を始め毛蟲類、葉蟲類根を害する桑葉蟲の幼蟲、幹を害する天牛類等、其種類甚多くして何れも其加害の恐るべきものなり。中にも天牛類は樹幹を其喰害して生育を害し、遂に枯死せしむるの大害蟲

クワカミキリの圖

(イ)産卵せし痕跡
(ロ)同所を開きて卵子を示す
(ハ)卵
(ニ)幼蟲即テッパウムシ
(ホ)小孔より糞の出づる狀
(ホ)蛹
(ヘ)成蟲
(チ)カミキリムシ被害の爲め枝の折れたる有樣
(リ)卵の寄生蜂放大
(ヌ)其幼蟲放大

にして、クワカミキリ、トラフカミキリ、キボシカミキリ、クワノヒメカミキリ等亦種類多し。而して地方によりて其種類も異なれども、其最も廣く分布し從て加害の多きはクワカミキリとす。今左に之れが概略を記さん。

クワカミキリは鞘翅目天牛科に屬する普通なる種にして、成蟲は体長一寸二分乃至一寸四分、灰黄綠色を帶び、觸角十一節より成りて体より長く、第一、第二の關節は黒く、第三節以下は毎節灰白と黒色と相伴す。前胸の背面は横皺多く、其兩側に刺狀突起あり、翅鞘の基部には多くの顆粒狀の小黒點を散布す。肢の跗節は四節より成りて、第三節は縱裂せり。

幼蟲は乳白色にして稍黄色を帶び、十分生長すれば二寸内外に達し、頭部大きく漸次腹端に至るに從ひて細まり、肢を欠く。普通三年目に孵化するものにして七八月頃最も多く成蟲現はれ、樹枝を嚙傷して其生育を害し、産卵せんとするや、新梢の生育宜しきものを撰び、其下方に於て木質部をU字形に嚙み起し、其内に一粒つゝの卵を産付し、巧に元の如く覆ひ置くを以て其初め容易に産卵部を認め

難きも、漸次樹液流れ出で嚙痕白くなるを以て直に産卵しあるを知り得べし。卵は白色楕圓形にして長さ七、八厘、孵化すれば樹幹の髓部に喰ひ入り、材部を食して生育すれども、小孔は穿ちて蟲糞を排出するを以て、直ちに外部より其幼蟲の存在を知るを得べし。斯くして幹内に於て蛹化し遂に羽化して外に出づるものなり。此の蟲は桑樹に限らず楮、無花果等を害するものなれば注意すべし。

驅除法　該蟲を驅除するには採卵法を最も良しとす。此の方法は、産卵部を開きて卵子を潰殺するものにして、九月頃より冬期に於て暇を見計ひ行ふものなれば、既に孵化して幼蟲即テッパウムシとなり居るもの尠なからざれども、未だ深く髓部に喰ひ入らず、大低其附近に棲息するを以て、直ちに之れを刺殺するを良しとす。此時往々カミキリの卵内に蛆狀の幼蟲多く棲息することあり、こはカミキリの卵に寄生する蜂の幼蟲なれば其儘殘し置くべし。深く樹幹に喰入したる幼蟲を驅殺するには、種々の法あれども、殺蟲注射器の類を以て、驅殺劑を注入するを最も便なりとす。此の驅殺劑は除蟲菊粉十匁を水一升に一晝夜斗り浸漬したるものを用ふべし。但し除蟲菊の純粹にして新らしきものを用ふれば、五六匁にて功力あれども、一概に言ひ難ければ適宜斟酌するを要す。

## ◎簡單說明昆蟲雜錄（第貳號）

●農事試驗成蹟報告（第四號）　愛媛縣農事試驗場東豫分場の部。中稻二化生螟蟲第二期被害莖切株試驗、晩稻二化生螟蟲第二期被害莖切株試驗に就き七頁に亘りて記載す。

●博物の友（第廿七號）　日本産蝶類の學名に就て（理學博士松村松年）十八種の學名異同に關し三頁餘に亘りて說明し。鱗翅類採集之栞（梅澤親光）前號の續きにて二頁半に亘り幼蟲の部了り。再びゴキブリに就て（矢野生）。秩父の昆蟲（梅澤親光）。ヘウモン屬のスケイルに就て（高野鷹藏）等の記事を載す。

●松の操（第三十號）　衛生の昆蟲（谷貞子）圖入にて數種の蠅に關し四頁に亘りて記載す。

●果物雜誌（第百三號）　介殼蟲と其豫防並に驅除法（大西鬼三雄）前號の續きにて七頁餘に亘りてケロシン乳劑、松脂合劑、石灰食鹽硫黄洗劑、石炭酸、煙草浸出液、石灰水硫黄煙草、灰汁等の製法幷使用法を載す。

●養蜂雜誌（第十一號）　日本種蜂群と外國種蜂王（青柳浩次郎）。荘島氏養蜂談の大要（神田貴之助）。サイプリアンの報告を望む等にて十六頁を滿す。

●大日本農會報（第二百九十號）　本年第一回發生の二化螟蟲狀況並に本年度の驅除豫防（農學士小貫信太郎）種々の例を擧げ三頁餘に亘りて說明す。

●愛媛縣農會報（第七十七號）　害蟲驅防月令（第八月）（森莊之助）二化生螟蟲、三化生螟蟲、大螟蟲、浮塵

子、稻椿象類、地蠶類、其他の害蟲に就き五頁弱に亘りて其驅防法を説明す。

●新潟縣農事報(第貳拾號)　道徳上より見たる害蟲驅除(農學士鏡保之助)現今の非道背徳より害蟲驅除の行はれざる事を熱心に四頁に亘りて論じ。昆蟲見聞雜記(蟲生)八月より九月にかけて害蟲驅除作業として二化螟蟲、浮塵子、黃葉卷蟲、蔬菜の害蟲、桑の天牛、麥蛾と小豆象鼻蟲に就き三頁に亘りて記載す。

●農報(第五號)　害蟲一般の驅除豫防(山村常吉)前號よりの續きにて本號には昆蟲の蕃殖と自然の制裁と題して種々の例を擧げ四頁半に亘りて説明し。大いに螟蟲の驅除を勵行すべし(農學士小川三策)二頁に亘りて説明し。大豆の粉吹象鼻蟲驅除法(深井武司)該蟲の被害の情況より驅除法に關し一頁を記載す。

●大和山林會報(第拾九號)　昆蟲の變態と露國の刺激と題して本誌昆蟲世界第八十九號講話欄内にある昆蟲の變態に就て(理學博士石川千代松)と題する一項を面白く簡單に説明せり。

●園藝之友(第一年第四號)　花の蟲(理學博士佐々木忠二郎)前號の續き本號には圖入にてヲミナヘシの蝸の習性經過、驅除に就き三頁餘を記載す。

●農業敎育(第五十號)　第二回愛知縣渥美郡小學兒童實業思想養成實施事項調査表(三十八年六月一日調査)事業の種類、實施年月日、施行方法、成績模様、學校名の六項に別ちて調査せしが殆んど害蟲驅除の件のみ一頁弱を載せたり。

●農事雜報(第八十八號)　蠅蚊類驅除劑ソーポスソーと題して家畜に對し効力あるを約二頁に亘りて説明す。

●廣島縣農會報(第百二十二號)　益蟲の保護と題して先づ益蟲の資格を説明し夫より蟷螂、蜻蛉、瓢蟲、寄生蜂等に就き四頁に亘りて各種の特徴を記載す。

●博物學雜誌(第六十一號)　夏の毒蟲(昆蟲居士)七頁に亘りて專ら家庭の昆蟲に就き説明す。

●德島縣農會報(第二十六號)　附錄として蜜蜂に關する記事十五頁を載す。

●少年世界(第十一卷第十二號)　蟬の話(名和梅吉)圖入にて蟬に關する通説を五頁に亘りて記載す。

通信

## ◎農作物害蟲驅除規程

鳥取縣　竹信虎藏

鳥取縣訓令第十號

市町村立小學校は、兒童に實業思想を養成するの一助として、左の規程に依り、樹栽及農作物害蟲驅除を爲さしむべし。

學校長は、學年末に於て其の成蹟を調査統計して、監督官廳に報告すべし。

明治三十八年二月八日　鳥取縣知事　寺田祐之

樹栽規程（省略）

農作物害蟲驅除規程

第一條、農作物の害蟲發生したるときは、市町村長は其の市町村內の市町村立小學校長に報告し、該害蟲驅除の援助を求むべし。第二條、學校長は、市町村長より前條の報告を受けたるときは、害蟲驅除の動作に堪へ得べき兒童を現場に派遣し、受持教員監督の下に、害蟲の驅除を爲さしむべし。受持教員は前項兒童の成績を調査して、學校長に報告すべし。第三條、學校長は、前條害蟲驅除の際に於て得たる害蟲及益蟲を以て標本を製し、教授の資料と爲すべし。第四條、農作物の害蟲驅除に關し勉勵したる兒童には適宜賞狀又は賞品を與ふることを得。

## ◎害蟲驅除豫防奬勵規程

三重縣　西岡嘉十郎

三重縣農會にては本年害蟲驅除豫防奬勵規定左の如く定められたれば茲に通報す。

害蟲驅除豫防奬勵規程

第一條、本會は害蟲驅除豫防の完全を期するため、各郡市農會に對し豫算の定むる所により、町村農會數に半額、郡市內田地總反別に半額の割合を以て懸賞金を交付す。但市農會に對しては町村農會の二倍を交付す。

第二條、郡市農會は左の事項に準し、町村農會成蹟の優劣を參酌して懸賞金を交付すべし。一、委員の設置方法其人員及費用。一、驅除豫防用具の個數及費用(農會用、個人用)。一、驅除豫防用料の數量及費用(農會用、個人用)。一、驅除豫防に關する人夫を雇入れたる場合は、其人員及賃金。一、驅除豫防したる害蟲の名稱及其數量並に度數、　イ浮塵子、一、苗代時期驅除豫防回數、二、本田に於ける驅除豫防回數、　ロ螟蟲、一、苗代時期採卵數、二、本田に於ける採卵數、三、本田に於ける心枯及白穗拔取數、四、誘蛾燈の點火個數日數、五、螟蟲捕殺又は誘殺數。一、小學校生徒に

驅除豫防せしめたるときは其方法及費用、（本項小學校生徒をして驅除豫防せしめたるものは第五項（ロ）螟蟲部に包含するものとす）一、浮塵子石油驅除豫防、螟蟲採卵、心枯、白穗拔取、補蟲網、點火誘殺等、其他の方法により驅除豫防をなしたる場合は其方法及成蹟數量、一、市農會は前各號に依り驅除豫防を勵行すべし。

第三條、郡市農會は別表により其成蹟を調査し、翌年一月十五日迄に本會に報告すべし。

已上

市町村農會害蟲驅除豫防成蹟調査表

| 町村農會名 | 委員數 | 驅除豫防用具數 | | 驅除豫防用材 | | 人夫數 | 浮塵子 | | 螟蟲 | | | | | | | | | | | 驅除豫防費總額 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | 採卵數 | | 心枯及白穗拔取數 | 誘蛾燈火點 | | | | 捕殺 | | 誘殺 | | |
| | | | | | | | | | | | | 苗代 | | 本田 | | | | | | |
| | | 農會用 | 己人用 | 農會用 | 己人用 | | 苗代時期驅除回數 | 本田驅除回數 | 苗代 | 本田 | | 個數 | 日數 | 個數 | 日數 | 苗代 | 本田 | 苗代 | 本田 | |
| 何々町 | 人 | 個 | 個 | | | 人 | | | 個 | 個 | 個 | | | | | 個 | 個 | 個 | 個 | |
| 何々村 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

## ◎昆蟲に關する葉書通信

●●●（二七四）オホシモフリスヾメの分布（丹波天田郡　西垣藤松）　五月十一日オホシモフリスヾメの雌蛾を捕獲し硝子器中に入れ置きたるに、同十二日器中に八個の卵を產み蛾は產卵後斃死せり。卵は楕圓形にして初めは淡綠黃色なりしが、漸次黑褐色となり、五月廿四日に至り一頭孵化せしが、中途に斃死し詳細報導するを得ざるは遺憾なり。採集場所は天田郡雲原村郵便局前にて、該庭園に梅樹二三株あり。

右分布參考の一端にもと茲に通報す。（五月廿九日報）

(二七五)モンシロテフの雌雄と其本能(三重縣四日市市　山内甚太郎)　本年四月十二、廿四の兩日、專ら大根の花蜜を吸收せんとして飛翔し來るモンシロテフのみに就て、雌雄の數を調査せむと思ひ立ち採集せしに、其捕獲數五十頭の內、雄は四十五頭に達し雌は僅に五頭なりき。之れ雄は雌に先ちて羽化するものなるか、叉大根の花に集まる蝶類はモンシロテフのみと云ふも可ならん、キテフの如きは絕へて集來するを見ず、惟ふにモンシロテフは該花に似たる翅色を有するを以て、保護上自然に該花に集まるの本能を有するものならんか。(五月三十日報)

(二七六)害蟲驅除賞品授與式(岐阜縣山縣郡　岩野田村農會)　本年六月以來、害蟲驅除奬勵の爲め抽籤法を以て賞品を與ふるの規程を設けて驅除を督勵せしが、八月一日螟蟲採卵及捕蛾其他に對する賞品授與式を兼ね講話會を開きしが、聽衆三百余名にして、來賓山縣郡農會技手松野春一氏の農家の副產業としての秋蠶飼育談、江刺家高富警察署長の訓示演說、名和昆蟲硏究所長代理小竹浩氏の害蟲驅除に關する談話等ありて後賞品を授與したりしが、受賞者の重なるものは、一等賞(棒)長谷川豊治郎、衣笠とし二等賞(草刈鎌)神谷政助、林定市、村山秀吉、三等賞(莖切鎌)林良吉外廿八名(四等賞以下畧す)等なりき。

(二七七)ヱゾゼミの分布(高知縣立農學校　武內護文)　本年は春來雨天勝にて採集意の如くならず遺憾なり、ヱゾゼミの屬は當縣にては極めて獲難き種類なるも、辛して一頭を獲たれば別便を以て送附す。其他當縣にも產する樣思ひしチッチセミは終に之れを見ず、ニイ〳〵セミ、クマセミ、アブラセミは都市に近き邊に迄多く、ハルセミ、ミンミンゼミ及ヒグラシゼミは山間に多く、殊にヒグラシゼミは高山にも多し。イシガキテフは春秋に多く獲べく、特に當年は夏期に其影を見ること少なし。(八月廿九日報)

◉蛾類拾數種の學名に就て　昨三十七年米國聖路易市に開かれたる聖路易萬國大博覽會へ、當名和昆蟲硏究所よりは害益蟲標本約二百數拾種以上の出品を爲したりしが、同會閉鎖さるゝや、凡て

の標本は米國のナショナル、シユージアムへ寄贈せり、然るに右標本中、害蟲標本は凡て五拾六種より成り、且發生順序を示したる完全なるものにて、五拾四種は全く鱗翅目に屬するものなりしが、同所へ到着后、鱗翅目の専門家ダイヤー氏は専ら其幼蟲に就き研究し、其結果を米國のナショナル、シユージアムの記録第貳拾八巻千四百拾貳號中、九百三拾七頁より九百五拾六頁に渉り各々精密なる圖を挿入して世に發表せられたり。今其内の學名を調査せしに、是迄使用し來りし學名中、或は屬の異なりしもの或は種の變りしもの等あり。特に桑樹害蟲として有名なるトゲシヤクトリの如きは、全く新屬新種〆して記述されあり。兎に角斯學に忠實なる氏の事とて、各種の參考書に基き調査されしものなれば、最も正確なることは謂ふ迄もなき事なり。之れ本邦斯學の爲め、氏に向て其厚意を感謝する所なり。左に氏の選ばれたる學名を擧げん。因に前者は從來使用の學名、後者はダイヤー氏の調査學名。

(1) Tropoea artemis, Brem. = Actias selene var artemis, Brem. アヲニシキ(オホアヲガ)
(2) Numenes interiorata, Walk. = Camptoloma interiorata, Walk. クロスヂサラサ(サラサモンガ)
(3) Spilosoma erubescens, Moore. = Diacrisia subcarnea, Walk. ハラアカシロタヘ(ハラアカシロガ)
(4) Spilarctia imparilis, Butl. = Diacrisia imparilis, Butl. オスグロシロタヘモドキ(クワケムシ)
(5) Acronycta major, Brem. = Apatela major, Brem. オホシモフリホホグロ(シロケムシノガ)
(6) Lymantria dispar, L. = Porthetria dispar var japonica, Mots. オスグロサザナミ(ハンノキケムシ)
(7) Artaxa conspersa, But. = Euproctis conspersa, But. オスグロウコン(チヤケムシ)
(8) Porthesia auriflua, Hüb. = *Porthesia similis var xanthocampa, Dyar. コシロタヘ(キンケムシ)
(9) Clisiocampa neustris, L. = Malacosoma neustria var testacea, Mots. ヒロオビウハバ(ウメケムシ)
(10) Abraxas eurymede, Mots. = Cistidia couaggaria, Guenee. サミダレモドキ(ウメシヤクトリ)
(11) Hemirophila atrilineata, But. = Phthonandria atrilineata, But. マツカハクロスヂ(エダシヤクトリ)
(12) Biston sp? = Phthonosema tendinosaria, Brem. フサヒゲシモフリ(チヤノシヤクトリ)
(13) Apocheima sp? = △*Acanthocampa excavata, Dyar. シモフリチヂレバ(トゲシヤクトリ)
(14) Monema flavescens, Butl. = Cnidocampa flavescens, Butl. コガネマルバ(イラムシ)
(15) Eumeta minuscula, But. = Clania minuscula. Butl. オズウスヾミ(ミノムシ)
(16) Procris nigra. Leech. = *Illiberis pruni, Dyar. クロウスバ(ホシハマキケムシ)

(17) Procris funeralis, But. = Bintha chinensis, Felder. ヒメクロウスバ(タケケムシ)
(18) Glyphodes sylpharis, But. = Margaronia pyloalis, Walker. ヒメヨスヂウスギヌ(クワハマキ)
(19) Botys lupulinalis, Hf. = *Pyrausta polygoni, Dyar. キサヾナミウスバ(アイノズイムシ)
(20) Sericoris morivora, Mats. = Exartema morivora, Mats. ハイオビヒナカクバ(クワノシンムシ)
以上貳拾種中*を附したるものは新稱並に新變稱にて⁂は新屬新稱のものとす

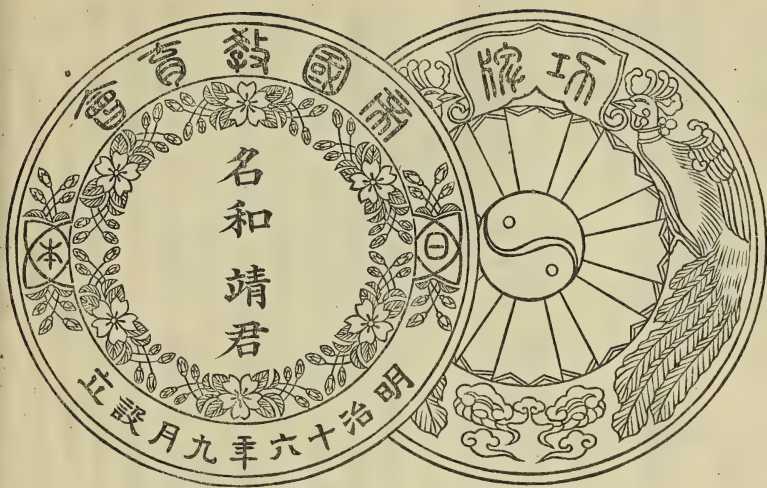
◉**小學兒童の昆蟲に關する書畫**　曾て當所長は、岐阜縣可兒郡小學校教員に對する昆蟲學講話の爲同郡に出張せられしが、其際同郡廣見村中華高等小學校纐纈校長の豫て熱心なることを聞知せし故特に當所長には少しの餘暇を以て、同校兒童數百名に對し、尤も適切なる昆蟲に關する講話を約二時間程試みられしに、兒童は非常に感じたる趣きなりしと。然るに其後纐纈校長には、兒童に一は講話の筆記一は植物に昆蟲の關係し居所の寫生圖を澤山作らしめて、講話の御禮として今回當所へ寄送せられしは纐纈校長の誠意感ずるの外なく、當所長は大に滿足せられたり。

◉**食蟲植物**　動物が植物を食するとは言ふ迄もなきことなれども、植物が動物を食して子孫を繁殖するとは餘り實例のなきことなり。然るに植物學の漸次進步したるの今日にありては、小形昆蟲を食する食蟲植物の種も段々增加して、最早本邦のみにても二十種程發見さるゝに到れり。今次に其種名を記せばモウセンゴケ、コモウセンゴケ、ナガハノモウセンゴケ、クルマバモウセンゴケ、イシモチサウ、ナガハノイシモチサウ、ムジナモ、ムシトリスミレ、コウシンサウ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサホザキノミミカキグサ、マルバノミミカキグサ、タヌキモ、ノタヌキモ、ミカハタヌキモ、コタヌキモシマタヌキモ等なりと云ふ。

◉**螟蟲蛾發生比較表**　新潟縣農事試驗場に於ける常設誘蛾燈にて明治三十四年以來誘殺せる二化螟蟲蛾比較表は左の如くなりしと。

| | 初め發蛾月日 | 最盛發蛾月日 | 終了發蛾月日 | 初め終り發蛾月日間日數 | 誘蛾燈一個に付總落下蛾數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 三十四年 | 五月七日 | 六月三日 | 六月廿六日 | 五十一日 | 七七一 |
| 三十五年 | 五月廿日 | 六月九日 | 七月十一日 | 五十四日 | 四七五 |
| 三十六年 | 四月廿五日 | 五月三十日 | 七月十四日 | 八十一日 | 五二九 |
| 三十七年 | 五月九日 | 六月五日 | 七月十一日 | 六十四日 | 五六七 |
| 三十八年 | 五月十五日 | 五月卅一日 | 七月十六日 | 六十三日 | 四一八 |

◉功牌受領に就て　本誌前號に、當所長の帝國教育會より功牌を受領せしことを記し置きたるが、今功牌並に頌狀の寫を揭ぐると同時に、功牌規程を得たれば左に記す

金製功牌の表裏を示したる眞形の圖

帝國教育會功牌規程。（第一）帝國教育會は功牌を製し左の各項の一項又は數項に相當する者に贈呈す。一、我が邦の教育上に功績ある者。一、我が邦の教育上に裨益を與ふる者。一、本會の事業に關して功勞ある者。一、本會の特に敬意を表すべき者。（第二）帝國教育會功牌の形狀及び製法左の如し（銅製、金製の二種あり茲に圖を出すを以て略す）。（第三）帝國教育會功牌には頌狀を添へて贈呈するものとす。（第四）前項の頌狀書式左の如し（寫を出すを以て書式略す）皇族に對する頌狀には「議決を經」の下へ「謹」の一字を加へ「贈呈」の贈の字を削り末行の「番號」を加へざること。（第五）帝國教育會功牌は本會長の提議に依り評議員會の議決を經て之れを贈呈するものとす。（第六）帝國教育會功牌を贈呈したる者は本會は之れを名譽會員に準して待遇す。（第七）本規程に關する事件にして明文なきものは本會長便宜之れを處辨す。

◉征露紀念特別昆蟲學講習會概況　同會は八月十一日より二週間開會のことは、既に本誌前號に於て報導せしが今之れが概況を記さんに、講習員は一府廿二縣に亘り五十九名にして、授業時間は每日午前七時より午後四時迄とし、規程の學科は勿論、課外講話等もあり、會員は何れも非常の熱心を以て研究されしかば、從來餘り見ざる處の好成績を得て、廿四日午後二時修業証書授與式を擧行せり、當日の來賓者は岐阜縣第一、第二、第三部長を始め、大熊代議士、農學校長、岐阜警察署長、巡查教習所敎官、其他二十一名にして、特に堀農商務技師も臨席せられ、一同着席するや、名和所長より証書を授與して一場の訓諭をなし、堀技師、鈴木第一部長、大熊代議士等の有益なる祝辭に代ふる演說、坂本講習員總代の答辭にて式を終

り、直ちに紀念の撮影をなし、後茶菓の饗應ありて（菓子は特に意匠を凝らして製したる紋黄蝶、紋白蝶、捕蟲網等に象りたる盛込槿の花葉に象りたる干菓子等なりき）五時無事終了を告げたり。今坂本總代の答辭並に修了者氏名を左に掲ぐ。因に十八日より伊吹山に出張し實習講話をなす計畫ありたれば、特に該實習講話のみにて加入せんとの希望者も多かりしが、生憎の天候其他の事情の爲め証書を授與したるものは七名なりき。該景況は追て掲ぐることゝす。且廿三日夜は金華山麓に夜中採集を試みんとの議一決し、特に船を雇ひて萬國昆蟲旗を以て裝飾したる六艘に分乘し金華山の裏手なる城が瀧の麓に錨を下し、各自上陸して昆蟲を尋ぬると共に古勇士の俤を慕はしめたり後中流に掉して互に談笑放言、思はず時を移せば、恰も好し岐阜の名物として世に隠れなき鵜飼船六艘は、整々列をなして下り、此一行の船間に入りて縱横無盡に鵜の繰縱を示し、一同をして思はず其壯觀奇絶を叫ばしむ、而して教習所教官廣瀬警部、池田部長は、此一行に加はりて特に便利を與へられたり

頌狀

名和靖君

多年昆蟲學の研鑽に志し名和昆蟲研究所を設けて専心害蟲の研究に任じ爲めに教育上裨益を與へたること尠からず乃て本會評議員會の議決を經て帝國教育會功牌を贈呈す

明治三十八年八月七日

帝國教育會長正三位勳二等辻新次㊞

割印

第八一號

答辭

昨春二月露國と戈を交へて以來、海に陸に連戰連捷の結果歐米諸國を驚歎せしめ、國民の思想は戰爭に傾き國内到る處談戰爭ならざるはなし。此の時に當り吾等が敬慕せる名和先生は、戰時紀念特別昆蟲學講習會を開設せられ、相會して敎へをうくるもの一府二十二縣五十有九名、朝に昆蟲を談じ夕に六脚蟲を語り、眼に觸れ耳に入るもの一として昆蟲ならざるはなし。凡庸の輩をして之を見せしめば、實に狂と呼び迂と叫ばんや必せり。然り、戰爭と昆蟲學眞に何等相關する所なきが如くなれども、こはこれ皮相の管見のみ、一たび眼光を大にして生物界の全体を觀察せよ、四六時中何れの時か戰爭の絶ゆるの時ある、蜂蝶の舞ひ雲雀の囀づるを見て、詩人騷客は以て天下泰平となさんも、焉ぞ知らん、彼等の裏面には實に暗慘たる生存競爭の活劇行はれ、甲を討たば乙に襲はれ、乙を破らんとすれば丙

ぜらる、其の紛糾錯綜の狀、實に吾人の想像以上にあるを。之をこれ察せずして、戰爭を以て、單に人間社會に屬する一珍事となすは、寧ろ怪むべきなり。生物學者の眼より見れば、生活は是れ競爭にして、競爭は即ち戰爭なり。吾人は一瞬時と雖も戰爭の寰外に脫する能はざるなり。其の所謂平和と呼び戰爭と稱するは、單に近眼的の見解のみ。聞かずや、獨の詩聖ゲーテは國家戰亂の時に當り平然として蟹の解剖に熱中し。毫も戰爭あるを知らざるが如くなりきといふを、畢竟人間の戰爭の如きは、生物界の現象の一小波瀾のみ。何ぞ驚くを要せんや。茲に見る所ありて、國民を驚醒せんがため、故意に此の時機を撰びて講習會を開き、生物界の眞相を披攊して生活現象の法則を知らしめ、一時の戰爭の驚くに足らず、寧ろ平和の戰爭が如何に恐るべきものなるかを國民に鼓吹せんとの意に外ならざるべきを信す。僅に二週間の日子なりと雖も、先生か二十餘年の研究の功と熱誠とは、能く會員をして昆蟲の何物たるかを知らしめ、害蟲の攻擊の恐るべきはスラブ族の比に非るを覺らしめ、擧國一致此の大敵に當る決心を固めしめ、國本の培養は永久の勝利者たるを確信せしめ、延いて人間の自然に於ける位置を明かにし、相戒め相發明すべき根本の思想を與へられしや必せり。本日修業の証書を授與せらるゝに臨み、農商務省技師堀正太郎君、來縣の途次特に臨席せられて有益なる講話をせられ、又當地の先覺諸士が辱くも此の席に列せられ、且懇篤なる訓戒を給はる、生等の光榮と感謝とは何物か之に加へん、希くは自今一層の研究を積み、平和の戰爭の勝利者となり、自然に於ける人類の位置を高めん事に努め、以て鴻恩の萬一に答へんとす。不肖長藏、謹んで會員に代り蕪辭を陳じて答辭となす。

明治三十八年八月廿四日

征露紀念特別昆蟲學講習會々員總代　阪本長藏　謹白

## 征露紀念特別昆蟲學講習修業者氏名

（△印は伊吹山實習講話にのみ加はりしもの）

| 府縣名 | 郡市名 | 町村名 | 族籍 | 氏名 | 生年月 | 略歷 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 京都府 | 與謝郡 | 栗原村 | 平民 | 福岡武百吉 | 明治十六年五月 | 京都府師範學校甲種教員養成所卒業。宮津男子高等小學校在勤 |
| 同 | 相樂郡 | 稻田村 | 平民 | 島岡武夫 | 明治十八年五月 | 京都府師範簡易科卒業。精華高等小學校在勤 |
| 同 | 與謝郡 | 日置村 | 平民 | 橋本彌太 | 明治廿一年六月 | 與謝郡中等養蠶傳習所卒業。城丹蠶業講習所卒業 |
| 同 | 京都市 | 富小路 | 平民 | 淸水富太郎 | 明治廿三年一月 | 京都府立第二中學校三年級修學中 |
| 神奈川縣 | 中郡 | 土澤村 | 平民 | 水島忠貞 | 明治十一年八月 | 神奈川縣甲種農事講習修業。農業ニ從事 |
| 同 | 愛甲郡 | 愛川村 | 平民 | 新井友之助 | 明治十四年十一月 | 大日本農學講習會卒業。愛甲郡農事試驗場書記勤務中 |
| 兵庫縣 | 宍粟郡 | 神野村 | 平民 | 橋本利喜松 | 慶應二年二月 | 宍粟郡農事試驗場技手。宍粟郡農事巡回教師勤務中 |

| 府縣 | 郡市 | 町村 | 族籍 | 氏名 | 生年月 | 履歷 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 群馬縣 | 多野郡 | 美土里村 | 平民 | 白石延太郎 | 慶應元年十二月 | 西ヶ原蠶業試驗場傳習科程卒業。利根郡蠶業講習所長兼講師 |
| 同 | 前橋市 | 新町 | 士族 | 彌城謙 | 明治十四年七月 | 東京私立順天中學校卒業。前橋市立廐橋西高等小學校代用教員 |
| 千葉縣 | 安房郡 | 丸村 | 平民 | 岩淚祐治 | 明治五年十一月 | 東京高等商業學校二年修業。農事講習修業朝夷青年農會副會長 |
| 同 | 安房郡 | 丸村 | 平民 | 伊藤唯次郎 | 明治六年三月 | 安房郡農會農事講習所修了。郡農會稻作改良調査委員勤務 |
| 同 | 安房郡 | 平群村 | 平民 | 長居榮 | 明治十三年六月 | 農事講習修了。安房郡養蠶講習會修得。農業ニ從事 |
| 同 | 安房郡 | 神戸村 | 平民 | 小澤熊次郎 | 明治十四年三月 | 安房國農會第六回農事講習修得。安房郡林業講習修得 |
| 奈良縣 | 山邊郡 | 福住村 | 平民 | 浦久保太良平 | 明治十二年十二月 | 農業教員養成所卒業。南葛城農學校教諭兼校長 |
| 三重縣 | 河藝郡 | 一身田村 | 士族 | 辻喜三郎 | 明治八年七月 | 師範中學校博物植物科教員免許狀ヲ受ク。三重縣立高等女學校教諭在職中 |
| 愛知縣 | 南設樂郡 | 石座村 | 平民 | 山本儀三郎 | 明治八年七月 | 南設樂郡書記。第二課農商係兼土木係 |
| 同 | 知多郡 | 大高町 | 平民 | 近藤爲義 | 明治十三年三月 | 大高町收入役。大高町農會書記兼務 |
| 同 | 愛知郡 | 島野村 | 平民 | 近藤平三郎 | 明治十五年一月 | 愛知縣第一師範學校卒業。熱田高等小學校訓導勤務 |
| 靜岡縣 | 引佐郡 | 都田村 | 平民 | 小林種次 | 明治廿年十二月 | 濱名郡蠶業學校卒業。蠶業ニ從事 |
| 滋賀縣 | 栗太郡 | 治田村 | 平民 | 川崎正之助 | 明治四年一月 | 滋賀縣尋常師範學校卒業。小學校教職ニ從事ス |
| 同 | 栗太郡 | 大寶村 | 平民 | 川口覺太郎 | 明治四年二月 | 滋賀縣農會農事講習修得。大寶村農會副會長當選 |
| 同 | 栗太郡 | 上田上村 | 平民 | 武田喜八 | 明治六年十二月 | 滋賀縣尋常師範學校卒業。上田上尋常高等小學校訓導兼校長 |
| 同 | 栗太郡 | 常盤村 | 平民 | 石田米造 | 明治十二年二月 | 農事講習修了。村會議員。栗太郡第四方面驅蟲監督員 |
| 同 | 阪田郡 | 神照村 | 平民 | 國友金吾 | 明治十五年七月 | 滋賀縣師範學校卒業。神照實業補習學校訓導勤務 |
| 同 | 栗太郡 | 瀨田村 | 平民 | 間宮末三郎 | 明治十六年二月 | 農業科專科正教員免許狀ヲ受ク。瀨田尋高小學校尋常科訓導在勤 |
| 同 | 坂田郡 | 大原村 | 平民 | 山中光之助 | 明治十九年八月 | 滋賀縣立農學校卒業。山東農學校助教諭 |
| 岐阜縣 | 大野郡 | 高山町 | 平民 | 柚原幸太郎 | 慶應二年九月 | 師範初等科卒業。福寄尋高小學校長勤務 |
| 同 | 揖斐郡 | 小島村 | 平民 | 細野德一 | 明治十三年十一月 | 岐阜縣師範學校卒業。毛井尋高小學校ニ在勤 |

| 同 | 武儀郡 | 下牧村 | 平民 | 野倉善太郎 | 明治十七年五月 | 岐阜縣師範學校卒業。洞戸尋常小學校訓導勤務 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 不破郡 | 靜里村 | 平民 | 大谷實 | 明治十七年五月 | 靜岡縣濱名郡蠶業學校卒業。下牧村蔴生蠶業團体ノ巡回教師トナル |
| 同 | 武儀郡 | 洞戸村 | 平民 | 梅園甲子男 | 明治十八年三月 | 師範學校丙種講習修了。農業ニ從事ス |
| 同 | 土岐郡 | 土岐村 | 平民 | 宮地清兵衛 | 明治十九年二月 | 土岐郡蠶業講習修得。養蠶ニ從事 |
| 長野縣 | 下伊那郡 | 飯田町 | 平民 | 前澤政雄 | 明治十六年十月 | 長野縣師範學校簡易科卒業。小學校教職ニ從事 |
| 同 | 北佐久郡 | 岩村田町 | 平民 | 原貞勝 | 明治廿年三月 | 上伊那甲種農業學校卒業。岩村田乙種農業學校教員在職中 |
| 福島縣 | 伊達郡 | 長岡村 | 平民 | 韮澤幸四郎 | 明治十五年八月 | 長岡村蠶業講習修得。農事ニ從事 |
| 富山縣 | 上新川郡 | 廣田村 | 平民 | 中野豊次郎 | 元治元年三月 | 農事講習修了。富山市ニ於テ害蟲驅除講習ヲ受クル二回 |
| 同 | 上新川郡 | 針原村 | 平民 | 高藤與三右衛門 | 明治十年六月 | 富山市ニ於テ害蟲驅除講習ヲ受クルコト二回。針原村役場書記 |
| 島根縣 | 八束郡 | 忌部村 | 平民 | 周藤英一 | 明治六年三月 | 島根縣立農林學校助教諭心得 |
| 廣島縣 | 廣島市 | 平塚町 | 士族 | 下村六三 | 明治十二年六月 | 廣島縣師範學校卒業。廣島高等師範學校博物科修業中 |
| 和歌山縣 | 日高郡 | 藤田村 | 平民 | 坂本長藏 | 明治八年十一月 | 東京高等師範學校博物科卒業。姫路師範學校教諭在勤 |
| 同 | 那賀郡 | 上岩出村 | 平民 | 森田芳藏 | 明治十五年八月 | 和歌山縣師範學校農業科修業中 |
| 同 | 日高郡 | 切目川村 | 平民 | 左巴元春 | 明治十六年二月 | 京北中學校卒業。害蟲驅除豫防委員。農事ニ從事 |
| 同 | 那賀郡 | 丸栖村 | 平民 | 北山正一郎 | 明治十六年九月 | 和歌山縣師範學校卒業。田中尋常高等小學校ニ在勤 |
| 德島縣 | 那賀郡 | 立江村 | 平民 | 高田唯輔 | 明治九年十一月 | 農業教員養成所卒業。新居郡立農學校教諭在職中 |
| 香川縣 | 三豊郡 | 詫間村 | 平民 | 森重之丈 | 明治七年六月 | 詫間村助役。村農會理事。三豊郡農會評議員 |
| 同 | 木田郡 | 牟禮村 | 平民 | 柴野新 | 明治十二年九月 | 高松尋常中學校卒業。爾來專ラ果樹栽培ニ從事ス |
| 同 | 木田郡 | 井戸村 | 平民 | 多田音五郎 | 明治十八年七月 | 高等小學卒業。農業ニ從事 |
| 同 | 木田郡 | 前田村 | 平民 | 香西絜 | 明治廿一年八月 | 木田郡立木田甲種農林學校修業中 |
| 高知縣 | 香川郡 | 弘岡中野村 | 士族 | 土居貫 | 明治六年十月 | 高知縣技手。第三部勤務 |

| 縣 | 郡 | 村 | 族籍 | 氏名 | 生年月 | 經歷 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 土佐郡 | 秦村 | 平民 | 森本重龜 | 明治十九年八月 | 高知縣立農學校卒業。高知縣內務部雇在職中 |
| 同 | 吾川郡 | 西分村 | 平民 | 長崎太郎 | 明治十九年八月 | 高知縣立農學校卒業。高知縣內務部ニ奉職中 |
| 福岡縣 | 糸島郡 | 元岡村 | 平民 | 甫守ふみ | 明治元年八月 | 女子高等師範學校卒業。岐阜高等女學校敎諭舍監兼務 |
| 大分縣 | 直入郡 | 宮城村 | 平民 | 後藤藤卜 | 明治七年六月 | 農業科講習修了。志士知尋常小學校長勤務 |
| 同 | 東國東郡 | 上伊美村 | 平民 | 野田四郎 | 明治九年三月 | 農事講習修了。害蟲驅除豫防委員 |
| 同 | 大野郡 | 牧口村 | 平民 | 村田定 | 明治十二年九月 | 大分縣師範學校卒業。大分縣師範學校臨時講習修了 |
| 同 | 直入郡 | 豐岡村 | 士族 | 井田千秋 | 明治十四年三月 | 大分縣立農學校卒業。直入郡農會技手在職中 |
| 宮崎縣 | 宮崎郡 | 圭日島村 | 士族 | 松田拾藏 | 安政三年十月 | 宮崎郡農會副會頭 |
| 同 | 南那賀郡 | 榎原村 | 平民 | 矢野久美 | 明治九年一月 | 京都蠶業講習所別科卒業。宮崎縣蠶種檢査員拜命 |
| 同 | 宮崎郡 | 檍村 | 平民 | 日高一郎 | 明治十九年一月 | 宮崎郡立農事講習所修了。宮崎縣農事試驗塲雇在職中 |
| 三重縣 | 員辨郡 | 山鄕村 | 平民 | △加治正一 | 明治十六年八月 | 愛知縣立農林學校卒業。農業ニ從事 |
| 滋賀縣 | 阪田郡 | 大原村 | 平民 | △荒尾雖治郎 | 明治十八年十二月 | 滋賀縣師範學校卒業。御園東尋常高等小學校在勤 |
| 同 | 愛知郡 | 葉枝見村 | 平民 | △田口藤兵衛 | 明治十年八月 | 滋賀縣師範學校卒業本莊尋高小學校訓導 |
| 岐阜縣 | 揖斐郡 | 小島村 | 平民 | △窪田信之 | 明治五年八月 | 師範中學校博物植物科敎員免許狀ヲ享ク。岐阜中學校敎諭 |
| 同 | 不破郡 | 宮代村 | 士族 | △宇都宮綱雄 | 明治七年八月 | 師範學校卒業。今須尋高小學校長勤務 |
| 同 | 海津郡 | 海西村 | 平民 | △大橋慧逸 | 明治十七年九月 | 十四回全國害蟲驅除講習會修了。濱名郡蠶業學校三學年在勤 |
| 同 | 不破郡 | 關原村 | 平民 | △山口吉彌 | 明治廿年三月 | 農事講習修了。第六回岐阜縣短期害蟲驅除講習修了 |

◉**長野菊次郎氏の消息**　米國留學の同氏は、渡米后一意專心昆蟲學の研究に從事せられしは勿論なるが、此程本年三月より五月に亘りて、リバーサイトに於て採集したるものなりとて、多數の昆蟲標本を送附せられしが、詳細は他日報ずることゝなしぬ。

# 切抜通信　昆蟲雜報　第參號

明治卅八年九月十五日發行
編輯者・蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●三重縣の稻害蟲　過日來關西地方巡視中なる農商務省農事試驗場技師堀正太郎氏は近日三重縣に趣き同縣下害蟲發生の狀況を視察する由今ま三重縣下に於ける害蟲發生の概況を聞くに苗代期及び移植期に於て各郡とも多少の害蟲發生したるも當業者の注意に依り甚だしき被害を見ざりしが昨今に至り秋浮塵子各地に發生し其區域頗る廣きに涉り動もすれば意外の大慘害を來すべきやの兆候あるに依り縣廳にても之れが驅除豫防上に付種々苦心中の由なるが昨今發生の場所は河藝郡大里村以東、鈴鹿郡中部以南、三重郡常磐村東部、度會郡北部地方には浮塵子の幼蟲發生し發丸、ダンゴ等尤も稻作を害すると甚だしき種類にして其發生も例年に比し早き由にて以上の各郡は發生地の重もなるもの丶由又飯南郡松坂より多氣郡相可に至る一圓及丸三重郡川島村西部には葉卷蟲の發生夥だしく被害莖の拔取り、被害部塵擦等專ら之れが撲滅法を考案中の由又螟蟲も各地に發生せるも未だ蛹期にあれば其驅除餘程困難なるを以て發蛾を俟つて点火誘殺法を勵行し之れが撲滅に勉むる筈なりと而して昨今螟蟲の發生甚だしきは度會、多氣、飯南の三郡なりと云ふ（新愛知）

●害蟲豫防と通牒　本縣第三部長事務官一山直祐氏は害蟲驅除豫防の件に關し各郡市長に宛て此程左の通牒を發したり

害蟲の驅除豫防に就ては精々御督勵中とは存候得共昨今は晝夜溫度の差少く特に浮塵子の發生に好適せる氣候にして農商務省農事試驗場技師大塚由成氏の談に依れば九州地方に於ては既に浮塵子の蔓延せる個所も有之候趣にて本縣は九州地方と稍氣候を異にするが爲め未だ被害の報告に接せざるも何時發生蔓延候哉も難計且從來の狀況に徵すれば浮塵子の慘害を蒙むるは多く初秋の候にあり旁以て此際一層の注意を要する義に付苟くも之が發生蔓延の兆あるを認めらるゝ場合は直ちに驅除豫防に從事せしめ遺憾なき樣十分御注意相成度依命此段及通牒候也

因みに右通牒を發したる程なく別記の如く安佐郡より浮塵子發生の報告達したりと（藝備日日新聞）

●害蟲驅除費支出額　目下縣下各郡に浮塵子發生し漸次蔓延の兆あるより何れも熱心に驅除豫防に盡力中なるが之がため各郡に於て支出せし驅除費は左の如くにて此の外石川郡は誘蛾燈設置費千八百七十九圓七十二錢八厘能美郡は誘蛾燈設備其他害蟲驅除費千九百五十三圓六十七錢七厘を町村區協議費を以て支出したりと（北國新聞）

| | 町村費 | 農會費 | 合計 |
|---|---|---|---|
| | 円 | 円 | 円 |
| 江沼 | 五〇、三五〇 | 一九八、八〇〇 | 一四九、〇五〇 |
| 能美 | 九七、五〇〇 | 九八、六〇〇 | 一九六、一〇〇 |
| 石川 | 七〇七、六九八 | 一六九、五八〇 | 八七七、二七八 |
| 河北 | 一四五、六一八 | 二四、五〇〇 | 一七〇、一一八 |
| 羽咋 | 二三九、一〇〇 | 六二、四〇〇 | 二九一、五〇〇 |
| 鹿島 | 三七〇、七五五 | 一〇〇、〇〇〇 | 四七〇、七五五 |
| 鳳至 | 七、五〇〇 | 一一七、二四七 | 一二四、七四七 |
| 珠洲 | 一二五、二〇〇 | 一九四、一一六 | 三一九、三一六 |
| 合計 | 一、七一三、六二二 | 九六五、二四三 | 二、六九八、八六四 |

●中川村の害蟲驅除　安八郡中川村にては八月十一日來螟蟲大驅除を勵行せり右に付き大垣署より折戸部長出張管區巡査及役場員と協力し督勵大に好果を得たる由なり（美濃新聞）

●臺南廳管內の害蟲　臺南廳管內大目降附近に於て三四十甲の稻田に苞蟲發生したるを以て臺南廳は目下內地に於て奬勵せらるゝ如く小學生徒をして之れを驅除せしめんと殖產係員同地に出張し去る十九日同校の生徒百三十餘名を集め稻の螟蟲と苞蟲又は浮塵子に就いて稻作に及ぼす害と蟲の性質及經過等を說明し校長以下全校の生徒を伴ひ現場に趣き實地に就き苞蟲浮塵子の發生したる稻の枯葉を拔き取り實物を說示する所ありたるに大に理解する所あり且つ生徒をして田の中に入らしめ害蟲を掃はしめたるに結果は頗る良好にして生徒は家に歸りて之れを父兄に語り遂に父兄も其の小兒に奬められ共に驅除に努むるに至れりと云ふ▲噍吧哖支廳管內の苞蟲は苗代の全般に發生したるも同地方人民の氣風は害蟲驅除に熱心なるより臺南廳に報告を受くる以前に農民は其の苗代に水を湛へ穗の水に隱れる位なるより蟲は水に浮き上るを竹箒にて掃き取り或は川に流し鶩に與へるもありて其幾分は宜しからざりしも速かに驅除したるは良好なり去れど這は全く苗代の短册形を勵行したる爲め甚だ好都合なりしと云ふ（臺灣日日新報）

●ムクゲ蟲の發生　ムクゲ蟲と云へる害蟲は例年稻田に發生して稻穗に害を及ぼす事は敢て珍しからざる話しなるが本年は雨量多きためか本郡各村至る處に多數の發生を認めたるも之の害蟲は粟粒程の極小蟲なるが故其驅除も非常に困難なるが上今日まで完全の良法なきに苦しむと云ふ（信濃日報）

●雷門の蝶々戰　十六日朝合五時頃淺草雷門附近、尙ほ消えやらぬ電燈の影白く村雨蕭々と人足未だ繁からぬ處何れよりか無數の白蝶一時に飛び來り、合しては離れ、散じては又群がりさながらに朔風急にして白雪卍字巴と飛狂ふに似たり、見る見る地上に落るもの幾十萬、周圍一町ばかりの地上全く白くなり電車道は特に烈しかりしが何時ともなく其數少くなり行き六時頃には一尾の姿も止めずなりぬ今其地上に落ちたるものについて硏究するに成程形狀は蝶の如くなれど是ば蝶にも非ず、又蛾にも非ず、寧ろ蜻蛉の類に屬する者にて蜉蝣即ちカゲロウの一種なるべし、蜉蝣には双尾蜉蝣、白腹蜉蝣、双羽蜉蝣、透羽蜉蝣などあり淺草のは透羽蜉蝣に近し又合戰の如くに見えたるは其實交尾也、世間にては能く蛙合戰などいふ事をいへど是も合戰には非ずして多くの雄が雌を爭ひて交尾するにて羽蟲にては蚊が殆ど今回と同き有樣を示す事あり、即ち幾萬の蚊が群がりて一團となり恰も團子の如く固まるなるが是矢張交尾也、今度の蜉蝣も矢張交尾をなしたる者ならん然らば此蜉蝣は何處から現はれしかといふに元來蜉蝣は卵の中は水中に棲息し一年に一回しか孵化せざる故水中の壽命は存外永きなり但し一旦孵化するや直ちに水中より飛出して交尾す。而して交尾するや否や亦直ちに產卵す、而して產卵するや否や又忽ちに死し去る、古へより人生蜉蝣の如しなどゝ蜉蝣を一日の命の如く極めて短かき者にいふは即ち此羽化後の事をいふなり但し幾許の時間だけ棲息し得るかは學問上甚だ疑問に屬す此蛹蟲は流れ川の水中に棲息する者なれば或は隅田川の岸歟彼附近の細流ゟ羽化し燈火を便りて集りしには非る歟、當時を目擊せし人の說によれば門跡方面ゟ來りしが多しといへば彼處の濠に湧きし者か此蟲の尤多きは靜岡にして夕刻ゟ燈火へ集り來る者多し、それよりも多きは近江の勢多にてこゝが一番多く羽化する場所と目せらる（萬朝報）

●浮塵子雲霞の如し　簸川郡鰐淵村にゐては浮塵子の發生卒かに甚しく農民は擧つて驅除豫防に餘力なきほどなるも何分降雨のため其効至て尠なく目下雲霞のごとく襲來して益々猖獗を極め殆んど防禦陣地を失はんばかり從ひて稻作も至て不良なる狀態に陥れりと（松江、山陰新聞）

●害蟲驅除と石油の賣行　本年は氣候の順を失へる爲め害蟲の發生著しく此れが驅除に就ては既に勵行中なるが爲めに殺蟲劑として石油の賣行は追次其量を增し來り當市西南部町下關石油合資會社の石油販賣は二十一日四千八百箱にして九州地方行又た二十二日の五千八百箱は縣下萩下松德山地方行にして其他久留米熊本佐賀博多遠賀川筋直方田川行橋中津行は一日平均貨車七臺のよしにて七月中の賣行高は三萬餘箱本月一日より廿三日迄の賣行は二萬九千餘箱に達し尙ほ殺蟲油として續々注文し來れるよし（馬關每日新聞）

●紀伊郡の懸賞害蟲驅除　紀伊郡農會にては本年の稻作に對し害蟲豫防の爲懸賞法を設け郡內擧つて注油驅除を施行せしむる事となり過日來實行しつゝあり其懸賞方法は郡內總反別一千九百三十九町步に對し驅除反別一反步每に籤一本宛を宛て賞品は貯蓄債券二十枚を當籤者二十本に賞與し抽籤は來月上旬を以て執行す而して驅除豫防期限は本月中を限り驅除實施の際は農會職員及郡役所係員を監督の爲出張せしむる筈なり（京都、日出新聞）

●手拭隊の害蟲驅除　大野郡野津市村字中山組合にては手拭隊と稱する烏渡耳新しき一種の害蟲驅除隊を組織せり即ち當部落にては三四名の隊長指揮の下に先づ水守田面の水加減を爲しい續て赤と水色染分の手拭を冠れる若者の一隊（卅餘名重に婦女）隊伍を調へ石油を注ぎ葉帶にて一々稻葉を掃さま自から一種の風情あり聞く所に依れば右は同組長赤峰乙五郎、生產檢查員峰藤元五郎、郡會議員木本佐間太氏等の發意に出るものにして舊盆は若者等自然害蟲驅除を怠るより青年男女の各所に會同しての盆踊りに換るに害蟲驅除を以てせんとの趣向に出でたるものなりと（大分、豐州新聞）

●小學生徒と害蟲驅除　這回の時局以來農家の子弟にして軍に從へる者非常に多く爲に一般農家に於ても頗る手不足を感じつゝある事は世間の等しく認むる處なれば害蟲驅除法の如き充分に行屆かざる事往々にある由なるが茲に南部竹舘村方面に於ては休日若しくは放課後小學校の生徒等をして害蟲の捕獲に從事せしめ凡そ害蟲一匹に付き壹厘代を以て是を買取り居る由にして亦是等生徒の害蟲捕獲の巧妙なる事驚くべきものありと云ふ而して捕獲せる代金は各自生徒に於て郵便貯金として何れも貯蓄し居るとの事なり（青森、東奥日報）

●害蟲自然的驅除　下水內豐井村にては此頃螟蟲の害に罹りし枯稻を拔き取り檢するに其中の蟲は十中の八、九は斃死し居れりと其場所は概ね水吐き惡く大雨の爲水の深くなりし處なり依て水中に浸され窒息せしにはあらざる歟と云ふものもあれども本縣農事試驗場技師の實驗說によれば今の齡（八月九日）に至れば淺川欠壞の爲浸水し湖面の如く稻の全部を浸したる處にても容易に死するものにあらずと果して然らば同村に於る斃死は他に源因のあるならんかとも思はる又同村にては蝗の稻に止りたる儘續々死し居れり其狀恰も蠶の白僵病（白きにあらず黑し）の如し是又一種の病菌に罹りたるものならんとのことなり（信濃每日新聞）

●木杯下附　香川縣木田郡川添村小川元吉氏は同郡立甲種農林學校參考品として昆蟲標本數種寄附せしを以て今回知事より木杯一個を下附されたり（讃岐日日新聞）

●螟蟲採卵と義捐金　苫田郡林田村にては本年小學生徒をして螟蟲採卵に從はしめたるが苗代田にて五萬八千四百五十八個本田にて五千百六十七個を採卵したり又同村の義勇艦隊義捐員擔額は四百六拾七圓なりしが募集の結果七圓餘の超過を見たりと（岡山、山陽新報）

●小學生の害蟲驅除　田方郡伊東小學校生徒は八月二十九日玖須美湯川の水田へ石油を注ぎて害蟲驅除を行ひたるがこれにて伊東全村の耕地一千二百餘町歩の驅除を全く生徒の手にて終りたりと（靜岡民友新聞）

●學校生徒害蟲驅除寫眞　伊達郡小國村にては尋常科生徒をして苗代期に於て害蟲驅除に從事せしめ大に好成績を得たるが其際村農會員及び役場員監督の下に驅除せる狀況を撮影し縣農會に寄贈し來れり（福島新聞）

●御料林の蟲害　北秋田郡上大野村御料林の杉へ害蟲發生せることは既報の如くなるが目下技師鬼川長次郎氏外一名出張し驅除法を講じつゝある由なるが被害反別約七八十町歩にて害蟲は「スギコガ子」と青蟲の二種あり一本の杉に多きは五十少きも二三十を下らず葉はもとより皮の軟弱の部分をも喰荒らし總て枯色を呈したりと實地調査者の携へ歸れる該害蟲を見るにスギコカ子は普通のコカ子蟲と大差なく他の青蟲は長さ六七分にて數日密閉せる箱に入れ置きたるも少しも衰へず活潑に運動しつゝありし（秋田魁新聞）

●小豆の害蟲發生　札幌郡新篠津村に於て此程小豆に一種の害蟲發生し莖幹に淡紅色の粉狀を附着して漸次腐蝕せしめ立枯れに至らしむる由此害蟲は二三年前來存在を認めしも大したる害を及ぼさゞりしが本年の被害頗る著しく而も從來の學說上未だ其名稱をも判明したるものなしとのことなり（小樽新聞）

●葡萄害蟲の發見　長崎縣農事試驗場の酒井技手は今や成熟季の絕頂なる同場試作の葡萄の實に點々腐朽するものあるを見受くるも晝間に害蟲等の取付き居る模樣もなければ必ず夜中然る害蟲が襲來しつゝあるものならんと去夜十一時頃就て檢査せしに思ひきや小形なる木葉蛾が幾疋となく襲來し實に取付きて汁を吸ひつゝあるを發見せしかば同技手は數十疋を捕獲し置きて昆蟲に關する總ゆる書籍雜誌を繰返し取調べたれど類似のものだに見當らず全く特發の蟲なるを認め同場にては江湖の專門學者に問ふべく追て同蟲蕃殖の狀態をも取調ぶる意氣込なりと云へば多くの葡萄を栽培しつゝある人々は就て充分に研究すべき價値あらんとなり（佐賀新聞）

●松蟲の獻上　奈良縣知事より今回畏き邊りへ獻上する筈にて松蟲數疋を美麗なる蟲籠に納め八月廿一日宮內省調度局に宛て送附し來りたるが二日獻上の手續を爲したりと（時事新報）

●小笠原島の飛蝗　小笠原島には先年飛蝗發生したる以來次第に增加し本年五月頃より其增殖殊に甚く同島の主產物たる甘蔗の被害尠からず此儘に打捨て置く時は全島悉く青色なきに至るの虞ありとて東京府にては害蟲驅除費金參千五百圓の補助を農商務省に申請したり（都新聞）

●米蟲發生に就て　本縣昨年產の玄米に米蟲發生せる由にて一部當業者間には單に四斗俵に改めたる結果の如く云ふ者あれど是れ亦た一因たるに疑なきも乾燥の不足と俵の緊縮十分ならざりしもの主たる原因なるべしと云ふ（山陽新報）

## ◉出征軍人の昆蟲標本送附

森宗太郎氏は又々鱗翅目蝶六種十一頭、鞘翅目天牛一種五頭を送られしが、殆んど珍種に屬し、井上藤太郎氏はコムラサキテフ一頭ゴキブリの一種一頭を郵送せられたり。（以上兩氏は滿洲より）生態與一郎氏は樺太に於ける浮塵子類六種廿一頭、ナンキンムシ一種二頭を送られしが、同氏の考案にて紙緒を以て輪を作り、其中に蟲を入れ、后紙包として送られしかば、皆完全に到着したり。郵送の方法としては餘程面白き法なり。

## ◉岐阜縣昆蟲學會第八十一回月次會記事

每月第一土曜日午后一時より、當所樓上に於て開會する同會は、例により本月二日開會せしが、其談話の大要左の如し。

名和梅吉氏は副會頭名和靖氏に代り開會の辭をのべ、第一席特別研究生井上福松氏は、神奈川縣に於けるキリウジの驅除と題し、同地方に於て現今行ひつゝある方法は、苗代或は本田に五六分の深さに水を張り、その中へ茶玉を一反步七八貫目の割合に散布せしに、大に其効を奏せしとて詳細を述べられ、第二席小竹浩氏は、稻の螟蟲と芝草螟蟲との翅脈其他に就て各々異なれる點を述べ、第三席名和梅吉氏には、本年の稻作と氣候との關係と題し、凡て昆蟲は氣候劇變なき時は能く發育するものにして、本年の如きは、天候不良なると溫度概して低かりしとにより、害蟲又は作物の生育少しく遲れたりしと雖も、劇變の少なき爲め浮塵子の如きは隨分繁殖し今後若し天候舊に復せし日には、稻の發育につれこれに伴ふ幾多の害蟲の大發生するやも圖られざるべしとて、大に警戒を加へられ後一同茶を喫し同四時半閉會を告げたり。

## ◉水曜昆蟲談話會記事

當所內に於て每週水曜日夜間開會の同會談話の大要左の如し。

名和梅吉氏は、糖蛾類の分類を述べて農作物害蟲なるや或は森林の害蟲なるやは大畧其形狀に依て區別し得らるゝこと、又大小豆の害蟲の重なる七、八種を擧げて各々其被害の狀態を述べられ●小竹浩氏は、僞瓢蟲の幼蟲寄生蜂を紹介して、小蜂科と卵蜂科と各々異なれる要點を擧げて兩者の分類を述べ●谷貞子氏は、螽斯科と蟋蟀科の幼蟲二十餘種を寫生圖に依つて說明し●野口次兵衛氏は、氏が近來の採集にかゝる象鼻蟲二十餘種を、一々其標本を以て說明し●野田稻司氏には、蠅の驅除法と題し、夜中天井等に靜止せるものを捕獲する良法を述べ●福永俊造氏は、テンタウムシの幼蟲觀察談、並に夜中採集に於ける所感を述べ●井上福松氏は、害蟲驅除の方針、並に煙草の螟蛉及び蚜蟲の驅除法として、他の驅除劑に「アマチヤ」を混合して用ふれば大に其効あること、並に其配合等に就て詳細に說明せられたり。

## ◉昆蟲標本陳列館參觀人員

當所常設の昆蟲標本陳列館を、八月中に參觀せし總人員は二千四百三十六人、一日平均九十人强、內尤も多かりしは十六日に於ける百八十五人、內尤も少なかりしは十七日に於ける二十八人なりき。

# 昆蟲世界

第九卷第九拾七號

(明治三十八年八月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)


## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩 昆蟲亂題(但季は秋の事) 魯嶽君選

▲短歌 昆蟲亂題(但季は秋の事) 潮音君選

▲俳句 椿象十句(十月五日占切) 三川君選

△占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園內名和昆蟲研究所

椿象は有吻目に屬し皆針狀の口吻を以て植物の滋液を吸收す此蟲は種類多けれども皆一種の惡臭を分泌するものなり特にクサガメと稱するは一種言ふべからざる臭氣を分泌し若し手を觸るれば忽ち惡臭を遺して容易に其臭氣を去り難し是れ此蟲の唯一の防禦機關にして鳥類等の襲ふことあるも此の臭に僻易し啖食することなし幼蟲は特に奇麗なる彩色を有し却て敵の目に觸れ易からしむるは是れ誤て攻擊を加ふる等のことなからしめん爲めの警戒色なり



| | |
|---|---|
| ⋮ | 市境界 |
| ‖ | 案內道 |
| \| | 市道 |
| イ | 元位置 |
| ロ | 陳列館 |
| ハ | 縣廳 |
| ニ | 中學校 |
| ホ | 病院 |
| ヘ | 郵便局 |
| ト | 西別院 |
| チ | 研究所 |
| リ | 長良川 |
| ヌ | 金華山 |
| ル | 停車場 |

## ◉名和昆蟲研究所案內

當昆蟲研究所は從來上圖の如く(イ)の位置にありしが今回當市公園內即ち(チ)の位置に移轉せり・又常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)は從前の通り岐阜縣物產館構內にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所


## ◉本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢

壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢

(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)

(注意) 本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料 五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十八年九月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二(岐阜市公園內)

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二 發行者 名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戶 編輯者 小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二 印刷者 河田貞次郎





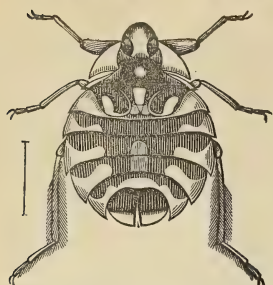
明治三十年九月十日內務省許可

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] OCTOBFR. 15TH, 1905. [No.10.

# 昆蟲世界

第九卷第拾冊　明治三十八年十月十五日發行　第九拾八號

目次　（禁轉載）



（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

## 本所移轉擴張寄附金品領收廣告（第十五回）

一金壹圓也　兵庫縣有馬郡小柿村　堂本栞君
一金壹圓廿錢也　岐阜縣岐阜警察署詰巡査　谷口豁夫君
同　岐阜縣小坂分署詰巡査　川中熊次郎君
岐阜縣關警察署詰巡査　富田稔君
岐阜縣太田警察署詰巡査　後藤勝太郎君
岐阜縣中津警察署詰巡査　淺野萬次郎君
岐阜縣高山警察署詰巡査　長尾儀一君
岐阜縣多治見警察署詰巡査　和泉松太郎君
　小西安藏君
一金參圓也　三重縣志摩郡磯部村　杉山馨君
一金參拾圓也　静岡縣周智郡農會長　大澤富二三君

小計參拾五圓貳拾錢也
累計金九百六拾貳圓四拾八錢也

右御寄附相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十八年十月十二日

名和昆蟲研究所

## ◉滿洲產昆蟲特別廣告

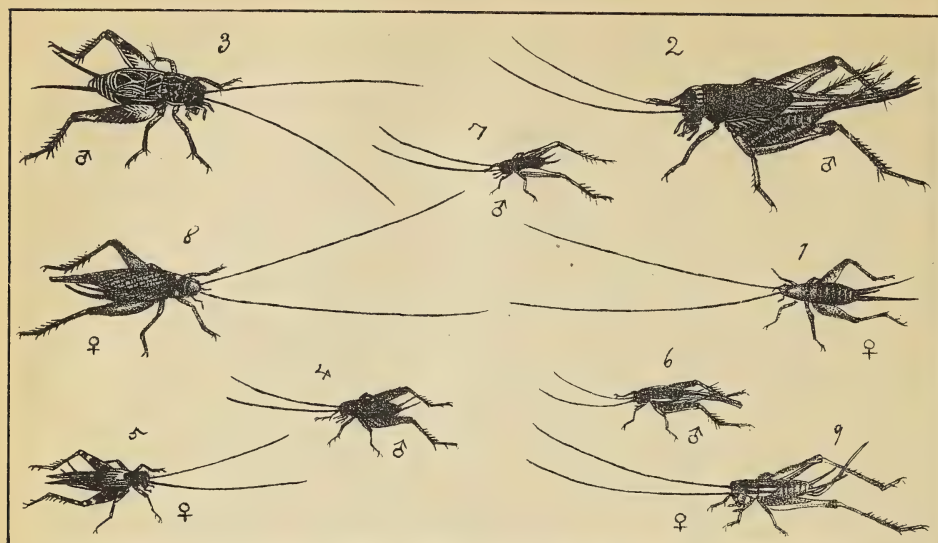
忠實なる出征軍人諸士が滿洲產昆蟲を採集して當所へ送附せられし事は其都度本誌上に於て略報し置きたれば讀者は既に其大略を知らるゝならん而して目下續々小包便其他の便法を以て多數送附せらるゝの報ありしを以て到着の上は早々報告の義務を怠らざるも到底多數のものを容易に盡し難きを以て茲に當所は特別紀念として滿洲產昆蟲を一括して永く後世に殘さんことを期せり願くば此際續々御送附あらんことを切望す

岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

## ◉特別廣告

本誌は去る明治三十年九月十五日を以て第一號を發刊し、爾來種々なる艱難辛苦の間に成長して漸く本月に至り、號を重ぬる九十七、年を經る茲に滿八年、其間一回の休刊なく、年は一年と改良に改良を加へ愛讀者諸君の厚意に酬んとするも、素と微力にして到底滿足を與ふる能はざるを遺憾とす。幸に愛讀諸君の厚意により、漸く本號に達したるは當所々員一同の滿足する所なり。今や征露の時局も愈々發展したると共に、害蟲軍の逐討も愈々急激に發展せしめざるべからず。されば本誌の特色とする作戰計畫を運用實行して、蟲軍の壓迫勦滅を圖るべきなり。故に記者は益進んで特別なる作戰方法、即秘密の方法を續々誌上に掲載して愛讀者諸君の參考に供せんとす。且本年十二月に於て第一百號に達して全く第一世期を終り、明年一月發刊の第百一號即ち第二世期の初號なれば此期に際し大に祝意を表せんとす。其方法に至りては、今より饒々敷云ふの要なければ只讀者の想像に任せんのみ。

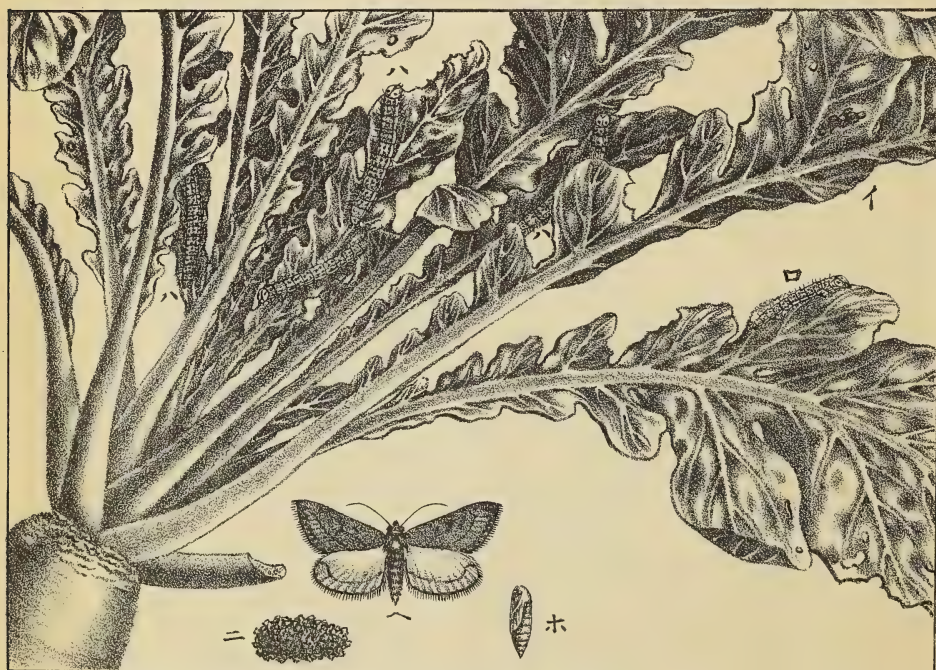
明治三十八年十月

岐阜市公園　名和昆蟲研究所

1 カネタゝキ　2 イチモジコホロギ　3 コガタコホロギ

4 ギフヤマスゞ　5 マダラスゞの變種?　6 ヤマトスゞの變種?

7 ヤマトスゞの一種　8 マツムシモドキ　9 コバネサゝキリモドキ

キンスヂウスバ(Pionea forficalis.)の經過圖

# 論説

## ◎驅蟲用藥劑販賣者の注意を促す

本年春季以來、氣候順を得ざると天候の不良なりしとに由り、農作物の發育に非常の影響を蒙り、平年に比し甚しき減收を免るべからさるは、全國殆んど一般なるが如し。加ふるに浮塵子の發生は意外に多く、之れを等閑に附したらんには、一層減收の傾あるは實に憂慮に堪へざるなり。一般農家は奮て害蟲軍を掃蕩し、滿洲軍人に讓らざるの功を樹て、戰捷國たる農民の本分を盡されんことを切望す。抑も害蟲驅除には種々の方法ありと雖も、要するに天然驅除と人意驅除との二法に歸し、此兩者相待て能く効を奏すべきものなれども、蟲の種類發生の如何によりては、到底藥劑の力に依るの外策なき場合に於ては、往々天然驅除を無視するに等しき場合尠しとせず、即ち或る時期に於ける浮塵子驅除の如き其一例にして、適當の藥劑と周到の注意とを以てせざれば奏効し難し。夫れ藥劑驅除は甚必要にして、又甚だ危險なれば、豫め其藥劑の性質、植物に及ぼす影響價の廉否等種々なる關係を調査し、以て適當に用ひざるべからず。藥劑驅除夫れ難ひ哉。之れ當所は常に簡單有効なる器械と相並んで、確實廉價なる藥劑を撰ぶべしと奬勵すると同時に、一方に於て注油法行ふべし行ふべからずと警戒する所以なり。近來實地驅除に從事するもの丶多くは、經濟の如何を問はず、藥劑驅除を重視するの傾向あるを以て、種

々なる藥劑續出せしも、石油は浮塵子驅除に對する唯一の殺蟲劑として賞用せられつゝあり、本誌前號切抜通信昆蟲雜報欄にある、馬關每日新聞掲載の害蟲驅除と石油の賣行てふ記事を見るに、下關石油合資會社の賣高、驅除劑として八月中に三萬餘箱、九月一日より同廿三日迄に二萬九千餘箱云々を見れば一部の地方に使用する量の如何に多きや、且如何に石油を重ずるやを想像し得らるべし、これ害蟲軍征討上止むべからざる軍資なるも、果して適當に運用し得るや否やは大に疑なき能はず。從來試驗の結果浮塵子驅除には石油量一反歩一升を適當とするあり、一升五合說あり、二升乃至三升の說あれども、何れも誤れるに非らず、又石油の精粗に由るにもあらず、大畧蟲の稚熟如何によりて斯く用量に差を來すものなれば、孵化の當時直ちに驅除すると、充分生長したるときに於てするとは、石油の分量に二倍乃至三倍の差を生ずるに至り、價格も亦甲の壹圓を要する塲合に乙は貳圓乃至參圓を費さゞるべからず、今一縣若くば數縣に亘りて發生したる塲合に、初期に驅除すると、稍時期の後れたるとは其驅除費の差實に巨萬の額に達するを思へば、豈輕視すべけんや。且つ石油は、燈火用として年々の輸入額千五百萬圓に上り、特に露國よりの輸入品多きを察すれば、一層警戒すべし。今や戰捷後の經營として起すべきの事業多く、益々財源を求むるときに於て、仮令僅少たりとも無益に正金を海外に流出する如きことは大に忌むべき秋なれば、等しく驅除するにも能く心すべきことなり。故に當所は內國產にして之れに代ふべき藥劑あらば、速に代用せんことを奬むるものなり。然れども幾多の藥劑も、廣告の立派なるに比し、其實質の之れに伴はざるもの多きより、折角代用品を使用するも、石油の返て廉にして効力の多きに如かざるを覺り、浮塵子驅除には、石油以外に良劑なきものと信せしむるに至りたるは、國家經濟上甚だ遺憾とする所なり。然れども、藥劑其ものが悉く粗惡なりとも限られざれども、偶ま奸商等の卑劣

の手段を以て暴利を貪り、無辜の良民を欺くものあるより、勢ひ不安の念を起し、折角良好の藥劑も同一視せられ、石油の安全に如かずと信ぜしめしは、返す／＼も殘念の至ならずや。乞ふ製造者は充分注意して精良なるものを作り、商家は奸策を弄せず誠實に農家に取次ぎ、農家をして信用して使用するに至らしめば、國家經濟上莫大の利益なる明にして、又商家は却て永遠に眞の利益を得らるゝは疑ひを容れざるなり。當業者 幸に此の希望の一端を容るゝの勇ありや否や。

## ◎萊箙類の害蟲金條薄翅驅除豫防方法（第十版下圖參看）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

余が、本誌前々號に藍作の害蟲たる藍髓蟲と、前號には萊箙類の害蟲最も加害劇甚なる、鞘翅目中葉蟲科に屬する一種猿葉蟲に就き、そが梗概を記述せし以來、各地の熱心なる諸君より、特に何々の害蟲に就き、其梗概幷に驅除豫防法等を記述せよとの希望を報ぜられしものあり。今一々其意を滿さんには、蓋し充分なる實地の經驗に俟ざる可からず。然るに余素より淺學、加ふるに經驗に乏しきを以て、目下頻りに各種の害蟲に就き、夫々實驗調査の途にある事とて、悉く熱心なる諸君の希望を滿さんとは、到底望む可くして成し能はず、誠に遺憾に堪えざる所なり。然りと雖も、今其厚意を空しくするに忍びず盲者蛇に恐れずと謂へる語に倣ひ、其希望せらるゝ害蟲中、予の學び得たる種類に限り記述することとし

誤謬若くは足らざる處は、先輩識者の垂教を仰ぐの意を以て、一は研究の資料に供し、一は以て熱心なる諸君の厚意に答えんとす。讀者諸彥請ふ之を諒せらんことを。

今此處に紹介せんとする種は、鱗翅目中小蛾類に屬する一種、キンスヂウスバ（金條薄翅）と稱するものなり、元來此キンスジウスバなる名稱は、そが翅色と、紋理幷に翅質より來りしものにて、該蟲の前翅が、一躰に光輝ある淡黃色を呈し、翅面には褐色の横線と斜線とを存ずるのみならず、他の小形蛾類に比して翅質薄きが爲めなり。然れども又該種に就きては、そが幼蟲の性質より命名せしものあり、即ちナノホシケムシ（菜星蛄蟖）或はホシアヲムシ（星螟蛉）など呼稱せしものなるが、松村理學博士の新著、日本昆蟲總目錄第一卷に、ナノメイガの和名を附せられたるものも、又此種を表示せしものとす。此種の幼蟲は、前號に掲記せしサルハムシ（猿葉蟲）と同樣に萊菔、蕪菁、白菜等總て十字花科植物に屬するものに發生加害するものなり。成蟲即ち蛾は、形躰纖弱にて、捿止の際は稍屋背狀を爲せり。其躰長三分乃至三分二、三厘翅を擴張する時は七分五、六厘乃至八分五、六厘を算するものあり。全躰淡黃白色にして、前翅は光輝ある淡黃色を呈し、一見鈍き黃金色を現はす、而して翅の外緣に一本の褐色線と中央に同色を呈する二個の斜線の、前緣より後緣に走れるありて、右斜線の內方に存するもの丶上部、即ち前緣に近き部分には淡き暗褐色の斑紋を存したり。後翅は躰と殆んど同色澤にて、一個の褐色を呈せる彎曲線を有するを常とす。年々五月初旬の頃より現出し、晝間は葉裏或は被害植物の近傍に生在する草叢中に潜伏し、夕景より飛揚し來りて、交尾の後葉裏に產卵する事は恰も藍髓蟲のそれに似たり。一母蛾產する所の卵數多けれども、一所に數粒乃至二十餘粒宛所々に產するの性あり。卵子は扁平にして、白色或は淡黃色を呈す。孵化期に近づくに從ひ漸次變色し、一週日乃至十餘日を經て、孵化して幼

蟲と成る。幼蟲は始め柔軟なる新葉を食して成長し、四、五齢期に達する時は、大なる硬葉をも食するに到れり、其老熟せしものは躰長七、八分に達し、背上は灰白色に藍色を帯び、腹面は淡黄緑色を爲す。而して毎關節背上には暗黑色の斑紋を有し、夫より粗毛を生ぜり。其蛹化するや先づ土中に入り繭を營み、其中にて蛹となる。繭は稍々楕圓形を爲し、外圍は土を以て被覆せらるゝに依り、外觀恰も土塊の如し。蛹は二分七、八厘内外にて、多少光輝を有する淡褐色なり。蛹化後凡そ一、二週日を經、羽化して成蟲となり産卵するものなり。

キンスヂウスバに關する大要は前述の如くにて、一年二回の發生をなし加害す。即ち第一回の發生は、通常五月初旬に始まり、六月下旬乃至七月上旬に亘り、第二回の發生は、九月初旬に現出し十月に終るものとす、其第二回目に發生せし幼蟲は、老熟後土中に入り、繭を造營して其中に蟄伏し越冬するものなり、而して斯く蟄伏せる幼蟲は、翌春四、五月頃に到り、暖氣を得て蛹化し、續ひて蛾と成り、産卵して加害を爲すと前年に同じ。今左に、例に依りそが驅除豫防法を略述せん。

第一捕蛾　前掲せし如く蛾の現出するは、一般に五月初旬より六月初旬と、九月中旬より十月初旬との二期なるを以て、そが期節を失せず、年々加害せらるゝ個所にては特に注意し、圃間を見廻はり、該蛾を發見次第捕蟲器を以て掬殺すべし。最も該蛾は飛揚餘り速かならざるに依り、容易に捕獲し得べし

第二幼蟲捕殺と藥劑驅除　此種の幼蟲即ちホシアヲムシは、最初新葉に多きものなれば、圃間巡視の際は該部に注意し、發生を認むる時は直に捕殺すべし。藥劑を以て驅除せんには、單に硫黄華を被害部に撒布するか、或は石油乳劑の二十五倍乃至三十五倍溶液を、如露或は噴霧器を以て注射するを良しとす。又除蟲菊粉加用石油乳劑、或は煙草莖の侵出液を石油に換へ、乳劑を製して注射するも効驗あり。

第三冬季の鋤耕　該蟲は既に記述せし通り、冬季は土中の繭内に蟄伏して經過するものなれば、豫防の一として加害を蒙りたる地方に於ては、事情の許す限り冬季農閑を利用して鋤耕に勉め、土中の繭をして地上に曝露し、以て繭内の幼蟲の凍死を希圖すべし。

## ◎文學上に於けるタマムシの位置（續）

在岐阜　永澤小兵衛

古來、漢土の書に、タマムシを錄載せるもの少なからねど、彼の國にはコガネムシ、チンガサムシの類をも、亦媚藥に用ゐけるより、遂に數物互に錯交して、判斷に迷はしむる記事無きにあらず。特に南清の漳州泉州地方より移住せる臺灣土人の、玉蟲色したるコメツキムシを目して、之をパァザァクウ（破柴龜の土音なり、即ち木伐蟲の義歟）と稱へたるに關らず、猶ほ邦產のタマムシと混視して、その異同をさへ辨へ得ざる程なれば、たゞ書册の記錄に照して、之を定めんこと極めて危ふし。さもあれ、英華字典に Buprestidans を金蟲と譯し、又漢俗は、今になほ舊說に拘りて、女子の釵簪の粧飾に充つること、我れに刀劍の目貫に用ゐたると、同日の談にあらざれば、この點より云はゞ、華夷花木鳥獸珍玩考の「金蟲、出利州山中、蜂體綠色、光若金、里人取以作婦女釵環之飾」こそ、紛ふ方なきタマムシなれ。その他、正字通に「綠金蟬、即爾雅蟦蛢、一名吉丁蟲……皆謂其綠甲有泥金、今爲簪釵飾」云々、通雅に『綠金蟬即吉丁蟲也……今作簪釵飾、曰綠金蟬』云々、爾雅郭注義疏に「今甲蟲綠色者、長二寸許、金碧熒然、江南有之、婦人用爲首飾、郭義或當指此、然未聞此蟲能翼鳴也」云々、と見えたれば、その長江以南より、廣西地方にかけて、分布せるものなる事をも明らむべし。たゞ廣東新語に「金花蟲、大者如斑猫……一名綠金蟬、喜藏朱槿花中、一々相交、取帶令夫相媚」とあるはコガネムシか、ハムシかの一種たるべし。そは其の大さを斑猫に比べ、且つ朱槿花中に聚ると云ふ

文にて推量らる。斯く漢土に於てすら、タマ　ムシとコガネ　ムシとを混同せしかば、唐本草を宗とせる庶物類纂、大和本草、和語本草、訓蒙圖彙、本草藥名和訓抄などに、その譌謬を承けたるも、怪むに足らねど、本草綱目會誌に、金龜子にイネツキ　ムシ、チマタテ　ムシ、カツヲ　ムシの三稱を當てたる、千蟲譜に、綠金蟬にタマ　ムシを訓ませ乍ら、金蟲をば、全く別物としたる、倶に杜撰の極みなり又和漢三才圖會の吉丁蟲の條に「俗云二玉蟲一是也、江州及城州山崎攝州有馬多有レ之、婦女納二鏡奩一以爲下媚藥上、用二白粉汞粉一藏レ之、經レ年不レ腐、雄者全體正綠光色、縱有二二紅線一、腹亦帶二赤色一、潤澤可レ愛、長一寸二三分、頗似二蟬形一而扁、小頭其頸有二功界一、露眼六足也、雌者長寸許、全體黑而光澤帶二金色一、縱有下同色筋脈數行上、蓋雄者多雌者少」とあれども、前半に誤記あり、後半には俗説に從ひて、二屬混淆の嫌ひあれば、肯け難し。本草綱目啓蒙に曰く「山中に生ず。叩頭蟲に似たり、長一寸許にして、濶さ三四分、背に硬甲あり。碧色と綠色とのひろき間道竪にありて、金光あり、腹は綠色にして、金色あり、女人取て粉匣に收む、久しくて敗れず、一名綠金蟬」この説是なり、從ふべし。

タマ　ムシは他蟲に勝れて、その色彩の艶麗なるものなれば、小説には、毎に嬋娟たる美女に擬へたるが、こは室町時代にものせる玉蟲草紙に

此に近き頃、きたいやさしき戀の道あり。頃は、八月中の十日ばかりの頃なるに、野もせの花の色めく草の下葉に、すだく蟲のその中に、白練衣の十二單に身をまとへる蟲、かゞやくほどなれば、名をば玉蟲姫とぞ申ける。數々の蟲ども、かの玉蟲を見きゝ、同じ浮世に生れあひても、玉蟲姫と草の枕をならべ、薄が袖をもかさればやと、思ひをかけぬ蟲ぞなき。餘り思ふも苦しきに、各玉章を通はし、歌にて心をひき見ばやと思ひけり。

との前書ありて、それより十餘種の蟲どもが、文に歌に、千々の思ひをいはして、互に玉蟲姫を口說けれども、皆これを斥けて容れず、たゞ松蟲左大臣の最と優雅たる心にひかされて、畢に愛たく偕老の契

りを結ぶ事を載せたるぞ、その權輿なる。されど、江戸時代に至りて、少しく趣向を變へ、螢を以てその對偶となしたれば、正章も、千句獨吟の俳諧に「玉蟲と螢が中は羨まし、朽木の穴は月ももらずや」と詠み、又蟲合戰物語、蜘螢夜話、蟲合戰獸鳥の助太刀などの類には、玉蟲と螢と、新に伉儷の約成りて、中睦しう暮しけるに、豫てより玉蟲の艶なる姿容に懸想せる土蜘の、これを觀て嫉妬の恨みを懷き部下の惡蟲どもを誘らへて、戀の復讎を企てたる次第を骨子となせり。されば祭禮船歌をはじめ、狂歌俗歌などにも、松蟲左大臣の名は、復た見えずなりぬ。

按ずるに、この蟲は、他の蟲類のやうに、異稱別名とても無きものなれば、國文學に玉蟲と書くとも、更に錯雜を來さん虞なけれど、詩文には、宜しく之を避くべきなり。漢土にも、玉蟲と云ふ名詞ありて唐の韓愈は「黃裏排二金粟一、釵頭綴二玉蟲一」と詠み、元の謝宗可も「玉蟲飛入白紗囊」と詠みたれども、ともに燈花を形容せる言葉にて、この蟲を指しゝにはあらず。又作例に擧げたるナゲ節の人目忍ぶの唄は、元祿以前の時謠なるが、情緒繚亂のさまを言はんとて、これを鳴蟲となしゝは惡し、强て聲音をいはずとも、他に趣味ある新想を求め難きにあらざるべし。伊豆國賀茂郡山隨祉の神樂歌とかいへる「垣根に住むが、きりぎりす、燒玉の家を、かに申せ、囃せ、子供ら。榎木に住むは、玉むし、申せ、囃せ子供ら」は、極めて拙き作ながら、タマ　ムシと被害植物とを謳ひたるだけに、面白く感ぜらる。理に趨せんよりは、率直に自然を歌はん方、却て貴かるべし。この他、玉蟲厨子、玉蟲色などにつきての說話もあれど、文學にさまで用なきものなれば、總て省きつ。尙ほ金龜子の記事を參照せられよ。

微小含レ靈玉豈攻、不レ爲二濕潤一不下玲瓏上、刖人坑畔生二秋草一、冤魂依焉有二足蟲一。　（林　羅山）

はかなさは露よりげなる玉むしのからをとゞめて形見とや見ん。　（藤原知家）

いろに濃き千ぐさの花のかず〳〵に思ひみだるゝつゆの玉むし。（こうろぎ草子）
我がなみだつらきあらしの吹きしけば貫きとめぬ玉の名も憂し。（魚蟲歌合）
たま蟲は掃き捨てる師のおきて哉（言水）
玉むしや伽羅とも朽ちぬ香づゝみ（白芹）
人目しのぶの草葉にむすぶつゆの玉むし音にぞ鳴く。（作者不詳）ナゲブシ
當ツたま蟲目あてを射とめ願ひかなめの身であふぎ。（竹巴）玉盡し三十審歌合

## ◎トツクリバチの巣營并其飼育

名和昆蟲研究所員　名和正

本年六月五日、余は午餐を終り、所内を徜徉し、不圖陳列室の西に到りしに、高さ二尺許の桐樹の上部にトツクリバチの巣を營むを認めしか、其巧みなるに感じ直に視線をそれに奪はれたりき。今余が目擊せし巣營の有樣より、其幼蟲が余が手に育てられし摸樣を左に照會せんとす。偖余が之れを發見せしときは既に巣の過半を作り、今盛に小土塊を持ち來りて其巣壁の一部を作りつゝある所にして、彼は巧みにも、巣の中心に頭部を向け、中後の四脚を以て体を支へ前脚及び口を以て土塊を支持し、右方より左方にと漸次巣壁を作り居る最中なりき。此の土は普通の土壤にして、蜂の之を持ち來るや、多量の水を含有せる小塊となし、前脚を以てそれを運び來るものなり。此の一塊の土を以て巣壁の一部を造り終るに要する時間は凡そ三分間にして、又之を運び來るには僅に四分間を要するものなり。而して、其蜂は南方十數間の路傍水溜の邊より土を運び來るもの〻如く見受けたり。今上述の巣壁の一部を三回反覆觀察せし時間を表示せば左の如し。

| | 第一回 | 第二回 | 第三回 |
|---|---|---|---|
| 蜂の土塊を以て一壁を作るに要する時間 | 自一時三十六分至一時三十九分　三分間 | 自一時四十三分至一時四十六分　參分間 | 自一時五十一分四十八秒至一時五十五分十二秒　三分廿四秒間 |
| 蜂の土塊を運ぶに要する時間 | 自一時三十九分至一時四十三分　四分間 | 自一時四十六分卅秒至一時五十一分　四分三十秒間 | 自一時五十八分至二時一分　三分間 |

此の表の如く、土塊を運び來りて一部の巣壁を作り終るに要する時間は、凡そ七分時を要す。然れども應々土塊採集の際、及飛揚中に、敵の爲め或は其他の障害の爲め、幾分餘計の時間を費すことあれば、平均凡そ七分廿秒時間を以て一層壁を造る物なり。而して、何回即ち何層を以て一個の巣を造營するやを觀察せしに、(一回土塊を持ち來りて營む部分を假りに一層と云ふ)最初余の發見せしは、既に十五層目を營みつゝある所にして、それより四層を以て完成したれば、十九層にして全く一の巣を營み、之れに要する時間は二時間と十三分乃至二十分を要するものなり、斯く僅かの時間を以て營むを以て、造營後のものは往々見ることを得るも、造營中のものを見ること難く、余は今回始めて之れを認めたるなり。(圖中のイ)巣の全く出來終るや蜂は數分時間其近傍の樹上に休止し、後又再び飛び來りて巣の上方に体を居き、腹部の末端を孔内に挿入して産卵せり。其産卵には凡そ三分時を費し。夫れより蜂は其近傍を飛び廻り、全く巣の安全を確知するに當りて、幼蟲に與ふべき食物を求めんが爲め南方に飛び去り凡廿分三十秒の後一頭の尺蠖蟲を捕へ來り、巣の孔口より速に巣内に押し入れ、再び時を移さず飛び去れり。第二回目にありては僅々九分時にして一頭を捕り來り、それより以後は甚手間取りしを以て、當日は之れにて觀察を中止せり。一体此蜂の捕へ來りし尺蠖は、体長三分五厘内外、体色綠色にして褐色の小斑を有する美麗なるものにて、大小一定せざれども、其種類にありては皆同一なるものゝ如く見受けたり。翌六日は朝暫く晴れ居りしのみにて、殆んど終日降雨なりしかば、蜂の働くをも見ざりき。

茲に於て戯事とは思ひしも、巣内より尺蠖四頭を取り出し置けり。第三日即七日は、朝暫く降雨ありしも、直ちに晴れたれば午前十一時頃巣を觀察せり。其時蜂は巣の孔口を塞ぎつゝある所にして、余は蜂の飛び去りし後、直に小孔を穿ち、尺蠖四頭を取り出し置けり。午後一時巣を見るに、こは如何に、藁灰と土とを練り合せたる如き土を以て孔口は勿論巣全部を覆ひて、其色桐樹の皮色と異ならず、一見桐樹の瘤の如く見へたり。二時半頃余又孔を穿ち、尺蠖四頭を取り出し、三時半又巣を撿せしに、八頭の尺蠖を得たり。其時恰も蜂は孔を塞がん爲め土塊を持ち來りしかば、試に一頭の尺蠖を巣孔に懸け置きしに、蜂は大に驚き、持ち來りし土塊を巣上に置き、恐る〳〵尺蠖を口に食へ、近傍の樹上に飛び去れり、依て余は巣内を觀察せんとて、種々考ふれども、孔口小にして内部を窺ふ由なければ、孔を少しく大にし、反射鏡を以て太陽の直接光線を巣内に反射せしめたるに、實に意外又意外、余は是迄、此蜂の卵が巣の內壁に直接附着し在るものと考へ居りしに、巣の上部に於て長さ二三厘に足らざる糸を垂れ、其先に卵を附着せしめありたり。故に巣或は其桐樹に觸るゝか、又は少しく風の吹くあれば、卵は前後左右に動搖し、少時も靜止することなし。卵は長楕圓形にして多少反り味を有し、長一分五厘、巾三厘、色は黄白にして半透明なり。夫れより余は既に數回の障害を加へたるを以て、もはや蜂は其巣を見捨てたるを察し、巣を採り來り紙箱內に入れ置きしに、產卵當時より五日目に孵化せり。依て小なるチューブに入れ、以前巣中のものを採出せし尺蠖總て二十頭を與へ、綿にて蓋をなし、日々之が觀察を怠らざらし。幼蟲は体長一分、白色半透明にして稍黄色を帶び、一見蠅の幼蟲に類似せり。然れども、口具は發達して尺蠖蟲を食するを見受けたり。

トックリバチの圖

イ　ロ　ハ

十日（孵化の第二日）午前十一時頃第一回の脱皮をなし、体長一分五厘、体色餘り變ぜざれども、体の中央部は黄色濃厚となれり。十一日体は著く大くなり、体色又淡褐色に變せり。十二日体長三分、巾七厘（中央の最も太き處）体色淡黄色、頭部白色に、体は常に彎曲せり。此幼蟲の尺蠖を食する狀恰もヒラタアブの幼蟲が蚜蟲を食するに似たり。十三日体長四分五厘、体色變ぜざれども此の中央部以下、兩側に二條の乳白色をなせる絹糸線著しく現わる。又本日は尺蠖の總てを食し終りて瓶中を這ひ廻り尚食を求むるもの丶如く見受けたれども、其儘にして一頭をも與へざりき。十五日硝子管内に於て、壁に密着せしめ多くの糸を纏へり。二十日蟲体は大に變じ、乳白黄色不透明となり、各環節の接合部は高くなり、頭部を見るに將に脱皮せんとする狀なり。二十三日に至り全く蛹化せり。圖中の（ロ）は即其蛹なり。形狀成蟲に良く類似し、色は乳白色を帶べり。七月七日羽化す、其成蟲は（圖中のハ）体長四分五厘、翅張八分の小形種にして黒色を帶び、顏面黄色に前胸には黄色の横帶あり、後胸背には二小黄點と一個の短き横帶あり。中胸側面には、小黄點を有す。腹部は有柄にして、二條の稍太き黄帶あり。以上の實驗によれば、卵期五日、幼蟲期十七日、蛹期十五日間にして、産卵より羽化まで三十七日を費せり。該蜂は蜾蠃蜂科に屬し學名を Eumenes Nawai, Ashm. 和名をトックリバチと稱する有益蟲の一にして、右の照會が幾分の參考ともなるあらば、余の光榮とする所なり。

## ◎鳴く蟲に就て（第十版上圖參看）

名和昆蟲研究所内　谷　貞子

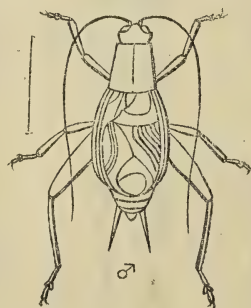
（十九）クマスヾムシ (Sclerpterus coriaceus, D. H.)　躰長雄は四分、躰漆黒色を呈し、頭胸部は一面に微細なる凹窩を有し、頭部小形にして、複眼圓く黒色なり。觸角は糸狀にして略ぼ体と同長、中央灰白色を呈す。前胸は前縁より後縁廣き筒形をなし、前翅は長さ二分、黒褐にして上面平直、其前縁は黒

色にして腹側を覆ひ翅脈褐色をなす。後翅は退化してたゞ其痕跡を留むるのみ。腹部は黒色、尾状突起は長さ一分二厘、暗褐色を呈す。肢は各々褐色にして、各腿節の基部は黒褐なり。雌の体は頭部を通じて筒形をなし、前翅は長さ一分七厘、翅脈と共に黒色なり。産卵器は長さ二分褐色を呈す、成蟲は八、九月頃、山間の蔭地に現出し、多く小石、或は熊笹等の下にて晝夜を別たず、ギリ、、、、と其音高く鳴々す。

(二十)カネタヽキ(Ectatoderus kanetataki, Mats.)　躰長雄は三分、頭部は小さくして茶褐を呈し、複眼卵形にして濃褐色をなす、觸角は褐色にして、長さほゞ体に三倍す。前胸背は頭部と其色を同じうし、後縁廣くして圓く、其色灰白色をなす前翅は短かくして長さ八厘、腹部の半に達す、其色黄金色にして先端濃褐色をなし、前縁は灰白色を呈す。後翅は退化せり。腹部は黒色にして銀白色の鱗毛にて覆はれ、腹面は灰白色をなせり。尾状突起は長さ二分五厘、褐色をなす。肢は各々淡褐にして、鱗毛を有する事他の部と等しく、且黒褐斑を有す。雌の前胸は頭部と其幅を同じくし、翅は前後共に缺く。産卵器は濃褐にして、其長さ一分五厘を算す。成蟲は九、十月頃に最も多く現出し、常に樹木の窩に潜伏してチン、チンと鳴々し其音恰かも鐘を叩くが如し。蟲譜圖説に「索々として聲をなし、連綿不絶、恰かも鐘を叩くが如し、故に此名あり」と見ゆ。されば昔より、この蟲の聲をば鐘を叩く音になぞらへたる事これを以ても明らかなり。(第十版第一圖)

クマスヾムシの圖

♂

(廿一)イチモジコホロギ(Gn? sp?)　躰長雄は五分五厘、体黒褐にしてコホロギに酷似す。頭部は圓く

漆黒色にして、頭頂並に後頭には褐色斑を有す。複眼は卵形にして黒褐色をなし、觸角は体より僅に長く、黒褐色を帶ぶ。前胸背は方形にして黒褐、不判明なる褐色斑を有し、灰色の粗毛あり。兩側は黒褐にして下縁褐色をなす。前翅は長さ三分、腹部より僅に短かく、前縁灰白色をなせり。後翅は長く、前翅の外に出づること三分五厘、膜質にして前縁暗褐色を呈す。尾狀突起は長さ二分、黒褐色なり。肢は各々焦茶色を呈し、後肢の脛節の內側に七刺あり。雌の前翅は長さ四分、產卵器は濃褐にして三分五厘あり。該種は當年七月初めて採集せしものにして、或はコホロギの變種なるやも計られざれども、こゝには別に該種名を附し記載し置く事となせり。(第十版第二圖)

(二十二)コガタコホロギ(Gn? sp)　体長雄は四分五厘、体色形狀コホロギに酷似すれども、たゞ頭頂の兩觸角間に白線を有せず、而して成蟲は六七月頃多く麥畑、其他諸處の草間に現出し、リー、リー、と鳴々す。該種は昨年初めて採集し得られたるものなるが、或はコホロギの變種なるか、又は別種なるかの疑あれど、こゝには別種として記載し置く事とす。(第十版第三圖)

(二十三)ギフヤマス、(Gn? sp?)　体長雄は二分三厘、体漆黒色を呈し、頭胸部に黒色の短毛を有す。複眼濃褐にして卵形をなし、觸角は黒褐にして体より僅かに長し。前胸は方形にして、中央に凹縦線を有せり。前翅は長さ一分二厘、腹端僅に露出し、其色濃褐色をなせり。後翅は退化して之れを有せず。腹部は黒色、尾狀突起は長さ一分、濃褐色をなす。肢は各々黒褐にして、後肢の脛節には刺を有す。雌の前翅は長さ八厘、腹部の下半を露出し、產卵器は長さ一分、濃褐色をなす。成蟲は五、六、七月頃、堤防其他處々の草間にて、晝はリー、リー、と鳴々し夜はギリギリ、、と鳴々す。(第十版第四圖)

(二十四)マダラスヾの變種?(Gn? sp?)　雌は体僅にマダラスヾより大きくして、黒色の中に白色斑を

有し、前翅の基半部は灰白色をなし、後翅は長くして前翅の外に顯はるゝ事二分餘、暗灰色をなす。尾狀突起は長さ一分三厘、白色斑あり。該種はやゝもすればマダラスヾとは別種するかは判然せざれども
こゝには變種として記しをく事とす。（第十版第五圖）
（二十五）ヤマトスヾの變種？（Gn? sp?）　雌雄共ヤマトスヾより体僅かに大形にして、雌は体長二分五厘
後翅長くして前翅の外に顯はるゝ事二分八厘、暗灰色にして能く飛翔す。尾狀突起は長さ一分四厘あり
產卵器は長さ一分、濃褐色をなす。該種もヤマトスヾとは全く別種なるやもはかられざれども、こゝに
は變種として記し置く事とせり。（第十版第六圖）
（二十六）ヤマトスヾの一種（Gn? sp?）　体長雄は一分五厘、体黑色を呈し頭部は黑く、複眼黑褐にして
楕圓形をなし、觸角褐色にして体に四倍す。前胸背は方形にして黑色毛を有す。前翅は長さ一分、漆黑
色をなし、翅脈は波狀をなさず。尾狀突起は褐色にして長さ七厘、肢は各々褐色にして細長なり。雌は
未だ標本を得ず。（第十版第七圖）
（二十七）マツムシモドキ（Gn? sp?）　体長雌は四分、褐色を呈し、頭部は圓く且小さくして、複眼卵形
其色他の部と異なる事なく、觸角は褐色にして体に三倍す。胸部も小さく、楔狀紋は其色少しく濃し。
前翅は長さ四分、腹部より長きこと一分、褐色をなし、中央より外緣に向つて膜質をなし、翅脈濃褐な
り。後翅は大形、膜質にして、翅脈黑褐色をなし、前翅より長きこと二分、腹部も褐色なり。尾狀突起
は長さ二分、褐色をなし、產卵器は長さ二分、濃褐にして先端黑し。肢は各々褐色にして、後肢の脛節
に刺を有す。雄の前翅は、雌のそれと異なる所なし。成蟲は九、十月頃、山間の樹木欝蒼せる所に現出
す未だ其鳴聲を聞かず。（第十版第八圖）

（二十八）コバネサヽキリモドキ（Euscirtus hemelytris, D.H.）体長雌は三分、体暗黄色にして、背面の中央は黒褐色をなす。頭部は大きく、頭頂より後頭にかけて三個の黒褐縦條を走らし、複眼黒褐色にして圓く、觸角褐色にして体に三倍す。前胸背は方形にして、灰色の毛を有し、楔狀紋は黒色なり。兩側は黒色にして、下縁淡黄色をなす。前翅は長さ一分、中央白色、前縁並に內縁は翅脈黒褐色をなす。後翅は白色小形なり、腹部は前翅の外に顯はるゝ事一分、尾狀突起は黄色にして長さ一分五厘、産卵器は長さ三分五厘にして濃褐色をなす。肢は各々黄色にして、後肢の脛節に刺を有する事他の種に等し。雄の前翅は雌と異なる事なし、成蟲は八、九、十月頃、多く日あたりよき草叢中に捿息す。未だ其鳴聲を聞かず。（第十版第九圖）

## ◎マダラザウムシの小觀察（第九版下圖參看）

名和昆蟲研究所員　名和愛吉

予は本年六月廿三日、本巣郡船木村に昆蟲採集を試みたりしが、其際マダラザウムシの一團を發見したれば、聊か其の觀察の大要を左に記述せんとす。幼蟲は体長二分五厘乃至三分二厘、頭部は黒色を帶び光澤ありて。黒色の短毛を有せり。体の背面綠色にして、側面は暗綠色を呈し、腹面は淡綠色なり。体は十二關節より成りて、第一節の背面には、横に長き黒褐色の斑紋を有し、第二環節以下は、各節の背面に大なる横皺を有す。氣門は黒褐色にして、第四節より第十一節に至る間は、氣門の下部に各二個づヽの疣狀物ありて。夫れに二個づヽの黒色小突起物を有す。第一節乃至第三節の腹面には、胸脚退化して稍大なる疣狀物となりたるものありて、一個づヽの黒褐色斑紋を印し、其內方に當りて、第四節以下には各節一個の圓形小疣狀物を有す。体の背面には各節十六七個づヽの黒色小突起物あり、夫れより

短かき細毛を生ぜり。体形は、頭部小形にして、六節迄は漸次太くなり、第七節より腹端に至るに從ひ細く、恰も紡錘狀を呈す。蛹は体長一分六厘乃至二分、背面は淡黑褐色にして、腹部の末端は淡褐色なり。腹面は頭胸部黑褐を呈し、腹部は褐色先端は背面と同色を帶ぶ。而して胸部の上方と、腹部の末端には細毛を有せり。繭は二分七八厘内外にして、クリケムシのそれの如く網狀をなし、形ち楕圓形にして淡褐色を呈す。成蟲は体長二分二厘乃至二分五厘。頭部及前胸は煤色にして、口吻の先端に近き處に觸角を有す。觸角は十二節より成り、第一節は細くして甚長く、先端の四節は膨大にして葱花狀をなせり。前胸には三條の灰黃褐縱線ありて、中央にあるは細く、兩側にあるものは太し。翅鞘は褐色にして微小黑斑を散布するを以て、一見暗褐色を呈せり、中央に二條の灰黃褐色の點線と、側面に太き同色線とを有し、其兩端に於て中央の線と相合す。肢は三對共に黑褐にして、腿節は膨大し、跗節は四個より成りて第三節は分裂す。

該蟲は好んで芹を食し、孵化せし當時は芹葉の柔かき部分を食害し、漸次生長するに從て剛き部分に及ぼし、遂に全葉殘す所なきこと往々珍らしからず。而して其孵化せし當時は、一所に五六頭乃至十數頭群居し、生長するに從ひ所々に離散するを常とす。幼蟲は口より黑色の粘液を吐出して葉に粘着し居るを以て、蟲体に觸るゝも容易に墜落することなく、老熟して蛹化せんとするときは、多くは葉柄の基部叉の所の表面に移り、茲に淡褐なる網狀の繭を營み、其中に蛹化するものなり。發生時期は、五月下旬より七月に亘り、甚だ不規則なれば、同時に幼蟲、蛹、成蟲を見るを得べし。從來、冬期採集にて屢々成蟲を獲しことあるを以て、成蟲にて越冬することは明かなれども、未だ發生の回數、其他調査の及ばざる點多し、そは識者の明敎を待つことゝし、茲に聊か余が實見の大要を記すことゝなしぬ。

第九版下圖說明　（イ）はマダラザウムシの幼蟲自然大　（ロ）は其放大圖　（ハ）は繭の自然大　（ニ）は其放大圖　（ホ）は蛹の放大圖　（ヘ）は成蟲 即 マダラザウムシの放大圖

昆蟲翁說明
鳴蟲女史筆記

## ◎昆蟲採集奇談（幻燈使用）（其六）

（六八）　小倉服を着する爲め屢々小使と見誤らる

私が岐阜縣中學校に奉職して居りました時の事で御座いましたが、此中には其當時の中學校の有樣を能く御存じの御方も有りませうが、中學校の門の近くに花壇がありまして、其處には色々の草花が植えて御座いましたから、年中其花壇に花の絶へたことはありませんでした。されば此の花を尋ぬる種々なる昆蟲が中々多く集りまして、隨分珍らしい種類が折々參りますから、私は暇があれば常に此處に於て採集を致して居りました。所が或る日私は、又例の如く花壇で頻りに採集して居りますと、誰か門の外から私を呼ぶ樣でしたから、不圖それとはなしに後ろを向きますと、一人の紙屑屋が破れた籠を擔ひまして立つて居りました。而して私に向つて「紙屑ないかなん、紙屑賣つて貰えんかなん」と申しますから少しな腹が立ちましたけれども、紙屑なら向ふの方へ行つて聞くがよいと、小使の居る處を敎へて其塲を去らせた事が御座いました。後で能く々々考へて見ますれば、自分は小使と同じ樣に、小倉の服を着て居るから、屑屋が小使と間違へたのであると思ひまして小倉服の價値を知りました。

次は小使に小使と見違へられた奇談です。其後の事ですが、以前此の公園の中に、岐阜縣の物産陳列舘といふものが御座いましたが、それは只今縣廳の前に有ります岐阜縣物産館と同じ樣なもので御座いました。それが今あちらに御座います譯は、彼の二十四年の大震災の時に、此の公園內にあつた建物が壞れまして暫く中絶してゐましたが、其後縣廳前に又改めて建築されたのです。今より凡二十年程も前の

事で御座いませうが、此處の物産陳列舘に、昆蟲の標本を陳列したなれば、餘程縦覧人を益するであらうと云ふ處から、遂にそれを陳列する事に決議を致しました。依て縣廳から中學校へ依頼がありまして私がその昆蟲標本を陳列に行くことになりました。そこで或る日私は、標本を先に送つて置いて、約束通り陳列に出掛て、先づ事務室へ行きましたら小使が居ましたから、縣廳から來て居らるゝ某氏は何處に居らるゝかと尋ねました處が、小使は冷淡にもソコソコと鼻の先であしらつて居りますから、ハハー、これはいつぞや中學校で、紙屑買に小使と見られたと一對で、何でも今日も小使と見られて居るのであらうと、素知らぬ顔して敎へて呉れた方へ參りまして、其係の人に遇ひました所が、其係員は私に向つて非常に言葉を低くして、私が陳列に參つた禮を申されました。すると小使は、其樣子を遠くから見て居つたものと見へて、直ちに私の傍に馳つて來まして「只今は誠に濟まぬ事をいたしました、どうか御許下さいませ」と切りに詫を申しますから、係員の方は不思議に思はれて、何事であるかと尋ねられましたけれども、私は、小使が餘り心配そうにしてゐましたから氣の毒に思つて、程能くはからつて其場を去らせまして後で其事を掛員に話して大笑を致した事が御座いました其時分は常に私は小倉の服を着て居りましたから、彼樣に滑稽な話しの種が出來たのであります。猿も衣裳からと云ふ言葉が御座いますが、誠に能く穿つた言葉であります。

屑屋等に小使と見誤らるゝの圖

## ◎家蠅の習性經過に就て

滿洲の陣地に於て　森　宗　太　郎

編者曰く、同氏は屢々本誌に照會せし如く、滿洲の陣地に於て家蠅に就て研究し居られしが、先般陣中に於て醫學大會を開かれし際、氏は命ぜられて一場の談話を試みられたり。左の一篇は該談話の大要なりとて同氏より贈られたれば、參考の爲め茲に揭ぐることゝなしぬ

私は岐阜縣揖斐郡出生の者でありますが、昨年七月召集に應じて歩兵第三十六聯隊へ入隊しまして、續て八月出征の身となり、世界の三强と稱へし處の征露軍に參與するの光榮を得ましたが、我國の醫學界の進歩と共に、衛生法も非常の發達をしました爲めに其恩澤を蒙り、幸に本日まで健全なることを得ましたのは是れ全く醫學者諸賢の賜ものであります。就きまして、今改めて申すまでもなく、當滿洲には未だ衛生法も行き屆かず、爲めに少しく暖氣を加ふると共に、衛生上の一大害蟲たる家蠅が發生し、甚しき增加の狀况でありましたから、幸に私は元岐阜市名和昆蟲研究所にて、多少家蠅に付て研究せしことがありましたから、當滿洲の家蠅に付て研究中、不思議な御緣で御參列の三田軍醫殿の御紹介により私の如き無學短才なるものが、斯かる賢明なる御方々の席をも不憚、この家蠅に付き今より其習性經過の大畧を御話致さうと思ひますから、此貴重なる時間を暫らく拜借致します。

一、成蟲の觀察　　蠅は昆蟲綱双翅目に屬します、其種類は多數ありますが、私は三種を知る而已です處でこの双翅目と云ふのは、普通の目で見た言で、全く字の如く翅が二枚ではありませんで、四枚持つて居ります。前翅は中胸にあつて能く發達して居りますが。後翅は其反對で後胸に最も退化したる鱗片狀となつて居ります。觸角は短かくして複眼の內側中央にあります。其觸角の間に單眼を供へて居る樣ですが、顯微鏡で見なければ分りません。肢は六脚を有して短細毛を密生し、惡疫の媒介にも適し、殊に肢の末端に吸盤を供へ、凡ての黴菌が附着する樣になつてあるから、昔時の五月蠅も今は寒心せんければなりません。處で蠅は雌雄に依て多少變りがある樣です。故に蠅の雌雄の區別に就て少しく申上ます。先づ体は雌が大にして雄が小なるも、複眼は雌は雄蟲より小さくあります。依て複眼と複眼の間隙が雄蟲よりは廣いのです。又生殖器にても區別が出來ますが、其區別は雌は腹部の末端が細くなり、雄は恰も切斷せし如くなつてゐます。

二、産卵の觀察　　蠅は元來植物の有機体を食とすれ共、馬糞は最も嗜好物にて、其大部分は夫れに依て生活致します。處が私は、人糞、豚糞及芥塵の堆積されある處にて研究せしに、其內塵芥の堆積にのみ發見せしを以て考ふれば、滿洲の如き馬の多き處に蠅の多きは又其一理であらうと考へます。卽ち蠅の産卵は馬糞の間隙ある所に集まり、各自思ひ思ひの處に生殖器を押入して乳白色の卵を産み附けます産卵時季は大概午前十時頃より午後四時頃迄が普通です。卵塊は二三日を經れば孵化し幼蟲となります。

三、幼蟲の觀察　　幼蟲は卵殼內にて成熟すれば前後に体を動搖し、卵殼の頭部の方面が透明となるや

頭部先端を出し、前後左右に体を廻し、体の中央まで位出れば顛倒し、頭部を馬糞中に押入れ、腹部を前の如く動揺し、初めて茲に卵殻を脱し、幼蟲は馬糞中に入り食を取ること四日にして一眠し、是れより二、三、四眠に至る殆んど同時日を要すれば、凡そ幼蟲の孵化してより蛹化せんとするまでには、二十日內外を要します。

四、蛹の觀察　幼蟲の老熟するや、堆積しある馬糞の乾燥したる中を最も好む如く、多く密集して蛹化致します。其多きは一ヶ所に何升と云ふ位あることを往々見受けます。(其は一見小豆の散附しあるが如し)然して內地にては成蟲にて越年すも、此の地にて重に室の內外の乾燥したる土中にて、蛹にて越年する事を去る二月發見致しまして、其後始終注意せしに、四月下旬五月上旬に羽化するを多く見受けました。夫れと三月暖き日に一頭の蠅を見受けたるとを以て考ふれば、此の地にては蠅は蛹にて越年するならんと考へられます。是れは氣候の甚だ寒き爲め自然內地とは異つて居る樣に思はれます。

驅除方法　驅除は時期が第一の要點であります、若し時季を誤まれば勞して効が少ないです、其時季に付ては最も注意をせんければなりませぬが、先申せし如く、第一回の羽化のものが五月上旬產卵するを以て、馬糞塵芥等を太陽の光線に注射せしむれば、此馬糞中に含有する卵は一日にて死するを以て、此方法が尤も簡單にして、其効他の驅除よりも一層大なることを確信します。就ては私が實驗したことを一寸一言申します、六月十日より七日間の調査によりますと、蠅の卵塊は馬糞の間に幾十萬と云ふ程ありまして、恰も石灰の粉末を蒔き附けたるが如くであります、其卵塊の死する迄の時間を調査せしに馬糞と共に薄層にして日光に暴露すれば、表面なれば二時間にて死しますが、中央は七八時間を要ましす然し大半は二三時間にて死ます。又卵而已を日光に暴露する時は約十分にて死し、室內にて乾燥せしむる而已にても七八時間にて死ます。其他同試驗を多くせしも、時間に制限あれば其一例のみを申上た次第です。幼蟲は二眠前迄は日光にて死するも、其後のものは死ませぬ。成蟲の驅除は、少しく腐敗に近き者を一定の塲所に散布し置き、集りしものを捕蟲器にて捕獲するが宜しう御座います。

扨て以上述べました如く、昆蟲なるものは、自然の原則に基き、或る一定の時代を經過し、發生するものなるを私は信じて疑はないのであります。況して此社界は生存競爭の世の中、爲めに昆蟲と雖子孫繁殖の爲めに屈强の塲所を撰みて產卵し、子孫の絕滅せざる樣の自然的本能を備へて居るものと明言し得ることが出來ます。依て此家蠅等も人類に大害を與ふるを以て驅除せざる可からざるも、自然の有樣習

性經過等の薀奥を極め、屈强の時季に驅除するに至らば、勞少なくして功多くありませうと思ひます。先づ斯く述べましたことが、諸賢の御參考の一助にもなりますれば誠に幸であります。

## ◎三化性螟蟲の撲滅策

特別研究生　福　永　俊　藏

編者曰く、本篇は水曜昆蟲談話會に於て同氏が福岡縣なる郷里の三化螟蟲驅除の摸樣と同氏の意見とを述べられたる大要なるが、參考の爲め玆に照會す。

害蟲の中でも首魁とまで唱へられて居ります三化生螟蟲は、其勢力中々猛烈で、全國到る所に進撃せんとする有樣で御座いますが、其本場は吾が福岡縣であらうと信じます。此の蟲に就ては本誌其他の雜誌に屢々記載せられ、且つ習性經過及び驅除豫防法の如きも、最早世人の一般に承知せし處でありますから、今更淺學なる私が彼是れ申上る必要もないかと思ひます。乍然該蟲の爲め年々損害を蒙りつゝあるは莫大なもので御座いまして、隨て是が驅除法を專攻致します餘地は尙澤山ありますから、玆に申上ぐるも敢て無用の事では無らうと存じます。偖私の縣下（或る地方）にては、是が驅除法は誘蛾燈點火に採卵法に、枯穗切取其他あらゆる方法手段を採用致します。誘蛾燈點火は當局者が最も奬勵致して居りますが、農家は其れを餘り用ひぬ樣に見ゐます。即ち此處彼處に三々五々認める位で御座います。其れも驅除者が誘蛾燈を用ふれば、經濟上如何程の効力が在るかと云ふことは、敢て考へが無らうかと思ひます。採卵法は近頃に至り共同驅除を行ふ樣に成りましたが、其れも上官の命を受けざれば敢て執行致しませぬ。督勵者は若し實行して幾十萬の卵塊を採れば幾何の利益があると斷言せられますけれども、此處に天然驅除と稱すべき寄生蜂の重大なる關係があつて、彼が勢力甚しきにも係らず、是を燒失して敢て益蟲保護に注目致されませぬから、效果の有無は如何と存じます。故に驅除者自身も誠實に實行致しますや否は實に疑いが起る次第です。枯穗及び心枯切取は、其好時機を失して居る樣にでもあり。又其他種々なる缺點があるから、あらゆる方法を用ふるにも係はらず其効蹟は誠に少ない樣であります。私は今別に珍らしき新法を知つ居る譯ではないのですが、常に農家に對し充分に驅除法を説明して誠實に驅除をさせたらば、効力の大ならんことを思ふ所を申上ぐるに過ないのです。

抑も害蟲の驅除は、如何に良法ありとも、誠心誠意實行せねば迚も好成蹟を得ることは難いのです。故に農家の休日等を利用して、村といはず郡を問はず、期日の長短に拘らず、講習會なり講話會などを開き

昆蟲思想の普及を謀り、朝に談話會夕に幻燈會等を催して、害蟲の恐るべきこと益蟲の如何に吾人に利益を與ふるかを農家の脳髓に注入し、以て違算なく共同驅除を嚴行せば、如何なる害蟲と雖も撲滅することが出來るであらうと思ひます。仮令撲滅は六ケ敷にせよ、其効果の著しきことは信じて疑ひませぬ。

（二十二）

## ◎昆蟲文學

殘螢　　森　雅樹

暮色侵簾暗水亭。案頭照過兩三螢。憐渠一換車家燭。光焰千今萬丈青。

魯嶽曰。余也讀書三十年未若一螢火可慚可慚。青字未妥可惜。

秋夜捕蟲　　同

雨歇雲收蟲語稠。一輪皎月近中秋。草間何處嬋妍翅。捕投籠中置小樓。

彼咽者蛩　三首　　魯　嶽　倫

彼華者露。彼咽者蛩。今宵不寢。明月在峯。
彼華者露。彼咽者蟲。移榻低唱。瘦竹疎桐。
彼華者露。彼咽者蟀。月明如霜。秋聲惴慄。

### 雜詠

＊　　志　紀　臣

か青なる金の色にかがやける玉蟲羽根の美しきかも

裸火の宵闇風にちらめける櫨森山は松蟲處』
濱殿の簾動かし吹く風に灯消えて茶立蟲なく

＊　　坪内清之助

葉枯して瓜あらはなる瓜畑を蜻蛉むれて秋暑きかな
法聽きて人々還る寺路の繁樹が梢に蜩鳴くも
旅人の抱き測れる大杉に斜夕照り蜩鳴くも

＊　　ふもとのや

松笠の落ちて聲ある秋山路下草花にみのげが飛ぶ
通草採り木の實拾ひてみのげがの飛ぶなる道を登り行くかな

＊　　潮　音　生

池田山夕添ひ來れば道のべに松蟲鳴けり月出でなくに
はゝこ草石間に立てる多度川の晝淋しらに鈴蟲鳴くも

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄（其十）

名和昆蟲研究所員　小竹浩

（一四）トラフカミキリ　前號に於て、天牛科に屬する桑樹の害蟲桑天牛に付て記したるが、玆に又桑樹の害蟲として恐るべきトラフカミキリに付て述べんとす。此蟲は所によりて發生多く、其害遙にクワカミキリより甚し。我岐阜縣下、北濃地方及飛驒地方にては、クワカミキリの發生少なけれども、此の蟲の爲め甚しく害せられ、桑樹の枯死に瀕するもの多きは、本年六月、當所名和調査主任の飛驒地方視察の際目擊せられし處なり。斯く其害の甚しきにも拘はらず、是迄地方農民の餘り注意せざりしは、其成蟲が甚だ能く蜂に似たるを以て、一見蜂と見誤り、桑の害をなす處のテツポウムシの親蟲なることに心付かざれば、彼のトラフカミキリは巧に捕殺の害を免がれ、繁殖に非常の便宜を得て遂に今日に至りたるものなるべし。以上の如く、該蟲は蜂に似たるよりオホハチダマシとも稱す。体長五分乃至八分、頭部黃色にして其中央に縱に一條の褐色縫合線あり（縫ひ合せたる如き線を縫合線といふ）複眼は黑色にして腎臟形をなし、觸角は長さ体の二分の一にして十一節より成り、第二節は甚だ短かし、觸角の基部及先端は褐色にして中央は暗褐色を呈す。前胸は大きく球形をなし、後半は黑色に前緣は黃色を帶び、中央には稍へ字形をなしたる黑色と赤褐色との二個の橫帶あり。翅鞘、（甲蟲の如き堅き翅を有するもの丶上翅を云ふ）の中央大半は黃色にして、二個の判明なる太き黑色の人字形斑を有す。基部は稍赤褐色を帶び、翅端三分の一の處に一條の細き黑色橫線を以て區劃せられ夫れより後方は赤褐色にして其中に黃色毛を有せり雌は腹部大きくして翅の外に出づ。肢は前肢短くして後肢最も長く、共に基半は黑褐にして、腿節の半ば以下は褐色をなし、跗節は四節にして第三節は二分せり。幼蟲及蛹はクワカミキリのそれに似て區別し難し該蟲は六月頃より出づれども八月頃最も多く現出し、樹皮を縱に嚙み切りて其内に產卵す、孵化すれば幼蟲は樹幹に蝕入すれども、多くは外部に近き處を隧道の如く食して、外部に小孔を、穿ち、それより蟲糞を出すを以て、直に此蟲の幹内に生存し居るや否やを知ることを得べし。次て其内に蛹となり後羽化するものなり。而して此蟲は一ケ年を經て成蟲となるもの丶如きも、未だ確なる試驗をなさゞれば斷言し難し。

驅除法　成蟲の捕殺に努むべし。此の成蟲の樹幹に止まりたるときは、之れに近くも容易に逃げざるを以て捕殺するに難からず、故に成蟲の發生時機に於て、之れを捕殺すれば大に其害を防ぐべし。然れ

トラフカミキリの圖

（イ）成蟲の雄　（ロ）同雌

ども、前にも述べたる如く蜂に能く似たるを以つて、恐れて之れに近づかざるは該蟲繁殖の一原因なり。此の蟲に限らず、エダシヤクトリの形のみならず色まで桑の枝に能く似たる、コウカバヘ（便所等に多く飛翔して蜂に似たる蟲なり）ハチダマシバヘ等の蜂に能く似たる果實の害蟲たるトモヱコノハの木の葉に能く似たる等は、皆敵の眼を瞞着して安全を圖るに外ならず。恰も盜人が暗夜に黑き衣服を着ると同一なり尙其他右の如く自己の体を他物に擬するもの甚だ多ければ害蟲を驅除するに是等の事柄を辨へざれば、目前に敵を見ながら之れを取逃がすこと多し。故にこの心もて捕獲せば、意外に易く獲らるべし。幼蟲の驅除は、前號記載のクワカミキリの幼蟲驅除と同法を行ふべし。凡て高木造の桑樹は、天牛の害を受くこと多きが、故に、發生多き地方にては根刈法に改むるを利益多しとす。然れども降雪等の關係より、高木作りの必要なる場合には成蟲を捕殺するは勿論、殺蟲注射器等の如き輕便なる器械を以て、努めて幼蟲を驅除せざれば、桑樹の發育に甚しき害を及ぼすを以て大に注意すべし。

## ◎昆蟲實驗錄（七）

静岡縣　神村直三郎

（一三）再び虻の交尾法につきて　昨年七月廿日實見したるものは、本誌第九拾號に掲載せられたるが、又今回の實見によりて、多少異りたる事實を認めたればこれを記すべし。先づ虻の名稱を九十號に於てツマグロムシヒキアブと記したれども、そはオホムシヒキアブの誤にして、以下記すところのものは此種類にて、曩にツマグロムシヒキと稱したるものと同種なれば幸に諒せよ。初め雌蟲が平靜に枝上に止まり居るを、四方五寸位の處より雄蟲がねらふこと、後より飛びつくこと抔は、凡て曩に見たること丶少しも變りなし。兩蟲の腹端を密接せざる以前に、雄蟲が雌蟲の頭部を打つにあたり、初めは其自巳の前肢を高くあぐるも、追々と其あけ方を減じて低くなし、又打つことを輕くなすものなり。又雄蟲が雌蟲の背上に飛びつくや、雌は自巳の後肢を以て、雄の腹部の兩側面を撫で下ぐ、又雄が雌の腹端を我腹端にて衝くに當り、我後肢を其翅と共に左右に張りて、天を突かしむるの姿勢を執り、頭を下になして前中の四肢にて枝に緊着す。次に雄が雌の腹端を衝くの度數は、初め余が見たるは中途なりしも百三十二回の多きを數へたるに、此時鳥類のために驚きて飛び、又直ちに始め二度目には七十九回、三度目には十三回四度目には十七回　五度目には七十九回なりし。それが然も同一の雌雄にして、又二度目と五度目とは衝突回數偶然にも七十九回つ丶なりしは面白し、今之れを實見したるは午后五時三十分頃なりき

## ◎簡單説明雜錄（第參號）

●最近昆蟲學（全一冊）　理學博士松村松年著、東京警醒社發行、定價金貳圓、頁數二百三十六、插圖百七十、第一章總論より昆蟲外部の構造、昆蟲内部の構造、昆蟲の知覺器、昆蟲の變態、昆蟲の社會組織、昆蟲の稟性、昆蟲の彩色、昆蟲の雌雄淘汰、昆蟲の二形及多形、昆蟲の共棲、昆蟲と外界との關係、昆蟲の分布、昆蟲の化石、第十五章昆蟲の分類に及び親切に説明せられたる良書なり

●日本昆蟲總目錄（第一）　理學博士松村松年著、東京警醒社發行、定價金貳圓、頁數三百〇七、本書は鱗翅目の部にて其總種數は二千〇二十四にして内蝶二百十六蛾一千八百〇八の學名幷に和名等を一々最近の分類に從ひて記載するのみならず日本鱗翅目洋和參考書學名幷に和名索引等を附記せられたるを以て斯學研究者の尤も缺くべからざる珍書なり。

●日本千蟲圖解（卷之二）　理學博士松村松年著、東京警醒社發行、定價金五圓、頁數百六十三、插圖十八版、本書には椿象類五十七、浮塵子類四十五、蚊蠅類七十八及び歩行蟲科に屬する甲蟲六十二合計二百四十二種を説明せり、圖版の如きは前卷に勝りて特に鮮明となりしは研究者の尤も幸福とする所なり。

●農事試驗場特別報告（第參號）　愛媛縣農事試驗場の發行にして其緒言に「本號は元技手馬場儀兵衛をして擔任せしめ明治三十四年四月より同三十五年に繼續して南豫分場に於て施行したる害蟲に關する調査并に試驗の成績を登載す」。其目次は飼育の成績、甘藷葉喰蟲、螽蟲、二化生螟蟲、大螟蟲、浮塵子類。調査、貯藏藁中の二化生螟蟲所在調査、螟蟲蛾發生時期調査、稻の三大害蟲方言調査、水稻播種期并に苗移植期調査。附錄、害蟲に關する縣令。着色圖一葉、表三葉を挿入し頁數四十八有益なる報告書なり。

●四大害蟲圖（全一葉）　愛媛縣農會技手森莊之助著、一尺八寸に一尺三寸五分の一枚摺にして第一稻螟蟲、第二稻浮塵子、第三稻椿象、第四地蠶の各種を着色石版を以て明瞭に示したるものにて之に本紙同大の説明書を添へて習性經過并に防除の方法を説けり。

●養蜂雜誌（第十二號）　日本種蜂と外國種蜂王の續き（青柳浩次郎）、莊島氏の養蜂談を讀む（養蜂山人）、サイプリアンに對する評説（加藤令一郎）等にて十六頁を滿す。

●昆蟲學雜誌（第一卷第一號）　葡萄根蚜蟲（小貫信太郎）、日本產冬蟲夏草圖説（堀正太郎）、螟蟲卵の寄生蜂の生存日數と明暗の關係（中川久知）、害益蟲に對する所感（莊島熊六）、パッカード博士の傳（桑名伊之吉）等にして圖版二葉四十頁に掲載す。

●吉野之實業（第三十號）　米の病蟲に關する注意事項（農商務省農事試驗場、緒言より二化螟蟲の事を三頁に亘りて記し樟葉の害蟲（理學博士佐々木忠二郎）結極貝殼蟲の被害なるとを證明せり。

●大和農報（第二十八號）　昆蟲展覽會（技師美濃部次郎）前號の續きにて本號には審査、昆蟲展覽會開催の準備、出品者の注意に就き三頁に亘りて詳記し今回にて完了せり。

●瑞穗（第九號）　養蜂の話（樂山生）圖入にて七頁に亘り箱根養蜂場にて研究の後自から飼育し習得したる養蜂の説を載す

●松の操（第三十一號）　衛生の昆蟲（谷貞子）前號の續きにて本號には專ら蚤の通説を二頁半に亘りて記載す。

●女學世界（第五卷第十二號）　秋の蟲と題し蟲の種類、蟲の相場、螽蟖、轡蟲、馬追蟲、松蟲、鈴蟲、草雲雀、蟲籠飼ひ方に就き三頁に亘りて説明す。

●園藝界（第二年第九卷）　菖蒲の螟蟲（河村榮吉）四頁に亘りて習性經過より驅除の方法を記載す。

●大和農報（第二十九號）　紫雲英と害蟲（藤井胤雄）橫這及浮塵子類、椿象類、蚜蟲等の畧説を述べ豫防驅除法を二頁半に亘りて記載す。

●中央農事報（第六十六號）　害蟲驅除見聞錄（農學士（虛心生）短册苗代、共同苗代、學校生徒、誘蛾燈、一齊驅除の回數等の題を設けて熱心以て時期に適切なる説を二頁余に亘りて記載す。

●青年農會報（第百四號）　芋蟲の驅除に就て（小川農生）芋蟲類の習性經過及び驅除法を一頁半に亘りて記載す。

●巖手學事彙報（第七百三十八號）　蝶と花（鳥羽源藏）各種の蝶が如何なる花に來るや又各種の花に如何なる蝶が來るやを野生植物に就き自ら觀察せられしものにて七頁弱に亘りて記載せら〇。

●大日本農會報（第二百九十一號）　螟蟲卵寄生蜂の利用に關する試驗及調査（中川久知）前號の續き本號には圖入にて該寄生蜂の性質、該寄生蜂の飼養に就き種々なる試驗の結果を三頁餘に亘りて記載す。

●愛媛縣農會報（第七十八號）　綿蟲に關する警告（愛媛縣農會）同縣溫泉郡内に綿蟲發生蔓莚の憂ひあるを以て森技手をして種々調査せしめ詳細なる圖版一葉を加へ三頁弱に亘りたる警告書を各郡に配付したるものを載す。

●京都府農會報（第百五十八號）　熊野郡に於ける害蟲發生及施設事項は五頁餘に亘りて種々詳細なる事項を記載す。

●園藝之友（第一年第五號）　果樹の害蟲（桑名伊之吉）圖入にて苹果の綿蟲に就き四頁弱に亘りて記載す。

●農報（第六號）　大豆の金龜子に就て（無名氏）習性經過防除の法を二頁弱其他一二件あり特に附錄として害益蟲編（農學士小川三策）第一章總論として昆蟲内部の構造、昆蟲の五官、變態、卵幼蟲蛹成蟲、分類を四頁に亘りて記載す。

●愛知縣農會報（第八十七號）　三十七年度に於る害蟲驅除豫防費一覽表の詳細なるものを始め其他二三の件を記載す。

●少年世界（第十一卷第十三號）　名和靖君の少年時代（小舟）名和昆蟲研究所、先生の少年時代、標本採集と寫生、修養時代、昆蟲標本の出陳、昆蟲研究所の設備、昆蟲學の普及に就き圖入にて四頁弱に亘りて記載す。

## ◎伊吹山昆蟲採集紀行

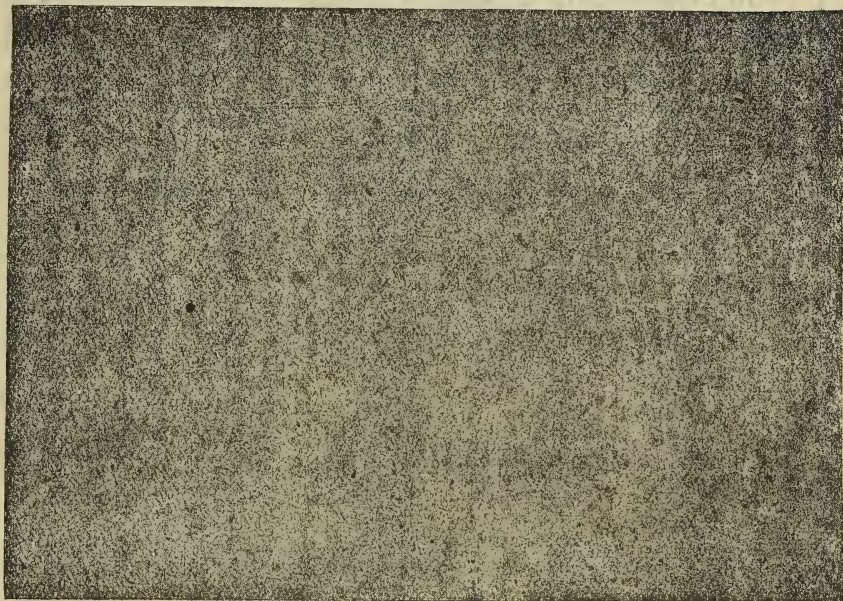
征露紀念特別昆蟲學講習會助手　墟田健藏

こぞし八月十一日より二週の日をもて、金華の麓なる名和昆蟲研究所にて、征露紀念としての昆蟲學講習會を開かれぬ、おのれもこの會に入りて、あけくれ蟲のことゞも習ひ覺えて、幼きものが片言まぢりにかれこれいふがごと「コレハクマゼミ」「コレハクダマキ」などいひ得るもうれしききわみにこそ。そが中十八日よりは、江州伊吹山にて實地指導を受くることゝなりて、そが山にも登りぬれば、いさゝか其あらましを記してん。十八日、今日は司令官名和梅吉氏をはじめ、會員一行八十余名の伊吹へ出立つ日なりけり。昨日までの雨降り今日も如何にや、測候所にては尙二日は雨天なりとの知らせを得ぬれば、何となう心もとなき樣なれど、朝とく起き出てゝ空晴れたるを見しときは、うれしさのみぞ心に滿ちけるされどいまだすべての準備だに出來ねば、明日出立ことゝなり、たゞおのれと野田稻司の君と二人のみ、先發として今日出立つべく命ぜられぬるを以て、午前十一時八分發の滊車にて長岡に向ひぬ。こは伊吹の摸樣を偵察すべく命ぜられたるなりけり。車中より「彼處にて糖蜜採集なしたらば」「此森にて叩網採集をなしたらば」など打ち語らひつゝ外の方を眺むれば「シヤウ〴〵トンボ」「テフトンボ」などの水邊に飛ぶもあり「アゲハテフ」「クロアゲハテフ」などの窓をかすめて舞ふもあり「アレヨ」「ソレヨ」といふ、

中はや長岡につきぬれば、車を下りて道を伊吹村にとり「クツハムシ」「ヒラタムシ」など採集しつゝ進み二時過ぐる頃松井半内氏方に着き宿りぬ。

十九日、今日は本隊の到着すべき日なり、朝とく起きて旅裝なしつ長岡停車塲に行きぬ、こは本隊を迎へんが爲めなり。午前九前四十分といふに、瀛車は長岡にて止りぬ。司令官を始め一同の欣々然たる顏、何にかたとへん「ヤ、た早う」「ヤ、御苦勞樣」など挨拶も一しほたのしげなり、之れより伊吹村三ノ宮に至りて、紀念の撮影しぬ、技手は名和愛吉氏なりけり。撮影終りぬれば、司令官より命下りぬ「之れより直ちに登山すべし、本日は中腹以下にて採集せん、宿舍は後に定むべし」と。命令一下、全員は山に向ふて進擊を始めぬ、梢を叩くものあり、草を拂ふものあり、紫蝶の高く飛ぶを見て呆然とせるものあれば、椿象の臭に鼻を摘むものあり「ミヤマノコギリ」を採て誇るものあれば、玉蟲を見て羨むもあり「コレハコバチキリギリ〳〵ス」「コレハジヤノメ蝶」などの聲處々にて聞えぬ。やゝ上りぬれば、一面芝生となり、前には琵琶の湖鏡の如く、竹生島奧島など鏡面の塵かと疑はれぬ。此處彼處に二人三人つゝ腰打据えて、辨當開くあり、獲物の整理に余念なきあり、煙草を吹くあれば双眼鏡片手に景色眺むるあり。此處にて又撮影せられぬ。猶しはし採集する程に「之れより東北の道を取りて採集しつゝ下り山麓なる松尾寺に集合すべし」と命あり。各我先きに珍らしき獲物をと、はやりにはやりつゝ進行を始めぬ「シロツバメ」「トビナナフシ」なんどの、物音にや驚きけん、叢間より飛び出づるあれば「ヤマトトモエ」なんど足元より飛び出でつ草の間に身を潜むるあり、赤蜂の樹液に余念なきものあり、之等を皆毒瓶の物となしつゝ、二時過ぐる頃集合地點に一人も後れず集りぬ。再び此あたりにて司令官の指揮に從ひ採集を試つゝ、四時といふ頃堀常次郎といふ方に至りぬるに、松井半内といふ人の家を本部とし、他の四家に分れ宿るべく定められぬるをもて、各定められたる家にといたる。六時頃より、司令官は一々採集せしものを点検せられぬ。玉もあれば瓦もあり、石もありて、点検せられしもの三百餘種にいたれり。

廿日、今日は午前七時出發、山頂まで登るべき日なり、朝とく起き出ぬれば、空一面にかき曇り雨の來らんとするにや、雲の足並いと早し。いかにやいかにと皆々言ひ騷ぐのみ。やがて司令官よりの命は至りぬ「結裝して宮に集るべし」と一同の心は既に決せり、武裝のかひ〳〵しく出立ちて、宮に集れるもの七十余名、見れば各異しきいでたち、或ひは輕裝を誇るあれば、昆蟲のみならじ植物や他の動物も採集せんなどと、殊更數多の道具を携ふるもあり、雨の用意にとてや、蓑きたる人のミノムシモドキよと笑は

伊吹山實習講話會員一行の紀念撮影（於三の宮）

るれば、合羽着たるはアブラムシダマシなりと戯るもあり、司令官は山頂まで登るべき者誰々ぞ、得登らざるもの誰々ぞと点検されぬ、こも畢ればいよ〳〵進軍の令は傳はりぬ同時に雨降いでて、雲の足早く風いよ〳〵強し、されど何ぞ恐れん、我こそ先登第一の勳を奏せんと、休ふこともなさで、ひた上りに昇りけるが、井田千秋君を先登第一として、頂上に達せるは十數名のみと記されぬ、さて獲物はいかに、大形のものは殊更ら蝶蛾の如きは得べくもあらず、唯叩網と雜草の間を亂掬せるのみなれば、浮塵子などの小形のもののみぞ多かりし。頂上近き處の池にて獲たる龍蝨の一種の多きには、人々知らず知らず目を丸くなしぬ。三時頃宿に歸りぬるに既に歸りて彼是とうち語ふ人もあり、己れより後れて歸れる人もあり、日暮るゝ頃より、雨も風も少しは止みぬれども、人々の濡れたる衣は乾きもせず。廿一日雨の降ること止まず、かくては此地に止るも益なし、疾く岐阜に歸らんと望むものあまたなりければ、司令官まで此事を願ひけるに、今朝歸ることゝなりぬ、皆々朝早く起き出でゝ歸るべき用意に忙し、八時四十五分長岡發の滊車に乘らんとてなり。八時二十分といふ頃停車場につく、乘車の切符を買ひて待つ程もなく滊車は來りぬ、司令官を始め一人も殘さず乘せたる滊車は、驛を出でつゝ進行を續けたり。

窓より伊吹を眺むれば、山の半は雲氣の[illegible]てイフキスズメを得たるはをさ〻ひなりけりと語るあり。吾は昨日の雨にてマダラウスギスとなれりとかこつを見れば上衣はなくてしやつのみの人なりけり。せきがはらたるゐなど、驛夫の呼ぶ聲聞く頃より晴れそめて、大垣につく頃は、全く晴れ渡り、高き山々の頂に名殘の霧を殘せるのみ。大垣にて下車す。此時司令官より「養老に行かんと欲するものは之より進むべし本日必ず歸岐せよ」と命は下りぬ。即ち自由の行動を許されたるなりき。車にて走る人は時間の貴きを重んじてにや、徒歩にて進む人は其健足なるを誇りてにや、三々五々打つれて養老へと急ぐ友どちあまたなりけり。暫し憩ふ程に、停車場内萬歳の聲ひゞき渡れり、何事にやと走り出で見れば、出征せらるゝ兵士を載せたる滊車の着きけるなり。嚴師嘗て「害蟲の防除は恰も戰爭の如し、二化螟蟲の驅除さへも充分出來ざるに、如何にして千變万化螟蟲の驅除をなすか」といはれけるが、今日我々が害蟲軍防除の訓練を積で歸らんとする處、彼は千變万化螟蟲の驅除をなさんがため出征する處、偶然此地にて出で逢ひぬる、何となう淚ぐまるゝはたゞ我のみならず、はや十二時過る頃岐阜に着きぬ。宿に歸りぬれば、このもかのもにアブラ蟬なんどの聲喧しく、しめりがちなる衣の花の香にほふは、伊吹の名殘にぞありける。

編者曰く　此一節は去る八月開會の征露紀念特別昆蟲學講習會の伊吹山實習講話の摸樣を同氏のものせられたるものなるが岐阜縣巡查教習所教官廣瀨警部池田部長を初め授業生七名は此行に加はりて實習の傍ら一行に種々の便宜を與へられ十九日夜半宿舍を發して山頂に登り廿日午前七時歸宿八時四十五分長岡發の東行列車にて歸岐せられたり特に岐阜縣垂井警察署よりは藤澤巡查を特派し滋賀縣教育會よりは力石要人君出張せられ上野巡查駐在所竹内包直氏も協力して種々斡旋の勞を採られたるため一行は非常の便宜を得て自由に研究することを得たるは深く感謝する處なり依て茲に附記して特に其厚意を謝す。

## ◎昆蟲の小實驗

岐阜縣立農學校內　澤山壽水生

名和先生嘗て我校の諸生に敎へて曰く、諸子宜しく小なる實驗より始めよ、煉瓦の一片は能く大厦の基礎を造るに非ずやと、余も亦常に先生の啓發によりて斯學の端緒を窺ふもの、今茲に先生の敎へにより て昆蟲の小實驗を錄し、敢て貴誌の餘白を汚さんとす。

一、螻蛄の力　十月二日夜、螻蛄數匹火を慕うて當直室に飛び入る、無聊の餘之を捕へて實驗に供せり、螻蛄は讀者諸君の知らるゝ如く、直翅目蟋蟀科の有害蟲にして、其前肢は土地を開堀する爲め、異狀の發達をなして硬固なる鍬形狀をなす。余は先づ之を取りて計量せしに、一匹の体重平均〇瓦、四二五にして、其牽曳力は体重の約十倍、即ち四、瓦餘の物体を曳き行くことを得たり。然れども其壓上力は殆ど

二百倍に及び、其壓開力に至りては、即ち螻蛄の本能的特質にして、其力の强大なること實に驚くべきものあり。之を体重に比するに、殆ど七百倍に垂んとせり。今之を人間に比するに、壹萬貫の物体を壓し退くるの力と相同じ。今左に之を表示して一覽に便す。

(一)螻蛄の体重　〇瓦、四〇乃至〇、四五　(二)牽曳力　、四瓦　(三)壓上力　八〇、瓦〇
(四)壓開力、二七〇瓦

## ◎韓國の害蟲驅除

岐阜縣立農學校内　水崎林太郎

害蟲の被害と一國生產力の關係頗る大なるを明かとなり、害蟲驅除は今や國家事業として各下級行政廳に至る迄、主として農業者を奬勵監督して實効を擧げんとするは誠に喜ばしき現象なり。然れ共一面當業者の害蟲に對せる觀念比較的冷淡にして、之を實地に行ふに當りては種々の手段を用ひ、或は警察權を以て違警罪に觸れしめ后漸く實施さるゝ有樣あり、今や我帝國は、世界の列强に位せる文明國の農事者として、實に羞すべき次第ならずや、既往は追はず、將來益々自動的に蟲害驅除の勵行を期せられんことを希ふ所なり。

去る八月上旬韓國に渡航して、同國の農業を視察せしに、國情の比較的に農業は進步せりと思へり、如何となれば、耕作は粗雜なれ共牛耕に依り、田圃の如きは區劃半反以上三四反に至り、本邦よりは總て大なりと謂つべし、又耕作及收穫の方法は、一見不發達の如く見ゆれ共、彼農民は手數と勞金を省き、比較的經濟に利益を收むるを以て主眼とせしなり。彼等農民は、却て現今の韓國にある日本人の農業を目して一笑に付せり、是れ即ち土地の風に習はざるが爲めなり、八月二十二日韓人一名を伴ひ、通辯兼荷持として、東海岸を蔚山の方面へ向て出發せり。東萊を經て機張に至る(釜山を去る六里餘)一小都會なりしも、民皆農業を以て業とせり、耕地殆ど水田にして稻草の出來は殊に好良なり。小生は通辯なる

韓人に謂へらく、惜むべき哉浮塵子の蟲害に罹り居れりと語り乍ら行く町餘、水田中細き九尺程の竹を以て稻草を拂ひ行くあり、近づきて見れば、是ぞ浮塵子の驅除をなすなり。其方法不完と雖、石油を眞鍮の椀に入れ(是れ食器なり)匙を以て稻株の間に灌ぎ而して后に竹にて拂ひ行くなり、小生は是れを見て、通辯に依りて韓農民に向ふて曰く、此の蟲は日本にてはウンカと云ふ、朝鮮にては何と申すやと問へば、曰くメルンゼンと。又問ふ、此蟲は古來より夥多發生して禾穀に大害を爲すやと問へば、答へて曰く、年に依りては收穫皆無なることあり、然れ共此の如く驅除すれば其害を免ると謂へり。又問ふ、是は何人の敎へたる所ぞやと、曰く五六年前より政府の奬勵する所なりと。余又共同して驅除をなすかと反問せしに各自に爲せども隣田をも亦驅除するなりと。又問ふ子一人而已ならずして農民皆知るかと言へば、大底の者此法を知れりと答へたり。此時彼農民曰く、子は日本人何職なりやと、依て余は大日本帝國の農民岐阜縣の人、職を農學校に執るものなりと答へたるに。彼は驅除の良法あれば敎へよと乞へり、依て我國は是れより一層の嚴密なる驅除をなすなりとて、我知る所に就き注意と實驗とをもて、或は叮嚀に通辯に依りて說話し、或は手眞似もて示し又は實地につきて敎へたるに、彼農民の喜び一方ならず、「アライツソ」「アライツソ」(是れ即ち解し得たりとの語なり)此又方法「チヨツソ」「チヨツソ」と(好良と云ふなり)賞讃したり。然るに沿道彼方此處と此法もて驅除をなすを見受けたり。此有樣を見て思ふ樣、今や政令偏ねからず、政府の保護行き屆かざる韓國農民すら、害蟲の恐るべきを認め、其驅除の利益を諭れば、則ち獨立獨行して眞面目に驅除をなすの勇氣を保てり。之れに引替へ我國の農民は、監督嚴密に、奬勵の聲は鼓膜に徹し、知力は遙に彼韓國農民に優り乍ら、其期を逸し、遂に實行を怠るものなきにしも非ず、是れ國恩を忘れ、經濟と利益を無視し、農業の本務を盡さゞるものと謂べし、斯ては不文明國と目する、彼韓國農民に對し恥ずべき次第ならずや。前途益多望の秋に方り、大に當業者の憤勵蹶起して、害蟲驅除は施肥耕耘と同一の觀念に依りて勵行し、十分の効果を收めんことを希望して止まざるなり。

## ◎昆蟲に關する葉書通信　(第五十二報)

(二七八)本年の二化螟卵數(靜岡縣磐田郡神村直三郎)　本年も我磐田郡に於ては、小學兒童に螟卵を摘採せしめたるに、其數は昨年度に比し至て少なかりし。こは、一は氣候の冷なりしにもよるべけれど

も、又一は昨年度驅除勵行の影響かとも思はれたり。我校の如き、昨年度に於ては拾萬近くの卵塊を採りしにも係はらず、本年は同樣の勞力によりて、僅々壹萬少し以上に止まるとは其差も亦甚しと云ふべし。苗代田に螟蟲卵の少なきに比し、螟蛉とイナゴとは頗る多かりしも、こは兒童の手を煩はさず、一般農民の驅除することゝなりたり。(七月廿三日報)

(二七九)濱名郡附近の害蟲狀況(濱名郡蠶業學校大橋慧逸)　粟の髓蟲は、當學校附近に於ては非常の害をなし、該蟲の爲め現今粟は三割以上の害を被り、若し此儘に打捨置くときは、恐らく收穫は半作に至るならんと思はるゝ程なり。其他豆金龜子、姬金龜子等の發生多く、爲めに大豆は殆んど秋の枯野を觀るが如し。桑樹には桑葉捲蟲發生して、是又其害多し。(七月三十一日報)

(二八〇)樺太の風土と昆蟲(出征軍生熊與一郎)　數ふれば早や土用の半ばとなり、岐阜地方は炎熱燒くが如く、學校官廳等は休暇の折柄なれば、或は歸鄉休養に、或は各地へ避暑などに洒落込むものも多かるべし。小生去月十二日橫濱を備后丸にて出發し、廿五日樺太の〇〇地に上陸、廿七日「ルイコフスコエ」に到着せり。夫れより極めて少なき變化の下に、「ルイコフ」より廿里許離れたる所に滯在せるが當地の氣候は新聞紙にて承知せられしならんも、丁度內地の春の中頃の氣候にて、麥類、豌豆、菜花、ケシ、バラ、瓜類其他一年中に咲くべき花は今一時に咲き揃ひ、草木は繁り鳥鳴き蝶舞ひ蟲飛ぶと云ふ銚子にて、中々昆蟲類も多き樣見受けたり。小生の仕事は餘り忙がしきと云ふには非らざるも、又閑暇とても無く、思ふ樣に採集などは出來ず、偶々採集したるものも、未調査中に掃き捨らるゝこともあり混雜の爲め踏み潰さるゝこともあり、忘るゝこともありて中々困難なり。然し只今浮塵子數種を郵送すれば御調査を乞ふ。陣中の事ゆへ、只網に入りしもの七種丈其儘送附することゝなせり。而して當地の蝶蛾類は少なく、蝶類は一般に極めて小形なり。何れ後日郵送すべし。(八月廿一日)

(二八一)一本背條天蛾の食草(宮崎縣南那珂郡竹井繁滿)　別便を以て送附せし幼蟲及蛹は、一本背條天蛾ならん。食草は、當地にては田芋なり。該田芋は里芋の一種にして水田に栽培し、其葉柄を食用とするも、根塊を食するときは極めて美味なるものなり。然れども繁殖力弱きものなれるが故に、常に葉柄を食す。(八月廿五日報)

(二八二)沖繩縣の昆蟲採集情況(第一回岐阜縣長期害蟲驅除講習修了生大橋由太郎)　過般害蟲調査の傍ら昆蟲採

集を目的として沖縄縣に渡り、八月九日那覇に着し六日間滯在せしも、此地にては得る處少なく、依て東北十七里計の國頭郡ナゴに到り當分の內此地に止まり、視察及採集をなし、夫れより同郡內を巡視せしが大同小異なり。地理不案內の爲め、一は本年は暴風雨二回もありし爲め餘程影響を受けたるものか、豫想の如く採集も出來ず甚だ遺憾なり。依て未だ纒りたる報導をも爲し難ければ、今少しく視察の上に讓らんとす、幸に諒し給へ。（九月八日報）

●●●（一八一一）昆蟲の驚くべき臭覺（岐阜縣郡上郡塩田健藏）　本年ヤママユの幼蟲を飼育して結繭せしめしに、此頃遂に雌二頭羽化したり。依て其儘籠に入れ置きたれば、毎夜雄の尋ね來るもの多く、既に參拾餘頭を採集せり。此の雄の飛來するは、夜半十二時頃より午前三時頃までにて、翅色は淡黃色のもの、稍赤褐を加ふるもの殆んど灰黑色のもの等七、八形にも及び、翅色のみにては殆んど別種かと疑はしむる程にて、實に其多形なるには驚きたり。而してヤママユは未だ羽化せざるも、羽化の曉には何れ同樣の事と樂しみ居れり、（九月八日報）

# 雜報

●學校兒童害蟲驅除豫防法實習規程　岐阜縣海津郡長古田兼彌氏には、同郡訓令第二號を以て町村長、小學校長、農業補習學校長に對し本年六月一日附にて學校兒童害蟲驅除豫防法實習規程を左の通り定めらる。

（第一條）學校長は、其兒童に害蟲驅除豫防に關する思想を涵養することに留意し、本規程に依り實地に就き其方法を指導すべし。（第二條）兒童をして前條の智識を授け並に其實習を課したる時は、主として自家の田圃に就き之か實施を奬勵すべし。（第三條）學校に於て驅除豫防を實習せしむべき害蟲の種類、驅除の場所及適期、驅除法、被害作物は左の如し。（第四條）小學校に於て害蟲驅除豫防法を實習せしむべき兒童は、尋常第四學年及高等科兒童とす。但小學校長に於て適當と認むる時は、尋常三學年の兒童を加ふるとを

| 害蟲種類 | | 驅除の場所及適期 | 驅除法 | 被害作物 |
|---|---|---|---|---|
| 螟蟲 | 卵 | 苗代 六月 / 本田 六、七月 | 卵葉を摘採すべし | 稻 |
| | 幼蟲 | 本田 七月以後 | 心枯及枯穗を拔取るべし | 稻 |
| | 蛾 | 屋內 初夏 | 屋內誘蛾燈を點し積藁より發するものを採る | 稻 |
| | | 苗代 夏期 | 捕蟲器を以て飛翔せるものを採る | 稻 |
| 浮塵子 | | 苗代 六月 / 本田 移植後十月迄 | 捕蟲器を用ひて採るべし | 稻 |
| 天牛 | 幼蟲 | 桑園及果樹園 夏秋 | 樹幹より蟲糞を排出する箇所を發見し之を刺殺し又は驅蟲劑を注入すべし | 桑及果樹類 |
| | 成蟲 | 桑園及果樹園 夏期 | 早朝樹を搜して捕殺す | 桑及果樹類 |
| ひめがうむし | | 桑園 冬期 | 枯枝を切取るべし | 桑 |
| | | 桑園 夏秋 | 樹下に敷物等を敷き拂落すべし | 桑 |
| 尺蠖 | | 桑園 冬春期 | 幼蟲を捕殺すべし | 桑 |
| | | 桑園 落葉後 | 下枝及株際を搜索すべし | 桑 |

其他いなご（稻蝗）あをむし（螟蛉）かやむし（苞蟲）けむし（蛄蟖）みのむし（避債蟲）等便宜之を驅除せしむべし

二。（第五條）兒童をして害蟲驅除豫防法の實習を爲さしむるには、農業科の時間又は授業の餘暇を以て之に充つべし。但時宜に依り二時間以內に於て他の授業時間を繰替ふることを得。（第六條）多數の兒童を同時に實習せしむる時は、學校長に於て職員を指定して之を引率せしめ、左の事故を監守せしむべし。一、兒童を部署して面積に對する人員を定め、適當に之を配置し猥に區域外に亘るを禁ずること。一、作物を害することを無からしむべきこと。一、採捕したる害蟲及害蟲の蟄伏せる稻莖枯死等を散亂すべからざること。一、危險なる行爲なからしむべきこと。（第七條）學校に於ては害蟲驅除豫防法實習錄を備へて實施の概況を記錄し、每月末其要項を具し町村長を經て之を郡長に報告すべし。（第八條）實習を行はんとする時は其日時、場所、兒童の學年級數、害蟲の種類其他必要事項を具し、豫め所屬町村長に屆出ずべし。（第九條）町村長に於て前條の屆出に依り必要ありと認むる時は、之を其作人に通知すべし。（第十條）害蟲驅除豫防に必要なる器具は兒童の自家に於て之を調製せしめ、職員用のものは學校に備付くべし。（第十一條）害蟲驅除豫防と共に益蟲保護に關する思想を養成し、學校には便宜益蟲保護器を設置し其實驗を示すべし。（第十二條）麥奴豫防に關しては本規程に準據し、兒童をして黑穗等を拔取らしむべし。（第十三條）補習科兒童をして害蟲驅除、麥奴豫防を施行せしむるも亦本規程に準じ指導奬勵すべし。

## ◉昆蟲學雜誌の發刊

今回東京に於て日本昆蟲學會を組織し、每月一回機關雜誌として昆蟲學雜誌を發行することゝなり、已に其第一號は九月に於て發刊せらる。而して本誌昆蟲世界は、滿八ヶ年前の九月に於て第一號を發刊せり。故に昆蟲に關する雜誌は、何か九月に深き關係を有するものにや。今や戰後の經營として昆蟲界も一層の多事を極むるとなれば、斯學に關する雜誌の增加するは尤も喜ぶべきことと云ふべし。

◉戰利品展覽會と滿州及樺太產昆蟲　岐阜忠愛婦人會の發起にて九月二十一日より三十日迄十日間、岐阜市美濃敎校校舍內に於て、陸軍省より借用せし滿州軍に於て鹵獲せし戰利品數十點を始め、婦人會員幷に其他へ滿州より送り來りし紀念の物品數百點を陳列したり。其內當所より出品の滿州產昆蟲標本は、出征軍人として當所助手森宗太郞、福岡縣青柳才次郞、京都府仲山安太郞、宮城縣堀內英力、兵庫縣井上藤太郞、富山縣大石齊治、靜岡縣生熊與十郞、岐阜縣岡崎箔市、高見德二郞、牧田宇三郞等の諸氏より送附の昆蟲數百種なり。而して十日間の觀覽人は一萬八千百四十人にして、特に滿州產昆蟲に注目せし人の多かりしは、採集者たる出征軍人に對し當所の尤も滿足とする所なり。因に記す發起者に於ては特に說明者を附して、觀覽人に對し森宗太郞氏の旅順開城紀念として、一月三日清國盛京省方子圍にて木皮採集を試みて得たる浮塵子、幷に瓢蟲の標本を指示して熱心に說明せられたるは尤も當所の感謝する處なり。且つ餘興として蓄音器を使用せらるゝ際、往々蟲づくしの歌を加へられしは甚だ愉快を覺えたり。

◉樺太の寢臺蟲と蠅　萬朝報に樺太の話と題する一項中にある寢臺蟲と蠅に關する一節を拔萃して左に記す。

◉寢臺蟲と蠅　樺太は寒い所であるから、蚊も蠅も居ないであらうとは、一寸內地の人の考へる所であらうけれど、實際は蚊も蠅も居るのです、就中蠅はなか〳〵多く、夜が明けさへすれば直ぐ寢て居る顏へたかつて、其のうるさい事は言語に絕して居る、夜も灯のある中は盛に飛廻はりて居るので、仕事もろく〳〵出來ない位、蚊は內地の藪蚊とブヨとを折衷したやうなもので、夜は一匹も出て來ないが朝早くか日の暮方、草木の多い所へ行くと群をなして襲ふて來る、然し第一番に我々を困らせるのは、俗に南京蟲と云ふ軍隊の所謂寢臺蟲で、是はなか〳〵澤山居る、其形は普通の南京蟲と違つた所はないけれど、其大さに至つては絕大なるものがあつて、徑二分位のものも珍らしくはない、そして晝夜の區別なく人を襲ふには實に閉口する、ひどく喰れて免役となるまでには、手と云はず首筋と云はず足や胸や腹を散々に喰はれ、神經は昂進して眠る事も出來ず、やがて惡寒を覺ゆるかと思ふと急に熱が出て、中には嘔吐さへ催す人もあるので、是には誰でも困り切て居る。

◉目下發生の害蟲　ハカジ、異名をタテハマキ、ヒトハマキ、キイロハマキなど稱する害蟲は稻葉一枚を綴りて其內に潛伏し、內部より葉綠質を食害するを以て一見白色を呈するに依り、直に其被害の程度を知り得べし。而して本年は此の害蟲至る所に多く發生し、甚しきは一株の稻葉殘らず其害に罹り居るとあり。又本年は二化生螟蟲の害は比較的僅少なりしも、浮塵子に至りては慥に平年に優る所の發生を見たり。

# 切拔通信　昆蟲雜報　第四號

明治卅八年十月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●螟蟲蝕入稻莖切取奬勵　稻葉郡に於ては左の方法に依り九月二十五日より十月九日までに管內各町村共一回乃至三回螟蟲蝕入稻莖の切取りを實行する事に決定したりといふ（岐阜日日新聞）

一、螟蟲蝕入稻莖白穗となりたるもの目下（稻熱病に罹りたるものとも）切出し季節に付き日並當日驅除方一般耕作者へ告知すると同時に駐在警察官へ協議の上監督すること

一、驅除當日實行委員は受持區內を巡視し耕作者を督勵切出せしめ若し耕作者にして驅除を爲さゞるときは直ちに呼出し萬一呼出しに應ぜざるものは實行規約に基き人夫を以て切取り其費用は本人より徵收するか又は駐在警察官に通知し直ちに其處置を爲すこと

一、驅除當日實行委員は蝕入莖取集め所を定め耕作人より差出さしめ其數量人名及び月日等を日誌に記載し槌を以て能く撲殺の上差出人へ返附すべし

一、稻莖切出し法は極めて下部即ち根際より切採ること

一、町村長は害蟲驅除當日は必らず其の衝に當り實行委員を督勵し耕作人をして遺憾なく驅除勵行せしめ驅除全く終了したるときは其の旨直ちに報告すること

●浮塵子驅除命令　佐波郡長は九月二十日中關村の諸部落に對し浮塵子發生の虞あれるを以つて左の如き命令を發したり（長周日日新聞）

一、區域中關村大字田島字上地同字濱內同新上地同字遠藤

二、驅除方法　明治三十六年山口縣告示第二百七十四號害蟲驅除豫防方法第二條第一注油法に依るべし

三、驅除期限　明治三十八年九月二十一日

四、必要條件

（一）期限當日午前第七時迄に着手すべし

（二）一人一日十時間以上驅除に從事するも猶豫作田全部を驅除し盡すこと能はざるときは期限翌日引續き驅除すべし

（三）正條植を爲したる田地は一反步に付一人役以上亂植を爲したる田地に於ては三人役以上の勞力を用ひ害蟲を全滅せしむべし

（四）自巳耕作田中害蟲發生せず驅除の必要なきものは耕作人住所氏名を記し且つ項上に白紙を付て見易からしめんため高さ四尺以上の立札を爲し監督者の指揮を受くべし

（五）期限當日烈風若くは大雨あるときは順延驅除すべし

（六）町村長の指定したる監督人自巳の耕作田地に對する驅除は監督を終はりたる後之れを爲すことを得

●害蟲驅除奬勵金授與式　磐田郡上淺羽村上淺羽尋常小學校兒童は本年學業の餘暇害蟲の驅除に從事し螟蛾五萬二千五十八青蟲蛾七萬千六百九十螟卵七千五百五十八の多數を採收したれば八月三十一日同校內に於て奬勵金授與式を行ひ村長の害蟲驅除奬勵に關する講話等ありたり（靜岡民友新聞）

●糸島郡害蟲驅除成績　同郡長より知事に報告したる所によれば本年は螟蟲の發生甚だしきを以て之が驅除勵行上益々嚴令を加へ今回施行中實地巡視せし

に其成蹟左記の通りにして前回の莖數二千四百九十萬に對比すれば七割三分の減少を見るに至る畢竟當業者の作業上奮勵したる結果に外ならざるべし最も採卵に於ては督勵しつゝあるも稻莖繁茂の爲め容易に發見する能はず其數僅少なり又浮塵子は發生の期を逸せず數回驅除勵行せし結果近頃其發生最も減少を認むるに至れるが今尙驅除施行中なりと云(福岡九州日報)

| 町村名 | 枯莖切取數 | 町村名 | 枯莖切取數 |
|---|---|---|---|
| 前原 | 三七二、四九一 | 今宿 | 一六七、九八五 |
| 加布里 | 三〇〇、三六一 | 元岡 | 四〇一、七二三 |
| 深江 | 二九四、〇〇〇 | 今津 | 三一〇、五九〇 |
| 福吉 | 五〇六、〇六六 | 北崎 | 三七四、八七三 |
| 一貴山 | 五三九、三四四 | 櫻井 | 三〇〇、八七七 |
| 長糸 | 三三一、六五三 | 野北 | 三八五、七七〇 |
| 雷山 | 三〇六、三一四 | 芥屋 | 二三七、九五九 |
| 波多江 | 四三三、三六一 | 小富士 | 一八六、五五四 |
| 怡上 | 六五九、三七二 | 可也 | 三九五、八四三 |
| 周船寺 | 二七一、二五五 | 合計 | 六、七五五、四〇二 |

●害蟲發生　北相馬郡高井村地方に於て氣候不順の爲めか此頃蕎麥畑に夜盜蟲發生して目下三四分に成長したるより各農家にては大に驚き之が驅除に盡力中なりと(常總新聞)

●螟蟲被害莖取鎌　靜岡縣下にて發明專賣特許の螟蟲被害莖取鎌は至つて輕便にて實用に適する處より綾歌郡長稻葉修敬氏は私費を以て購入郡內各村へ三本づゝを送り實地に應用せしめ一般に其便利を知らしめ大に螟蟲驅除に努めしめ居るとは既報の如くなるが仲多度郡にても其輕便にして手數を要せざるを知り實地に使用したる上にて購入せしむる筈なるが至極便利な機械と云ふべし(讃岐日日新聞)

●害蟲驅除數　綾歌郡內各小學校の生徒が本年春季敎師の勸誘に應じ各自の苗代田に於て驅除せし採卵數は六十九萬九千六十三個又捕蛾數は十九萬九千四百六十一蛾なりと(讃岐日日新聞)

●小學兒童と害蟲驅除　小學兒童敎育上實業思想を養成し其趣味を感得せしむるの必要なるは勿論農事地方に在つては農作の豐凶に關係大なる害蟲害菌の如き兒童の頃より其害の恐るべきを知り其驅除を忽にすべからざるを悟り進んで之に從事する慣習を得せしめん爲め本縣の如き昨年以來各郡內に於ける小學校に對し一定の事業を妨げざる限度に於て適宜の時間を利用し害蟲害菌の驅除豫防に從事せしめ居れるが本年の如き比較的降雨多く隨つて是等害蟲の發生繁殖少なからざりしに拘らず其被害程度を增長せしめざりしは各當事者は豫防措置宜しきを得たるは勿論なるも亦小學校兒童の力も沒すべからず殊に鎌倉郡の如き兒童の補助は最も其結果良好なりとありて向後は專ら各小學校にも此方法に則り奬勵從事せしむる都合なりと云ふ(橫濱貿易新聞)

●傳書蜂　傳書鳩の事は諸君も既に知つてる通りであるが傳書蜂の事は恐らく初てゞあらうと思ふ從來下等動物殊に昆蟲類の感覺に關して生物學者は種々の研究をしたが中にはなか〳〵面白い結果を得た者もあつた其の中に蜂の類が人類の持つて居ない一種の感覺を有する事を見出したものがある其れは即ち方向の感覺と云ふので蜂を其の巢から餘程遠くへ持つて行つて放すと人間の備へてゐない一種の機能で巧みに四邊の工合を察し非常な長距離の所を何等の助けもからずに元の巢へ飛び返へつて來るのである之を試すには蜜蜂を捕へて未だ一度も飛んで行つた事のない樣な地方へ持つて行つて放して見ると直ぐに自分の巢の方へ向いて飛び行くから不思議である。

所で二三年前から或る有名な養蜂家が蜂の有する此の特性を利用して傳書の役をさせ樣と思ひ

種々と苦心をした結果遂に其の巣から三四哩以内の距離で丁度傳書鳩が通信をする樣に信書の通信をやらせて大に成功する事を得た其の場所は極く不毛な砂地に何等の誘導物もない所であつたが蜂は少しの間違もなく其れを横斷して役目を果したさうな。

其の人は極く薄い紙に針の尖で通信を認め極く細い糸で確かりと蜂の背に結び附けて飛ばした所が驚くべき短時間で而かも背部に結び付けたものを少しも落さずに、飛び歸つて來たと云ふ話である。

傳書蜂の方法が完全に出來るものとすれば從來の傳書鳩に比して極めて簡單で且つ安價になし得らるゝから大に有益の事であるそして軍事には素より凡ての通信事業に貢獻する所多大であらうと思ふ(中央新聞)

●倫敦市民蚊に襲はる　デーリー、クロニクルに曰く倫敦は蚊群の襲ふ所と爲れり彼等は如何にしてか海外より來り最初船渠に於て現はれ遂に漸々傳播して殆んど到る處に之を見るに至れり殊にテームス河域の低濕地及モスウエル、ヒルの附近に多し奇躰なる事には東洋の蚊よりも其の毒多きかソレ共英國の住民は日本支那等に寓する西洋人よりも其の毒に感じ易きか之に刺されたる男、女、小供は醫師の治療を受くる必要あり一醫師は一週間に四十人を治療せりと云ふ其の刺口は非常の結果を生ず即ち小孔相繼ぎて生じ其の局部は膨脹して硬く爲り往々關節に腐敗し易き瘡を生ず又眩暈を起して憂鬱の容躰に陷るものあり獨り倫敦のみならずポーツマウス港の水源池附近に於ても其の害甚しく殆んどペストと同視せられ安眠を得る唯一の手段として其の巣屈に撲滅法を施行するに至れりと(都新聞)

●蜻群天日を蔽ふ　九月十二日午後より翌午後にかけ臺灣大稻埕建昌街南街の空を中心として四方より群集せる赤蜻蛉其數何十萬か數を知らず附近の大空は黑雲に蔽さりたる如く羽音は驟雨に似たるが軈て東方に向ひて散亂し再び夜の明けたるが如くなりしと云ふ(中央新聞)

●小笠原島の甘蔗　小笠原島の首要産物たる甘蔗に飛蝗發生し勢猖獗なりとの報ありたる爲め東京府より派遣されたる視察員の談を聞くに着島の時恰かも飛蝗の産卵時に際し其大部分は減退し居りたるも何分甘蔗は小笠原全島唯一の財源にて作付反別八百餘町歩其生産高十五萬圓內外にて甘蔗の豐凶に全島五千人の死活問題と云ふべく今日の處にては其被害百分の三に過ぎざりしも産卵後益々猖獗となり如何なる被害を見るも計り知るべからざるにより充分發生の經過を研究し根本的に驅除し終り再び發生せしめざるの方針なり(讀賣新聞)

●葉卷蟲發生　縣下海津郡北部に於ては頃日稻田に葉卷蟲發生し稻の葉先四五寸位を枯死せしむる由にて農民は目下該蟲驅除の勵行に多忙を極め居れるが甚しきは右驅除の爲め一反歩に付四五人の人夫を要し居れりと(岡山山陽新聞)

●昆蟲實地採集狀況　山梨昆蟲研究會の催せる第一回昆蟲實地採集は豫記の如く九月十日施行せり同施行は保坂會長及び山本、雨宮、上原、丸山、田中、中澤等の各會員にして午前九時半事務所を出發し愛宕山成田不動尊附近より山に添ひ西山梨郡相川村字岩窪組を經て武田古城址に至り午飯を喫し午後一時半同所を發し同村塚原區より相川堤に添ひ採集を爲し午後三時歸會したり當日採集せる昆蟲は甲翅類二十三種、直翅類五十五種半翅類七十一種、鱗翅類三十種雙翅類十五種にして追て整理委

員に於て標本に調製の上縣農會開設の共進會へ出品する筈なりと(山梨日日新聞)

●林檎の害蟲　近年縣下の各地に林檎を栽培する者漸く多きを加へたれども未だ害蟲の侵入を見ざるは何よりの慶事と云ふべきなり而るに近縣に於て最も林檎の栽培盛なる香川、愛媛の兩縣に於は恐るべき害蟲綿蟲の傳播を見甚しく被害を蒙りつゝある由なるが本縣に於ては未だ此の綿蟲を見ざれども一度侵入せんか到底全く撲滅を見る能はず彼害の度寒心すべきものあるべければ林檎栽培家は特に注意すべきなりと某果樹栽培家は語れり(大分、豊州新報)

●地蠶發生　東宇和郡野村字權現堂の畑地に昨今地蠶の發生猖獗を極め既に五十町餘歩の甘藷は之れが被害を受け其狀恰かも食に餓ゑたる蠶の結繭期に近付きたるもゝ如しされば村役場吏員農會員は村民と協同し日夜驅除防遏に怠りなく猶ほ連夜炬火を燈し採取に努力しつゝあり(愛媛新報)

●害蟲分布圖の材料　長崎縣農事試驗場に於ては明年佐賀市に開かるべき九州沖繩八縣聯合共進會へ全縣下に於ける普通作物害蟲分布圖を出陳する豫定にて之が財料となるべき各町村に於ける害蟲の摸樣を報告すべき旨町村役場に通知し居れるも今に回報せざる町村あり調製上の支障少からざるに付各町村役場共至急報告ありたしと望み居れりと(佐賀、西肥日報)

●樟樹害蟲の豫防　近來樟腦樹に樟葉虱發生の兆あり此害蟲は春季嫩葉の頃葉裏に附着漸次繁殖して獨り樟葉を枯凋せしむるのみならず遂には樹体を枯死せしむる虞あれば豫防上に關し本縣廳より今回管下へ通牒したり(橫濱、貿易新報)

●茶園に害蟲發生　宇治郡宇治村字五ヶ庄小字岡根屋茶園二反六畝歩に害蟲發生し茶樹悉皆苅取燒棄せり(京都日出新聞)

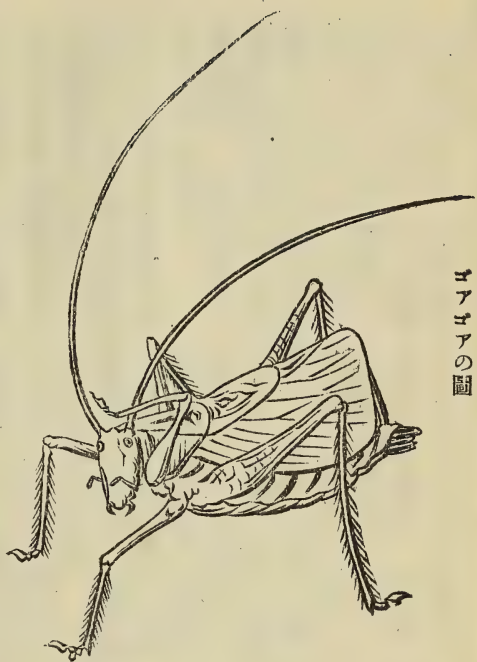
●蠅の驅除法　本吉郡志津川町長錦織源二郎氏は今回簡便なる蠅の驅除法方を發見したり其方法はランプのホヤに紙袋を附着し捕獲するものにてホヤは三分にても五分にても宜しく袋は美濃紙一枚にて封筒の如く長方形に貼り用ゐるなりと其拘器を以て裏板等に宿り居る蠅を襲激するにありランプホヤは素より透明の器物なれば之にて覆蓋せらるゝまで蠅は飛揚せず覆はるゝと同時に始めて飛揚しホヤ內に入り自から袋中に陷るなり此方法にて二百疋位捕獲せるとき火に焦れば袋の儘二分間位にて致命す此時袋より死蠅を取出し再び前の方法にて捕獲するものにして袋は五六回使用することを得べし此方法にて遣るときは一千疋位は三十分間にて捕殺するを得るといふ(仙臺河北新報)

●昆蟲講義修了と證書授與式　本巣郡衙吏及び北方署警吏が去る六月以來名和昆蟲研究所長を聘し昆蟲學講義を請ひ修養する所ありし事は既報の如きがいよ〳〵此頃終了を告げしかば十月八日其修業證書授與式を擧ぐると云ふ而して當日は陶磁器、漆器、書幅等すべて昆蟲に因みあるもの同町圓教寺に陳列し公衆の縱覽を許すと共に同修業者が一層研鑽の資に供する筈尚當日の來賓は本縣第四部長同郡會議員、同郡町村長等なりと云ふ(美濃新聞)

●害蟲發生　溫泉郡及び伊豫郡にては此頃稻田に浮塵子、イナツマ、セジロ等の害蟲發生しこれが驅防中なり(愛媛新報)

●佐賀郡害蟲驅除法違犯數　佐賀郡に於ける三十七年三月一日より本年三月三十一日迄の間害蟲驅除豫防法違犯者數を掲載すれば左の如し(佐賀西肥日報)

諸富警察管內違犯者科料五名
佐賀警察管內　同六十一名

ゴアゴアの圖

◉滿洲産轡蟲の一種　上圖は、出征第三師團西村眞次氏より報せられしものにして、漢名を蟈蟈（ごあーごあ）と呼び轡蟲の一種にして日本のそれより小さく、長身一寸五分、形圖の如く、全身綠色にして少許の黑き部分あり、翅の三角形にして上部に膨らめること最も珍らかなるものなり。日夜草間にてゴアーゴア〳〵と鳴く、故に國蟈と云ふ。

◉害蟲驅除と有益鳥との關係　人爲的害蟲驅除は漸次實施せらるゝに至るも往々收支相償はざることあり假令償ひ得るも自然的驅除の勝れるに如かず。而して自然的驅除には種々ありと雖も、就中有益蟲並に有益鳥等を保護するにあり。故に何れの國に於ても、有益鳥に關しては深く調査し嚴重に保護するを常とす。現今本邦に行はれ居る所の狩獵法施行規則は、明治三十四年六月廿六日農商務省令第七號を以て發布せられたるものにて、其規則中第二十七條、左に揭ぐる鳥類は捕獲することを禁ず、鶴（ツル）、燕（岩燕を除く）、小雀（コガラ）、日雀（ヒガラ）　四十雀（シジウカラ）、五十雀（ゴジウカラ）、柄長（エナガ）、菊戴（キクイタダキ）、雪加（セッカ）、蟲喰（ムシクヒ）、瑠璃（ルリ）、鶲（ヒタキ）、三光鳥（サンコウテウ）、鶺鴒（セキレイ）、鷦鷯（ミソサザイ）、杜鵑（ホトトギス）、郭公（クワクコウ）、蚊母鳥（ヨタカ）、鴟鵂（ミミヅク）、鴞（フクロウ）、鳶（トビ）、鸇（クソトビ）。第二十八條、左に揭ぐる鳥類は三月一日より十月三十一日まで捕殺することを禁ず、雉（キジ）、山雞（ヤマドリ）。第二十九條、左に揭ぐる鳥類は四月十六日より十月十四日まで（北海道に於ては九月十四日まで）捕殺することを禁ず、鵯（ヒヨドリ）椋鳥（ムクドリ）、雲雀（ヒバリ）、鵙（モズ）、雷鳥（ライテウ）、鶉（ウヅラ）松鷄（エゾヤマドリ）、鳩（鴿「ドバト」を除く）、鷸（シギ）。以上の如くにて、該規則中には悉く害蟲驅除の目的を以て保護せられたるものにあらざれども、大多數は昆蟲と密接の關係を有するものなればなり。而して實際に於ては、此外尚ほ幾多の保護すべき鳥類のあるやも知るべか

らず。故に當所は過る年、鳥類の胃中にある蟲類を調査して大ひに得る所ありたり。然るに今回は當所構内の一部に鐵網張の大ひなる鳥籠を造り、小鳥數十種を養ひて種々なる試驗をすると同時に、一は公衆の縱覽に供して大ひに有益鳥保護の感念を增加し、自然的驅除の愈々必要なるとを知らしめんと欲し、目下夫々計畫中なれば、何れ出來の上は詳細報導するとあるべし。

◉五度警察官と昆蟲學　岐阜縣巡査敎習所敎官廣瀨警部には、受業生八名を引率して征露紀念特別昆蟲學講習會員の伊吹山昆蟲採集の一行に加はり、登山採集を試みて大ひに得る處ありたりと、歸所の後各自伊吹山昆蟲採集紀行を作らしめられしが憖かに見るべきものあるを信ず。尚本誌雜錄欄の伊吹山昆蟲採集紀行を參照ありたし◉又同巡査敎習所に於ては昨年十月始めて昆蟲學の一科を加へられしより恰も一ヶ年となり、第五回の卒業生約百名に近く、現今は第六回の講習實施中なり◉嘗て記載したる通り本巣郡北方警察署に於ては、岐阜警察署の前例に從ひ去る六月より部内の各駐在官を召集して昆蟲講話を聽講せしめたるが、豫定の期限に達したれば、渡邊警部より本月八日上に揭ぐる証明書を二十六名に授與せられたり◉同上の聽講諸氏は常に昆蟲を採集すると同時に一方には莖切器を携帶して白穗并に種穗を切採り、農民に對して一々實地指導さるゝを以て非常なる感動を與へ、大に奬勵上便利を得たりと云ふ◉警察協會雜誌を見るに、警察事務講習會と題し、石川縣に於て八月廿四日より九月四日に至る十二日間、縣下各署より巡査部長一名金澤署は三名總員廿七名を廳内に召集し、警察事務に關する講習會を開きたり、其科目中昆蟲に關するものは害蟲驅除豫防事項にして講師榊原縣農事技師なりと云ふ。去る三十二年富山縣に於ても同樣の講習ありて意外の便利を得りと是れ迄の經驗によれば巡査のみ昆蟲學の思想發達するも、署長并部長に於て之れが思想に乏しき時は、到底監督上不充分にて得る所少なかりしと云ふ。願くば何れも富山、石川の前例に倣ひて速かに害蟲軍に大打擊を與へられたし。

證明書

右ハ明治三十八年六月一日ヨリ同年九月三十日迄昆蟲學講話ヲ聽講セシコトヲ證明ス

名和昆蟲研究所長　名和靖㊞

前記ノ證明ニヨリ此證書ヲ授與ス

明治卅八年十月八日

北方警察署長
岐阜縣警部　渡邊鉼三郎㊞

◉金華山麓公園近傍の秋の鳴蟲　昨今の時節柄とて、或は山に或は野原に、到る所蟲類の鳴

聲の聞えざるはなし。是迄金華山の麓にて獲られたる七十餘種の鳴蟲は、各々親友を戀ひ慕ふて來るものにや、晝夜よばふさはがしき蟲類をかゝぐれば、ウマオヒムシ、ヒゲナガサヽキリ、サヽキリ、ヒメサヽキリ、クダマキモドキ、ヒメクダマキモドキ、クサキリ、クサヒバリ、イブキスヾ、エンマコホロギ、コホロギ、クマコホロギ、ミツカドコホロギ、ヒメコホロギ、カネタヽキ、クマスヾムシ或はチツチゼミ、ミンミンゼミ等なりき。されどいとも口惜しきは、遠き古へより或は文に、或は詩歌の材料となり、唐土にてはこれ等を金鐘兒、金琵琶あるは蛉々兒ともよばれつる鈴蟲、松蟲、轡蟲は如何なる故にか、十數年來採集を試むるも、此處には其蔭だになし。されば夜な〳〵所員には、彼所の山此所の野をたづねつれきて、この公園内の庭園に飼はれつゝあり。中にも轡蟲の數十、我ものかほに関を作つて鳴き始むれば、其かまびすしきたとへん方なく、げに昆蟲界の巣窟とは此事にこそ。

◎修業証書授與式　嘗て本誌に報導せし如く、岐阜縣北方警察署の昆蟲學講話は此程終りを告げ、去る八日該証書授與式を擧行せられしが、頗る盛大にして見るもの一々昆蟲に因みて其設備實に遺憾なく讀者に照會すべき点甚多きも、紙面の都合により詳細次號に掲ぐることゝなしぬ。

◎特別研究生の入退　紙面の都合により久しく其消息を報せざりし特別研究生は、愛媛縣長尾欽次郎氏は一ヶ月半の研究を、沖繩縣前田休太郎氏は一ヶ月間の研究を卒へ共に本年四月廿五日、高知縣穗岐山巖氏は五ヶ月間、愛媛縣加藤政一氏は三ヶ月半の研究を卒へ共に五月十一日、京都府嵯峨根熊藏氏は十日間の研究を以て七月廿日、同府小谷作治氏は廿五日間の研究を經て八月十一日、鳥取縣井一貞一郎氏は十六日間の研究を以て八月廿七日、神奈川縣井上福松氏は一ケ月間の研究にて九月十二日、福岡縣福永俊藏氏は二ヶ月間の研究を積みて九月三十日、何れも証明書を受領退所せられたり。而して愛媛縣越智鉄一郎氏は、三ヶ月の豫定にて九月二十一日入所せられたれば、目下二名にして照會中のもの數名あり。因に三重縣大村竹藏氏は一ケ月間の豫定にて去月六日入所せられしも、俄に無據家事上の都合にて同月十三日退所せられたり。而して漸次所内の整理も緒に就きたれば、各自の目的に應して折々必要問題を與へ、特に研究せしむることゝあり。

## ◎本誌定價並廣告料

壹部 郵税共 金拾錢 （見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部 郵税共 金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず ◎郵券代用は五厘切手にて壹割增とす ◎爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料 五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢 三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十八年十月十五日印刷並發行

發行所 岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内） 名和昆蟲研究所

發行者 岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二 名和梅吉

編輯者 同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸 小森省作

印刷者 同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二 河田貞次郎



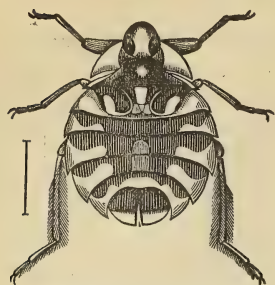
明治三十年九月十日内務省許可

（大垣 西濃印刷株式會社印刷）

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

**YASUSHI NAWA**

DIRECTOR OF

"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.IX.] NOVEMBER. 15TH, 1905. [No.11.

# 昆蟲世界

第九卷第拾壹册　明治三十八年十一月十五日發行　第九拾九號

## 目次 （禁轉載）



（毎月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

1 コバネキリギリス(幼蟲)
2 ウマヲヒムシ(蛹)
3 ヤブキリギリス(幼蟲)
4 サヽキリ(幼蟲)
5 ヒゲナガサヽキリ(蛹)
6 ミドリサヽキリ(蛹)
7 クダマキモドキ(蛹)
8 ヒメクダマキモドキ(蛹)
9 クサキリ(蛹)
10 クビキリバツタ(蛹)
11 ケラ(蛹)
12 エンマコホロギ(幼蟲)
13 コホロギ(蛹)
14 クマコホロギ(蛹)
15 ミツカドコホロギ(蛹)
16 オカメコホロギ(蛹)
17 クサヒバリ(蛹)
18 イブキスヾ(蛹)
19 マダラスヾ(幼蟲)
20 ヤマトスヾ(蛹)
21 マツムシ(蛹)
22 カンタン(蛹
23 クマスヾムシ(蛹)
24 マツムシモドキ(蛹)
25 コバネサヽキリモドキ(幼蟲)

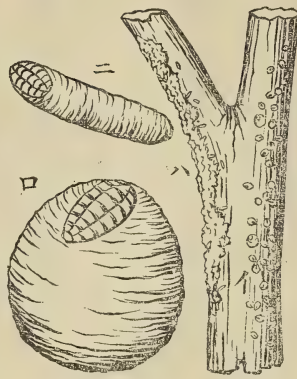
## ◎桑樹貝殼蟲驅除豫防方法

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

貝殼蟲類中、常に桑樹の枝幹に寄生して加害するもの數種あり。就中桑樹貝殼蟲と稱する種はその發生區域甚だ廣濶にして、殆んど到る處の桑園に發見せられ、從ひて加害の程度も大なるものなり。特に此種は、斯く發生區域の廣濶なると同時に被害植物の種類尠からず、即ち桑樹以外には通常桃、櫻、梅、梨、柿、葡萄等の果樹類を始め、薔薇、山吹、柳及梧桐等各種の樹木に發生加害するものなれば、之が爲め蒙むる所の損害額を計算する時は、蓋し一層莫大なる額に達するや明けし、豈に一小蟲として忽諸に附すべけんや。吾人は大ひに彼等に對し作戰計劃を企圖し、以て勦滅を期せん事を希望して止まざるなり。今左に該蟲に關する概略を記述し、驅除豫防の方法一、二を紹介せんとす。

桑樹貝殼蟲は有吻目中貝殼蟲科に屬する一種にて、形態甚だ小なるのみならず、常に貝殼を以て躰を被覆するが爲めに、外見害菌の附着するが如き觀あり。然れども仔細に點檢する時は、貝殼下に害蟲の存在を認め得べし。最も躰を被覆する貝殼には、稍圓形を爲せるものと長橢圓形を爲すものとの二樣ありて、之れ全く雌雄の別に依り然らしむるものなり。即ち前者は雌蟲にて、後者は雄蟲の生せし繭樣物なりとす、此種は斯く雌雄に依り所謂貝殼の形狀に差異を認むるのみならず、驚くべきは雌雄の別に依り

そが變態を異にする事なり、斯の如き例は他の一般蟲類には餘り見ざる所なれども、同科に屬する貝殼蟲類中に於ては一般の天則なるが如し、該蟲は年々五、六月の頃に到り、前年の秋期雌雄交接を終へて殘存せし雌蟲の產卵するものにて、卵子は貝殼下にあり。一雌の產する卵子は百餘粒を算せらるゝものにて、楕圓形を爲し淡赤色を呈す。孵化せし幼蟲は眼、觸角及六脚を具備し、枝幹上を活潑に匍行するを得、此際適宜の場所を索め得る時は其處に固着して吸收口を樹皮下に挿入し、液汁を吸收し以て自活を圖り、脫皮する時は自在に運動せし脚部、並に觸角は退化して消失せしやの觀あり、而して再び脫皮後は眼を缺如するに到るものとす、斯くして老熟せるものは雌蟲にて、最早大なる變化を生ぜず、只軀形の增大するのみなり。故に成蟲の雌は、軀を被覆するに軀より分泌せし蠟質の貝殼を存し、眼、觸角及翅脚等を缺如せる一小蟲にて、獨り食を取るべき吸收口のみは能く發達し、枝幹中より養液を吸收して生存するに適へり。而して其の貝殼は通常扁平にして、徑五、六厘許、脫皮は黃褐色を呈し、貝殼の一方に偏して少しく隆起し、其餘は灰白色なるあり或は鈍白色なるあり、或は茶褐色を呈する等一定せず。之れ全く寄生する樹種に關係するとは謂へ、亦同一樹枝幹に附着するものと雖も、定着せる部分の差異に依り異色を現はすものさへありき。右の如き貝殼を起す時は、前揭の形態を存する雌蟲の蟄居するを見得べし、此もの軀長四、五厘許扁圓にして淡黃色を呈し、所謂頭胸部に相當する部分は膨大に、腹端に到るに從ひ細小となれり。而して臀板部は多少褐色を呈するを常とす。雌蟲に關する大要は前述の如くにて、全く不完全なる變態を經て成蟲と成れども、之に反し雄蟲は、卵子より孵化せし幼蟲再度の脫皮迄は雌蟲となるべきものと同樣、觸角及脚部等一時退化消失すと雖も、其後は白色長楕圓形を爲せる繭樣物を營み、再び觸角及脚部並に翅部をも發育して、所謂蛹の時代となり、後羽化して

成蟲に變化するものとす。其成蟲即ち雄蟲は躰長僅かに二厘弱、翅の擴張又僅かに五、六厘に過ぎず。全躰光澤ある橙黄色を呈し、觸角は十節より成り、基部の一節は短太なるも、他の九節は殆んど同様にて、中央少しく括れて粗毛を生ぜり。口器は退化し全く之を缺き、眼は能く發育して四個を有し、頭部の上下の兩面に二個宛存在す。前翅は比較的大にして薄膜狀を呈し、外縁部圓し。後翅は退化し鈎狀に變し居れり、故に外觀恰も雙翅目中の或るもの丶如し。腹部は九節より成り、其末端には刺狀の附屬器を有す。之れ即ち交接器なりとす。斯雄蟲は完全なる變態を經て成蟲となり、交接後は直に死するも雌蟲は尙ほ生存して產卵後にあらざれば死することなし。故に通常雄蟲は雌蟲に比し非常に短命なりと謂ふべし。

クハノカヒガラムシの圖

ロ　ハ　ニ

（イ）雌蟲自然大
（ロ）其放大圖
（ハ）雄蟲群居の有樣
（ニ）雄蟲放大圖

桑樹貝殼蟲に關する概略は前述せし如くにて、一年間に變化する事二三回に及び、益々繁殖して加害を逞ふするものなり。雌蟲の貝殼は、其色澤被害樹皮に類似するが爲め餘程多數附着すと雖も判明せざるも、雄蟲の繭樣物に到りては、假令樹種は異なれども一般に白色を呈し、加之群棲密着するの性あるを以て容易に認知し得らるべし、其被害の甚だしき枝幹に於ては、往々全躰に白粉を塗抹せし如き觀を現はせり。特に斯の如き現象は梧桐の樹幹に於て見る所なり。而して桑樹の如き常に空氣の流通惡しき塲所に多くの發生を認め、老木よりも若木に加害の程度甚しく、且樹液を吸收するの結果、被害部は凹陷するを見る、多數發生の塲所に於て注意する時は、寄生蜂の爲めに斃され居るものを發見するとあり。最も該蟲に寄生して暗々裡に吾人を助くる所の有益なる蜂類數種あり、又直接に食

殺するものには、瓢蟲の一種ヒメアカボシテンタウムシあり。之等は常に保護し置くべし左に驅除豫防法を記述せん。

一擦潰法　是は從來施行する所の最も有効簡便なる方法とす。之をなすには藁を束ね、或は繩を糾へて被害局部を摩擦し、專ら貝殼と躰軀の潰殺を圖るにあり。又藁、繩に換ふるに、布片或は粗剛なる毛刷子を使用するも可なり。

二、幼蟲期の驅殺　總て貝殼蟲の驅除には、幼蟲期特に貝殼を有せざる以前に施行するを可とす。此期に於ては貝殼を被覆せざるが爲め、使用する處の藥劑の蟲躰に觸れ易きが故に、稀薄の度を增すも尚ほ能く有効なるものなればなり。現に余の實驗せし結果に依れば、卵子より孵化して漸く固定の場所に取り附きたるものに向ては、單に清水を強く注射せしのみにて能く斃死せしめたるとあり。而して通常桑樹に被害なくして効を奏せしむる藥劑は、石鹼の稀薄溶液、除蟲菊粉加用石鹼液（此は前液一升に對し除蟲菊粉二匁の割合にて混和せしものとす）煙草莖浸出液（煙草莖六十匁を短かく切り熱湯五升中に入れ一晝夜放置し後取りたるもの）リゾール稀薄液、右の外魚油乳劑、石油乳劑等の稀薄液は、又該蟲の幼蟲期に對し最も有効なる驅殺劑と謂ふべし。去れば該蟲驅除豫防の一有効なる方法としては、各地方に依り發育に遲速あるものなれば、常に彼等の變化に注意し、期を失せず右の内便宜の藥劑を用ひて施行するにあり。

三、冬季の驅除　前記幼蟲期驅殺の外、該蟲驅除の方法としては春夏秋蠶飼育、其他桑樹の成育上の關係よりして同期間に藥劑を以て施行し能はざる場合あるを以て、冬季に於ける驅除は最も必要なる事項とす。即ち此季にありては、多少強度の藥劑を注射或は塗抹するも、桑樹に被害を見るなく、目的を

達し得べければなり。當時冬季驅防の爲め使用すべき藥劑種々ありと雖も、容易に調製せられ且有効なるものには、矢張り石油乳劑ならんか、此季にありては、貝殼蟲は充分躰を保護すべき比較的厚き外殼を保有するものなれば、從ひて强度のものを使用すべきものとす、今一般に試驗の結果有効と認知せし度合を示せば、普通の順序を經て調製せし原液に、水を七、八倍乃至十倍許を混和せしもの最も適量なるが如し。最も大躰に於ては差支なきも、桑樹の老若に依り多少損傷する事を免れず、是れ該液を使用して施行するに當り注意すべき事柄とす。而して該劑に次ぐには松脂合劑、魚油乳劑にて、毛刷子或は藁若くは布片を束ねて摩擦塗附するを良しとす。

四、苗木の注意

該蟲の傳播上種々なる媒介者ありと雖も、就中苗木の賣買は大ひに關係するものとす。如何となれば、之迄被害を見ざりし老木に加害を認むるものに附き調査する時は、多くの場合新に他より購入して移植せし苗木に皈因するもの、如ければなり。之れ現に本年余は岐阜縣飛驒國巡回の際實見せし結果は、悉く然らざるはなかりき。豈に注意せずして可ならんや。桑樹貝殼蟲は前揭の如く、獨り桑樹のみに止まらず、各種の樹木に發生して繁殖加害するものなれば、桑樹の苗木に注意すると同時に、一般被害植物の苗木にも留意し、以て豫防の方法を希圖せざる時は到底完全なる目的を達せられざる可し。

イ　ロ　ハ

ヒメアカボシランタマウシの放大圖

（イ）成蟲（ロ）幼蟲　（ハ）蛹

今や戰後經營の一として蠶絲業の發達增進に努力せらる、は當然の事にて、既に之が改善の必要を唱導せらるに到りたるなり、此時に際し養蠶を盛ならしめん爲めには、勢ひ桑園の改善となり、桑園の改善を圖るには、又桑樹の新陳代謝を施行せ

んとは喋々を要せずして明かなり。然り新陳代謝の結果、一朝彼惡むべき害蟲の附隨し來り傳播するものに注意を怠らば、折角の辛勞も水泡に期すべきなり、之れ余の該蟲驅防上苗木に對する注意の最も忽諸に附すべからざるを重視する所以なり。

**五、益蟲保護**　該蟲には寄生蜂或は食肉蟲類ありて、暗々裡に滅殺するものなれば、之等の益蟲を一般に知了せしめ、保護するは驅防上又必要なりとす。尚ほ該蟲には一種の黴菌の寄生する所となり、斃死せしむる事あれば特に注意すべし。

## ◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査（一四）（第五十八、五十九號口繪參看）

名和昆蟲研究所員　名和正

**蛟蜻蛉科**(Myrmeleonidae)　脉翅目に屬し形蜻蛉に似て腹部細長く、四翅透明にして同形を呈し、蜻蛉のそれよりは薄弱なり。觸角短くして棍棒狀をなし、複眼は豆娘のそれの如く頭の兩端にあり、相隔離して小なり。幼蟲は砂中に漏斗狀の穴を穿ちて其中に生息し、蟻及其他小蟲の陷落するものを捕食す沙挼子と稱するもの是なり。其中に圓形の繭を作り蛹化す、今回の採品中此科に入るものは左の七種なりき。

（一八三）ウスバカゲロフ(Myrmeleon micans. M'L.)　体長一寸二分乃至一寸三分、翅の開張二寸六分乃至二寸八分、体灰褐にして頭部黑く、觸角は黑色にして第一第二の兩節端は黃色に、口部黃色を呈して大顋は黑色なり。頭部より中胸背に亘りて黃色の一縱溝あれども、前胸にあるは判明ならず。四翅透明にして前翅は黃褐の脉條を有し、前緣にある三條の縱脉は太くして色稍濃く、其亞前緣脉と半徑脉との接合したる處は稍黑味を帶ぶ、前緣室にある橫脉は單一なれども、翅端殆んど三分の一は叉狀をなし

緣紋は黃色なり。後翅は前翅と同長なれども細くして緣紋小なり。体の腹面は胸部黃色にして、腹部も稍黃味を帶ぶ。肢は黃色にして黑色の剛毛を有し、脛節は稍暗色に跗節及爪は黑し。不破、武儀、郡上益田、吉城の五郡に於て得られたり。（第六卷第六版、第一圖）

（一八四）コウスバカゲロウ（Myrmeleon formicarius L.）　体長八分乃至一寸〇五厘、翅の開張二寸乃至二寸三分、体は黑褐なり。觸角黑くして其基節は黃色を帶び、頭部は黑く中央に一條の縱溝を有し、口部黃色に大顋は稍黑味を帶ぶ。複眼黑色にして其周圍黃色なり。前胸には一條の橫溝ありて、前緣の中央を除くの外側面に亘りて黃色を帶び、後緣亦黃色を呈す。四翅透明にして前翅は黑褐の脉條を有し、且脉上には微小の黃斑ありて、特に縱脉上に多し、前緣室の橫脉は單一なれども翅端の三分の一は叉狀をなし、緣紋黃色なり、後翅は前翅より細くして且短く、緣紋小なり。腹部第四節以下の各後緣は黃色を帶ぶ。肢は黃色にして黑色の剛毛を有し、腿節の先半及脛節端并跗節は黑色なり。此種は羽島山縣、武儀、益田の四郡に於て得られたり。（同第二圖）

（一八五）ホシウスバカゲロフ（Glenurus pupillaris, Gerst.）　体長一寸乃至一寸二分五厘、翅の開張二寸一分乃至二寸七分、体は暗褐にして頭部は黑褐を帶び光澤あり。觸角暗褐にして此類中最も長く、前胸は黃褐なり、四翅透明にして前翅には黃褐の翅脉を有し、亞前緣及半徑脉上には暗褐の微小斑を印し其他にも多少同樣の斑あれども縱走脉に多し。前緣室の橫脉は黃色にして單一なれども、翅端約三分の一は叉狀をなす、緣紋は黃色にして丸く、翅端に近く一層透明の部あり。內緣の中央には濃褐の斜斑を有す。後翅は前翅と同長なれども細く、翅脉は前翅より一層黃色を呈し、緣紋不明に、翅端に近く一個の稍大なる濃褐斑ありて、翅端は稍褐色を帶ぶ。腹部は各節の後緣黃色を呈し、胸部の腹面黃色にして

肢も亦黄色をなし黒色の短き剛毛あり、跗節端は稍黒味を帯び爪は赤褐色なり。此種は不破、武儀、加茂、吉城の四郡に於て各一頭を獲られたり。（同第三圖）

（一八六）マダラウスバカゲロフ（Glenurus japonicus, M'L.）　体長九分乃至一寸一分五厘、翅の開張二寸二分乃至二寸四分、体黄褐にして頭部黒褐を帯び口部は褐色を呈す、複眼黒く其周圍黄褐なり、觸角は褐色にして基部及先端は黒く、頭部の中央に一縦溝あり。胸部背面には一條の黒褐縦走線あれども判明ならざるもの多し。前翅は透明にして黄色と褐色との脉條を有し、緣紋部には黒褐の斑あり。內緣の中央には同色の半環紋を印し、其他小形の斑紋所々に散布す。前緣室の横脉は單一にして、翅端三分の一は叉狀をなす。後翅は前翅に比し稍細けれども同長にして、翅の基部三分の二は斑紋を有せず、先端三分の一は黒褐の大斑一個及數個の小斑あり。腹部黄褐なれども末節に至るに從ひ黒味を帯ぶ。肢の腿節は黒褐若くば暗褐にして、脛節以下は黄褐なり。而して黒色の短き剛毛を生じ、脛節端の二刺は殊に細長なり。此種は今回稻葉、養老、益田の三郡に於て各一頭つゝを獲られたり。（同第四圖）

（一八七）カスリウスバカゲロフ（Mylmeleon. obsletus?）　体長一寸二分乃至一寸四分、翅張二寸七分乃至三寸、觸角暗褐にして各節に黄褐の輪環あり。頭部は黒色にして淡褐の凹斑を有し、胸部黒色を帯びて前胸には三條の褐色縱線あり。中胸には淡褐斑を有す、前翅は長大にして前緣室の横脉は單一なり。其他の脉條には褐色斑を有し、特に內緣の中央にあるものは大なり。後翅には斑紋少なく翅端に近き處に大小二三の斑紋を有するのみ。腹部黒色にして第二節端には細き黄條と、第三及第五乃至第七節の背面中央には各一個の大なる黄紋を有す。肢は三對共に灰黄褐を帯びて黒斑あり。此種は益田郡に於て二頭を獲られたり。（同第五圖）

(一八八)コカスリウスバカゲロフ(Myrmeleon contubernalis, M'L.)　体長一寸一分乃至一寸二分五厘、翅の開張二寸二分乃至二寸八分、觸角細くして稍長く、褐色を帶び各節に黃色の輪環を有す。頭部黑色にして褐色紋あり。顏面黃褐なり。胸部暗褐にして、中、後の胸背には黃褐紋を有す。翅は前後殆んど同長なれども後翅は細く、脉上には黑斑を有するも前種の如く多からず。前緣室の橫脉は單一なり。腹部黑色にして第三第四の兩節を除くの外其後緣黃色を帶び、背の中央縱に連續せざる黃線を有して其兩側に黃紋あり、第三節にあるものは最も著く、肢は灰黃にして跗節端は黑し。此種は惠那郡阿木尋常高等小學校兒童(姓名不詳)の採集一頭を送られたるのみ。(同第七圖)

(一八九)オホカスリウスバカゲロフ(Acanthaclisis japonicus, Hag.)　体長一寸五分乃至一寸七分、翅張三寸七分乃至四寸一分觸角黑褐を帶び、基節は黃色にして各節黃褐の輪環あり。顏面黃色にして大顋は黑褐を呈し、頭部黑色にして頭頂より後頭に亘りて一條の縱溝あり。胸部黑色にして前胸背には中央に一條の細き褐色縱線あり、其兩側に大なる褐色帶斑を有す。中胸にも亦褐色斑あり。後胸には長き灰白毛を生ぜり。翅は前翅長大にして縱脉上には黑褐斑を有し、特に前緣の三縱脉上にあるものは判明なり。後翅は短くして、脉上には前翅と等しく黑斑を有す。腹部亦黑色にして雄は第五節の背面には光澤ある灰白紋あれども、雌には之れを欠く。腹面は胸部及腹部の第一、第二節には灰白の長き軟毛を密生し、肢は三對共に黃褐を帶び、黑斑を有して灰白の長毛を生ず。脛節端の刺は殆んど爪と撰ぶ所なし此種は千蟲圖解のオホウスバカゲロフと同種にして、稻葉、羽島、養老、惠那の四郡に於て獲られたり(同第六圖)

長角蜻蛉科(Ascalaphidae)　脉翅目に隸する一科にして、形狀亦蜻蛉に似たれども觸角甚長く、先端

杓子狀をなす。複眼は大にして横溝によりて二分せられ、顏面には長毛を裝ふ。四翅細長同形にして蜻蛉のそれより弱し、腹部細長く雄は腹端に鋏子狀の附器あり。幼蟲は其形狀蛟蜻蛉の幼蟲に酷似し、草間若くば土中に在りて、小蟲を捕食す。此科に屬するもの、採品は左の二種なり。

（一九〇）ツノトンボ（Hybris subjacens, Walk.）　体長一寸一分乃至一寸三分、翅の開張二寸五分乃至二寸七分、頭部暗褐色にして頭頂より後頭に渉りて一條の細き黑色隆起線を有し、觸角は長くして略体と同長、其色黑褐なり。顏面には長毛を裝ひ、前胸は短くして前後兩緣の中央は黃色を帶び、中胸及後胸の背面中央の大部分は黃色にして、側面及腹面は暗褐なり。而して中胸の側面より腹面に亘りて一條の太き黃帶を有す。翅は透明にして黑褐の翅脉を有すれども亞前緣脉及半徑脉は黃色を呈し、緣紋黑く大なり。後翅も透明にして前翅よりは細くして短く、緣紋細長し。腹部は黑色にして、背面に太き黃色帶を縱走し、各節接合部に於て殆んど斷絕す、且各節の後緣は黃色を帶ぶ。肢は赤褐にして黑色の剛毛を有し、蹠節及爪は黑し。此種は尤も普通の種にして羽島、海津、養老、安八、郡上、及飛驒三郡を除くの外、一市十郡に於て獲られたり。（第六卷第七版第二圖）

（一九一）キバネツノトンボ（Ascalaphus Ramburi, M.L.）　体長七分乃至八分、翅の開張一寸七分乃至二寸〇五厘、体光輝ある黑色にして、觸角黑褐色を帶び、其基部及顏面には一面に黑色の長軟毛を密生し後頭部には灰白の長き軟毛を裝ふ。複眼は黑くして其下面は赤褐若くは黃褐なり。胸部にも黑色軟毛を密生し、中胸の背面には八個の黃色若くは赤褐の小斑を有す。其側面翅の下部に二個の黃紋あり。前翅は透明にして暗褐の脉條を有すれども、基部三分の一は黃色と褐色との斑紋を有して不透明に、緣紋褐色なり。後翅は暗褐不透明にして前緣の基部は黃色を呈し、翅底より外緣に向て叉狀をなしたる太き黃

線を走らせ、中央の縱横翅脉の周圍黄色を帶ぶ。腹部にも黑軟毛を密生す。肢は各腿節の基半は黑色に其先半及脛節は黄色を呈し、跗節及爪は黑し。此種は我岐阜縣下には餘り多からざる種にして今回稻葉揖斐の兩郡に於て獲られたり。(同第一圖)

## ◎鳴く蟲に就て（十二）（第十一版圖參看）

名和昆蟲研究所内　谷　貞子

本誌前號を以て全く私の知れる邦產鳴蟲類の記述を終りたれば、茲に聊かこれ等の幼蟲、蛹より其の食草等につき是迄研め來りし概略を記さんとす、されども其齢期と採集せし時期とは各々一定し居らざれば、幸に其心して御推讀あらん事を乞ふ。

(一)コバネキリギリス(Platycleis Bonueti, Boliv.)　四月二日に採集せし幼蟲は体長一分八厘、体色成蟲と異なる所なく翅を有せず、常に禾本科植物の芝等を食す。(第一圖)

(二)ウマオヒムシ(Locusta plantaris, D. H.)　八月十二日採集、蛹は体長六分、体色成蟲と異なる所なし、翅は綠色にして長さ一分五厘、雌の產卵器は長さ五分あり。(第二圖)

(三)ヤブキリギリス(Locusta japonica, Brun.)　五月廿八日に採集せし幼蟲は体長六分、体の背面には黑色縱條を有し、中後胸の兩側には黑色點を有す、孵化の當時は背面に褐色縱條ありて翅を有せず、其初め禾本科植物の芝を食すれども、成育するに從ひ他蟲を捕食す。(第三圖)

(四)サヽキリ(Xiphidium melanum, D. H.)　八月十七日採集せし幼蟲は体長三分、体黑褐にして頭部は灰褐なり、後肢には灰色斑を有す。蛹は黑褐の短かさ翅部と產卵器とを有し、常にチヾミザヽを食す。(第四圖)

(五)ヒゲナガサヽキリ(Xiphidium longicorne, Bedt.)　八月十日に採集せし幼蟲は、体長四分五厘、体色成蟲と異ならずして翅を有せず、蛹の翅部は膜質にして長さ一分、産卵器は長八分五厘あり(第五圖)。

(六)ミドリサヽキリ(Tetratara monstrosa, Redt.)　八月三十一日に蛹を採集す。体長四分にして体色成蟲と異なる所なく、翅部は短かくして長さ一分、雌の産卵器は長さ二分綠色を呈す。(第六圖)

(七)クダマキモドキ(Holochlora japonica, Brum.)　八月十三日に採集せし蛹は体長八分にして、体色成蟲と異ならず。翅部は長さ三分、産卵器は綠色にして長さ二分あり。成蟲幼蟲共に桑葉を食害し、桑枝に産卵す。(第七圖)

(八)ヒメクダマキモドキ(Phaneroptera nigo-antennata, Brunner.)　八月十三日採集せし蛹は体長五分、体綠色にして數個の黄綠縦線を有す。翅部は長さ一分あり、産卵器は綠色にして長さ八厘、幼蟲成蟲共に桑葉を食害す。(第八圖)

(九)クサキリ(Conocephalus fuscipes, Redt.)　八月廿日に採集せし蛹は体長七分腹背には褐色縦條を有す、翅部は綠色にして前縁褐色をなし、長さ一分五厘あり。産卵器は褐色にして長さ六分あり(第九圖)

(十)クビキリバツタ(Conocephalus thunfurgi, Stal.)　九月十二日に獲し蛹は体長七分にして、背面には二條の褐色縦線あり。翅部は長さ一分三厘綠色を呈す。(第十圖)

(十一)ケラ(Gryllotalpa africana, Pall.)　九月四日に採集せし蛹は体長九分にして、成蟲と異なりたる所なし。翅部は長さ一分八厘位あり。(第十一圖)

(十二)エンマコホロギ(Gryllodes mitratus, Burm.)　七月六日に採集せし幼蟲は体長三分内外、腹部に

白色横帯を有す。長ずるに從ひ白色部は漸次濃厚となる、蛹は全く白色部を缺き、翅部は長さ二分を算す、常に塵芥中に捿息し、夜間出で丶作物を害す。（第十二圖）

（十三）コホロギ(Gryllodes berhellus, Sauss.)　八月廿三日に採集せし蛹は体長五分、体色成蟲と異なる事なく、翅部は長さ一分三厘あり、常に蔬菜類を食す。ま丶他蟲をとり食する事あり。（第十三圖）

（十四）クマコホロギ(Gryllodes blennus, Sauss.)　九月四日採集せし蛹は体長三分五厘、成蟲と異なる所なく、翅は黒褐にして翅部は長さ一分あり、雌の産卵器は長さ一分黒褐なり。（第十四圖）

（十五）ミツカドコホロギ(Loxoblemmus haanii, Sauss.)　八月廿三日に採集せし蛹は体長五分を算す、雄の頭部は顔面少しく平たく、体色成蟲と異ならず、翅部は長さ一分五厘あり。幼蟲の觸角は中央白色をなす。（第十五圖）

（十六）オカメコホロギ(Loxoblemmus equestris, Sauss.)　九月一日に採集せし蛹は体長四分五厘、雄は前種に酷似して顔面平たく、体色成蟲と異ならず、翅は長さ一分あり。（第十六圖）

（十七）クサヒバリ(Cyrtoxiphus ritsemae, Saus.)　八月三十一日に採集せし蛹は体長二分、体色成蟲と異ならず。翅は体と等しく灰色をなし、産卵器は長さ五厘あり、常に笹原等に棲息す。（第十七圖）

（十八）イブキスヾ(Gn? sp)　九月一日に採集せし蛹は体長一分八厘、体紅紫色を呈し、翅部は灰色をなし、肢は各々淡緑色を帯ぶ。（第十八圖）

（十九）マダラスヾ(Nemobius nigrofasciatus, Mats.)　九月一日に採集せし幼蟲は、体長一分五厘にして其色彩成蟲と異なる所なく、翅を有せず。（第十九圖）

（二十）ヤマトスヾ(Nemobius sp?)　九月十二日に採集せし蛹は、体長一分五厘、翅部は体と同色にし

て短かく、成蟲と其色彩を異にせず。(第二十圖)

(二十一)マツムシ(Calyptotryphus mormoratus, D. H.)　九月十一日に採集せし蛹は、体長五分五厘、成蟲より其色濃く、翅部は長さ二分位なり、産卵器は其色体と同色にして長さ二分五厘あり。(第二十一圖)

(廿二)カンタン(Oecanthus longicaudo, Mats.)　八月三十一日に採集せし蛹は、体長四分五厘、体色淡緑をなし、翅は短かく長さ一分餘あり。(第二十二圖)

(廿三)クマスヾムシ(Sclerpterus coriaceus, D.H.)　九月一日に採集の蛹は体長二分八厘。其色彩成蟲と異らず。翅部は小形にして長さ八厘程、産卵器は短く其長さ八厘位、体と其色を異にせず。(第二十三圖)

(廿四)マツムシモドキ(Gn? sp?)　九月十一日に採集せし蛹は、体の長さ三分餘、其色彩成蟲と異ならず、翅部は長さ七厘餘あり。(第二十四圖)

(廿五)コバネサヽキリモドキ(Euscirtus hemelytris, D. H.)　八月廿一日に採集の幼蟲は、体長一分五厘を算し、其色彩は成蟲に異ならずして翅を有せず。(第二十五圖)

## ◎二化性螟蟲は冬期嚴寒と雖も決して凍死するものにあらず

埼玉縣浦和町　田口北峰

本邦稲作害蟲の驍將たる螟蟲は逐年其加害を逞ふし、米作の豊凶は一に螟蟲被害の多少に依つて決せらるゝの有様となれり。稲作の害蟲元より螟蟲一種に止らず、浮塵子、苞蟲、螟蛉、椿象、蝗蟲等多々あるべしと雖も、稲作に大なる被害を與ふるものは、螟蟲、浮塵子の二種にして、年々國家の蒙る損害は未だ正確なる調査なしと雖も、尠くも壹億圓を下らざるべしとは識者の常に唱導するところにして、今日國事多端の際、斯業に忠實なるものゝ決して袖手傍観すべき事にあらざるなり。過般北米合衆國に於

て、同國農務局技師の調査せられたる同國主要農作物の一ケ年に被る損害額なりとの報告を視るに、實に拾五億七千萬圓の巨額に達すと云ふ。嗚呼此の巨額是れ皆害蟲の爲めに年々蒙るところの最小被害額なりと云ふ豈恐れざるべけんや。

我國の如きは合衆國の大陸とは面積其他に於ても決して同日に論ずること能はざれども余輩の觀想するところによれば同國被害額の最小額十分の一は確に加害せらるべし、拾五億七千萬圓の十分の一は壹億五千七百萬圓にあらずや、吾人戰後の經營として害蟲驅除の如き決して輕々看過すべき事にあらざるなり。近來我國に於ても、害蟲の被害は國家の生産力に至大の影響を及ぼすべき事を、朝野一般に之を唱導し、害蟲驅除の聲漸く高く、當局の士は熱心奬勵怠りなく、今は國家事業の一として、縣郡町村擧つて種々なる防除手段を設け、縣令に訓令に小學校生徒利用に、又は抽籤買上法等により、稍々其成蹟を擧ぐるに至りたるは誠に喜ぶべき事なりとす。然と雖も、一般農民の害蟲に對する觀念比較的冷淡にして、稍々もすれば驅除を怠り、豫防法を疏漫にするの傾向あり。爲めに其聲の大なるに比し豫期の成蹟を擧ぐること能はざるは誠に嘆ずべき事なりとす。之れ他なし、一般農民が害蟲に關する智識幼稚なるを以て、害蟲の習性經過を知らず、爲に勞して効なく、往々當局者を誹謗するは余の常に農村に於て見聞するところなり。昆蟲思想の幼稚なるは獨り農民のみならず、勸業當局者にして往々二化性螟蟲の卵塊を知らざるものあり。當局の士すら夫れ斯の如し、況や農民に於てをや。世人稍々もすれ、螟蟲なるものは冬期嚴寒の爲めに凍死するものなりとの說をなすものあり、迂論も亦甚しと云ふべし。今試みに、冬期雪中に埋れる雜草中を蹈査せられよ、浮塵子の跳躍するは往々見るところなり、二化性螟蟲の如きは、寒耐の性極めて强きものにして、冬期嚴寒と雖も平然越冬するものなり。余は之等に關して

未だ詳細の調査を遂げたる事なきを以て、正確に表記する事能はざれども、昨三十七年に調査したる事實に徴するも、冬期の嚴寒に會ふて決して凍死するものにあらざる事を認信せり。

余は昨三十七年十二月廿五日より、試驗すべき個所に（水田五坪）畦を築き、田面四寸餘水を灌注し、本年一月五日まで十日間嚴寒に接觸して氷結せしめたる後、株を耕して調査の資料となしたり。調査の株數二百五十五株を取りて詳細に之が調査を遂げしに、幼蟲百二十頭を得、其中八頭は少しく衰弱せし樣なりしを以て別器に入れ、日光の透射する個所に暫時放置せしに、數時にして溫度の本体に回りたる故にや、他の幼蟲と比較せしに毫も異なる事なく、活潑に自動するを見たり。由是觀是、螟蟲なるものは決して冬期嚴寒と雖も之に耐へ得らるゝものにして、凍死するものにあらざる事を認めたり。故に害蟲驅除の如きは決して疏漫に之を行ふなく、詳細に之が習性經過を究め、周密に之を行ひ、亂雜に流れず、螟蟲の如きは春期苗代に於て蛾を搦殺し、卵塊の摘採より第一期の心枯切を行び、誘蛾捕殺、白穗莖切取、冬期は株を耘して乾燥燒却をなす等、杓子定規に行はず秩序的に之を行はざる可からざるなり今や戰後の經營に急なる今日、國富の增進を計るべからざるの秋に於て、目前被害を認めながら適法なしとて袖手傍觀するが如きは、斯業に忠實なるものと云ふべからず。吾人は今より來春螟蟲除去の作戰計畫をなし、以て豫期の効果を擧げられん事を切望するものなり。

# 講話

## ◎警察官と害蟲驅除との關係に就て

名和昆蟲研究所長　名和靖

編者曰く去る十月三十一日岐阜縣下各警察署長會議修了後害蟲驅除に關する一場の談話を申込まれたれば所長は快諾して當所樓上に於て講演せられたるが本篇は即其大要なり。

警察官と害蟲驅除との關係に就ては、警察協會雜誌に掲載せられましたから既に御覽下されたことゝ存じます。現今警察官に昆蟲學の必要なることは多くの府縣に於て認められ、大分八ヶ間敷なつて來ましたが、私は久しき以前より此事に就て非常に感じて居つたことは協會雜誌にも書きし通りで御座ゐます抑も害蟲驅除は時機を誤らないのが最も肝要で、如何なる良法も時機を失しては其効を奏せないのであります。以前の有樣で見ると、郡役所よりの害蟲發生の報告と警察署からの報告とを比較すれば、常に警察署の方が早いのである。郡役所は役場の報告を受け、然る後に縣廳へ報ずるのであるから勢い遲くなる、甚だしい時は警察の方よりは五六日も一週間も後れることがある、其報告を得て後驅除の道を講ずるのであるから、自然其時機を失すると云ふことになる。故に之れ等の報告及處置は、傳染病と同樣極めて迅速を貴ぶのである、之れ等に就ても警察官の力を藉ると云ふことは最も必要であると思ふのです。この迅速なる報告を得て機敏に處置をすれば容易に驅除の出來るのを、報告は已に後れ其上驅除にかゝる迄には幾多の時日を經過し、所謂病膏盲に入りてより矢ヶ間敷云ふ風であるから益困難になるのである。之れを救ふには是非警察官の力を藉り、少くとも發生の初期に於て驅除せしめ、進んでは未發に防ぐと云ふことに致したいと思ふのであります。斯く種々なること迄も警察官に御願するのは、如何にも警察事務の繁忙に繁忙を重ねる樣であるが、此繁忙は他日簡單にするの原であろうと存じます。尚一歩進んでは、保護鳥を充分に保護することに御注意が願ひたいのであります。之れは害蟲驅除に非常に關係があるので御座います、凡て昆蟲の强敵は蟲類で、特に小鳥である。御承知の通り、昆蟲には保護色と申して、翅の色とか模樣、或は体の色等が木の皮に似たり、苔に似たり、或は土色をしたり、若くば青色を帶びたりして、各自棲息する處の物に似た色をして居るもの、又は擬態〆申して、自分より强い蜂抔に擬して居るもの、即ちトラフカミキリが赤蜂に似たるコウカバへのジガバチに似たる抔は、皆自己の安全を謀る爲めの手段で、即ち鳥類の目に當らない樣にして其攻擊を避ける唯一の手段である之れを見ても如何に昆蟲が小鳥を恐るゝかと云ふことは明かで、又小鳥が昆蟲を退治するの勢力は實に容易ならぬものである。然るにこの小鳥等の保護の充分出來ざる樣では、害蟲驅除の上に大に不利益を來すものである、即ち保護鳥を捕ふるは、害蟲を繁殖させると同樣である。一方で驅除して一方で害蟲

を繁殖させる有樣であるから迚も追付くものでない。害蟲驅除の手數を除く爲めには、是非共益鳥の保護と云ふことが必要である。今回當所が保護鳥を飼育するのも、決して慰の爲めにするのでなく、如何にもして一般人に保護鳥は斯樣なものである、此鳥は保護せなければならぬと云ふことも知らせたい爲めに外ならぬのである。外國に於て小學校の兒童に至るまでこの心を以て、益鳥とあれば之を殺さゞるは勿論のこと、決して指をも指さゝぬと云ふことを三島子爵より曾て聞きましたが、我國ではどんな鳥が益鳥であるやら、一人前のものも知らぬものが多いのであるから、可成之れ等の思想も養い度ひと思ふのであります。從來私は敎育者實業家等には隨分澤山の人に話を致しましたが、これ丈では中々面白く驅除が出來ぬ、どうしても警察官の力を藉りねばならぬと同時に、警察官に一通り昆蟲のことを心得て頂き度いと云ふことは、明治三十年島村のヒメゾウムシ驅除の時に大に感じたことがある、其節には極力奬勵して八九分通り驅除をしたが、殘る一、二分通りは頑固に搆へてどうしても行らぬ、止むを得ず警察官の力を藉りて漸く頑固者も着手したが、其仕方が不充分であつても、監督さるゝ警察官がそれを知られないから、其方法が惡いと云ふことが分らぬ、故に内々此蟲を驅除するには斯樣々々にせねば効がないから、斯樣々々に驅除をさせて戴き度ひと内々警官に注意をしたことがございましたが、此時益警官に昆蟲思想を持つて頂き度ひと云ふことの感が深くなつたのである。其後三十二年に富山縣に於て昆蟲學の講習を開かれた際に、不肖講師として招聘されましたが、其時何か注文は無いかとの御尋で御座いましたから、然らば今回の講習には敎育者と警察官とを加へて頂き度いと注文致しましたら、敎育者は突然のことで加へることが出來ぬが、警察官十名を三日間聽講させると云ふことになりましたが、遂に三日間而已ならず終迄講習を受けられて、其後の結果は甚だ宜しいとの話でありました。昨年より岐阜縣の敎習所に昆蟲の一科を加へまして、目下百名程の卒業生が出來ましたが、何分時間が少ないから充分のことは出來ませぬ。併し幸に廣瀨敎官は實地を重んぜられて、卒業以前に折々實地に就て之れを應用されますから、割合に好結果を得らるゝのであります、其外岐阜警察署部内に於て本年二月より四ケ月間、毎月二回の召集日を利用して昆蟲の講話を致し、續て北方警察署に於ても同樣六月より初めまして本月八日に證書授與式を擧げた樣なことでありました、此頃も聞きますに、愛知縣の如きは一昨年より敎習所に昆蟲學の一科を加へられ、又石川縣に於て近頃警察事務講習會の中へ昆蟲學の一科を加へられ、大分諸方に於て警察官に昆蟲學を授くることが注意さるゝ樣になりましたが、一歩進んで部長若

くば署長にも一通り知つて頂き度いと思ひます。そは外でない、部長并に署長が其心得の無い人であると、存外其部下の者が働き難いとのことを聞きました、關警察署の如きは當所へ特別に研究に參られて以來熱心に注意さるゝから、部下のものも一層熱心になり、非常に多くの害益蟲標本迄も集められ、恐らく全國の警察署に於て第一等であると云ふことは、昨年農商務省の技師が來られた時の話しでありました。私も嘗て同署へ參りまして實に感心致しました、斯く部長以上の人に其心得があれば部下のものが働きよい、從て成蹟が擧るのです。富山縣の或る駐在所には昆蟲の掲示塲を設け、時々昆蟲を掲示して即其實物を示して農民に諭す樣のことも過日雜誌に吹聽して置きましたが、此等も餘程面白く至極有益なることゝ存じます。過日台灣總督府川上技師が來られての話しには、警察官と害蟲驅除との關係に就て取調べ度いと思つて本省へ出頭したれば、そは目下岐阜縣が一番面白く遣つて居るから直接行つて取り調べた方が利益であるとのことであつたから、其れに就て御尋ねに來たとの話しで御座いましたが、何分まだ日も淺く是れと云ふ結果も見へないことであるから、餘り御土產になることは無いが、目下の有樣は斯樣々々であると答へて置いた樣な次第です。これで以て考ふれば、警察官と害蟲驅除との關係に就て、我岐阜縣は大分評判されて居る、從て益其責任の大なることゝ存じます。噂のみ高くて其實が擧らなければ實に面目もない次第ですから、どうぞ其覺悟で御奮發が願いたいのであります故に各警察部内で講話を開き度いとの御希望が有れば、可成都合して私の力の及ぶ限りは盡す考へであります。先づ可成便利な處より御初め下されたならば好都合と存じます。頑固なる農民には如何に警察官が必要なりとも、昆蟲思想なく只規則の勵行と云ふ而已にては其效は見へませぬが、自分に能く承知して督勵すれば農民も之に服從し、從て甘く行はれるのであります。同じく一の器械を使ふのでも、自分が能く實驗して成る程之が良いと信じたるものは、決して他人の言葉に依て彼是迷ふことなきも、自分に經驗せざる器械は假令よくとも、甲がイケナイといへばこれはよくないか知らぬと心に迷を起す、即白穗を切取るには此の器械が一番よい、（農產園發明の器械を示す）然し最初は斯樣の器械であつた、（實物を示す）處がこれでは他の莖を傷めるから面白くないといふので、段々改良に改良を加へて目下此のバネのある器械になつたのである。然るに或る所では此バネが邪魔になると云ふて其バネを取つた樣なこともあり、夫れを甲傳へ乙聞き、試用もせずして彼の器械よりは此の器械がよいと云ふ樣なことを申したことも御座いましたが、こは此器械の長所も知らず、經驗したこともない爲めにかゝることをした

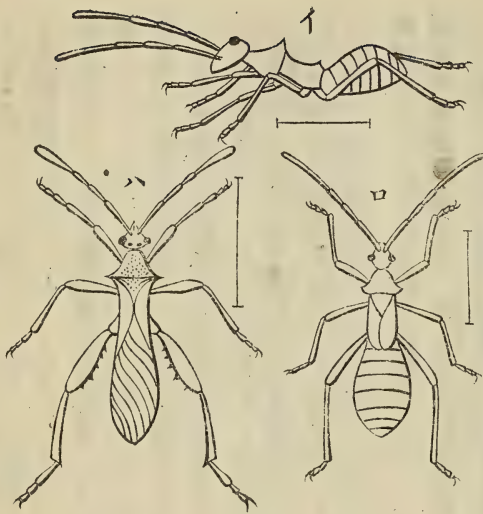
のであるが、若し左樣の塲合に、此器械に經驗のある人なれば洵々と說明が出來て、有効の器械を退化させる樣なことは無かろうと思ふのです。故に督勵の任に當るものは、是非一般に奬勵する器具等に就ては自らもそれを實驗して置く必要があるのです。序に申上げて置きますが、此の器械白穗切採のみならず、一方には種穗の切取に應用されて、秋田縣仙北郡などでは早くより實行されて居るのです。種を撰むは最も必要なことで壚水撰が行はれて居る。同じ壚水撰を行ふにも普通に扱き落したる籾と、適當の穗を拔いてするのと、適當の穗を見計ひ根元より切り採りて能く充實させたるものを壚水撰にするのとは、其間に大に差がある。即第一は下の上なるもの、第二は中の上なるもの、第三は上の上なるものが撰べるのである。故に此の器械を害蟲驅除に使用するのみならず、一歩進んで種穗切採に應用する樣に致したなれば其利益は尠なからざることゝ存じます。色々申上げ度い事が御座いますけれども、既に御約束の十二時も過ぎましたから一先づ是れにて止めることに致しますが、ドーカ將來益御盡力あらんことを偏に希望致します。

## ◎小豆の害蟲實驗談　第三回岐阜縣長期害蟲驅除講習生　野田稻司

本篇は去る水曜昆蟲談話會の席上に於て同氏が實見の有樣を述べられたるものにして採集上注意すべき點多ければ茲に照會することゝなしぬ。

昆蟲學を研究するには其目的に應じて材料を集め、即ち昆蟲を蒐集すると同時に其形態及習性經過等を緻密に研究せざる可からずとは、日頃講師を始め諸先生方の御敎訓なるが、實に動かす可からざる格言で、私共が同じ採集をなすに就ても其情態に注意を加へ、又蟲一疋を見るに付けても、此器官が發達したるは何故ならん、退化したるは如何なる原因ならん抔と深く注意すれば、益々興味を感ずる事多く、從て智識を得る事が尠なからぬは信じて疑はぬのであります。或る日當市附近へ採集に參りました途次僅二坪に滿たない小豆の畑に到り注目すると、實に種々雜多の蟲が繁殖して大害を加ふるもあれば、又一方より、敵蟲の飛來し之れを襲擊して捕食する樣、恰も我が講師の著はされたる薔薇の一株昆蟲世界のそれと等しく、繁雜なる活劇を演じつゝありましたのを實見して感じたことの概略を申し上げて、誤れる點は諸先生の御明敎を仰ぎたいのであります。

先づ第一に目に觸れしは有吻目凸眼椿象科に屬するサヽゲガメムシです、それが幾頭となく保護色を利

用し、群居して莖の養液を吸收して居ります、然るに其中にクマアリとも思ぼしきが、共に睦まじく雜居して居りました。元來サヽゲガメムシとクマアリとは蟻と蚜蟲の如き關係あるものにあらず、全く其性質を異にせるものなれば不審に堪えませぬ。依て之を捕獲して調らべて見ますると、矢張り蟻にはあらでサヽゲガメムシの幼蟲でありました。其形狀及色澤等のクマアリに彷彿たるは、一見容易に識別することが出來ん位であります。然れども能く注意すると、第一吸收口なること、第二觸角の形狀及關節の數の差異其他胸部腹部との連接部等に非常の差異あることが發見せられます。必竟是等は自然淘汰の結果、弱者が强動物に摸擬して、敵の攻擊を免がれんとするの外はありません。成蟲の如きでも惡臭を出して敵の害を防ぎ、遠距離の飛揚に堪へぬから非常に脚が發達し、就中後脚の腿節の如きは膨大し、且他物に攀ぢ登ぼるに便なる爲めか爪銳く、跗節や腿節（後脚）には刺齒を生じて居ります。斯くの如きは皆生存競爭の結果、斯く或る部分が進化したのでありませう。尙莖中より黃白色の蟲糞が點々露出し、甚だしき部分はこれが爲め曲折して枯死するものありました。故に之を割きて見ますと、体長五分黃白色を呈し、頭は暗黑に、各節には十乃至十二の疣狀凸起があつて、背部にあるものは黑褐を帶び、一、二本宛の細毛を生じたるものが、莖中にて他動物の來襲する心配もなく安穩に食害して居るです。其蝕入するや上方へ髓部を喰ひ上り漸次中空となし、遂に枯死せしむるに至るのであります。この蟲は果して莢蟲なるか、或はアワノズイムシなるかは判然知ることが出來ませんが、目下飼育しつゝありますから後日成蟲の羽化するを待て報告致します考です。斯く莖を動搖して驗する中に、小蟲の飛び來りては止まり、動搖すれば又飛揚するものがありました。何者ならんと捕蟲器へ拂落ひして見ると、今迄は禾本科の植物に而已加害するものと信じて居りました有吻目橫蚑蟲科に屬するヨコバイで、葉莖に止まりて液を吸收する樣です、そこで私は如何に

ササゲガメムシの圖
（イ）幼蟲　（ロ）蛹　（ハ）成蟲

も不審にたまらないので、其周圍を視るに、禾本科植物や雜草の密生して荒地であつて、浮塵子の巣窟とでも云ふ位ひ大發生し、既に其雜草の養液も吸收し盡し、茲に植物と浮塵子の權衡を失なひ、止むなく荳科植物に移食したのでないかと考へます。尙精密に調査するに僅々二坪に滿たざる小豆畑ながら、只この二、三種の害蟲而已に止まらず、イモムシ、マメコガネ、マメハンメウ、メマキムシ等の大繁殖をなしつゝあり。そをトンボ類ムシヒキアブなどが不意を襲ひ、カマキリの誘惑色を利用し、鋭どき斧を以て捕食するなど、實に弱肉强食の活劇を演じて居ります。然れども益蟲の勢力少なき爲めか、果た害蟲の巧みに敵の目を忍びて繁殖するのか、非常に繁殖して、遂に小豆をして一粒をだに結實せしめぬ有樣でありました。以上の如く先生方の御教訓の通り注意採集を行なひますと、植物と昆蟲との相互の關係及其特性等、種々なる方面に意外の智識を得、且つ是が驅除法等をも機に臨みて適當に行ことも出來、斯學發達に非常の好成蹟を收むる事は確かに信じて疑ひを容れませぬ。

今や我が國は振古未曾有の大戰に全勝の光榮を荷ひ、茲に平和克復せられたりと雖も、來るべき平和の戰場に於て益々此光輝を發揚するには、我國の威信に加へて之が資力を增進せざるべからざるを覺悟し國民一同益奮起して、少なくも戰後經營の一大急務として、商業に工業に、敎育に農業に各本領を盡し以て國本の培養に努力せねばなりませぬ。就中農業の如きは國家の基本とも云ふ可ければ、從來の舊弊を打破し、一寳の微と雖も害蟲軍に蝕害させぬ樣に盡力せねばならぬ秋でござりますから、吾人は益々奮勵して、諸先生の敎訓に基き斯學を修め、以て報國の萬分の一をも盡さんことを期するのであります。

## ◎昆蟲文學

（二十三）

### 秋蟬　　小西綠夢

商飈匝地到疎槐。一曲無絃也可哀。有箇離愁仍抱樹。葉聲如雨夕陽隤。評。離愁抱樹。

### 新秋聞蟲　　山田藍溪

山雨晴來月欲生。碧雲搖曳晚風清。新涼一味傳秋信。露氣吹人早蛬鳴。評。一味新秋。

### 月下聞蟲　　雄山魯嶽

露蕉風竹碧交叉。秋氣偏從雨後加。絡緯聲邊一痕月。徐移涼影上幮紗。

## 雜詠

＊　　四澤

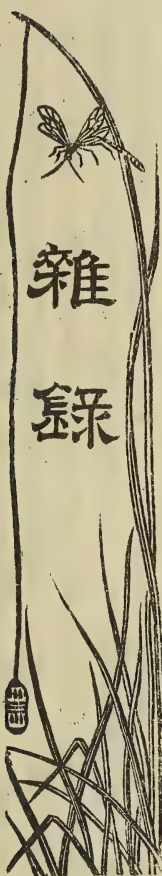
ま晝日のさすや眞垣の花木槿むらさきてふの來て飛べる見ゆ

庭の面に生ふる莠をしげみかも晝鳴きしきるこほろぎの聲

足なづみ路行く我をあなづらひしかとぶら〻きみちをしへかも

＊　　志紀臣

夕照にうつらふ水の面低う蜻蛉とぶ見ゆ浮藻が上を

河骨の花咲き殘る河隅に去りては來り蜻蛉とぶ見ゆ

＊　　ふもとのや

露滋き田中の道を我行けば稻の高さにとぶいなごかな

＊　　潮音生

藤豆の添の小竹に鳴く蟲の髯振れる見ゆ月清ければ

べにすてし尼がたぐひか夕露の草に埋れて鳴くかねたゝき

## 椿象

くさがめの吹かれて落ちぬ椽の上　　四澤

拂へども椿象臭き袂かな　　同

幹ふるき所くさがめ潜みけり　　同

くさがめの美しく見ゆ日の光　　同

へくさむし掃ひ捨たる團扇かな　　歸麓園

へくさむし飛びかはす松と庇かな　　同

うとましやちぎりし柹に椿象　　同

へくさむし臭くて食へぬ李かな　　三川

もがんとす梨這ひゐるや椿象　　同

くさがめのこゝな李に夥し　　同

へくさむし隣のこじき李かな　　同

椿象と毛蟲と幹に逢着す　　同

## 雜吟（三川氏選）

生きて居れど籠の鈴蟲なかぬかな　　四澤

蛁蟟鳴く園中のしもとかな　　同

一トしきりかな〳〵ないて後淋し　同
默讀の輿つきぬ夜やきり〳〵す　同
螽得ず落穂拾ふて戻りけり　琴舍
寫生する人の帽子や赤とんぼ　同
蜻蛉に別れて町へは入りけり　同
赤蜻蛉いくさごつこの上を飛ぶ　同
砂濱や肴臭きに秋の蠅　皎々
上棟の梁高き蜻蛉かな　同
鷄頭の庭に眞午の蜻蛉かな　同

粟刈の晝飼やバッタ飛んで行く　同
機織の窓に紫苑や蜻蛉とぶ　水村
蜻蛉とぶ濱は藻屑の匂かな　同
蟀の宿や月もる壁の穴　同
蜻蛉の影うつり行く磧かな　歸麓園
秋の蚊の一つ來てなく枕上　同
庵の庭とびも去らずよ秋の蝶　三川
往來に飛び出して居る螽かな　同
蟷螂の何を無闇に怒るかな　同

## ◎昆蟲に關する歌 （六）

奥島欣人輯

### ▲後撰集の昆蟲歌

題しらず　讀人しらず

打はへて音を鳴きくらすうつ蟬のむなしき戀も我はする哉

つねもなき夏の草葉におく露を命とたのむ蟬のはかなさ

八重葎しげき宿には夏むしの聲より外にとふ人もなし

うつ蟬の聲きくからに物ぞ思ふ我も空しき世にしすまへば

桂のみこの螢を捕へてといひ侍りければ童のかざみの袖につゝみて

つゝめども隱れぬものは夏蟲の身より餘れるおもひ也けり

題しらず

夏蟲の身をたきすてゝたましあらば我とまねばん人めもる身ぞ

まつ蟲の初こゑさそふ秋風は音羽山よりふきそめにけり

業平朝臣

行ほたる雲の上までいぬべくは秋風ふくとかりつげこせ

讀人しらず

秋風に草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの聲

蜩のこゑきく山の近げれや鳴つるなべに夕日さすらん　紀貫之

ひぐらしの聲きくからにまつ蟲の名にのみ人をおもふ頃かな　讀人しらず
心ありて鳴もしつるか日ぐらしのいづれも物のあきてうければ
秋風の吹くるよひはきり／＼す草の根ごとに聲みだれけり
我ごとく物や悲しき螽斯草のやどりに聲たえず鳴く
こんどいひしほどや過ぬる秋の野に誰まつ蟲ぞ聲の悲しき
秋の野にき宿る人もたもほえず誰をまつ蟲こゝら鳴らん
秋風のやゝふきしけば野をさむみ佗しき聲に松蟲ぞなく

秋くれば野もせに蟲のたり亂る聲のあやをば誰かきるらん　藤原元善朝臣

風さむみなくまつ蟲の涙こそくさ葉色どる露とたくらん　讀人しらず
女郎花草むらごとにむれ立つはたれまつ蟲の聲にまよふぞ
女郎花いろにもある哉まつ蟲をともに宿して誰を待らん

日ぐらしの聲もいとなく聞ゆるは秋ゆふ暮になればなりけり　貫之

物いひける女に蟬のもぬけを包みてつかはすとて
これをみよ人もすさめぬ戀すとて音をなく蟲のなれる姿を　源重光朝臣

つらくなりにける男のもとに今はとて裝束など返し遣はすとて
今はとて梢にかゝるうつ蟬のからを見んとは思はざりしを　平ながきが女

かへし
忘らるゝ身をうつせみのから衣かへすはつらき心なり鳧　源巨城

業平朝臣の贈りし歌にかへすとて
夏蟲のしる／＼惑ふ思ひをばこりぬかなしと誰か見ざらん　伊勢

かくいひかはす程に三年ばかりになり侍りければ　讀人しらず

あら玉の三年はうつせみの空しきねをや鳴てくらさん

戀歌に於ける贈答の中の一首男のよめる

上にのみおろかに燃ゆる蚊遣火のよにも底には思ひこがれじ

前中宮宣旨贈太政大臣の家よりまかり出てあるにかの家にことにふれて日ぐらしといふことなん侍りける　宣　旨

み山よりひゞき聞ゆる日ぐらしの聲を戀しみ今もけぬべし

かへし　贈太政大臣(藤原長員公也)

日ぐらしの聲を戀しみけぬべくは深山ほとりに早もきねかし

昔を思ひ出てむら子の内侍につかはしける　左　大　臣(藤原實頼公也)

鈴蟲にたとらぬ音こそなかれけれ昔の秋を思ひやりつゝ

此集も古今の如く昆蟲の數は獸類を超過した、鳥類は依然として大多數を占めて居る、分類すると

鳥類　百十八首、　獸類　二十首、　蟲類(昆蟲以外)　七首、　魚類　一首

で昆蟲は三十二首ある、種別すると

蟬(蜩)　十四首、松むし　八首、夏蟲　三首、螢　二首、きりぎりす　二首、鈴蟲　一首、蚊(蚊遣火)　一首、鳴蟲　一首

## ◎害蟲驅除豫防實驗錄　(其十一)

名和昆蟲研究所員　小　竹　　浩

(一五)ホシカミキリ　天牛科に屬する桑樹害蟲クハカミキリ、トラフカミキリ、ホシカミキリに就て其概畧を述べたれば今回は同じく天牛科に屬する柑橘の害蟲として、最も當業者の恐るゝホシカミキリに就て其大体を記さんとす。抑も柑橘の害蟲は其種類十數種あれども、天牛蟲、貝殼蟲類は最も其害の甚しきものにして、少しく注意を怠れば樹勢の衰ふるは勿論、往々枯死せしむるものなり。就中天牛蟲の害を甚しとす此種は一名ゴマカミキリとも稱し、体の長さ雄は一寸内外、雌は一寸二分内外を普通とすれども、時としては甚だ小さきものあり。背面より見るときは全体黒色にして、雄は其觸角長く、やがて体の二倍に達せり、而して十一節より成り、第一節は太く、第二節は小にして甚だ短かく、共に灰白色を帶び、第

## ホシカミキリの圖

（イ）成蟲の雄　（ロ）同雄

三節は尤も長く、以下漸次細くなり、末節は最も細くして長し、背面より見るときは、第三節以下は各節の基部灰白色にして、其他は黑色なり、下面は殆んど黑く、各基部僅に白色を呈するのみ。頭部には、顏面より後頭に向つて一條の細き縱線を有せり。前胸は其幅頭部と等しく前後の緣には橫皺を有し、其間に二個の白き斑紋あり。左右兩側には刺狀をなしたる突起あり翅鞘は前胸より幅廣く、光輝ある黑色にして、大小不正の白き斑紋を散布す。之れホシカミキリ若くばゴマカミキリの名ある所以なり、基部には顆粒狀物を縱に列ね、肩部は稍張れり。楯板(翅の基部の中央に普通三角形をなしたる處あり之れを楯板又稜狀部といふ）は白毛を以て覆はれ、先端尖らず、肢は長く、跗節は四節より成りて扁平に、第三節は二分し、第四節は其中央より出でゝ細長し。腹面及肢は灰白にして、稍藤色を帶べり。雌は雄より腹部肥大にして觸角短かく。而して其觸角には雄のそれよりは白色部多し。幼蟲は圓筒形にして稍扁く、淡黃白色を帶び、各節には橫皺多し、成蟲は六、七月頃最も多く現はれ、柑橘園に集り樹幹の根際に產卵するを常とす。孵化すれば其幼蟲は材部に喰入り、多くは根部に向て喰害するものなり。老熟すれば其内に蛹となり遂に羽化す。

驅除豫防法　前述の如く、幼蟲は樹幹の根部に向て喰入するを以て、一度喰入したる幼蟲を捕殺するは甚困難の事なり。故に其産卵に先ちて、勉めて成蟲を捕殺する樣注意するを良しとす。然れども、此種は只に柑橘類に限らず、柳等にも加害するものにして、成蟲の柳に集まるもの多ければ、能く是等にも注意して捕殺するを要す。こは到底個人の力を以て効を奏するものに非らざれば、柑橘栽培地に於ては、是非共同して廣く行はざれば効少なし、且成蟲は飛揚不活潑にして捕獲し易きを以て、各自の兒童を奬勵して捕獲せしむるに適せり。かく一方に於て成蟲の捕獲を努むると同時に、豫防法として、成蟲の發生期には樹幹の根際に土を高く盛り、若くは菰の如きものを以て覆ひ、其産卵を防ぐの策を取るべし。一旦幼蟲の喰入したるものは、根際の土を掘り、糞孔より殺蟲注射器を以て、除蟲菊十匁を温湯一升に浸したる液を注射すべし。若し之れを行ふ能はざる場合には、蟲の有無を檢し、小さき鑿を以て孔を穿ち、幼蟲を刺殺すべし。

## ◎六脚蟲界思ひ出の記

蟲廼家蟲奴

（一）害蟲驅除と僧侶　害蟲驅除として蟲除御札、或は祈禱などを使りて顧みないのが、所謂舊式的方法として殆んど用ひられない樣になつた今日此頃は如何なつたかと謂へば、誠に進んだもので頑迷なる農家に彼是甲すより、一歩も二歩も進めて、最も右等の人々に、有力なる僧侶諸師に害、益蟲の何物たる事柄を說き、以て僧侶より南無阿彌陀佛の六字と共に、六脚蟲の恐ろしき事、又大ひに有益なる場合のある事などを法話否說話として傳導せしめ、目的を達せん事とはなつたのである。處で其結果或る處で實行されたのを聞ひて見るも面白い、なぜなれば僧侶さんが高坐の上で嚴かに珠數を爪繰りながら、偖て稻の害蟲は斯く〳〵で桑の害蟲は斯樣の被害をなすから、御互ひに能く心得て後生大切と思ふて御上よりの命令に從ひ、充分に取除く樣せなければならぬと、殆んど請賣的の文句を傳へられた結果、參詣者は之迄に聽聞せし所の法話とは非常なる相違で、大切なる南無阿彌陀佛も出でず、呆然たる有樣であるのみならず、其後は參詣者が少なくなつたと云ふ次第で、僧侶さんも大ひに之には頭痛がしたとの事である。故に余は斯く迄害蟲驅除の發達したのは大ひに喜ばしいと同時に、此始末を聞ひて心を寒からしめたのを思ひ出したから、一寸六脚蟲界思ひ出の記の冐頭に記した譯である。

（二）蟲の音の聞き樣　多數の昆蟲類中音聲を發するものは、然らざるものに比して一般に注意を受くる事が多い樣である。又奇麗なる形態色澤を有する種類も同樣なのである、處で凡て音聲を發する蟲類を研究調査するに當り、最も其音を聞き分ける事が困難で、之は其人々に由て聞き方が相違する、故に若し文字に顯はす塲合にはどうかと謂ふと、殆んど種類の異なつたものゝ如き事がある。斯く申した處で中々一定して聞ゆるものでない、或人は蓄音器の內へ入れて研究したら稍や完全な域に達すると申されしも、之も又同樣にあらざるかと思はれる。何故かと言へば、其音は彼方になくて聞く所の此方にある樣に思はれるからである。右に就て古人の詩歌に用ひられたのを見ても、同一の蟲の音を聞き、之を悲觀的に見られたのと、樂觀的に見られたのとの二樣になつて居る。斯くなりしも種々因由のある事ならんも、そは又別に研究する法がある事故、彼是せず讀者の判斷に任せん。兎に角昆蟲の發する音聲の聞き方には種々ある樣見受けたから、之等の研究は餘程容易の樣で困難の樣に感じた次第である。

## ◎虱の手紙　（其二）

在米國桑港の一虱

昆蟲世界第九拾六號に、不肖の拙き通信を埋草に御使ひなされし名和君の御厚意を感謝せんとするも、倭文の學力なき虱には到底望むも及ばざる所なるは遺憾千萬なり。就ては此不足を補はん爲め、且は高橋氏の希望の幾分を滿さんと心掛け居りしところ、僥倖にも當市の新聞にて鷄舍淸潔法に關する記事を發見したれば、そを切り拔き送附することとなしぬ。右翻譯して貴誌の餘白に掲載せられ、飼鷄家の裨益ともなれば幸甚。

（意譯）養鷄に寄生する虱の害を防止するには、石灰乳劑を製して鷄舍に塗抹し淸潔になすにあり。該乳劑の調製方は、熱湯中に生石灰を投入して糊狀となし、石灰の五升餘に食塩六合餘、並にインヂゴー半オンスとを混和するものとす。而して該液三ガロン內へ、モラッセス三合許と、細末にせし明礬少許を加へたるものを鷄舍に塗附し、常に鷄舍を淸潔に爲し置けば、自然虱は發生せざるに到る若し斯くして鷄躰に發生せし時は、溫氣を與へて硫黃華を散布せば、十二時間に全く防除の効を奏すと謂へり。

## ◎簡單說明昆蟲雜錄　（第四號）

●樟樹の害蟲調査第一回報告　理學博士佐々木忠次郎著、大藏省主税局發行、頁數十九、挿入圖十一、樟葉の害蟲即ち五倍子蟲又は葉蝨に就き習性經過等より豫防及驅除法に關して記載せらる。

●養蜂雜誌（第十三號）　養蜂案內と題して養蜂の利益、農家副業としての養蜂、養蜂とは何か、蜂群の繁殖、蜂蜜採收及び製蠟、巢箱及び繼箱、養蜂器具の調製、種蜂を得る途、養蜂の場所、養蜂を始むる資金、養蜂の仕事、養蜂に成功する途を十六頁に亘りて記載す。

●昆蟲學雜誌（第一卷第二號）　ヂョナシ蛾の話（佐々木忠次郎）。葡萄の根蚜蟲前號の續き（小貫信太郎）。公園害蟲（桑名伊之吉）。イスの五倍子蚜蟲（明石弘）等にして着色圖一版其他木版圖挿入四十頁に亘りて記載す。

●靜岡縣農會報（第九十八號）　第二期害蟲驅除に對する各郡農會の施設と題し、四頁餘に亘りて詳細なる事項を記載す

●岐阜縣敎育會雜誌（第百三十二號）　小學兒童に關する昆蟲雜錄（名和昆蟲研究所）小學兒童に昆蟲思想の養成、小學校生の害蟲驅除、兒童の螟蟲驅除を拒む、害蟲驅除奬勵金授與式其他四件を二頁餘に亘りて記載す。

●山梨敎育（第百三十號）　稻苗代害蟲驅除に關する調査と題し小學兒童の害蟲驅除に從事して得たる結果を說明并に表を掲げ一頁半に亘りて記載す。

●吉野之實業（第三十二號）　米の病蟲害に關する注意事項（農商務省農事試驗場）前號の續き本號には三化螟蟲、大螟蟲二化螟蟲三化螟蟲大螟蟲を區別すべき特徵。浮塵子類の習性經過并に防除の法を六頁餘に亘り其他杉苗害蟲の話を記載す。

●松の操（第三十二號）　衛生の害蟲（谷貞子）前號の續き本號には蚊に關する通說を圖入にて三頁半に亘りて記載す。

●愛國婦人（第九十一號）　十分談片中に昆蟲研究所長名和靖氏と題して婦人の昆蟲學に關する件を簡單に記載す。

●園藝界（第二年第十卷）　菊虎（河村榮吉）圖入りにて菊の害蟲たるキクスヒの習性、經過より防除の方法を三頁餘。蚜蟲の話（土田都止雄　前號の續き本號には蚜蟲の生活現象を三頁に亘りて記載す。

●中央農事報（第六十七號）　害蟲驅除見聞錄（農學士虛心生）前號の續き本號には縣廳、試驗場、農會。害蟲驅除監督員、長者の意思。警察官。害蟲驅除不成績なる地方の題を設けて二頁に亘り記載す。

●果物雜誌（第百〇五號）　暖地苹果栽培業者に警告す（農學士吉野得一郎）と題し大害蟲たる綿蟲の沿革。綿蟲の經過、綿蟲の習性、被害狀況、綿蟲の害敵、綿蟲の好まざる苹果樹、驅除劑并に驅除法を七頁弱に亘りて記載す。

●新農報（第八十一號）　分離蜜の採收に就て（農學士東陲耕夫）六頁。蟲の産卵（農學士向阪幾三郎）面白き例を擧げて實驗說を三頁餘。東北地方二化性螟蟲驅防の困難（仁部生）前號の續きにて五頁。ハンノキケムシの話（小竹浩）圖入にて三頁餘。昆蟲採集に就て（森元賢）三頁半に亘りて記載す。

●京都府農會報（第百五十九號）　再び小學兒童螟蟲

驅除成績に就て簡單に説明し、別に大形にして然も詳細なる一覧表十葉を加へて一目瞭然たらしむ。

●大日本農會報（第二百九十二號） 樟蟲綿に就て（農學士本多岩次郎）樟蟲の發生、樟蟲繭の産地及産額、樟蟲繭の價格樟蟲綿の製造、樟蟲綿の輸出額、結論等の題を設け圖入にて八頁に亘り。螟蟲卵寄生蜂の利用に關する試驗及調査（中川久知）前號の續き本號には圖入にて接種試驗。該寄生蜂の利用を以て論結し五頁に亘りて例の如く詳記せらる。其他大阪府三島郡吹田村農會に於ける害蟲豫防驅除成績（農學士恩田鉄彌）に關し約三頁に亘りて記載す。

●愛媛縣農會報（第七十九號） 螟蟲驅除と株切法（森莊之助）種々の例を擧げ三頁餘に亘りて記載す。

●農報（第七號） 害蟲一般の驅除豫防法（山村常吉）前號の續き本號には豫防法として清潔法、作物收穫後の處分、冬期鋤切の耕耡、輪栽法、嚴密なる撰種、溝渠遮斷法に就き五頁弱に亘り。尙附錄として害益蟲編（農學士小川三策）前號の續き本號には害益蟲。第二章各論としてカマキリの類、イナゴの類、トンボの類、ムクゲムシ、クサカゲロウ、エダシヤクトリ、イチノズイムシ等に就き十頁に亘りて記載す。

## ◎昆蟲の小實驗（二）

岐阜縣立農學校內 澤山壽水生

、蝶蛾類展翅法の研究　昆蟲類特に蝶蛾類標本は其前翅及び後翅を開張して其形態を整へ以て外觀の美と研究の便とに資せしむるを最肝要なる處措なりとす普通展翅板は一定の搆造を有する者なれども亦簡單に製作することをも得べし余は嘗て厚き木板の中央に蟲体を入るゝに適當なる小溝を作りて使用せることあり但し木板斯る堅固にして蟲針を受けざるが故之を刺すには先づ細き錐を以て小孔を作るを要するなり。若し夫れ長く旅舍に滯在せるの時若くは展翅板を準備するの機會なき時に於て偶々美麗なる蝶類又は珍奇なる蛾類を得ることあらば如何にして之が整翅をなすべきやは一考を要すべき問題に非らずや斯る場合に處する一法として之を紙に包み保存することあれども後日之を修整展翅するの煩あるのみならず往々誤りて之を乾固汚損することあり誠に惜しき事と云ふべし茲に於て余は展翅板を使用せずして蝶蛾類展翅の一法を案出せり其方法は甚不完全なるものにして識者の一笑にだも價ひせざるものなるべしと雖も余が實驗に依れば其結果に於て展翅板を使用せるものと殆ど差異あるを見ざりき今之を述べて讀者諸君の參考に供せんとす。先づ細き銅線又は鐵線を取りて之を適宜の長さに切斷し其兩端を鑢にて磨り尖鋭ならしめたるもの又は普通留針の頭部を斜に切斷したるものを以て蝶蛾類の腹部を上面に即ち反對に之を刺し貫き而して後之を襖又は額面等の裏面若くは貯藏箱の內部紙箱或ほ新聞紙を貼りた

る壁などに刺し留めて普通展翅法に於けるが如く針先にて徐かに其翅を開張して細く切りたる古はがき杯にて抑へ十數日を經て全く乾燥固定すれば之を取りて背面より出づる針の先端を平に切斷し後貯藏箱内に排列すべし。又以上の所説は簡に失して要を得ざるものあるべく又該展翅法の如きは普通展翅板を用ふるものに比し遙に遜色あるを免れざるべしと雖も讀者諸君中若し之を實驗せられ而して其欠點を是正し玉ふことあらば誠に余が幸甚とする處なり。

## ◎益蟲保護器に就て

岐阜縣不破郡　大谷　實

昆蟲思想の普及、地方自治制の發達、適當なる器具の設備、以上は害蟲驅除豫防上の三要素にして、其一を缺くも到底滿足の効果を收むる能はず。右の要素は世の進歩に伴ふと雖も今尚幼稚の域を脱せず、驅除器械の如き其發明尠なからざるも、多くは標本的器具にして實用的のもの少なきは遺憾とする處なり。然るに螟蟲驅除豫防法の一として益蟲保護の必要上、本年害蟲驅除豫防規則に該保護器を記載せられ、且つ當局者より聽きて大に感ずる處あり、一區百戸許の所を五組に分ち、各組に實行委員一名を置き、該保護器を設け採卵したるものは皆保護器に入れたるに、其方法宜しきを得ざりしか、桶底の木片及石は石油滲浸し、遂に籠底より籠底部にある卵塊を侵すに至りたれば、余は大に驚き、畢竟石油面と籠とを絶緣せざるべからざるを悟り、石及び木片に代ふるに、籠緣より吊手を施し、桶緣に細き一本の竹或は木を横架し、吊手を該竹に結着し。其他の方法に至りては害蟲驅除豫防規則にあると等しくせり之れのみにては孵化せし幼蟲の吊手より桶外に這ひ出づる患あれば、吊手結着點に少許の石油を塗抹して其這出るを防ぎ、本年實行せしに前の缺點を償ひ良好なるを認めたり。依て來年度に於ては一組に四五個を設備し、村民一同極力害蟲軍に當らんと勇み居れば一層の効果を見るならん。該保護器に就ては經驗淺く、其間に如何なる缺點の存ずるや知れざれば、聊か予が實驗を述べ識者の明敎を仰がんとす

## ◎對馬產の昆蟲（六）（平田駒太郎氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

●オホメダカハムシ(Lema puncticollis, Curtis.) 体長二分細長の種にして全体藍色を帶び光澤あり複眼は兩側に突出して黑褐を呈し前胸は細くして後縁に近く一横溝あり翅鞘の肩部は稍張る腹面及肢は黑色なり。

●アカガネハムシ(Acrothinium gaschkewitchi, Motsch.)

●ルリマルハムシ(Nodostoma sp?) 体長一分三厘圓形の種にして全体黑藍色を帶び前胸は殆んど笠狀をなす。肢は黑くして腿節は膨大せり。

●アカアシマルハムシ(Nodostoma sp?) 体長一分三厘、形前種に酷似すれども体稍細く、其色黑くして少しく紫色を帶び、前胸は笠狀をなす。腹面は黑く肢は褐色にして腿節膨大せり。

●コルリマルハムシ(Nodostoma sp?) 体長一分二厘全体藍色を帶び、前胸は深き笠狀をなし、翅鞘の肩部稍張りて腹端に至るに從ひて細し。腹面及肢は黑色にして、腿節は甚膨大せり。

●ヤナギハムシ(Lina 20-punctata, Scopol.)

●ギシギシハムシ(Gastrophysa atrocyanea, Motsch.) 体長一分八厘乃至二分全体光輝ある碧藍色若くは藍色にして斑紋なく、肢は黑色若くは稍藍色を帶ぶ。

●サルハムシ(Phaedon incertum, Baly.) 体長一分三厘內外圓形の種にして全体黑藍色を帶び翅鞘には極めて淺き黑縱溝あり。

●フヂハムシ(Phytodecta rubripennis, Baly.)

●ヨモギハムシ(Chrysomela aurichalcea, Gebl.) 体長二分五厘乃至三分、全体光輝ある黑藍色にして前胸は幅廣く複眼及觸角は黑褐色、腹面及肢は黑藍色なり此種の色澤には變化多し。

●ホシヨモギハムシ(Chrysomela laevipunctata?) 体長三分內外黑色にして稍藍色を交へ光澤なく、腹部膨大し翅鞘には各五條の顆狀線を有す。腹面及肢は黑藍色なり。

クロオビハムシの圖

●ムネヨツボシハムシ(Chrysomela sp?) 体長二分五厘頭部黑色にして前胸黃綠を帶び四個の黑紋は中央に一横列をなす後縁の中央に又一小黑點あり翅鞘は光輝ある黑藍色にして肢は黑し

●カメノコハムシ(Melospila consociata, Baly.) 体長二分五厘、頭部及前胸黑色にして、翅鞘は黃褐基部には黑圓紋と先半には黑色楕圓形紋を有し其間に廣き黑帶ありて其模樣稍龜甲形をなす、腹面及肢は黑色なり。

●クロオビハムシ(Clythra sp?)　体長一分八厘長楕圓形の種にして前胸赤味を帶びたる飴色を呈し、蠟を敷きたる如き光澤を有し二黒紋あり、翅鞘黒色にして中央及翅端には赤き稍波狀をなしたる帶紋あり。

●クハハムシ(Lupesus impressicollis, Motsch.)

●ウリハムシ(Aulacophora femoralis, Motsch.)

●クロウリハムシ(Aulacophora nigripennis, Motsch.)

●カラスウリハムシ(Aulacophora angulicollis, Motsch.)　体長一分六厘、頭及前胸褐色にして複眼及觸角黒く前胸背に一横溝あり翅鞘は淡黄褐にして兩縁は黒色を帶び翅端の黒紋に連りて稍鞆狀をなす、腹部の腹面は黃色、胸部腹面及肢は黒し而して色澤に變化ありて時としては翅端の黒紋を缺くもあり。

●ウリハムシモドキ(Luperodes discrepens, Baly.)体長一分八厘内外、灰黄褐色にして複眼黒く觸角は基部褐色にして先端に至るに從ひ黒く腹面及肢は黒し。而して翅鞘の色澤には變化あり

## ◎千葉縣長生郡の蜻蛉類　（林壽祐氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

本誌第八十七號に於て同氏の送られたる蜻蛉類を掲げしが今亦左の種類を送られたれば玆に錄す。

●ヒメヤマトンボ(Gomphus melanops Selys.)体長二寸内外、翅張三寸内外複眼は相隔離し前胸背には三個の黃紋あり、中後の胸側及背面は殆んど黃色にして中胸の前面兩側に四條の黃線あり。第一腹節の背面に三角黃紋あり之れに連りて腹端に至る一條の黃線を有し腹側にも黃條あり。

●サナヽトンボ(Gomphus melanpus, Selys.)　体長一寸五六分翅張一寸八分乃至二寸三分小形の種にして斑紋前種と異ならず。

●オホアヲトンボ(Aeschnophlebia anisoptera, S.)体長二寸四分翅張三寸五分複眼は頭頂に相癒着し胸側に三個の太き綠帶あり腹部黒色にして第一、二節の背面には綠色縱線と各節背面に四個つゝの小紋あり側面は綠色の縱線斷續す尾は長し。

●コヤマトンボ(Epophthalmia ampligena, S.)体長二寸四分内外翅張三寸二分乃至三寸四分複眼頭頂に於て相癒着し体色金光ある黒綠色にして胸側には二個の太き黃色帶あり後胸の腹面には黃色の人字形斑を有し腹部は黒くして黃帶若くば黃紋を有す。

●タカ子トンボ(Somatochlora viridiaenea, Uhler.)　体長一寸二分内外翅張三寸一分内外複眼は頭頂に相癒着し、胸部は金光ある綠色にして側面に二個黃色斜紋を

有す腹部は光輝ある紫黒色にして第一、第二節には三條黄色横線ありて腹面に於て太し各節側面には黄紋を有し後縁には顆粒狀突起ありて一横列をなす。

●ハラビロトンボ(Lyriothemis lewisi, Selys.)

## ◎靜岡縣磐田郡産の昆蟲（八）（神村直三郎氏送）名和昆蟲研究所分布調査部

●（一三四）ヒメヤマトンボ(Gomphus melanops, S.)

●（一三三）サナヘトンボ(Gomphus melanpus, S.)

●（四七七）オホサナヘモドキ(Gomphus postocularis, S.)

体長一寸六分内外翅張二寸三四分、複眼相隔離し額部黄綠顏面黒く胸腹部の色彩はサナヘトンボに酷似す而して腹部は太し。

●（二九六）コシボソトンボ(Fonscolombia maclachlani, S.)

●（二九三）カトリトンボ(Gynacantha hyalina, S.)

●（一八三）コヤマトンボ(Epophthalmia ampligena, S.)

●（一三二）シホカラトンボ(Orthetrum japonicum, Uhler.)

シホヤトンボに酷似して稍小さく翅底暗褐なり。

●（一三六）シホヤトンボ(Orthetrum japonicum, S.)

●（二九七）ウスバキトンボ(Pantala flavescens, Fabr.)

●（二九八）ハラビロトンボ(Lyriothemis Lewisi, S.)

●（二一七）オホキトンボ(Diplax uniformis, S.)

●（二九九）ナツアカネ(Diplax sinensis, S.)

●（三〇〇）ノシメトンボ(Thecadiplax infuscata, S.)

●（三〇一）ハグロトンボ(Calopteryx atrata, S.)

●（一三五）カハトンボ(Mnais pruinosa, S.)

●（一三七）ヤナギトンボ(Mnais strigata, Hagen.)

●（三〇二）キイトトンボ(Ceriagrion coromandelianum, S.)

●（三〇三）アカイトトンボ(Agrion sp?)

●（三〇四）ホソイトトンボ(Agrion sp?)

## ◎埼玉縣北足郡産蜻蛉類（深井武司氏送付）名和昆蟲研究所分布調査部

●オホアヲトンボ(Aeschnophlebia anisoptera, S.)

●ハラビロトンボ(Lyriothemis Lewisi, S.)

●シホヤトンボ(Orthetrum japonicum, S.)

●コシホヤトンボ(Libellula sp?)

●シヤウジヤウトンボ(Crocothemis servilia, S.)

●ウスバキトンボ(Pantala flavescens, Farb.)

●テウトンボ(Rhyothemis fuligiosa, S.)

●ミヤマアカネ(Diplax pedemontana, Müll.)

●ナワアカ子(Diplax frequens, S.)
●ノシメトンボ(Thecadiplax infuscata, S.)
●ハグロトンボ(Calopteryx atrata, S.)
●キイトトンボ(Ceriagrion coromandelianum, S.)
●モノサシトンボ(Psilocnemis annulata, S.)
●オホイトトンボ(Agrion sp?)
●アカイトトンボ(Agrion sp?)

●北方警察署の昆蟲學講話修了証書授與式概況　岐阜縣本巢郡北方警察署にては、每月二回の召集日の二時間を割て、去る六月以來名和昆蟲研究所長を聘し、郡役所樓上に於て昆蟲學講話を開會し來りしが、豫定の期間を終り、十月八日証書授與式を擧行せることは前號に照會したるが、今其概況を記さんに、午前十一時半一同着席するや、渡部北方警察署長は開會の挨拶を述べて、修了生廿六名に對し証書を授與し、後講習中の概況を報告し、次て名和講師の誨告、吉田本縣第三部長、坂口第四部長、廣瀨警部、青木郡會議員總代、土川町村長總代等の祝辭演說修了生總代森雅樹氏の答辭にて式を終れり。而して當日の來賓者は吉田本縣第三部長、坂口第四部長、窪田岐阜警察署長、岐阜縣巡查敎習所敎官、郡會議員、町村長其他凡て四十余名にして非常に盛會なりき。特に佐土原愛知縣知多郡書記は同郡に於て開會すべき害蟲驅除講習會講師依賴の爲め來所中なりしが、後日の參考にもと態々一泊を惜まず臨席し、一場の挨拶をせられたり。

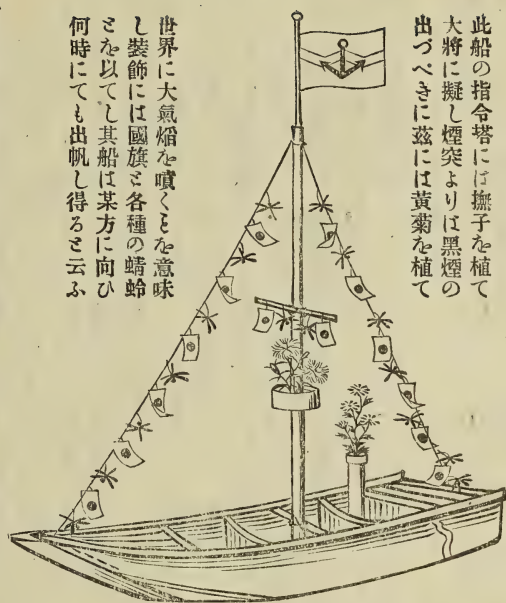
因に渡部署長、豊田郡長等の周到なる注意と盡力とによりて、當日の設備の完全思考の面白き實に感服の外なし。其大略を照會せんに、警察の入口には捕蟲器を以て翅とし、肢及尾端の附器は莖切鎌を以て之れに擬したる大形の蜻蛉の造り物を吊して一同を迎ふる如く。來賓の扣席には牽牛花の造花に蝶の止まりたるものを据へ、茶菓子には特に蜻蛉の燒摸樣を附し、式後酒肴の饗應ありしが、其折詰中にはイナゴの儀助煮あり、祝砲には螟蟲の成蟲、蛹、幼蟲等の細工物を仕掛け、見るもの食するもの一々昆蟲に因みなきものなし、特に當日は昆蟲に因みある、あらゆる器物書幅等を圓敎寺内に陳列して公衆の縱覽を許したりしが、其境内に頑迷なる農民が監督員に撰ばれて、浮塵子驅除をなすの造物あり、槌を以て頭とし、溜色の夏帽を戴き、莖切鎌を以て手を作り、鍬柄

を以て足となし、右手に捕蟲器を持ち左手に武力鐮に石油を入れたるものを下げ、衣服にはアゲハの紋を付け、田面過半白穗となりたるを見て、悄然として佇立したる狀大に人の目を引きたり。陳列場の入口には山本巡查の出品にかゝる蜜蜂（飼育したるもの其儘を出品したるなり）より飼育に要する一切の器具を陳列したりしが、何人も嘆賞足を止めざるはなし、室內に入れば應擧景文沈南評、文晁、杏村、梅逸、抱一、常信、尙信等の諸大家の畫幅を初め、其他四十余幅を所狹き迄に掛けられたりしが、記者は美術思想に乏しく、門外漢の事とて素より是等の良否は知らざるも、只昆蟲眼を以てし記者の眼に映したるもの二三を照會せんに、應擧の三幅對のカマキリ、オンブバツタ等は一筆書ながらも實に眞に迫り、沈南評の蓮に足長蜂とアブラゼミの額、抱一の菜花に紋白蝶の一筆書、景文の草に群蟲、石溪の菊にナツアカネの靜止したる狀、杏村の草花にキリギリス、梅逸の草花に群蟲の畫幅は何れも其健筆たるを疑はず。通じて蝶畵の幅は記者の感じたるもの少なけれども、土川氏の出品に係る常信の筆になるアゲハノテフは、實に間然する所なかりき。其他某の出品にて、コレハと能く觀れば尙信と常信との合作にて、蝶は是れ常信の筆なりき。彫刻にては古田義一氏の出品にて、岡嵩の手に成る筆筒にクツワムシの彫刻、并に近藤武助氏の出品にて、木刀にトンボが蛹の皮を脫ぎて近傍に止まり居る狀の彫刻は、實に一微の非難する點なく、泥中の蓮の如く感じたり。昆蟲標本として北方警察署員の採集にかゝるもの九箱。説田順造氏出品の蝶及トンボ類の裝飾的標本三箱、岐阜縣巡查教習所の出品三箱。當所よりは長期講習、特別研究生の製作せし害益蟲標本、そは蝶蛾其の他を以て裝飾的の輪廓をとり、其內に有名なる害益蟲を配し、又はウンカを材料としてウンカを作りたる裝飾的害蟲標本、其他益蟲標本、二化生螟蟲調查表、當所秘藏の出征軍人送附昆蟲、外國產昆蟲標本、本巣郡內の害蟲被害高調查表等を出品せり。其外婦人の上衣、帶等に昆蟲の摸樣若くは刺繡等あらゆる物品は昆蟲摸樣のなきはなく、流石に廣き堂內も狹き迄に飾られ。出品點數三百五十點以上に達せり。實に掛員一同の苦心の程察せられたり。而して當所員名和愛吉氏は、出品物の中特に目に留まりしもの數點を撮影し、尙紀念の爲め一同堂の椽側に整列したる處を撮影せり。

◉**大橋由太郎氏の歸省と沖繩縣の昆蟲方言**　第一回岐阜縣長期害蟲驅除講習修了生大橋由太郎氏の、豫て沖繩縣地方へ昆蟲調查の爲め出張されしことは、本誌に照會せしが、三ケ月間同地方に滯在して、調查の傍ら多數の標本を採集し、本月初旬歸省されしが、此程來所親しく其模樣を語られ且多數の標本をも寄贈せられたれば、他日調查の上報導せんとす。今左に掲ぐる昆蟲方言は、即ち同氏の齎らせるものなり。

| 名稱 | 沖繩本島方言 | 八重山方言 |
| --- | --- | --- |
| 蝶類 | カベル | パヒラ |
| 蜂類 | フハチ | パヅ |
| 蝨蚤 | ガタ | ガター |
| 蜻蛉類 | アケヅ | カケーズ |
| 金龜子類 | ブレ〳〵又はサーベ | カチボウヤ |
| 蟷螂 | アザトウ | サイトリサー |

| | | |
|---|---|---|
| 蚊 | ガサン | ガサン |
| 蚤 | ヌミ | ヌン |
| 螢 | ツンツンガ | ツィツン |
| 竹節蟲 | ー | テンチムシ |
| 蟬 | ー | サンサン |
| 蠶 | ー | マンマシ |
| 蟲の卵 | ー | トナガ |
| 山蚊 | ヤマガサン | ムツウ |
| 虱 | シラン | スサン |
| 南京蟲 | ー | アーヌン |
| クツワムシ | ー | キユイ子ラ |
| アチクサゼミ | ー | カアチー |
| 白帶鳳蝶 | ー | タバコマアレー |
| 蟷螂の卵 | ー | テンノアブジヤノシバリツンツン |

此船の指令塔には撫子を植て大將に擬し煙突よりは黑煙の出づべきに茲には黃菊を植て世界に大氣焔を噴くことを意味し裝飾には國旗と各種の蜻蛉とを以てし其船は某方に向ひ何時にても出帆し得ると云ふ

◎天長節當日の光景　當所は本月三日　天長節を祝する爲め特に調製の分類標本四拾箱を初め教育用標本、害益蟲標本、米國產昆蟲、滿州、樺太產昆蟲岐阜縣巡査教習所授業生の調製にかゝる昆蟲標本、北方警察署山本喜一氏出品の蜜蜂飼養に關する一切の標本、西濃印刷株式會社出品の昆蟲繪葉書、愛知縣知多郡半田高等小學校兒童の實物寫生圖其他被害稻等を樓上に陳列し三、四、五の三日間は一般公衆に特別の縱覽を許せしが三日は生憎の天候にも拘はらず六百余名の入場者あり四日は五百余名五日は日曜日のことにて朝來入場者多く總計二千余名に達せり入場者の重なるものは小學校兒童を初め農學校、師範學校、中學校、商業學校、高等女學校等の學生諸氏其半を占め其他は有志の老幼男女等なりき特に隣縣よりは修學旅行として小學兒童を引率し或は教員數十名づゝの團体を以て來觀されし向もありたり室外には水槽に水棲昆蟲を飼養し泉水の小舟を軍艦に模造して滿艦飾を施し採集塔よりは四方に綱を張りて萬國蟲旗を吊し新設の養禽塲には保護鳥其他昆蟲に關係ある小鳥數十羽を放養したれば入場者は必ず構内に長く足を止めざるはなく、養禽塲前及泉水の棧橋等は意外に雜踏したり

切拔通信 昆蟲雜報 第五號

明治卅八年十一月十五日發行
編輯者 蟲の家主人
發行所 昆蟲世界內

●浮塵子驅除豫防法　安濃郡にては浮塵子驅除豫防法に關し或は講話會を開き或は町村長より奬勵せしめて種々の方法に依り盡瘁すれ共一向農夫の頓着せざるを以て今回浮塵子驅除豫防方法として左の訓示をなし各町村長より一層の奬勵をなさしむることとせし由なれば各農民も看過せず殊に本年は平年作より餘程減收の見込なるに搗てゝ加へて蟲害の爲めに此上收穫を減ずる樣のことなき樣注意すべし（三重新聞）

一、町村害蟲驅除豫防委員は町村委員長指揮の下に各田毎に數ヶ所宛浮塵子發生の狀況を視察調査すべし

二、町村委員は調査の結果發生を認めたるときは第四項の區別により其發生被害田の所在地名（村大字、字）作人名及反別を郡村役場へ急報し町村役場は郡役所へ急報すべし

三、町村委員は前報告と同時に其發生田に左の目標を建設し當業者に警告すべし

四、（イ）發生の兆あるもの（一株に付凡そ五匹より十四未滿）は白布を纒結したる目標を建て常に警戒を加ふべし

（ロ）發生の甚はだしきもの「凡そ十四以上」は赤布を纒結したる目標を建て即時驅除せしむべし

五、發生田にして驅除豫防を施行したるものは町村委員點檢の上黑布を纒結したる目標を建つるものとす

六、町村委員驅除を施行したるときは其都度所在地名（村大字、字名）反別及驅除に要したる石油量其他の狀況等を町村役場へ報告すべし

七、町村委員は發生の兆あるも未だ驅除豫防の程度に達せざるものは常に警戒を加へ爾後の經過等注意すべし

八、町村委員は委員の報告に基き豫め驅除豫防の期日を豫定し得べきものは其期日を郡役所に報告して郡吏員の立會を請求すべし

●螟蟲調査の周到　三豐郡内にて本年三化螟蟲發生の金看板を掲げしは十五ヶ村の由なるが此發生の村内にて害稻株全部堀取りを要すべき田面幾千あるやを九月十九日以來郡書記四名、農事巡回教師三名都合七名連續出張せしめ極めて緻密に調査すると同時に少數發生地には撲滅的驅除法を執行中なるが昨年該被害の激甚なりし財田村の或る面場は昨年稻株全部堀取りし功果にや本年は比較的に少なきより同村民は擧つて全部堀取り今年こそ絶滅に至らしめんと意氣込みあり之れが爲め他の村も大に奮起の狀ありと云ふ、三化螟蟲發生村民にして該蟲の被害狀況と二化螟蟲の被害狀況との相違及び害蟲蟄伏の狀況相違の點等を熟知するは驅除上必要の事なれば財田村の如き發生も多く驅除も周密なる地方に就き實況視察するは有益のことなるべしと云ふ（香川新聞）

●害蟲驅除と小學生　本年夏季に於て群馬郡長が管內各小學校生徒をして害蟲驅除に從事せしめし事は其の都度屢々本紙にも記載したるが今之に就て各學校長より具申せる狀況を總括せるものゝ要領を摘錄すれば（上州新報）

第一　直接農業上に及ぼせる影響

（イ）苗の仕立方　苗の良否鑑別及び其の良否と施肥との關係に關する智識を兒童に與へしを

（ロ）短册苗代の必要なる事を兒童の腦裡に深く印象せしめたるを

（ハ）誘蛾燈の装置と置場所とによりて利害ある事を自覺せしめ且つ之を研究せんとする念を惹起せしめたるを

第二　農業科教授上及び一般教育上に及ぼせる影響

（イ）害蟲益蟲の種類、形態、變遷、習性、潜伏所在地及び發育、狀態等を實地に付きて學び得たれば昆蟲類を觀察するの興味を感せしめたり從て博物學科の學習上幾分の裨益を與へたるが如し

（ロ）兒童は害蟲蕃殖の夥多なる有樣を實驗したるより害蟲の恐るべく驅除の忽諸に附すべからざる所以を知り兼て小事を愼まされば大事を誤るを覺りたるが如し

（ハ）米穀は本邦産物中の主腦に屬するが故に稻作の良否は忽ち我邦の經濟に影響するものなれば害蟲驅除は即ち國家的事業にて決して等閑視すべきものにあらず且つ蠶業の重んずべく勞働の尊むべきを覺らしめたるが如し

（ニ）一箇人の利益と國家の利益との輕重大小の差異に付き了解せしむるに好機を與へたるが如し

（ホ）農業科學習の必要換言すれば完全に農業を爲さんには先以て農業科に關する學習が必要なりとの觀念を惹起し且つ農業科の學習が啻に學問にのみ止らず實用的なる事を自覺せしめしが如し

（ヘ）熱心忍耐等の德性涵養に裨益尠からざりしが如し

（ト）共同事業の有利なる事及び共同一致の必要なる事を感ぜしめたる等に依り公德心養成を裨益せし事

（チ）實習上勤惰により兒童の良否及び個性を知るの便ありし事

（リ）適當なる勞働は喜んで之に從事するものなる事を確知したる事

（ヌ）教師及び兒童間に於ける親密の度を增したる事

（ル）一般人民に害蟲驅除の必要を感ぜしむるの媒介となりし事

以上の外教育上に及ぼしたる缺點、町村民の意向、其の他數項あれども略す

●螟蟲採卵總數　小田郡役所に於て郡內螟蟲採卵數を調査中の處九月三十日終了したるが今其統計を聞くに第一回採卵數三六、五六九　第二回六九、七七九　第三回一五五、九六五　第四回一九〇、二五一　第五回三〇九、二九五　第六回二六三、〇〇一　第七回三〇〇、九三一　第八回二二三、〇〇一　以上合計一百五十七萬八千四百二十塊にして臨時小學生徒の採卵せし總數は二萬九千六百二十二塊ありしと云ふ、（山陽新報）

●害蟲捕獲數　本縣各郡市の本年苗代に於ける螟蟲、卵蛾捕獲數は螟蛾二千六百九十六萬〇九百二十五內小學兒童の捕獲せしもの百六十九萬六千九百八十八にして卵塊は千〇四十二萬八千八百五十五內小學兒童の捕獲數百八十萬七千三百四十六又買收法を以て捕獲したるもの螟蛾千百十萬一千三十內小學兒童の捕獲八百四十九萬三千三百四十八又卵塊は八百五十六萬六千七百六十七內小學兒童の捕獲六百十三萬八千五百七にして內最多數を捕獲したるは安藝郡の螟蛾百六十萬五千八百三十四、卵塊百三十三萬一千五百四十二なりと云ふ（吳每日新聞）

●介殼蟲驅除期　桑樹に於け

る介殻蟲は全体降雪前に驅除し置く事最も適當期なれば目下該蟲驅除の適當期なるべしといふ（山形日報）

●蝗蟲捕獲の奬勵　　岩美郡岩井村にては蝗蟲の發生夥しく稻の莖穗嚙害の爲め其の收穫を減ずること尠少ならず斯くては續いて明年の被害の多からんを顧慮し貳拾圓の豫算を以て兒童及び當業者の捕獲に係る蝗蟲購入を十月十七日より開始し同日より購入に着手せるに雨天勝なるに不拘同日村役場に持參せるもの一萬に達し右の模樣にては數日間には二三十萬を捕獲し得べき見込みなりと因に該蟲は好肥料として使用すべく或は家禽の好飼料となるを以て一擧兩得なれば何れも擧つて驅除に從事すべきなり尙ほ同村役場にては目下縣農事試驗場へ該蟲含有の肥料分に就て問合中なりといふ（因伯時報）

●螟蟲枯莖刈取數　　既記綾歌郡各町村にては過日來螟蟲枯莖稻刈に着手し居りしが十月八日迄に郡衙に到着せし報告は長炭村五百四十一貫五百十匁、林田村六百二十七貫九百四十匁、岡田村三千七百七十七貫六十匁なりと（讃岐日々新聞）

●螟蟲驅除懸賞抽籤會　　碧海郡農會にては十月二十二日午前明治高等小學校において本年度施行せし螟蟲驅除懸賞抽籤會を擧行一等拾圓より六等拾錢に至る千五百五十一人に賞與を與へ且つ五千本以上の莖を拔取りたる四十六人に賞金壹圓づゝを與へたるが本年拔取りし莖の總數は二百九十萬五千九百本なりと（因伯時報）

●三化性螟蟲の發生　　佐波郡富海村は佐波郡に於ける三化性螟蟲の根本地とも云ふべき有樣にて往年同螟蟲の大發生を見たる以來今に至るも尙ほ根絶するに至らず本年も同螟蟲の被害に依つて昨今夥多の枯莖を生じ居れるが獨り富海村に止まらず其の螟蟲は牟禮村に蔓播し極樂寺山下より漸次系統を引ひて防府町大字西佐波同村の一部に及び佐波河流を越へて右田村にまで及ばんとするの狀況あり富海村に對しては螟蟲を根本的絶滅せん目的を以つて既記の如く去三日を以て枯莖の切取を實行する筈にて當日郡役所及村役場警察署より數名の吏員出張の上驅除の監督を爲す趣なり（長周日々新聞）

●桑葉捲蟲（一名クハノスキムシ）　近來各郡村の桑樹に桑の葉捲蟲を生じ就中香美長岡の兩郡は其の被害極めて甚はだ數桑葉は秋蠶の用に供する能はず延びて翌年に及び其發育を害する恐れあり該蟲は年四回に發生するものにして幼蟲のまゝ越年し翌春孵化すこれが驅除豫防法は幼蟲の越年するときには必ず一枚の枯葉を附着せり故に冬季之れを發見すること難からず一葉の下には七八頭あるを常とす幼蟲は七八頭相集りて共有の巢を造りあるを以て目に當り易く從て驅除すること難からず蛹も又皆て幼蟲の造營せる巢に集合するものなれば之れを採りて殺すべし（土陽新聞）

●杉檜害蟲發生　　南桑田郡農會長よりの報告に依れば去る二十日以來同郡內の種苗圃にある杉檜等に螻蛄及びガツト等の害蟲發生し目下驅除中なるも是等は夫々根部を蝕害し種苗凡そ五分を枯死せしめたり尤も赤松櫟ハゲンパリ等には被害なしと（京都新聞）

●淺草村の害蟲驅除勵行　　安八郡淺草村にては隣村の洲本村が這般郡令を布かれ强制的害蟲驅除を督勵されしを見て深く其不名譽なるを知り村役場員及び村內の有力者協力して衆民を說き極力勵行せしめたる結果成蹟頗る見るべきものありと云ふ（美濃新聞）

●果樹害蟲驅除　本年果樹の果蠹蟲及ゴマダラテフ蛅蟖（くろはれひとり及くはごまたらひとり）の發生甚だしく其儘放任し置くときは明年の被害一層甚しきを加へ果樹及桑葉に少からざる損害を來すべきに付今秋を期して發生地は極力左の方法に依り驅除を勵行すべく道廳第三部長より各支廳長區長へ警戒を與へたり（北海タイムス）

果蠹蟲（しんくひ）に對しては地表凍結前樹下を耕耘して地下に越年する幼蟲を暴露せしむること且樹下の落葉塵芥等を必ず燒棄するか又は深く埋沒する事

ゴマダラテフ蛅蟖（くろはれひとり、くはごまたらひとり）に對しては幼蟲の集合せるものを捕殺すること

●樟樹害蟲の發生　本縣立農學校の苗圃に此程發生せし害蟲は「クスノムクゲムシ」と稱する蟲にして樟樹の枝に喰入り樹液を吸收して生長するものなれば其害極めて甚だし樟樹は此蟲の襲撃に遭ふや直ちに黑色に變じ遂には枯死するに至る此害蟲の幼時は赤色にして成長するに從ひ漸々黑色に變じ背部より白色の羽を生ずる由而して其驅除法は石油五升に石鹸八十匁と水二升五合を混和し之を十五倍に溶きて灌注すべしと（福岡日日新聞）

●研究會昆蟲採集　山梨昆蟲研究會にては第二回昆蟲採集の爲め會員齋藤廉、川端九一郎、五味淺次郎、山本德次郎、三枝繼次、田中喜一の六名は十月八日午前五時三十分同會事務所に集合し豫定の如く甲府發一番列車にて石和停車場に着し夫より岡部村地內原野より西山梨郡相川村字深草を經て積翠寺に至るの原野及山中に於て數十種の昆蟲を採集し午後四時頃歸會したりと（山梨日日新聞）

●蜂軍に襲はれて卒倒　先頃も千葉縣下にて蜂の爲に死亡したる少年ありしが今又老人の卒倒あり山口縣阿武郡福川村村會議員及び防長米同業組合審查委員柴田吉兵衛（六六）は九月二十二日午前十時同村字牧の川の里道を通行しつゝありしに何方よりか突然數千の熊蜂襲ひ來りて頭部面部は勿論全身に留着して處嫌はず刺し痛め之れを追ひ拂はんとすればするほど蜂軍は益々唸り狂ひて迫害せしより吉兵衛は苦悶の余り遂に其場に卒倒し糞便を洩らし面部胸部手足其他數十ヶ所を熊蜂に刺傷せられたる痕跡を存して恰も小饅頭の如く膨れ揚り居たるか近傍の者驅付け醫師を迎へて手當をなしたる爲蘇生したりと（中央新聞）

●害蟲浮塵子發生　北桑田郡鶴ヶ岡村各字稻田に九月下旬害蟲浮塵子發生し被害田面一町六反歩に及びたるが村農會にては役場員と共に各作人を督勵し驅除豫防法を勵行したる結果目下殆んど撲滅し蔓延の兆更になしと（京都日出新聞）

●害蟲驅除豫防費と違犯者　昨三十七年度に於ける本縣稻作害蟲驅除豫防費は總額一萬二千六百九十四圓三十七錢一厘にて其內譯は市町村費七千百三十五圓二十錢六厘郡費六十三圓八十錢縣稅五千四百九十五圓二十六錢五厘にして豫防法違犯の爲め處分せられたる者合計百八十四人にて科料に處せられし者百七十五人拘留九人なりしと（山陽新報）

●害蟲驅除豫防の成績　昨三十七年度に於ける本縣の害蟲驅除豫防成績なりといふを聞くに出費其他左の如くなりしといふ

市町村費　三千五百六十六圓
郡　費　二千百七十一圓
縣　費　七百四十四圓
計　六千四百八十一圓

犯罪者▲科料五百三十八人▲拘留三十七人▲重禁錮一人▲計五百七十六人（長崎新報）

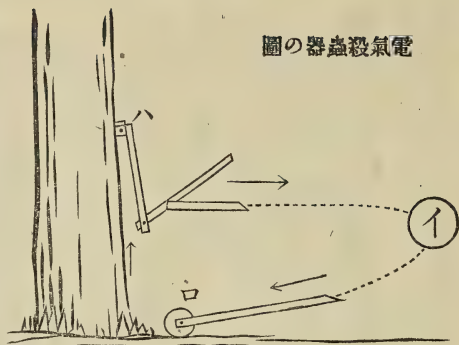
## ◉電氣殺蟲機

電氣殺蟲器の圖

ハ

イ

ロ

米國シカゴ市の一雜誌に記する處に依れば、或る露國人、此頃オデッサに於て一の電氣殺蟲機の特許を得たりと云ふ、此の機械の構造の大要は、車上に發電機を据付け、若くは蓄電池より電氣を傳送せしめ、電氣は圓盤(ロ)を組て地中若くは樹木の中を通過し刷子(ハ)に至り、再び發電所に返るなり。圓盤は地上又たは樹皮上に自由に轉じ得るのみならず、又地中に截入することを得べし。刷子は長き柄に依り自在に上下して高く樹梢にも達することを得べし。電氣一度通ずれば其通路に當れる昆蟲は、成蟲は勿論幼蟲又は蛹と雖も殺却さるべく、又土壤中には電氣の通過に依りオゾンを發生せしむべし。尤も此器械の電力は五十万ヴォルドに達し、電流は僅に千萬分の五アンペアに過ぎず、故に植物には無害なるのみならず、一方には土地の生産力を增すの利益ありと云ふ。(北海道農會報)

## ◉知多郡昆蟲學講習會概況

去る十月廿日より廿六日迄一週間愛知縣知多郡農會の主催にて同郡半田町にある郡役所樓上に於て開會せり、會員は素より實業者なれども教育者、警察官並に農學校生徒も加はりて午前九時より午後四時迄、講師は當名和所長にして例の如く昆蟲學の講習ありたり、佐土原郡書記を始め其他監督者(征露紀念特別昆蟲學講習修了者たる近藤爲義氏の助手たりしを以て特に便利ありたりと云ふ)の萬事行屆きたる爲め會員の熱心は非常にして、每日入場劵と稱して各自一頭以上の蟲類を携帶し來りて講師の机上に堆積し一々說明を請へり、又野外實習の外には宿題として講師より各自に目下發生の白穗を切取らしめて螟蟲の有無、多少其他タテハマキムシ等に就き種々調査せしめられたるが如きは實に多大の効力ありしと。廿六日午後證書授與式を擧行したるに證を受くるもの百十三名なりと云ふ。因に記す講話の餘暇を以て味噌醬油業者に對し味噌豆の黴菌を食して損害を蒙らしむる所のブイと稱する害蟲の驅除法に就きて說明あり、又半田町の高等小學校男女生三百余名に對し一般昆蟲學より構內にある種々の蟲癭等に就き親しく說明ありたるに生徒には其報酬として昆蟲に關する實物寫生又は作文を作りて多數送り越れたるは全く日比男松田女兩校長の熱心なることと深く信ずる所なり。

## ●岐阜縣昆蟲學會月次會

同學會第八十二回月次會は、例により十月二日午後一時より當所樓上に於て開會、野田稻司、越智鉄一郎、野口次兵衛、小竹浩、町田弘、名和梅吉諸氏の講演ありて午後五時閉會し、第八十三回月次會は、本月四日に相當せしが、天長節の祝意を表する爲め、特に調製陳列せし標本の說明を以て終り、別に講演せざりき。

## ●水曜昆蟲談話會記事

當所內に於て每週水曜日夜間開會の同會は相變らず盛會なるが前々號報告後に於ける談話の大要を左に照會せん

名和梅吉氏は目下發生の浮塵子視察談と題し。其種類習性及驅除の方法、及螟蟲の驅除期に就てと題し、從來の驅除法の効果の擧らざりし原因を說き、將來注意すべき要點を講ぜらる。尚昆蟲の研究法及讀書に就て最も利益ある注意を與へられたり●小竹浩氏は細腰蜂の造巢談と題し、該蜂が筆の軸中に造巢して結繭せしまでの觀察談を詳述せられ●名和愛吉氏は松蟲の採集にランプのホヤを用ひ巧みに採集する方法を說明し、尚小鳥の害蟲を捕食する有樣を述べられ●谷貞子氏はダンゴ蜂、ヤマ蜂、アカ蜂の區別、トックリ蜂、ゲイトウ蜂の種類に就て研究せられし結果、及ナツアカネの種類に就ての研究談オミナヘシに集まる昆蟲數十種に就ての說明を●棚橋昇氏は蜻蛉の產卵する有樣及卵の形狀を述べ、蔬菜の害蟲シマハムシに就て其習性經過及驅除法を詳述せらる●野口次兵衛氏は螟蟲被害稻の第一回及第二回調査報告、ヨコバイとウンカとの比較、及荳科植物と蜜蜂との關係、郡上郡地方害蟲視察談を報告せられ、尚稻作害蟲並に桑樹の害蟲各種の同種異名を對照し、一覽表に著はして說明し●野田稻司氏は陸稻に就て螟蟲被害の調査報告及ウンカ種とヨコバイ種とを比較研究せし結果を圖に依つて說明し、尚小豆の害蟲サヽゲガメムシ、松の鋸蜂の習性經過及驅除法、桑葉捲蟲の調査談、其他橫蛺類四十一種を標本に就て、膜翅目の翅脈を圖に依つて各其特徵を述べ●福永俊藏氏は甲翅類と膜翅類との比較研究談を實物によりて說明し、尚サヽゲガメムシと蟻との比較談、及キクスヒゴミムシの外部研究談をなし●木村竹藏氏は家蠅の驅除に使用する茸に就てと題し、松茸類似のハヘトリ茸の効能、三重縣地方に於て該茸を應用して蠅の驅除をなす狀況を照會し●越智鐵一郎氏は愛媛縣地方の重なる害蟲と題し、二化及三化螟蟲、浮塵子、黑椿象、夜盜蟲等に就て其被害の模樣及目下該縣に於て行はれつゝある苹樹の綿蟲の藥劑驅除法を照會し、双翅目の翅脈研究談を圖に示して說明し、尚螟蟲被害稻第三回調査報告をなし●佐藤保一氏は東武藝郡地方の害蟲驅除と成蹟と題し。尤も有益なる談話をせられ●青野德治郎氏は愛媛縣に於ける昆蟲方言及該地方へ三化性螟蟲の輸入せし狀況、及桑葉捲蟲の寄生蜂に罹り斃死せる割合、及該蜂に就て研究せられたる結果を報告せられたり。

## ●昆蟲標本陳列館參觀人員

當所常設の昆蟲標本陳列館を、九月中に參觀せし總人員は二萬千九百十二人にして、一日平均八百四十三人弱に當り、內尤も多かりしは廿五日の二千九百六十一人、尤も少なかりしは十四日の五十八人なりき。又十月中に參觀せし總人員は三千七百九十七人、一日平均百四十一人弱に當り、內尤も多かりしは廿七日に於ける四百三十二人、尤も少なかりしは六日の二十八人なりき。

明治三十年九月十日内務省許可

# 昆蟲世界

（明治三十八年十一月十五日發行）　第九卷第九拾九號　（毎月一回十五日發行）

## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題（但季は冬の事）　魯嶽君選

▲和歌　昆蟲亂題（但季は冬の事）　潮音君選

▲俳句　天牛十句　（十一月五日〆切）　三川君選

△投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

ハンノキカミキリの圖

天牛蟲は其種類甚多けれども皆鋭き口器を以て樹木の枝幹を嚙傷す幼蟲亦鋭き口具を有すれども脚を欠き木質部に入りて墜道狀に喰害し一方に小孔を穿ちて蟲糞を脱出するを以て直に此蟲の存否を知るべしかく木質部を喰害するを以て樹木の生育を妨ぐること甚しく往々枯死せしむる一大害蟲なり老熟すれば其孔内に於て蛹となり羽化すれば穴を穿ちて外部に出づるものなり

## 昆蟲ニ關スル繪葉書ノ交換ヲ望ム

岐阜縣大垣町　西濃印刷會社内　河田好葉蟲

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不申及、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

第八十四回月次會（十二月二日）

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

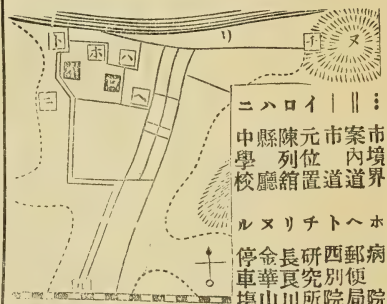
市境界（：）　案内道（‖）　市道（｜）　イ 元位置　ロ 陳列館　ハ 縣廳　ニ 中學校　ホ 病院　ヘ 郵便局　ト 西別院　チ 研究所　リ 長良川　ヌ 金華山　ル 停車場

## ◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所は從來上圖の如く（イ）の位置にありしが今回當市公園内即ち（チ）の位置に移轉せり・又常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）は從前の通り岐阜縣物產館構内にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢

三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十八年十一月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戶　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎



（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

# THE INSECT WORLD.

Aphelochira Nawae Mats.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF

"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL. IX.] DECEMBER. 15TH, 1905. [No.12.

# 昆蟲世界

第九卷第拾貳册　明治三十八年十二月十五日發行　第百號

## 目次 （禁轉載）



（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

## 本所移轉擴張寄附金品領收廣告（第十五回）

一金貳圓也　埼玉縣北足立郡鴻巢村　深井武司君
一金拾五圓也　男爵　松平正直君
一金壹圓九拾五錢　岐阜縣巡査敎習所第百三期授業生　淺野丈太郎君
同　河野三六君
同　渡邊直太郎君
同　堀部淸市君
同　熊澤文治郎君
同　杉岡莊五郎君
同　長屋種三郎君
同　苅谷實義君
岐阜縣竹ヶ鼻分署巡査　篠田幸一君
岐阜縣下呂警察署巡査　藤津廣三郎君
岐阜縣笠松警察署巡査　富田孫四郎君
岐阜縣土岐津分署巡査　和田甫君
岐阜縣揖斐警察署巡査　小島松太郎君
一金壹圓也　滋賀縣師範學校敎諭　淸川一郎君
外十四名

小計金拾九圓九拾五錢也
累計金九百八拾貳圓四拾參錢也
右御寄附相成候に付茲に芳名を掲けて其厚意を謝す

明治三十八年十二月　名和昆蟲研究所

戰後の經營として本誌に一大改良を加ふるの必要は豫て覺悟の所なるが愈明年一月發刊の第一百一號の誌上より如何に變動の現はるゝかを見よ

## ○讀者に謹告す

本誌は明治三十年九月其初號を發刊せし以來幾多の困難に堪へ幾多の障礙を排し茲に號を重ぬること一百明年一月を以て將に第百一號の紀念號を發刊せんとするの運に到りたるは實に當所の光榮とする處なり是れ偏に本誌愛讀者諸君の高庇に由るものにして深く感謝すると同時に第百一號の發刊を機として一大改良を加へ聊か讀者の厚意に酬ゆる所あらんとす讀者亦幸に當所の微意を諒し此紀念號を祝する爲め各自何なりとも御寄稿の勞を吝まざらんことを切望す

明治三十八年十二月　名和昆蟲研究所

本誌第一號發刊以來陰に陽に御助勢を賜はりし諸君に對し毎號本誌を進呈し來りしが明年一月第百一號の發刊と同時に一大擴張を要する場合に立ち到り隨て之れに伴ふ經費を要するも素より微力の當所餘財あるに非らざれば乍不本意今後一切の進呈を廢するの止むを得ざる儀に付豫め惡からず御了察あらんことを乞ふ

明治三十八年十二月　名和昆蟲研究所

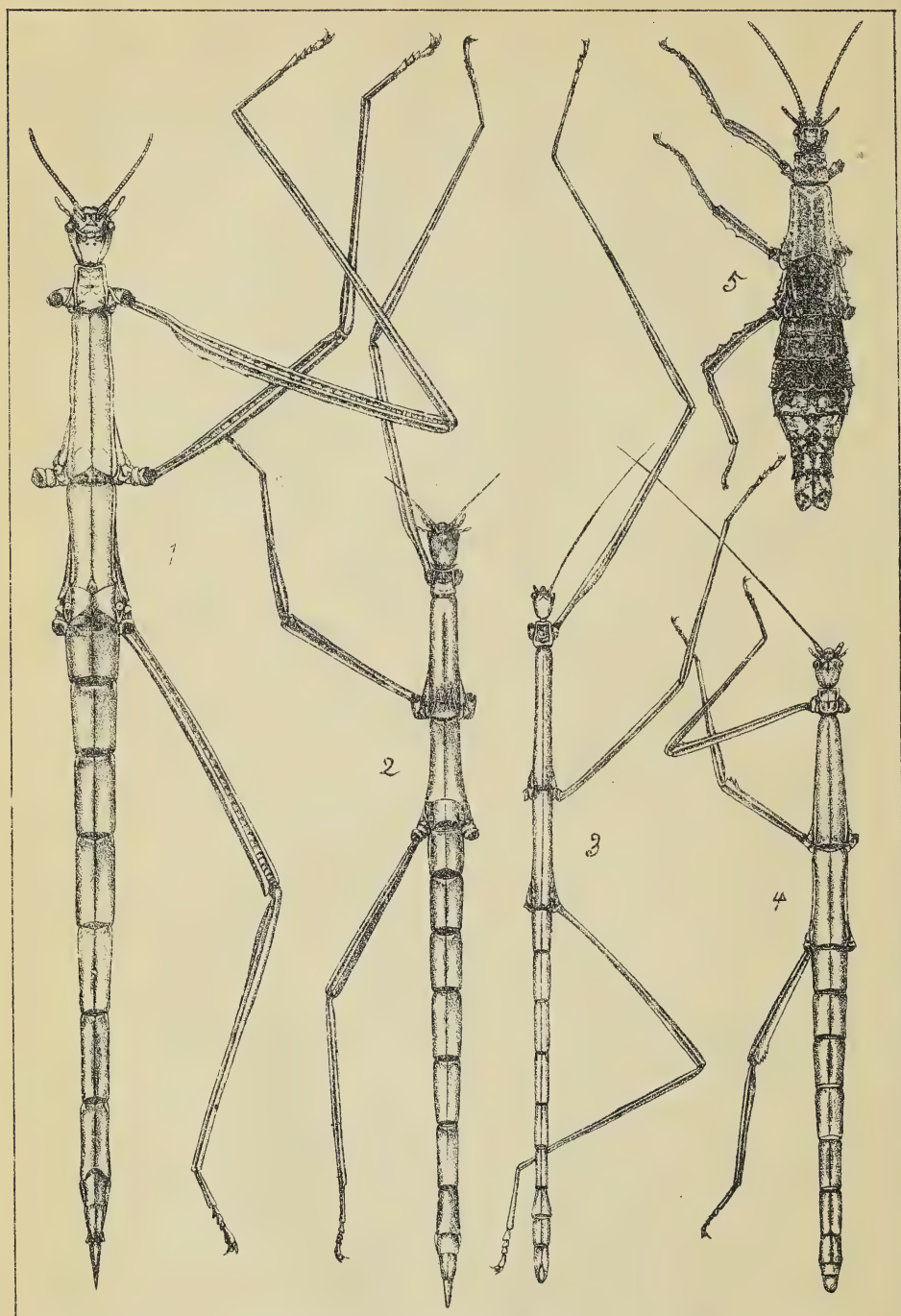
## ●購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

沖繩産竹節蟲五種

# 論説

## ◎歳末の辭

百花香を放ち妍を競へば花虻先づ魁け、麥圃黄變して幾萬の螢火點々星の亂るゝ如く、綠樹滴らんとして蟲界忽ち色めき、蝶舞ひ蜂飛び、蜻蛉は忙しげに快走し、シホヤアブは不意に金龜子を拉し、生存競爭塲裡は一層の激烈を極む。樹上の蟬聲は秋を呼ふて力なく、馬追蟲は燈下に來りて秋を告げ、蟋蟀は秋を名殘りて聲幽に、四山銀色を帶んで萬豸影を止めず、嗚呼歳華匆々流水の如く、明治三十八年も將に暮んとす。惟ふに本年は殊に記憶すべき年にして、難攻不落の旅順は本年の元旦を以て開城せられたり、戰線四十里に亘り、有史以來の大戰として各國の注目せし奉天の大戰に、我軍全捷の快報吾人の耳朶を劈きしは本年三月にあらずや。波艦隊を全滅して世界を震駭せしめ、吾人を狂喜せしめたるは亦正に本年五月なりき。此偉大なる戰捷の光榮を負びて平和克復せられたるも亦此年なり。是れ上は大元帥陛下の御稜威と、外は出征軍人の誠忠と、内は國民一致後援の結果にして、實に國民の忘れんとして忘る能はざる年なり。而して此光榮を無窮に完ふせんことは、國民一同の殊に深く心に銘して、一日も念頭を去らしめず、益國本の培養と國力の充實を圖らざるべからず、之れが經營の道多々あるべしと雖も、農事の改良は尤も重大なる要素にして、害蟲軍の殲滅を圖るは焦眉の急なりとす。然れども飜て

# 學説

害蟲軍情の如何を偵察すれば、未だ容易に平定すべくもあらず、機に乗じ横暴跋扈を逞ふせんとする傾あるは實に感慨に堪へざるなり。宜なる哉、各種の雜誌に若くは新聞紙に登載さるゝ昆蟲の記事は以前に幾倍し、昆蟲書は續々發刊せられ、本年九月に於て昆蟲學雜誌てふ專門雜誌は帝都に產れ出でたり、是皆な世の趨勢の然らしめたるものにして大に喜ぶべき現象なり。本誌亦此間に處して微力を省みず、一意專心征蟲軍の後援に汲々として未だ寸効の擧らざるに、幸に之れが參謀として歡迎せられ、此の忘る能はざる本年本月を以て百號の齡を重ねたるは、實に當所の光榮とする所なり。是れ偏に寄稿家諸士の厚意と、愛讀者諸君の高庇に因るものにして、深く諸士に向て感謝する所なり。今や農民軍は、極力害蟲軍に當るは勿論、出征の勇士は續々凱旋し、其多くは銃を鍬に代へ、劍を收めて捕蟲器を採り、我征蟲軍に應援するの機運に向び、本誌の責任一層の重を加へたるものといふべし。されば來る一月を以て第二世紀の初號を發刊するを好機とし、只管之れが參考に資すべき記事を主として連載し、以て參謀の實を擧ぐるに全力を盡さんとす。是れ本誌の素志にして、常に玆に留意したりしも、將來殊に之に意を注ぐは勿論、從て學說、講話、雜錄、通信、調査、問答、雜報等の各欄に亘りて一大改善を加へ、勉めて挿圖を多くして記事を了解し易からしめ、以て本誌の責任を完ふせんことを期す、諸士夫れ幸に愛讀の榮を垂れよ。

# ◎柑橘害蟲驅除に就き注意を促す

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

現今我邦に於ける柑橘栽培の狀態を觀るに、年を追ふて栽植樹苗數の增加しつゝあるは明かなる事實とす、之れ實に我國斯業の發達を證明するものにして、國家の爲め誠に喜ぶべき現象と謂ふべし。而して今其栽植樹苗數の增加、幷に斯業の發達する傾向に付き考察するに、自ら二途に出づるものゝ如し。即ち一は積年の經驗に依り經濟的に收利を得つゝ、傍ら從來內地に栽植せる種類の改良、及び海外より新に良種の苗木を購入栽植して專ら邦產種との比較試驗を行ひ、之が優劣を慥め斯業の發達を促すべき方向にあり。一は其積年の經驗上顯れたる結果を先輩の栽培家より聞き、或は其狀況を見聞して利潤の普通農作物より收得すべきものに比し多額なるを思慮し、始めて柑橘樹栽植の念起り禁ずる能はず、終に從來の作物に換ふるに柑橘の苗木の購入と成り、栽植の方向を取るもの之なり。夫れ然り、斯の如くにして栽植樹苗數の增加を見、斯業の發達進步するに從ひ自然之に伴ふものあり。何ぞや、曰く果實の增收は勿論なりと雖も、亦吾人の得て喜ぶべからざる所の害敵なり。嗚呼其柑橘樹の生育上障碍を生ぜしむる害敵とは如何なるものなるか、曰く種々ありと雖も別て三大別となし得べし。即ち生理的病症、植物の寄生に原く病症及び動物の加害之なり。此等害敵の爲めには尠からざる損害を蒙むるものにて、常に根、幹、枝、葉、花及び果實等の暗々裡に衰弱に瀕するものあり、或は凋枯に終らしむるあり、或は假令結實を見るも望むべき美果を得せしめざる塲合多々あり、豈に寒心の至りならずや。

如上の害敵中其種類夥多にして、亦加害の程度比較的大なるものは第三の動物中特に昆蟲を以て最とす而して當時各地に於ける栽植樹苗と、之が害敵たる昆蟲との關係如何を觀るに、實に密接の關係を保ちて繁殖しつゝあると云ふも不可なき程なり。見よや彼の貝殼蟲の一種龜甲貝殼蟲の加害の如き只に枝葉

の養液を吸收して樹勢を衰頽せしむるのみならず、延ては細菌の繁殖すべき媒介者となり、爲めに細菌繁殖の結果は枝幹葉の異變を來さしめ、益々勢力を失はしむることを、斯の如き狀態にある柑橘樹は殆んど何れの果樹園にも、或は僅かに庭前に栽植しあるものに於てさへ敢て之を發見するに難からず。而して之が發見に困難なきは、誠に其被害の大なるを意味するものなれば、一層寒心の度を强ふするものと謂ふべきなり。然り而して柑橘樹に加害する害蟲は、前にも述べし如く種類夥多にして、單に此種に限らざるものなれば、年々我國に於ける柑橘栽培家諸士の損害を蒙られつゝあるものを積算せば、蓋し驚くべき巨額に登達するならん、豈に努めずして可ならんや。余は客月好期を得て靜岡神奈川の兩縣に遊び、該地方に栽植の柑橘園に就き實地の調査を試み、意外に加害蟲種の多きを知了し、曾て大阪府下泉北郡の柑橘園に就き、實地調査せし狀態を回想するに及び、益々該樹に對する害蟲驅除の忽諸に附す可からざるの意を强ふしたるなり。特に數年後に到り結果を收めんとすべき稚苗の栽植しあるものに就き調査の結果、害蟲の附着を實見し後患を慮り、一層其意を切ならしめたり、之れ余が柑橘害蟲驅除の實行を促す所以なり。余素より柑橘の害蟲に關し經驗乏しきも今後諸士と共に相提携して以て之が調査に努め、効果を奏せしめんことを期す。若し微意の存する所を察し、幸に入るゝあらば余の光榮とする所なり。

密柑の貝殼蟲の圖
（イ）葉面に附着したるもの（ロ）其雌蟲
（ハ）雌蟲擴大圖

## ◎昆蟲の動作を見て神の現存を認む

米國留學中　中村善次郎

昆蟲世界の發行者名和君より、昆蟲と基督敎とに關し何にか書き送れよとの仰なれども、昆蟲の事に關

し云々するは釋迦に說教、又基督教に關して口を開かんとせば眞正にして唯一、且つ神聖なるローマ公教を辨語するの外なし。然れとも之れは新教々徒の感情を害し、且つ餘り重大過ぐるの感なき能はず、如何せんものと思案しながら書籍室を見回す中、不圖僥倖にも耶蘇組員ホンハメルスタイン師の著にして、「神の現在」てふ一書を發見し、該書冊中より昆蟲の動作を見て宇宙の造主即ち神の現存を証明する事とせり。然れども之れを最初より証明せんには夥しき時間と勞力とを要する故、予の如き忙しき者にはとても望んで得る能はざる事なれば中途より初めんに、昆蟲の事に關し研究に研究を重ね給へる諸氏は、既に己に何れの昆蟲も皆な一種特別の性行を有し居る事を悉知せられ居るならん。例之甲の一族は如何なる事業をなすとか、乙の一種は如何に人類に有益なるか、丙は如何程切に幾何學や二十世紀の測量學や、建築學を應用するや等の如し。此等の事に關して予が云々するは愚の極、然れども予の見聞せし一点を擧げて參考に供せんに、蜜蜂は彼等が收獲せし蜜を貯藏するに適切なる六角形の筒を使用し居るは、凡そ蜜蜂の巣を見たるものは婦女子と雖も知るを得べし。然れども此に六角は如何なる角度を有する六角なるかは唯專門家の知る所のみ。予は玆に專門家の調査せし所を揭げんに、幾何學にて說明するが如く、相隣接する二角の角度の和は百八十度なれば、蜜蜂の作造し居る六角形中の鈍角は幾度、鋭角は何度なるかと云ふに、甲は百九度二十八分乙は七十度三十二分なるを佛人レアムール氏は過ぐる十八世紀中に發見せり。是等二個の角度に關し少しく研究せん。何故に蜜蜂は斯の如く複雜なる端數を有する六角形を使用する哉、此の疑問を解せん前に、「能ふ丈け少量の材料(蠟)を用ひ如何にして筒の兩口を閉し得る哉」てふ事を研究せんに、平坦なる材料の一片を用ては如何てふ思想第一に腦中に浮ばん、然れども平坦なる一片の代りに、或る丸き中凹みの材料を使用せば、材料を要する比例に大量の容積を

求め得るならん。今一層腦漿を搾りて一金字形の材料を代用せば如何と或は言はん、然れども玆に一困難あるを如何にせん、其の困難と言ふは、右方の筒の底は夫れの他の傍を以て同時に左方の筒を閉す樣に隣接し居る筒を建造せざるを得ず、然れども此に目的を達せんには、前述の丸き中凹みの材料や金字形の材料は其の要をなさゞるを如何せん。後等鋭敏なる蜂等は此の難問を解し得て「右方の筒の底を三つの鈍角平行方形を使用して閉す」事とせり。其の適用法は「各鈍角平行方形の二方は六角筒の二方に坐し、他の二方は隣接し居る鈍角平行方形の二方に坐せしむ」斯の如くにして彼等は一の粗なる三傍を有する金字形を組成す、斯く閉ざせし一筒を他の筒に結合すれば、右方を閉す金字形は左方を閉す金字形の閉し能はざる穴を閉して長短なからしむ。然して「能ふ丈け少量の材料を使用して以て能ふ丈け多量の蜜を貯藏」せんには、如何にして此等の材料即ち斜方形を結合せば可なる哉。斜方形は幾何學の說明する如く四角を有し、其の二つの鈍形は相反面して均しく、他の二角は均しき鋭角なり、又隣接し居る二角の和は百八十度なり。彼の有名なる博物學者佛人レアムール氏は、前述の如く蜜蜂の建造せし六角筒を精密に調査し、鈍角は百〇九度二十八分、鋭角は七十度三十二分なるを發見せり。其後マラルヂ氏もレ氏と同樣の結果報告をなせり。其當時レ氏は一問を提出して謂ふ「能ふ丈け少量の材料を使用して以て能ふ丈け多量の容積を有する六角筒にして、其筒底を斜方形の材料を以て閉さんとす、幾何なる角度を取るべきや」と、此の問題を時の數學者ケレグ氏は解して曰く、鈍角は百九度二十六分、鋭角は七十度三十四分なりと。此の二分の差違は孰れか誤りか、蜜蜂の誤りがケニグ氏の誤りか、此の差違を默許する能はずして、スコツトランドの數學者マクローリン氏は精査せしも、ケニグ氏と同樣の答を得て憐れ蜜蜂の敗に歸せんと思ひきや、蜜蜂の天運は拙からずして、と云へば如何なる事の起りしかと云ふ

に、殆んど之れと同時に一隻の船は陸地に乘り揚げ難破して、其船長は海員審判の裁决を受けしに、該船長は對數比例式表の誤謬よりして經緯度を過りしを發見せしと云ふを聞くや、熱心なるマクローリン氏は自已の有せる對數比例式表を精密に調査せしに、果して該船長と同樣の誤謬を發見し、訂正の上自己が以前に報告せし六角筒の角度を再計算せしに、ケニグ氏の誤りにして蜜蜂の計算の正確なるに一驚を喫せりと。博物學の區域內より見れば斯の如く蜜蜂は生れ乍らにして、大學を卒業し立派なる肩書と經驗とを有する人間輩よりも優れる識を有し居る故に、害蟲惡蟲と見ゆる昆蟲も十分調査研究を要す、今度は博物學の域を脫して理屈屋の職務に立ち入らんとす、讀者暫く倦む勿れ。

該蜂は六角形を製作する事を(第一)自己にて案出せしや(第二)他より習得せしや、進化論の如く偶然の出來事は一定の順序方式の義に反す。若し偶然の出來事とせんか、全世界に於ける同種の昆蟲が每季同樣の順序を經て同種の物を作製するの謂れなし。然れば仮りに自已にて案出せしものとせんか、然れば全世界にある同種の蜜蜂皆同樣の筒を作らずして、種々雜多の設計工夫をこらし、或は其奇工を以て人目を驚かし、或は人をして其の工の愚なるを以て抱腹絕倒せしむるものもあらん。若し全世界にある同種の蜜蜂にして、同し六角筒を寸分の差違なくして製出し得るとせば、之れを其蜂屬の性に歸せんのみ凡そ受く者あれば與ふる者なかる可からず、然れば彼蜜蜂が有し居る特性は如何なる者の賜なる乎、或は云はん天然とか自然とか、予は問はん、此に天然とか自然とは如何なるもの乎。第一、物の現在、繼續、及び化合を整理する法の總括なるか、若し法の現存するを認めば立法者を認めざる可からず、物の現在繼續化合法等の立法者を予は神と稱す。第二、偶然か、偶然は前述の如く一定の法則の義に反す。蜜蜂は該筒を設計製造するの術や識を他より習得せしか、若し仮りに彼等は他より斯の如き立派なる識

を得たるとせば、彼等の教師は全世界何れの所にも現存して彼等を教授し、彼等をして自己が習得せし術を寸毫の差違をなさずして實行せしむる程の能力を有し居らざる可からず。否ざれば或る地方にては彼の教授をうけずして、自己の蜜を貯ふるに他の方法手段を取るに至るべし。斯の如き師を何れにか求めん、斯の如き師は人類間に求むる能はざるは識者を待たずして明かなり。斯の如き能力を有する師は天上天下唯一の神なるのみ。斯の如き蜜蜂や其他昆蟲の爲せし人目を驚す程の動作を見て、或は云はん、彼等は自己の腦漿を搾りて案出せしものと。否々彼等は唯正實に自然の法、即ち神の彼等に命じ賜いし則を遵守し特種の事業に從事し、以て神を間接に讃美し居るのみ。玆に於て予は諸氏に望む、諸氏は昆蟲の動作や生理學上の萬事に就き十分の研究をなし、以て眞正なる神を發見し、神の組織し賜いし眞正なる宗教を奉し、直接に神を讚美し玉はん事を。

予の親愛なる名和君の求めを辞する能はず、淺學不文の身をも省みず拙らぬ事を陳べ、貴重なる紙面と時間を費さしめ以て識者の教示を仰ぐ。

## ◎滿洲の蚊屬調査復命

明治三十八年九月六日滿洲の陣中に於て　森　宗　太　郎

。編者曰く此一節は同氏が第一師團軍醫部の命を受け同師團宿營地區域内に於ける蚊屬の調査をなしたる復命書なりとて同氏より送られたるものなるが參考の爲め玆に掲ぐ

明治三十八年七月十四日、出征後備第一師團軍醫部の命を受け、同八月三十日に至る當師團宿營地區域内に於ける蚊屬アノフエーレスの分布、並に雌雄の比較、及アノフエーレスとキューレックスの比較踏査に從事したれば、玆に實査に得たる所を復命し聊か參考の資に供へんとす。抑も昆蟲類にして吾人の身邊に集ひ來るもの丶多くは、吾人の生存上に害を及ぼすものなることは夙に世人の認むる所にして、殊

に蚊屬の如き吾人の血液を吸ふものに至ては甚だ惡むべく、就中アノフエレスの麻拉里亞病毒の媒介

第一表

| 地名 / 雌雄 | 新兵堡 | 邊沿 | 計 |
|---|---|---|---|
| 雌 | 二十八頭 | 五十六頭 | 八十四頭 |
| 雄 | 七十二頭 | 四十四頭 | 百十六頭 |

右表は百頭に對する比例にして、我內地に於て飼育研究せし者に賴れば、比較的雌蟲の多きを常とせり

者たるを認めらるゝに至ては實に恐るべき者にして、大に之が習性を研究し經過を實査し、以て此恐るべき害蟲を驅逐し之が撲滅の方法を講ぜざるべからず、之れ此蚊屬に就て學者の大に研究せられつゝある所以なり。アノフエレスは從來日本に於ける羽斑蚊、肉叉蚊等と稱せらるゝもの、原屬名にして、双翅目蚊科羽斑蚊屬アノフエレスなりとす。此屬夥多の種類ありて其分布頗る廣く、殆ど全世界に蔓延するを以て各地に於ける氣候、風土に從ひ、所謂自然陶汰の結果變遷に變遷を重ね、遂に目下の多種類を見るに至りしものなること他の昆蟲類に比照して明なり。當地方に於ける（蹈査地域即ち清國盛京省北部）アノフエレス（羽斑蚊）も亦飼育其他の實査に依れば該屬の特徵を失はざるが如しと雖も、

第二表

| 區域 | 地名 | 「アノフエレス」の多少 | アノフエレスキユーレックス比較 | 地勢 | 水の種類 溜水 | 緩流水 | 急流水 | 水の冷溫 冷水 | 溫水 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新兵堡以東約二里間 | 新兵堡 | 少 | キユーレックス多 | 傾平等 | 少 | 少 | 少 | 少 | 多 |
| | 興京 | 多 | アノフエレス多 | 平 | 多 | 多 | 少 | 同 | 同 |
| | 西武夫甲 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 東武夫甲 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 東昌 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 新兵堡以北約六里間 | 前倉 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 後倉 | 稍少 | アノフエレスキユーレックス等 | 傾平等 | 稍少 | 少 | 多 | 稍多 | 稍少 |
| | 後倉東約一里の村 | 最少 | キユーレックス多 | 傾 | 最多 | 最少 | 同 | 多 | 少 |
| | 旺清 | 少 | 同 | 傾平等 | 少 | 少 | 多 | 少 | 多 |
| | 四道講 | 最少 | アノフエレス多 | 傾 | 最少 | 最少 | 同 | 最多 | 最少 |

備考　地名の欄下は當該地の地勢、水の種類水の冷溫にして蚊の多少に至大の關係を有するものなれば夫を示せしもの以下同じ

前述の如くなるを以て其種類或は意外の異種なるやも知るべからず、然れども此等の研究は他日鏡下の檢索に讓り、今茲に肉眼を以て調査し得たる所を記さん。

(蚊屬アノフエレスの習性經過及雌雄の比較)　成蟲は淡黑色にして肢は炭色、最も發達せる上翅一双と、退化せる棍棒狀の一對の下翅を供ふ。觸角口具は雌雄に依りて大に差異あり。即ち雌蟲は哺乳動物の血液を嗜好し、就中吾人々類の血液を最も嗜好す、故に口具は自ら堅固にして鎗狀を成し、觸角は比較的短かき糸狀をなす雄蟲は之に反し、常に叢中に在て露水を嘗め、以て生存せり。故に口具は大きく且つ毛を供へ、觸角比較的大形にして羽毛狀を形成す。之によりて一見雌雄兩性の區別を容易ならしむ。又吾人の血液を吸收する所の最も憎むべきものは、其雌蟲のみなることを判定せしむ。今當地方に於ける雌雄比較數の實査に於て、別表第一の比例を得たり。

第三表

| 區域 | 地名 | アノフエレス多少 | アノフエレスキユーレツクス比較 | 地勢 | 水ノ種類 | | | 水の冷溫 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 溜水 | 緩流水 | 急流水 | 冷水 | 溫水 |
| 大陽岑以北約四里間 | 大陽岑 | なし | なし | 傾 | 少 | 少 | 多 | 多 | 少 |
| | 二道河子 | 少 | アノフエレス多 | 傾平等 | 同 | 同 | 同 | 稍多 | 同 |
| | 于井溝 | 稍多 | アノフエレスキユーレツクス等 | 平 | 多 | 同 | 稍多 | 少 | 多 |
| | 西山城子 | 多 | キユーレツクス多 | 同 | 同 | 多 | 少 | 同 | 同 |
| | 南山城子 | 最多 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 最少 | 同 |
| 大陽溝以南三里間 | 大陽溝 | 多 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 三道河子 | 多 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 少 | 同 |

蚊屬の交接は多く黃昏に於て行はれ、產卵も亦同時刻に於て水面に一個づゝを產附し、此卵三、四日にして孵化す。此幼蟲(即ち孑孑)は水際の水草中にありて浮沈するを常とせり。其水面に浮ぶや腹部末端の氣門より空氣を呼吸し、其沈むや水中の水垢を食し三、四日を經第一回の脫皮をなす。又同時日を經て二、三、四回と脫皮を重ぬること普通昆蟲の如くにして蛹化す。此蛹は常に水面に浮ひ胸部兩側に供ふ

る氣門を水面上に出して呼吸し四、五日にして羽化す。故に此蚊の一生代は二十四、五日にして經過す。

### (アノフエレスとキユーレックスの識別並に比較)

幼蟲(即ち孑孑)の水中に浮沈するの時、其水面に浮かべる樣を見るに、アノフエレスは常に體を水平の位置に取り、其他の種類(キユーレックス及他種を含む)にありては頭部を下にして、水面と四十五度の角度を保ちて浮ぶを常とす。又成蟲の壁其他に止まるや、アノフエレスは其壁面に對し常に約四十五度の角度を成して體を保持し其他の種類に在ては殆ど壁と並行の位置を保つを常とす。

第四第五表

| 區域 | 地名 | アノフエレス多少 | アノフエレスキユーレックス比較 | 地勢 | 水の種類 溜水 | 水の種類 緩流水 | 水の種類 急流水 | 水の冷溫 冷水 | 水の冷溫 溫水 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 四道溝岑以北約三里間 | 東南嶺 | 最少 | アノフエレス多 | 傾 | 少 | 少 | 多 | 多 | 少 |
| | 小錯草溝 | 少 | キユーレックス多 | 傾平等 | 同 | 同 | 稍多 | 少 | 多 |
| | 灣甸子 | 稍多 | アノフエレス キユーレックス等 | 同 | 多 | 多 | 少 | 同 | 同 |
| | 南邊溝 | 多 | アノフエレス多 | 平 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 灣甸子以東約二里間 | 刊椽溝 | 稍多 | アノフエレス キユーレックス等 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 四平街 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 大陽嶺 | 少 | アノフエレス多 | 傾 | 少 | 少 | 多 | 多 | 少 |
| 四平街以東約二里間 | 石廒子 | 稍多 | 同 | 平 | 多 | 多 | 少 | 少 | 多 |
| | 地東子溝 | 少 | 同 | 傾平等 | 少 | 少 | 多 | 多 | 少 |
| | 滾馬嶺 | なし | なし | 傾 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 滾馬嶺以北向陽鎭約五里間 | 衮馬嶺 | なし | なし | 傾 | 最少 | 少 | 多 | 多 | 最少 |
| | 西林子 | 少 | アノフエレス多 | 平 | 稍多 | 多 | 少 | 稍多 | 多 |
| | 五鳳樓 | 多 | キユーレックス多 | 同 | 多 | 同 | 最少 | 少 | 同 |
| | 徐宗店 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 邊沿 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 于河子 | 少 | アノフエレス多 | 同 | 同 | 同 | 同 | 多 | 少 |
| | 南北橋 | 最多 | キユーレックス多 | 同 | 同 | 同 | 同 | 少 | 多 |
| | 向陽鎭 | 多 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |

以上の二項はアノフエレスと其他の類とを識別する最も好個の特徴にしてアノフエレスとキユーレ

ツクヌの分布比例は分布調査表に揚けたり。蛹の羽化するは必ず一定時なしと雖も、黄昏前二、三時間の内に於て最も多く羽化し、少時叢間に潜伏して後飛翔す。其飛翔するや最も嗜好物たる吾人の臭氣を嗅き索めて、漸く吾人の皮膚を襲ふ、之れ黄昏時に於て蚊の襲ひ來るもの多きを見る以謂なり。越年は人家或は叢中に於てし、翌春出て繁殖す。

（分布實査）　蚊屬の分布は苟も人類の生活する所にして繁殖を見ざる所なく、之を我日本に於て觀るも、南は熱帶亞熱帶の臺灣、北は亞寒帶の北海道に迄繁殖するのみならず、內地に比し却て臺灣、北海道に多し。之れに由て之を觀れば、普通昆蟲は幼蟲時代に於て氣候の激變により死するもの多しと雖も此蚊屬の幼蟲は水中に成育するが故に、外氣の感動氣候の制裁を受くると尠なきに由る者なるべし然れども其成育する水の溜水なると流水なるとにより、又水の冷温により其成育に大なる關係を有す、今回踏査せる區域內の各地に於ける分布の狀況を、第二、三、四、五の四表として實査の成績を揚げたり。以上四表の示す所によるも、鬱蒼たる林間の澄水冷清氷水の如く、滾々たる溪流大傾斜の地を流るゝ水（小なる溝の如き）岩間に湧ける清泉の如きは彼の蚊屬の食すへき水垢なく、成育に適せざるや明にして古來氣清く水澄める山鄕に在て麻拉里亞病に罹るもの少きは偶然ならず。今踏査區域に於ける各地に之を又實見し得たり。又山を限り四區域とせしも亦此故なりとす。

## ◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査（一五）

名和昆蟲研究所員　名和正

黒條蜻蛉科（Sialidae）　脈翅目に屬し頭は大にして蛇頭狀を呈し、觸角は鞭狀又は鋸齒狀をなし、單眼は二個を有するものと之れを欠くものとあり。翅は半透明にして、後翅の基部は幅廣く、其內緣の腹部

に接する處は靜止の際扇子狀に疊まる。幼蟲は水中に棲み、俗に孫太郎蟲と稱するもの是なり。今回左の一種を得たるのみ。

(一九二)オホキスヂカゲロウ(Neuromus sp?)　体長一寸二分乃至一寸五分、翅の開張二寸八分乃至三寸四分、体色黃褐にして觸角鞭狀をなし黑褐なり。複眼は黑褐にして黃色の單眼三個を有す。大腮は發達して黑し。前胸は稍長くして、其兩側は複眼の後方より連續したる太き黑褐縱帶あり、翅は半透明にして脈條黃色を呈す。脚は黃褐なれども腿節端は暗色に、脛節の大半及跗節も稍暗色なり、跗節は五節より成り、爪は赤褐にして雄の腹端には角狀の附器あり。今回郡上郡和良尋常高等小學校高等二學年、竹村半六氏の採品一頭を送られたるのみ。

擬蟷螂科(Mantispidae)　脈翅目に屬し、形蟷螂に似たるものにして單眼を欠き、前胸は長く翅は透明なり。前脚は異樣に發達して鎌狀の捕獲肢に變ず。異形變態をなすものにして、幼蟲は蜘蛛の卵を食す今回左の一種を獲たるのみ。

(一九三)カマキリカゲロウ(Mantispa sp?)　体長七分内外、翅張一寸七分内外を算す。頭部黃褐にして、觸角糸狀をなし暗褐を呈す。前胸は細長くして橫皺多く、黃色を帶びて、頭部に接する處褐色なり。翅は透明にして脈條暗褐を呈し、前緣部は前後兩翅共に縱に細長く赤褐色を帶ぶ。前脚は其基節甚長く、腿節は著しく膨太して、內方に鋸狀刺を有すること蟷螂と異ならず、跗節は一の爪に變ず。中後の兩脚は細くして黃色を帶び、跗節は五個より成り、第一跗節は長く同筒狀をなせり。大野郡灘、吉城郡古川の兩尋常高等小學校より各一頭つゝを送られたり。(五十九號口繪第八圖參看)

草蜻蛉科(Chrysopidae)　脈翅目に屬し、觸角鞭狀にして單眼を欠き、体は普通綠色を呈し、翅は透

明にして弱く、前縁脈と亞前縁脈との間にある横走脈は單一なり。幼蟲は蚜蟲を食す。今回の採品は左の一種なり。

（一九四）クサカゲロウ（Chrysopa perta L.）　体長三分内外、翅の開張八分乃至一寸、体は綠色、觸角鞭狀にして黃色を呈し、複眼は眞珠樣の光輝を放つ。翅は透明にして綠色を帶び、脚は細く黃色に、跗節は五個より成り、爪は短く赤褐色を呈す。幼蟲は蚜蟲を食し、老熟すれば腹端より糸を出して長一分五厘内外の白色橢圓形の繭を營み其内に蛹化す。世俗優曇華と稱するは此の成蟲の卵なり。今回表示の如く一市九郡に於て獲られたり。

擬草蜻蛉科（Hermerobiidae）　脈翅目に屬し、觸角糸狀にして連鎖狀をなし、三個の單眼を有するものと單眼を欠くものとあり。前縁脈と亞前縁脈との間にある横走脈は叉狀をなし、翅の中央は網狀脈を有するあり。今回左の四種を獲られたり。

（一九五）カスリクサカゲロウ（Hemerobius sp?）　体長二分五厘、翅張六、七分体褐色にして觸角糸狀をなす。翅は稍褐色を帶びて前翅には微小なる褐斑を有し、後翅の先端に近き中央の縱脈は黑褐なり。肢は細くして黃褐、爪は赤褐なり。今回加茂郡黑川尋常高等小學校尋常科一學年、加藤敏一氏の採品一頭を送られたり。

（一九六）カスリヒロバカゲロウ（Osmylus sp?）　体長四分内外、翅張一寸六分内外、体暗褐にして頭は黃褐を呈し、觸角暗褐なり、前胸背は黃褐、其兩側面は黑褐をなす。翅は廣くして脈條褐色を帶び、微小なる暗褐色斑あり。肢は黃色にして短く、爪は褐色なり。今回郡上郡上保尋常高等小學校高等科第二學年生、原重朗氏の採品一頭を獲たるのみ。

(一九七)マダラヒロバカゲロウ(Osmylus sp?)　体長六分五厘、翅張一寸七分内外、体黒色にして額面褐色を帶び觸角黒褐なり。前胸稍細長く、四翅廣くして脈條褐色を帶び、前翅には多くの黃色斑紋を有す。後翅は先端の前縁に褐色斑あり。肢は黃褐にして、爪は褐色を帶び短し。今回大野郡巣俣尋常小學校四年生、林健三郎氏の採品一頭を送られたり。

(一九八)シラフヒロバカゲロウ(Osmylus sp?)　体長五分五厘、翅張一寸九分、体黒褐にして頭部は淡黒、觸角黒色糸狀を呈し、黃褐の單眼三個を有す。前胸細長く其背面は色稍淡し。翅は廣くして暗褐を帶び、前後兩翅共翅縁に多くの黃白斑紋を有す。肢は暗黃褐色にして細し。岐阜地方にては未だ獲たることなき種にして、今回益田郡西尋常小學校第一學年、下林あい子氏の採品一頭を送られたり。

擧尾蟲科(Panorphidae)　脈翅目に屬する一科にして、四翅膜質同形をなし、横脈少なく、三個の單眼を有し口部は垂直に延長して口吻狀となり、雄は尾端に鋏子狀の附器を有し、常に之を上方に擧ぐ、此科に屬するものは左の二種を獲られたり。

(一九九)シリアゲムシ(Panorpa japonica, Thunb.)　体長六分乃至六分五厘、翅の開張一寸二分乃至一寸四分、体は光輝ある黒色にして頭小さく、觸角鞭狀にして細長く黒色を帶ぶ。口吻は長く垂下して其先端に咀嚼口を有す、四翅共に内半は透明に脈條暗褐を呈し、往々褐色の小斑あり。外半は暗褐にして其中央に透明斑を有す。肢は暗黃色にして細長く、脛節端には二刺あり、跗節は五個より成りて稍黒味を帶び、爪は短く鋸歯狀をなす。雄に限り第三腹節の背面後縁の中央は後方に突起し、其縁には黃色の粗毛あり。鋏子の基部には各一個の角狀突起を有す。今回養老、大野の兩郡に於て獲られたり。

(二〇〇)アカイロシリアゲムシ(Panorpa klugi, M'L.)　体長四分乃至五分、翅張九分乃至一寸五厘、

体黄褐にして稍赤味を帯び、頭黒く觸角亦黒くして鞭狀をなし、口吻は黄褐其先端に口を開く、四翅半透明にして稍黄色を呈し、翅端は暗褐に、其稍内方に同色の横帯あり。内方には小褐斑ありて其數一定せず。雄に限り第三腹節の背面後縁の中央は、後方に突起したること前種に異ならず。肢は黄褐にして細長く、爪は鋸齒狀をなす。此種は最も普通にして。今回海津、養老、安八、本巣を除くの外、一市十四郡に於て多數を獲られたり。今脈翅目の採品を表示せば左の如し。

| 番號 | 蟲名 | 岐阜市 | 稲葉郡 | 羽島郡 | 海津郡 | 養老郡 | 不破郡 | 安八郡 | 揖斐郡 | 本巣郡 | 山縣郡 | 武儀郡 | 郡上郡 | 加茂郡 | 可兒郡 | 土岐郡 | 惠那郡 | 大野郡 | 益田郡 | 吉城郡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一八三 | ウスバカゲロフ | — | — | — | — | — | 一 | ○ | — | — | — | 一 | 一 | — | — | — | — | — | 二 | 二 |
| 一八四 | コウスバカゲロフ | — | — | 一 | — | — | — | ○ | — | — | 一 | 六 | — | — | — | — | — | — | 一 | — |
| 一八五 | ホシウスバカゲロフ | — | — | — | — | — | 一 | ○ | — | — | — | 一 | — | 一 | — | — | — | — | — | 一 |
| 一八六 | マダラウスバカゲロフ | — | 一 | — | — | 一 | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — |
| 一八七 | カスリウスバカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 二 | — |
| 一八八 | コカスリウスバカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — | — | — |
| 一八九 | オホカスリウスバカゲロフ | — | 一 | 二 | 一 | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | 一 | — | — | — |
| 一九〇 | ツノトンボ | 二 | 一 | — | — | — | 三 | ○ | 一 | 二 | 一 | 七 | — | 一 | 一 | 三 | 二 | — | — | — |
| 一九一 | キバネツノトンボ | — | 一 | — | — | — | — | ○ | 一 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一九二 | オホキスヂカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一九三 | カマキリカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一九四 | クサカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一九五 | カスリクサカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一九六 | カスリヒロバカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 一九七 | マダラヒロバカゲロフ | — | — | — | — | — | — | ○ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

| 一九八 | シラフヒロバカゲロフ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ○ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | 一 | ｜ | ｜ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一九九 | シリアゲムシ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | 一 | ○ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ | 一 | ｜ | ｜ | ｜ |
| 二〇〇 | アカイロシリアゲムシ | 一 | 一 | 一 | ｜ | ｜ | 多 | ○ | 一 | ｜ | 三 | 多 | 五 | 多 | 六 | 三 | 多 | 多 | 多 | 七 |

## ◎鳴く蟲に就て（十二）

名和昆蟲研究所　谷　貞子

左に掲ぐる螽斯、蟋蟀類は、元第一回岐阜縣長期害蟲驅除講習生たりし大橋由太郎氏が、沖繩縣に於て採集せられたるものにして、本州の種と異ならざるものもあれども、又内には珍種も混じ居る事なれば今同氏の許を得て、各々こゝに記すことゝはなしぬ、尙此頃竹井繁滿氏より當所に送られたるコバネコホロギは、未だ記載したることなき珍種なれば併て玆に錄す。

（一）キリギリスの變種（Gn? sp?）　体長雄は一寸二分五厘、翅は長くして其丈一寸四分、腹部より長きこと六分、後肢は著しく大形なり、該種は本州産のキリギリスと別種なるやもはかられざれども、こゝには變種として記しおく事とす。

（二）ウマオヒムシ（Locusta elongata L）　雌は本州産より体僅かに肥滿するのみ、されば全く變種ならんと信ずるも或は別種なるやも計られず、こゝには變種として記しをく事とす。

（三）サヽキリ（Xiphidium melanum, D.H.）　雌は本州産と異ならず（第九十四號參看）

（四）ヒメサヽキリ（Xiphidium maculatum Legouill.）　雄雌共に本州と産異ならず（第九十四號學說欄並に第五版第三圖參看）

（五）クダマキモドキの一種（Gu? sp?）　雌は本州産より小形にして体長九分、翅は前後共に短かくして其長さ一寸三分五厘、産卵器は其基部は小形、幅狹くして長く薙刀狀なり。該種は本州産の變種なるやも計られざれども、こゝには別種として記載す。

(六)ヒメクダマキモドキ(Phaneroptera nigo-antennata Brunner)　雌雄共に本州産と異ならず（第九十五號學説欄、並に第五版第二圖參看）

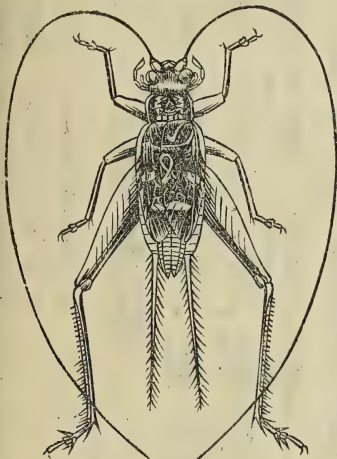
(七)クビキリバツタ(Conocephalus Thunburgi. Stal.)　雌は体長一寸一分五厘、褐色種にして其翅は長く、前翅は一寸七分あり、産卵器は褐色にして長さ七分五厘あり。雄蟲は綠色にして本州産と異ならず

(八)タイワンクツハムシ(Gn? sp?)　綠色と褐色との二形あり。(第九十五號學説欄參看)

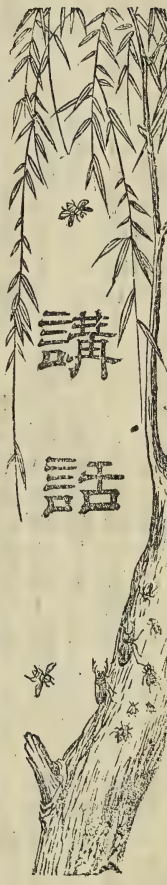
(九)エンマコホロキの一種(Gn? sp?)　雌雄共に本州産に比すれば頭やゝ長く、顏面に斑紋を有せず。前翅は其幅廣く、後肢の脛節の刺は短くして其數少なし、雌は産卵器短かく其長さ四分八厘あり。

(十)マツムシモドキ(Gn? sp?)　本州産と異ならず。(第九十八號學説欄並に第十版第八圖參看)

(十一)ヤマトスヾの一種(Gn? sp?)　本誌第九十八號の學説欄に記載せし該種と其色彩形狀を異にせず其体長一分三厘(第十版第七圖參看)

(十二)マダラコホロギ(Gn? sp?)　体長雄八分、体褐色を呈し、頭部は其色少しく濃くして光澤あり。頭頂は突出し、複眼卵形にして濃褐なり、觸角褐色にして長さ二寸餘、前胸背は方形にして褐色の短毛を密生し、不判明なる濃褐斑を有し、兩側の下緣は暗紅色をなせり。前翅は長さ五分暗褐色をなし、黄色の斑紋を有せり。特に前緣に近く黄色縱條あり、前緣部の脈條黄色をなす。後翅は長くして前翅の外に出ずること二分、腹部は大形にして灰褐色毛を密生す尾狀突起は褐色にして長さ六分五厘あり。肢は各々褐色を呈し不判明なる微小斑を有す。

マダラコホロギの圖

(十三)コバネコホロギ(Gn? sp?)　体長九分五厘、体は光輝ある黒褐を呈し、頭部は漆黒色にして顔面の中央に褐色斑あり、複眼は褐色にして卵形をなし、觸角は其色濃褐色なり。前胸背は矩形にして頭部より僅に其幅狹く、漆黒色を呈し、前翅は長さ二分五厘其先端切れるが如く、前縁は灰色なり。腹部は漆黒色にして光澤を有し、肢は各々褐色各脛節は濃褐なり。該種は宮城縣にて採集せられ、竹井繁滿氏の寄贈せられしものにして雌は未だ標本を獲ず。

# 講話

## ◎沖繩昆蟲採集談

岐阜縣安八郡　大橋由太郎

編者曰く本誌前號に照會せし如く、同氏は去月初旬歸省せられ、同九日來所して該地方の昆蟲に關する狀況を話されたれば、本欄に收めて讀者に照會することゝなしぬ。

私は御存じの通り本年八月より三ヶ月の間、昆蟲採集の爲め琉球へ旅行致しまして本月初めに歸省致しましたが、旅行中は度々御通信申上る考でありましたにも係はらず、色々の不便の爲め碌々通信も得致さず甚だ失禮致して居りましたから、本日其れ等の御詫旁御邪魔致した樣な次第であります。處が通信を怠つた代りに此處で其情況を話せとの事でございますから、辭するに言葉なく茲に其大体を申上げ樣と存じます。若し幾分御參考にもなることがありますれば望外の仕合で御座います。初め私が琉球地方へ採集に行かうと思ひ立ちましたのは外ではありませぬ、彼の地は同じ日本とは申しながら非常に本島とは氣候が違ふて居るから、自然動植物にも異つたものが多いのです、故に昆蟲採集に行つたらさぞ珍らしいものが採れるであらふと思ひまして、つい出發することに決心したのであります。そこで八月一日に神戸から滊船に乗りまして行くこと二晝夜で鹿兒島へ着きました。そこで一寸上陸して採集を初めました處が、此の岐阜地方には產せぬナガサキアケバとかモンキアケパとか其他種々珍らしいものが採

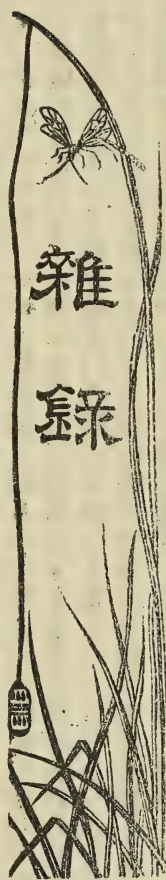
れまして、中にも蜻蛉類には非常に珍らしいものが手に入りましたから大に愉快に思ひまして、船の都合で直に沖繩の方へ赴く事になりましたが、一晝夜で大島へ着きました。最早こゝは鹿兒島とは大分其趣が異つて居りまして、ツマベニシロテフなども此處で初めて採りました、其他ナガサキアゲハも採りましたが、鹿兒島のそれと比較致しますと餘程白みを帶んで居ります。又斑紋蝶等の大變變つたものも居り、植物では熱帶地方に產するガヅマルなども此島で初めて見受けました。それから又一晝夜船で參りまして沖繩の本島那覇と云ふへ着きましたが、此處は又大島とは余程異つて居まして先づ其農業の事を申しますれば、水田と申すものは極めて少なく大概畑許りなので、作物は多く甘藷と砂糖黍とです、此の砂糖黍には蚜蟲や蝗蟲類が非常な害を與へて蝗蟲が多く發生しますと殘らず其葉を食害して、到る處一葉の青を餘さずといふ有樣じやそうです。又甘藷には蟻象鼻蟲と云ふが居りまして一割以上は其爲めに害せらるゝと云ふ事です、其被害の甘藷を見ますと丁度蓮根の樣に一面に穴があいて居ます。されば其筋よりは色々と之れが驅除豫防を奬勵されるのですが土人等は少しも驅除といふ觀念がないのです私は試に其甘藷を調べて見ましたに、中に幼蟲も居れば蛹も居ると云ふ始末で一つの中に中々澤山居ります。又夜分火を點して畑へ行つて見ましたが、夜分は成蟲は葉の上に澤山止まつて居ります、又時々燈火を慕ひて屋內へたちこみます、沖繩では此の甘藷が常食でありますから、內地の螟蟲、浮塵子の如く大害蟲として居るので御座います。丁度私は此の那覇に六日間滯在して蟻象鼻蟲やイナゴ其他アヲタテハモドキ、タテハモドキ、シロオビアゲハ抔を採集致しましたが、外には別段これといふものも採れませんでしたから國頭へ行く事に致しました。この那覇から國頭迄は凡そ十七里斗御座いまして、其の途中那覇から七里斗行つた所のヲンナといふ所で少し變つたものを採りました。其翌日國頭郡の名護へ着きまして先づ農學校へ參り校長黑岩先生に御目に懸りました。其農學校では本年四月より昆蟲の研究を初めて幸い好都合であるから本校からも一人助手を採集に出さうと申されまして、大に便宜を得まして助手の方と共に採集に行きました。何分あちらでは宿屋とてはありませぬから、食物から蚊帳の樣なもの迄一切持つて行かなければならぬので、隨分豫期以上の困難もございました。此の名護から三里斗り隔つてをるモトブと云ふへ參りましたが、別段好成蹟も得られませんでしたから、又そこから一里斗りあるナキジンと云ふへ參りました。こゝでオホゴマダラ抔を採りましたが、餘り獲物もございませんでしたから歸る事に致しまして、其歸途松原を通りますときに非常に變つた玉蟲を澤山採りました。そ

れより私は名護に滯在して採集する事にきめまして、毎日農學校の西の方にある低い山の樣な所へ採集に參りましたが、こゝでは沖繩に居る大概の昆蟲が採集し得らるゝのです。又其近傍に名護岳と申して少し高い山が在りますが、其處も中々昆蟲が澤山居ります。然し此時は八月二十何日といふ頃で非常に暑い爲めに十分の採集も得致しませなんだが、ゴシキホタル、イシガキテフなどを得ました、こゝに滯在する事三週間程で御座いましたが、これより台灣へ參る考へでこゝを立つて那覇の方へ參りました、其途中のチヤタンと申す處で内地のモンシロテフの如きものツマベニシロテフ、ゴシキホタル等をも採りました。それから那覇へ着きましたが、折惡しく台灣行の船はありませぬ。然し八重山へ參る船がありましたから、それに乘つて一晝夜にして宮古島へつきました。こゝで又上陸いたしまして一日採集を致しましたが別に異つたものも居りませんでした。然し椿象の面白いものを數種とりました。此處には砂糖黍を食するバツタが非常に多くて、一寸捕蟲器を動しますと鳥のたつ樣な音が致します。此の島は元は甘藷を作りましたが、先に申した蟻象鼻蟲の爲めに大害を受けるから、遂に甘藷を廢めて砂糖黍を作る樣に致したと云ふことですが、今又此バツタの發生を見て私は實に心膽を寒からしめたのであります、然し何分土地の割合に人口が少ないから、蟲害の爲めに作物がとれないと、其土地を捨てゝ他の土地を開墾して植付くると云ふことでございます。私は其翌日石垣島の八重山へ着きましたが、生憎此日は雨天でございましたけれども、まづ其邊の樣子を見ようと思ふて山の邊へ參りました所が、雨天にも拘はらずホタルガ、リウキウアサギマダラ等の飛で居るのを見まして採集の念切りに動きましたけれども雨にぬれますと病氣になるのです、例へば其雨が体にかゝりますと体が赤色になりまして、腫物の樣なものが出來て發熱致します、これを風土病と稱へて少しく重くなると往々「かたわ」になると云ふことです。であるから其日は採集を止めまして天氣の好くなるのを待つて採集致しました。此地は非常に昆蟲の多い處で那覇の方よりは餘程變つたものが居ります、此處にて澤山採集しまして、其中に臺灣行の船が來ましたから乘らうとしたけれども「ハシケ」の爲めに乘後れました。故に又引返して此度は測候所に於て世話になり。暫く滯在して甘藷の害蟲を調べましたが。蟻象鼻蟲の害は中々甚しいです。聞けば久しき以前より害を受けて、現今は追々甚しくなつたと云ふ事です。其中に又臺灣行の船が來たから急いで行つて見ると、客船でないから乘せぬと云ふ始末で、遂に殘念ながら臺灣行は見合せて歸省することに致しました。臺灣へ行く事の出來なかつたのは返す返す殘念に思ひますが。さる代り沖繩の方は幾

分詳しく調べましたから、却て幸福であつたかも知れませぬ。此の旅行中に言葉の通じないのには一番閉口致しましたが、若し皆様御出になりましたら學校生徒に話せば大概言葉が通じます。又採集に八重山が一番よい場所であらうと存じます。此の竹節蟲（口繪にあるもの）は名護「シンジコ」那覇等にて採集したものですが、隨分內地とは變つたものが澤山居ります。併し何分短時日の旅行採集でありまして充分の調査も出來ませんでしたが、大体私の見た處は右申上げた樣な次第でございます。

## ◎昆蟲文學　（二十四）

末花の 合歡にひぐらしなく夕　琅々
ひぐらしや 雜木の廣き 渡し小家　同
ひぐらしや樹々暮れて池の水明り　同
ひぐらしや 典藥寮の 椎木立　一樂
ひぐらしや 杉皮をむく 宮男　同
ひぐらしや 畝傍の山の 宮普請　同
ひぐらしや 戻荷に刈る 山の草　歸麓園
ひぐらしや社頭に辻にともし去る　同
ひぐらしのないて日高き泊りかな　同
ひぐらしや 松の彼方に 避病院　城北
ひぐらしや 蔚然として 神の森　同
ひぐらしや 喬木蔽ふ 谷廣し　木槿
ひぐらしもなき止みぬ谷の水の音　同

〜〜〜〜〜〜〜〜

### 雜詠　　竹園

*

畔近く束ね散りたる稻がらに集へる蝗あはれとぞ見し

うづたかく稻負ひ還る笠の上に惠那山遠くあきつ夕飛ぶ

*　　ふもとのや

大方の桑葉枯れにし裏畑の雨になる日を簑蟲なくも

さ庭べの櫻落葉に簑蟲の一つ居りたり今宵なくらん

*

石の透く早谷川を行く鮎なし虻ぞ羽振ける菊の冬日に

黄の獨り殘れる菊に虻遶り荒に就きたる花畑かな

蜩

ひぐらしに社頭の松の晴れにけり　城東
霧晴れて 蜩 な く や 峠 茶屋　同
ひぐらしに山路木深くなりにけり　同
ひぐらしの低き木にをる森の中　蓼江
かん高にひぐらしないて入日かな　同
たまくにひぐらしのなく榎かな　同

ひぐらしや 湯の山へ二里 駕の中　水村
ひぐらしや高野の稚兒の水汲みに　同
ひぐらしのなく夕晴となりにけり　案山子
ひぐらしや 柿を木で賣る 片在所　翠園
ひぐらしに 影長うひく 銀杏かな　旭晃
ひぐらしのなく樹の下やつなぎ馬　夜聲
ひぐらしの なきつぐ三四 夕かな　華園
ひぐらしの 鳴て柴積む 筏かな　同
ひぐらしや 庭に藪木の 夕日影　同

## ◎昆蟲に關する歌（七）

奥島欣人輯

▲紀友則集の昆蟲歌

夕されば螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき
霄のまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もする哉

寛平の御時中宮の歌合に

蟬のこゑきけば悲しき夏ごろもうすくや人のならむと思へば

人のもとよりとのゐ物おこせたるを返すとて

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくも成にける哉

▲壬生忠岑集の昆蟲歌

あはれてふ人はなくともうつ蟬のからに成までなかんとぞ思ふ
風寒み聲よわりゆく蟲よりもいはで物思ふ我ぞかなしき

やまがき(物名)

露さむみよるやまがきのきり〴〵す聲ふりたてゝ鳴まさる覽
天津風ひろく涼しき大とのに野べにならひて聲立な蟲

ひぐらし奉る時の歌（物名）

山里にわびくらしゝを九重のみ出いりしてわれは忘るな

まつむし（物名）

瀧津瀬の中にたまつむしら波は流るゝ水を緒にぞぬきける

▲紫式部集の昆蟲歌

（前に詞書付の歌一首あり畧）その人遠き所へ行くなりけり秋のはつる日きたる曉に蟲の聲あはれなり

なきよわるまがきの蟲もとめがたき秋の別やかなしかるらん

さうのことしばしといひたりける人まゐりて御手よりえんとある返事に

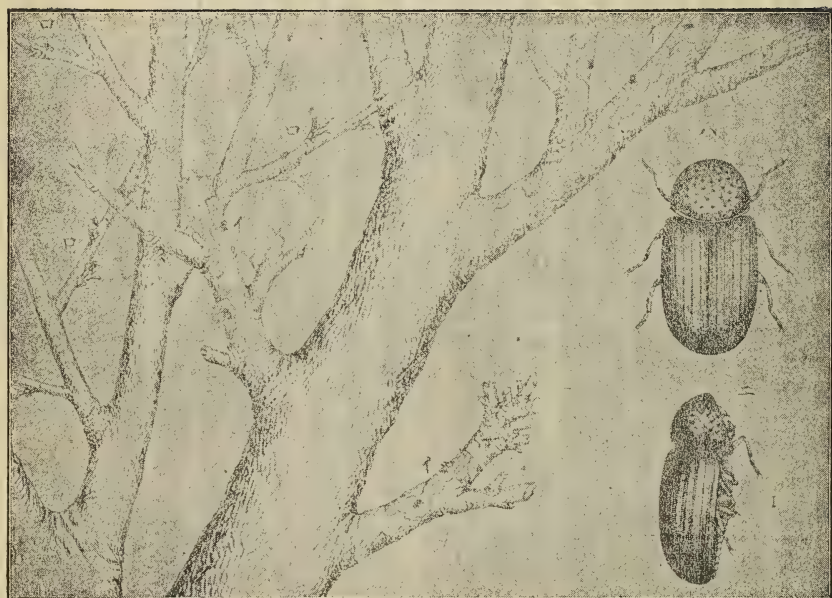
露しげき蓬が中の蟲のねをおぼろげにてや人のたつねん

## ◎害蟲驅除豫防實驗録　（其十二）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

（一六）クハノシンクヒムシ　桑樹の害蟲は其種類甚多く、何れも地方により甚しく繁殖し大害を加ふるものなれば、常に注意して大なる繁殖をなさゞる内に之れを除けば、手數を要すること少くして、他日發生の豫防ともなるべし。故に如何なる害蟲と雖も、常に未發に防ぐの心掛こそ、實に驅除の要訣たるを忘るべからず。今茲に記述せんとするは、小蠹蟲科に屬するクハノシンクヒムシと稱する桑樹害蟲の一なり。此の蟲は地方によりては意外の大害を與へ、往々桑樹を枯らすことあれども、蟲体甚小にして人の目に觸れ難ければ、此蟲の害なることを知らざること多きは甚だ遺憾なり。然れども此小蠹蟲科に屬する桑樹の害蟲も、只に一種に止まらず、之れが分布も甚だ廣きゆへ、少しく注意檢索すれば、是迄一向心付かざりし地方と雖も、或は意外に加害し居るやも知るべからず。かゝる事實は、當所員の各地巡回中往々發見せし處なるを以て、殊に農家諸氏の注意を乞はんとするものなり。

クハノシンクヒムシは、体の長さ五厘計の微小なる種にして。上圖の如く圓柱形をなし、黒褐若くは暗褐色を帶び、前胸甚だ大にして、頭部は極めて小さく、前胸の下面に匿れて背面より見ること難し、觸

クワノシンクヒムシの圖

（イ）成蟲靜止の狀
（ロ）成蟲の桑芽を害する狀
（ハ）背面より見たる成蟲の放大
（ニ）側面より見たる成蟲の放大

角は九節より成りて第一節は長く、先端の四節は膨大して葱花狀をなし、灰白色毛を以て輪環をなす。口部には比較的長き毛を密生し大腮は著しく發達して木材を嚙むに適す。前胸及翅鞘には灰白色の短き毛を有し、肢は三對共に腿節甚だ太く、脛節は稍扁く、其外方に短き強刺を有して鋸齒狀をなす。而して脛節に剛毛を密生し先端に二本の丈夫なる刺あり。跗節は三節より成りて細長く。其先端に爪あり。成蟲は五、六月頃より出でゝ桑の新芽に集りて食害し、勉めて樹枝の勢力を衰へしめんと圖るものゝ如く、爲めに桑の生育に大害を與ふること恰もヒメゾウムシの害に似たり。かくして枝又は幹に産卵す、孵化の幼蟲は木質部を食して生活し、其内に蛹となり次て羽化して成蟲となり、又前の如く産卵し孵化すれば木質部を食して生育し、後ち羽化し其儘被害部に於て越冬す。かく年二回の發生をなし、成蟲の儘越年したるものは翌年五六月頃より出でゝ桑芽に集まり、加害することゝ前述の如し。

驅除法　秋季、冬季に於て被害部を切り取りて燒却すべし。該蟲は前述の如く、其の幼蟲木質部に喰ひ入りて枯死せしめ、冬季は其儘被害部に潛伏し居ることヒメザウムシの如

きものなれば、農閑を利用し大小の枯枝を悉く切り取りて燒却すれば其効大なり、又秋季に於ては却て被害部を認め易きものなれば、機を見て之を切り取ることを心掛くべし。茲に注意すべきは、枯れたる大小の枝は勉めて基部より切り取り、枯たる部分の少しも殘り居らざる樣にすることなり。

## ◎六脚蟲界思ひ出の記

蟲 廼 家 蟲 奴

(三)一虱氏の手紙に就て　　本誌第九十五號を見れば在米國桑港の一虱氏は、虱の手紙と題し一寸毛色の變つた說を紹介せられた、此動氣は全く本誌第九十一號に揭載された、千葉縣の高橋徽一氏の述べられた飼鷄の害蟲に對する人爲的驅除云々の記事にあるのだ。處で一虱氏は中々面白い處の見解を持し一問を提出された。然し其解答はまだ本誌上に見えないから思ひ出の儘を一寸記す事にした。即ち氏の提出された一問とは、宇宙間に絕体的有害にして、絕体的無益の動物、即ち換言すれば、丸で人間の役に立たずと云ふもの現存して居るか云々と申すのである、之に氏は解答者の便を圖り。最も面白い事柄を述べられた。今之を一面より考へて見ると、當時大ひに學術の發達したと申す世の中に、斯樣な問題の生ずる事は誠に寒心の極みである。なぜかと申せば、此問題の原因を考察すれば、目下の研究狀態が枝葉に走つて居ると云ふ證明にはあるまいかとなる、然し之亦止を得ないことゝ申さねばならぬ、故に今此問題に就て數言を費やして見れば、即ち自然界に於ける動物のみならず、森羅萬象は斯く絕体的無害の無益のと謂ふ道理の決してあるべきものではないと云ふ事である。又氏は本誌第九十九號に虱の手紙(其二)として、常々注意の結果新紙上にて發見された人爲的驅防の方法を示された、その中に吾人の最も注意すべき文字がある。之は余程味ふべきものなれど、文字の解釋などゝなつては。昆蟲に關係が直接でないとてお叱りを受けねばなるまいから最早彼是申すまいが、斯く述べたのも、全く害蟲の驅除豫防上大ひに關係がある事と信じたから記した譯である。

(四)形式的害蟲驅除　　形式的害蟲驅除とは全体何んな事を意味するかと謂へば、害蟲の驅除豫防を實行するに當り、監督者、役員、器具、藥劑等の整備は可なり充分であつても、終局の目的が完成せられず稍ともすれば却て害蟲の繁殖を助くるが如き方法に出づるのを斯く自稱するのである、世論一般に害蟲を驅除すべき必要を知了するに到り、一面には當局者の講究の進步せし結果に於て、斯樣な事のある筈はなき樣に考へらるれども、中々そうはいけないもので、まだ〳〵何地にも此缺點がある樣だ。然し之

等の事は段々研究調査の進歩發達するに從ひ、漸次減少すると云はねばならぬ。故に之等の事柄は、後日害蟲驅防上に關する歷史の資料にもと思ひて一寸記して置くのであるが、總て世の中の事は決して最初より完全を望む事は出來得らるゝ樣で、實際には中々さう甘くは行かないものだ、故に害蟲の驅除豫防の事にしても同樣であるから彼是言ふ必要はなからうが、然しながら是迄の模樣を見聞して見ると、隨分滑稽的の事があるやうだから余程注意が請ひたいものだ。今や戰後の經營として實業の發達を希圖せらるゝに相違ない、從て害蟲驅除の如き必ず是迄に倍する整備を以て、奬勵もし亦實行も出來る事ならん。何うか其時には終局の目的は何邊に存するやに注意を一層深くして、其主意に悖らぬ樣に希望して置きたい、彼の稻作害蟲驅除の爲め實施になる短冊苗代の構造に就ては、未だ當局者と農業家との間合一せざる點がある、處が來年からは一層進んで、共同苗代とか謂ふて一ヶ所に何反歩、或は何町歩と定めて苗代田の設備をなさんとて夫々規約などが出來て、既に準備する迄に到つた場所も少なからない樣である。何うか國家の爲め此最も有益なる事業に對しては。呉々も最終の大目的に遠からざる樣今より充分講明せられて、所謂余の形式的害蟲驅除に終らざらんことを重ねて切望して置きます。

## ◎新潟縣岩船郡のイチモジセヽリ蝶

新潟縣　宮地良致

山間僻陬の田畝に於て、害蟲の爲め稻葉を卷綴せられ、一隅を推せば田面一体に波及動搖するあり、之れを一文字挵花蝶幼蟲の被害とす。爲めに秋季抽穗を妨げられ、收穫皆無となること往々目擊せし所にして、最も恐るべき害蟲の一なり。幼蟲は地方によりてカジムシ、又コウジユウといひ、我が新潟縣に於ては多く卷蟲と稱ふ、魚沼、頸城の各郡に於ては屢々其害を被りしことを聞けり。予此頃、縣下岩船郡に至り、到る處の蕎麥畑附近にイチモジセヽリの群飛するを見、其近傍の稻田を調査するに、稻葉の卷綴せられたる所一も發見するを得ず、同郡神納村に於て其村長代理たる助役佐藤田次郎氏に就て之れを聞くに、同氏も亦此現象を異樣に感じ、其宗族たる佐藤榮氏に圖り仔細に之れを調査したるにイチモジセヽリの幼蟲は稻葉を卷綴せずして、皆山野の禾本科に屬する雜草の葉を綴りて棲息するを見たりと●果して然らば、縣下岩船郡に於けるイチモジセヽリは、稻葉を害せずして雜草を食ふ如し、其性質普通一般のものと異なるか、將た該地方の稻葉はイチモジセヽリの嗜好に適せざるか、其外特殊の理由の存するあるか、記して識者の明教を乞はんと欲す。

## ◎簡單說明昆蟲雜錄　（第五號）

●米麥の病蟲害に關する注意事項（臨時報告）　農商務省農事試驗場の出版にして米麥の害蟲第一螟蟲類、第二浮塵子類。第三其他稻作の害蟲、第四貯藏米麥の害蟲を挿圖七、頁數二十八に亘りて記載す。

●養蜂雜誌（第十四號）　戰後の養蜂業。日本種蜂群と外國種蜂王の續き（青柳浩次郎）。蜜蜂の留去（加藤今一郎）。繼箱に就て莊島學士に質す（川村蜂庵）等にて十六頁を滿す。

●昆蟲學雜誌（第一卷第三號）　日本產冬蟲夏草圖說前號の續き（堀正太郎）。小笠原島の飛蝗に就て（桑名伊之吉）。イスの五倍子蚜蟲前號の續き（明石弘）。キクスイ（町田貞一）。自然研究と昆蟲學（丹羽四郎）等にして圖二版其他木版挿圖四十二頁に亘りて記載す。

●博物之友（第二十八號）　維新前の昆蟲學等に就き（田中芳男）一頁半。メスアカムラサキ（新稱）に就て（高野鷹藏）四頁餘。昆蟲和名私見（矢野宗幹）五頁。蝶類採集便覽（高野鷹藏）前號の續きにて四頁餘其他本年得たる新種の蝶、東京產の浮塵子等を記載す。

●松の操（第三十三號）　衛生の昆蟲（谷貞子）前號の續き本號には南京蟲に關する通說を圖入にて四頁に亘り。名古屋地方の昆蟲方言（谷貞子）二十餘種を記載す。

●園藝界（第二年第十一卷）　夜盜蟲（河村榮吉）と題し形狀、經過習性、加害の狀況に就き四頁に亘りて記載す。

●果物雜誌（第百六號）　病蟲驅除豫防の好期と題し果樹の害蟲各種に就き十一頁に亘りて記載す。

●青年農會報（第百六號）　芋蟲の驅除法に就て（小川農生）前號の續きにて一頁を記載す。

●新農報（第八十二號）　害蟲驅除新論（增田操）前號の續き本號には益蟲の種類及ひ習性、重農主義を論じて害蟲驅防に及ぶの項を設けて四頁。東北地方二化螟蟲驅防の困難（仁部生）前號の續き本號には被害莖摘採、被害莖刈取後の所分、目下施行の二化螟蟲驅防の効果如何六頁。螟蟲驅除用莖切器（昆蟲翁）に就て記載す。

●講農會々報（第六十八號）　佐々木博士講話の大要（田原進）と題して樟樹の五倍子に就き三頁。葡萄の害蟲（田原進）コガタノコノハガに就き一頁。浮塵子發生と氣象との關係豫察報告（農事試驗場中川技師報告摘要）三頁に亘りて記載す。

●大日本農會報（第二百九十三號）　螟蟲の苗代被害試驗（中川久知）二化螟蟲の苗代被害試驗、三化螟蟲の苗代被害試驗。結論の項を設けて二頁を記載す。

●石川縣農會報（第四十四號）　二化螟蟲根本的驅除法ワラムシ驅除の成蹟、圖入にて蟲塚の事を記載す。

●園藝之友（第一年第七號）　山茶の葉蝕蟲と菊の夜盜蟲（佐々木忠二郎）習性經過より豫防及驅除法を二頁餘に亘りて記載す。

●農報（第八號）　害蟲一般の驅除豫防法（山村常吉）前號の續き本號には益蟲の保護、食蟲鳥獸の保護を二頁、埼玉縣下に於ける稻作の害蟲並に之が驅除豫防法に就て（田口瓢蟲）圖入にて二化螟蟲の習性經過より驅除及び豫防法を六頁に亘りて記載す。

●飯南郡農會報（第五卷第四號）　螟蟲と浮塵子（伴野熊吉）と題し其驅除法等を三頁半。飯南郡稻苗代浮塵子の種類調査（伴野熊吉）二頁餘。螟蟲卵塊寄生蜂調査五頁。螟蟲生存場所調査（中島才之丞）半頁。螟蟲卵塊採集成蹟二頁弱を記載す。

●農事雜報（第九十一號）　植物害蟲驅除新劑の發明（雜報子）熊本縣の今井氏發明の藥劑に就き二頁餘を記載す。

●愛知縣農會報（第八十九號）　冬期に於ける果樹病蟲の驅除及豫防（市川實太郎）に就き三頁を記載す。

●岐阜縣敎育會雜誌（第百三十四號）　小學兒童に關する昆蟲雜錄（名和昆蟲研究所）前號の續き。小學兒童と害蟲驅除學校生徒害蟲驅除寫眞。害蟲驅除と小學生、其他三件を三頁餘に亘りて記載す。

●少年世界（第十一卷第十六號）　觀察力（名和靖）と題し世の迷信を昆蟲の例を以て挿圖の上五頁半に亘りて記載す。

●工業所有權雜誌（第二號）　戰後の經營と特許莖切器（吉野寅之助）簡單有効なる莖切器を使用して極力螟蟲の驅除に就て記載す。

●博物研究會々誌（第一卷第一號）　本誌は三重縣師範學校博物敎室内博物研究會に於て本月七日出版。三重縣産蝶目錄（秋山蓮三）七頁餘に亘りて五十二種。昆蟲類の變態作用に就きて（岩崎生）二頁半を記載す。

## ◎愛知縣下に於ける害蟲驅除豫防費

愛知縣　山崎延吉

我が愛知縣下の明治三十五年度より明治三十七年度に至る三ヶ年間に於ける害蟲驅除豫防費額の調査を得たれば左に報導せん

三十五年度に於ける害蟲驅除豫防費調

| 郡市 | 町村費 | 郡費 | 縣税 | 郡農會費 | 町村農會費 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 名古屋 | — | — | — | — | — | — |
| 愛知 | 一六四、七九八 | — | 八九、三五〇 | — | — | 二五四、一四八 |
| 東春日井 | 二四七、〇二五 | 八三、四一〇 | 八六、九八〇 | — | 一二二、二七三 | 五三九、六八八 |
| 西春日井 | 四七九、八六四 | — | 一一一、一九〇 | 三七、六二六 | 三二八、一九四 | 九五六、八七四 |
| 丹羽 | 三二九、五八四 | — | 二八、七四〇 | 六、七〇〇 | 二一九、三八三 | 五九四、四〇〇 |
| 葉栗 | 四七、九九〇 | — | 七七、五〇〇 | 三、九六〇 | 八、七五〇 | 一三八、二〇〇 |
| 中島 | 四二、三一一 | — | 五一、三六〇 | — | 四六、〇五三 | 一三九、七二四 |
| 海東 | — | 八四、〇〇〇 | 一四、四一〇 | — | 一四、四八〇 | 一一二、八九〇 |
| 海西 | 六、一五〇 | — | 七九、〇〇〇 | — | 四五、〇〇〇 | 一三〇、一五〇 |
| 知多 | 九〇六、九一九 | — | 一二五、二九〇 | 二〇五、六七五 | 一、四三八、〇六八 | 二、六七五、九五二 |
| 碧海 | 四〇四、二一七 | 二三、三七〇 | 六一、九六〇 | 二〇、一〇五 | 五〇六、四二八 | 一、〇一六、〇八〇 |
| 幡豆 | 五五三、三六九 | — | 一四六、九八〇 | 七、七八〇 | 九二三、七一五 | 一、六三一、八四四 |
| 額田 | 一五、五〇〇 | — | 六八、〇八〇 | 三九、〇〇〇 | 二二〇、八四〇 | 三四三、四二〇 |
| 西加茂 | 四五一、八二一 | — | 二九、九二〇 | 二〇九、八八七 | 一、三一四、七二四 | 二、〇〇六、三五二 |
| 東加茂 | 二、四五〇 | — | 七四、二四〇 | 三、五五〇 | — | 八〇、二四〇 |
| 北設楽 | — | — | 三六、〇四〇 | 一六、〇〇〇 | — | 五二、〇四〇 |
| 南設楽 | 一一、〇〇〇 | 二八、〇〇〇 | 二三、五六〇 | — | 一八、九五三 | 八一、五一三 |
| 寶飯 | 一一三、二〇〇 | — | 四五、二七〇 | 一八、九五〇 | 一〇七、二五〇 | 二八四、六七〇 |
| 渥美 | 四九五、四〇三 | — | 三一、四八〇 | 五五、五〇〇 | 三八八、六八〇 | 九七一、〇六三 |
| 八名 | 三九五、一三八 | 三三、三〇〇 | 四九、〇三〇 | — | 一〇〇、五六〇 | 五七八、〇二八 |
| 全管合計 | 四、六六六、七三九 | 二五二、〇八〇 | 一、二四〇、三八〇 | 六三九、二一三 | 五、七八八、八七一 | 一二、五八七、二八三 |

## 三十六年度に於ける害蟲驅除豫防費調

| 郡市 | 町村費 | 郡費 | 縣税 | 郡農會費 | 町村農會費 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 名古屋 | — | — | — | — | — | — |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 愛知 | 三九〇、六八八 | — | 七四、一二〇 | — | 一八九、三五五 | 六五四、一六三 |
| 東春日井 | 五二二、〇九五 | 三七三、五〇〇 | 一五二、三〇〇 | — | 三五二、〇四二 | 一、三九九、九三七 |
| 西春日井 | 四七九、八六四 | — | 一一一、一九〇 | — | 三二八、一九四 | 九一九、二四八 |
| 丹羽 | 九五六、八〇五 | — | 七一、〇八〇 | 八、四〇〇 | 一七四、〇六〇 | 一、二一〇、三四五 |
| 羽栗 | 一四、六一六 | — | 六三、一二〇 | 四八、六八五 | 一〇、八七〇 | 一三七、二九一 |
| 中島 | 一五七、六七八 | — | 四二、九六〇 | 三〇、〇〇〇 | 二三一、四三二 | 四六二、〇七〇 |
| 海東 | 三四五、八五三 | 七五、〇〇〇 | 六八、一二〇 | 一二、九〇〇 | 一五五、八三三 | 六五七、七〇六 |
| 海西 | 一、一五四、七五五 | — | 九四、〇四〇 | 一〇、〇〇〇 | — | 一、二五八、七九五 |
| 知多 | 八六〇、八九一 | 一、一〇〇、〇〇〇 | 九四、一三〇 | 一四〇、〇〇〇 | 一、〇〇二、一五九 | 三、一九七、一八〇 |
| 碧海 | 三六一、二二四 | 三六、四二〇 | 一四八、二六〇 | 二九、〇六〇 | 一、一五二、五〇三 | 一、七二七、四六七 |
| 幡豆 | 七九一、四六八 | — | 一一七、一四〇 | 九、六〇〇 | 一、〇六六、二八六 | 一、九九四、四九四 |
| 額田 | 四二、〇一六 | — | 七六、一〇〇 | 四一、七八〇 | 四八五、二九七 | 六四五、一九三 |
| 西加茂 | 四九二、九九四 | — | 三二、九六〇 | 九八、四四一 | 八二七、四四一 | 一、四五一、八三六 |
| 東加茂 | — | — | 九九、一六〇 | 一二、六四〇 | 一、三八〇 | 一一三、一八〇 |
| 北設樂 | — | — | 五〇、六八〇 | — | — | 五〇、六八〇 |
| 南設樂 | — | 三四、四〇〇 | 二一、九二〇 | — | 三一、五九五 | 八七、九一五 |
| 寶飯 | 二六二、二二〇 | — | 三九、一一〇 | 二〇、〇〇〇 | 一七六、七二八 | 四九八、〇五八 |
| 渥美 | 一二三、一九九 | — | 四三、〇三〇 | 七、四〇〇 | 四九〇、二三七 | 六六三、八六六 |
| 八名 | 一三四、四三一 | 二五、二四〇 | 三三、八八〇 | — | 一五四、四六九 | 三四八、〇二〇 |
| 合計 | 七、〇九〇、七九七 | 一、六四四、五六〇 | 一、四三三、三〇〇 | 四七八、九〇六 | 六、八二九、八八一 | 一七、四七七、四四四 |

三十七年度に於ける害蟲驅除豫防費調

| 郡市 | 町村費 | 郡費 | 縣税 | 郡農會費 | 町村農會費 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 名古屋 | — | — | — | — | — | — |
| 愛知 | 三三四、四四一 | — | 一四七、六二〇 | — | 二三三、四二〇 | 七一五、四八一 |
| 東春日井 | 四五九、三九七 | 三〇八、三七五 | 五四、六一〇 | 一二、八〇〇 | 六八五、五二六 | 一、五二〇、七〇八 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 西春日井 | 三四二、五七〇 | — | 一五〇、〇〇〇 | — | 三四二、五七〇 | 八三五、一四〇 |
| 丹羽 | 三九一、五四四 | — | 三八、六三〇 | 六、九五〇 | 五八二、二四二 | 一、〇一九、三六六 |
| 葉栗 | 一六七、三四六 | — | 二八、九二〇 | 二六、三二〇 | 一〇〇、六七七 | 三二三、二六三 |
| 中島 | 二七八、二四五 | — | 三四、三〇〇 | 一九八、二八〇 | 二三一、八八二 | 七四二、七〇七 |
| 海東 | 八三、二一七 | — | 一八、六三〇 | 三、五〇〇 | 一四〇、三三六 | 二四五、六八三 |
| 海西 | 二三、四二五 | — | 三、六四〇 | 三〇〇 | 二二、八二六 | 五〇、一九一 |
| 知多 | 一八三、八一七 | 三六、八三七 | — | 一四一、五二〇 | 八七二、二六〇 | 一、二三四、四三四 |
| 碧海 | 一、九〇九、四三七 | 五四、〇四〇 | 一七一、四五〇 | 七、〇九八、五六八 | 一四、二五九、六八七 | 二三、四九三、一八二 |
| 幡豆 | 二三三、二六九 | — | 三二、七二〇 | 七、五〇〇 | 一、八一八、二一九 | 二、〇九一、七〇八 |
| 額田 | 六九〇、二八〇 | — | 三九、八一〇 | 九、五〇〇 | 二〇五、六六〇 | 九四五、二五〇 |
| 西加茂 | 四五五、二六五 | — | 六二、四六〇 | 三八五、三八〇 | 六二五、八〇五 | 一、五二八、九一〇 |
| 東加茂 | 二、二四〇 | — | — | — | 三〇、三六〇 | 三二、六〇〇 |
| 北設樂 | — | — | 二八、七〇〇 | — | 四四、九〇〇 | 七三、六〇〇 |
| 南設樂 | — | 二一、一〇〇 | 四、二〇〇 | 一五、三四〇 | 一一四、六九五 | 一五五、三三五 |
| 寶飯 | 八五、六一六 | 四、六〇〇 | 三四、二〇〇 | 三九、二〇〇 | 二〇六、七三一 | 三七〇、三四七 |
| 渥美 | 二三五、七三七 | — | 五八、六四〇 | 一六八、五〇〇 | 九三五、五七八 | 一、三九八、四五五 |
| 八名 | 八三、三〇〇 | — | 二〇、四二〇 | 九六、四二五 | 四一二、二七八 | 六一二、四二三 |
| 合計 | 五、九五九、一四六 | 四二四、九五二 | 九二八、九五〇 | 八、二一〇、〇八三 | 二一、八六五、六五二 | 三七、三八八、七八三 |

## ◎昆蟲に關する葉書通信　（第五十三報）

●（二八四）養老郡の害蟲驅除實況（岐阜縣養老郡林完）　本年は害蟲發生の稍々少なき樣感ぜられしが、其驅除數左の如し。一、苗代田、六月七日より螟蟲蛾捕殺數十萬二千三百八十五頭、仝卵塊二十五萬七千十四塊（外に驅除せしも其數未調査の村あり）二、本田、八月一日より仝十日迄に稻の心枯切取量二千三百六十四貫四百七十八匁、八月十一日より同十五日迄に同一千三百五十四貫六百二十匁（未調査の村あり）八月廿一日より同廿五日迄に同六百二十八貫二百二十七匁。苞蟲驅除數、十九萬三千三百七十

五頭に達せり。目下尙引續き驅除勵行中なるが、螟蟲は至る處多少發生せざる處なく、苞蟲は上多度、下多度、養老、牧田、一の瀨、多良、時等の各村に多少發生せり。螟蛉、稻蝨、尨蟲、ツマグロヨコバヒ等多少發生し居るも、被害の判然し居る箇所は驅除しつゝあり。(九月四日報)

●(一八八五)サビカミキリ南天を害す(岐阜縣不破郡大谷實)　數日前夕刻雨戸を開放し置きしに、サビカミキリの燈下に飛來せしかば二頭を採集したり、然れども該蟲の被害植物は、淺學の予には不明に屬せり。而して翌日庭園を散歩せしに、南天の枯死し居たれば之れ蟲害の爲めなりや、果た黴菌の爲めなるやを確めんとて之れを改めしに、所々に小孔を認め、孔口よりは蟲糞を漏出せり、一層注意して局部を開掘せしに、前夜採集のものと同種の天牛四頭を得たり。依て幼蟲を採らんとて能く〳〵改めしも時機後れたる爲めにや、幼蟲蛹共に見當らざりしは甚遺憾なりき、今現品を添へて通報す。(九月十日報)

サビカミキリの圖

●(一八八六)昆蟲分布の一片(三重縣四日市市山内甚太郎)　今や斯學研究者日に月に排出するに伴ひ、昆蟲の分布區域も亦漸次窮明さるゝに至りたるは大に喜ぶべき事なり。余之れが調査の必要を感じ。我三重縣產昆蟲目錄の短片を綴るに當り、偶然左の三種が我縣下に採集せられしを以て、左に其種名を揭げて其分布を報じ、併て同好者の資料に供せんとす。

一、モンキアゲハ。採集地、南牟婁郡飛鳥村大字大又及北牟婁村相賀郡字相賀。　二、ギフテウ、採集地、桑名郡より員辨郡に亘る多度山脈中。三、イシガキテフ、採集地、北牟婁郡八鬼山麓（尾鷲町外一ケ村に跨る海拔二千二百八十尺）及南牟郡木ノ本町より北牟婁郡に至る山路。

●(一八八七)オンブバツタの食草と蟬類の初鳴(埼玉縣北足立郡深井武司)　オンブバツタは、當地にて採油の目的にて栽培する荏の葉を食害すること甚し、又雁來紅の葉をも食するものゝ如し。余が飼育せるは、一日中に中形の荏葉一枚を主脈の基部を殘して食する割合にて、九月九日午前八時脫皮して成蟲となれり。之れが生活史、及卵態、並に敵蟲を世の實驗家に問ふ。本年初めて蟬類の鳴聲が余の耳に入りし日を報せんに、一、ハルセミ五月十二日、二、ニイニイゼミ七月一日、三、カナカナゼミ七月七日、四、ミンミンセミ七月廿五日、五、アブラセミ七月廿日、六、ツクツクボウシセミ八月五日。(十月十八日報)

●(一八八八)ウミグモ須崎港に產す(高知縣土佐郡武內護文)　當縣高岡郡の江上に海棲牛翅類の產するこ

ことを、嘗つて土人の言により稍信すべきを報じたることありしが、去る十一月十日、高岡郡須崎港に於て之を現實に目撃し其一頭を捕獲したれば、分布資料の爲め之を貴所に送ることゝなしぬ。標本の不完全なるは、當時他の任務を以て該地に巡回し、採集器を持たざりしに由る、幸に諒せよ。（十一月十七日報）

◎大山元帥に日本蟲繪應用額面を贈る　滿洲軍總司令官大山元帥は、此程目出度凱旋せられ去る六日當驛を通過せられたるが、その際當所長は停車場に於て歡迎し、親しく日本蟲繪應用額面、其他二三を贈呈せしが、同額面は新規發明にかゝるものにて、特に滿足せられたり。因に日本蟲繪應用額面なるものは、今回當所に於て發明したるものにして、適宜の繪畫に昆蟲の實物を配合して、一種の額面となしたるものなり。裝飾用として極めて趣味あり、應用廣く、不知不識の間に植物と昆蟲との關係を知得せしめ、敎育上の裨益亦尠からざるものなり。而して今回贈呈したるものは、櫻の繪に、出征軍人が特に旅順開城紀念として採集したりとて送られたる瓢蟲、其他滿洲地方にて採集したる美麗なる蝶類を配合して製したる額面なりき。

◎本號の口繪に就て　本號口繪にある五種の竹節蟲は、大橋由太郎氏が沖繩縣に於て採集せられたるものにして、內地産のそれとは自ら異りたる点多ければ、何れ調査の上紹介すべし。

◎抽籤奬勵法は買收法に優るの一證　當所の常に買收奬勵法の弊害ありて益なきを寧ろ抽籤奬勵法の優れることを言へり、然るに玆に買收法の尤も深く行はれたる福岡縣に於て尤も有力なる事實を以て證明せられたり。今同縣農會報より拔萃の上、左に記載して參考に供す。

◎築上郡友枝村の害蟲驅除　築上郡友枝村は從來害蟲驅除の方法手段として螟蟲卵蛾共買收を爲し年々買收金五百圓乃至壹千圓を支出したり然れども其驅除豫防上遺憾の點なしとせず故に同村農會は之が良案に付講究する所あり本年は其買收法を以て抽籤法に換へ同村尋常小學校を以て抽籤場に充て之が實行をなしたるは實に七月二十一日にてありき其結果たるや良好にして之に要せし奬勵金

は僅かに壹百圓五拾參錢六厘にして抽籤本數は五萬九千五百本の多きに達し之を從來の買收法に比すれば其費用恰も五分の一乃至十分の一にして其成績たるや大に優れるなり實に良案と謂つ可し其規定及抽籤の順序等左の如し。

害蟲驅除奬勵規定。（第一條）害蟲驅除豫防奬勵の爲め抽籤に依り奬勵金を附與す。（第二條）害蟲採取高に應じて抽籤劵を附與する左の如し。但し縣會に基き採取の分は除く。一、螟蛾三十頭每に抽籤劵一枚。二、螟卵拾塊每に抽籤劵一枚。（第三條）抽籤は農會議員立會抽籤劵引替に自ら抽籤せしめ當籤者には左の等級に依り金員を附與す。一等五拾錢四本、二等拾錢十本、三等五錢百本、四等二錢二百五十本、五等一錢千本、六等五厘二千本、七等二厘一萬一千本、八等一厘四萬五千五百三十六本。（第四條）抽籤は本村稻作植付後直に施行す。抽籤順序。一、抽籤所は第一第二の敎室を以て之に充て各室に二ヶ所づゝを設く。二、抽籤者は一定の出入口の外出入を許さず。三、抽籤者の入口を左の如く分つ。第一敎場（土佐井、西友枝）抽籤者。第二敎場（東上、東下）抽籤者。四、當籤劵の支拂所は第三敎場とす。五、抽籤者以外の者は抽籤場に入る可らず。六、抽籤者は順次抽籤場内に入り改札係に抽籤劵を差出し之れと引替に抽籤すべし。七、抽籤者抽籤せんときは抽籤係の點檢を經て開籤し而して後當籤金支拂所に就き當籤札を差出し之れと引替に現金を受取順次退散すべし。八、抽籤は午前七時に始め午後六時に終る。抽籤場執務順序。一、抽籤場は第一第二の敎室を以て之に充て各二ヶ所に分設す。二、抽籤場は大字に區別し抽籤をなさしむ。但抽籤終了するも他大字に於て殘餘あるときは他大字内のものをして抽籤せしむ。三、現金支拂場所は第三敎室とす。四、事務分擔左の如し。改札係一ヶ所に二名又は三名。改札係は抽籤劵を受取り員數を取調べ抽籤せしむべき員數を抽籤劵の欄外に記入し抽籤係に送るものとす。抽籤係は一ヶ所に二名又は三名。抽籤係員は抽籤劵の員數に對する抽籤をなさしめたるときは其抽籤員數を點檢するものとす。當籤金支拂係一ヶ所三名。當籤金支拂係員一名は當籤金額を調査し一名は調査せし金額氏名を帳簿に記入し他一名は現金を仕拂ふものとす。五、事務所抽籤室及分擔氏名左の如し。第一敎場大西友枝改札係（田中武治、末松政太郎、吉村壽三郎）、抽籤係（吉村平太、吉村勝治郎）。第一敎場大字土佐井改札係（荒尾伊六、小出石啓藏、山崎源市）、抽籤係（高野興兒、内尾彦太郎）。第二敎場大字東下改札係（林崎德平、常慶又吉、富永歡十郎、八坂八郎）、抽籤係（下野雄藏　山上七郎、八坂久平）。第二敎場大字東上改札係（筒井久吉、森島熊藏、田島柳藏）、抽籤係（坪根幸藏、恒永千代松）。六、當籤者現金支拂係（山本富治郎、恒成鉄二郎、八坂又市、中野道丸）。七、他の議員敎員委員は抽籤者の出入其他の監視を囑托す。明治三十八年七月廿一日。

## ●狂的昆蟲採集

理學博士渡瀨庄三郎氏より、自著のダーウィンの一生及びその事業と稱ふる書冊を惠與されたるを以て、直に一讀の榮を得て始めてダーウィンの眞情を知りたるのである、其の中にダーウィンは在學中學業の餘暇に昆蟲を採集して甲蟲狂と云ふべき面白き一節がありますから、一寸拔萃して見樣と思ひます。『學業の餘暇には甲蟲を採集することに凝つて「甲蟲狂」を以て自ら任ずる程で

あつた、この時代の話であるとてその自傳に記されたものによると、或時ダーウィンは樹皮を剝いで頻にその中に隱れて居る甲蟲を探して居た、忽ち一種の珍しい蟲が目についたのでこれを左の手に捕へ持ち、なほ搜索を續けて居るとまた一疋更に珍しいものが出て來たからこれを右手で捕へた、斯く左右の手がふさがつてしまつた時また一疋面白い種類が出て來たが今は如何することも出來ぬ、みす〳〵これを逃すも殘念であると思つてダーウィンは右手の蟲を口中へ放り込れで手を明たはよいが、蟲は口中一杯何とも言へぬ惡味のあるものを排出したので流石のダーウィンもその苦に堪へずそれを吐き出した、この混雜に左手に持つて居た甲蟲も三番目に出て來たものも皆逃げ失せてしまつた遂に一疋も捕らずに終つたとのことである』然るに昆蟲翁は曾て在横濱の故英人プライアーを尋ねたるに、幸本日は日曜のとなれば昆蟲採集に同行し樣とて橫濱近傍に出懸けました、蝶や蛾等の獲物も相當にありて最早採集箱を滿さんとする迄になつた、故にプライアーは箱に滿たる時には最小昆蟲を採集するのが尤も妙であるとて豚小屋の近邊に至り、頻りに堆積したる豚糞其他不潔物をピンセットにて起し、ハネカクシ等の出づる時は喜びてピンセットにて挾み小形玻璃管に容るゝのである、然るに尤も珍奇なる種類の現はれたる時は到底ピンセットにては間に合ざるを以て、指の先に唾を附けて小形昆蟲を附着せしめ漸くにして捕ふるのが常であります。翁は其熱心に感服し自からは採集を止めて頻りに其擧動に注目して居りました、其内に何んでも餘程大切のものが然も澤山現はれたると見へて思はず知らずピンセットを打捨、指頭を以て豚糞を發きたる尤も不潔なる指頭を何回となく舐めて其小蟲を捕へたるには實に驚きたるのである、如何なる翁も豚糞を舐める迄には狂せずと心潜に思ひました、後にて聞けば甲蟲の專門家ルウイスが曾て日本へ來りて僅かに一頭を捕へて尤も珍重がりたるものと同じものであると申しました、茲に於てプライアーは恰もダーウィンと同樣昆蟲狂の一人と信じたのである、聊か感じましたので茲に一寸記して置きます。

因に記す昆蟲翁も採集の際には右に類似の事に屢々遭遇したることがある、恐く昆蟲採集家として多少是等に關する面白き事實を保有し居らるゝ諸君も多からんと思ふ。願くば此際續々報知を得て本誌に記載し後世に殘し置かんことを望むのである。

## ●知多郡立農學校生徒の昆蟲に關する書簡文

愛知縣知多郡農會は十月廿日より一週間當所長を聘し昆蟲學講習會を開會の際同郡乙種農學校生徒は同會に加はり受講せしが、其後大に昆蟲學

の趣味を感じ、餘暇あれば昆蟲を採集して各自標本に製して研究の資料に充てらるゝ由、伊藤教員よりの通報と共に、此程昆蟲の標本を贈る文てふ一題を課し全生徒に綴らしめたりとて其成蹟を贈られたれば、左に一二を照會せん。

昆蟲標本を贈る文（愛知縣知多郡立農學校第二學年神谷德七）　拜啓秋冷の候に相成候處貴君には益御精勵の由奉大賀候、降て小生儀も無事消光罷在り候間憚りながら御休心下され度候。扨て今回本郡農會に於て我國昆蟲學の泰斗として其名も高き名和靖先生を聘し、十月廿日より同廿六日まで七日間の昆蟲學講習會を開催されしを以て、幸ひ出席を許され聽講致し候ひしに、先生の平素御熱心なる御研究の結果に加へて、談話の明快なるは愚昧の小生も日を經ると共に益々昆蟲に關する趣味を感じ、講習中は勿論爾後も昆蟲採集を何よりの樂みとなし種々なる昆蟲を採集致し候間、其内最も普通なる害蟲益蟲各五種つゝ區別仕候て差送申候、依て此期を以て昆蟲學御研究の端緒となされ候はゝ幸ひ不過之候早々頓首◉同（杉江康一）　一筆呈上仕候、陳ば十月廿日より本郡農會の事業として、昆蟲學に有名なる名和靖先生を聘し昆蟲學講習會を開かれ候ひしが、迂生等幸に同會に入り一週間日日聽講することを得候處御講話一々實地に就て見る如く實に時の移るを知らず、最終の日は殊更名殘り惜しく感ぜられしが、講習中は申すに及ばず其後は昆蟲に關する趣味益相增し、時々野外採集を行ひ甚だ愉快と致し居候。且其採集したる昆蟲は、講習中に習得したる製作法により標本に製作致し候。依て益蟲並に害蟲數種甚見苦しく候へども進呈仕り候間、何卒貴下昆蟲學研究の資料の一端に加へられ候はゞ幸甚の至りに存じ候先生より承る處によれは、昆蟲の種類は幾十萬に達し、從て害蟲の種類も實に夥しく、農作物に加害する螟蟲のみにても年々四五千萬圓に達し候由、斯くの如き大害を受けながら等閑に付し置くは我等の不名譽にて實に遺憾千萬に存じ候、されば此際大に驅除豫防の道を講ぜざるべからざることゝ存候。就ては其害蟲の性質を知り彼の弱期に於て充分驅除すると同時に、此の害蟲を斃す益蟲の保護を圖るは尤も策の得たるものと存じ候故、貴殿も名譽ある戰捷國の農民に恥ぢず、御奮發御研究の上國家の爲め御盡力あらんことを希望する處に御座候、先は標本御送付旁小生の希望を申述候早々頓首。

## ◉小學校兒童の知得したる昆蟲名

去る九月愛知縣知多郡に於て、當所長を聘し昆蟲學講習を開きたることは既に紹介せしが、其際所長は特に半田尋常高等小學校高等科兒童に對し一場の談話をせられたるが、之れが報酬として各學年に應じ、或は昆蟲の實物寫生をなし、或は昆蟲に關する文を草するなどして贈られたり。其内高等一學年兒童は己が知りたる昆蟲と題し、各自是迄に知り得たる蟲名を記して送られたるが、頗る興味あるを以て左に表示して之れを照會せん。因に兒童の書きたる其儘を掲げしものなれば宜しく判讀あれ。

## 半田高等尋常小學校高等第一學年兒童の知得せし昆蟲名表

| 兒童の書きたる蟲名 | 指名せし生徒數 |
|---|---|
| はまくりむし | 一四 |
| はまぐりむし | 三七 |
| はまぐり | 三 |
| はまぐりむしの蛾 | 二 |
| はまぐりむしのちよー | 一 |
| かいこ | 二七 |
| 蠶 | 六 |
| 蠶のちよー | 二 |
| おかいこ | 七 |
| おかいこさん | 一 |
| かまきりむし | 二五 |
| かまきり | 六一 |
| かまゝきり | 一 |
| はい | 六四 |
| はへ | 一 |
| はひ | 一 |
| こばい | 二 |
| こーばい | 一 |
| せみ | 五三 |
| せび | 一 |
| いもむし | 六九 |
| いもむしのちよー | 一 |

| 兒童の書きたる蟲名 | 指名せし生徒數 |
|---|---|
| ちよー | 四〇 |
| ちよーちよー | 一九 |
| ちよ | 二 |
| 馬尾蜂 | 一八 |
| ばびほう | 一三 |
| うまをばち | 二八 |
| 馬尾ばち | 二 |
| はち | 六〇 |
| はつち | 四 |
| 大はち | 一 |
| あなばち | 八 |
| こぬかばち | 四九 |
| これかばち | 五 |
| ぬかばち | 二 |
| うんか | 七五 |
| うんが | 一 |
| がみきりむし | 五六 |
| かみきり | 一 |
| ほたる | 五五 |
| ほたるむし | 一 |
| うりばい | 一六 |
| うりばへ | 五五 |

| 兒童の書きたる蟲名 | 指名せし生徒數 |
|---|---|
| おこぜ | 二〇 |
| おこじ | 一 |
| こがれむし | 九 |
| かれぶん〱 | 一三 |
| しらみ | 七四 |
| のみ | 七七 |
| がいだ | 一 |
| ずいむし | 六三 |
| ずいむしの蛾 | 二 |
| ずいむしのちよー | 一 |
| いなご | 七四 |
| ばつた | 四四 |
| はつた | 一 |
| ばた | 二 |
| はたむし | 一 |
| きりぎりす | 七 |
| ぎす | 五 |
| いなぎす | 一 |
| そばぎす | 一 |
| はたをりぎす | 一 |
| ばたばきす | 一 |
| くつわむし | 二八 |

| 兒童の書きたる蟲名 | 指名せし生徒數 |
|---|---|
| すいちよむし | 四 |
| すいさ | 六 |
| おかまぎす | 七 |
| ちんちろりん | 一 |
| ほろほろむし | 一 |
| こーろげむし | 一 |
| かれつきむし | 一 |
| くさかげろふ | 三六 |
| くさかげろー | 五 |
| くさかげろ | 九 |
| くさかげろう | 四 |
| くさかげらう | 三 |
| くさかげろむし | 一 |
| まつむし | 四一 |
| あり | 四七 |
| 蟻 | 一 |
| はあり | 二 |
| かぶさむし | 一九 |
| かぶさ | 一 |
| さんぼ | 八一 |
| か | 六六 |
| 蚊 | 四 |

| 名稱 | 數 |
|---|---|
| かのくち | 四 |
| てんさーむし | 四四 |
| てんさ蟲 | 一九 |
| てんさん蟲 | 三 |
| 天さ蟲 | 一 |
| おてんさむし | 一 |
| すゞむし | 四四 |
| 鈴蟲 | 一 |
| ぶんぶん | 一 |
| あぶらむし | 七九 |
| あぶろ | 一 |
| ありまき | 一 |
| あまこ | 一 |
| ぼーふら | 五 |
| ぼーふり | 一 |
| ぼーうふら | 三 |
| よこばい | 一 |
| れきりむし | 五八 |
| れきりむしの蛾 | 一 |
| しやくさりむし | 二六 |
| 百取蟲 | 一 |
| けむし | 二〇 |
| こぬかむし | 一 |
| こぬがぶし | 一 |
| よー蟲 | 二 |
| よーむし | 一 |
| うじむし | 二 |
| うじ | 九 |
| はんみよー | 三 |
| へーこきむし | 一 |
| へいこき蟲 | 一 |
| ひむし | 一 |
| 日蟲 | 一 |
| こくざう | 一 |
| うそじにむし | 一 |
| くらむし | 二 |
| あぶ | 四 |
| あふ | 四 |
| みつすまし | 一 |
| みづまい | 一 |
| みづむし | 一 |
| みづぐも | 一 |
| よさーむし | 一 |
| あをむし | 一 |
| ひもむし | 一 |
| かしまい | 二 |
| たけのふしむし | 一 |
| しくじ | 一 |
| みつばち | 一 |
| なつむし | 六 |
| たまむし | 二 |
| いしやさつち | 一 |
| かきり | 一 |
| みきりむし | 一 |
| むーよむー | 一 |
| 蛾 | 一 |
| こーやちよ・ちよ | 一 |
| さく | 一 |
| かみしもむし | 一 |
| さいかちむし | 一 |
| ひんぼ | 一 |
| たにちよーちよ | 一 |
| みかんむし | 一 |
| ついむし | 一 |
| 計　一四三 | 二〇七九 |

昆蟲以外のものを擧ぐれば左の如し

まめくじ　二　くも　三　むかぜ　一　だに　一　たむし　一　ほさゝぎす　一

## 備考

生徒數　八十三名　昆蟲種類數　百四十三種　指名したる總數　二千〇七十九　一人に對する平均數　二十五種強　最多數を記したるもの　三十六種　最も少なかりしもの　九種　最も〇くの兒童に知られたる昆蟲は　さんぼ、のみ、うんか、しらみ、いなご等なり　表中括孤を付せしものは同種なることを示す

# 切拔通信 昆蟲雜報 第六號

明治卅八年十二月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界内

●水田驅蟲成蹟　三化螟蟲發生せし水田の被害株處分法に付き二段株切を行ひしもの單に株を掘返せしもの刈株其儘捨置しもの等に凡そ三十日間貯水して害蟲生死の摸樣を檢せしに第一の方法に依りしものは十頭の螟蟲悉く斃死し居り第二は十頭中二頭、第三は十頭中七頭斃死し居たりとなり（香川新報）

●三豊郡の驅蟲完了　三豊郡内に於ける三化螟蟲の驅除は頃日來縣、郡、町、村吏員監督の許に驅除法規定を勵行しつゝありしが漸く完了せしが郡内の被害反別は一千町歩ありと因に同郡中農民中には當該官吏の指示する方法に從はずして告發せられし者五名ある由（香川新報）

●螟蟲被害の調査　山門郡摸範農場に於て早稲に對し螟蟲被害の臨時調査をなせし結果は左の如くなりと（門司新報）

一壹坪の總莖數　一二八八本
一被害莖數　五本四合
一二化性螟蟲被害莖數　三本四合
一三化性同上　二本
一二化性仔蟲數　一疋八合
一三化性同上　〇疋四合

●害蟲驅除豫防費　縣下に於ける三十七年度害蟲驅除豫防費總額は壹萬壹千四百四拾四圓貳拾壹錢參厘内町村費五千六百參拾四圓七拾貳錢九厘、郡費百九拾六圓五拾錢四厘、縣費五千六百拾參圓にして犯罪者數は科料に所せられたるもの六十六人なりと（愛媛新報）

●桑樹の害蟲驅除　目下各地の桑園を通觀するに枝尺蠖の幼蟲發生し居る摸樣なるに付き本年冬季農閑の時期に之を捕殺し置かざれば明年非常に蕃殖し桑樹に及ぼす被害甚大なれば農家は該幼蟲を捕殺するか又は桑樹の幹枝に藁の類を纏ひ置けば越冬の爲め茲に集まる幼蟲を捕へ燒殺する等最も簡易なる驅除方法なり（岐阜日日新聞）

●害蟲驅除獎勵會　天野高田郡長は害蟲驅除の一方法として就學兒童捕獲獎勵金を郡費より出すに決し之れが實行に着手せしに郡内（一町二十五ケ村）尋常高等小學校生徒四千四百七十八名にして螟蛾四百九十三萬三千五百九十八疋、螟卵百七十四萬六千二十四個を採收したりし爲獎勵金八拾貳圓五拾錢を兒童に配與したりといふ（吳毎日新聞）

●害蟲驅除豫防費と犯罪者　昨年度に於ける當縣害蟲驅除豫防費總額は四千拾八圓參拾七錢參厘（但縣稅支出なし）にして内郡費金七百六圓參拾貳錢町村費金參千參百拾貳圓五錢參厘なりと尙各郡市別左の如し

| | 郡費 | 町村費 |
|---|---|---|
| 和歌山 | — | — |
| 海草郡 | 二四九、八三〇 | 九九五、一八〇 |
| 那賀郡 | 三八〇、八九〇 | 一六八、五三〇 |
| 伊都郡 | — | 三六、五三九 |
| 有田郡 | — | 一、三二一、九六八 |
| 日高郡 | — | 五三五、二九六 |
| 西牟婁 | — | 一九五、一〇〇 |
| 東牟婁 | 七五、六〇〇 | 六九、四五〇 |
| 全計 | 七〇六、三二〇 | 三、三一二、〇五三 |

而して同年度の犯罪者は前年の皆無なるに比し伊都郡に一名の科料に處せられたるものを出せり（和歌山新聞）

●小學生の尺蠖驅除　佐波郡豊受村地方にては桑樹の尺蠖蟲非常に多く村役場及農會に於てもこれが驅除の方法を講じ各區に對して各自便宜の方法を以て捕殺すべき樣命じたるが一方小學校に向つて生徒に驅除方を交

渉したる結果放課後又は休日等に採集せしむるとさなり毎日二三十萬休日には八九十萬疋宛を拾ひ來り目下生徒の捕獲高二百萬以上に達せりと云ふ尺蠖は萠芽の中より桑葉喰害するにより今假りに二三萬疋にて蠶兒の原種一枚掃を要する桑葉を害するものと見積る時は實に莫大なる利益を同村の蠶業上に與ふるものなり誠に美擧と云ふべし（上毛新聞）

●危險殺蟲劑の發賣禁止　三

重縣三重郡常磐村字赤堀二番地加藤政吉製劑に係る殺蟲散は危險なる劇藥の混和しあるを發見され昨日其筋より製造販賣を禁止せられたり（日本）

●夜賊蟲の大發生　幡多郡渭

南奧内の各村に夜賊蟲大に發生し其被害數十町歩に及べり該蟲は夜賊蟲の一種なれども晝夜の別なく甘藷の葉を蠶食し殘葉なきに至らしめ廣く他に傳播せり本年は饒倖にも發生時季晩かりしを以て敢て收穫上大害は受けざりしも若し發生時季早かりせば必ず大害を釀せしならん目下收穫季節なれば此際蔓に附着せる害蟲を蔓と共に燒殺せざれば或は次回の麥作に被害をなすかも計り難ければ被害地方は必ず共同一致以て驅除に努力するが肝要なり（土陽新聞）

●養老山の昆蟲採集　岐阜縣

第三回長期害蟲驅除講習生野田稻司（安八郡下宮村の人）外二名は養老郡高田町へ赴き高田署の豐田部長に伴はれて養老山に昆蟲採集をなせり、聞く所によれば三寶山嶽の頂上に登り採集する豫定なりしが同嶽は有名なる險崖なれば特に案内者なくては登頂する能はず故に今回は養老瀑布附近にて採集せしか伊吹山にもあらざる研鑽の資料多々ありて同一行は滿足して歸岐せり（美濃新聞）

●蘿蔔蛆蟲驅除豫防法　壽都

支廳部内瀬棚郡利別村に於て蘿蔔に蛆蟲發生し根株を害すること夥しきを以て道廳農務課にて示したる驅除豫防法は左の如し

一、質素肥料として人糞尿厩肥の如き臭氣あるものは成るべく避け硝酸曹達の如きものを施すべし

二、大根播種に際し食鹽四十乃至六十英斤を表土に撒布し鋤き混ずべし

三、煙草粉又は昆布の灰を根邊に撒布すべし

四、産卵の時に石油乳劑を注射すべし

五、石炭酸を二百倍位稀薄にし粟粉若くば鋸屑に浸漬し蘿蔔に近接して撒布し置くべし

六、出來得るならば煙草粉を播種後畦上に據トし置くべし此は蠅の産卵を防ぎ得るのみならず一は肥料分ともあるを以て一擧兩得と云ふべし

七、卵子は白色なるものにして根邊にあるものなれば竹片又は手にて六七寸も根邊より遠ざけ置くべしさらば卵子孵化するも根邊に近づくこと能はずして死すべし

八、爺兒を塗抹せる紙を四角形若くば六角形に切斷し中央を十文字に切り之を蘿蔔莖を容るゝ樣になして地上に密接して置くべし左らば繩は産卵することなし

九、二硫化炭素若くば「ベンヅール」を根邊に一匙位宛注入するときは容易に蛆を全滅し得べし

十、石油乳劑の調製法は左の如し

原料石油一升五合、洗濯石鹼八十匁、水一升

先づ洗濯石鹼八十匁を小刀にて削り熱湯一升を入れ之を浴がし而して後篩にて塵芥を漉し手を入れ熱からざる程に冷却し之に石油一升五合を混じ後子供の玩具竹筒の如きものにて其液を出入し五分間も放置するときは牛乳の如き白色乳汁となる之を用ひるには三四十倍の水を加へ稀薄となすべし又之を貯へ置くときは五倍の水を入れ置くべし撒布の際は簡便噴霧器にて一樣に灌注すし蟲卵共に殺すことを得べし（小樽新聞）

●遼東半島の野蠶　遼東半島

の野蠶は豆類豆糟に亞ぐ滿洲の重要物産にて其隆盛を來したるは最近に屬し十數年前迄は遼東の南部にのみ飼育せられ産額も左程多からざりしが今日に於ては遼河以東北は遼陽奉天に及び東は寬甸安東縣に達し其産額は次第に增進し最近一ヶ年の産額は大凡そ收繭高一億斤より一億五千萬斤に達すべく一ヶ年の輸出額は百萬圓以上に達すべしと

◉島根縣の害蟲驅除奬勵法　第十六回郡農會技手協議會の際、島根縣農事試驗場提出の、農家をして害蟲驅除を完全に且つ自動的に實行せしむる方法如何と云ふ問題に對しての決議は、害蟲驅除の觀念普及の爲め左の方法を一層注意實行し、農民をして自動的に實行せしむるの念を養成し、一面地主の小作人奬勵、及共同驅除により其完全を期すべし。（一）昆蟲講習會を開會すること。（二）婦人農談會を開き昆蟲に關する講話をなすこと。（三）婦人講習會を開き昆蟲に關する一科を加ふること。（四）實物指導をなすこと。（五）幻燈により害蟲に關することを示すこと。（六）害蟲驅除に關する印刷物を配布すること。（七）小學校敎員に害蟲に關する思想を普及すること。（島根縣農會報）

◉螟蟲被害白穗摘採數　新潟縣佐渡郡に於て同摘採を勵行したるが、九月七日より九日迄三日間の摘採數八千六百三十三貫、施行面積七百八十一町歩、同十三日より十五日迄三日間、同上六千三十五貫、同面積八百二十五町歩なりしと。（新潟縣農事報）

◉轉ばぬさきの杖　何ごとも、大切に此の金言を守れば大なる過ちに陷ることなく、安穩に面白くおかしく世渡の出來るものなれども、存外そうは行かねものと見え、轉んで始めて氣が付き、後悔先にたゝずとの名言を味ふのが世の常とは情けなき次第ならずや。害蟲驅除も即ち此の轍を踏でおるのであるが、轉ばぬさきの杖、即豫防が大切である。轉でからは假令注意しても一度は痛い目をせねばならぬ、故に、茲に少しく痛い目をせぬ内に注意を促す次第である。そは他にあらず、冬の閑の内に、蟲の潜んで居る場所を見付て捕り殺すのである。先づ二三を記さんに、桑の害蟲の枝尺蠖とかキンケムシなどは、樹の朽ちたうつろの樣な處へ澤山潜んで居る、又は枝を藁などで縛つてある中などにも居る、彼樣な處を少しく注意すれば尚他の色々な害蟲も同居してゐるから、其積で捕り殺すがよい。桑の枯枝の中には、クワノシンクヒムシやヒメザウムシなどが入つて冬を越さうとして居るから、枯枝などは悉く奇麗に切り取りて焚物にするがよい。又桑の枝を少しく注意すると圖の如き、爪の跡の樣なものが出來て、局部が少しく高くなつて居るものがある、其處を起して見ると、中に細長い卵が行列して居る、これはヨコバヒの卵であるから、そうゆうものは見付け次第

ヨコバヒの産卵せし圖

遠慮なしに潰して置くのが肝要である。又俗に雀の甕と云ふて、圖の如き楕圓形の白いものに、黑い斑のある堅いものが柿、梅、桃、梨其他色々の樹に着いて居るが、これはイラムシといふ果樹の害蟲の繭である。此等も冬の間は樹の葉が落ちて居るからよく目に付くものなれば、どし／＼潰して置くがよい若し堅くて潰すことが六ケ敷ければ、石油をそれに塗り付けて置けば、石油が內へしみ込んで遂に死ぬるものである。右の如く冬の間は、凡ての蟲がそれ／＼隱れ場所を求めて潜んで居るから、其處へ吶喊して捕虜となし處分をして置けば最早夏になつても蟲の害を受ける事がない。其時こそ面白くおかしく安穩に暮らせて、轉ばぬさきの杖の功能が分る。然し蟲によつては中々巧に隱れて居て、容易に見出すことの出來ぬものもあるが、先づ右申した樣な誰の目にも當り易いものは、今より注意して此冬季の閑な中に捕り殺す樣に致し度いものです。

イラムシの圖

◉養蜂部の新設　養蜂事業は農家の副產業として、蠶業と相並で必要なるものなれども、其發達遲々として進まざるは甚だ遺憾なり。而して蜜蜂の飼養は直接蜂蜜を獲るの利益は勿論、間接に花紛の媒助をなすの利益尠少にあらざるなり。特に我岐阜縣の如き紫雲英の本場とも稱せらるゝ地に於て之れが飼養を盛にすれば、一方に紫雲英の花粉媒助を圖り、益々上等の種子を得べく、實に一擧兩得といふべきなり。當所は久しき以前より之れに心を注ぎしも、如何せん設備不完全にして、到底其處迄に手を延す能はざりしが、今回事業の擴張と共に、茲に多年宿望の一部を實行し、即養蜂部を新設することゝなれり。同好の士共に／＼相研究して、之れが普及を圖られんことを希望す。

◉特別研究生の入退　前々號報告後に於ける特別研究生の消息を報せんに愛媛縣趣智鐵一郎氏は三ケ月の豫定にて九月廿一日入所せられたるも、病氣の爲め二ケ月間に短縮し、十一月二十日証明書を受領退所せられたり。愛媛縣青野德次郎氏は、二ケ月の豫定を以て十月十一日入所せられしが、豫定の研究を終へ本月十日証明書を受領せられたり。其他三重縣中村市太郎氏は、一ケ月間の豫定にて十一月廿六日に、愛媛縣土居團次郎氏は、二ケ月間の豫定にて本月九日に、三重縣居附兼三郎氏は、五十日間の豫定を以て本月十日入所せられたり。因に研究者の便を圖り、分類標本を製して所內の陳列室に羅列し、新に養蜂部を設けて蜜蜂飼養の計畫全く成りたれば、研究者にとりては一層の便宜を增大したり。

◉岐阜縣昆蟲學會月次會記事　同會第八十四回月次會は去二日當所に於て開會せしが、今回當所は、當日を以て養蜂部を新設したりしが、山本主任より實地に就て有益なる談話ありたり。

◉水曜昆蟲談話會記事　當所内に於て每週水曜日夜間開會の水曜昆蟲談話會は、不相變盛會なるが、前號所載後に於ける談話の大要を左に紹介せん

◉名和梅吉氏は寄生蜂の話と題し、該蜂の保護策及び研究の方法等を詳說せられ、尙桑の貝殼蟲に就てと題し將來恐る可き点を警告せられ、且つ其れが適當の驅除法をも指示せらる◉小竹浩氏はウスバカゲロウ數種に就て、其區別すべき特徴を實物に就て示され、尙蚜蟲の話と題し、今後研究すべき要点を述べられ、且從來疑問に屬せし点を、研究の結果、明瞭せられし事實を報告せらる◉谷貞子氏は細腰蜂科九種に就て、各實物により其異なる点を述べられ、尙沖繩産の鳴蟲に就てと題し、大橋由太郎氏の採集にかゝる鳴蟲類の珍種數種を實物に就て說明せられ、尙沖繩産のエンマコホロギと、內地産のエンマコホロギとの比較研究の結果を報ぜられたり◉棚橋昇氏は菊花に集まる昆蟲と題し、氏が五日間に於て採集せられたる昆蟲三十五種に就て、花の色澤種類等によりて、尋ね來る蟲の異なる点を述べらる◉名和愛吉氏は水産昆蟲採集に就て、種々有益なる談話を◉野田稲司氏は養老郡に於ける害蟲驅除の摸樣と題し、該郡に採集の砌り種々見聞せられたる事實を報告し、尙目下桑樹に發生せる害蟲、其の他菊の蚜蟲の種類、苹果の綿蟲等の實物研究談を。且つ昆蟲の越冬に就ての所感と題し、各郡昆蟲採集の尤も必要なる事を述べ◉越智鐵一郎氏はウスバヤドリ蜂とヒメヤドリ蜂及大頭蜂と穿穴蜂との比較研究談を尙シマヤドリ蜂に就て、研究せられし結果を報告せられ◉青野德次郎氏は、養老山に於て二日間に採集し獲られたる昆蟲百余種を、實物及表に現はして報告し、竹の害蟲紅天牛に就ての研究談並にマラリヤ媒介のアノフヱレスと普通蚊との比較を、圖及び表によりて說明し、尙菊の蚜蟲に藥劑區域の成蹟、及冬季昆蟲採集法五種によりて獲られたる昆蟲を實物によりて示さる◉中村市太郎氏は蠁蛆に就てと題し、氏の鄉里なる三重縣志摩郡地方へ、害蟲の分布加害の來歷及目下それが適應の區除等を述べられたり。

◉昆蟲標本陳列舘參觀人員　當所常設の昆蟲標本陳列舘を、十一月中に參觀せし人員は四千三百五十二人にして、一日平均百六十七人强に當り、內尤も多かりしは十一日の五百廿九人、最も少なかりしは十四日の五十二人なりき。

明治三十八年發行

# 昆蟲世界

## 總目錄

第九卷

# 昆蟲世界第九卷 自第八拾九號至第壹百號 總目錄

## ◉口繪



## ◉論說



## ◉學說

## ◉講話



## ◉雜錄

◉調　査

## ◎通　信



## ◎雜　報

アメイロヒメバチ
イ
ロ
ハ
クロオビハムシ
トツクリバチ
イ
ロ
ハ
コゴミムシダマシ
野猪に寄生する蝨
胡桃葉蟲
サルハムシ
タイワンクツハムシ
♀

## ◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題（但季は冬の事）　魯嶽君選

▲和歌　昆蟲亂題（但季は冬の事）　潮音君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

▲俳句　馬追蟲十句（十二月廿二日〆切）

右占切日切迫の爲め直接に信濃松本西町間宮方上原良三郎氏宛の事、占切期日嚴行の事

馬追蟲は螽斯科に屬し体綠色を帶び五六月頃より草間笹等の内に棲息し八月頃蛹となり晩夏初秋の候成蟲となり茲に始めてスインくくスイーンチョズイーンチョと固有の鳴聲を發するものなり其音を發するは雄に限るものにて右の上翅に發音鏡を有し左の上翅と相摩擦して發音す世俗此の蟲は秋に入れば其季を知りて鳴き初むる樣稱ふれども決してさにあらず幼蟲蛹の時代には翅の不完全なる爲め發音する能はず秋季に入れば皆成蟲となり完全の翅を生ずるを以て初めて特意の音曲を弄することを得るなり

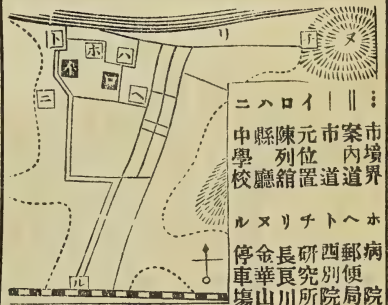
## ◉昆蟲學特別研究生募集

今回數十名の特別研究生を募集し特に此際何時にても隨意入所を許す、規則書入用の向は往復葉書にて至急照會あれ直に送致すべし

## 昆蟲ニ關スル繪葉書ノ交換ヲ望ム

岐阜縣大垣町　西濃印刷會社内　河田好葉蟲

## ◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

第八十五回月次會明治三十九年一月六日午後正一時開會

：市境界　‖案内道　｜市道　イ元位置　ロ陳列舘　ハ縣廳　ニ中學校

ホ病院　ヘ郵便局　ト西別院　チ研究所　リ長良川　ヌ金華山　ル停車場

## ◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所は從來上圖の如く（イ）の位置にありしが今回當市公園内即・ち（チ）の位置に移轉せり又常設の昆蟲標本陳列舘（五間に十五間）は從前の通り岐阜縣物產館構内にあれば大方諸君の來訪を俟つ

名和昆蟲研究所

## ◉本誌定價並廣告料

壹部　郵税共　金拾錢　（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず

◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十八年十二月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎



（大垣　西濃印刷株式會社印刷）